

081-2-17(3)

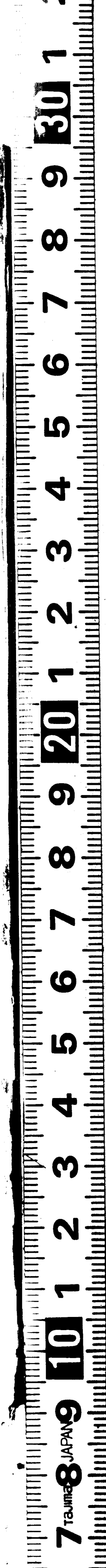
日本人の海外活動に関する歴史的調査

通卷第十七册 台湾篇 第六分册の四

取扱注意

附録 台湾統治概要

大藏省管理局



昭和廿五年十二月拾六日 留法同和協會

目次

第一編 立法及制度	一
第一章 立法	三
第一項 法律の施行及律令制度	三
第二項 律令制定手続の沿革	三
第三項 戦時立法	四
第二章 制度	五
第二編 地方制度	六
第一章 地方行政制度の沿革	三
第一節 地方官治行政制度	三
第二節 地方自治制度	一五
第一項 大正九年以前に於ける自治制度	一五
第二項 大正九年に於ける地方自治制度の創設	一六
第三項 昭和十年以後に於ける地方自治制度の改正	一六

第一目 州市街庄	一七
第二目 廳	一八
第二章 地方官治行政制度の梗概	一八
第一節 州及廳	一八
第二節 郡市街庄	一九
第三章 地方自治制度の梗概	二〇
第一節 州	二〇
第二節 廳	二三
第三節 市街庄	二三
第三編 司法	二〇
第一章 沿革	二三
第二章 裁判及檢察制度	二二
第一節 法院	二三
第二節 檢察局	二三
第三節 判官、檢察官の任免	二三

第四節 弁護士、公証人、司法書士	二三
第三章 法令制度	二四
第一節 概況	二四
第二節 民事に関する特例	二四
第三節 刑事に関する特例	二五
第四章 刑務所	二五
第一節 沿革	二五
第二節 收容者	二七
第三節 作業	二七
第四節 教誨、教育	二八
第五節 衛生	二八
第五章 司法保護事業	二九
第四編 文教	三〇
第一章 神社及宗教	三〇
第一節 神社	三〇

第二節 宗教

第一項 領台前よりの宗教

第二項 領台後に傳來したる宗教

第二章 学校教育

第一節 総説

第二節 初等普通教育

第三節 高等普通教育

第四節 実業教育

第五節 師範教育

第六節 専門教育

第七節 大学教育

第八節 盲啞教育

第九節 幼稚園

第十節 私立各種学校

第三章 社會教育

第一節 概況

第二節 青年鍊成施設

第三節 社会教化施設

第四章 援護事業

第一節 概況

第二節 社会事業

第三節 軍事援護事業

第四節 戰災援護事業

第五節 島外よりの避難民救護

第五章 情報、宣傳及文化

第一節 新聞及出版

第二節 映画演劇

第三節 放送

第五編 兵事及國民動員

第一章 兵事

第一節 志願兵制度	全
第二節 徴兵制度	八六
第二章 國民動員	八七
第一節 概況	八七
第二節 國民動員	八九
第三節 國民動員行政機構	九一
第四節 應徴者援護	九三
第三章 戦時に於ける國民運動	九四
第一節 皇民奉公會	九四
第二節 國民義勇隊	九六
第六編 警察	九六
第一章 保甲制度	九九
第一節 概要	九九
第二節 保甲制度の廢止	一〇一
第二章 理蕃	一〇一

第一節 種族人口並に蕃地の面積	一〇一
第二節 理蕃方針と高砂族進化の現況	一〇一
第三節 現下の一般蕃情	一〇二
第一項 北蕃々情	一〇二
第二項 南蕃々情	一〇四
第三項 其他の蕃情	一〇四
第四節 現地の理蕃機關	一〇五
第五節 蕃地道路	一〇五
第六節 蕃地の取締	一〇五
第七節 教育	一〇六
第一項 兒童教育	一〇六
第二項 社会教育	一〇四
第八節 授産	一一七
第九節 蕃社集團移住	一二一
第十節 交易	一二四
第十一節 高砂族の租税及公課	一二五

第十二節 蕃地衛生	一五
第二章 經濟警察	一七
第一節 概況	一七
第二節 經濟警察の機構	一八
第三節 經濟警察の運用	一九
第四節 終戦後の指向	二〇
第四章 治安	二一
第一節 島民生活の交遷	二一
第二節 一般治安状況	二二
第三節 思想運動の概要	二三
第五章 防空	二五
第七編 衛生	二六
第一章 概況	二七
第二章 各種衛生機関	二七
第一節 研究機関	二七

第二節 官設医療機関	二八
第三節 医師齒科医師	二九
第三章 保險衛生	二九
第四章 防疫事務	三〇
第一節 傳染病予防	三〇
第二節 マラリア防遏	三一
第三節 海港檢疫	三一
第四節 航空檢疫	三二
第五章 予防衛生	三二
第一節 結核予防	三二
第二節 癩予防	三三
第三節 花柳病予防	三三
第六章 阿片制度	三三
第一節 概況	三三
第二節 阿片癮者の矯正	三三

第八編 交通	一三
第一章 鐵道	一三
第一節 官設鐵道	一三
第一項 組織	一三
第二項 從業員	一四
第三項 經理	一四
第四項 營業	一五
第五項 運轉	一七
第一目 列車運轉杆及列車回数	一六
第二目 列車運轉方式	一六
第三目 各線區線路容量	一七
第四目 運轉事故	一七
第六項 施設	一七
第七項 車輛	一七
第八項 鐵道工場	一八
第二節 私設鐵道	一八

第二章 自動車	一八
第一節 官營自動車	一八
第一項 概況	一八
第二項 車輛	一八
第三項 營業杆程及走行杆	一八
第四項 運賃制度	一八
第五項 運輸成績	一八
第六項 自動車修理場	一八
第二節 民營自動車	一八
第一項 概説	一八
第二項 乗合自動車	一八
第三項 貨物自動車	一八
第三章 港 灣	一八
第一節 概況	一八
第二節 基隆築港工事の概況	一八

第三節 高雄築港工事の概況	一九三
第四節 花蓮港築港工事の概況	一九四
第五節 新高港築港工事の概況	一九六
第六節 新高工業港築造工事概要	一九七
第七節 新高港漁船溜築造工事概要	一九八
第八節 蘇澳港修築工事概況	一九九
第九節 大型修船渠設備概況	二〇〇
第十節 安平港及台南運河設備概況	二〇一
第十一節 蘇澳港設備概況	二〇三
第十二節 新港漁港設備概況	二〇四
第十三節 海口船溜設備概況	二〇五
第十四節 馬公港設備概況	二〇六
第四章 海 運	二〇六
第一節 概 況	二〇六
第二節 命令航路	二〇九
第三節 戰時海上輸送	二一〇

第四節 戰時港灣荷役	二一四
第五節 海事諸法關係	二一六
第六節 造船 船	二一〇
第一項 計畫造船	二一〇
第二項 造船施設	二一〇
第五章 航 空	二一一
第一節 航空輸送	二一一
第一項 內台定期航空輸送	二一一
第二項 島內定期航空輸送	二一一
第三項 對外定期航空輸送	二一一
第二節 飛行場	二一一
第一項 台北飛行場	二二三
第二項 宜蘭飛行場	二二三
第三項 台中飛行場	二二三
第四項 台南飛行場 (台南州新豐郡永康庄)	二二三
第五項 台南飛行場 (台南州新豐郡歸仁庄)	二二三

第六項	台東飛行場（台東廳台東郡卑南庄利家）	三三
第七項	淡水飛行場（台北州淡水街竿蓁林）	三五
第三節	附帶施設	三六
第一項	台北航空機修理工場	三六
第二項	航空保安施設	三六
第四節	民間航空團體	三八
第一項	財團法人台灣航空協會	三八
第六章	通信事業及其の附帶事業	三八
第一節	郵便	三八
第二節	電信	三〇
第一項	概況	三〇
第二項	支那事変及太平洋戦争に伴ふ措置	三三
第三節	電話	三三
第四節	放送無線電話	三三
第一項	概況	三四
第二項	放送事業の現況	三四

第五節	爲替貯金	三五
第一項	概況	三五
第二項	貯蓄獎勵	三五
第六節	簡易生命保険及郵便年金	三七
第一項	概況	三七
第二項	簡易生命保険及郵便年金積立金の運用	三九
第三項	被保険者の福祉施設	三九
第九編	水利土木	四二
第一章	水利	四二
第一節	概況	四二
第二節	嘉南大圳	四四
第一項	事業經營の現況	四四
第二項	組合財政の現況	四七
第三節	水利事業の助成	四九
第一項	低利資金の供給	四九
第二項	國庫補助金下附	五〇

第三項	水利統制調査	三五一
第四項	十一箇年土地改良事業計画	三五三
第五項	土地改良事業	三五三
第六項	畑地拡張改良事業	三五七
第二章	道 路	三五七
第一節	概 況	三五七
第二節	道路改良	三五八
第三節	新店礁溪間道路改修工事	三五九
第四節	花蓮港台東道橋梁架設工事	三五九
第五節	中部横断道路開鑿	三六〇
第六節	重要指定道路の改修	三六一
第七節	屏東台東道路開鑿	三六一
第三章	河 川	三六三
第一節	河川管理と工事現況	三六三
第二節	今後急施を要する工事	三六四

第四章	都市計画	三六七
第一節	都市計画	三六七
第二項	概 況	三六七
第三項	都市計画の施行	三六八
第四項	新高港工業都市建設事業	三六八
第五項	主要都市計画事業費一覽表	三六九
第二節	公 園	三七二
第一項	市街地公園	三七二
第二項	國立公園	三七二
第三項	上水道	三七三
第十編	農林水産業	三七六
第一章	農業一般	三七七
第一節	概 況	三七七
第二節	米	三七九
第三節	概 況	三七九

第二項	本年の産米概況	二八一
第三項	産米の改良増殖施設	二八三
第三節	甘 藷	二八四
第一項	概 説	二八四
第二項	本年生産状況と二十一年度の計画	二八五
第三項	甘藷の改良増産施設	二八七
第四節	落花生	二八七
第一項	概 説	二八七
第二項	本年の生産状況並に昭和二十一年産の生産計画	二八八
第三項	増産施設	二八九
第五節	小麦及大麦	二九〇
第一項	小 麦	二九〇
第一目	概 況	二九〇
第二目	増産施設	二九〇
第二項	大 麦	二九一
第六節	特用作物奨励事業	二九三

第一項	概 説	二九三
第二項	奨励実施中の特用作物	二九三
第七節	昭和二十年に於ける重要農作物調整計画	二九〇
第八節	畑地拡張改良事業	二九一
第九節	耕地防風林設置奨励事業	二九三
第十節	肥料取締	二九六
第十一節	小作事情の改善	二九六
第一項	不良小作慣行	二九六
第二項	小作人の団体及小作爭議	二九七
第三項	小作慣行改善施設	二九八
第十二節	農業統制	三〇〇
第一項	小作料統制	三〇〇
第二項	農地價格統制	三〇〇
第三項	農地管理	三〇〇
第十三節	移民事業	三〇〇
第十四節	畜産増殖奨励事業	三〇三

第二項 概 説	三二
第二項 獎勵実施中の畜産	三二
第三項 飼料対策	三六
第四項 防 疫	三六
第十五節 農業試験場	三八
第二章 糖 業	三〇
第一節 概 説	三〇
第二節 糖業獎勵の主なる施設	三三
第一項 蔗園の灌漑排水工事補助	三三
第二項 蔗苗更新	三四
第三項 品種改良	三四
第四項 試験研究機関（糖業試験所）	三五
第三節 將來施設獎勵を要すると認むる事項	三五
第一項 排水施設の徹底	三五
第二項 地力の維持増進に関する施設の實施	三六
第三項 耕地防風林設置	三六

第四項 酒精の生産	三七
第五項 耕地白糖の獎勵	三七
第六項 工場電化	三八
第七項 バガス工業化の促進	三八
第八項 製糖事業の合同	三八
第四節 原料採取区域制度	三八
第三章 茶 業	三〇
第一節 概 説	三〇
第二節 獎勵施設	三〇
第四章 バナナ、柑橘、其の他の青果物	三四
第一節 概 説	三四
第二節 出荷団体	三五
第三節 配給機関	三五
第四節 蔬菜採種場	三五
第五章 鳳梨青果及鳳梨罐詰工業	三六

第一節 概況	三七
第二節 獎勵施設	三八
第六章 植物検査	三九
第七章 林業	四一
第一節 概況	四二
第二節 保安林	四三
第三節 森林施業案の實施	四四
第一項 造林	四四
第二項 森林計畫事業	四五
第三項 林産物処分	四五
第四節 闊葉樹の利用開發	四七
第五節 森林治水事業	四七
第六節 海岸林事業	四八
第七節 林産物搬出道路開鑿	四八
第八節 民有林野の営林の監督並に民行造林其の他指導獎勵	四九

第九節 林産品の生産及配給の統制	五〇
第十節 木炭改良増産獎勵	五〇
第十一節 單寧生産獎勵	五一
第十二節 澎湖島造林事業	五二
第十三節 林野面積林産総額及木材需給狀況	五三
第十四節 試験研究機関(林業試験所)	五三
第八章 水産業	五四
第一節 概説	五四
第二節 水産行政	五七
第三節 水産試験調査事業	五七
第十一編 商業、台拓、米穀管理、工業、電氣、鉱業	五九
第一章 商業	六一
第一節 概説	六一
第二節 企業統制	六三
第三節 物資統制	六五

第四節 物價統制	三七
第五節 貿易	三八
第二章 台灣拓殖株式會社	三八
第一節 概 說	三八
第二節 島內事業	三八
第一項 社有地の貸付	三八
第二項 開墾事業	三八
第三項 干拓事業	三八
第四項 栽培及造林事業	三八
第五項 漁 業	三八
第六項 移民事業	三八
第七項 貸付及投資	三八
第三節 島外事業	三八
第一項 廣東水道事業	三八
第二項 海南島關係事業	三八
第三章 米穀の管理	三八

第一節 米穀の國家管理	三八
第二節 米價の公定	三八
第三節 其の他の主要食糧の管理	三八
第四節 台灣食糧管團	三八
第四章 工 業	三八
第一節 概 況	三八
第二節 鉄鋼業	三八
第三節 輕金屬製鍊業	三八
第四節 機械工業	三八
第五節 化學工業	三八
第六節 工業助成	三八
第七節 試驗研究機關(工業研究所)	三八
第八節 物資動員	三八
第五章 電 氣	三八
第一節 概 況	三八

第二節 日月潭水力發電工事	四〇
第三節 大甲溪開發發電工事	四一
第四節 電氣事業の整備統合	四二
第五節 發電水力調査	四三
第六節 電氣事業	四六
第七節 台灣電力株式会社	四六
第六章 鋁業	四八
第一節 概況	四八
第二節 金屬鋁業	四九
第一項 金	四九
第二項 砂金	五〇
第三項 銅	五一
第四項 水銀	五二
第五項 砂鉄	五三
第六項 マンガン鋁	五三
第七項 ジルコン及モナズ石	五三

第三節 石炭鋁業	五三
第一項 概況	五三
第二項 生産	五四
第四節 石油鋁業	五四
第一項 概況	五四
第二項 需給	五八
第五節 其の他の鋁業	五〇
第一項 石綿	五〇
第二項 硫黄	五〇
第三項 黒鉛	五一
第四項 雲母	五一
第五項 白雲石	五一
第六項 磷鋁	五二
第六節 地下資源調査	五三
第一項 地質調査機関	五三
第二項 基本図幅調査	五三

第三項	土地質調査	四三
第四項	金屬鉱床調査	四四
第五項	工業原料鉱物調査	四五
第六項	油田の調査	四六
第七項	炭田の調査	四七

第十二編 財政金融及貿易 四七

第一章 財 政 四九

第一節	特別會計	五〇
第一項	台灣總督府特別會計	五一
第一目	本府財政の獨立	五二
第二目	台灣財政と内地財政との相互依存關係	五三
第三目	昭和二十年度予算概説	五四
第二項	台灣官設鐵道用品資金特別會計	五五
第三項	台灣米穀移出管理特別會計	五六
第二節	國 稅	五七

第一項	概 説	四三
第二項	各税の沿革及現制	四三
第三項	關稅（出港税を含む）	四三
第一目	關稅制度	四七
第二目	各税の沿革及現制	四五
第二章	金 融	四七
第一節	金融機關	四七
第一項	銀 行	四七
第二項	信託會社	四一
第三項	保險會社	四一
第四項	無盡會社	四一
第五項	產業金庫	四三
第六項	市街地信用組合及市街庄農業會	四三
第二節	台灣銀行券	四五
第三節	金融統制	四六
第四節	戰時非常金融對策	四六

第五節 終戦前後に於ける金融情勢と金融統制の解除	四八
第三章 貿易	四九〇
第一節 概況	四九〇
第二節 外國貿易	四九二
第三節 内地貿易	四九三
第四節 主要貿易品	四九三
第一項 輸出入主要品	四九三
第二項 移出入主要品	四九四
第十三編 専売	五〇三
第一章 概況	五〇五
第二章 阿片	五〇八
第三章 塩	五〇九
第一項 生産	五〇九
第二項 收納	五一一
第三項 販賣	五一二

第四章 苦汁	五一四
第五章 樟腦	五一四
第一項 原料、粗製樟腦、樟腦油採取及收納	五一四
第二項 專賣樟腦油製造	五一五
第三項 專賣樟腦の販賣	五一六
第四項 副産物	五一八
第六章 煙草	五二〇
第一項 原料	五二〇
第二項 製造及製造煙草の輸移入	五二三
第三項 販賣	五二四
第七章 酒類	五二七
第一項 製造及輸移出入	五二七
第二項 販賣	五二九
第八章 酒精	五三〇
第一項 製造	五三二

第二項 販賣及輸移出	五三一
第九章 度量衡	五三三
第一項 製作	五三三
第二項 販賣	五三四
第十章 燐寸	五三五
第一項 製造	五三五
第二項 販賣	五三六
第十一章 石油	五三七
第一項 專賣石油の種類	五三七
第二項 販賣	五三八
第三項 收納及購入	五三八
第四項 需給状況	五三八
第十四編 雜	五三九
第一章 國有地処分	五四〇
第一節 土地処分の沿革	五四〇

第一項 土地の國有区分調査	五四〇
第二項 林野整理及之に依り決定せる不要存置林野の拂下	五四〇
第三項 無斷開墾地に対する処分	五四〇
第二節 國民有地面積及國有地処分の現況	五四〇
第一項 現在の民有地	五四〇
第二項 現在國有地面積	五四七
第三項 國有地処分の現況	五四七
第三節 國有地処分に關する方針	五四八
第一項 方針確立の爲國有集團地調査	五四八
第二項 無斷開墾地整理の爲國有既墾地管理	五四八
第三項 山地利用開發	五四九
第四項 國有零細地の処分	五四九
第五項 國有不要存置林野處理の現況	五四九
第二章 南支南洋に關する施設	五五〇

第一編 立法及制度

第一章 立法

第一項 法律の施行及律令制定

台湾に於ては帝國憲法に依り法律を要する事項に付ては帝國議會の協賛を経たる法律を原則として施行し（一）施行すべき法律なきとき（二）法律の施行困難なるときに限り、法律に代るべき台湾總督の命令たる律令を發布し來たり右の律令は大正十年法律第三号（台湾に施行すべき法令に関する法律）に其の根拠を有するものにして、今日迄に施行せられたる法律は二百七十五件、現に効力を有する律令は百二十件を數ふるに至れり。

第二項 律令制定手続の沿革

律令の制定手続に付ては当初台湾總督府評議會の議決を要する制度なりしを明治四十年評議會官制の廢止と同時に律令審議會章程の制定に依り律令案は總督を議長とする律令審議會に諮問することに改められ、次で大正十年律令審議會章程の廢止と共に斯の諮問をも要せざることに改められたり。但し民事、刑事に関する律令は總務長官を委員長とする法令取調委員會に附議することとなり。次で又右の法令取調委員會も廢止せらるるに至り、從つて律令制定に關しては如何なる議決機關又は諮問機關をも經ず天皇の勅裁のみに依り効力を有するものと爲し、以て今日に及べ

第三項 戰時立法

支那事變發生するや事態に即應する臨時的措置として、昭和十二年輸出入品等臨時措置法、臨時資金調整法公布せられ同法の本島施行と共に總督府に於ては同法の委任に基き總督府令を以て緊要なる經濟面に対する應急的個別立法措置を講じ來れり。然るに事變の長期化と共に國防經濟体制の確立の要請は更に廣汎に亘る人的、物的資源を統制運用し、擧げて之を國防目的達成に結集し、國家の總力を最も有効に獲得せしむることを不可缺とするに至り、昭和十三年四月國家總動員法公布せられ同年五月同法の本島施行を見るに至れり。

爾來、勞務資金、資材價格等凡ゆる分野に亘る統制立法は同法の委任に基き各種統制勅令並に總督府令を以てすると共に之と併行し、各種單行法令（法律律令）を以て必要なる立法措置を講じ以て戰時に於ける生産力の拡充、國民生活の安定を維持し來りたるが、事態の緊迫は逆に政府をして應急の措置を講ずるを得せしむる爲、昭和二十年六月委任立法たる戰時緊急措置法制定公布せられ同日勅令を以て台湾に施行せられたり。茲に於て島民生治及經濟活動は右戰時立法令に依り統制せらるるに至り、本島統制上戰時法令は支配的重要性を占むるに至れり。

昭和二十年八月十五日大詔頒發せられ、今次大戰の終るを見るに至る。戰時中比較的戰災を蒙ること少く、且食糧物資亦未だ著しく窮迫するに至らず、從つて民心が安定せる本島に於ては學務資金並に國民生活等の分野に亘り急激なる變動を惹起せざる配意の下に各種統制を可及的速かに撤廢緩和し、以て自由なる平時經濟体制に復元するの要あり。

り、目下之に必要な法令措置を講じつゝあり。

第二章 制度

台湾に於ける行政機構を概説すれば左の如し（附台湾総督府行政機構一覽表）

一、中央行政機構

中央行政機関たる台湾総督府官制に依り設置せられ、総督官房の外五局二部に分れ、事務を分掌するの外、所屬官署として夫々獨立の官制に依り設置せられたる法院、供託局、交通局、港務局、專賣局、氣象台、諸教育機関、諸医療機関及諸試験研究機関を有す。

台湾総督は内務大臣の監督を承け諸般政務を統理す。

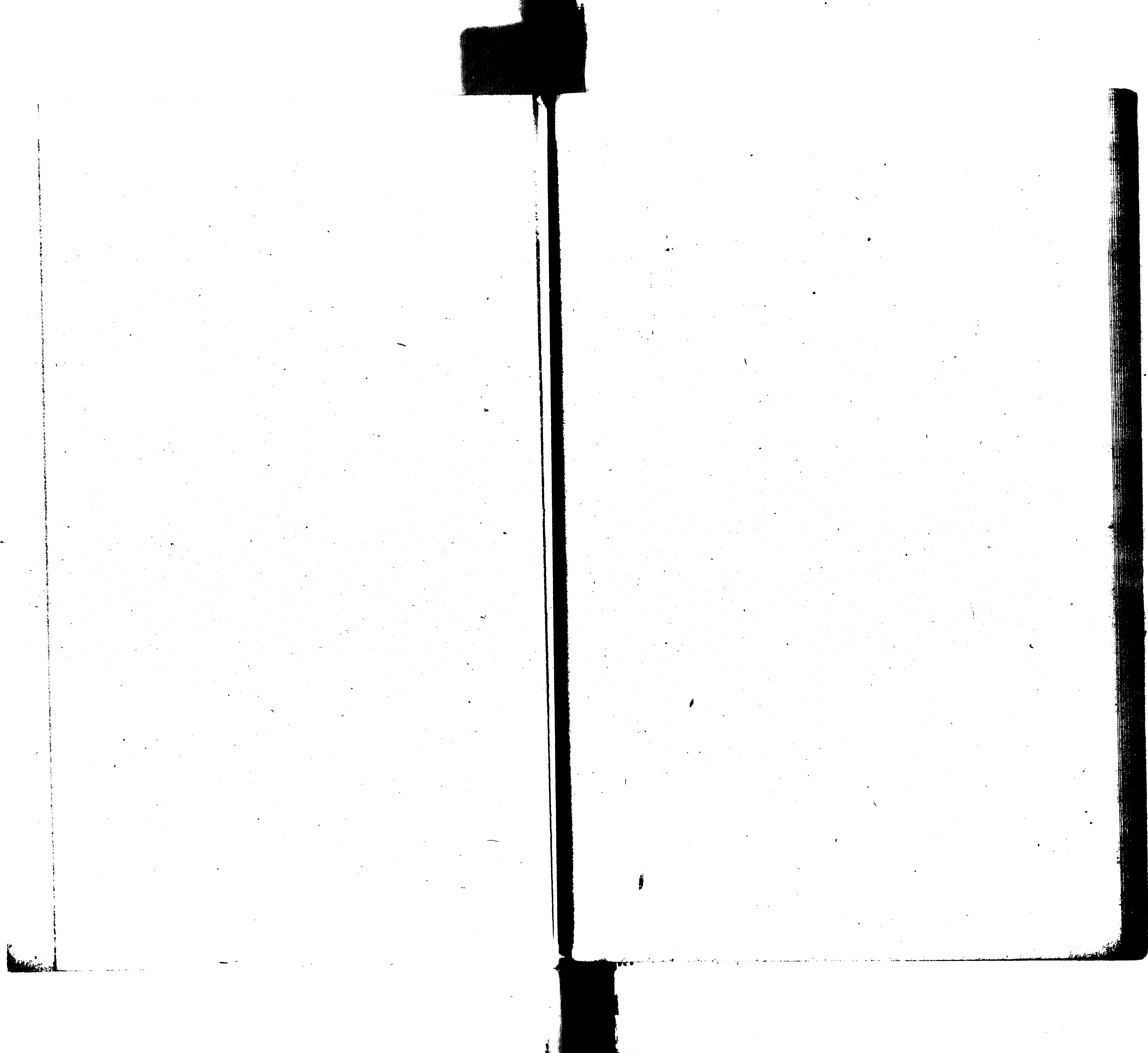
二、諮問機関

台湾総督府評議會官制に依り官民中より學識經驗ある者を以て組織せられたる總督府評議會設置せられ、總督の諮問に應じ意見を開申するの外、施政の重要事項に關し總督に建議するの途を附與さる。

三、地方行政機構

台湾総督府地方官々制に依り州廳を其の下部機構として市郡支廳（澎湖廳のみ）を置く。尙州及廳には徵稅事務分掌機関として稅務出張所を置く。

第二編 地方制度



台灣總督府行政機構一覽表

諮問機關 總督府評議會

秘書官室

人事課

審議室

文書課

地方監察課

情報課

庶務係

教學課

援護課

國民精神研修所

博物館

台灣神社臨時造營事務局

庶務係

主計課

稅務課

金融課

會計課

營業課

總務係

國民動員課

工業課

鋌務課

電力課

土木課

河川工事々務所

地質調查所

農務係

農務課

拓土道場

茶業傳習所

蔗苗養成所

植物檢査所

鳳梨種植養成所

棉作指導所

肥料檢査所

養蠶所

種馬所

種馬牧場

西部特用作物種苗養成所

東部特用作物種苗養成所

耕地課

水利工事事務局

山林課

水產課

商政課

台灣物產紹介所

食糧部

庶務課

米穀課

食品課

事務所及其の出張所

獸液血清製造所

庶務係

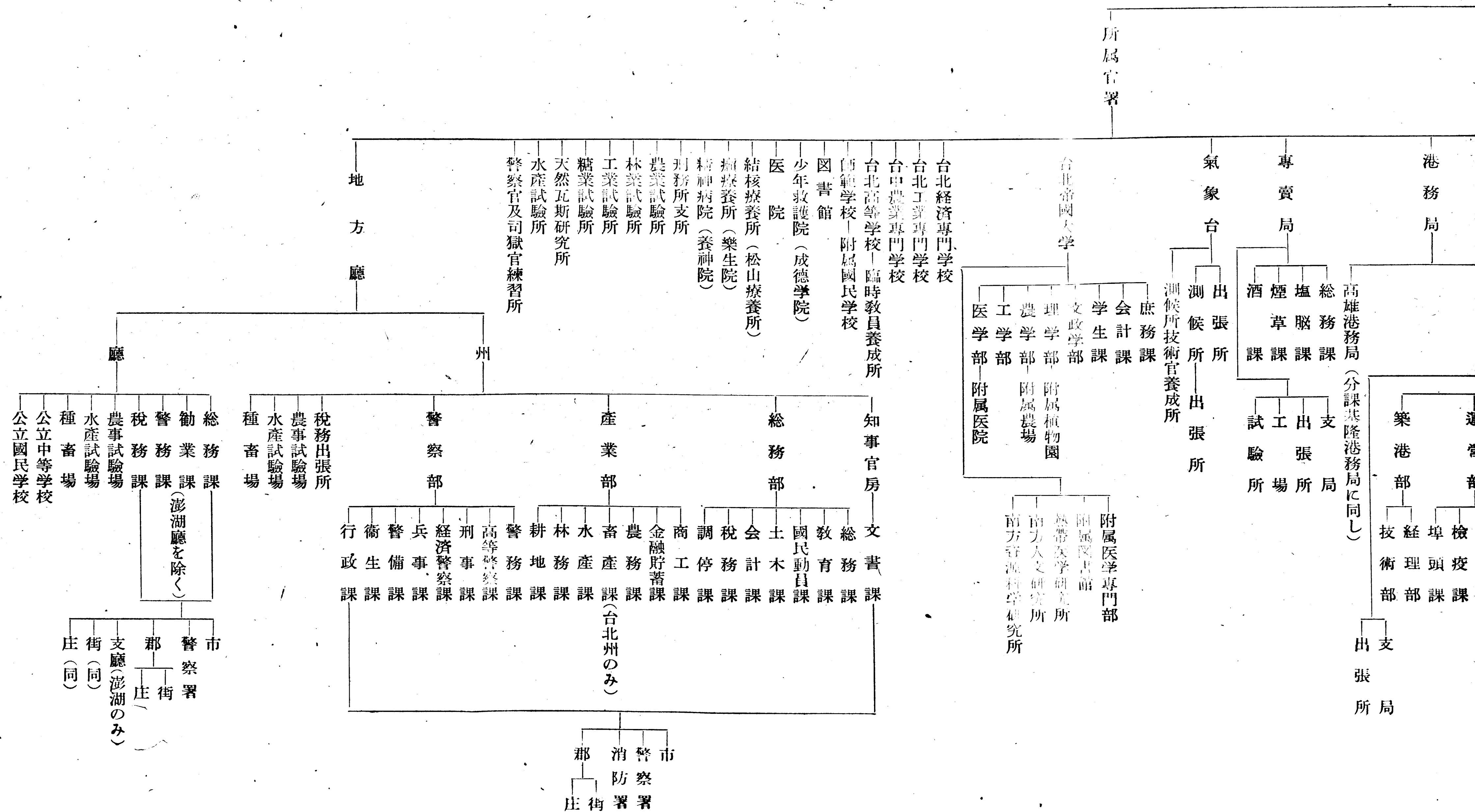
警務課

經濟警察課

山地農業指導所

警務局

阿片癮者矯正所(台北更生院)



台灣總督府行政機構關係官制一覽

1	本府機構	台灣總督府官制
2	諮問機關	台灣總督府評議會官制
3	所屬官署	台灣總督府法院條例
		台灣總督府供託局官制
		台灣總督府交通局官制
		台灣總督府港務局官制
		台灣總督府專賣局官制
		台灣總督府氣象台官制
		台北帝國大學官制
		熱帶醫學研究所官制
		南方人文研究所官制
		南方資源科學研究所官制
		台灣總督府諸學校官制

- 台灣總督府圖書館官制
- 台灣總督府少年救護院官制
- 台灣總督府医院官制
- 台灣總督府結核療養所官制
- 台灣總督府癲癲養所官制
- 台灣總督府精神病院官制
- 台灣總督府監獄官制
- 台灣總督府農業試驗所官制
- 台灣總督府林業試驗所官制
- 台灣總督府工業試驗所官制
- 台灣總督府糖業試驗所官制
- 台灣總督府天然瓦斯研究所官制
- 台灣總督府水產試驗所官制
- 台灣總督府警察官及司獄官練習所官制
- 台灣總督府海員養成所官制

4 地方廳——台灣總督府地方官官制

台灣總督府部內官公衙職員數調 (昭和 20 年 9 月 1 日現在)

區 分	勅任官	奏任官	奏任官 待	列任官	列任官 待	吏員	嘱託	雇	事務備	その他 の備	計
總務	110	2,070	156	20,909	10,885	6,183	2,459	39,329	2,457	32,672	117,230
總督府	11	240	6	1,260	52	—	223	2,204	274	1,129	5,399
交通局長	6	128	—	2,136	274	—	102	11,015	158	15,191	29,010
專賣局長	1	42	—	465	—	—	66	1,630	—	6,084	8,288
學務局長	70	303	—	582	—	—	312	684	1	912	2,864
その他	15	281	10	989	668	—	113	1,496	87	1,469	5,128
州廳	7	556	1	4,096	6,300	2	413	2,310	364	582	14,631
縣廳	—	47	3	436	1,230	1	79	1,027	51	166	3,037
支廳	—	423	—	10,193	2,178	187	345	8,272	392	1,303	23,296
支廳	—	27	—	678	58	25	48	519	30	201	1,586
支廳	—	23	—	74	26	1,046	93	2,238	83	2,512	6,069
支廳	—	—	136	—	—	4,922	665	7,934	1,017	3,123	17,923

第一章 地方行政制度の沿革

第一節 地方官治行政制度

明治二十八年地方官假官制を定め、全島を台北縣、台中縣、台南縣及澎湖島廳に分ち、縣は知事、澎湖島廳には島

司を置き、縣には支廳を置くこととし、縣の下に支廳を設けたり。當時の治安未だ十分ならざるもあり、故に台灣總督府の組織を軍衙組織に改むるの要ありたる爲、台北縣及其の所轄支廳並に澎湖島廳を除き台中縣及台南縣には各民政支部を置き、支部の管轄内樞要の地には民政支部出張所を置くことと爲りたり。明治二十九年再び明治二十八年定められたる地方行政制度と同一建前の制度に復活せり。即ち全島を三縣一廳に分ち、縣には支廳を設け縣、廳、支廳何れも獨立の行政官廳たり管内の行政事務を執行せり。

明治三十年に至り六縣三廳とし縣、廳の下に弁務署を置き行政事務を執行せしめ、仍ち街、庄、社又は數街、庄、社に長を置き得ることとし、弁務署長（三十四年廳長又は支廳長に改正）の指揮命令を承け部内の行政事務を補助執行せしむることとし、國家行政事務の補助機關を設置せり。

明治三十一年縣を廢合して三縣三廳と爲せり。

明治三十三年廳下の弁務署を廢止せり。

明治三十四年縣及縣下の弁務署を廢し二十廳を設置せり。廳下に支廳を置き廳の事務を分掌するものとし支廳長は廳長の補助機關たるものとせり。仍ち同年地理上の單位たる街庄社を明にせり。

明治四十二年廳の廢合を行ひ十二廳とせり。仍ち同年街庄社長を廢し區長及區書記を置けり、區長の權限街庄社長と同様にして廳長（大正九年以後は廳長又は支廳長）の補助機關たり。區書記は區長の命を受け庶務に従事せり。

大正九年五州二廳を設置し、五州は之を三市四十七郡に小分し、更に郡に二百六十街庄を置き、二廳の下には支廳街庄十八區を置き、以て從來の地方行政制度に大改革を行ひたり。大正十一年一區を加へ十九區とし大正十三年五市

四十八郡とし港務所を廢して台北、高雄二州に港務部を置けり。大正十五年澎湖廳を設置し、五州二廳と爲り、二支廳を置き、十支廳とし州下を五市四十五郡と爲せり。昭和五年二市を、昭和八年更に二郡を設置し、五市四十五郡と爲せり。

昭和十三年四月一日松山庄、昭和十五年十月一日永寧庄及左營庄を廢し、昭和十五年十月二十八日宜蘭街及花蓮街を市制施行せられ、昭和十六年十月一日旧港庄、六家庄香山庄を廢し、新に竹北庄設置せられ、昭和十八年十月一日楠梓庄を廢し、昭和十九年八月一日大嶼庄を新設し、同年十二月一日早南庄を廢止し、昭和二十年九月一日現在に於て五州二廳十一市五十二郡二支廳六十七街百十七庄と爲れり。

第二節 地方自治制度

第一項 大正九年以前に於ける地方自治制度

大正九年以前に於ける地方自治制度に付ては何等見るべきものなし。僅に地方施設は地方經費を以て支弁するの途を講じ、依り地方經費負担團體の實例を認め地方自治制度の溫床として制度を容認するに止まるものとす。即ち明治十一年に於ける街庄社長事務費の國庫支弁を廢し各街庄社の分担とし、從來の慣例に依り若し適宜の方法を設けて街庄社長をして收入せしむることとせり。次で同年律令第十七号台灣地方稅規則に依り地方稅の編纂を開き、從來國庫支弁の費中其の性質地方の負担に屬するものは之を移し、從來の事業を整理して其の必要あるものは地方施設たらしめ、而ち地方自治の基を開き以て地方の發達を図りたり。

明治三十四年官制の改正に伴ひ台湾地方税規則にも改正行はれ費区を設定し、之が管理者を台湾総督とせられたるに因り明治三十六年全島を三地方費に区分せり。即ち西部一帯を第一地方費区、恒春廳及台東廳を第二地方費区、澎湖廳を第三地方費区とせり。仍明治四十二年行政区劃の變更に伴ひ右三地方費の区域に必要な改正を行ひ大正九年に至れり右地方費区は要するに經費負担團體なるも実体上權利能力を有する獨立の公法人として認められたるものにして現行の台湾に於ける地方自治團體の基本制度を爲すものとす。

第二項 大正九年に於ける地方自治制度の創設

大正九年地方官々制（九月施行）の根本的改正行はれ、國の行政区劃を五州二廳三市四十七郡に分ち、郡の下に二百六十街庄を置き、二廳に三街庄十八区を設置し仍市街庄区を置かざる地域を蕃地とせり。同年十月一日を期し台湾州制、台湾廳地方費令、台湾市制、台湾街庄制を施行し州市街は各地方公共團體として二廳を通じて廳地方費とし大正十五年には澎湖廳設置に伴ひ、之を廳地方費の区域に編入三廳を通じて地方費とし地方公共團體とせり。其の後行政区劃の變更に伴ひ之等團體にも若干の増減ありたるも大なる改廢をみることなく昭和十年に至れり。

第三項 昭和十年以後に於ける地方自治制度の改正

大正九年地方自治制度の確立以來十五箇年を経過し、制度の運用の実績に徴したる結果、地方自治制度の改正は民意暢達上必要にして本島統治上影響する所甚大なるものあるを認め、慎重なる調査研究の結果に基き、全制度に涉り之が改正を断行せり。即ち台湾州制、台湾市制、台湾街庄制を全部改正し昭和十年四月一日公布せり。台湾市制、台湾街庄制は同年十月一日台湾州制は昭和十一年十月一日より之を施行せり。次に昭和十二年九月九日台湾廳制を公布

同年十月一日より之を施行せり。之が施行と共に台湾廳地方費令は廢止せられ、從て三廳を通じて地方費とせられたる地方公共團體は消滅し新に國の行政区劃たる廳の区域を以て廳たる地方公共團體の区域とし、三廳を新設せり。而して市の新設街庄の廢置分合等の結果、昭和二十年九月一日現在に於ては五州三廳十一市六十七街百九十七庄なり。

第一目 州市街庄

- 一、制度改正に當りては州市街庄の分合は之を行はず。
- 二、從來実体上有したる法人格を明にせり。
- 三、州会州参事会及市会市参事会は之を議決機關とし、街庄協議会は從前の通り諮問機關とせり。
- 四、州會議員市會議員街庄協議會員の定数の半数は之を公選とし、半数は之を任命とせり。
- 五、州市街庄の住民には一定の制限の下に選挙權、被選挙權を附與せり。特に規定する欠格條項を除き原則として左の要件を具備する者に選挙權を附與せり。

(1) 市街庄

- (一) 帝國國民たる年齢二十五年以上の男子たること
 - (二) 獨立の生計を営む者たること
 - (三) 六月以來市街庄の住民たること
 - (四) 六月以來台湾總督の指定したる市街庄税年額五円以上納むる者たること
- 右の要件を具備する者は原則として選挙權を有するものとし二、三の例外を除き右の者を以て被選挙權を有するも

のとす。尙市街庄税年額五円とは地租割、營業稅、家屋稅割、特別營業稅割及特別稅、戶稅を合計せる納付額に依ることとしたるも後、特別稅、戶稅の額のみに依ることと改めたり。

(2) 州

州會議員、被選舉權者は原則として州内に於て市會議員又は街庄協議會員の選舉等を有する者とし欠格要件は市街庄と略同一なるも選舉權は各選舉權に於ける市會議員及街庄協議會員之を有するものとし、所謂間接選舉制度に依れり。理事機關は從來の通官吏たる知事、市長及待遇官吏たる街庄長を以て之に充て公選制度を採用せず。

第二目 廳

- 一、從來の廳地方費を廢止し、國の行政区劃たる廳の區域を以て地方公共團體たる廳の區域としたり。
- 二、法人格を明示せず、而かも実体上法人格あるものとし公共事務遂行上支障なからしめたり。
- 三、民意暢達の機關として新に廳協議會を設置したり。
- 四、廳協議會員は全員台灣總督之を命ずることとし従つて公選制度を採用せず。

第二章 地方官治行政制度の梗概

第一節 州 及 廳

州及廳は地方行政組織の第一次のものにして、之が行政官廳は知事又は廳長とす。知事又は廳長は共に專任制の官

廳にして台灣總督の指揮監督を承け法令を執行し部内の行政事務を管理す。

知事又は廳長は部内の行政事務に付き其の職權又は特別の委任に依り管内一般又は其の一部に州令、又は廳令を發することを得。而して州令には二月以下の懲役若は禁錮拘留、七十円以下の罰金、又は料料の罰則を廳令には拘留又は料料の罰則を附することを得ざるものとす。知事又は廳長は管内の靜謐を維持する爲、兵力を要する場合は之を台灣總督に具狀するものとす。但し非常急変の場合に際しては直に当該地方の陸、海軍の司令官に兵力の使用を請求することを得るものとす。

州には知事官房の外総務、産業及警察の三部を置き廳には総務、國民動員、勸業、稅務、警務の五課を置く。知事又は廳長に共通する補助機關には地方理事官、地方視學官、地方警視、地方技師、視學、屬、警部、技手、通訳、警部補、稅務吏、森林主事、巡查及河川監視あり以上の外知事の補助機關として各部の部長たる州部長及台北州、高雄州の消防署職員たる消防機關士並に消防手あり、仍澎湖廳に於ては廳長の事務を分掌せしむる爲、廳長は台灣總督の認可を受け、支廳を設置し得、支廳長には警部を以て之に充つるものとす。

第二節 郡 市 街 庄

州及花蓮港廳には郡及市に、台東廳には郡を、澎湖廳には街庄を設け、各々其の第二次地方行政組織を爲せり、仍郡の下には台灣總督の指定する蕃地を除く外、街又は庄を設置し第三次行政組織を爲すものとせり。

一、郡及市

郡及市に在りては地方理事官たる郡守又は市長を以て行政官廳とす。郡守又は市長は知事又は廳長の指揮監督を受け、法令を執行し部内の行政事務を掌理し、所部の官吏を指揮監督す。郡守は右の外警察及衛生に関し郡に配置せられたる地方警視、警部、警部補及巡査を指揮監督す。

二、街庄

街に街長、庄に庄長を置き、奏任官又は判任官の待遇とす。街庄長は上官の指揮監督を受け街庄内の行政事務を補助執行す。

第三章 地方自治制度の梗概

第一節 州

- 一、州は法人とし官の監督を承け法令の範圍に於て其の公共事務及法律勅令又は律令に属する事務を処理す。
- 二、州知事は州を統轄し州を代表す。
- 三、州に州会、州参事会を置く。州会は議決機關とし歳入出予算其の他法定の列挙事件を議決す。州参事会は副議決機關とし輕微なる事件を議決す。
- 四、州會議員の定数は二十人以上四十人以下の範圍内に於て台灣總督之を定むるものとす。各州に於ける定数左の如し。

台北州 四十人 新竹州 二十二人 台中州 三十六人 台南州 三十八人 高雄州 二十八人

州會議員の定数の半数及定数を二分し難き場合に於ける其の端数に相当する員数の議員は之を公選とし、選挙権者は各選挙区に於ける市會議員及街庄協議員たる者とし。被選挙権者は原則として州内に於て市會議員又は街庄協議会の選挙権を有する者あるも二、三の例外あり。州會議員の定数より選挙すべき議員の員数を控除したる員数の議員は州會議員の被選挙権を有する者にして学識名望あるものの中より台灣總督之を命ず。

州會議員の任期は四年とし、名誉職とす。但し州會議員総選挙は昭和十五年以降之を行はず。

五、州は其の必要ある費用及法律、勅令又は律令に依り州の負担に属する費用を支弁する義務を負ふ。而して之が支弁の爲、州は州税、財産收入、使用料、手数料其の他の收入を以て之に充つるものとす。昭和二十年度一般会計予算額は五州總計七千五百三十三万九千二百元（最少新竹州九百三十一万五千五百九十三円、最多、台北州千九百十三万三百八十六円）にして特別会計予算額は五州總計二百七十二万二百元（最少台北州四万一千七百四十一円最多台中州六百八十五万一千九百七十六円）に達せり。而して州税は所得税附加税、地租附加税、營業税附加税、家屋税附加税、鋳業税附加税、特別營業税附加税及雜種税にして、昭和二十年度州税收入予算額は五州總計四千六万一千五百十円にして此の外新高工業都市建設事業施行の爲、台中州にて徴收の都市計畫税四十八万七千九百二十七円を加ふれば州税總額は四千五十四万九千四百三十七円に達し、州收入の大部分を占むるものとす。仍歳出費目中教育費は昭和二十年度予算總計二千七百三十万六千三百元にして一般会計予算額の三割六分に達せり。

第二節 廳

- 一、廳は法律、勅令又は律令に依り廳に屬せしめたる事務を処理す。
- 二、廳長は廳を統轄し廳を代表す。
- 三、廳に廳協議會を置く。

廳協議會は諮問機關とし歳入出予算其の他法定の列举事件に關し廳長の諮問に應ず。

- 四、廳協議會員の定数は十人以上二十人以下の範圍内に於て台灣總督之を定むるものとする。
- 各廳に於ける定数左の如し。

台東廳 十二人 花蓮港廳 十五人 澎湖廳 十人

廳協議會員は廳内に住所を有する者にして學識名望あるものの中より台灣總督之を命ず。

廳協議會員の任期は二年とし、名譽職とす。而して最近の任命は昭和十八年十月一日なり。

- 五、廳は其の必要なる費用及法律、勅令又は律令に依り廳の負担に屬する費用を支弁する義務を負ふの外、土木費、教育費、衛生費、勸業費、社会事業費、社会教育費及營繕等の費用を支弁し得るものとする。而して之が支弁の爲、廳は廳税、財産收入、使用料、手数料其の他の收入を以て之に充つるものとする。

昭和二十年度一般会計予算額は三廳總計五百八十五万三千三百六十三円（最少澎湖廳百万一千八百円、最多二百五十六万三千四百一十一円）にして特別会計予算額は三廳總計十六万八千二百四十五円（最少台東廳一万五千八百七十二円

最多花蓮港廳十一万七千二百七十円）なり、而して廳税は所得税附加税、地租附加税、營業税附加税、家屋税附加税、飲業税附加税、特別營業税及雜種税にして昭和二十年度廳税收入予算額は百四十九万五千八百五十円にして廳收入の大部分を占むるものとする。仍歳出費目中教育費は昭和二十年度予算總計百九十九万六千八百八十五円にして一般会計予算額の三割四分に達せり。

第三節 市 街 庄

- 一、市街庄は法人とし官の監督を承け、法令の範圍内に於て其の公共事務及法律勅令又は律令に依り市街庄に屬する事務を処理す。

- 二、市長、街庄長は市街庄を統轄し市街庄を代表す。市長は官吏、街庄長は待遇官吏にして且、市には地方理事官たる助役以下の官吏を配置す。

- 三、市に市会、市参事會を置く。市会は議決機關とし歳入出予算其の他法定の列举事件及法令に依り其の權限に屬する事件を議決す。市参事會は副議決機關とし輕微なる事件を議決す。

街庄に街庄協議會を置く。街庄協議會は街庄長の諮問機關とし、街庄歳入出予算其の他法定の列举事件の諮問に應ず。

- 四、市會議員の定数は最低二十四人、最高四十人とする。

街庄協議會員の定数は最低八人、最高二十人とし、之が定数は人口に依り定まれり。

市会議員又は街庄協議会員の定数の半数は之を公選とし、選挙権者は法定の欠格要件を有する者を除き、原則として帝國臣民たる年齢二十五年以上の男子にして独立の生計を営み、六月以來市街庄の住民と爲り、且六月以來市街庄税年額五円以上を納むる者とす。市会議員又は街庄協議会員の定数の半数は市会議員又は街庄協議会員の被選挙権を有する者にして学識、名望あるものの中より州知事、又は廳長之を命ず。市会議員又は街庄協議会員の任期は四年とし名譽職とす。但し市会議員、街庄協議会員の総選挙は昭和十四年以降之を行はず。

五、市街庄は其の必要なる費用及法律、勅令、又は法令に依り市街庄の負担に属する費用を支弁するの義務を負ふ。而して之が支弁の爲財産收入、使用料、手数料其の他法令に依り市街庄に属する收入を以て之に充当し、仍不足あるときは市街庄税及夫役、現品を賦課徴収するものとせり。

昭和二十年度一般会計予算額は市街庄総計九千八百三十万九千六百六十七円、特別会計予算額は二市一庄総計五百八十六万六千七百七十八円に達せり。而して市街庄税は國税の附加税たる地租制、營業税制、家屋税制及飲業税制、州税又は廳税の附加税たる特別營業税及雜種税制、特別税たる戸税にして昭和二十年度市街庄税收入予算額は市街庄総計五千三百七十三万九千二百六十二円にして此の外都市計畫事業施行の市街庄にて徴收せる都市計畫税五十六万七千十一円を加ふれば市街庄税総額は五千四百三十万六千二百七十三円に達し、市街庄收入の大部分を占むるものとす。仍歳出費目中教育費は昭和二十年度予算総額二千二百五十二万四千四十二円にして、一般会計予算額の二割三分に相当せり。(四月一日現在ニ依る)

州 会 議 員 (昭和 20 年 4 月 1 日現在)

州 別	定 員	現在員	任 命 議 員			選 出 議 員		
			内地人	本島人	計	内地人	本島人	計
北 州	40	40	15	5	20	11	9	20
竹 州	22	22	7	4	11	6	5	11
中 州	36	36	16	2	18	7	11	18
南 州	38	38	15	4	19	11	8	19
雄 州	28	28	10	4	14	9	5	14
計	164	164	63	19	82	44	38	82

廳 協 議 会 員 (昭和 20 年 4 月 1 日現在)

廳 別	定 員	現在員	内地人	本島人	計
東 廳	12	12	8	4	12
花 廳	15	15	11	4	15
港 廳	10	10	7	3	10
湖 廳	37	37	26	11	37
計					

市 公 議 員 (昭和 19 年 4 月 1 日現在)

市 別	定 員	現在員	任 命 議 員		選 出 議 員	
			内地人	本島人	内地人	本島人
北 市	40	37	14	6	8	9
計						

基隆市	28	21	8	3	11	6	4	10
宜蘭市	24	22	7	5	12	2	8	10
新竹市	28	27	10	4	14	3	10	13
台中市	28	25	9	4	13	6	6	12
彰化市	28	25	10	3	13	—	12	12
台南市	32	29	12	4	16	5	8	13
嘉義市	28	25	9	4	13	4	8	12
高雄市	32	30	13	3	16	9	5	14
屏東市	28	24	10	3	13	3	8	11
花蓮市	24	20	9	1	10	6	4	10
計	320	285	111	40	151	52	82	134

街庄協議會員 (昭和19年4月1日現在)

州別	定員	現在員	任命議員			選出議員		
			內地人	本島人	計	內地人	本島人	計
台北州	522	476	79	164	243	11	222	233
新竹州	562	501	69	189	258	6	237	243
台中州	848	778	137	267	404	11	363	374
台南州	968	880	167	295	462	17	401	418
高雄州	542	486	79	178	257	11	218	229
台東縣	104	97	27	23	50	14	33	47

花蓮縣	94	86	28	15	43	13	30	43
澎湖廳	64	57	9	22	31	2	24	26
計	3,704	3,361	595	1,153	1,748	85	1,528	1,613

第三編
司
法

第一章 沿革

領台直後に於ては司法事務は地方官仮官制（明治二十八年六月二十八日發布）により地方官の職権と定められたるが、明治二十九年三月台湾總督府條例及台湾總督府民政局官制發布せられ、民政施行せらるるや民政局に法務部を置き、總督の補助機關として民事に關する法律命令並に民事、刑事の裁判及檢察事務に關する事項其の他司法行政事務を掌理せしめ、其の後或は局内の一課に縮少せられ、又法務局として獨立したる等の変遷ありたるが、昭和十七年十一月行政簡素化に伴ふ官制改正に依り法務部となり今日に至る。

第二章 裁判及檢察制度

第一節 法院

領台直後に於ては司法事務は便宜、地方官之を掌理せしが明治二十九年三月台湾總督府條例及台湾總督府民政局官制發布に続き、同年五月一日律令第一号を以て台湾總督府法院條例發布せられ、台湾總督府に法院、檢察局設けられたり。法院は總督に直屬し民事、刑事の裁判及非訟事件を取扱ふ。初め地方法院、覆審法院及高等法院の三審制なりしが明治三十一年七月地方法院と覆審法院の二審制に改め、其の後大正八年八月再び地方法院、高等法院、覆審部、

同上告部の三審に復し、更に昭和二年七月地方法院に單獨部と合議部を設けたり。現在台北市に高等法院を台北、新竹、台中、台南、高雄の各市に地方法院を、嘉義、花蓮港、宜蘭の各市に地方法院支部を設けたり。即ち本島法院の審級は刑事に関する特則等を除き之を換言すれば地方法院單獨部は第一審、地方法院合議部は第一審と第二審（地方法院單獨部が第一審として爲したる裁判に対する控訴等）高等法院上告部は第三審、即ち上告審なりとす。然るに昭和十八年二月裁判所構成法戦時特例、本島に施行せられ第一審の民事刑事の特種事件の判決に対しては控訴を爲すことを禁ぜられ、直接上告を爲し得ることとなりたるも更に同年十一月五日同法改正せらるゝに及び民事刑事の第一審判決の総てに対し、控訴の全面的廢止となり全く二審制を採用せらるゝに至れり。而して地方法院又は同支部の單獨部の第一審判決に対する上告に付ては高等法院覆審部が其の裁判権を有することゝなれり。

第二節 檢察局

各法院及各支部に檢察局を附置す。檢察局は總督に直屬し、其の管轄区域は各法院及支部の管轄に同じ各檢察局に檢察官を置く。檢察官は（一）司法警察官を指揮監督し刑事訴追を掌り（二）裁判の執行を指揮監督し（三）法院所管の事項に係る民事訴訟に付國民を代表し（四）上級法院の檢察官は下級法院の檢察官を指揮監督し（五）地方法院檢察官差支の爲、其の職務を行ふ能はざる場合には地方法院單獨部の権限に屬する事項と認むるものに限り警視又は警部をして檢察官の職務を代理せしむることを得。

第三節 判官、検査官の任免

裁判所構成法に依り判事たる資格ある者に非ざれば判官たることを得ず。檢察官は判事又は檢事たる資格を有する者の中より之を任用す。而して判官の身分保証に付ては停年の制なく刑法の宣告、又は懲戒の処分に因るに非ざれば其の意に反し免官轉官せらるゝことなし、只身神の衰弱に因り職務を執ること能はざるに至りたるときは總督は高等法院の總會の議決を経て退職を命ずることを得。

第四節 弁護士、公證人、司法書士

弁護士に關しては昭和十年律令台灣弁護士令に依り、弁護士たるの資格を日本内地同様とし正規の試験に合格し、且及一年半の実務見習を経たることを要件とせられたり。弁護士は民事刑事の訴訟行爲其の他一般の法律事務を行ふことを職務とす。公証人に關しては昭和二年日本内地の公証人法に依り判事檢事、又は弁護士たる資格を有する者、正規の試験に合格したる者中より台灣總督之を任命することゝし、法律行爲其の他私權に関する事実に付公正証書を作成し、私署証書に認証を與ふる等の権限を有するものなり。現在台灣に於ける公証人は四名なり、司法書士に關しては大正十二年より司法書士法に依り地方法院長の許可を受け、法院及檢察局に提出すべき書類の作成を業とす。現在台灣に於ける司法書士は四百八十二名なり。

第三章 法令制度

第一節 概況

台湾に於ける民事刑事に関する法令は原則として日本内地に於て施行せられたる法律に準拠するを立前とし、従前の慣習等特種の事情に依り難きものに付ては右の法律に特例を挿入し、又は別に律令を以て台湾にのみ適用せらるゝ法律に代るべき台湾総督の命令を発し、行爲基準を定め來れり。従て民事に関しては日本民法商法民事訴訟法等に依り刑事に関しては日本刑法、刑事訴訟法等に依ることゝしたるが特に台湾特殊事情を参酌し異なる取扱をし來れる事項を左に列記す。

第二節 民事に関する特例

一、親族、相続に関する事項

本島人の親族關係及相続關係に付ては日本民族の規定を適用せず、從來の慣習に依ることゝし慣習不明確なるときは法院に於て條理に依り之が解決を爲しつゝあり。

二、祭祀公業に関する事項

祭祀公業は死者の祭祀を目的として設立せられたる独立の財産にして、支那の古制に淵源するものなるも今日に於

ては台湾獨特の觀あり、本島の相続制度は分頭相続なるを以て嫡長子孫のみをして祖先の祭祀を営ましむるは妥當ならず。且相続財産を悉く分配するに於ては財産散逸し祖先の祭祀を顧みざる虞あるを以て被相続人の遺言、若は相続人の協議に依り一定財産を抽出留保し、又は縁故者相集りて一定金額を贖出、独立財産を設定し、之が収益により専ら祖先又は縁故者、若は崇拜者等の祭祀を執行するものなるも右財産は不動産、殊に土地を主要なるものとし。唯僅に建物、動産其の他の權利を附随するものあり。而して祭祀の方法は管理人（世襲又は選任に依る）に於て又は派下（設定者及其の子孫）相互間輪流して之を行ひ、此の際派下一同を祖廟、正廳管理人宅又は派下宅に招集し、派下同礼拜卓を囲み、宴を張る祭祀公業の法上の性質に付ては從來種々議論せられたる処にして、或は共有或は總有、又は法人なりと説くも判例及通説は民法の社團法人にも非ず。財團法人にも非ざる慣習上の特殊法人なりとすに一致し之が処理に付ては日本民法に依ることなく、専ら慣習を尊重し存続せしむることゝせられたり。

三、民事争訟調停に関する事項

明治三十七年より行はれたる簡易調停制度、即ち州知事又は廳長が管轄区域内の民事争訟調停及其の執行を取扱ひ調停成立の際は調書を以て之を明確にし、一旦調停成立したる事件に付ては訴訟を提起することを得ざらしむる旧來の取扱を其の儘存続せしめ、日本内地の各種調停法の適用を排除し民事争訟の調停に関しては律令（明治三十七年律令第三号民事争訟調停に関する件）に依り処理しつゝあり。

第三節 刑事に関する特例

一、阿片犯罪に関する事項

台湾に於ける阿片吸食の弊を矯正する爲、明治三十年阿片專賣制度を創むると共に吸食特許の制を設け、之が違反者に対する処罰を律令台湾阿片令に規定して取締に当り來れり。

二、刑事訴追手續に関する事項

刑事訴追手續に関しては台湾に於ける文化の程度其の他の特種事情に依り、日本内地の手續に若干の修正を加へたり。

第四章 刑務所

第一節 沿革

本島改隸の当初に於ては行刑に関する制度なく收容者の総ては便宜地方廳に拘禁し、警部其の事務を管掌す。明治二十九年民政布かるゝに及び始めて看守長及監獄書記等の職を置く。翌三十年典獄の職を設け各縣監獄の長たらしむ。斯くの如く行刑は領台當時より地方廳の管轄に属せしが、明治三十三年内地監獄が内務省より司法省の主管に移るや本島に於ても亦總督府の直轄に移し、同時に台北、台中及台南に監獄を置き監獄官制を定め新に典獄及監吏の職制を設置し、大正八年七月典獄補の職を新設し監吏を看守長に改む。次で同十三年一月監獄を刑務所と改稱す。同十五年十月全島に於ける二十歳未満の受刑者を收容する新竹少年刑務所を特設し、昭和八年三月高雄市に台南刑務所高雄支

所を、更に同十一年二月花蓮港市に台北刑務所花蓮港支所を新設す。其の他に宜蘭市に台北刑務所宜蘭支所、嘉義市に台南刑務所嘉義支所ありて全島に本支所各四現存す。

第二節 收容者

刑務所開設以來時に消長ありたるも、大体昭和七年迄は一月平均二千六、七百人程度なりしが同八年以降漸次遞増し來り、今次事變勃發當時は四千九百人に達したりしが、其の後恩赦執行せられ釈放せらるゝ者多く、昭和十五年五月には四千五百人に下りたるも、其の後事變に因る社会狀勢の急変により犯罪者漸増し昭和十七年七月末日には五千二十人に達せるも施設之に伴はず、生活必需品たる衣に於ては代用品を用ふる爲、損傷甚しく食に於ては諸物資の騰貴並に不足に依り從來の如き給與を行ふこと能はず。又住に於ても狹隘を告げ、之が処置に非常なる苦心を拂ひつゝあり、又他面服役中疾病に罹り刑の執行に依り生命の保し難き者は刑務所医の早期診断に依り努めて刑の執行停止の措置を採り之等の保護を万全にし自由刑の生命刑とならざる様指導し來り、本年七月末現在にて全收容者四千十一人なり。收容者を種族別に見るとき本島人約九十三%、内地人五%、外國人（主として支那人）約二%にして在所者何れも規律に服し至極平穩裡に経過しつゝありて何等憂ふべき事情なし。

第三節 作業

作業經營の方針は就業者に対し勞働精神の涵養と職業的技術訓練を主とし、一面國家の負担軽減を目指し作業收入

を計りつゝあり。現在実施せる業種は八十種に及び之が指導には作業技師一名、作業技手十八名、作業教手十三名を以てし技能の向上を図り來りたる結果、昭和十九年度の収入は三百二十五万一千円に達し、昭和十二年度以來收容費を償ひ尙余裕を生じつゝあり。

第四節 教誨教育

收容者を遷善改過し、之等を更生せしむるを目的とする現時の行刑を遂行する爲に教誨は重要な職責を有するものなるが故に其の実施には充分の検討と努力を拂ひ、其の効果を擧ぐることに勉めつゝあり、教育は二十歳未満の男受刑者を新竹少年刑務所に集禁し初等國民学校に準じて実施しつゝあり。

第五節 衛生

領台当初の收容者は概ね衛生思想乏しき上に刑務所の諸設備整はず医療の施設又不完全なりし爲、病者多く死亡者も亦多かりしが逐年設備の改善と病者の早期治療に努めたる結果、衛生状態良好となり一般社会に於て傳染病猖獗を極めたる際も尙所内に侵入を防ぎ得たり。されど最近諸物資の逼迫は收容者の給與も亦意の如くならず、一般的に体位の低下を來たし病者の快復容易ならざるものは努めて刑の執行停止に依り家庭に於て療養せしむる等の措置を講じ居れり。

第五章 司法保護事業

司法保護事業の可否は檢察裁判行刑の効果を左右するものなるを以て内地に於ては少年法思想犯保護觀察法及司法保護事業法等施行せられ、之等に基づく施設所々に設けられ良好の成績を挙げつゝあり。本島に於ける此の種事業の沿革を略述せんに明治三十九年に職務上其の必要を痛感したる当時の台南監獄長は主唱と職員との協力に依り、同地に收容保護場の創設せられたるを矯矢とし、翌年台北、台中の各監獄職員之に倣ひ保護場を設置したるも爾來昭和四年に至る約二十年間は篤志家の援助ありたりと云へ、殆んど刑務所職員の出損と奉仕に依り經營し來りたるが、同年以降本事業の目的達成には一般世人の理解と協力を求むる要あるを認め、宣傳に努めたる結果、所在に保護團體の設立を見、各州廳には之が連絡機關たる州廳聯合保護會設立せられ、更に昭和十五年に至り紀元二千六百年を記念し、全島に於ける指導統制並に助成を爲す最高機關たる台灣司法保護事業聯盟を創立し、各州廳聯合保護會及二百三十五に上る保護團體の全部は之に加盟し相互に連絡を保ち目的達成に努めつゝあれども資金充分ならざる爲、時務を果すに充分なる活動を爲し能はざる憾みありたるが昭和十八年一月司法保護事業法の本島施行を見、本格的なる活動を開始するに至れり。

第四編 文 教

第一章 神社及宗教

第一節 神社

現在台湾に於ける神社は官幣社二、國幣社三、縣社十一、郷社二〇、無格社三〇なり此の外、台湾護國神社、建功神社及神社としての物的要素を具備せざるもの、即ち社及末社一二八、建物ある遙拜所四あり、官幣大社台湾神宮は明治三十四年創建に係り、本島総鎮守の神として天照大神、大國魂命、大己貴命、少彥名命及能久親王の五神を奉祀す。官幣中社台南神社は能久親王を奉祀す。昭和四年國幣中社に列せらる。國幣小社は新竹神社、台中神社、嘉義神社の三社なり、次に縣社は二十社にして無格社は三十社なり、外に建功神社、台湾護國神社あり。

第二節 宗教

本島に於ける宗教を便宜上領台前よりの宗教及領台後に傳來したる宗教に区分することを得。

第一項 領台前よりの宗教

一、旧慣に依る宗教

- (イ) 儒教 儒教の根本は修己と治人とに在りと雖も、何れも祈福邀利の弊に陥れる状あり。
- (ロ) 道教 道教は祖先及自然崇拜の原始的宗教思想を本とし、老莊思想に固來の仙術を加味したるものにして本

島に於ては主祀は配祀として祀れる神仙多数あり、祭葬禁呪等を行ふのみにして教権の代表者又は信徒の教導者たるの意義を有せず。

(ハ) 佛教 寺院は多く鼓山湧泉寺及怡山長慶寺の末徒の開拓に係り、概ね禪宗に属す近時講習会等を開き、或は私立学校を建設し、或は青年僧侶を海外に留学せしむる等漸次活潑なる活動を呈するに至る。其の他佛教の一派として齊教あり。

二、神佛又は祖先を祭祀する団体

神明会祖公会、祭祀公業、父母会等ありて祖先を祭祀す。其の他坐現術士として法師、符法師、童乩、桂姨、地理師、看日師、算命師、相命師、卜卦師等ありて禍福吉凶等を行ふ。

三、基督教

基督教は天主教、長老教の二派あり漸次宣教師の努力に依り現在の盛大を見るに至れり。

第二項 領台後に傳來したる宗教

(イ) 神道 本島現行のもの神道十三派中天理教、金光教、神習教、御嶽教、実行教、大社教、扶桑教及神道の九派あり。

(ロ) 佛教 佛教各派中本島現行のものは眞宗本願寺派、同大谷派、同木邊派、曹洞宗臨濟派、淨土宗、西山派、日蓮宗、法華宗、眞言宗、天台宗、華嚴宗、八宗十二派なり。

(ハ) 基督教 内地基督教の本島に布教されたるもの日本基督教團、日本聖公会、第七日再臨團の三派あり。

神社及神職数 (昭和 20 年 8 月末現在)

神社	社				計	神職數	
	官幣社	國幣社	縣社	郷社			
2	3	11	2	20	30	68	99

神道説教所布教師及信徒 (昭和 16 年 12 月末現在)

説教所	布教師	信徒			計
		内地人	本島人	外國人	
87	170	24,033	18,020	—	42,144
※ 1			91		

※ は教務所、÷ は朝鮮人なり

神道教派別説教所布教師及信徒 (昭和 16 年末現在)

教派別	説教所	布教師	信徒
実行教	3	3	417
御嶽教	1	1	151
金光教	10	15	6,082
天理教	66	136	28,106
神習教	※ 1	3	489
	2		

図表

扶桑大社理神	教 道	1	1	5,530
		1	8	586
		1	1	153
		2	2	630

※ (1) 教務所

寺院教務所説教師及信徒 (昭和 16 年末現在)

寺 院	説教所	布教所	信 徒		
			内地人	本島人	外国人
65	143	346	110,603	63,419	34
			× 305		
					174,361

× (1) 朝鮮人

佛教々派別寺院教務所布教師及信徒 (昭和 16 年末現在)

宗 派 別	寺 院	教 務 所	説 教 所	布 教 師	信 徒
天 眞 淨 土 宗	1	—	4	5	1,616
眞 言 宗	4	—	13	26	14,980
眞 言 宗	6	—	22	36	21,375
眞 言 宗	1	—	1	5	1,744
眞 言 宗	15	—	11	72	27,603
眞 言 宗	14	—	32	63	35,721
眞 言 宗	16	—	30	71	43,162

眞 宗 大 谷 派	5	—	12	40	21,706
眞 宗 木 蓮 派	—	—	1	3	261
眞 宗 蓮 宗	3	—	8	16	4,577
眞 宗 蓮 宗	—	—	8	8	1,136
眞 宗 蓮 宗	—	—	1	1	400

基督教々務所説教所布教師及信徒 (昭和 16 年末現在)

教務所	説教所	布教所	信 徒		
			内地人	本島人	外国人
3	259	280	5,482	69,076	111
			× 1		
					74,670

× (1) 朝鮮人

基督教々派別寺院教務所説教所布教師及信徒 (昭和 16 年末現在)

教 派 別	教 務 所	説 教 所	布 教 師	信 徒
日 本 基 督 教 團	1	36	63	5,514
日 本 聖 公 會	—	4	6	839
日 本 老 教 會	2	185	169	59,721
天 主 公 教 會	—	33	41	8,536
第 七 日 再 臨 團	—	1	1	60

神道佛教基督教信徒数果年比較 (昭和16年末現在)

教 派 別	昭和14年末	昭和15年末	昭和16年末	昭和16年中増減数
神 道	32,195	33,909	42,144	8,235
佛 教	168,392	182,656	174,361	△ 8,295
基 督 教	55,466	58,798	74,670	15,872

第二章 学校教育

第一節 総 説

本島に於ける教育方針は同仁一視の基本精神に基き、島民をして教育上の機会に均霑せしむることを眼目とし、世界文化の向上に寄與すべき人格の陶冶と學術の練磨を爲すを以て目途とし、教育の普及並に之が制度施設の改善に努め來たる結果、本島に於ける学校教育は逐年向上の一途を辿り、昭和十九年四月末に於ける島内官公私立学校の現況次の如し。

一、初等普通教育

國民学校 一、〇九九校(官立七校、公立一、〇九二校)

二、高等普通教育

中学校 二二校(公立一八校、私立四校)

高等女学校 二二校(公立二〇校、私立二校)

高等学校 一校(官立)

帝國大学予科 一校(官立)

三、実業教育

実業補習学校 九〇校(公立八二校、私立八校)

実業学校 二七校(公立二五校、私立二校)

四、師範教育

師範学校 四校(含青年師範学校一校)(官立)

臨時教員養成所 一校(官立)

五、専門教育

専門学校 四校(官立)一校(私立)(帝國大学附属専門部一校を含む)

六、大学教育

帝國大学 一校(官立)

七、特殊教育

盲啞学校 二校(公立)

右の外私立の各種学校九校を算す。而して学制は屢々変革を見たるも其の骨子とする所は台灣教育令の定むる所に

依る差別教育を廃し共学を原則とす。

第二節 初等普通教育

初等普通教育は國民學校に於て之を行ふ。國民學校設立者は市街庄制を施行したる地域に於ては市街庄、其の他の地域に於ては州又は廳なり。而して教育上の便宜の爲國民學校の課程を三種とし、内地人及國語力学力ある本島兒童は第一号表其の他の本島人兒童は第二号表の課程に依る國民學校に於て教育することゝす。尙土地の狀況に依り國民學校高等科の課程を履修し能はざる兒童に對しては六ヶ年を以て國民學校の全課程を完了せしむる爲、第三号表の課程に依る國民學校に於て教育することゝせり。國民學校の入学年齢は滿六年、修業年限は第一号表及第二号表に依る國民學校に在りては初等科六年、高等科二年とし、第三号表に依る國民學校に在りては六年とす。昭和十九年四月末に於ける國民學校の現況は

		兒童數
課程第一号表に依るもの	一五五校	五五、七七八人
課程第二号表に依るもの	九〇八校	八六六、三六一人
課程第三号表に依るもの（修業年限六年の國民學校）	三六校	一〇、三八六人
合 計	一、〇九九校	九三二、五二五人

にして昭和十九年三月末日現在就學率内地人九九・六二％、本島人七一・一七％、高砂族八三・三八％（本島人、高砂族 合計七一・三一％）なり。

第三節 高等普通教育

高等普通教育施設として官立の高等学校及帝國大學予科、公立（州、廳立）又は私立の中学校及高等女學校あり。昭和十九年四月末に於ける高等普通教育の現況次の如し。

	修業年限	生徒
中 学 校	二二校	一五、一七二人
高等女學校	一二校	一三、二七〇人
高等学校（尋常科を含む）	一校	五六二人
帝國大學予科	一校	五四〇人

第四節 実業教育

実業教育施設としては公立（州廳立、市街庄立、街庄組合立）又は私立の実業補習學校と公立（州廳立）又は私立の実業學校とあり、而して私立実業學校の設立は昭和十四年度より初めて認可せり。昭和十九年末に於ける実業教育の現況次の如し。

実業補習学校 九〇校(公立八二) 生徒 一八、〇九〇人

実業学校 二七校(公立二五) 生徒 二四、六二六人

農業九(農林三農業六) 工業九(内私立二) 商業八(内私立二) 水産一

にして実業補習学校は修業年限一年乃至三年とし、各地の情況に應じ適切なるものを設く。実業学校は修業年限四年なり。

第五節 師範教育

初等学校教員養成機関として官立師範学校三校あり台北、台中、台南各市に設置す。昭和十九年四月末現在生徒数二、八八八人にして本島人生徒の割合は約一割一分なり。師範学校には予科及本科を置き予科は修業年限二年入学資格國民学校高等科修了程度にして本科修業年限三年、入学資格師範学校予科修了、中学校又は女学校卒業程度なり。師範学校には此の外講習科又は研究科を置くことを得。講習科は台灣國民学校初等科訓導又は台灣國民学校初等科準訓導養成の目的を以て設置し、國民学校高等科修了者又は之と同等以上の学力ありと認めたる者を入学資格とする修業年限一年、又は三年のものと中学校又は高等女学校卒業程度を入学資格とする修業年限一年のものとなり、研究科は現在設置し居らざるも師範学校の学科目又は之と關聯ある事項に就き精深なる程度に於て専修するものにして修業年限一年、入学資格は師範学校卒業業者又は台灣國民学校訓導若は國民学校訓導の免許狀を有する者とす。而して女子師範

学校の設置なきも台北師範学校には本科又は講習科に入学せしめ居れり。

尙中等教員養成機関として修業年限三年の臨時教員養成所を台北高等学校に附置しあり。

其の狀況左の如し。

数学科 生徒数 四一人(内地人三七、本島人四) 物理化学科 生徒数 四四人(内地人三八、本島人六)

計 生徒数 八五人(内地人七五、本島人一〇)

更に青年学校教員養成の爲、青年師範学校を設け彰化市に之を置く、其の狀況左の如し。

本科 修業年限二年 生徒数二四六人 講習科 修業年限一年 生徒数一一四人 計 三六〇人

第六節 専門教育

専門教育施設としては經濟専門学校、工業専門学校、農林専門学校及帝國大学附属医学専門部並に私立女子専門学校あり。昭和十九年四月末に於ける専門教育の現況次の如し。

	修業年限	生徒
經濟専門学校	一校 三年	四三七人
帝國大学附属医学専門部	一校 四年	三六〇人
工業専門学校	一校 三年	七五二人
農林専門学校	一校 三年	三六八人

之等諸学校は私立女子専門学校を除く外は官立にして工業専門学校は台南市に農林専門学校は台中市に他は何れも台北市にあり。

台北經濟専門学校には本科（生徒三三五人）南方經濟專修科（四六人）の外に東亞經濟專修科（五六人）を置く。
台南工業専門学校には機械科（生徒二六八人）電氣科（二三五人）化学工業科（九六人）電氣化学科（二二一人）土木科（九〇人）建築科（八六人）の六学科を置く。

農林専門学校には農科（一七八人）林科（一五三人）農藝化学科（一四三人）の三学科を置く。

私立台北女子専門学校は文科（四二人）理科（三八人）を置く。

第七節 大学教育

台北帝國大学は昭和三年四月の開学にして学部は現在文政学部、理学部、農学部、工学部及医学部の五学部にして綜合大学としての実を備ふ。

- (1) 文政学部は政学科、文学科、史学科及哲学科の四学科に分ち其の講座数二五なり。
- (2) 理学部は化学科、動物学科、植物学科及地質学科の四学科を置き其の講座数は十三なり。
- (3) 農学部は農学、農業經濟学、農業土木学、農藝化学及獸医学の五專攻にして其の講座数は二二なり。
- (4) 医学部は講座数二四なり。
- (5) 工学部は機械工学科、電氣工学科、應用化学科及土木工学科の四学科として其の講座数三〇なり。

第八節 盲啞教育

盲啞教育施設としては台北市及台南市に各一校の州立盲啞学校あり。昭和十九年四月末現在生徒数三四六人（内地人二九人、本島人三十三人、外國人四人）にして盲生部、啞生部に分け各部に普通科及技藝科を置き、別に專修科を設く。普通科は入学年齢を八年以上とし修業年限六年、大体初等普通教育を施すを目的とし、技藝科は入学資格を普通科を卒業したる者、又は之と同等以上の学力を有する者とし、修業年限二年乃至五年、生活に必須なる技藝を授くるを目的とし專修科は入学年齢を十二年以上とし修業年限二年、又は三年主として実業又は技藝を專修せしむるものとす。尙普通科に於ては第三学年乃至第五学年より技藝科を兼修せしめ生活上必須の技藝を授けつゝあり。

第九節 幼稚園

昭和十九年四月末現在幼稚園数九五、園児八、六七二人（内地人二、九四一人、本島人五、六九〇人、朝鮮人六人、外國人三五人）にして其の内訳次の如し。

公立幼稚園	二	園児	一八一	内地人	七三	本島人	一〇五	外國人	三
私立幼稚園	九三	園児	八、四九一	内地人	二、八六八	本島人	五、五八五	朝鮮人	六
				外國人					三二

第十節 私立各種学校

昭和十九年四月末現在私立各種学校九校 生徒数三、二六〇人（内地人四二一人、本島人二、八二七人、朝鮮人二人、外國人七人）なり。

而して私立各種学校中最も多数を占むるは簡易なる高等普通教育を施すものにして其の他は実業学校に類するもの高等女学校に類するもの等なり。

諸学校一覽 (昭和19年4月末)			
学校別	学校数	学生生徒児童総数	職員数
国民学校	1,099	932,525	15,364
中学校	22	15,172	571
高等女学校	22	13,270	501
高等学校	1	562〔普通科120 高等科440〕	36
帝國大学予科	1	540	28
実業補習学校	90	18,090	547
実業学校	27	14,626	675
师范学校	3	2,888	172
青年师范学校	1	360	31
臨時教員養成所	1	85	29
専門学校	5	1,997	154
大学	1	394	173
盲哑学校	2	346	19

各種学校	9	3,260	210
計	1,284	1,004,115	18,510

学生生徒児童及幼稚園児数果年比較表

(イ) 課程第一号表に依る国民学校児童数

年度別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和15年度	44,210	3,763	34	75	5	48,087
同16年度	45,753	4,123	43	98	6	50,023
同17年度	47,468	4,259	41	90	7	51,865
同18年度	48,884	4,747	53	107	6	53,797
同19年度	50,599	4,979	65	131	4	55,778

(ロ) 課程第二号表及第三号表に依る国民学校児童数

年度別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和15年度	20	623,289	7,796	14	2,663	632,782
同16年度	23	679,324	8,333	23	2,967	690,670
同17年度	27	734,123	8,303	18	3,167	745,638
同18年度	16	795,927	9,270	17	3,647	808,877
同19年度	20	862,769	9,738	13	4,207	876,747

(ハ) 中学校生徒数

年度別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和15年度	5,644	5,500	5	10	21	11,180

計

同 16 年 度	6,069	6,001	5	7	18	12,100
同 17 年 度	6,578	6,624	4	14	23	13,243
同 18 年 度	7,132	7,337	6	13	35	14,523
同 19 年 度	7,230	7,881	7	10	44	15,172

(二) 高等女学校

年 度 別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和 15 年 度	5,756	3,250	2	1	14	9,023
同 16 年 度	6,208	3,572	2	3	10	9,795
同 17 年 度	6,832	3,891	2	3	8	10,736
同 18 年 度	7,643	4,343	3	6	12	12,007
同 19 年 度	8,396	4,853	2	7	12	13,270

(ホ) 高等学校

年 度 別	尋 常 科			高 等 科			合 計
	内地人	本島人	計	内地人	本島人	計	
昭和 15 年 度	144	15	159	351	98	449	608
同 16 年 度	143	17	160	367	105	472	632
同 17 年 度	148	15	163	374	97	471	634
同 18 年 度	146	14	160	388	87	475	635
同 19 年 度	110	10	120	368	74	442	562

(ヘ) 実業補習学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和 15 年 度	1,998	7,424	258	3	7	9,690
同 16 年 度	2,065	9,468	216	6	7	11,761
同 17 年 度	2,201	11,617	151	3	18	13,990
同 18 年 度	2,187	13,531	131	6	28	15,883
同 19 年 度	2,234	15,751	77	3	25	18,090

(ト) 実業学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和 15 年 度	3,848	3,738	7	1	16	7,610
同 16 年 度	4,372	5,087	13	2	27	9,501
同 17 年 度	4,751	6,544	17	4	30	11,346
同 18 年 度	5,150	7,895	19	7	39	13,110
同 19 年 度	5,367	9,194	18	7	40	14,626

(チ) 師範学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	高砂族	外國人	計
昭和 15 年 度	1,611	437	5	—	2,053
同 16 年 度	2,122	380	5	—	2,507
同 17 年 度	2,383	294	2	—	2,679
同 18 年 度	2,293	346	1	2	2,642

同 19 年 度 2,364 520 2 2 2,888

(リ) 青年師範学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	高砂族	計
昭和 18 年 度	115	80	—	—	195
同 19 年 度	183	177	—	—	360

(ヌ) 専門学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	高砂族	外國人	計
昭和 15 年 度	923	173	—	—	—	1,096
同 16 年 度	1,141	244	—	—	—	1,385
同 17 年 度	1,353	280	—	—	—	1,633
同 18 年 度	1,453	300	1	1	—	1,755
同 19 年 度	1,529	459	1	1	7	1,997

(ル) 帝國大学学生数

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	外國人	計
昭和 15 年 度	82 文政 理農 医学	5 4 4 74	1 1 1	— — —	87 91 145
昭和 16 年 度	87 文政 理農 医学	3 4 66	1 1	— —	90 122 123

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	外國人	計
昭和 17 年 度	115 文政 理農 医学	3 2 66	1	—	118 135 128

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	外國人	計
昭和 18 年 度	168 文政 理農 医学 (他に聴講生1)	5 1 1 90	— 1 1 —	— — — 1 (他に聴講生2)	173 54 103 168
昭和 19 年 度	31 文政 理農 医学 (他に聴講生1)	4 1 1 104	1 1 1 —	1 — — — (他に聴講生1)	37 42 75 49 189

(ヲ) 啞盲学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	高砂族	外國人	計
昭和 15 年 度	33	316	—	5	354
同 16 年 度	30	324	—	2	356
同 17 年 度	32	326	—	7	365
同 18 年 度	36	329	—	4	369
同 19 年 度	29	313	—	4	346

(ヅ) 私立各種学校生徒数

年 度 別	内地人	本島人	朝鮮人	高砂族	外國人	計
昭和 15 年 度	686	2,460	2	11	6	3,165
同 16 年 度	618	2,471	1	11	13	3,114

昭和17年度	513	2,490	1	13	6	3,123
昭和18年度	520	3,092	—	2	10	3,124
昭和19年度	411	2,827	2	—	20	3,260

(カ) 児童数

年度別	内地人	本島人	高砂族	朝鮮人	外國人	計
昭和15年度	2,224	4,983	2	—	13	7,222
昭和16年度	2,346	5,796	—	1	7	8,350
昭和17年度	2,352	6,097	8	4	26	8,987
昭和18年度	3,258	6,070	49	—	18	9,395
昭和19年度	2,941	5,690	—	6	35	8,672

国民学校児童就学年果年比較 (百分比)

(イ) 内地人	男	女	平均
昭和15年度	99.53	99.56	99.55
昭和16年度	99.54	99.65	99.59
昭和17年度	99.56	99.67	99.61
昭和18年度	99.63	99.69	99.66
昭和19年度	99.63	99.62	99.62

(ロ) 本島人	男	女	平均
昭和15年度	70.56	43.41	57.44
昭和16年度	73.62	48.54	61.54
昭和17年度	73.60	48.52	61.52
昭和18年度	76.60	54.10	65.76
昭和19年度	80.76	60.73	71.17

(ハ) 高砂族 (普通行政区域内居住者のみ)

年度別	男	女	平均
昭和15年度	70.60	65.78	68.30
昭和16年度	70.67	63.50	67.26
昭和17年度	70.65	63.48	67.24
昭和18年度	72.76	69.59	71.29
昭和19年度	86.91	79.38	83.38

(ニ) 本島人及高砂族合計

年度別	男	女	平均
昭和15年度	70.56	43.64	57.56
昭和16年度	73.59	48.70	61.60
昭和17年度	73.55	48.66	61.56
昭和18年度	76.56	54.25	65.82
昭和19年度	80.86	60.94	71.31

第三章 社会教育

第一節 概況

本島に於ける社会教育は統治の方針に則り島民の實際生活に即して克く其の國民資質を鍊成し、島民の生活及文化を向上充実すると共に本島社会の改善振興を図るを以て目的とす。本島統治の理想は一視同仁の御聖旨に基き本島の土地と住民とを挙げて内地のそれに何等遜色なからしむるに在り、換言すれば汎く島民をして國民精神を涵養せしむると共に文化水準並に生活程度を向上せしめ一日も速かに眞に帝國臣民として寸分の相違なき迄に指導教化せんとするに在り、故に本島に於ける社会教育は一貫せる統治理想を基準として其の特殊性を克く認識し遍く島民の生活を挙げて之を醇化向上し以て皇民鍊成の徹底を期せんとせるものなり。即ち國語の常用、部落教化、家庭教育及青年学校青少年團教育、更に映画演劇音樂美術等の情操教育、民衆体育等従前の社会教育施設の拡充強化に加ふるに時局の要請に伴ひ強力に展開せらるべき青少年運動及台灣一家、皇民奉公を理念とする皇民奉公運動に関する事業等愈々飛躍的展開をなすに至れり。

第二節 青年鍊成施設

一、青年特別鍊成所

本島徵兵制実施に対応し本島男子青年に対し心身を鍛鍊し、將來軍務に服すべき場合に必要なる資質の鍊成を目的とし、昭和十九年四月律令第十五号を以て台灣青年特別鍊成令を公布し、青年鍊成所二十七箇所を設置す。鍊成期間四箇月年三回、毎回の收容人員五〇〇名にして一箇年四万五百名の鍊成を行ひたるも戦争終結に伴ひ各所共鍊成を中止せり。

二、青年学校

男女青年に対し皇國臣民たるの資質を鍊成するを目的とし、昭和十九年府令第一四七号を以て台灣青年学校規則を改正し昭和十八年以降に於て國民学校を修了せる男女青年全員を收容す。

其の狀況左の如し。

公私立別	州廳別	学校数	生徒数
公立男子	台北州	89	19,256
	新竹州	66	17,178
	台中州	176	31,179
	台南州	137	25,716
	高雄州	68	12,867
	台東廳	10	804
	花蓮港廳	10	1,361
	澎湖廳	1	119
	公	8	141
	立女子		

私立男子	24	3,065
私立女子	1	61
計	581	111,846

三、皇民錬成所

國民学校を修了せざる男女青年に対し國民たる資質を錬成するを目的とし、昭和十九年一月府令第十五号を以て皇民錬成所規則を公布し未教育男女青年の錬成をなす。

其の状況左の如し。

所 数、生徒 数	所 別	所 数	前 期		後 期		合 計
			1 年	2 年	1年(男)	2年(男)	
			男 女	男 女	男 女	男 女	
北 州	438	男 2,563 女 9,101	2,695 5,647	2,493 5,012	12,763 15,048		
新 州	685	男 3,968 女 7,608	3,675 5,864	3,555 3,175	14,373 13,472		
中 州	696	男 8,091 女 14,709	2,238 4,471	5,613 1,060	17,002 19,180		
南 州	1,203	男 19,249 女 26,078	8,477 11,336	1,351 999	30,076 37,414		
高雄 州	261	男 5,012 女 696	1,299 812	1,372 899	8,582 1,508		

和 東 廳	33	男 325 女 377	163 228	268 257	1,166 665
花蓮 港 廳	142	男 470 女 677	370 579	368 344	1,552 1,256
澎湖 廳	64	男 552 女 750	243 1,482	241 201	1,237 2,232
計	3,522	男 40,230 女 59,956	19,313 20,819	15,261 11,947	86,751 90,775

四、國民精神研修所

國民精神の陶冶に努め本島統治の本義に基く教化の信念理論及實際を研究会得せしむる爲、昭和十三年八月之が官制の公布を見、爾來本島教化の中心道場として今日に至る。

職員組織左の如し。

所 長	文教局長
主 事	教学課長
指導官	專任一 兼任一
指導官補	二

第三節 社会教化施設

一、博物館

本島に関する學術技藝並に産業に資すべき標本及参考品を蒐集陳列し衆庶の觀覽に供する目的を以て昭和十一年訓令第八十三号を以て台湾総督府文教局附屬博物館として設置せられ今日に至りしが本年五月三十一日の戰災に罹り館舎に大破損を來すと共に陳列藏品の損失数千点に及ぶ。

陳列品 罹災前の陳列藏品は約一万三千七百点にして其の種別左の如し。

歴史部	二、九〇〇点	動物部	四、三〇〇点
高砂族部	一、九〇〇点	植物部	六〇〇点
南支南洋部	一、二〇〇点	雜部	五〇〇点
地質鉱物部	二、三〇〇点	計	一三、七〇〇点

右の内、爆撃に依る破壊、焼失せるもの三分の一以上及現存せるもの九千点内外と思料せらる。

二、図書館

治く内外古今の圖書を蒐集保存し公衆の閱覽に供するを目的とし大正九年四月告示第六十九号を以て其の名称、位置を告示し大正十一年六月府令第三百三十九号を以て図書館規則を公布し今日に至りしが本年五月六日の戰災に罹り館舎は全焼し圖書四分の一を焼失せり。

第四章 援護事業

第一節 概況

本島に於ける社会事業は既に清國政府時代に於て救護救療育兒等の施設ありたるが、改隸後我政府に於ては之を再興し更に各般の施設を奨励し民生の安定に資したり。支那事変以後軍人、軍属の遺家族等の援護事業は急速に整備拡充せられ、更に大平洋戰爭以後戰災罹災者、疎開者及島外より引揚たる避難民の援護に遺憾なきを期したり。以上の事業は台湾総督府及地方廳に於て実施する外各種社会事業團體、軍事援護諸團體に於ても夫々事業実施中の処本年七月八日之等諸團體を統合し財團法人台湾援護会設立せらるゝに至れり。

第二節 社会事業

本島に於ける社会事業は明治三十年時の兒玉総督諸般の調査を進めつゝある際、英照皇太后の御大喪に當り慈惠救済資金御下賜あり、茲に在來の各種慈惠的施設を併合按配し、右御下賜金を頒與して各々其の基本財産として各慈惠院を設置し救済及救療施設として發達したるものにして其の後、本府の指導に依り方面事業、救護事業、經濟保護事業、医療保護事業、兒童及婦人保護事業、教化事業及聯絡調者並助成機關等各部門に亘り普及發達し、其の施設數別表の如く二千有余を數ふるに至れり。

一、方面事業 方面委員制度は大正十二年創立せられ、其の後全島各市街庄に普及整備せられ、其の成績顯著なるものあり。現在に於ては設置市街庄九箇所、委員数三、三四人、一年間の取扱件数約四十万件に上れり。

二、救護事業 救護事業の主なるものは窮民救助、罹災救助、行旅病人及行旅死亡人取扱等にして概況左の如し。

(イ) 窮民救助 明治三十二年施行の台湾窮民救助規則に基き州廳費を以て食糧費、被服費、治療費等を支出救助す。右の外市街庄及私設團體に於て経費を計上し救助に努めつゝあり。

(ロ) 罹災救助 罹災救助は台湾罹災救助基金規則に基き各州廳に設定したる土地、建物、有價証券及預金等の收入を以て之を行ひ、本府は之を指導監督す。

(ハ) 行旅病人及行旅死亡人取扱 行旅中の病人死亡人及其の同伴者の救護に關しては府令「行旅病人行旅死亡人及同伴者取扱方」に依り州知事廳長に於て救護に遺憾なきを期しつゝあり。

三、經濟保護事業 經濟保護の主たるものは公設質舖、簡易宿泊所及低利資金、住宅保護等にして其の概況左の如し。

(イ) 公設質舖 公設質舖は大正九年府令「公設質舖業務規則」に依り台北市に創設せられ、漸次全島に普及し現在設置箇所十六にして何れも経営主体は市又は街とす。

(ロ) 宿泊保護 全島を通して公私營簡易宿泊所数七、無料宿泊所十五あり、何れも細民階級並無宿者に対し宿泊所を提供しつゝあり。

(ハ) 低利資金 公設質舖資金其の他の社会事業資金及住宅建築資金に對しては台湾總督府に於て大藏省預金部の

低利資金を供給方斡旋しつゝあり。

(ニ) 住宅保護 庶民及勞務者の住宅難を緩和する爲、現在台北、基隆、新竹、台中、台南、高雄、屏東の各市に市営住宅を設置するの外、公共住宅五一あり、又高雄市漁民アパートを建築し、海上生活者の住宅保護を爲しつゝあり、尙勞務者其他庶民の住宅供給を図る目的を以て昭和十七年一月台湾住宅營團なる特殊法人の成立を見、本島に於ける國民生活の安定確保を期しつゝあり。殊に太平洋戰終戦後の今日戰災罹災者並に復員者に対する住宅の建設供給は目下焦眉の急を要するものにして特殊使命を有する本法人の活動を促しつゝあり。

四、医療保護事業 医療保護を一般医療保護と特殊医療保護に分つ。

(イ) 一般医療保護 島各慈惠院に於ては施療券を發行し、施療を爲すと共に医療の便少なき地方には適宜囑託医を派して巡回診療に依り施療を爲し、其の成績見るべきものあり。右に對し國庫より毎年補助しつゝある外、官立医院に於ても亦貧困者に對し施療をなしつゝあり。私設の施療施設として馬偕医院日本赤十字社台湾支部医院、日本赤十字社台湾支部高雄州部高雄診療所、林本源博愛医院、彰化基督教医院、台南新樓病院、佛教慈愛院等あり。

(ロ) 特殊医療保護

(1) 結核療養所 官立松山療養所、台北、新竹、台中、台南各州立療養所、日本赤十字社台湾本部並に台南新樓病院ありて何れも輕費並に施療にて診療に従事す。

(2) 癲病院 官立樂生院あり。私設團體樂山園と共に癲患者の治療を期し居れり。

(3) 精神病院 官立養神院並に私設團體として台北市中村養浩堂医院、台南市永康莊医院及台北、台中、高雄の

各慈惠院に之が設備を有す。

五、児童及婦人保護事業

(1) 保育及育兒 兒童保育施設として常設保育所及季節保育所あり、別に託兒及育兒施設として基隆愛隣園、鎌倉保育園台北支部及高雄孤兒院等あり。

(2) 不具兒童教育 台北、台南に各州立盲啞學校ありて盲啞教育に従事す。

(3) 妊産婦保護 本島に於ける乳幼兒死亡率高率に鑑み台湾總督府に於ては多年に亘り市街庄に勸奨して公設産婆を増設すると共に産婆の養成及再教育を爲し、技術の向上を図りつゝあり。近年全島各市街庄に概ね普及し其の成績亦見るべきものあり。

(4) 少年保護 兒童感化教育として官立少年救護院として成徳學院ありて不良兒の感化教育に努力しつゝあり。

六、教化事業 教化事業として矯風事業習俗改善隣保事業、人事相談部改善及釈放者保護事業等あり、各々組織的經營と適切なる指導とに依り斯業の發達に寄與しつゝあり。

七、社会事業助成團體 連絡機關として財團法人台湾厚生事業協會、財團法人全台湾方面委員聯盟、助成機關として恩賜財團明治、大正、昭和の三救済會ありて本島社会事業振興のため聯絡研究獎勵及助成を成し來りし処、本年七月八日を以て何れも財團法人台湾援護會に統合せり。

第三節 軍事援護事業

(一) 軍事援護の概況

本島に於ける軍事援護は大正六年軍事援護法の施行に始まり昭和六年の入營者職業保護法次で同十二年に施行されたる軍事扶助法を基とし、軍事援護事業を実施し來りしが一方十二年九月一日軍事扶助委員會を結成し、應召軍人家庭の調査、扶助、慰藉及軍事援護團體との連絡並に之が指導に當り又各地方に於ても夫々軍事援護團體を設立したりしが翌昭和十三年十月三日軍事援護に関する勅語の聖旨を奉体して恩賜財團援護會の創設せらるゝや、本島に於ても既設の援護團體を統合し内地本會の支部として同十五年一月六日恩賜財團軍事援護會台湾本部の設立を見、尙其の下部組織として各州廳に支部を各市郡に分会を設置し、更に其の下部に市街庄銃後々援會を設置し國の行ふ援護事業と併行して軍事援護の強化徹底を期し居たり。然るに大平洋戰爭の勃發並に昭和二十年より本島に徴兵制実施に依り援護対象者の急激なる増加に伴ひ本府に於ては所要經費を本年度予算に計上して機構の拡充整備を爲すと共に援護業務の迅速適正を図り、官民協力一体となりて本事業の推進以て其の完璧を期しつゝありしが、戰時援護業務愈々複雑多岐を極め來りしを以て府援護課の独立と既設援護諸團體の統合を行ひ、彼我表裏一体援護事業の企劃運営を爲しつゝありたり。

(二) 國の行ふ軍事援護事業

國の行ふ軍事援護は軍事扶助法の施行、即ち戰歿遺家族に対する生活、医療、助産、生業、埋葬の各扶助を始めとし戰歿軍人遺兒育英事業、戰歿軍人軍屬傷痍軍人及入營應召軍人子弟に対する學資給與、戰歿者遺兒委託教養、傷痍軍人軍屬に対する療養、傷痍軍人の委託教養、職業教育費の給與、地方廳及軍事援護團體及傷痍軍人會に対する事業

費の補助等を爲しつゝあり。

(三) 地方廳及團體の行ふ軍事援護事業

地方廳及援護團體に於ては軍事扶助法には該當せざるも援護の必要ある軍人軍属の遺家族に対し法に準じて各種の扶助を実施するは勿論、遺家族住宅を建設して之を供與し、授産所、託兒所を設けて其の生計の資たらしめ軍事援護相談所を全島七十一ヶ所に設置して諸相談に當らしめ常に物心両面の援護に當りつゝあり。

(四) 最近新に実施せる援護事業

疎開軍人軍属遺族の疎開先に於ける実情を精査し、生活扶助の徹底を期し、健康状態に留意し地方の医師をして巡回診療を爲さしめ自活態勢確立の爲に自給農園を経営せしめ、受入街庄に於ては耕地の斡旋、開墾の援助農器具の購入斡旋等を爲し之等遺家族の援護の万全を期せしめたり。

第四節 戦災援護事業

本島に於ける戦災援護は昭和十七年戦時災害保護法の施行に始まる。本法は戦争の遂行に依り起り得べき災害に依り危害を受けたる者、並に其の遺族家族を應急的に、又は一定期間継続的に保護し以て其の厚生に便ならしむることを目的とし戦災者に対し(一)收容施設の給與(二)焚出其他に依る食品の給與(三)被服寝具其他生活必需品の給與及貸與(四)医療及助産(五)学用品の給與(六)埋葬(七)前各項の外、地方長官に於て必要と認むる救助を実施せんとするものなり。昭和十九年十月本島空襲に因り各地に多発の災害並に昭和十八年三月以來の敵潜水艦に依

る海上危害に対しては夫々適切迅速なる方途を講じ不足物資の補給医療機関の活動に依り保護に遺憾なきを期せり。

(一) 保護費の前渡配布

昭和十九年度保護費は総額一、四六三、二九五円にして昭和二十年度に於ては其の所要額、概ね二千万円に達する見込みなり。仮設住宅の建設、昭和十九年度に於ては全島十三市街に対し、其の総人口の百分の二を收容する用途を以て五、九二〇戸の建設計画を樹立せるも、災害の多発により非常建設の必要生じ、昭和二十年八月迄に台北州六一〇戸、新竹州四〇〇戸、台中州六九五戸、台南州一、〇三二戸、高雄州五、八二〇戸、台東廳一一八戸、花蓮港廳六〇戸の建設を了し收容中なり。

(二) 救恤御下賜金の傳達

天皇皇后両陛下より戦災者御救恤のため御下賜金の御沙汰を拜し、前渡御下賜あらせられたるに依り、五月十六日該当者五八六人に對し傳達し目下六二八人に付第二次傳達の手續進行中なり。

第五節 島外よりの避難民援護

昭和十九年太平洋方面の戦況緊迫熾烈化するに及び、同年七月南洋群島(主としてパラオ)及沖縄縣の住民を本島に引揚避難せしむることに中央の方針決定し経費は國庫より十九年三、〇四二、五八六圓、二十年度一、八〇〇、五〇九円を支弁することとなり、本府に於ては之が受入保護要綱を決定し共助会を組織し諸般の態勢を整へり。南洋群島避難民は昭和十九年五月十九日第一次の引揚以來本年一月迄七回一、五七九名を、沖縄縣避難民は昭和十九年七月

二十七日の引揚以來、本年五月迄五回一二、四四七名を受入れ主として公会堂、國民學校、俱樂部等に收容し職業輔導、生活扶助、医療、就学就職の斡旋等に遺憾なきを期せり。避難民中稼働力なき者一人一日五十銭の扶助支給をなし、稼働力ある者に対しては努めて就職せしむること。その約五〇%九七五名を就職せしめ、收容所の附近に蔬菜園を設け、蔬菜の自給自足を図ると共に其他食料品、衣料、寝具の特配、学用品の給與、授業料の免除等各般の援護に万全を期せり。尙引揚者は年齢十四才未満、附添の母親、六十才以上の老人、病人、不具者、妊産婦等なるを以て之等の医療に付ては当初より留意し、收容所を健康地に選び、予め嘱託医を配置し之が医療援護に努めたるも全島的に流行せるデング熱、麻疹、マラリアに冒され不幸病魔の犠牲者を出せり、現在に於ては一段と援護の万全を期すべく避難民名簿の作成、疎開引揚証の下附等により其の掌握の確実を期しつゝあり。

全島援護事業一覽表

事業種別	総数	台北州	新竹州	台中州	台南州	高雄州	台東廳	花蓮廳	澎湖
一般團體	1,957	321	255	591	347	370	28	36	9
聯絡並に調査研究機關	26	7	3	4	3	4	—	3	—
方面事業	244	38	38	59	65	35	1	6	1
助成團體	166	21	16	41	65	21	—	2	—
救護事業									
窮民救助	271	52	40	63	59	54	1	1	1

行旅病人及行旅死亡人取扱	8	1	1	1	1	1	1	1	1
罹災救助	8	1	1	1	1	1	1	1	1
經濟保護事業									
職業紹介	5	2	—	1	1	1	—	—	—
授産	5	—	1	1	2	1	—	—	1
宿泊保護	22	5	1	7	3	4	—	2	—
住宅供給	51	8	15	11	3	13	1	—	—
公設浴場	38	11	—	9	13	2	1	2	—
海水、水浴場	35	13	7	6	4	3	1	1	—
公設質舖	16	5	2	4	2	2	1	—	—
小資融通	11	3	1	1	2	—	4	—	—
医療保護事業									
一般医療保護	43	8	12	4	2	12	2	1	1
特別医療保護	23	7	—	2	3	1	—	—	—
兒童保護事業									
少年教育	1	1	—	—	—	—	—	—	—
不具兒童教育	2	1	—	—	1	—	—	—	—
保育園及託兒所	490	7	71	260	4	145	2	1	—
健康相談	5	2	—	2	1	—	—	—	—
兒童遊園	4	1	1	1	1	—	—	—	—
公設産婆	154	27	11	59	39	13	2	3	—

教化事業	11	5	1	1	6	1	1	1	1
矯風事業	74	14	11	15	14	11	4	5	1
司法保護事業	5	1	1	2	1	1	1	1	1
隣保事業	14	1	1	9	4	1	1	1	1
人事相談									
軍事援助事業									
軍人援護相談所	71	14	10	14	13	10	4	5	1
授産所附託兒所	12	2	1	2	2	2	1	1	1
遺族住宅	145	38	11	12	30	34	1	1	1
宿泊所	3	2	1	1	1	1	1	1	1

第五章 情報宣傳及文化

第一節 新聞及出版

本島に於ける新聞は明治三十三年台灣日々新聞を嚆矢とし、爾來本島文化の向上と自由主義的風潮の昂揚とに依り漸次隆盛となり、昭和十二年日支事変勃發前に於ては日刊紙五（事変後高雄新報許可され六紙となる）週旬月刊紙は四十紙を數ふるに至れるも事変後に於ては逐次減少したり。

之より先、日刊、週、旬刊紙等も和文の外、漢文欄を設け居たるも、始政四十週年を經過せる今日、本島の皇民化の顯

著なる進展に伴ひ國語解者は優に六十%を越ゆるに至りたるを以て昭和十二年四月一日を期し、台灣日々新聞、台灣新聞、台灣日報、東台灣新報各社は（與南新聞は六月一日）漢文欄の廢止を申合せ之を實行せり。他の新聞紙に於ても逐次之を廢止したる結果、現在漢文欄の新聞紙なし。然共、太平洋戦争開戦後に在りては用紙の生産需給漸次不円滑となりたるのみならず、島内の六日刊紙を統合し人的、物的の機構を整備し、輿論の統一宣傳報道の強化を図るべく、以上日刊六社を台灣日々新聞社に吸収統合し本社を台北に台中、台南、花蓮港に各支社を設け昭和十九年四月一日より各本、支社に於て同一題号の台灣新聞を印刷發行するに至れり。其の他、週、旬、月刊紙等も用紙不足の爲暫定的休刊を見るの止むなきに至り、現在發行繼續中のものは日刊台灣新報（發行部數十六万七千部）及日刊食糧經濟新聞（三千部）の二種のみなり。其の他定期刊行物並に一般出版物に在りても用紙不足の現況に鑑み自ら休刊、發行を遠慮するものもあり、單行本等は全く發行を見ざる現状なり。

第二節 映画、演劇

一、從來映画演劇の自由契約をなし居りたるものなるが斯くては、本島興行は内地映画製作会社又は興行会社の隷屬的地位を脱却し得ず、島内劇場及劇團の經營は益々困難となりたるを以て本島業者は内地大資本業者への對抗策として昭和十年より島内に於ける映画、演劇の一元配給機構の設立に着手、同十七年三月株式会社台灣映画演劇配給社（資本金五十万円）を設立し本島に於ける配給權を獲得したる結果、爾來劇團と劇場は勿論配給社も順調なる經營を辿り今日に至れり。

二、興行場及劇團の状況

昭和十九年末に於ける全島興行場は一五九館、映画専門のもの三〇、演劇専門のもの五九館にして其の他は併用のものなり。台湾劇團は四七團にして、内七團は人形劇團なり。然るに本年初頭より爆撃の被害により劇場及劇團も急激に減少せるが終戦以來漸次復興し居れり。

三、從來各官廳に於ては文化向上、民衆指導の爲映画事業を実施し來りたるが之等に分散せる映画製作配給機構を綜合統一して飛躍的映画政策の發展強化を図るべく昭和十六年九月「台湾映画協会」を設置、各州廳の「各州廳映画協会」と連絡しつゝ農山漁村等巡回映画の運営、官廳、学校、團體への映画配給及文化映画、報道ニュース映画の製作に当る。現在まで毎月台湾映画月報を編輯上映する外、文化映画を製作せり。

四、藝能文化事業

非興行による島民娛樂、特に農山漁村に対する慰安娛樂の提供は本島文化昂揚の爲、最も必要と認められたるを以て昭和二十年五月映画、演劇、演藝、紙芝居、音樂等各機關の合作経営による「台湾藝能報國會」を設立せり。現在同会に於ては移動演劇班二、移動映写班三、移動音樂班一、移動人形班三を有せり。

第三節 放送

台湾に於ける放送は昭和三年の実験放送時代を経て昭和六年二月台北放送局開設により本格的放送に入り、昭和十七年十月二重放送を開始するに至れり。本島の放送事業は設備業務共に官營であつたが、昭和六年二月台北放送局開

設と共に台湾放送協会を設立し、左の三項を委託運営せしめつゝあり。

一、聴取者の勧誘 二、放送者の依頼 三、放送番組の編成及実行

尙放送事務の指導監督は從來通信部の專管なりしも情報課の設置に伴ひ技術、経営、人事檢閲は通信部に於て放送内容は情報課に於て指導監督する共管制となれり。

(1) 放送局

台北 JFAK 台南 JFBK 台中 JFCK 嘉義 JFPK 花蓮港 コールサイン未定

(2) 放送内容

A 島内放送

第一放送（内地人及日本語を解する本島人を対象とす）

第二放送（台湾語、福建語、廣東語により本島大衆を対象とす）

※ 最近は第一、第二の區別を廢止せり。

B 海外放送

1 内地よりの中継により佛印、泰、ビルマ向放送す。

2 台湾に於ては南支南洋向け福建語、廣東語、北京語、安南語等の放送をなす。

3 内容は同盟通信の翻訳放送にして具体的方針は日本放送協会の指針による。

第五編 兵事及國民動員

第一章 兵 事

第一節 志願兵制度

一、志願兵制度実施前の状況

台湾本島人に対する兵役制度実施に關しては昭和八、九年頃より台湾人有識者間に於て之が要望を爲すものありたるも纏りたる運動に至らず昭和十三年一月朝鮮に志願兵制度実施の旨發表を見るや、本島人有識階級に於ては後雁先行の感あり、其の舉に晏如たるを得ずとし実施要望俄然熾烈となれり。然るに總督府としては島民自体に於て資質鍊成に邁進すべき旨を諭すと共に当局の処断に信賴すべく指導し來れり。従つて表面上何等特記すべき現象なかりしも本島人間に於ては逐次深刻なる關心と熱意を以て期待されつゝありしものなり。

二、陸軍特別志願兵制度

陸軍特別志願兵制度は昭和十七年四月一日より本島に施行せられたり。而して陸軍特別志願兵として兵籍に編入せらるゝ者は本制度の爲特設せられたる總督府立陸軍兵志願者訓練所に入所し、此の課程を修了することを條件としたるを以て訓練所生徒志願者は即ち陸軍特別志願兵志願者となるものなり。昭和十七年度に於ては多数志願者の中より年令身体學歷等を考慮し嚴選の結果尅千余名を採用し、其の半数を前期生として入所せしめ、修了者は現役兵に他の半数は後期生として入所せしめ修了者は第一補充兵として兵籍に編入せられたり。亦昭和十八年度に於ては尅千余名

を昭和十九年度に於ては貳千貳百余名を夫々採用し、其の半数宛を前期生後期生に区分、其の修了者を現役兵、第一補充兵の兵籍に夫々編入せられたり。右の外高砂族のみの陸軍特別志願兵を昭和十八年度に於て五百余名、昭和十九年度に於て八百余名採用せられたるを以て本制度実施後現在に至る迄の陸軍特別志願兵総数は約五千余名なり。年齢は十九才より二十三才迄を主とし、最低十七才、最高三十才なるも其の数は極く少数なり。職業的に見るときは農業、官公衙、各種団体の雇員事務員及街庄職員職工等の順位にして学歴は國民学校初等科修了者を首位とし、同高等科修了者之に次ぎ中等学校以上卒業の学歴を有する者若干あり。本制度は本島徴兵制施行に伴ひ、関係法令改正せられ総督府立陸軍兵志願者訓練所も本年三月を以て廃止せられたり。

三、海軍特別志願兵制度

海軍特別志願兵制度は昭和十八年八月一日より本島に実施せられ、総督府立海軍特別志願者訓練所の課程修了者を海軍兵籍に編入し海兵團に入團せしむるの要領は年齢十六才より二十四才未満の者が適格者たる以外は概ね陸軍特別志願兵制度の場合に同じ。昭和十八年十月第一期生として屯千名を、翌昭和十九年四月第二期生として貳千名を訓練所に入所せしめたり。爾後海軍特別志願兵令改正せられ、海軍特別志願兵は訓練所の課程を経ることなく、徴募採用せられたる者は直接海兵團に入團することとなりたるを以て海軍兵志願者訓練所も昭和十九年七月廃止せられたり。本制度実施以來海軍兵籍に編入せられたる者は約屯万屯千余名に及べり。

第二節 徴兵制度

太平洋戦争の進展に伴ひ昭和二十年度より台湾に本籍を有する者にも兵役服務の制を設けられたる爲、昭和十九年度より之が準備を進め昭和二十年一月全島一斉に徴兵検査を実施せり。其の結果受験者総数四五、七二六名中甲種四、六四七名。一乙一八、〇三一名にして其の大部分は現役兵として入營せり。

第二章 國民動員

第一節 概況

一、支那事変勃発（昭和十二年七月）以前
支那事変前に於ける本島産業は米糖部門は固より鉱工業部門に於ても発展の途上に在りたりと雖も、之が主流は依然として農業を基本とする原始的輕産業且季節的産業なりしを以て所要勞務者も専門的技術を要するもの尠く、自ら労働市場發生の予地なく其の大部分は半農、半工的勞務者にて何等支障なく事業を經營し來りたるものにして勤勞動員行政に関し何等の措置を講ずるの必要を認められず自然放任の状態に置かれたり。

二、支那事変より太平洋戦争勃発（昭和十六年十二月）以前
（イ）満州事変前後の吾が國工業の發達、更に支那事変の進展に伴ふ急速なる工業の勃興は本島工業界も当然其の余波を受け、特に本島の地理的軍事的特殊事情は鉄鋼、電力、輕金屬、非鉄金屬、無水酒精、高級燃料、鉄道車輛、セメント、苛性ソーダ、船舶等所謂生搦産業の急速なる新設又は拡張計画の實施せらるゝに至りて工場勞務者数も満

州事変勃発の昭和七年に於ては六万人なりしが支那事変当初の昭和十二年には八万七千人となり、四割五分を増加し太平洋戦争に突入したる昭和十六年には十三万七千人に及び昭和七年の倍数となり、其の後尙毎年の新規需要は約二万人を算したり。

(ロ) 前述の工業の勃興に伴ふ労務者の増大の外、本島労務事情に特に注目すべき影響を與へたるは昭和十四年十月高雄州下に起工を見たる海軍特殊工事なり。本工事に所要せらるゝ労務者は土木建築関係労務者にして其の初期に於ては当時必要労務者は毎日僅かに、三〇〇名内外に過ぎざりしが供出及管理を官に於て実施することとなりたるは其の後の本島勤労働員の動向を示すものとして注目すべき現象なり。而して本工事は其の後漸次規模を拡張し毎日稼働者は六千人に及べり。

(ハ) 斯る急速なる労務者の増加は労働市場を有せざりし本島労務事情に相当の混乱を招來することとなり、一方鉱工業方面に於ても法令に依る毎年三千名余の技能者養成を爲し、且鉱工関係学校卒業者六百余名を供給し來りたるも從來其の給源の殆んど總てを内地に仰ぎ來りたる高級中堅技術者に不足を生じ、次いで熟練工の争奪、未経験工の登場となり、賃銀の昂騰労務者移動に依る能率の低下等本島産業界にも漸次労務事情の混乱を惹起するに至れり。

三、太平洋戦争勃発後

(イ) 太平洋戦争勃発に依り戦力増強の要請は本島工業の飛躍的發展を齎らすに至り、本島工業の軍需工業化並軍作業廳の拡充は愈々鉱工専門労務者の需要を増大し重点配置方策の要緊要となり、一方十万余名に及ぶ南方各地域に於ける軍設營隊員、軍政要員の派遣、日本内地に於ける兵器廠要員の送出等相次いで起り、更に戦局の進展は本島防

衛強化工事の本格的着手となり、昭和十九年四月以降に於ては飛行場、軍用道路其他軍特殊工事の激増するあり、更に兵役法の実施、空襲の激化等に依り島民の移動常ならず同年半ば頃より島内労務事情は漸次不円滑なる様相を露呈し勤労働員に当りても給源把握に困難の度を加ふるに至れり。

(ロ) 而して昭和十九年十二月一日現在に於ける産業別勤労働者の分布状況は別表の通にして総数の五割六分は農業従事者を以て占め他産業部門よりの動員可能者は絶対量の僅少なる上に其の職業の性質上殆んど問題視得ざるの状況に在りたり。而も需要の大半は土木建築従事者にして身体強健なる者を必要とし、従つて動員対照は必然的に主流を農業部門に指向せらるゝの結果、食糧増産と勤労働員との調整は最も緊要なる重要問題となれり。

更に昭和十九年末頃よりは需要は益々増加し一日実動員数二十七万乃至三十万人に及び工事内容の交移するに伴ひ軍要員動全員は農業部門のみならず他産業部門との調整を更に強力に実施するの必要に迫られたり。

第二節 國民動員

一、島外への勤労働員

支那事変勃発直後中支方面に於ける農業要員一千余名の派遣要請南方各地に於ける設營隊員、軍政要員の需要は戦域の拡大に伴ひ、漸次増大し更に日本内地工業要員の不足は本島に迄其の給源を求むるに至りたるも昭和十九年七月以降國民徴用令の全面的発動に至る迄は南方派遣の石油関係技術者六百余名を除き総て募集の方法に依るか、又は行政的措置に依り之を選出し來り現在猶海外残留者は左の通り。

イ、南方各地 九二、七四八名（内徴用に依るもの 五、八七〇名）

ロ、日本内地兵器廠 八、四一九名（國民學校修了者又は中等學校卒業者なり）

二、島内動員

イ、前述の如く太平洋戦争勃發前迄の動員は本島勞務事情に数量的にさしたる影響を與ふること無く、昭和十四年十月着工せられたる高雄海軍特殊工事を初とし、昭和十九年四月以降多数軍工事要員の動員せらるゝに及び、動員及管理方法等に急激なる変革を來し、昭和十九年七月以降に於ては從來の行政的措施に依る動員に併せ独り鉦工部門のみならず、廣く交通運輸、土木建築部門要員確保に付きても國民徴用令の發動を見るに至り、更に動員管理の円滑、事業の完遂に十全を期する爲、昭和二十年二月には台灣護國勤勞團令に基く台灣護國勤勞團勤勞隊組織に依る動員管理措置を採る事となり、現在に及び軍特殊工事其他緊要なる業務に従事する勤勞者一日実動員数は二十七万乃至三十万人にして此の内台灣護國勤勞團隊員として隊舎に收容し勤勞を爲しつゝありし者約五万人、他は地元民の通勤隊組織に依り本島防衛強化工事に精勵したり。

ロ、鉦工業 交通運輸業等に於ける従業者は別表國民登錄集計表に示す如くなるも内徴用人員七一、九〇九人にし事業主統率の下各生産陣營に邁進せり。

三、戦争終結後に於ける國民動員事務

一日三十万人に及ぶ動員に依り防衛強化工事其他緊要業務に邁進し來りたる本島も終戦に伴ひ軍特殊工事は一斉に作業を中止し、逐次事後整理の終了を俟つて勤勞者全部を歸郷せしめたり。而して右要員の殆んど大部分は農村出身

者なりしを以て歸郷後に於ける生活には何等考慮を要するものなく、且之が動員方法も一日、交替を以て実施し來りたるを以て復員も極めて迅速円滑に行はれたり。一部専門土木建築業者に隸属せし従業員も復興工事等に夫々の活路を見出し居り、之等特殊工事以外の各産業部面に於ては工鉦業に於ける爆撃を受けたる事業場に於ては終戦前に於て已に従業者は夫々の職業に就き、作業継続中なりし事業場は終戦後一時休業したるも其後活潑に操業開始せるもの又は將來の見透判然たらざる爲見送中のもの何れも現在に於ては従業者にさしたる動搖なく、平靜なる狀況なり。然し乍ら終戦後に於ける社会及經濟の変動は今後に於ては經濟社会各方面より輩出することあるべき離職者、失業者の職業斡旋生活安定の方途を確立実施すること最も緊要なる要務にして目下之が方策を慎重考究中なり。即ち勤勞対策に付ては國家權力に強力なる動員を目的とする國民登録制度、手帳制度、配置の國營徴用等の戦時統制は總て之を廢止することとし、専ら勤勞管理職業斡旋に類する事項のみを存続運営しつゝあり。

第三節 國民動員行政機構

前述の如く戦前勞務の低廉豊富を称へられ、何等勤勞行政を必要とせざりし本島も事情の変轉に依り勞務統制の必要に伴ひ当然官廳機構の整備を行ふ事となり、本島に最初に施行せられたる勞務統制法規たる學校卒業者使用制限令公布の昭和十三年八月、總督府に在りては殖産局商工課工業係、州廳に在りては内務部勸業課商工係に若干の職員を配置せり。昭和十六年一月に至り總督府企画部に勞務課を、地方に於ては産業部經濟統制課に勞務係を設置、其の後總督府は総務局勞政課と改変せられ、昭和十八年十二月に至り總督府鉦工局に國民動員課を各州総務部に國民動員

課、各廳総務課に國民動員係、各市郡に國民動員課又は國民動員係を、街庄にも國民動員專任職員を配置し、今日に及べり。尙官廳動員系統と表裏一体となり、動員操作の円滑を期する爲、其の中核体として台灣護國勤勞團を設立、官廳動員事務に全面的に協力せしめ來りたるも本團の沿革は昭和十四年十月海軍に於ける特種工事所要勞務者の斡旋管理を目的として高雄州に設置せられたる高雄州勞務協會を該工事の需要勞務者の増加に伴ひ之が斡旋管理を總督府に於て行ふこととし、昭和十五年八月總督府殖産局商工課内に台灣中央勞務協會を設置、更に同年十月各州にも夫々勞務協會を設置せしめ高雄市庄營に於ける海軍特殊工事の遂行に協力すると共に陸海軍よりの要請に基く南方勤勞要員の供出並に島内工業事業場の産業奉公運動の指導實踐に當らしめたるが、本島皇民奉公の一元化の爲昭和十八年二月勞務協會の組織名称を改め産業奉公會とすると共に皇民奉公會の傘下団体となり、官廳外廓団体として國民動員行政に協力し來りたるも昭和二十年二年前述事情に依り台灣護國勤勞團の設立に伴ひ産業奉公會は其の事業資産を総て引継ぎ現在に及べり。

第四節 應徵者援護

國民勤勞動員令及國民徵用令に依り應徵用せられる國家の要請する重要業務に従事する被徵用者中には家族と生活を分離し、且必ずしも應徵前の收入確保を期し難き者、又は應徵中傷病を受け、生活困難を來す者あり、之等をして後顧の憂なく挺身勤勞に従事せしむる爲、國家は國民徵用扶助規則を制定、生活扶助、医療、助産、生業扶助及埋葬費等の援助を爲すこととし更に國の援護の及ばざる部面の援護を期し、昭和十九年九月財團法人台灣徵用援護會を設

立し官民協力、應徵士並に應徵士たりし者及其の家族遺族の援護を爲し來りたり。其の後島内に於ける軍工工事の増加に伴ひ徵用者のみならず勤勞協力に依り動員せらるる者激増し來り、之等に対しても主に傷痕死亡等に付、援護の必要を認め前述國の行ふ國民徵用扶助規則を昭和二十年五月國民勤勞扶助規則と改正、同時に台灣徵用援護會の援護対象も廣く勤勞協力者にも及び以て援護の完璧を期することとせり。而して國民勤勞動員扶助規則及台灣徵用援護會に於て援護を実施せる者現在迄に四、五一六件に及べり。

國民登錄者集計表 (昭和 19 年 10 月 1 日現在)

産業別	總 数		地 人		本 島	
	男	女	男	女	男	女
農 業	967,721	766,952	200,769	1,703	1,386	317
農業 { 其の他の農業	94,915	72,652	22,263	657	574	83
計	1,062,636	839,604	223,032	2,360	1,960	400
水 産	44,029	40,481	3,948	12,772	11,396	1,181
鉱 業	12,627	11,415	1,212	533	454	79
金属機械、器具製造	16,049	15,073	976	661	524	107
化学工業	13,748	11,159	2,393	1,042	865	177
ガス、電気、水道	5,661	5,166	495	1,620	1,363	257
窯業及土石工業	7,939	6,912	1,027	267	219	48
紡 織 工 業	12,105	6,035	6,070	541	334	207
製材及木製品工業	18,847	17,333	1,514	421	374	47

六四

食料品工業	28,569	23,661	4,908	3,010	2,507	501	25,559	21,152	4,407
印刷製本	5,410	4,077	1,333	326	260	66	5,084	3,817	1,267
土木建築	31,619	30,734	885	1,614	1,483	131	50,005	29,251	754
其他	30,441	17,883	12,558	765	.619	146	29,676	17,264	12,412
計	1,703,888	138,029	32,359	10,267	8,580	1,667	160,121	127,449	30,672
商業	88,005	69,267	18,738	8,081	4,153	3,928	79,924	65,114	14,810
交通	36,983	35,953	2,980	2,722	2,132	590	36,211	33,821	12,390
自由事業	54,529	42,936	11,593	4,664	3,077	1,587	49,865	39,859	10,006
家計	29,747	3,027	26,720	903	81	822	28,844	2,946	25,898
其他の産業	68,045	50,429	17,616	296	163	153	67,749	50,266	17,483
公務	77,346	61,921	15,425	21,472	16,347	5,125	55,874	45,574	10,300
学生	65,149	44,047	21,102	23,583	13,410	10,173	41,566	30,637	10,929
無業	92,935	35,687	57,248	4,690	1,338	3,362	88,245	34,359	53,886
重要工場事業場従業者	88,004	76,537	11,467	9,269	7,735	1,534	78,735	68,802	9,933
計	1,892,373	1,449,333	443,040	101,617	71,016	30,601	1,790,751	1,378,317	412,433

第三章 戦時に於ける國民運動

第一節 皇民奉公会

戦時下國家総力を發揮し戦力増強に遺憾なからしむる爲には國民の積極的協力と時局の熱意を俟つに非ざれば之が

一、本會の組織は、昭和十六年内埔人、本島人、高砂族の全島民を挙げ官民一体の國民運動として皇民奉公会を組織せしむることとし、其の組織として皇民奉公会を結成せり。爾來皇民奉公会は「台灣一家」の理念の下、健實な實踐を推進することを目標とし、特に其の重点が戦意の昂揚、決戦生活の實踐勤勞態勢の強化、民防衛の完遂、健民運動の推進に置き、活潑なる活動を展開せり。皇民奉公会の組織は總督府行政機構と表裏一体となり、其の各層の指導者を網羅する如く配置せり。

(一) 中央本部

中央本部長（總務長官に當る）の下に事務局を置き別に運営委員会、中央実践協力會議、地方事務局連絡會議を附置し事務局各委員には軍官民の中より適材を簡拔委嘱せり。

(二) 地方組織

地方組織として支部を各州廳に置き支会を市郡に、分会を街庄に置き更に其の末端組織として区会部落会奉公班の系統組織を編成し、之に地方官民指導者を配し以て全島に組織網を布けり。

特に部落会及奉公班は皇民奉公会の末端組織たると共に従前より存する保甲制度の妙味を活用し、隣保共同体として運用を図り島民相互扶助、行政施策の浸透にも多大の成果を挙げしめたり。

(三) 傘下団体

皇民奉公会には其の傘下団体として大日本婦人会、台灣青少年團、台灣産業奉公会、其他各種既存団体を従属せしめると共に本會運動の實踐推進隊として奉公壯年團を結成し、地方組織に於ても之に準ずる体制を整へたり。

斯くして皇民奉公運動は廣く民間有識有能の士の活用を重んじたる爲、本島指導有識層並に地方中堅層及青年層の共鳴を呼び、其の活潑なる活動の契機を與へ國民運動に清新の氣を與へたり。

第二節 國民義勇隊

戰局愈々急を告げ國土決戰の様相を呈するに及び之に対処する本島決戰態勢を確立する爲、構想を改め本年六月徹底せる官民一体隣保結束の下、本島防衛の實踐組織たらしむる爲皇民奉公會並に本島統治並に島民隣保共同体として多大の成果を挙げ來りたる保甲を解消し、之を基礎として國民義勇隊の結成を爲すことゝなれり。爾來中央地方を通じて義勇隊の編成組織に努め、更に「郷土の自衛」及「生産即防衛」の理念に基き其の實踐行動として食糧増産、マリア防遏を指令せられ、其の活動を展開せられつゝありたる秋、今次終戦を見るに至りたり。依つて國民義勇隊は結成日ならずして其の目的を喪失し、最早其の存続の要を認めざるに至りたるを以て近く解散を爲すことゝせり。

第六編 警察

第一章 保甲制度

第一節 概要

明治三十一年旧慣に倣ひ保甲制度を設けて（律令保甲條令）地方の安寧を保持せしめ、同四十二年保甲役員をして街庄区長の職務をも補助せしむることとせるが、昭和十八年末現在保数六〇七四、保甲数五八、三七八甲にして其の組織等左の如し。

（イ）組織

土地の状況種族の關係等に依り例外あるも原則として十戸を一甲、十甲を一保とし、尙市街庄の区域に一致せしむ。又必要に依り各保は聯合会を組織し關係事項を議することを得。

（ロ）役員

保には保正、甲には甲長あり公選の上、前者は知事又は廳長の認可を受け、後者は郡守支廳長警察署長の認可を受けるを要す。何れも名譽職にして各警察署長の指揮監督を受け保甲内の安寧を保持し、市街庄長の事務を補助す。

（ハ）規約

保甲は規約を定め知事、廳長の認可を受けるを要し、規約には各種施爲事項を定むるものにして特に褒賞並に過怠処分に関する事項は必ず之を定むることを要す。而して保甲規約に定むべき事項は訓令を以て規準を示しあり、其の

主要事項左の如し。

- (1) 戸口調査
 - (2) 出入者取締
 - (3) 風水火災土匪強竊盜の警戒捜査
 - (4) 地元保安林保護
 - (5) 傳染病獸疫害虫予防
 - (6) 阿片弊害矯正
 - (7) 道路橋梁の小破修繕及掃除
 - (8) 過怠処分及褒賞
 - (9) 経費の予算決算及賦課徴収
- (三) 経費

制限一戸平均一箇年六十銭以内(書記を置く場合は一円以内) 予算は所轄官廳の認可を受け決算に付ても報告を要す。経費は各戸の資力に應じ等級を定め賦課す。経費の主要なるものは事務費、書記費、壯丁会費同被服費なり。

(ホ) 連座責任及過怠処分

條例第二條に「保甲の人民をして各連座の責任を有せしめ、其の連座者を罰金若は科料に処することを得」と定む之れ即ち刑罰連座の制にして其の目的は主として犯罪隱匿を防止せんとするにあるものなるが、大正十四年以降本件

を適用したることなし。又保甲規約を以て保甲民中規約違反に依り過怠処分を受くる者ある場合に其の保民又は甲民連座の責任を負ふ者を定め今尙実行しつゝあるも其の適用は極めて稀少なり。之を即ち過怠連座をして素より條例第二條の刑罰連座と異ふるものなり。連座処分の概況左の如し。

(1) 保甲刑罰連座処分件数		大正 8 年		同 9 年	同 13 年	摘 要
		18		7	1	1 大正 7 年以前記録なし 2 大正 14 年以降記録なし

(2) 保甲規約連座処分件数		大正 9 年		同 10 年	同 11 年	同 12 年	同 13 年	同 14 年	同 15 年
		246		164	153	139	30	41	24
昭和 2 年	同 3 年	同 4 年	同 5 年	同 6 年	同 7 年	同 8 年			
67	4	11	5	2					
昭和 9 年	同 10 年	同 11 年	同 12 年	同 13 年	同 14 年	同 15 年			
1	4								

第二節 保甲制度の廢止

右の如くして保甲は警察の補助機關としてのみならず行政末端組織として、且隣保共同体として多大の成果を挙げ

來れるも本制度が本島人のみに適用せられる点、警察機関充実に來れる等の事實に鑑み本制度の廢止論議せられ、當府亦之が廢止に付検討を進めつゝありしが、昭和二十年六月十七日中央政府の外地同胞処遇改善の方針に基き之が廢止を實行せり。

第二章 理 蕃

第一節 種族人口竝に蕃地の面積

本島の原住民たる高砂族はタイヤル、ブヌン、サイセツト、ツオウ、パイワン、アミ、ヤミの七種族に分れ昭和十七年末現在一五九、五九四人あり、本島の総人口の約〇・〇二五弱に當り、其の自然増加は毎年一、五〇〇人位なり。之等高砂族中台東、花蓮港廳下に居住するアミ族の全部五万三千七百余人及各州廳との各種族を通したる一部の高砂族九千三百余人は平地、即ち普通行政地域に居住し稍々進化せるも其の他の大部分の高砂族は本島の総面積の四割四分強を占むる中央山脈地帯の特別行政地域なる蕃地内に居住し、從て充分現代文化の惠沢に浴し得ず、未だ古來の迷信陋習を固執する者少からず、理蕃行政上特殊の保護取締を加へ指導啓發に努めつゝあるは主として之等蕃地居住の高砂族なり。

第二節 理蕃方針と高砂族進化の現況

是等高砂族を如何に鎮撫し化育すべきかの対策に就ては領台各國が頗る苦心を累ねたる処なりしが、其の成果を見るべきものなかりき。我が領有当初に於ては専ら懷柔主義を以て化育に努めたるも兇蕃の反抗するもの年々多きを加へたるを以て蕃地を廓清して平靜を図るの要を認め、明治四十二年度より大正三年度に至る五箇年計画理蕃事業を実施し、反抗暴虐を極めたる兇蕃に対し積極的に討伐膺懲を加へ多数の銃器を押收せり。此の事業に於て多大なる人命の犠牲と巨額の國幣とを費したるも、幸に蕃地の平靜を確立し得たり。爾來当局は恩威併行主義を以て臨み、抗するものは之を制圧鎮撫し、帰服する者は之を綏撫して蒙を啓き、迷を解き専ら指導啓發に努めたる結果、全島の蕃情殆んど平靜に歸し、一視同仁の聖德に浴するに至り、其の進化は年を逐つて著しく、現在蕃地の高砂族にして教育所、公学校又は小學校を卒業したる者二万六千八百三十九人（死亡者を除く）あり、中には医學校其の他各種中等學校等を出て公医、其の他の官公職に従事し居る者尠からず、今や全く面目一新しつゝあり。惟ふに高砂族の性質は概して純情素朴なれば頑迷陋固度し難しとして敵視警戒し、或は無智蒙昧御し易しとして蔑視愚弄するが如き態度を排し導くに愛と信とを以てせば、必ずや悦服し純朴の民たらしむるを得べし。當府に於ては昭和六年理蕃大綱を定めて理蕃の根本を宣示し、理蕃機關の整備、職員の素質改善を行ひ、更に昭和十四年高砂族自助会々則標準、高砂族授産指導要目及高砂族社会教育要綱を定め高砂族指導開發上の要諦を明示し、専ら撫育に力を注ぎ以て之が化育と蕃地の開發とに努めつゝあり。

第三節 現下の一般蕃情

第一項 北蕃々情

本島の北部台北、新竹、台中の各州下及花蓮港廳下に分布する所謂、北蕃タイヤル族は高砂族中最も自負心強く、慍悍なりしが撫育教化の徹底により進化著しきものと雖も霧社蕃事件（昭和五年）及びスタン事件（昭和六年）を惹起したるは此の種族なれば相当留意しつゝあり、又本族中には土地礪确にして安住の適地を得ず、生活困難なるもの尠からず、之等は概ね普通行政地に近接する適地に移住せしめつゝあり。

第二項 南蕃々情

台中州、埔里以南の中央山脈に沿ひ台東廳、花蓮港廳及高雄州下の奥地に居住する所謂南蕃中のブヌン族、進化の程度最も低く、タイヤル族に次ぐ兇暴性を有し、大関山事件（昭和七年）逢坂事件（昭和八年）の兇行者は此の種族に属し、今後の理蕃上大に力を注ぐ要あり、又高雄州、台東廳の南部山地に居住するバイワン族は稍々進化し蕃情平穩なるも七種族中人口は第二位にして頭目の専制々度の下に支配せられ團結心強く、指導上相注意を要するものあり。

第三項 其の他の蕃情

其の他サイセツト、アミ、ヤミ、ツオウの四種族は概して溫順にして就中、アミ族は東部の普通行政地にサイセツト族は新竹州下の山脚地帯に居住し、早くより文化の風潮に浴し既に租税公課の負担を爲し一部は一般行政治下に在る等本島人とさしたる相違なき迄に進化し居れり。

第四節 現地の理蕃機関

理蕃機関として警察課分室（台北州バヌン、南澳）に警察官吏駐在所四六箇所を設置し、之に高砂族撫育機関として教育所、公医診療所、療養所、産業指導所等を設け警部、警部補、技手、公医、巡査、警手、嘱託、雇員等多数職員を配置し指導教化並に蕃地の取締に当らせつゝあり。

第五節 蕃地道路

高砂族の大部分が本島の中央山脈に沿へる峻峻なる地域に居住し、一般社会との交渉動きことは其の進化を阻害する一因なり、由りて之が統御並に産業上交通の便を図ることは極めて肝要なるを以て大正六年以來、道路開鑿の計画を樹て之が実施中にして其の延長九〇五里に達し効果著しきものあり。

第六節 蕃地の取締

近年高砂族の進化著しきものと雖も、一般人に比するときは其の文化の度、尙甚だしき差異あり。經濟觀念亦極めて低く今俄かに蕃地を一般的に解放せんか、一般人との間に紛争を生じ、延て一般蕃情攪乱せられ不祥事を惹起するの虞あり。仍て彼等に適當なる保護を加へ蕃情の平靜を保たんが爲蕃地の占有使用、蕃地出入、物品授受に付、

左の法令を存続し取締を爲しつゝあり。然れども蕃地にして比較的開發せられ普通人の往來頻繁となり、且附近居住高砂族の進化したる地方にありては事情の許す限り其の取締を解除する等機宜の処置を講じつゝあり。

- (1) 蕃地の占有に関する件(明治三十三年三月律令第三号)
- (2) 蕃地取締規則(昭和二年十月府令第五十八号)
- (3) 蕃地居住の蕃人と金銭物品授受に関する件(大正六年二月府令第三十四号)

第七節 教 育

高砂族の性情は極めて粗野なりと雖も、一面純眞朴訥にして信義に厚く、日本官憲を信頼するの念強きを以て之に適當の教化を施すに於ては野性を矯め、良民たらしむるは決して難事に非ず、之を以て領台以來一視同仁の聖旨を体し、恩威並行之が撫育に意を用ひ各地方に教育所を増設し、昭和三年一月には現行「教育所に於ける教育標準」を制定して兒童教育の根本方針を定めたり。昭和七年には視學制度を創設して各州廳に視學を置きて銳意之が改善指導に努めた結果、近來蕃地一帯に亘り教育振興の氣運大に漲り兒童教育、國語普及男女青年の指導及一般社會教育等着々其の実績を挙げつゝあり。

第一項 兒 童 教 育

蕃地に於ける兒童教育は警務局所管の教育所に於て警察職員之を行ひ、其の數百八十兒童數一万三百五十五人にし
て外に補習生二千三百二十二人あり。(昭和十七年四月末現在)

信高雄州下蕃地に文教局所管の國民學校四ヶ所ありて兒童四百五十八名を收容し居れり。

教育所は勿論普通初等教育機關なりと雖も、高砂族の生活環境に稽へ徒に平地に於ける國民學校教育を模倣することなく純朴なる山地農民養成目的の下に國民精神の涵養、國語の習熟及農民的指導に重きを置き、彼等の實際生活に即することに留意しつゝあり、彼等も亦近年益々教育に對する理解を増し父兄自ら進んで兒童を就學せしめんとする者多く、昭和十六年度末蕃地内高砂族兒童の平均就學率は八六・三五％に達し、サイセツト族の九四・二六％を最高に、タイヤル、ブヌン、パイワン、ツオウの諸族之に次ぎ、東部の孤島紅頭嶼に棲むヤミ族に於ても六七・一〇％を示すに至れり。

然し高砂族の就學率は修業年限四箇年の教育所を基準とせるものにして内地人及本島人と同一には律し得ざるも、近年高砂族の進歩、特に著しく四箇年のみの學力にては不充分にして國民鍊成の基礎智識の充實を図るは理蕃上極めて緊要に付、昭和十八年度より六學年制度を実施せり。

教育所學級職員兒童 (昭和 17 年 4 月末)

列屬	教育所	學級	職 員						在 籍 兒 童			4 月 中 出席歩合 %		
			教 育 長	教 育 員	醫 生	寄 託 員	雇 計	種 別	男	女	計			
台 北	18	38	巡查部長	甲種巡查	乙種巡查	醫 生	囑託	雇	計	寄宿 通學 計	383	431	814	96.28
			3	7	9	4	1	4	27					

新竹	31	50	7	23	12	24	18	—	84	寄宿 通学 計	123 861 984	121 836 957	244 1,697 1,941	94.45
台中	30	62	—	8	25	26	10	3	72	寄宿 通学 計	— 782 782	— 828 828	— 1,610 1,610	95.93
台南	5	6	—	5	1	—	5	—	11	寄宿 通学 計	4 139 143	7 100 107	11 239 250	94.68
高雄	50	63	—	22	28	13	—	8	71	寄宿 通学 計	63 1,441 1,504	51 1,349 1,400	114 2,790 2,904	97.63
台東	25	39	—	24	5	10	1	—	40	寄宿 通学 計	22 595 617	15 643 658	37 1,238 1,275	96.46
花蓮港	21	43	3	9	18	10	7	4	51	寄宿 通学 計	— 770 770	— 790 790	— 1,560 1,560	97.56
計	180	301	13	98	98	87	41	19	356	寄宿 通学 計	212 4,972 5,183	194 4,977 5,171	406 9,949 10,354	96.37

備考 所長は其の地方外勤務督たる警部、警部補なり

右の外 1. 教育所に於て卒業後引き続き補習せる児童 (昭和17年4月末)

体 性	台北	新竹	台中	台南	高雄	台東	花蓮港	計
男	177	326	277	43	151	133	110	1,217
女	165	308	271	29	134	91	107	1,105

二 蕃地内国民学校に在学せる児童 (昭和17年4月末)

計	342	634	548	72	285	224	217	2,322
体 性	台北	新竹	台中	台南	高雄	台東	花蓮港	計
男	—	—	—	—	215	—	—	215
女	—	—	—	—	243	—	—	243
計	—	—	—	—	458	—	—	458

児童就学歩合 (種族別) (昭和16年度末)

種 族	性 別	既に就学の始期に達したる者		未だ就学の始期に達せざるもの		総 計	就学歩合
		就学者	不就学者	計	計		
タ イ ヤ ル	男女計	3,170	327	3,497	465	3,962	90.65
	男女計	3,151	318	3,469	428	3,947	90.83
サ イ セ ャ ト	男女計	6,321	645	6,966	943	7,909	90.74
	男女計	115	7	122	21	143	94.26
ア ヌ ン	男女計	123	12	135	21	156	91.11
	男女計	238	19	257	42	299	92.21
ア ヌ ン	男女計	1,412	181	1,593	212	1,805	88.64
	男女計	1,279	224	1,503	208	1,711	85.10
ツ オ ャ ャ	男女計	2,691	405	3,096	420	3,516	86.92
	男女計	189	40	229	23	252	82.16
ツ オ ャ ャ	男女計	143	48	191	17	208	79.86
	男女計	332	88	420	40	460	81.03

パイロン	男女計	2,201	478	2,679	416	3,095	65.00
	男女計	2,054	518	2,572	424	3,006	79.86
ヤミ	男女計	52	28	80	23	103	65.00
	男女計	52	23	75	19	94	69.33
計	男女計	104	51	155	42	197	67.10
	男女計	7,139	1,061	8,200	1,160	9,360	87.06
計	男女計	6,802	1,143	7,945	1,177	9,122	86.61
	男女計	13,941	2,204	6,145	2,387	18,482	86.35

備考 本表はアイヌ族及普通行政区内に本居を有するパイロン族を除く

教育所其の他出身者状況 (昭和 16 年末)

種別	体性	台北	新竹	台中	台南	高雄	台東	花蓮港	計
教育所に補習中のもの	男女計	171	281	299	28	218	116	139	1,252
	男女計	183	264	301	19	67	69	132	1,035
上級学校在学者	男女計	354	545	600	47	285	185	271	2,287
	男女計	21	27	27	14	30	44	21	184
農業	男女計	22	27	28	1	30	44	21	187
	男女計	984	1,577	1,668	184	4,068	1,389	1,857	11,727
官公吏雇傭員	男女計	1,029	984	1,521	69	2,670	983	1,503	8,709
	男女計	2,013	2,561	3,189	253	6,738	2,322	3,360	20,436
教育	男女計	109	151	238	34	830	81	17	1,460
	男女計	109	151	238	34	834	81	17	1,464

医療	男女計	—	3	—	—	—	—	—	3
	男女計	—	2	—	—	—	2	—	4
商業に従事する者	男女計	—	5	—	—	4	—	—	7
	男女計	—	—	—	—	—	—	—	4
土木建築	男女計	—	1	—	—	—	—	—	1
	男女計	—	—	—	—	—	—	—	7
運輸業	男女計	—	—	—	—	—	—	—	3
	男女計	—	—	—	—	—	—	—	2
接客業	男女計	—	2	—	—	—	—	—	1
	男女計	—	—	—	—	—	—	—	56
家事使用人	男女計	—	—	—	—	—	—	—	26
	男女計	—	—	—	—	—	—	—	82
その他	男女計	2	—	—	9	23	19	3	56
	男女計	7	—	—	2	17	19	3	26
死亡	男女計	9	—	—	11	40	—	—	82
	男女計	98	112	443	22	530	203	142	1,550
計	男女計	99	45	341	5	142	81	90	803
	男女計	197	157	784	27	672	284	232	2,353
備考 1	男女計	1,385	2,154	2,675	292	5,712	1,857	2,179	16,253
	男女計	1,319	1,396	2,164	96	2,900	1,087	1,725	10,586
備考 2	男女計	2,704	3,450	4,839	378	8,612	2,944	3,904	26,839

備考 1 本表にアイヌ族及普通行政区内に本居を有するパイロン族を除く。
2 官公吏の殆どは警察職員(巡查又は警手)なり。

学校別	体性	台北	新竹	台中	台南	高雄	台東	花蓮港	計
上級学校在学者	男女計	—	6	2	3	—	—	—	25
	男女計	3	2	1	2	4	1	6	8
第一号表国民学校	男女計	4	8	3	5	—	2	7	33

國語研究会	会 員 数		教 員 数		計		計		計		計	
	会 員 数	教 員 数	会 員 数	教 員 数	会 員 数	教 員 数	会 員 数	教 員 数	会 員 数	教 員 数	会 員 数	教 員 数
計	27	63	38	5	65	39	30	267	1,924	10,924	1,924	10,924
男	1,169	2,728	2,043	296	1,159	1,605	1,924	10,924	1,924	10,924	1,924	10,924
女	946	1,620	1,247	187	1,280	1,059	1,238	7,577	7,577	7,577	7,577	7,577
計	2,115	4,348	3,290	483	2,439	2,664	3,162	18,501	18,501	18,501	18,501	18,501
男	103	323	149	21	244	117	116	1,078	1,078	1,078	1,078	1,078
女	3,390	7,271	5,507	687	8,615	4,925	5,526	36,021	36,021	36,021	36,021	36,021
計	1,827	5,279	2,233	543	3,797	2,125	1,848	17,652	17,652	17,652	17,652	17,652
男	5,217	12,550	7,740	1,330	12,412	7,050	7,374	53,678	53,678	53,678	53,678	53,678

第二項 社会教育

(一) 社会教育機関

(一) 高砂族に対しては先づ彼等の社会的自覚を促し人類相互の社会観念を啓発する目的を以て別表の如き社会教育機関を組織し特に國民精神の涵養、國語の普及、勤勞精神の普及、生活の改善等に努めつゝあり。

(二) 國語普及

蕃地に於ける國語普及事業は主として警察官が夜間業務の余暇を以て奉仕的に之に當り來れるが、昭和八年國語普及獎勵規定制定以來漸次活潑となり、昭和十七年度末に於ける全島の國語講習所は二百六十七箇所にして一万八千五百一人の講習員は日夜孜孜として國語の鍊磨に励み居れるが、其の成績は頗る佳良なり。而して其の國語普及歩合は簡單なる日常用務を弁じ得る程度に於て理蕃所管高砂族總人口の四八・一八%に達し近年其の進歩特に著しきものあり。

國語普及歩合		(種族別)		昭和 17 年末		理蕃所管人口		人口に対する百分比	
種 族	体 性	國語を解するもの		人口に対する百分比		人口に対する百分比		人口に対する百分比	
タ イ ヤ ル	男	10,684	19,082	55.99		19,082	55.99		
	女	9,501	19,305	49.22		19,305	49.22		
サ イ セ ッ ト	男	20,185	38,387	52.58		38,387	52.58		
	女	500	824	60.68		824	60.68		
シ ャ	男	354	833	42.50		833	42.50		
	女	854	1,657	51.66		1,657	51.66		
オ ャ	男	624	1,262	49.37		1,262	49.37		
	女	394	1,084	36.85		1,084	36.85		
メ ャ	男	1,018	2,346	43.39		2,346	43.39		
	女	4,335	8,981	48.27		8,981	48.27		
メ ャ	男	3,477	8,437	41.21		8,437	41.21		
	女	7,812	17,418	44.85		17,418	44.85		
メ ャ	男	9,526	17,507	54.41		17,507	54.41		
	女	6,769	17,211	39.33		17,211	39.33		
メ ャ	男	16,295	34,718	46.95		34,718	46.95		
	女	118	909	12.98		909	12.98		
メ ャ	男	106	840	12.62		840	12.62		
	女	124	1,749	12.81		1,749	12.81		
計	男	25,787	48,565	54.00		48,565	54.00		
	女	20,601	47,710	43.18		47,710	43.18		
計	男	46,388	96,279	48.18		96,279	48.18		

(三) 觀光及映画教育

理解と想像力に乏しく兎角感情に走り易き高砂族の啓蒙教化には先進地方の觀光と活動写真の觀覽とが最も効果的

なるに鑑み毎年内地及島内各地方の観光を奨励しつつありて、其の効果極めて顯著なるものあり、特に近年は自ら多数の費用を支出観光を希望する者増加するに至れり。

活動写真は其の効果観光に及ばざるも教化上相当の実績あることを認め、台湾警察協會の事業として之を行ひ、フィルムは特に教化上適當のものを購入又は製作し各州廳に巡回映写なしつつあり。

高砂族観光人員及所要經費 (昭和16年中)

州 廳	種 別	觀 光 (修学旅行) 人 員			所 要 經 費		
		男	女	計	自 費	官費其他補助	計
台 北	兒童	88	118	206	1,719.62	360.50	2,080.12
	其他	165	44	209	1,204.00	128.96	1,332.96
	計	253	162	415	2,923.62	498.46	3,413.08
新 竹	兒童	42	36	78	271.46	—	271.46
	其他	159	43	202	3,101.44	153.13	3,254.58
	計	201	79	280	3,372.90	153.14	3,526.04
中 央	兒童	130	168	298	2,269.44	1,219.19	3,488.63
	其他	143	13	156	4,782.23	2,290.16	7,072.39
	計	273	181	454	7,051.67	3,509.35	10,561.02
南 部	兒童	10	—	10	38.00	150.00	178.00
	其他	7	1	8	98.00	16.00	114.00
	計	17	1	18	126.00	166.00	292.00
高 雄	兒童	414	269	683	2,378.16	302.28	2,680.44
	其他	1,148	355	1,503	6,211.72	1,440.50	7,652.22
	計	1,562	624	2,186	8,589.88	1,742.78	10,332.66

台 東	兒童 38 其他 44 計 82	21 — 21	59 44 103	114.72 280.30 395.02	15.94 192.50 208.44	222.45 2,023.40 2,245.85
花蓮	兒童 211 其他 692 計 903	195 203 398	406 895 1,301	966.26 1,200.36 2,166.62	15.94 192.50 208.44	982.20 1,392.86 2,375.06
計	兒童 933 其他 2,358 計 3,291	807 659 1,466	1,740 3,017 4,757	7,747.66 16,878.05 24,625.71	2,155.64 5,964.36 8,120.00	9,903.30 22,842.41 32,745.71

第八節 授 産

理蕃事業の進捗に伴ひ逐年蕃情平靜に歸するに従ひ、高砂族の生活安定向上を図り以て理蕃の目的達成に貢献すべく教化と併行して授産に力を注ぎたるが、更に昭和十六年度よりは新に山地農業奨励事業を開始し、各種授産施設並に農畜産の積極的奨励を行ひ高砂族農業の劃期的躍進に努めたり。

(一) 水 田

高砂族の農耕は食糧の充実を主とし可及的水田定地耕に依らしむべく、指導奨励中なるが右は高砂族古來の輪耕農法より一躍定耕地に轉進せしむる一大革新なるが彼等は良く其の有利なるを自覺し、漸次水田作を熱望し逐年之が擴張を見つゝあるの状態なり。昭和十七年度に於ける全島理蕃所管高砂族水田面積は五、七九三甲歩に達し、作付面積四〇九五甲歩にして玄米三三、八六四石の收穫あり、尙將來蕃地内に於て開拓し得べき水田面積は五、四九〇甲歩を

予想せらる。

一一八

(二) 畑作

山地水田の発達顯著なりと雖も其の面積は自然の制約を受け、今尙狹少にして高砂族食糧の一端を補ふに過ぎず、特に其の分布は中北部に偏して南部は其の適地に乏しく食糧給源の重点は依然として畑作物に求むるの外なき実情にあり。然るに畑地の大部分は概ね傾斜地なる爲、表土の流失に依り地力は年々消耗低下し、農作物の収量減退するのみならず、耕種経営上極めて不利不便なるを以て之が改良に務め來りしが、更に昭和十六年度より積極的に階段畑の造成を奨励し、堆肥綠肥等自給肥料の製造施用の指導と相俟つて集約的農耕に導入すると共に、前項水稻に準じ、陸稻粟、甘藷、里芋、玉蜀黍等主要畑作物に対し夫々増産目標を決定し高砂族主要食糧の増収を計りつゝあり。昭和十七年末に於ける現耕畑は三二、〇三四甲、休耕畑一、四八二甲にして重要畑作物の種別作付面積收穫高次の如し。

種別	作付面積		收穫高	
	種別	面積	種別	收穫高
陸稻	陸稻	三、五四九甲	陸稻	一五、九三六石
	粟	六、七七八甲	粟	二九、四〇六石
甘藷	甘藷	九、一〇一甲	甘藷	六二、七八九、〇〇〇斤
	落花生	一、六二九甲	落花生	一四、八三四石
其他豆類	其他豆類	一、三五五甲	其他豆類	一八、四二〇石
	里芋	二、七三八甲	里芋	一六、三七九、〇〇〇斤

穀類

二、五九七甲

九、四六〇斤

(三) 工藝作物

高砂族の生活は元來自給自足なりしも現在概ね貨幣交換經濟を営みつゝあり、而して同族は大部分農業者なるを以て貨幣收入も亦農業に基きて之を取得せしむるを要するが故に多角的農法を指導し換金作物として甘藷、苧麻、蓮草、落花生等各種の工藝作物の栽培を奨励しつゝあり。

其の主なる産額次の如し。

種別	作付面積	收穫高	金額
甘藷	五二二甲	二〇、七一一、〇九六斤	七八、〇六〇円
苧麻	五八六甲	一四一、七一二斤	六〇、五一四円
蓮草	二二二甲	一三、〇七六斤	九、二一九円
落花生	一、六二九甲	一四、八三四斤	一七八、八五三円

(四) 藥用作物栽培

玉咲ツヅラ藤に含有するアルカロイドは結核病に特効あること明確となり。國民保健上頗る重視せらるゝに至り、蕃地に自生する本植物の確保増殖を計るは高砂族の換金作物として適當なるのみならず社会人類に貢獻する処尠なからざるものあり、依て昭和十二年十一月以降之が分布地の調査並に試作等専ら之が調査研究を続け昭和十五年度より各適地と認むる箇所に官設苗圃を設け、栽培法の研究を爲すと共に種苗の養成をなし高砂族に配布増殖せしめつゝあ

り。

昭和十四年以降の試作状況左の如し。

年 度	試作箇所数	試作面積
昭和十四年度	一八一	一〇甲七三
昭和十五年度	三二〇	二〇甲〇二
昭和十六年度	一〇九	二一甲五〇

(五) 畜産

高砂族は古來各戸に小家畜を飼養せるも肉食給源の大部分は狩獵に依る獸肉により自給し居たる爲、殺伐なる氣風を醸成し教化上改善を要するものありしを以て、之を養畜に轉換し家畜愛護の精神を涵養し、有畜農業の有利なるを自覺せしむる爲、大正十一年より畜牛の蕃殖配布をなし、定地農耕の指導誘掖に努め一方在來家豚の改良を図らんが爲、優良種牡豚の配布を爲し品種の改良に努めつゝあり。元來山地は氣候適順且野草量多き爲、家畜の飼育に好適せるを以て爾來逐年飼育頭数の増加を見つゝあり、就中養豚は其の成績良好にして自家消費を増大せるのみならず、最近市場に販出し貨幣收入を得、生活の向上に資し、一面山地農業に必須なる自給肥料の給源として利用しつゝあり。

昭和十七年度末に於ける家畜頭数次の如し。

水牛	八、二一〇頭	黄牛	四、二四三頭	雜種牛	四二二頭	印度牛	一五頭	馬	七五頭
山羊	一、六三四頭	豚	二六、二六二頭	鶏	七一、七六二羽				

(六) 養蚕

養蚕は殺伐なる氣風を和げ、且短期間に収益を得る適切なる副業にして特に蕃地は野桑豊富なるを以て之が飼育奨励をなしつゝあり。

掃立枚数	八、一〇一枚	收購量	六〇、五五〇疋	金額	一二六、七五二円	(昭和十六年末)
------	--------	-----	---------	----	----------	----------

(七) 農業講習所

高砂族は未だ智能の程度極めて低く、厚く國家の保護を受けつゝある現状なるを以て独立自營し得る農民を養成し合理的農業を経営せしむる爲、昭和六年以降順次地方廳に各一箇所宛設置し蕃社の優良青年を選抜し各所に十名内外を收容一箇年間晴耕雨読の方法に依り農民道場の教育を施し、自立自營の農業者を養成すると共に將來蕃社の指導的人物たらしむる様教導し、堅実なる農村の發達に努めつゝあり。現在迄の卒業生一、一三四名、收容生徒一九七名なり。

(八) 産業指導所

産業指導所は昭和五年の設立にして各州廳に一箇所を置き作物家畜家禽の改良増産に関する試作飼育並に模範施設及種苗種畜種禽の生産配布並に農林業に関する調査試験を爲し、蕃地に適する優良品種を選出し指導農園の連絡を採り之が繁殖をなし各社に配付し其の改良發達を図りつゝあり。恰も簡易なる農業試験場の如き機能を有し高砂族産業の中枢機関として運営しつゝあり。

(九) 指導農園

指導農園は高砂族の粗放單純なる農業を多角形的集約なる農業經營たらしめる第一線の実地指導機關にして昭和七年度全島山地枢要なる四〇箇所に於て一箇所教社を指導單位として設置し、其の面積約三甲歩にして警察官及警手之が管理に当り、産業指導所と連絡を採り、其の地方に適する農作物の種類、優良適品種造林適木の試作並に育苗配布をなすと共に集約多角的農業及進歩せる栽培技術の実地指導に努めつゝあり。

(一〇) 山地農業獎勵事業

昭和五年以降十箇年間の日子を以て施行せられたる本府蕃地調査は從來本島山地五十万甲歩の廣大なる地域を占有せる高砂族にして漸次集約的農業に導入し、之を二十五万余甲歩に圧縮居住せしめ、其の經濟生活の安定を計ると共に、残余地は林業其の他の山地企業に解放し傍ら治山、治水、電源確保等山地を保護せしむる等本島山地の合理的利用開發に關する基礎的調査にして昭和十六年度より施行の本府、山地農業獎勵事業は右調査に基き山地高砂族農業指導開發に必要なる水田の開拓耕地保護階段畑獎勵等農耕地の利用開發を行ふと共に堆綠肥並に産業獎勵に依り家畜の増産を計り、自給肥料の施用を指導獎勵し、以て高砂族農業の劃期的發達を図らんとする基本的施設として毎年実施し官民協力して概ね所期計画事業の完遂を見つゝあり。

第九節 蕃社集團移住

蕃社は概ね地勢急峻にして農耕地に恵まれず、中には古來の占有地に於て生活の安定を策し難きものあり、之等碗确不毛の奥地にして授産教化至難の環境に在る者に対しては國土保安乃至理蕃行政集約の見地に於て比較的利用價值

ある適地を求めて集團移住を實行しつゝあり、移住は明治三十六年以降連年実施し來りたるも尙將來移住を要するもの相並あり。

既往の蕃社集團移住 (昭和 16 年末現在)

州	廳	戸数	人口	摘要
台北	北	789	3,921	
台新	竹	712	3,381	
台中	中	1,376	9,089	
台南	南	39	262	
台高	雄	1,579	8,700	
台高	東	798	5,378	
台花	港	1,894	10,772	
計		7,187	41,503	

將來移住を要する蕃社戸口 (昭和 16 年末現在)

州	廳	戸数	人口	摘要
台北	北	74	388	
台新	竹	103	515	
台中	中	575	3,105	
台南	南	3	43	
台高	雄	910	5,277	

台東	71	351
花蓮	—	—
計	1,786	9,679

第十節 交易

蕃地交易事業は高砂族の経済生活向上の一助として経営せり。即ち本事業を通じて未だ智識の幼稚なる高砂族の生活擁護と其の向上を計らんとするものなり。而して本事業は授産と相俟て高砂族衣食住の問題に解決すべきものにして彼等の主産物は之を交易所に於て買取り、其の生活必需品並に習俗の革新に必要な物資を供給するにあり往時に於ては交易品の主体は眇たる天恵産物に限られ供給品も食塩、マツチの類に限定せられ交易價格に対しても大なる關心を有せざりしが、彼等の購買物の増進に従ひ其の需要品も漸次複雑化し交易所の供給品のみにては満足せざると同時に物資の品位取引價格等に関心をもち一物一品総て最寄市場と交易所を比較検討するに至り、交易所の賣買が彼等に不利なるときは官憲が利益を搾取し居るが如き疑惑を抱くを以て交易品の賣買價格に付ては常に細心の注意を拂ひ供給品が最寄店舗より高價ならざる様處理しつゝあり。而して高砂族に対する交易は経済智識尙文化人と相当の懸隔ある彼等に対し全然之を自由に放任せんか、奸商に乗ぜられやがては之が彼等の思想に不純性を招來する懸念あるのみならず、或は正しき生活限度を誤り悔を後日に胎し、或は紛争を惹起することあるべきに付、当分の間原則として制限交易を採り一面特殊地域又は特殊の物資に対してのみ自由交易を認め、其の進化の程度より見て逐次自由交易に移し或は必要に依り購買組合を組織せしむる様指導しつゝあり。

第十一節 高砂族の租税及公課

東部台灣に居住するアミ族及バイワン族の一部新竹州サイセイセット族及タイヤル族の一部並に高雄州バイワン族中には殆んど本島人と異らざる程度に進化せる者あり、之等中には一般島民と同様租税公課を負担する者ありと雖も其の他大部分は未だ進化の程度低く経済力貧弱にして食糧さへ充足せざる者すらあるの現状なるを以て、將來授産教化の進展に伴ひ漸次相應の納税を爲さしむべきものなるも未だ一般には課税不可能の現状にあり。

第十二節 蕃地衛生

古來高砂族は一般に疾病に罹り災厄に遭ふは神靈の所爲なりとし、術者に請ふて禁厭を行ふ、術者は惡鬼を驅除するのみならず医療の法をも採るを以て彼等間に在りては医術と禁厭を區別すること能はざりしなり。即ち是等高砂族間には医療法ありて医療と稱すべきものなかりしも漢民族と接觸するに及び若干の草根木皮を医療として使用するに至れるが如し。高砂族の衛生觀念以上の如くなるを以て主なる駐在所に医療機関を併置し、専ら彼等に衛生思想の普及と医療に当らしめたるに漸次其の蒙昧を啓発し、幾多の迷信を打破し、其の効果顯著なるものあり。殊に輓近医療の効果一般高砂族に周知せられ絶対に医療機関を信頼しつゝありて、受診投薬を乞ふもの年々増加し、之が悽撫に裨益する所甚大なるものあり、然るに現在の医療機関中療養所は其の設備極めて不完全なるのみならず担当者亦医療の

経験薄き警察職員を充て居る爲、遺憾の点多きを以て逐次之を公医診療所に改め医療の充実と高砂族衛生思想の涵養を図りつゝあるが、是れ僅に対蕃上の急務たるのみならず、其他に在勤する多数警察職員の健康を保全し勤務能率を増進せしむる上に於ても亦極めて緊要なるものあり。又近時蕃地の開發せらるゝに伴ひ各種の企業勃興しつゝありて内台人の蕃地に入出入するもの自然繁激を加へ、其の間傳染病毒侵入して之が防遏には相当経験者の配置を必要とするのみならず、高砂族の診療感も逐年向上し素人の治療に納得せざるもの多きに至りたるを以て、一層之が改善の緊要を認めらる。斯る傾向を以て彼等に漸次医療費の自治的負担を馴致せしむる必要を認め衛生組合其の他の組織を指導し実施せしめつゝあり。蕃地の主なる疾病はマラリア、感冒、寄生虫病、外傷フランベチア等あり、殊にマラリアは近年高砂族が高地より平地に接壤せる農耕適地に移住する爲、自然之に冒さるゝもの多く、時に悲惨なる接遇に陥る蕃社あり、依て之等浸潤度高き蕃社に対してはマラリア防遏方法を実施し、強制服薬地物整理等を励行するは勿論、駆蚊方法困難の蕃社に対しては其の改造を図る等極力之が撲滅に努めつゝあるも彼等のマラリアに対する智識欠如せる爲、未だ予期の目的を達成し得ざるは遺憾とする所なり。高砂族乳幼児の死亡率は頗る高く常に死亡総数の五〇％を下らざる状況に在り、之が原因は元より出産に対する衛生思想に乏く陋習に因はれ産前産後の処置宜しきを得ざると一般栄養攝生に不完全なるに基因すべきも蕃地に助産婦のあらざること其の一因たるを以て之が改善の爲、先年來全島各州廳に於ける高砂族出身先覺者の助産婦を養成し之が取扱ひを爲さしめつゝあるに、其の成績見るべきものあるを以て漸次之が普及徹底を図る要あり。

第三章 經濟警察

第一節 概況

經濟警察は戰時經濟國策の遂行を目標とし、國家總動員法並に輸出入品等に関する臨時措置に関する法律等に基づき公布施行せられたる經濟統制令の執行を確保し以て經濟統制の運営を円滑にし戰時國民生活を安定すべく全力を傾注し來りたり。

其の取扱事務中主要なるものを挙げれば左の如し。

- (一) 價格等に関する指導取締
- (二) 物資統制に関する指導取締
- (三) 勞務調整に関する指導取締
- (四) 總動員物資輸送に関する指導取締
- (五) 企業の許可並に企業整備に関する指導取締
- (六) 貿易統制に関する指導取締
- (七) 電力調整に関する指導取締
- (八) 資金調整爲替管理等金融統制に関する指導取締

(九) 暴利行爲等の指導取締

(一〇) 奢侈品等の販賣又は使用制限に関する指導取締

(一一) 生活必需物資の配給統制に関する指導取締

以上の如く経済警察事務は多岐に亘り、且戦争の長期化に伴ひ急激に増加し昭和十三年創設当時の経済警察機構を以て之に対応せる爲、其の取締に当り尠からざる困難に遭遇したるを以て局面打開の方策として昭和十六年三月経済警察の運営は専ら重点的に取締を行ふ方針を採り、他面全警察職員の経済警察に関する教養を徹底し外勤警察官の活用に意を用ふることとし、鋭意島内に於ける経済治安の維持に努め來れるが太平洋戦争勃発に依りて更に事務繁忙を極むるに至れり。

第二節 経済警察の機構

本島に於ては昭和十三年九月二十日より警務局警務課に経済保安掛を置き新に巡查二二五名を各州に配置し、経済警察に関する事務を取扱ひたるが、同年十一月二十二日勅令第七百三十一号を以て官制の改正あり、経済警察に従事する警視一、警部四、警部補一二計一七名の経済警察幹部を新に各州廳に配置し以て一先づ経済警察機構を整備し、茲に初めて経済警察制度の創設を見るに至れり。其の後経済統制は強化の一途を辿り、経済統制法令相次ぎて公布施行せられ経済統制法令の違反は量質共に増加し、加之昭和十四年の九、一八價格停止令の公布に依りて物價、物資、資金、労務等の各般に亘り廣汎なる指導取締を必要とするに至りたるを以て昭和十五年二月十七日警務局に経済警察

課を新設し、各州には経済警察課を各廳には経済警察係を置きて経済警察事務を管掌することゝせるが、更に其後昭和十六年に小数の増員を行ひ現在に及べり。

第三節 経済警察の運用

経済警察運用の如何は戦時國家経済及戦時國民の生活及思想も直接重大なる影響を及ぼすものを以て最も慎重を期し経済統制諸法令の趣旨内容等の周知徹底を図り、努めて違反防止の措置を講じ取締に当りては本島に於ける各般の事情を考慮し悪質事犯の摘発に努めて之が取扱に付ては努めて苛酷に亘るを避け苟も民心を萎靡沈滞せしむるが如きことなき様留意し、以て軍民需物資の充足輸送の確保の責に任し特に最も重要な國民生活の安定を図り経済秩序を維持すべく努めつゝある。尙経済統制は國民挙つて統制法を遵法するに依りて始めて所期の目的を達し得るものなるが故に國民をして十分に時局を認識せしめ、経済國策の如何を明示し経済統制法令の趣旨並に其の内容を理解せしめ積極的に経済國策に協力せしめ、以て業者並に一般消費者等に対する防犯的指導に重点を指向し來たれり。而して昭和十九年度に於ける経済違反の状況次の通なり。

昭和十九年 自一月至十二月 經濟事犯処分調 (上行は件数, 下行は人員)

臨時措置法関係

事件名別	起		訴		不		起		移送合計	未処分	
	求公判	求予審	略式		計	起訴処分	其他	計			
			体	刑金刑							
故銅及鉄屑配給統制規則	—	—	20	21	20	25	7	32	—	52	7
鉄製品製造制限規則	—	—	—	11	11	14	1	15	7	35	—
鉄鋼工作物築造許可規則	—	—	—	1	1	3	—	3	—	4	—
皮革配給統制規則	12	—	44	2,575	2,631	225	72	297	64	2,992	6
豚肉配給統制規則	19	—	65	2,273	4,357	670	244	914	67	5,338	10
米穀配給統制規則	9	—	22	4,657	4,688	448	181	629	17	5,334	22
収獲高調査規則	23	—	28	5,393	5,444	543	240	782	26	6,253	26
砂糖配給統制規則	—	—	—	109	109	101	20	121	1	231	—
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	112	112	117	28	145	1	258	—
砂糖配給統制規則	—	—	—	240	240	83	29	112	—	352	1
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	245	245	85	29	114	—	359	1
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	22	22	39	10	45	2	78	2
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	25	25	40	10	50	2	77	2
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	27	27	8	—	8	—	35	—
花生及胡麻配給統制規則	—	—	—	28	28	10	2	12	—	40	—

及キヤツサバ配給統制規則	—	—	52	55	52	45	4	49	3	104	—
飼料配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
肥料配給統制規則	—	—	9	10	9	4	7	11	—	20	—
綿製品の製造制限に関する件	—	—	8	8	8	23	—	26	—	31	—
苦麻製品又は黄麻繊維の販賣制限に関する件	—	—	72	72	72	22	5	27	5	104	—
奢侈品等製造販賣制限規則	—	—	228	251	228	65	10	75	2	305	—
單寧含有樹皮使用制限に関する件	1	1	38	40	39	20	12	88	2	341	6
絲配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	20	—	59	1
臨時輸出入品調整規則	—	—	2	—	2	6	—	6	—	8	—
石油販賣取締規則	—	—	15	15	15	25	3	28	1	44	—
薬及薬工品配給統制規則	—	—	1	2	1	—	—	35	—	51	—
自動車タイヤ, チューブ配給統制規則	—	—	1	1	1	4	1	5	—	6	—
計	22	43	68	8,086	8,176	1,161	351	1,512	102	9,790	45
			95	10,564	10,702	1,745	596	2,341	118	13,162	53

國家稅動員法關係

價格等統制令	39	50	3	4	92	12,581	12,715	7,803	1,590	9,393	547	22,655	340
地代家實統制令	—	—	—	—	1	17	18	37	6	43	—	61	2
小作統制令	1	1	—	—	—	4	5	13	4	17	1	22	2
物資統制令	—	—	—	—	1	176	177	189	12	201	6	384	20
企業許可令	1	2	—	—	172	209	172	136	11	147	7	417	32
小作料統制令施行規則	—	—	—	—	—	—	211	179	20	199	10	327	2
貨金統制令	—	—	—	—	—	3	3	35	2	3	—	4	—
貿易統制令	—	—	—	—	—	2	3	38	3	51	7	47	—
勞務調整令	—	—	—	—	—	1	1	65	6	11	—	8	—
臨時農地價格等統制令	—	—	—	—	—	2	2	1	2	2	—	4	—
臨時農地等管理令農地作付統制規則	—	—	—	—	—	50	50	83	5	88	—	138	—
米穀搗精等制限令	—	—	—	—	—	—	—	87	—	92	—	142	—

小麦粉等配給統制規則	—	—	—	—	4	4	—	—	—	—	—	4	—
雜穀配給統制規則	—	—	—	—	136	145	136	194	7	200	—	337	2
青果物配給統制規則	—	—	—	—	56	79	56	75	5	80	—	136	—
台灣鮮魚介生產配給統制規則	—	—	—	—	130	211	130	81	26	42	—	172	—
生活必需物資統制令	—	—	—	—	—	—	—	10	27	107	—	318	—
鐵鋼統制規則	—	—	—	—	—	—	—	11	2	12	—	12	—
金屬類回收令	—	—	—	—	—	—	—	2	4	38	—	38	—
社會經理統制令	—	—	—	—	—	—	—	1	4	2	—	2	—
電力調整令	—	—	—	—	—	—	—	8	—	8	—	8	—
植物性雜纖維配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	23	3	26	—	28	—
木材配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	1	11	12	—	12	—
故空壕等回收配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	8	—
木炭配給統制規則	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	8	—

一三三														
配給統制規則	1	1	1	3	3	1	1	1	3	1	1	4	1	1
國民徵用令	1	1	1	1	1	2	1	2	3	1	6	1	1	1
計	41	3	95	13,347	13,486	8,744	1,676	10,420	570	24,476	375	467		
其の他	53	4	97	14,418	14,572	9,614	1,954	11,588	611	26,751				
暴利行為取締規則	1	1	3	36	39	39	13	52	1	91	4	4		
外國爲替管理法	4	16	20	15	41	40	2	29	1	84	1	1		
産金法	1	1	1	20	20	12	75	87	13	120	1	1		
臨時資金調整法	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
台灣食糧管理法	1	1	1	165	166	172	12	184	1	350	1	3		
國民勞務手帳法	1	1	2	4	6	56	9	65	1	71	1	1		
台灣特別行為税法	1	1	1	4	4	4	1	4	1	8	1	1		
計	4	16	26	244	290	311	111	422	13	725	8	8		
總計	67	19	189	21,677	21,952	10,216	2,138	12,354	685	34,991	428	531		
	100	25	223	25,242	25,590	11,697	2,662	14,359	742	40,691				

第四節 終戦後の指向

昭和二十年八月十五日終戦の大詔頒布せられ茲に戦時經濟運営の使命を有する經濟警察は一應其の主目的を喪失せるも島民の生活安定確保は新なる課題として執り上げられ、經濟警察は専ら此の面に重点を指向し戦局の急轉に伴ふ金融の安定並に主要食糧の確保を期すべく各州廳に令達し之が円滑なる運営推進に努めたり、幸にして島民の協力と關係官廳の努力に依り現在迄概ね靜謐を保持し經濟上特に憂慮すべきものなし。

第四章 治安

第一節 島民生活の変遷

瘴病蠻雨の地と称せられたる台灣に住し化外の民と称せられし當時の本島人は其の生活も極めて低俗にして、文化的水準甚だ低く洵に恵まれざる実情にあり、習俗生活環境の全面に亘り放置すべからざる状態にありしを以て爾來之が刷新改善方策は内台一如の理念の下鋭意考究実施せられ其の發達改善の跡極めて顯著なるものあり、特に衛生教育勸業等の成果は阿片政策（領台當時の吸食者一六九、〇六四名現在一、八〇〇名）の一斑のみに付ても窺ふに足るべく今日に於ては日本本土に於ける一般生活と懸隔なき段階に到達せりと云ひ得べし、本島の迷信在來宗教に付ては生活改善と併行し、昭和十年末唱導せられたる國民精神作興運動の一翼として旧慣陋習打破を目標に指導し來れるも、

一部に於ては之が効を急ぐ余り正邪の別なく寺廟の整理を行ふ等の弊害もあり之が影響大なるものあるを以て昭和十六年に至り之が対策を講ずる迄一時之が処理を中止せしめ今日に及べるも、其間正しき信仰助長せらるゝと共に地方民衆の希望もあり低俗のものと雖も治安に支障を來さざる範圍に於て之を認むる等の処置を講し之が緩和を計り來りたり。

第二節 一般治安狀況

本島に於ては太平洋戰勃發以來島民一丸となりて戰爭遂行に邁進し來り居れる処突然の終戰に若干の混亂を見るに非やと危惧せられたるも一部に流言並に若干の預金引出増加等を見たる外憂慮すべき事態も發生することなく極めて平靜なる狀態の裡に今日に及び居れるも、今後日時の経過と共に自然的警察力の稀薄化に伴ふ各種事態の發生に就ては注意を要するものと認めらる。

顧るに本島改隸に伴ふ匪乱は大正四年に於ける台南西來庵事件を最後とし爾來各般の行政施設は漸次整備充實せられ産業の發達教育の普及及福利施設の完備に伴ひ之が治績着々として挙り島民は各々其の堵に安んじ別項の如き思想運動ありと雖も、之等も大なる波紋に至らず終熄し爾來平靜を持続し其の間支那事變の發生あり、更に太平洋戰爭を迎ふるに至り本島人子弟中軍夫工員として徵備され海外に派遣さるゝ者或は志願兵現役兵として第一線に立つ者更に女子に於ても看護助手を志願し海外に派遣さるゝ者等相當數に達する反面南方作戰基地として重要物資の生産割当各種統制法令の施行等島民として會て稀なる生活環境の變化を経験し乍らも、領台以來培れたる島民資質の向上は折柄

の民奉公運動と一体化し克く之に耐へ、何等大なる事件の發生を見ることなく驚くべき平靜の儘終戰を迎へたる實情に在り、然して此の間島民生活の全般に亘り特に衣食住の面に於て不自由の中にも窮乏の極に達せるが如き相貌を呈することなく、比較的余裕を存し得たるは全く從來よりの農村經營の向上増産運動の徹底及島民一致の協力に依るものと言ふを得べく特に注目し値する点なるべし。

第三節 思想運動の概要

台湾に於ける近代的社会運動の萌芽を認むるに至りたるは大正三、四年頃内地に於ける自由民権運動の影響を受けたる一部有識分子が台湾同化会を結成し自由解放の叫びを挙げたるを嚆矢とし、其の後第一次の歐洲大戰後全世界の思想界を席捲したる民族自決小邦独立被圧民族開放の思想は島民に底流せし民族本能を刺戟し民族自決主義を基調とする民族運動の擡頭となり、或は政治的活動に其の鋭鋒を現はし本島思想界の領導權を把握しつゝ進展し來れるも其の間自治主義と独立主義の対立内訌等あり。前者は合法的政治運動に拠らんとし、後者は祖國支那の援助下に革命的手段に依り台湾の獨立を企てんとするに至れるが、一方コミンテルン東洋赤化工作の進展に伴ひ日本共産党及中國共産党の影響は民族運動の独舞台たり本島思想界に波及し、大正十五年頃より台湾文化協會内に強力なる集團を爲し遂には之が乗取りに成功、斯くて本島思想界は民族主義と共に共産主義の二大主義に別れ互に反目抗爭を続けつゝ本島の社会運動に著しき勃興を來せり。

共産主義運動

昭和三年四月対岸上海に於て結成されたる台灣共產党は直に日本共產党並に中國共產党の指導を受けつゝ直に本拠を島内に移し当時既に赤化しありたる台灣文化協會台灣農民組合に対する工作を表化し、遂には之等團體を有力なる外廓團體たらしめ矯激なる宣傳煽動を続け巧に民族意識を利用しつゝ廣汎なる民族革命戦線の構成を企図し一時民族運動を圧倒せるやの感ありたるも昭和六年全島的にはれたる檢挙あり、次て台灣赤色救援会大湖竹南地方に於ける暴動計画等の檢挙行はれ遂に其の組織を根底より破壊せらるゝに至りたるが其の後國民精神總動員運動の擡頭、日支事變の勃發等に依る國內体制強化等急激なる社会狀勢の進展に伴ひ、遂に再起不能に陥り特に大東亞戰爭勃發を契機として大東亞民族たるの自覺と過去の思想的誤謬を反省し何れも良民として轉向するに至り遂に本島思想界より其の影を没するに至りたるものなり。

民族主義運動

民族主義運動に於ても昭和六年台灣民衆党の結社禁止に依り獨立主義派の没落となり僅かに台灣地方自治聯盟を中心勢力とする自治主義派が完全なる地方自治制促進を單一目標として運動を続け來りたるも、昭和十年地方自治制の改正に依り一部其の要望実現し主要分子間に其の存否に付内訌あり一面當時の時代思潮は其の存立を許さず昭和十二年八月遂に解散し茲に合法的民族運動の母体解消し、爾來分散的簡別的なる地下運動に奔るに至りたるが當時既に對岸に於ては台灣籍民を中心とする台灣獨立或は中國復歸を目標とする台灣革命運動は相當なる組織の下に強力活潑なる發展を遂げつゝあり、特に日支事變勃發後に於ては之等對岸に於ける革命運動の進展は直に本島の民族運動の影響を與へ、日支事變の長期化に伴ふ國民生活の逼迫は漸次民心不安の醸成となり民族主義好箇の舞台として再び活氣を

呈し、幾多の事件の發生を見るに至りたるが、他面在台華僑の奮起となり、遂に全島中華會館役員其他有力者を中心とする與中會台灣支那華僑抗日救國會等本島の中國復歸を目的とする團體の結成を見るに至りたるが、何れも早期檢挙に依り未然に防止し治安上大なる障害を生ずることなく昭和十六年十二月太平洋戦争の勃發を見たり。同戦争の勃發以來日本の唱導する東亞の解放、大東亞共榮思想は予て日支事變に一抹不愉快を抱き居たる本島有識層に至大の感銘を與へ、特に緒戦に於ける大戦果は島民大衆に日本國力の再認識と東亞新秩序建設の確信を與へ、期せずして有識層に於ける民族運動の凋落となり高雄に於ける吳海水一派の有識者を主謀者とする事件の他は何れも無智無賴の徒輩を中心とする分散個別的然も小規模なる計画に終るの狀況を示し、本島治安上憂慮すべき傾向認められざりしが昭和十八年南方戦線に於ける日本軍の轉進以來戦況漸次不利となるや、米英軍の本島來攻を予想し日本の敗退を必至なりとする敗戦思想漸く醸成せらるゝに及び本島の獨立又は中國復歸を目的とする民族運動は遂次擡頭の氣運を示し、各地に分散的なりとは謂へ不穩の傾向を生じつゝありたるも島民の大部分は戦局の前途を注意しつゝ表面極めて平靜裡に今次戦局の急轉に遭遇したるものなり。

第五章 防空

本島に於ては時の國際情勢並に地理的關係に鑑み有事に際し陸海軍の行ふ台灣防衛に則應し、全島民挙げて一團となり、協力一致防衛の万全を期すべき方途を講ずるは極めて緊要事項なりとし昭和十一年八月台灣總督、台灣軍司令官、馬公要港部司令官の間に台灣國民防衛に關する根本的重要事項を協定し總督は之に基き直に台灣國民防衛規程を

制定し本島防空の方針を確保せり。次いで昭和十二年十一月本島に防空法施行せらるゝに及び台湾総督府及各廳州に防空課（係）を新設し専ら防空諸般の業務を主掌せしむると共に官民より成る防空委員会を組織し以て防空上の重要事項を調査審議せしめ官廳防衛機構を一應整備せり。而して本島に於ける防衛機關としては從來防衛團、消防組及保甲壯丁團の三團體ありたるも其の指揮系統二途に岐れ事態に即應せざる嫌ありたるを以て之を改組統合して新に警防團を創り以て命令系統の一元化を図り警防活動の完璧を期したり。之に併行し重要官廳工場事業場には防護團及特設防護團を設置し警防活動の完璧を図ると共に重要産業の保護を確保せり。斯の如く官民の防空態勢の整備強化を図ると共に他面防空展覽會、防空講習會、映画、防空訓練等を実施し指導者及一般市民の防空思想の普及徹底を図り以て側面的に官民一体の防空態勢を確立せり。

一、監視通信

防空監視は本島海岸線（一部山地）に監視哨百五十一、特設防空監視哨として離島に五、外に特設防空監視船として台湾軍の指導を受くるもの北部基隆沖に八隻、南部高雄沖に五隻を配置し、敵機及艦船の監視に任せしめたり、監視に要する通信機關は主として警察電話及漁業無線電信を使用せり。

二、警報

警報は警戒警報、空襲警報の二種に分ち各監視哨より監視隊本部を経て台湾軍司令官又は海軍司令長官に報告する。敵情に依りサイレン電話等の各種方法を以て傳達さるゝ規定にして各司官は更に部下將校に対し発令權の一部を委任せしものあり。

三、燈火管制及偽裝

燈火管制は準備管制、警戒管制、空襲管制に区分し実施し來りしが太平洋戰勃發以來準備管制の程度を著しく強化し、以て情況に合する如く指導せり。偽裝は支那事變当初より指導実施せしめしが其の方法拙劣なるもの、或は全然偽裝せざるものありしを以て太平洋戰勃發と同時に現地に指導者を派遣し修正並普及の徹底を期せり。

四、消防、防火、防彈及防毒

消防々火は最も重点を置きし項目にして家庭防空群（奉公班）をして初期消防に当らしめ防衛團及壯丁團も亦應急防火を主任務とし、消防組は火災拡大の虞ある場合機を失せず重要方面に出動することゝし消防資材、就中ポンプの整備及防火用水道、貯水池、貯水槽等の設備を強化せり。

一般市民に対しては爆風破片を防ぎ、且つ機銃掃射を避け得る程度を目途とし概ね十名以下の防空壕を各個人及公共用として構築せしめたり。然れども空襲熾烈を極める昭和十九年度に至りては地形之を許す地域には横穴式防空壕の構築を奨励せり。官廳には最初中型爆彈に抗し得る程度の防護室を設備せしめしが漸次之を強化せり。亦毒瓦斯の使用を顧慮し防空従事者には防毒衣袴全部を一般市民には防毒面の準備を奨励し相當に普及し訓練も亦時々実施せしが幸に之を使用することなく終戦を見るに至れり。

五、待避、避難及救護

待避々難は徒らに損害を蒙むることを避くる爲、時機を失せず敏速的確に実施する如く指導し、事變当初より逐次損害の減少を見るに至れり。重要都市の奉公班には救急法中簡易なる事項を、警防救護班には止血及應急手当を實際

的に実施し得る程度に教育指導せり。救護所には診療所、医院、学校、寺院集会所等を充當せり。救護に関する特殊技術者の運用は州知事、廳長をして其の地在住の者を以て当該市街庄の救護に任ぜしめ、要すれば臨機應援の処置を構する様指導せり。

六、應急復旧及工場防空

電氣、通信、水道、瓦斯、道路、橋梁、鉄道、港湾等の重要施設は之が應急復旧に要する資材及所要人員の確保は大に努力したる処なるも資材の數量に至りては希望の域に達せざるもの尠からず、工場特に其の重要なものの防空に付ては特に意を用ひ、指導せし処なるが其の成績良好ならざりしを以て昭和十八年に至り台灣工場防空方針を示し關係官を現地に派遣し設備資材の増強防護機關の強化等を指導せしめしが資材の入手意の如くならず、爲めに防空の徹底を期する程度に至らざりき。

七、疎開及空地設定

右の如く本島の防空準備は昭和十一年八月より開始し、之れが実施は昭和十二年七月支那事變勃發と同時に下令せられ、爾來昭和十三年二月台北及新竹州下に一回空襲を受け少數の投彈ありしが、損害は極めて輕微なりき、昭和十六年十二月太平洋戰爭勃發せしが本島に対する最初の空襲は昭和十八年十一月新竹州下に対するものにして、爾後昭和十九年に入り若干小規模の空襲を受けしが、十月に至り本格的に全島に亘る大空襲あり。昭和二十年に入り一月初より終戦迄殆んど連続的に空襲を受け、南部より逐次北部に亘り軍事生産重要施設、重要都市は殆んど破壊せられ僅かに市として半壊程度のものは台中、台北の兩市のみとなれり。

右の如き空襲の激化に対処し都市其の他の危險地帯よりの人員疎開を実施せしむるのを認め、昭和十九年一月より防空不適格者の疎開を始めしが、其成績予想の如くならざりしを以て本年二月中旬一般市民支障なきものは疎開を実施する如く強く勸奨し、台北及基隆の兩市民に対しては食糧補給の困難の事情をも顧み、本年五月より約十万人を目途とし台中、台南兩州下に疎開する如く指導し約五万人の移住を見たる頃終戦に至れり。

以上人員疎開を実施すると同時に重要都市の被害を輕減する爲防空々地を設定することとし台中、彰化、台南、嘉義、宜蘭、台北の各市は四月又は五月より家屋の除去を行ひ防空々地帯を設定せり。

重要物資も亦之れが疎開の必要を認め、昭和十九年度より關係方面に対し大に勸奨せしが諸種の隘路伏在し、之が実施進捗せざりしを以て、昭和二十年二月軍及總督府より關係官を各州に派遣し現地に付き之が疎開を督勵指導せしめ被害の輕減に努めたり。

第七編 衛生

第一章 概 況

往時瘴癘の地とせられたる本島は歴代当局の善処と民衆の自覺とに依り衛生状態は頗に改善向上の道程にありと雖も猶四季、腸チフス、パラチフス、赤痢、デフテリア、流行性脳脊膜炎等の傳染病あり、マラリア亦昔日の觀なきも都市以外に於ては今尙相當の脅威たるを免れず、出生率は早くより人口千に付四〇前後の高率を示し年と共に益々比率増大し、昭和六年には四六・一なる最高値を示し、其の後多少減率せるも尙内地に比し高率を示せり。然るに死亡率は逐年減少の趨勢にあり、昭和十六年には一躍一六・三の最低記録を示し内地の死亡率に接近せるも尙多少の高位を示せり。

第二章 各種衛生機関

第一節 研究機関

本府は衛生上の研究機関として熱帯医学研究所を置き、熱帯衛生に関する試験研究其の他病源、病理、予病、治療等衛生諸般の試験研究を爲さしめ居る処なるが、本島衛生行政施策の確立上本研究所の使命は益々其の重要性を加へつゝあり。

第二節 官設医療機関

官設医療機関として普通医院十一箇所及特殊病院として結核療養所、癩療養所、精神病院を設け、且地方に公医制度を採りつゝあり。

一、府立普通医院

府立普通医院は明治二十八年六月以降漸次台北、基隆、宜蘭、新竹、台中、台南、嘉義、高雄、屏東、台東、花蓮港、澎湖の十二箇所を設置し、一般医療の需めに應じつゝありしが、台北医院は昭和十三年四月一日台北帝國大学附屬医院として移管せらる。而して之等普通医院の概況別表の如し。

二、府立結核療養所

大正四年結核患者を療養する爲、台北州七星郡内湖庄に結核療養所を設置し、錫口養生院と稱へ、台北廳に於て管理し居たりしが、大正十三年台灣總督府の管理に移し同十四年三月台灣總督府結核療養所官制の公布を見るに及び松山療養所と改稱し、爾來病床の増設を図り、昭和十四年度より入院患者收容定員を百五十名となし、更に百病床増設すべく目下建築中なり、

三、府立癩病院（樂生院）

昭和五年七月の全島に於ける癩患者は一千八十四名を算し、昭和十七年三月現在一、〇一七名となり居るも本府に於ては既に昭和三年より三年繼續事業として予算三十三万円を計上し、台北州新莊郡下に收容定員百名の癩療養所を

設置し、昭和五年十月一日より開所したり。其後昭和七年度に於て定員一五名、昭和九年度一二二名、同十年度に、一〇〇名、同十一年度に、一〇〇名、同十二年度には、一六〇名の病棟を増設し、更に昭和十三年度に於て一一三名の病棟の増設を爲し、現在收容定員七〇〇名にして昭和十九年度末現在患者五七六名を收容し居れり。

四、府立精神病院（養神院）

本島に於ける精神病患者は昭和十年五月の調査に依れば三千四百八十一名にして、其の内常に監置の必要ある者三百二十七名、時に監置の必要ある者五百二十二名あるに不拘、精神病院は台北市内に小規模の私立医院二箇所を存するのみなるを以て本府に於ても必要を認め昭和七年七月より三箇年繼續事業として工事費二十七万円を投じ收容定員百名の精神病院を台北市郊外松山に建設し、昭和十年二月一日より患者收容を開始せり。而して昭和十九年末現在患者八十二名を收容し居れり。

府立医院關係一覽表

(其の一) 府立普通医院職員表 (昭和二十年四月一日)

医 師	藥 劑 師	事 務	計
本官 86 人	本官 23 人	本官 20 人	129 人

(其の二) 医院の所在 (昭和十九年末現在)

基隆市、宜蘭市、新竹市、台中市、嘉義市、台南市、高雄市、屏東市、台東街、花蓮港市(分院玉里街)馬公街

(其の三) 医院等級別病床数 (昭和20年8月末現在)

医院名	1等	2等	3等	計	備考
基隆	6	17	62	85	病床大破使用不能
宜蘭	2	20	70	92	小破使用可能
新竹	3	26	65	94	小破使用可能
台中	17	19	155	191	
嘉義	6	36	102	144	
台南	4	56	125	185	焼失
高雄	5	22	116	143	大破使用不能
屏東	4	18	70	92	小破
台東	1	8	48	57	大破一部使用不能
花蓮	6	4	53	63	
澎湖	2	6	28	36	病床大破一部使用不能
計	66	232	894	1,192	

(其の四) 松山結核療養所一覽表 (昭和20年4月1日)

(一) 職員並患者収容力

医師	5人	薬剤師	3人	事務員	3人	計	入院患者収容力
本官		本官		本官		11人	152人

(二) 診療患者数 (昭和18年度)

入院	外來	計
31,384人	543人	31,927人

(其の五) 樂生院一覽表 (昭和20年4月1日現在)

(一) 職員及入院患者

医師	6人	薬剤師	1人	事務員	4人	看護長	1人	計	入院患者収容力
本官		本官		本官		本官		12人	700人

(二) 診療患者数 (昭和18年度)

入院	外來	計
132,604人	45人	132,649人

(其の六) 養神院一覽表 (昭和20年4月1日)

(一) 職員及入院患者

医師	4人	薬剤師	1人	事務員	2人	看護長	1人	計	入院患者収容力
本官		本官		本官		本官		8人	100人

(二) 診療患者数 (昭和18年度)

入院	外來	計
33,139人	2,117人	35,256人

領台當時に於ては漢方医を除きては医療機関殆んどなく、公衆衛生上医師配置の必要あり。適當の医師を公医に任命し、指定地に開業せしめ之に手当を支給し一般治療並に公共衛生及医事に関する事務に従事せしめつゝあり、昭和二十年四月末現在公医（山地を含む）は二百九十四名を有し医事行政上並に一般診療に関し相當の成果を挙げつゝあり。

第三節 医師、歯科医師

昭和十九年末医師は現地開業医師又は医生を加へ二千八百九十一名、歯科医師は限地開業医師及医師として歯科専門標榜の許可を受けたる者を加へ六百五十一名を有し、其の数字は逐年増加の傾向を辿りつゝあるも、人口増加率に比較すると、未だ充分なりと謂ふを得ず、即ち昭和十九年末に於ける医師一人当り人口は医生八十七名を加ふるも、尙二千三百七十七人にして本島に於ける衛生状態並に医師普及状況より見るも医師の養成は喫緊の要務に属するを以て本府に於ては取敢ず之が應急策として昭和十六年八月府令第五百五十六号を以て台湾医師試験規則を制定公布し、從來の限地開業医師を乙種医師と改称すると共に新に甲種医師制度を設け、甲種医師には地域及期間を制限することなく島内何れの地にても開業せしむることゝせるが、之が受験者の大部分は乙種医師にして所謂乙種医師の登龍の途を設けたる爲、乙種医師の受験者激増し優秀なる合格者を得ることゝなり、僻陋地に於ける医療の普及に遺憾なきを期しつゝあり。

第三章 保健衛生

本島は其の自然的條件と住民中、衛生思想の低級なるもの多き關係上一般衛生状態極めて劣悪なるものありしが、歴代当局は消極的には悪疫の徹底的制圧を図ると共に積極的には島民の衛生思想普及向上、上水、下水の設備、公園公共浴場、海水浴場の設置普及、公道の緑化等凡ゆる施設の充実に努めたる結果、今や全く面目を一新するに至れり殊にマラリア防遏と流行性脳脊髄膜炎の予防とを兼ねたる住宅内外の清掃運動と屋内通風採光を図るべき開窓運動は島内普く徹底し、之が保健衛生上に齎したる効果は蓋し絶大なるものあるを認む。然りと雖も島民保健の現状は必ずしも良好なりと謂ふを得ざるを以て当府は之が施策の一として國民体力法を本島に施行し島民体力の管理並に之が維持増進に努むるの外、現代的保健施設たる保健所も設置し、島民保健の急速なる増進に努めつゝあり。

第四章 防疫事務

第一節 傳染病予防

本島に於ては曾てペスト、コレラ等の猛悪なる傳染病の流行猖獗を極めたりと雖も、近來斯る傳染病の流行なく、腸チフスを最重要なる傳染病とし其の患者死者は共に各種傳染病総数の大半を占め、又デフテリア、流行性脳髄膜炎等は別表の如く漸次増加の趨勢を示せり。而して昭和十九年に於ける傳染病の総患者数は六、七四六人死者八〇七人

なり。

最近拾箇年間の傳染病患者及死亡者数

年次	コレラ		赤痢		腸チフス		パラチフス		痘瘡		猩紅熱		ダングリフ		流行性腺炎		流行性肺炎		計	
	患	死	患	死	患	死	患	死	患	死	患	死	患	死	患	死	患	死		
昭和8年	—	—	247	34	1,035	246	30	8	1	1	59	—	628	101	21	18	—	—	2,021	408
同9年	—	—	218	36	1,162	301	38	8	5	—	418	12	832	141	272	167	—	—	2,945	685
同10年	—	—	252	47	1,450	228	55	7	1	1	227	11	720	125	273	161	—	—	2,979	681
同11年	—	—	236	42	1,822	432	48	5	2	—	63	5	865	153	198	—	2	1	3,236	760
同12年	—	—	302	59	1,475	349	45	15	—	—	82	3	803	137	98	50	27	9	2,832	612
同13年	—	—	447	20	1,635	375	99	49	—	—	74	2	904	169	170	85	34	22	3,363	813
同14年	—	—	586	204	1,746	408	140	35	69	13	83	4	1,038	216	495	247	18	11	4,185	1,138
同15年	—	—	456	151	2,067	474	114	32	7	3	61	2	1,391	346	633	329	25	7	4,754	1,245
同16年	3	—	497	98	1,630	354	85	27	—	—	36	2	1,501	212	244	90	37	16	4,303	800
同17年	7	—	396	57	1,994	422	110	13	1	—	33	2	1,374	215	133	47	23	11	4,061	768
同18年	341	190	2,064	206	1,376	303	297	11	—	—	21	2	1,741	263	107	36	18	10	5,965	1,026

第二節 マラリア防遏

マラリアは本島に於ける風土病中最も主要なるものにして、其の全島に亘る総患者数の如きは固より徴すべき資料

なしと雖も各州廳に於て施行したる血液検査に依り發見した原虫保有者数より推定するも病菌分布の根底甚だ深く、其の病害今猶悔るべからざるものあり、而も過去十數年來極めて順調に遞減の一端を辿り來りたる防遏成績は戦争の影響を蒙り、最後に於て稍々逆轉の傾向を示し、本病予防対策の前途樂觀を許さざるものあり、而してマラリアの防遏に關しては患者及原虫保有者の發見根治と本病の媒介者たる蚊族の驅除を二大方針と爲し、左の措置を講じつゝあり。

- (一) 住民の定期血液検査を施行し、之に依り發見したる原虫保有者に対しては根治迄服藥を継続せしむること
- (二) 一般に清掃保持蚊帳の使用煙燻其の他蚊族の驅除雜草木竹の芟除溝渠下水整理等其の他蚊族發生防止の方法を勵行せしむること。

第三節 海港検査

本島に於ける主要開港場は基隆、淡水、高雄及花蓮港にして之等開港場には夫々検査施設を設け、海港検査の事務を掌り傳染病毒の侵入防止に努めつゝあり、右の外台灣開港規則に依る開港場たる安平港並に明治四十二年府令第十五号に依り指定せられたる後龍、鹿港、東石の開港場ありて中華民國各地との貿易行はれつゝありしも現在に於ては殆んど中絶の状態にあり。

第四節 航空検査

本島に於ける航空路は將來益々拡大せらるゝ趨勢にあり、従て航空路に依る傳染病毒の侵襲に付ても万全の注意を要するを以て檢疫を実施しつゝあり。

第五章 予 防 衛 生

第一節 結 核 予 防

從來本島に於ては島民の衛生思想の幼稚なると本病に対する予防事業が極めて廣範圍にして容易に其の実績を挙げ得ざる等の關係にて本病の浸潤は廣く社会各層に及び、國民保健上一大癌種をなせり。本府に於ては府立療養所施設の拡充を期する一面、其の予防思想普及宣傳に努めつゝありしも、更に之が予防の万全を期すべく昭和十三年三月一日結核予防法を本島に施行し、結核予防の根本対策を樹立すると共に、官民相呼應して島民結核予防思想の普及に努め、更に各州廳を督勵して結核療養所の整備を急がしめたる結果、漸次療養施設増強せられつゝあり。

第二節 癩 予 防

本島に於ては癩病に対する智識極めて幼稚にして本病を怖るゝ風習なく、重症患者が平然横行するの實情にて、之が療養施設等も亦見るべきものなく、本病予防上遺憾からざりしを以て取敢ず昭和五年收容定員百名を限度とする癩療養所樂生院を設立すると共に、其の後本施設を拡充したる結果、昭和十四年度に於ては收容定員七〇〇名に達し

たるが私立樂園と合するときは七八〇名の收容力を有することゝなれり。尙未発見患者相当あるものと予想せらるゝに依り患者の家族等を中心とする新患者早期発見に努めつゝあり。

第三節 花 柳 病 予 防

本島に於ける花柳病の蔓延狀況は其の病性上之を詳かにすること能はざるも、相当廣く浸潤し居るものと想像せらる所に於て本病の予防撲滅は刻下の緊要事なるに鑑み、昭和十五年六月本島に花柳病予防法を施行し、各州廳に花柳病診療所及代用診療所の設置を命する等、之が診療施設の整備を図り、以て特殊業態者は勿論一般罹病患者に対しては実費診療の途を開くの外、特殊業態者に対する予防設備を完備実行せしむる等本病予防撲滅に邁進しつゝあり。

第六章 阿 片 制 度

第一節 概 況

明治三十年台灣阿片制度を確立し、同三十三年九月癮者の網羅を終了せるが、当時吸食特許者は十六万九千六百四十人にして爾後三十七、八年に三万五千三百三十二人に同四十一年に一万五千八百四十九人に対し、新に吸食を特許し爾來二十有余年特許を行はず昭和三年末に至り特許者は僅かに二万七千余人に減少し、其の成績頗る顯著なりしが、尙密吸食癮者潜在し、茲に断禁確保の対策を樹つる必要あり、因て昭和四年一月台灣阿片令を改正施行し、劃期的断禁の

精神を闡明すると共に行政処分に係る癮癮矯正の新策を樹て以て理想的に本制度を改革し、断禁の確保促進を期せり、而して改正阿片令の精神に従ひ新政策厳施前提として密吸食癮者を調査し癮癮膏膏に入りたる五千五百十八人に對し最終的に吸食を特許し、一万三千五百八十四人に對しては之を癮癮矯正の行政処分に附したり。尙既特許者に對しては吸食の止む得ざるものに限り、吸食を特許し其の他は夫々整理の必要あるを認め、之が調査の結果、千二百五十三人を癮癮せしめ三千八百八十四人を矯正処分に附し、結局新政策の確立に依り網羅せる密吸食癮者五千余人に對しては之を矯正又は癮癮せしむる措置を採りたり。本制度の確立以來特許者の漸減狀況を示せば左の如し。

阿片吸食特許者累年比較表

区 分	明治 33 年 9 月	明治 43 年末	大正 8 年末	昭和 4 年末	昭和 14 年末	昭和 18 年末
年末現在吸食數	169,064	98,987	52,063	24,626	9,692	5,446
人口百に付	62	32	15	0.6	0.2	0.1

第二節 阿片癮者の矯正

昭和五年度に於て密吸食癮者の網羅を行ひ、其の結果一万三千五百余人を矯正処分に附し、之等の者を三箇年間に矯正する計画の下に台北に独立の矯正所（更正院）を設け、尙全島の府立医院に矯正科を附置し、全島を通し四百二十五人收容の設備を以て矯正を開始せり。次に既特許者整理の結果、三千八百余人を矯正処分に附したるを以て之を一箇年間に矯正すべく最初の矯正期間三年を四年とし、着々矯正を実施し來り昭和九年三月を以て予定の如く其の矯正を完了せり。

然し其阿片癮者の特質上、再矯正を要するもの尠からざるべく、又新に癮者の生ずること絶無なりと謂ふべからざるを以て阿片癮者の矯正は或る程度之を続行し本事業の済美に最善の努力を竭すこと緊要なるを以て、昭和九年度以降に於ては收容設備を五十人に縮少し、台北更生院のみを存続し第二次的に矯正を継続中なり。

第八編 交通

第一章 鐵 道

第一節 官 設 鐵 道

第一項 組 織

官營鐵道は台灣總督府交通局鐵道部之を經營す。

鐵道部は本部を総務、業務、列車、施設、工作自動車の六課に分課し、二十六係を置く。

鐵道業務運営の爲、台北、高雄、花蓮港の三鐵道事務所及台北、高雄の二鐵道工場を置く。

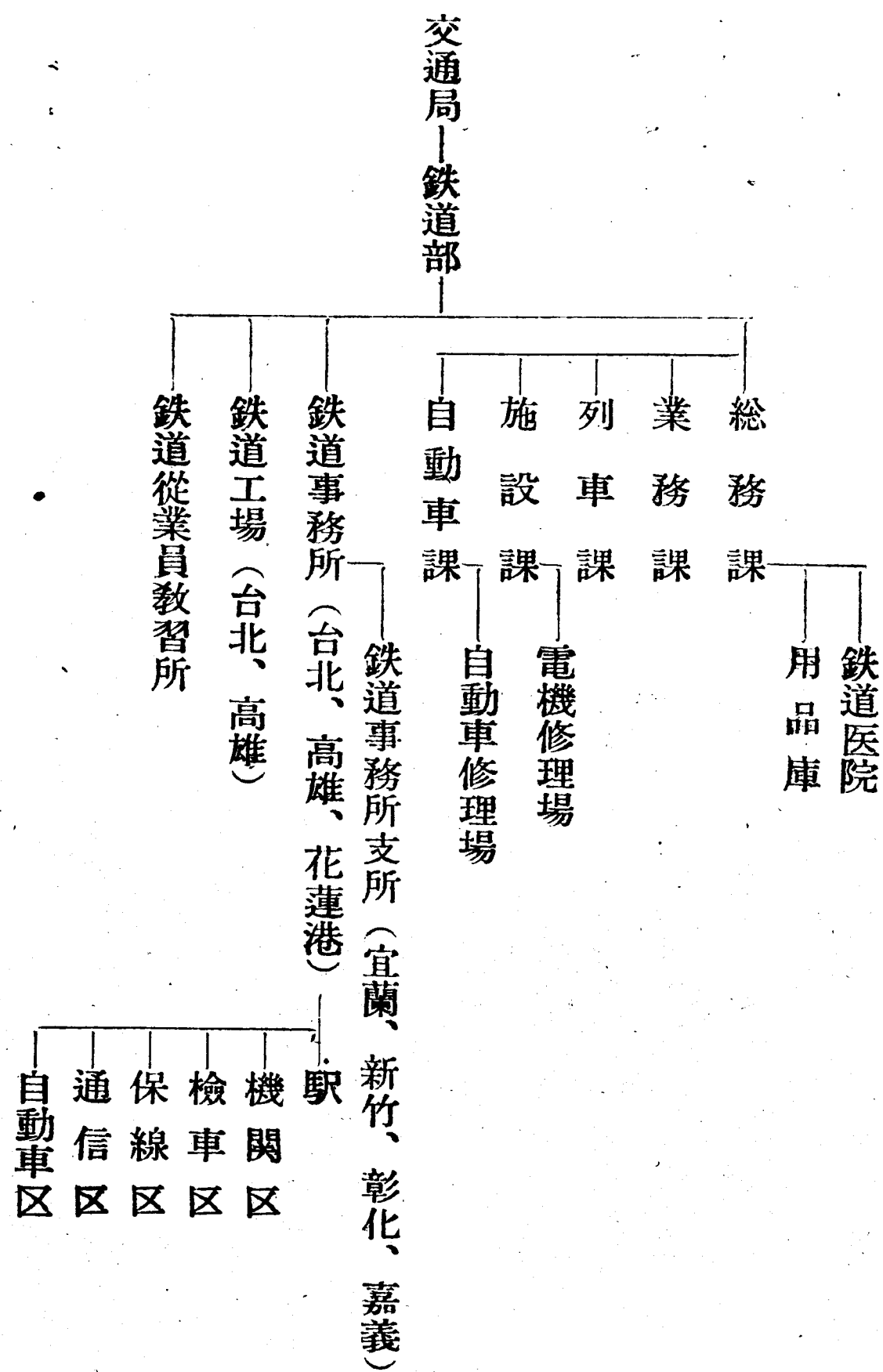
台北鐵道事務所に宜蘭、新竹、彰化の三鐵道事務所支所、高雄鐵道事務所に嘉義鐵道事務所支所を置く。

現場機關の數左の如し。

駅 一九〇 機關區 一三 同分区 三 檢車區 四 同分区 二 保線區 一一 通信區 八
自動車區 五 同分区 六

従業員及其の家族並に旅客の傷痍疾病を治療し、尙一般保健衛生上の向上の爲台北、花蓮港に鐵道醫院を置き彰化及台北鐵道工場内に分院を置く。

従業員養成機關として台北に鐵道従業員教習所を置く。



第二項 従業員

現在従業員(昭和二十年八月末現在)は一九、五一三名にして之が内駅内地人五、四四〇名本島人一四、〇七三名なり。

第三項 経理

鉄道部の会計は台湾総督府特別会計に包含せらる。其の昭和二十年度に於ける歳入及歳出見込額は左の如くなるも空襲被害其の他の事情に依り歳入は約三割減の見込なり。

歳入

客車収入	四六、二二三、六四〇円	經常費	四二、〇九九、四二八円
貨車収入	一七、九六四、一九四	臨事費	六、三三七、四七五
自動車収入	二、六五八、二八三	計	四八、四三六、九〇三
その他収入	九七八、九二六		
計	六七、八二五、〇四三		

歳出

第四項 営業

一、営業料程左の如し。

線別	区間	営業料程
從貫線	基隆高雄間	四〇八・五籽
宜蘭線	基隆蘇澳間	九八・七籽
平溪線	三貂嶺菁桐坑間	一二・九籽
淡水線	台北淡水間	二二・二籽
台中線	竹南、彰化及追分間	九一・四籽

東部線	東花蓮港台東間	一七五・九秆
集々線	二水外車埕間	二九・七秆
屏東線	高雄林辺、林辺東港間	六二・九秆
計		九〇一・二秆

二、運賃制度

(一) 旅客運賃

イ、等級は一等より三等迄とす。

ロ、運賃率は距離(秆)制にして、一五〇秆を境界とす。遠距離通減法に依る。

(二) 貨物運賃

イ、輸送費用(費用主義)と運賃負担力(貨値主義)と折衷せる貨物等級制に依る。

ロ、運賃率は距離(秆)制にして楷梯式遠距離通減法に依る。

ハ、社会政策並に産業政策上の重要物資に対しては一割二分乃至五割の割引賃率を適用す。

(三) 運輸成績

昭和十九年度及二十年度に於ける運輸成績概況左の如し。

(1) 旅客輸送成績

	昭和十九年度	昭和二十年度
乗車人員	六五、四四二、〇六四人	八、七七五、九五七人
延入秆	二、〇一九、八〇一、五四〇	二七五、六三六、九八二
收入	四三、九六二、二三五四	一五、二二二、六〇三円

(2) 貨物輸送成績

	昭和十九年度	昭和二十年度
発送・廻数	七、一八〇、五九二廻	一、〇四六、二二四廻
延廻数	一、〇〇五、六七六、一五四	一四八、七三八、二五九
收入	一五、六六一、八九八円	二、〇〇四、二二八円

(註) 昭和二十年度の実績は八月末迄にして且つ概算とす)

四、小運送

イ、小運送業法に依り小運送業の免許制を採る。

ロ、駅構内荷役に関しては駅構内荷役作業の統一を図る爲基隆、高雄両港及石炭積込を除き、台湾運送荷役会社に限定しあり。

ハ、免許小運送業者数は一五二にして其の店舗数は五二〇なり。

第五項 運 轉

第一目 列車運轉杆及列車回数

昭和十九年十月の空襲以來車輛の損耗に加ふるに漸次石炭事情惡化し、現行列車運轉杆及列車回数は次の如し。

(1) 列車運轉杆

列車種別	杆程
旅客列車	六、六三八・六
貨物列車	三、八八四・八
混合列車	一、六五〇・二
廻送列車	二五九・三
機動車	三七八・六
總計	一二、八一・五

昭和十九年度の一日概数三七、一五四杆に比較すれば概略三四・五%に低下し居れり。

(2) 列車回数

區間	列車設定回数				現下列車運行回数			
	回	旅客	貨物	混合計	回	旅客	貨物	混合計
西部線	20	20	—	40	12	6	—	18
基隆—台北								

台北	新竹	14	22	—	36	12	6	—	18
新竹	竹南	14	20	—	34	10	6	—	16
竹南	彰化	12	22	—	34	8	6	—	14
彰化	二水	16	22	—	38	12	8	—	20
二水	嘉義	14	22	—	36	10	8	—	18
嘉義	台南	14	18	—	32	10	6	—	16
台南	高雄	16	18	—	34	12	6	—	18
高雄	彰化	10	8	—	18	8	4	—	12
彰化	屏東	14	10	—	24	8	2	—	10
屏東	東港	12	16	—	28	6	6	—	12
東港	宜蘭	—	—	—	—	—	—	—	—
宜蘭	花蓮	—	4	—	14	—	—	—	10
花蓮	集集	—	2	—	12	—	—	—	10
集集	水湳	18	6	—	24	16	4	—	20
水湳	東部線	—	—	—	—	—	—	—	—
東部線	花蓮港	—	—	—	—	2	8	2	12
花蓮港	玉里	—	—	—	—	2	6	2	10
玉里	台東	—	—	—	—	—	—	—	—

第二目 列車運轉方式

複線運轉区間には簡易聯動閉塞式を採用し居りしが、電池の入手難に伴ひて双信閉塞式を使用しつゝあり。單線区間には閉塞器式(タブレット式)を主として使用し居るも東部線の大部分には司令法(電話閉塞式)を使用し居り、

且電池の事情如何に依つては一部の線区に対して票券式を採用する予定なり。

第三目 各線区線路容量

現下の閉塞器式に依る各線区の線区容量(最大一日列車運轉可能回数)を示せば次の如し。

区 間	單復線別	線路容量
西部線		
基隆—台北	複線	29
台北—新竹	同	29
新竹—彰化	同	29
彰化—嘉義	線	24
嘉義—台南	同	24
台南—高雄	同	29
高雄—屏東	線	19
屏東—潮州	同	13
潮州—八堵	同	12
八堵—中港	同	14
中港—淡水	同	22
淡水—基隆	同	14
基隆—台北	同	11

東部線		
花蓮港—玉里	同	24
玉里—台東	同	24

第四目 運轉事故

昭和二十年六月に於ける列車運轉事故は一〇二件の多きに達し、内空襲被害に依る運轉事故は二五件にして之を昭和十九年六月の運轉事故と比較すれば次表の如し。

年度月別	1月間に於ける運轉數	責任無責任	計	空襲に依るもの	合計	対一萬回數	對一萬回數
昭和19年6月	1,114,620	52回	77回	109回	109回	0.978回	回強
昭和20年6月	384,345	27回	50回	77回	102回	2.654回	弱

斯の如く運轉事故激増せる理由は左の如きものと思料せらる。

- 一、信号用燈器の急速なる不整備
- 二、空襲に依る混乱
- 三、従業員の素質低下

第六項 施設

一、線路施設の概要左の如し。

線路総延長 本線 一、一五六軒五 側線 四六八軒四 計 一、六二四軒九

隧道総延長 一八杆一

橋梁総延長 三三杆九

(軌條は西部線は三〇疋乃至三七疋なるも東部線に於ては概ね二二疋乃至一二疋の輕軌を敷施しあり)
尙屢次の空襲並に最近の風水害に依り、甚大なる被害を被り之が復旧には相当の日時を要するも差当り、列車運轉に支障無き程度の應急工事を実施し引継ぎ復旧工事を実施の予定なり。

二、建物

建物も空襲に依り各駅共相当の被害を蒙り大破全焼せるものも相当数に上り目下詳細調査復旧対策攻究中なり。

第七項 車 輛

台灣鉄道保有車輛数は左の如し。

(1) 機関車輛数 (昭和20年9月1日現在)

西部線 旅客用	形式	使用 可能車	事故				總計
			入場 中	空襲 被害	運轉 事故	其他 不良	
B 97	2	1	—	—	—	1	2
B 33	10	—	—	—	—	—	—
C 95	24	6	4	3	6	19	43
小計							4

貨物用	形式	使用 可能車	事故				總計
			入場 中	空襲 被害	運轉 事故	其他 不良	
C 57	2	1	—	—	—	3	4
C 55	4	1	—	—	—	2	5
C 12	6	—	—	—	—	1	1
C 92	4	—	—	—	—	—	—
小計							4
小計							83
貨物用							
C 44	4	1	—	—	2	1	4
C 50	3	—	—	—	1	1	2
D 98	20	4	1	3	11	19	39
D 66	9	1	2	—	2	5	14
D 51	16	1	—	1	9	11	27
小計							93
入換用							
B 33	4	—	2	1	1	4	8
C 35	5	2	3	1	3	9	14
C 38	7	3	3	—	2	8	15
E 43	2	—	—	—	5	5	7
小計							44
總計							230

東 部 線
混合及貨物用

形 式	使用可能車	事 故 車				總 計
		入場中	空襲被害	運輸事故	其他不良	小計
LD10	11	2	—	—	—	2
LD50	3	—	—	1	—	1
小計	14	2	—	1	—	3
入換用						17
LC10	1	—	—	—	—	—
LC11	2	—	1	—	1	2
LC12	1	—	—	—	1	1
小計	4	—	1	—	2	3
總計	18	2	1	1	2	6
						24

(2) 客車輛散表 (昭和 20 年 9 月 1 日現在)

西 部 線

種 別	使用可能車	空襲被害事故車	總 計
特 別 車	3	—	3
一 等 車	2	1	3
一 等 臺 車	3	1	4
二 等 車	36	12	48

二等 臺 車	3	1	4
一、二等 車	6	1	7
三等 臺 車	130	67	197
三等 臺 車	4	—	4
三等 臺 車	55	20	75
三等 臺 車	16	—	16
小計	258	103	361
三等 臺 車	8	5	13
三等 臺 車	6	5	11
三等 臺 車	20	8	28
三等 臺 車	8	1	9
三等 臺 車	5	1	6
小計	47	20	67
總計	305	123	428

東 部 線	使用可能車	空襲被害及事故車	總 計
特 別 車	—	1	1
二、三等 車	1	3	4
二、三等 車	7	2	9
二、三等 車	14	10	24
三等 臺 車	2	—	2

郵便手荷物車	4	3	7
総計	28	19	47

(3) 貨車輛数表 (昭和20年9月1日現在)

西部線

種別	使用可能車	空襲被害及事故車	総計
有蓋緩急車	199	50	249
有蓋急車	2,148	495	2,643
有蓋急車	5	—	5
有蓋急車	75	19	94
有蓋急車	49	7	56
有蓋急車	61	24	85
有蓋急車	10	4	14
有蓋急車	249	5	254
有蓋急車	1,844	150	1,994
有蓋急車	5	2	7
有蓋急車	4,645	756	5,401
有蓋急車	9	—	9
有蓋急車	2	—	2
有蓋急車	11	—	11
有蓋急車	4,656	756	5,412

東部線

種別	使用可能車	空襲被害及事故車	総計
有蓋緩急車	15	12	27
有蓋急車	63	44	107
有蓋急車	5	—	5
有蓋急車	26	2	28
有蓋急車	39	11	50
有蓋急車	240	23	263
有蓋急車	388	92	480

(4) ガンリッ自動車数表 (昭和20年9月1日現在)

西部線

号	型	使用可能車	空襲被害及事故車	総計
ナキハ	2400	—	6	6
ナキハ	2300	2	5	7
ホキハ	2200	—	2	2
ホキハ	1010	—	7	7
ホキハ	1000	—	4	4
総計		2	24	26

東 部 線

号	型	使用可能車	空襲被害及事故車	総計
ケオキハ	1000	—	4	4
ケスキハ	1100	1	1	2
ケスキロハ	1200	—	1	1
ケスキロハ	2000	—	3	3
総計		1	9	10

第八項 鐵道工場

鐵道車輛修理施設として台北及高雄に鐵道工場を花蓮港に修理場を置き、台北鐵道工場は機關車、客貨車を高雄工場は貨車を花蓮港修理場は専ら東部線の機關車、客貨車の修理を行ふ。右の三工場共空襲に依り相當の被害を蒙りたるも就中、高雄工場は壊滅的打撃を被り、之に加ふるに空襲被害対策の爲若干の機械類を分散疎開せる結果、現在修理能力は約三分の一に低下しあり。

理能力は約三分の一に低下しあり。
施設概要左の如し。

施設概要左の如し。

車 輛 修 繕 施 設			鉄道工場			修 理 場			備 考
名 称		1			1				
機関車修理能力	一般	100	局修	200	一般	10	局修	15	空襲被害に依り現在能力は三分の一に減す。() 内数字は内大破に依り使用不能数を示す。(以下同し)
客車修理能力	同	250	同	500	同	4	同	4	
貨車修理能力	同	1,400	同	1,400	同	10	同	10	
								30	

[illegible]

第二節 私設鉄道

台湾に於ける私設鉄道は概ね製糖会社の経営にして製糖原料輸送の目的を以て敷設したる専用鉄道の一部地方交通の要路に当るものを一般公衆の利用に供し製糖事業の傍ら運輸營業を営むを通例とし、当初より専ら一般運送の用に供する目的を以て敷設されたる鉄道は台北鉄道（万華新店間）及台湾交通（豊原土牛間）の二会社線なり。尙この外に台湾拓殖（阿里山線、八仙山線、太平山線）の他に三森林、工業鉱業専用鉄道あり。

私設鉄道の概況別紙の通りとす。

私設鉄道概要

起 着 者	營業線料	専用線料	軌 間	停車場数		機関庫数	鉄 道 車 輛 数			
				駅	停車場		機関車	動車	客車	貨車
台灣製糖株式会社	130.2	592.9	762	50	—	10	69	12	74	4,594
明治製糖株式会社	106.7	445.9	762	76	—	7	68	18	137	4,197
日糖興業株式会社	253.4	706.5	762	140	—	14	119	23	185	7,195
塩水港製糖株式会社	52.2	323.3	762	34	—	4	49	3	46	2,996
台北鉄道株式会社	10.4	—	1,067	14	—	1	4	4	14	12
台湾交通株式会社	13.1	—	762	11	—	1	4	3	12	51
台湾拓殖株式会社	95.6	16.7	762	26	—	7	31	—	22	495
日本鉱業株式会社	12.3	1.7	762	5	1	2	18	—	4	106

基隆炭鉄株式会社	—	0.6	495	—	—	1	6	—	—	400
台陽鉄業株式会社	—	3.9	495	—	—	1	4	—	—	225
三五公司源成農場	—	21.5	762	—	—	1	3	—	—	62
花蓮港木材株式会社	—	6.6	762	—	—	1	1	—	—	—
台灣興業株式会社	—	4.2	762	—	—	1	2	—	—	3
益興炭礦株式会社	—	9.2	610	—	—	1	6	—	—	359
南日本塩業株式会社	—	50.2	762	—	—	1	10	—	—	290
台灣電力株式会社	—	0.7	1,067	—	—	1	1	—	—	—
嘉南大圳水利組合	—	7.2	762	—	—	1	1	—	—	22
台灣化成工業株式会社	—	1.3	1,067	—	—	1	1	—	—	—
淺野セメント株式会社	—	0.9	1,067	—	—	1	1	—	—	—
張 總 明	—	3.7	495	—	—	1	3	—	—	—
台拓化学工業株式会社	—	4.5	1,067	—	—	1	1	—	—	—
合 計	673.9	2,351.5	—	—	—	59	402	62	494	21,007

註 爆破の爲本表数量より幾分減少しある見込みなり

第二章 自動車

第一節 官営自動車

第一項 概況

官営自動車（局営自動車とも称す）事業は他の陸上交通機関との連繫を保持しつゝ島民の福利施設に資せんが爲、即ち官設鉄道併行路線及主要道路上の營業を行ひつゝあり。而して之が輸送量は累年増加せしむる必要あるに拘らず運轉用物資の入手難及ガソリン消費規正の爲輸送力の不足甚しく、爲に漸減の傾向にあり。然れども將來は創意工夫及一般經濟情勢の復元に依り一層輸送力を増進せしむるの要切なるものあり。

第二項 車輛

官営乗合自動車及貨物自動車の総数並に可動車数は左の如くにして新車及部分品の入手困難なる現在に於ては急速に可動率を向上せしむることは困難なり。

乗合自動車 総数 一一四 内 可動車 五三
貨物自動車 総数 五〇 内 可動車 三八

第三項 營業料程及走行料

自動車營業料程を表示すべき運行区間及自動車走行料左の如し。

局営自動車一日走行料 (昭和20年8月31日現在)				
区 名	運 行 区 間	区間料程	運行回数	走行料
北	北新	9.3	4	74.4
	北北	14.4	2	57.6
	北新	11.1	30	66.0
	北北	14.8	2	59.2
中	中豐	13.9	4	111.2
	中雄	9.0	2	36.0
	中雄	13.5	3	81.0
	中雄	147.5	2	590.0
雄	雄林	46.0	2	184.0
	雄林	18.0	1	36.0
	雄林	10.0	1	20.0
	雄林	15.0	2	60.0
春	春ガ	147.5	2	590.0
	春ガ	119.9	3	719.4
	春ガ	119.9	2	479.6
	春ガ	119.9	2	3,764.4
計				

第四項 運賃制度

一、旅客運賃

二二一料以上の区間に付ては毎料五厘の通行税を含み山線（東海線蘇澳タロコ間八五・一料、南廻線楓港知本温泉間八九料）は毎料七錢五厘、平地線（山線以外の全区間）は毎料五錢五厘を以て運賃計算の基礎賃率とす。

二、貨物運賃

台北自動車区に於ては最低運賃を二十七円とし、區間を増すに應じ増額するものとす。
蘇澳枋寮自動車区に於ては鉄道同線の賃率を採用し營業料程を旅客營業料程の七倍とす。
車扱賃率は小口扱賃率の二割減とす。

第五項 運輸成績

自動車運輸成績としての運輸收入並に數量左の如し。

局内自動車運輸收入並に輸送數量実績 (昭和20年自4月至8月末)

種別	北 中 南 部				南 題 線				東 題 線													
	台	北	中	高	雄	枋	寮	恒	春	大	武	台	東	蘇	澳	南	澳	新	城	花	蓮	港
乗車人員	129,331	人	26,410	人	64,565	人	54,443	人	17,244	人	2,361	人	8,344	人	12,375	人	156	人	11,764	人	25,275	人
旅客收入	55,308.85	円	17,909.85	円	37,139.85	円	89,568.65	円	18,017.48	円	2,419.91	円	4,098.56	円	48,327.10	円	214.20	円	9,450.03	円	65,050.77	円
貨物屯数	17,155.0	屯	—	屯	—	屯	478.5	屯	112.0	屯	46.0	屯	2,790.0	屯	—	屯	0.2	屯	38.0	屯	—	屯
貨物收入	18,124.00	円	—	円	—	円	13,415.20	円	275.95	円	1,821.50	円	9,351.52	円	—	円	9.50	円	2,068.75	円	—	円
手小荷物收入	—	—	—	—	—	—	755.41	—	—	—	—	591.48	—	—	20.62	—	95.46	—	600.00	—	—	—

第六項 自動車修理費

第六項 自動車修理場

台北に自動車修理場を設く其の施設並に修繕能力左の如し。

名 称	台北自動車修理場	備 考
自動車修繕能力	一般年 60 局修年 48	
事務所	1	
技工養成教室	1	
倉庫	2	
組立場	1	
機械場	1	
钣金場	1	
塗装場	1	
縫製場	1	
鍛冶場	1	
木工場	1	
備考	各職場は施設簡素にして修理能力微弱なり	
	組立職場の一部を使用	

第二節 民営自動車

第一項 概 説

民営事業に付ては乗合自動車及貨物自動車共從來自動車交通事業法に依り、政府に於て統制指導し來れるも今日既

に自由營業に移行せんとする氣運あり。而して將來政府に於ける民營自動車監理行政は統制主義より自由主義に必要的に重点を指向せらるもの如く思料せらる。然れども將來円満なる事業の遂行を期せんが爲には單なる監督見地のみにては輸送力を増強し島民の福祉増進を期すること困難なるものの如し。尙從來新車物資並に燃料の入手難に基き戰時中民營自動車輸送力の漸減を來せしは官營自動車に於けると同様なり。

第二項 乗合自動車

一、民營自動車は經營者二十社にして、別に市營として三事業主体あり。戰時中自動車經營は貨物に重点を置きたる關係上実動車は著しく減少し、經營難に陥りたるも終戰の結果車輛走行料は將來相当の上昇あるものと思料せらる。

二、本島乗合自動車事業現況左の如し。 (昭和18年度)

別 屬 別	業者数	保有車数	実動車数	興業費	路線料
北	5	307	80	3,958,777.54	543
南	3	138	25	931,218.36	557
中	4	262	52	2,958,707.55	1,662
西	5	293	83	3,078,483.78	1,605
東	3	149	59	2,774,083.35	628
花	1	17	8	150,085.46	30
和	1	10	8	60,656.11	132
和	1	2	2	3,526.23	12
計	23	1,178	317	13,915,538.47	5,170

三、全島營業者の昭和十八年度に於ける收支狀況及輸送人員左の如し。

(1) 收支狀況

收入 一七、三二六、五四四円 支出 一五、三二一、八八一円 益金 二、〇〇四、六六三円

(2) 輸送人員 八八、四六七、一六七人

四、全島營業者の保有車輛数は昭和二十年七月現在にて八九八輛なるも可動車輛は其の内二一六輛なり。

第三項 貨物自動車

一、貨物自動車事業は一州一社に統合せられ、現在民需物資輸送に相当の貢獻をなしつつあり。然れども保有輛数少く、島民の全面的輸送需要に應ずること困難なる情勢にあり、將來益々輸送力増強を期する要あり。

二、本島貨物自動車事業現況左の如し。

別 屬 別	現有車数	実動車数	興業費
北	164	78	2,124,596.44 円
南	132	66	909,715.37
中	184	80	2,244,613.63
西	124	59	1,371,412.41
東	112	55	928,824.18
花	69	33	744,543.13
和	43	14	154,536.78

運送数量

昭和十八年度輸送噸數 一、七五九、九六三噸

全島營業者の昭和十八年度に於ける收支概況及輸送数量左の如し。

(1) 收支狀況

收入 一二、二二九、一二〇円 支出 一一、一九七、七二五円 益金 一、〇三一、三九五円

(2) 輸送量

輸送噸數 一、七五九、九六三噸 延噸杆 三八、四七〇、六八六噸杆

全島營業者保有車輛數は昭和二十年七月現在にて六七三輛なるも可動車輛は其の内三二九輛なり。

第三章 港 灣

第一節 概 況

台灣は其の面積三万五千九百七十四平方杆、其の海岸線延長千五百六十六杆にして陸地面積一方杆に対し海岸線延長〇・〇〇四三杆に過ぎず、従つて其の海岸線は單調にして屈曲に乏しく自然の良港極めて少く改隸前の港灣狀態は天然の海浜或は河口を利用したる程度のもなり。

基隆、高雄、淡水、安平の四港は改隸前の開港を引続き開港し蘇澳、旧港、後龍、梧棲、鹿港、布袋、東石、馬公、東港の九港に対しては支那型船のみ出入を許す特別開港制度を設け対岸との特殊關係を持続せしめたるも、元來是等の淺吃水船の利用に依る小港の發達は往時陸上交通の展げざるに依るものにして輓近陸上交通機關充実に伴ひ概ね其の存在價值を失ひ其の貿易額も年々衰退せるを以て昭和十八年十一月後龍を最後として特別開港を遂に廢止せられたり。

以上の港灣は何れも近代商港としての價值なかりしを以て改隸直後築港の議起り、明治三十二年基隆港築港に着手次で明治四十一年高雄築港に着手、昭和六年花蓮港築港に着手、爾來四十余年間繼續工事を施行し、尙後記の諸築港工事を通し、其の工費實に一億円余を要せり。

其の結果現今に於ける出入貨物屯數も既に年一千万屯を突破する狀態にあり右三港に就ては今尙工事繼續施工中にして何れも昭和二十一年度中竣工の予定なり。

右の外沿岸航路船の寄港地として安平港口改良工事、馬公港修築工事、蘇澳港修築工事等を施行、貿易港として新高築港工事、新高工業港築造工事等を施行せるも蘇澳工事修築並新高築港工事同工業港築造工事は何れも太平洋戦争の影響を受け工事中途に其の完成を見ずして中止の止むなきに至れり。尙此の外戒克船其他機帆船及漁船溜として蘇澳、基隆、新高、安平、高雄、馬公の各港に小設備を施行せり。

第二節 基隆築港工事の概況

改隸当時の基隆港は仙洞鼻以内の内港に鯨公鯨母の二島横はり内海の三分の二は干潮時に露出する干瀉にして戒克船の僅に滞渚を通じたるのみ、汽船は市街地を距る一哩半の外港に投錨したるが外港は半歳を通ずる季節風の爲、風波荒く旅客の乗降貨物の荷役に順る困難を極めたり。

依て初代総督は直ちに政府に対し基隆港に関する意見書を提出し、交通及商業上本港築港の急務を力説し、調査費十万円を得て地質、潮流、深淺、波浪、氣象及材料の調査を行へり。而て本調査に基き明治三十一年十二月外港防波堤の築造及内港浚渫の計畫を樹て予算一千万円を要求せるが財政上其の成立を見るに至らずして、僅かに應急施設として港内の一部を浚渫し、汽船を内港の安全地に入るを目的とし、明治三十二年以降四箇年の継続事業として二百四十四万円を以て築港工事に着手せり。是実に基隆築港工事の端緒にして第一期基隆築港工事と称す。基隆港は前述せる第一期築港工事の完成により、三千屯迄の汽船を棧橋浮標等に同時四隻繋留し得るに至り、港灣の面目を一新したるも、只單に應急的の仮施設に過ぎず、以來第二期工事第一次拡張工事第二期工事第三期工事等の迂余曲折を経て今日に至りたるものにして、昭和二十一年度を以て一應現在計畫中の工事は完成の筈なるも近年に至り、工事資材勞力不足等の爲め、尙幾多の未完成の部分を残すの止むなき状態にあるなり。

以上概説の如く基隆築港工事に於ては工事着手以來、昭和二十一年度の竣工期を以て継続年数四十八箇年となり。其の總予算額四千六百八十六万三千余円なり（現在迄使用額約四千三百十万三千円）明治三十五年第一期工事完成簡

の完成に伴ひて漸次大型船の出入頻となり、現在の設備にては岸壁及棧橋浮標に一万噸以下二、三噸の船を得、何自錨又は交則的方法に依れば外に數隻を收容し得べく、機帆船等の船舶設備荷役設備等も完備せられ昔年の一漁村程度に過ぎざりし基隆港をして遂に世界の檣舞台に立たしめたり。

工事計畫及設備の概要を示せば次表の如し。

基隆港の設備概要

区 分	單位	既設計畫完 成後の設備	既成設備	空襲被害	現在状況	備 考
繫船能力	隻	30	25	11	14	
標準荷役能力	噸	3,300,000	2,840,000	1,936,000	904,000	
鋪地	平方米	2,332,300	2,210,000	沈船 32	—	沈船 32 隻中には解船以下小型船は含まず
防波堤	米	1,213	1,116	—	1,116	完成後（外港 650 仙洞 327 社寮 236）の延長
岸壁	米	2,756	2,756	1,076	1,680	
延船	隻	15	15	7	8	
船棧	個	1	1	1	—	小船用機橋を除く
浮橋	個	15	9	3	6	
繫船場	米	5,589	4,844	4,844	—	前面沈船に依り使用不能
繫物	米	15棟	15棟	3棟	12棟	
上家及倉庫	平方米	81,755	81,755	7,000	74,735	官設のみ計上

岸壁起重機	台	13	13	9	4	被害程度は沈船に依り使用不能
船渠	箇所	5	5	1	4	
運河	米	—	2,848	377	2,471	
修築渠	基	3	2	—	2	既成2万屯級1 3千屯級1 未成7千屯級1

第三節 高雄築港工事概況

高雄港は蜿蜒三里に亘る防波堤狀の砂嘴に依りて抱擁せらるる水面積千六百九十三万平方メートルの高雄灣内灣口の内側に位置し、平坦数里に亘る臨港地を控へ元來良港灣たり得る地形を有すと雖も斧鉄を加へざりし当時の内港は水極めて浅く、僅に港口内附近六万六千平方メートルの区域のみ約三米他は総て干潮面下一米を超へず、剩へ港口全幅百六米の中間には独立岩礁露出し、兩岸に無數の暗礁あり、潮流急にして一時間四哩に及び港口外には航路を横断する堤狀の淺洲あり、爲に戒克船艇の類のみ辛じて内港に出入し、汽艇は波浪高き港外二哩の沖合に碇泊する已むを得ざる状態なりき、而して内港の北面には塩田、養魚池連り僅に旗後及其の対岸哨船頭に小街衢を形成し、明治三十七、八年頃の貿易額は五百万円吞吐貨物五万屯に過ぎざりき、折々高雄築港計畫は明治三十三年より翌年に亘る港灣調査に始り、其の後南部台灣の開港せらるゝと共に益々築港の必要急を告ぐるに至り、明治三十八年より翌年に亘り浚渫船を以て港口外淺洲の試験的浚渫其他具体的調査を進め、愈々工予算四百七十三万三千円を以て明治四十一年度より大正元

年以來に至る五箇年継続事業として第一期工事に着手以來第二期工事、第二期變更工事、第二期變更追加工事、第三期工事、第三期追加工事等紆余曲折を経て今日に至り現在予算一千二百五十万円を以て昭和十九年度以降三箇年継続工事施行中にして昭和二十二年竣工の予定なりしなり。

以上概況の如く高雄築港工事に於ては工事着手以來昭和二十二年度の竣工期を以て継続四十箇年となり、其の総予算額五千八百三万八千円なり（現在迄使用額約五千万円）

明治四十三年始めて内港に汽船の出入を許し、爾來工事進捗に伴ひて漸次大型船の出入頻繁となり、現在の設備に於ては岸壁及棧橋浮標に於て一万屯級以下三四隻を繋留し、尙錨又は変則的方法に依れば外に十数隻を收容し得べく舢舨其他小型船の繋留地並に上家倉庫荷役機等の海陸連絡設備も亦大に改善せられたるなり。

工事計畫及設備の概要を示せば次表の如し。

高雄港設備の概要

区分	單位	既定計畫完成後の設備	既成設備	空襲被害	現在状況	備 考
繋船能力	隻	47	34	20	14	
標準荷役能力	噸	3,850,000	2,910,000	1,112,400	1,797,600	港口航路沈船の爲現在入港不能なり
鋪地	平方米	2,797,260	1,567,647	沈没船13隻	—	
防波堤	米	938	938	—	938	沈没船の爲使用不能2万屯級以下
防砂堤	米	938.8	938.8	—	938.8	

岸壁	長	米	3,027	2,387	750	1,637	被罣 2箇所
碼頭	長	米	19	16	5	11	
延船棧橋	長	米	152	162	—	162	被罣 2箇所
繫船浮標	長	米	3	3	—	3	引揚容易なり
物場	長	米	25	15	13	—	約 5割使用見込
上家及倉庫	平方米	3,810	3,810	被罣十数箇所 1,905	1,905	4棟	
岸壁機重機	台	38棟 43,885	25棟 40,687	21棟 28,125	4棟 12,562		
溜	個所	19	15	11	4		
運河	個所	5	5	4	1		小型船の沈没せるもの數十隻あり
雄川	米	1,764	1,764	—	1,764		
高千	米	3,102	3,102	—	3,102		

第四節 花蓮港築港工事概況

東部台灣に於ける物資の出入は挙げて海運に依るものなるが、現在花蓮港築港以前に於ては船舶の碇泊する箇所は何れも大洋に廊開せる海浜なりしが爲、荒天時の碇泊不能なるは勿論海上平靜の日に在りても幾に午前中数時間陸上

とい船舶連絡を取り得るに過ぎず、而かも其の船舶連絡たるや幾多の危険困難を伴ひ汽船の碇泊一日を費すも二百五十屯以上の荷役不能の状態なりたり。

依て昭和六年度に於て予算七百四十二万九千余円を以て七箇年繼續工事として築港工事に着手、其の後予算の都合に依り予算額七百十九万四千円に縮減竣工期を十四年度迄延長同年中途に於て船舶の入港可能となり開港せり。而して其の後更に港勢の進展に即應する爲、同十五年度以降予算四百八十四万余円を以て拡張工事を繼續する事となり、昭和二十二年竣工の予定にて工事進行中なりしものにして其の計畫及既成設備空襲被害後の概況次の如し。

花蓮港の設備概要

区別	單位	既成計畫完成後の設備	既成設備	空襲被害	現在狀況	備 考
繫船能力	隻	9	3	3	—	既成は 3,000 屯級 未成は 6,000 屯級
標準荷役能力	噸	1,000,000	450,000	—	—	
錨地	平方米	177,000	105,000	—	—	沈船 10 隻
防波堤	米	1,530	1,530	—	1,530	
岸壁	米	1,045	410	—	410	前面沈船に依り 大型船接岸困難なり
延船	米	7	3	—	—	
繫船浮標	個	4	—	—	—	船 2
物場	米	660	660	—	660	

上家及倉庫	平方米	—	2棟 3,616	2棟 3,616	—
運河	米	2,100	2,100	—	2,100

第五節 新高築港工事概況

本島西部地方は本島産業の中樞を有するも現在開港たる基隆、高雄兩港は其の位置南北に偏在するを以て此の中間に於ける適當の地に港灣を新設し、以て中部台灣の門戸たらしむるは最適切緊要と認められるに至りたるを以て台中州大甲郡下の海浜をトし、一大商港を築設することとなりたるものなるが、由來中部地方は未開發水力電源百十數万キロワットを有する一方比類稀なる工場地帶造成に適する海浜を有し、且附近は住民多くして人的資源を求むるに容易にして各種工業勃興の促進を期待し得べく、茲に緊急本築港の竣成を期し以て本島産業の躍進的發展に順應せしむる爲、昭和十四年度以降四箇年半繼續予算一千五百万円（公債支弁）を以て第一期工事に着手、第二期工事として昭和十八年度より三箇年繼續工事として予算一五、五〇〇、〇〇〇円を計上施工中の処、昭和十九年八月戦争の影響による諸種の狀勢下開港迄進行し得ず未成の儘中止の止むなきに至れり。工事の概況は次表の如し。

新高港の概要

区分	單位	既定計畫 完成後の設備	既成設備	空襲被害	現在狀況	備 考
築港能力	隻	7	—	—	—	—
標準荷役能力	噸	900,000	—	—	—	—
鋪地	平方米	405,000	253,500	—	253,500	延長 11,600 米中に13内 堤 2,100 米を含む
防波堤	米	11,600	6,200	—	6,200	—
岸壁	米	1,190	—	—	—	—
延長	隻	—	—	—	—	—
船席	個	8	—	—	—	—
繫船浮標	個	1,190	300	—	300	—
物揚場	米	—	—	—	—	—
上家及官設倉庫	平方米	2棟 6,600	—	—	—	—
船溜	個所	—	—	—	—	—

第六節 新高工業港築造工事概要

新高商港の築造に関連し隣接地に工業港の築造計畫を進め、昭和十六年度より同二十年度に至る五箇年繼續工事として予算四百九十二万一千円を以て商港南防波堤外の海岸に築造中の処、昭和十九年八月太平洋戦の影響を受け、新高商港築造工事中止となりたる結果、本工事も亦堤防三、〇〇〇米を築造したるのみにして中止のやむなき状態となりたるものなり。

工事概要次の如し。

- 1 新高商港南防波堤第一屈曲点より南西に向ひ陸岸と略並行に延長三、〇〇〇米の堤防を築造す。

2 堤防に並行し其の延長二、三〇〇米附近より左折する延長三、二〇〇米、水深二米五、底幅一〇〇米乃至一四〇米の運河を浚渫によりて開鑿す。

3 前号運河より分岐して埋立地内に通ずる延長一、二〇〇米、水深二米五、底幅五〇米の運河二條を浚渫に依り開鑿す。

4 右浚渫土砂に依りて運河陸地間の海面約三、三六〇、〇〇〇平方米を標高六米乃至六米五に埋立す。

5 右埋立地に延長七、五〇〇米の土止護岸を築造す。

第七節 新高港漁港船溜築造工事概要

昭和十五年度以降二箇年繼續工事として予算百十万円を以て小型漁船溜の築造に着手、起工後工期一箇年を繰延べ昭和十七年度完成、現に大に利用されつゝあり。工事の概要次の如し。

1 商港の北寄の位置に幅員一八〇米、延長六七五米、面積一二七、〇〇〇平方米の船溜を設け、此の船溜を商港埠頭の先端外にて汽船泊地に連絡する幅員六〇米、延長六〇〇米の航路を設く。水深干潮面下二米五とす。

2 右浚渫土砂を以て標高六米の漁港用地約三二〇、〇〇〇平方米を造成す（外に買収地二二七、〇〇〇平方米あり）

3 繫船棧橋延長三〇〇米仮護岸延長五三〇米、仮土止延長一、一七〇米を築造す。
以上の施設に依り船溜内は漁船百隻内外同時繫留に適す。

第八節 蘇澳港修築工事概況

蘇澳港は本島に於て未だ修せられざる港灣中にて最良の自然の灣形を爲せども、其の水際の連絡條件甚だ不良にして商港機能を發揮すること能はざる現状にあり、然るに最近当港の背後地域に各種生括諸会社の建設せらるゝ等ありて港灣修築の議起り、昭和十六年度以降三箇年繼續事業として予算一、七三五、〇〇〇円を以て工事施工中の処、予算其の他の都合により竣功期も昭和二十年度に延長されたり。其の間再度に亘る暴風被害及資材労力不足等の爲、予定の通り工事も進捗せず併せて太平洋戦争の大なる影響を受け、遂に昭和十九年度に於て工事半ばにして中止せるものなり。

工事の進行は計畫の一部基礎工事を施行せる程度に過ぎず。

計畫の概要次の如し。

1 東防波堤延長四七〇米、南防波堤延長四一二米を築造す。各堤内水面積八四、〇〇〇平方米なり。

2 右東及南防波堤内に東内堤南内堤の総延長三四〇米を築造す。堤内水面積約四〇、〇〇〇平方米とす。

3 東南両端に航路標識燈各一基を設置す。

4 船溜西南部に総延長五七〇米、水深干潮面以下三米の荷揚場物揚場前面に護岸延長二四〇米を築造し、物揚護岸前面を干潮面下三米に浚渫す。右土砂に依り物揚場後方を標高三米に埋立をなす。

5 南防波堤根部より南方に向ひ海岸堤防延長三四〇米を築造す。

- 6 南防波堤物揚場背面に面積一、五〇〇平方米の上家一棟を築造す。
- 7 物揚場と蘇澳駅とを結ぶ鉄道を建設す。

第九節 大型修船渠設備概況

本島に大型汽船修繕用船渠の必要なることは敢て多言を要せざる所にして基隆港第二期築港計畫に於ては一万屯級修船渠の築造計畫を有したるものなるが、諸種の都合に依り該計畫の実行を見合はすこととして今日に至りたり。然るに最近の時局に当り、特に其の必要を増すに至りたるを以て昭和十二年度以降五箇年継続（当初三箇年継続なりしを二箇年繰延べたり）に依り予算総額四百三十七万円を以て基隆港内社寮島城嘴角に艦船一万屯級乾式船渠を築造することとせり。

本施設の概要左の如し。

- 一、土地の買収及造成に依り船渠敷地及工場其他用地約二万三千四百坪を得たり。
- 二、左の主要寸法を有する船渠を築造す。

渠 長	内戸当より渠頭迄	二〇七米〇〇
渠 幅	天端幅	三一米八〇
	底 幅	二七米〇〇
渠口幅	天端幅	二八米〇〇

底 幅 二五米八〇

渠口水深 内戸國上に於て最小満潮位下 八米四七

- 三、延長二百十五米、水深九米の繫船岸壁及延長百八十四米、水深三米の荷揚石垣を築造す。
 - 四、船渠及岸壁に附屬する浮戸、盤木、排水裝置モーターキヤツスタン、移動塔クレーンを設置す。排水設備は毎時約二万屯の排水を行ひ、最小満潮時に於ける満渠水量を約四時間にて排除する計畫とす。
 - 五、鉄筋スレート張構造の機械工場（四五〇坪）鑄鉄工場（三〇〇坪）鉄工場（三五〇坪）木工場（一八〇坪）及船渠工場（九〇坪）並に煉瓦造倉庫（二一〇坪）鉄筋混凝土造事務所（二〇〇坪）及鉄骨混凝土造職工食堂（二〇〇坪）を建設し各工場内の機械据付工事を施行す。
 - 六、機械工場建物、鑄鍛工場建物、船渠工場建物に各一台のクレーンを取付く。
 - 七、船渠及繫船岸壁の前面約七万五千平方米を水深干潮位下九米に浚渫す。
 - 八、三百五十馬力曳船一隻及三十屯浮動起重機船一台を新造す。
- 本修船渠は昭和十六年十二月之を完成せるが、其の設備は台灣船渠株式会社に貸付し同社をして經營せしむることとせり。

第十節 安平港及台南運河設備概況

安平港は往時深く台南市に近接灣入して廣大なる水面を有し約七十年前、即ち西歷一千八百六十年の開港當時に在

りては市街は湾内の孤島なりしも、今や全く陸続となり汽船は旧港口を距る二湮の沖合に碇泊し得るに過ぎず、従つて同港の現状は港灣と称するよりも寧ろ泊地と呼ぶを適當とするに至れり。

其の施設概況に付ては次の如し。

一、旧運河施設

明治三十七年十二月予算二千五百円を以て調査を施行明治四十年度より大正九年度に至る間工費二十九万余円を以て各滯筋延長三、三〇一米の浚渫及一部の埋立工事等を施行したるも本運河は結局利用し得るに至らず其の計畫を廢棄し新運河工事を施行せり。

二、新運河施設

大正十一年度より工費七十余円を以て四ヶ年繼續工事として着手、大正十五年三月竣功せり。運河の延長三千七百八十三米、幅員上幅三六三米、底幅二七米、敷幅七三米（敷幅廣きは南側に高さ干潮面三米上幅三米大の堤防を築き北側を台南安平道に接続して在來地盤より〇米六埋立たるに依るものとす）水深干潮面下一米六八、尙右運河の附属設備として次の計畫に依り安平及台南船溜を築造せるも濡筋は完全利用されるに至らず。

安平船溜

位置 運河取入口より八百十五米 水面積 二万一千八百八十八平方米

水深 干潮面下一米八

石垣延長 四百五十五米

三、安平港施設

昭和十年度以降三ヶ年繼續工事として予算七十七万円を以て着手昭和十三年三月竣功せしめたり。

其の概況次の如し。

- 1 港口を距たること南方約二、〇〇〇米の地点に幅員約一〇〇米の港口を新設
- 2 港口を挟み延長二六〇米の導流堤二條を築造
- 3 港口と台南運河とを接続する水路を干潮面以下二米に浚渫せり。

第十一節 蘇澳漁港設備概況

蘇澳港は本島北部の漁港として好適の位置を占むるを以て國庫予算約六十六万円、大正十年度より二箇年繼續事業として漁港修築に着手し（二回繰越）同十三年度に竣功せり。其の施設概要左の如し。

- 一、船溜面積七万六千三百平方米、水深干潮面下一米八乃至二米七
 - 二、荷揚場石垣延長千二百二十九米
 - 三、護岸延長港口東側百八十二米、港口西側百四十米
- 右漁港施設の外当港に対しては台北州が大正十四年度州費約一万五千円を以て港内の暗礁を去除き繫船浮標一個を設置せり。

第十二節 新港漁港設備概況

新港は本島東部漁業根據地として好適の位置を占むると台東地方海陸連絡の利用に備へ得るとに依り、國庫予算八

十四万四昭和五年度より二箇年継続事業として漁港修築に着手し、昭和四年度着手して中止再興昭和七年度に竣功せり。尙其の後昭和十二年度に於て港奥に漁船曳揚場を設備せり。
其の設備概要左の如し。

- 一、防波堤 延長東側 二百五十五米 西側 二百米
- 二、繫船岸 延長 五百四十九米 水深 干潮面以下一米八乃至二米七
- 三、漁船引揚場 五千二百五十三平方米
- 四、護岸 延長 百四米
- 五、船溜 面積 五万四千五百四十五平方米 水深 干潮面下三米六

第十三節 海口船溜設備概況

海口船溜は大正十一年度の築造に係り高雄港以南に於ける唯一の小型船避難港なり。計畫当初は予算其の他の関係上防砂施設を欠きたる爲、築造極めて急速にて漂砂の爲埋塞せられ、其の都度僅に一部の浚渫に依り一時を湖塗し來りしが、昭和三年度防砂堤を築造し砂害の大半を防止し得ることとなり。

本港修築の爲國庫より支出せる工事費總額二十二万円にして主なる設備左の如し。

- 一、防波堤 延長 三百三十一米
- 二、防砂堤 延長 三百十八米

- 三、護岸 延長 三百四十米
- 四、水深 一米八二乃至二米七三 船溜面積 二万四千七百九十三平方米

第十四節 馬公港設備概況

澎湖島は台灣本土其の他との交通運輸の便に恵まれざるのみならず、島内は人口の過剰と生産の不足とに依り島民極度に疲弊し、殊に昭和十一年馬公港の開港閉鎖に因りて新に貿易上の恒久的打撃を蒙りたるを以て速に何等かの經濟的救済策を講ぜざるべからざる状態にある一面、非常時局に対する要塞並に要港戦備の必要も伴ひ本島に澎湖施設の急を訴ふるに至れり。茲に於て澎湖島重要産業たる水産業の發展を畫すると共に國防充實の一端に資すべき澎湖修築の計畫を樹立し、昭和十二年度以降三箇年に亘り継続予算總額八十五万円を以て馬公港に汽船及大小漁船其の他の雜用船の繫留休泊と水陸連絡を完全ならしむる爲、左の諸工事を行ふこととし予定の通昭和十四年度を以て之を完了せり。

- 一、第二棧橋附近より松島記念館裏附近に至る海岸を埋立て標高四米の土地三万三千八百五十平方米造成す。
- 二、前号埋立地の西端に於ける前面に接して総幅員十米天端幅員三米六延長百米の突堤を築造す。
- 三、埋立地の前面に水深干潮面以下三米の荷揚場延長七十米岸壁延長二百七十米護岸延長二百米を築造し、又其の側面に護岸延長二十三米及仮護岸延長百二十三米を築造す。
- 四、松島記念館裏手岸壁及護岸前面を碎岸掘鑿して水深干潮面以下三米の水面二万三千四百九十平方米を造成す。

五、前号水面を包圍し標高五米天端幅員二十五米、延長四百十九米の囲堤及天端幅員五米延長五十一米の囲堤を築造し、此の二種の囲堤は互に接続せしめ、尙前段の囲堤は岸壁の東北端に於て之と直角に埋立地に接続せしめ、前号の水面と合せて船溜を構成せしむ。

六、天端幅員二十五米の囲堤外寄天端上に高さ一米五、延長三百五十米の防波堤を築造す。

七、船溜の入口に於て水深干潮面以下三米に充たざる部分の土量八千立方米を浚渫す。

八、港の南壁寄水中に繫船浮標六個を設置す。

以上の工事によりて突堤及浮標には汽船其の他大型漁船九隻を繫留せしめ突堤、物揚場岸壁の使用に依りて水陸連絡を簡易完全ならしめ、尙船溜内には中型漁船六十隻其の他雜用船の同時繫留休泊を完全ならしむ。

第四章 海 運

第一節 概 況

本島は南支、南洋に密接なる經濟關係を有し交通貿易上海運の發達に俟つもの多きに鑑み、改隸以來常に海運業の保護獎勵に力を注ぎたと一面最近に於ける本島、産業の發達に伴ふ貿易の振興と相俟つて本島の海運は躍進的發達を遂げ、昭和十五年中島内主要貿易港に入港したる汽船四千八百五十隻千九百九千八百八十三屯を算するに至れり。而して昭和十六年度に於ける本島關係の定期航路四十七線就航船舶百四十四隻内自由航路二十五線就航船舶九十一

隻、本島に起点又は給点を有するもの十四線三十九隻、單に寄港するもの十一線五十二隻、命令航路は二十二線使用船舶四十隻を算したるも十七年度に於ては同年三月戰時海運管理令の發令に依り國內船舶は特殊航路就航船を除き全部國家管理となりたる爲、同年五月以降台湾沿岸航路六線七隻及台湾海南島航路一線一隻を残し、他は総て廢止の止むなきに至れり。斯くて本島海運は情勢一變し爾來台湾沿岸に於ける海上輸送は右命令航路船並に小型汽船及機帆船の綜合的統制運営に依り、又本島輸移出入物資の海上輸送は概ね前記國家管理に属する船舶及軍船等に依り実施せられるところとなれるが、領台後命令航路に対する補助金は實に四千九百二十万円に達す。

第二節 命令航路

一、命令航路開發の經過

領台當時に於ては陸海軍御用船が内台間の聯絡輸送に當りたるのみなりしが、民政施行と同時に内地回漕業者一時に殺到し、稍々利便を加へたりと雖も、汽船の發着不定にして交通上猶不便尠なからざりしを以て明治二十九年五月大阪商船会社に対し、補助金年額六万円を下附して本島内地間に毎月三回の定期航路及伊萬里運輸会社に対し郵便航送料二万二千円を下附して、沿岸航路を開かしむ。之れ本島命令航路の嚆矢とす。翌三十年日本郵船会社をして基隆、神戸線を三十二年度大阪商船会社をして淡水、香港線を開かしむ。爾來海運界は幾多の變動ありたるも漸次命令航路を擴張して高雄横浜線、高雄上海線、福州香港線、高雄天津線等の實現を加へ明治四十五年度には命令定期航路十線補助金年額九十余万円に達したるも當時基隆線は猶六千屯級船舶を用ひ、基隆、神戸間四晝夜を要したり。次で

大正に入り、欧州大戦中に於て船舶不足に因り基隆線の船舶減少等の事故ありたるも一面事業界及海運界の隆盛に伴ひ逐次南洋線（甲乙二線）基隆海防線の航路を開き大正十四年度より基神線使用船舶を一万屯とする等、命令航路の拡張充実を図りたるも大戦後の海運界不況に依り十五年南洋乙線を廢したり。其の後島内産業の發達、特に芭蕉実の増産に依り貿易額激増したるを以て昭和元年度より高雄、大連直航線を開き同三年同線に代ふるに台湾、朝鮮、滿洲線を設け一方基神線は昭和元年度以降大型船に限り、二晝夜航海を実行せしめ更に昭和三年八月には大型船六隻を揃へ同線の充実を見たり。尙昭和三年度基隆福州線は厦門に延長し、使用船一千屯級を一千五百屯に改め、基隆香港線との重複を避くる爲香港海防線に改めたり。

其の後各國を襲ひたる經濟恐慌は益々深刻を極め、其の影響は我が財政にも及ぼしたり。遂に当府予算も削減の止むなきに至り昭和七年度各航路補助費は一割の天引を実行せり。

然れども鋭意航路の改善充実に努め比較的本島と關係浅き香港海防線を廢し、代ふるに基隆比律賓線を新設せり。滿洲國の獨立により本島との貿易關係躍進を見るに至りしを以て同國關係諸航路の整備を図り昭和十年度に於て大連汽船の高雄、大連線大阪商船の高雄、清津線を新設し、他方高雄、天津線を二分して高雄上海線と高雄天津線に變更せり。昭和十一年度に於て台湾世界航路の幹線に進出せしむる爲、通信省命令航路横濱倫敦線の使用船を基隆に寄港せしめ、一方高雄横濱線を高雄東京線に改め、使用船の改善、回数の増加を図り更に陸軍専用航路としての高雄東京線附屬線を新設せり。

南來島内産業の躍進と非常時景氣の反映とに依り、内台間客貨移動は異常なる増進を示せるを以て昭和十二年度より

り、神戶線の航海回数を増加し、隔日航海を実施し同時に同年度初頭より就航の新船二隻に在來高速船一隻を加へ多年懸案の冬季二晝夜航海を実現使命に鑑み本島と比島の北部アパリとの直通航路、即ち高雄アパリ線を新設し仲繼貿易の助長に備へ更に昭和十四年度には日本盤谷間航路の基隆定期寄港を開始し対南洋航路網を充実せり。

一方島内航路は十五年十月以降花蓮港築港の完成を契機に基花蓮絡線を新設し、兩地日發を実施すると共に從來の沿岸東線は之を純貨物航路に改め専ら沿岸各港間物資輸送の円滑を期することとし、尙本土及離島間は別途發動機船を以て頻繁なる連絡を採ることとせり。

事變の進展に伴ひ内台間旅客激増し、基隆神戶線の輸送力緊迫したるを以て之が緩和策として昭和十五年初頭より八千屯級二隻を用ひ基隆神戶線附屬線を新設し、同時に対支航路は事變處理に即應する施設に全島の改廢を要したる爲、從來の高雄、上海線及基隆厦門線は共に福州の寄港を廢し基隆香港線、高雄廣東線は之を基隆廣東線と改め新に基隆汕頭線及台湾海南島線を設置し以て台支間連絡の増加を図れり。

更に台湾滿洲間にありては日滿ブロックの強化、生産力拡充等に依り彼我貿易の飛躍的發展著しく、且人の往來亦累増を加へたる事情に鑑み十五年より高雄大連線に新造船二隻を増配し輸送力の強化を昂めたり。

然るに昭和十六年度に入るや第二次欧州戰爭の影響は次第に南方諸地域にも波及し、加へて資金凍結及就航船の相次ぐ徵用等に依り、狀勢は急速に逼迫し、先づ同年初頭に於ける欧州航路台湾寄港休航を始めとし、基隆瓜哇線及基隆比律賓線の閉鎖、次で高雄清津線高雄仁川線及基隆厦門線の相繼ぐ欠航等全面的に改廢を余儀なくさるゝに至る等此処僅か一年間に命令航路は全然趣を異にし國家綜力戰の態勢を示すに至れり。

昭和十七年度に於ては太平洋戦争の進展と共に船腹は益々不足を訴へ、本邦海運は全的に強度の統制を要する事となり、従つて航路の整備拡充も意の如くならざりしも船舶を得らるゝ限度に於て極力之が充実に努むることゝし次の通決定す。

即ち基隆、神戸線（商船、郵船）高雄、神戸線（商船、郵船）旧基隆、神戸附属線、高雄東京線（郵船休航中）盤谷航路台湾寄港（商船）高雄天津線、高雄上海線（休航中）基隆厦門線（休航中）基隆汕頭線、基隆廣東線、台湾海南島線（以上東亞海運）基隆花蓮港線、蘇澳花蓮港線、沿岸東線沿岸西線、高雄馬公線、基隆海南島線（以上南日本汽船）高雄大連線（休航中大連汽船）新港紅頭嶼（南日本櫻組扱）合計二十一線三六隻を算し、補助予算総額は昭和十六年度百六十五万五千三百五十円に對し、百三十九万二千三百五十円（詳細は別紙参照）となれり。

然る処同年三月本邦船舶の一元制統制運営に依り輸送力の増強と重点輸送の完遂を目標とする戦時海運管理令の発令を見、國內船は特殊航路船を除き総て國家管理となりたる爲、前記決定の命令航路は同年五月以降台湾沿岸航路線六線七隻及台湾海南島航路一線一隻（南日本汽船）を残し他は全部廢止の已むなきに至れり。

二、現在の命令航路

其の後台湾海南島航路線も國家管理に移譲せられ、台湾沿岸航路線は十九年度以降戦局の要請に基き、從來自由放任の狀態にありし島内汽船及機帆船と共に海運統制令に依る一元制統制運営に移行したるを以て現在に於ては命令航路は既に皆無なり（昭和十八年度命令航路表別紙の通）

昭和十七年度命令航路一覽

航路	起点、終点及寄港地	使用船数	1箇年間 航海回数	使用 電 力	補助金額 円	1運当り 補助金 円	1電当り 補助金 円	受命者
基隆、神戸線 (郵船)	基隆、門司、神戸	3	84	8,000	200,000	甲 2.10 乙 1.59	甲 10.00 乙 7.50	日本郵船
同 (商船)	同	3	84	8,000	200,000	甲 2.10 乙 1.55	甲 10.00 乙 7.50	大阪商船
高雄、神戸線 (郵船)	高雄、基隆、門司、神戸 時宜に依り大阪に延路す	1	15	8,000	25,000	0.76	3.12	日本郵船
同 (商船)	同	1	15	8,000	25,000	0.76	3.12	大阪商船
高雄、東京線 (郵船)	高雄、東京、横浜、門司 又ハ鹿児島、基隆、高雄	2	30	4,000	10,000	0.11	1.25	日本郵船
同 (商船)	同	4	60	4,000	20,000	0.11	1.25	大阪商船
基隆、花蓮港線	基隆、花蓮港	1	85	700	25,000	1.52	35.71	南日本汽船
蘇澳、花蓮港線	蘇澳、花蓮港	1	250	800	50,000	2.27	62.50	同
沿岸東線	基隆、蘇澳、花蓮港、新港、台東、大阪、高雄	2	55	700	50,000	1.82	71.42	同
沿岸西線	基隆、高雄、時宜に依り 新高、安平、蘇澳、花蓮 港、台東、其他に延航す	1	24	1,000	30,000	2.79	30.00	同
高雄、馬公線	高雄、馬公	1	140	700	184,350	5.71	263.35	同
新港、紅頭嶼線	新港、台東、火烧島、紅 頭嶼	1	50	50	20,000	2.32	400.00	同

高雄, 大連線	高雄, 基隆, 大連	4	72	3,000	20,000	0.27	3.33	大連汽船
高雄, 天津線	高雄, 基隆, 大連, 天津	1	12	2,000	18,000	0.57	9.00	東亞海運
高雄, 上海線	高雄, 基隆, 上海	2	48	2,000	95,000	1.53	23.75	同
基隆, 廈門線	基隆, 廈門	1	48	2,000	40,000	1.25	20.00	同
基隆, 汕頭線	基隆, 汕頭	1	48	2,000	40,000	0.94	20.00	同
基隆, 廣東線	基隆, 高雄, 廣東	2	48	2,500	80,000	1.26	16.00	同
盤谷航路, 台灣	基隆又は高雄	2	12	5,000	20,000	—	—	大阪商船
台灣, 海南島線	基隆, 高雄, 三亞, 海口, 南明島, 廣東, 基隆	1	12	2,000	120,000	6.17	60.00	東亞海運
基隆, 海南島線	同	1	12	2,000	120,000	5.97	60.00	南日本汽船
計		36	—	—	1,392,350	—	—	

昭和 17 年度命令航路收支概算表

線 名	收 入	支 出	船實利子	純 損 金	補 助 金
基隆, 神戸線	9,430,530 円	9,430,530 円	622,709 円	193,705 円	400,000 円
高雄, 神戸線	2,456,320	2,535,768	—	79,448	50,000
高雄, 東京線	2,324,306	2,916,811	458,285	50,790	30,000
基隆, 花蓮港線	200,106	177,722	—	22,384	25,000
蘇澳, 花蓮港線	195,583	268,246	—	72,663	50,000
沿岸 東 線	443,205	434,871	24,000	15,666	50,000
沿岸 西 線	207,781	300,467	—	92,686	30,000

高雄, 馬公線 229,767 485,020 — 255,253 184,350
新港, 和頭嶼線 5,386 9,380 — 35,959 20,000
高雄, 大連線 2,441,850 2,073,667 391,344 23,161 20,000
高雄, 天津線 218,739 366,053 29,962 172,276 36,000
高雄, 上海線 688,610 750,866 18,498 80,749 95,000
基隆, 廈門線 212,197 316,716 8,496 113,015 40,000
基隆, 汕頭線 267,246 341,845 8,496 83,095 40,000
基隆, 廣東線 1,793,760 1,863,249 1,500,477 219,966 80,000
台灣, 海南島線 472,680 576,479 20,753 124,552 120,000
盤谷航路 台灣寄港 37,140 83,926 20,760 67,546 20,000

註 1 前表基隆神戸線補助金は 600,000 円より船令超過船等の條件, 不適合額を控除せる額に繁忙期対策の補助金 30,000 円を加算せる額なり
2 前表中基隆廣東線は 4 隻分收支にして予算は 3 隻分に決定す

昭和 18 年度命令航路大要表

航 路	起 点	終 点	寄 港 地	使用船数	使用船資格			補助金年額
					総屯数	最大 速力	旅客 定員	
基隆, 花蓮港線	基隆	花蓮港	—	1 隻	60	700	10	22,500.00
蘇澳, 花蓮港線	蘇澳	花蓮港	—	1 隻	250	800	10	45,000.00
沿岸 東 線	基隆	高雄	蘇澳, 花蓮港, 新港, 台東, 大阪等	2 隻	55	700	10	45,000.00

沿 岸	西 線	・ 同	同	新高, 安平, 蘇澳, 花蓮港, 台東	2 隻	76	1,000	10	1	90,000.00
高雄, 馬公線	高 雄	馬 公	—	—	1 隻	140	700	10	150	165,915.00
新港, 紅頭嶼線	新 港	紅頭嶼	台 東, 火燒島	—	1 隻	50	50	7	20	18,000.00

第三節 戰時海上輸送

一、台灣沿岸

本島沿岸に於ける海上要輸送物資は太平洋戰前にありては概ね年間四五万屯を算し、輸送力も略同程度にして船腹需給は均衡を保ちたるも戰後は一般民船の窮屈化に伴ふ島内自給經濟への移行、工業化の進展、軍官民需生産力の拡充計畫の進捗等の事情に依り海上荷動は急速なる増量を示し、十八年度以降年間約九〇万屯、月平均七万屯に達せり。之に反し輸送力は在來の一部汽船及機帆船の多数特殊任務に就役の爲、同年度初頭に於ては汽船八隻及在來機帆船二四隻を以て前記荷動九〇万屯の約七〇％を消化し得る見込みなりしも、戰局の推移と共に大型船の對外特殊配船及機帆船の南方派遣等の已むなき事情ありて、其の後新造機帆船の就航を見たるも同年下期間要輸送量六五万屯に対し四四％の輸送可能の見込となれり。斯くては戰時經濟の運営上絶対必要なる重点物資の輸送確保は極めて困難を予想され、憂慮すべき事態となるを以て海運統制令に基き、昭和十九年一月以降、南日本汽船株式会社をして島内群小業者所有の船舶を一手に備船せしめ同社船を併せ全船舶の一元統制運営に依り、輸送力の増強を図ると共に重点輸送の完遂に努めたるが、戰局の苛烈化に伴ひ被害船舶漸増し、本年初頭に於ては汽船機帆船を合し三四隻六、二四〇総

屯、月當輸送力二五、〇〇〇屯程度に激減し、計畫輸送に重大なる齟齬を來せり。爾來就航船舶は日を逐ふて喪失し終戰時に於ては本島沿岸に機帆船三隻一八九屯内地沿岸（購入船にして本島沿岸に就航予定のもの）に汽船一隻八五〇屯、機帆船四隻七五総屯、計八隻一、一一四総屯を残すのみとなり。事実上計畫運航は休止の已むなきに至れり。

二、台灣對内外地間

昭和十七年三月戰時海運管理令の実施せられ、同年五月以降國內船舶の國家管理となるに及び、本島輸移出入物資の海上輸送は本島置籍船舶の一部特殊輸送に従事せる外、概ね中央の統制管理に属する船舶運管會運航の船舶並に陸海軍船の空積利用等に依り実施せられししが、戰局の苛烈化に伴ひ之等船舶の出入漸次不可能となり、本年に入り台灣内地間は四月以降台灣、滿洲間台灣、海南島間及台灣、支那間は三月以後何れも就航船舶絶し本島は茲に全く自給自足の態勢に置かれたり。

第四節 戰時港灣荷役

一、港灣荷役の統制

海上輸送に至大の關係を有する港灣荷役は戰局の推移と共に從來の如き業者の自由競争に放任するを許さざる情勢となれるを以て、本島に於ては昭和十六年三月以降基隆及高雄に水上小運送聯合組合なる自治統制團體を結成し、荷役力の綜合發揮を期しつゝありたるが、情勢は更に強度の統制を必要となすに至りたるを以て同年十二月港灣運送業等統制令の施行に依り兩港を運送業統制地区に指定し統制團體として夫々港灣運送業會を結成し、其の傘下に主要貨

物別荷役組合及労働需給組合を置き、港湾運送業の強化統制を実施し來れり。即ち主要貨物に付ては從來取扱実績を有する業者を以て荷役組合を作り、共同荷役及共同引受を実施し各業者の能力を綜合し、且艀船曳船等の荷役施設及勞務に付ても組合制に依り能力の有無相圖らひ以て荷役能率の高度發揮を期することゝせり。

斯くて両港の荷役状況は太平洋戦前にありては年間取扱量基隆港三五〇万吨、高雄三〇〇万吨程度なりしが、爾來船腹事情に依り漸次減少の一途を辿り昭和十九年初頭に於ては基隆一八八万吨、高雄一八五万吨に激減せるも、船舶出入は強度の波動性を加へたる結果、荷役力は却つて増強を要請せらるゝの实情にありたる爲、勞務及施設の拡充強化に努めたり。殊に勞務に付ては本島の戦場化必至の情勢を招來し、之に対処する全島要塞化は勞力の需要益々増大し、同時に諸般の經濟的事情に依り勞務給源著しく偏在し港湾勞務者は漸次減少し、之が確保困難となるを以て十八年度措置せる船内荷役勞務者に対すると同様、沿岸勞務者に対しても十九年度一部國庫補助をなし、之が確保の措置を講じ、更に同年九月以降は徵傭令を發動し必要勞務者の確保に努めたり。

基隆港 (昭和十九年9月1日現在)

船内	沿岸	臨時就勞	合計
登載数	登載数	登載数	登載数
689	1,220	—	1,889
就勞数	537	1,035	342
			1,914

高雄港

船内	沿岸	臨時就勞	合計
登載数	登載数	登載数	登載数
547	1,362	—	1,909
就勞数	423	950	216
			1,589

を確保せり。然るに本年に入るや敵機の來襲頻繁となり、殊に高雄港は連日連夜に亘る爲に勞務者の離散逃亡するもの簇出し、荷役能率は極度に低下したるを以て勞務の確保措置として(一)軍側の協力に依り水勤部隊の應援を得ると同時に(二)勞務者の集團收容をなす勞務住宅の建設(三)防空施設の強化(四)糧食給與方法の改善(五)厚生施設の整備等に関し施策実施中なりしも二月末に至りては既に港湾機能發揮し得ざるに至り、船舶出入殆んど杜絶の状態となれり。一方基隆港は恰も二月中旬以降台湾糖の内地還送船團の輻輳し、さなきだに勞務給源の枯渴せる折柄、之が船團に対する荷役遂行は従前の民營荷役機構のみを以てしては到底不可能なる実情にありたるを以て關係軍官民よりなる船舶揚塔司令部を設置し以て海陸連絡の円滑化を計り、強行荷役の完遂に努め三月末を以て概ね所期の目的を達成し超非常時荷役を終了せり。爾來戦局は益々苛烈を極め且沖繩方面戦場化の爲港出入船舶は殆んど皆無の状態となれり。

二、港湾荷役の現状

斯くて両港荷役は殆んど休止状態なるも、將來船舶出入可能の時機に対処し両港共最小限必要なる荷役力の確保は絶対的なりしを以て五月以降勞務者は台湾護國勤勞團の管理に移し、艀船曳船は一元的荷役組合を結成し之に管理せしめ所要の施設維持費は本府に於て補助するの措置を採り今日に及べり。

第五節 海事諸法關係

本島に於ける船舶取締は明治二十九年支那型船舶取締規則を制定したるを以て嚆矢とし、漸次海運の推移に伴ひ台湾船舶規則を始め汽船検査規則、汽船職員規則等台湾の特殊事情を参酌し、律令を以て制定し來りたるが、最近に於ける海運界進展の狀勢に伴ひ台湾に特殊法令の存するは却て海運業務運行上不利不便を生ずるに至りたるを以て、昭和六年度勅令第二百七十三号を以て海事諸法台湾施行令公布せられ、昭和八年五月二十五日之が施行を見るに及び茲に始めて海事諸法は内台共通となりたり。昭和十二年支那事變の勃発を見るや、之に關聯し海上に於ける一般交通運輸の調整を図るを以て目的として、臨時船舶管理法制定せられ昭和十二年十月より内外地を通じ施行せらるることとなり、同法施行に關する勅令第五百五十二号朝鮮及台湾に於ける臨時船舶管理法の特例等に関する件を制定、同時に施行せられたるも、更に時局の進展並欧州新情勢の發展に伴ひ複雑なる海運並造船界に對処して臨時船舶管理法のみにては適切なる運用を期し得ざるの實情に鑑み、新に國家總動員法に基き昭和十五年勅令第三十八号を以て海運統制令の制定を見、同年二月二十五日より施行せられ、之が運用に關し府内局部關係官を以て輸送協議會を組織して各局部の聯繫を密ならしめ、以て本島出入物資輸送の万全を期すると共に船舶製造及修繕に關し適切なる統制を加へ來れり。又當時の逼迫せる船腹狀況に對処し船舶運航能率上至大の關係を有する港灣荷役力の増強を図る爲、國家總動員法に基き昭和十六年九月勅令第八百六十号を以て港灣運送業等統制令の公布を見たるを以て、本島に於ては同年十月一日より之を施行し港灣諸作業の統制を強化すると共に其の經營機構に根本的刷新を加へ、以て如何なる事態にも對

處し得るが如き港灣の總動員態勢を早急に整備し、基隆及高雄兩地区を指定し港灣運送業會を設立せしめ、港灣荷役力増強の爲万全の策を採れり。尙時局の進展に伴ひ國家總動員法に基き制定せられたる勅令第二十三号船員職業能力申告令は本島に於ても内地同様昭和十四年一月二十八日より之を施行し、船員の登録制度を実施し、昭和十五年十月勅令第六百八十七号を以て制定せられ、同十一月十日より施行せられたる船員徵用令並昭和十五年十一月勅令第七百四十九号を以て制定せられ、同月二十五日より施行せられたる船員使用等統制令と相俟て船員の徵用及移動防止等に對する必要な規正を加へ、以て船舶運航の円滑を期したる外昭和十四年十月勅令第七百三十三号價格等統制令昭和十五年十月勅令第六百七十六号船員給與統制令等施行せられたるを以て船舶の價格、貨物運送賃及傭船料等所謂九、一八價格停止の措置を講ぜり。又生産力拡充上必要な技術者中船舶運航技術者の充足を図らんが爲、昭和十四年十一月二十日より勅令第七百八十号船舶運航技能者養成令の施行に伴ひ本島に於ては台湾海務協會に補助金を交付し積極的に之が養成を爲さしめ既に相當の効果を挙げつゝあり。

第七十四回帝國議會の協賛を経て公布せられたる船員保險法は船員の海上勤務の特殊性に立脚せる厚生施設として船員の老後に於ける生計を保証すべき養老年金制度を主眼とし、併て其の健康保持増進及生活安定を目的として制定せられたるものにして内外地を通じ昭和十五年三月一日より其の一部を施行せられ、同年六月一日より全部実施の上之が保險給付の開始を見たるが本制度実施の日未だ淺きに拘らず相當の実績を挙げつゝあり。

尙木船保險法は木船海運業の保育助長を目的とし、樹立せられ内地に於ては昭和十八年六月十五日より施行せられたるものなるが、我台湾に於ても同年九月一日より府令第百八十八号を以て木船保險法施行規則を制定し、船主の危

險感に対する安定を図ると共に海上輸送力の増強を期したり。

第六節 造船

第一項 計畫造船

昭和十七年本島海運増強の爲、計畫されたる二〇〇屯型木造機帆船三十隻建造の本府計畫造船は其の着工期日の關係上、十八年度に持越され十八年度中に大半以上を完成すると共に十八年度樹立に係る二〇〇屯型機帆船二十八隻建造計畫は其の十五隻の建造に着手し、昭和十九年度に持越したり。然るに昭和十九年五月に至り急速、且多量の機帆船建造の要に迫られ総督府内に臨時船舶建造部を設置し、從來交通局海務部に於て管掌し來れる造船關係事務は臨時船舶建造部に移管すると共に新に一七〇屯型機帆船九〇隻、七五屯型漁船一〇隻、六五屯型漁船四〇隻計一〇〇隻の建造計畫を樹立し、爾來之が完遂に銳意力を致したるも戦局の苛烈化は次第に生産力の低下を來し、本年七月迄に完成したるものは二〇〇屯型三隻、七五屯型二隻を出したるのみなり。一方昨年五月二十七日設置したる臨時船舶建造部は本年七月総督府内の機構改革に伴ひ廢止し造船關係事務は再び交通局の管掌する処となりたり。

第二項 造船施設

本島に於ける造船施設は計畫造船開始以前は台灣船渠株式会社及台灣鉄工所の二工場を除き、殆んど個人企業にして資本的に弱少のみならず、施設に於ても見るべきものなかりき、依て本府に於ては之が健全なる發達を図る爲に昭和十七年十月造船事業法を施行し、從來の個人企業は昭和十八年十月以降事業の継続を認めざることゝ爲したり。依

て本島に於ける造船事業は個人企業より会社組織となり、昭和十九年度末に於ける造船会社は左記の如く一三会社を算するに至り、其の施設も漸次増強せられつゝありたり。然るに本年度に至り戦局の熾烈化と共に相當の被害を蒙りたり。

記

名	称	所在地	資本金	従業員	生産能力	施設
報國造船株式會社		基隆市社寮町	300万円	535名	木造船新造3,000屯修繕3,000屯	船架34
蘇澳造船株式會社		台北列蘇澳街	100万円	186名	木造船新造修繕1,000屯	船架8
東亞造船株式會社		花蓮港市米滿	100万円	50名	木造船新造設備中200屯	船架2
高雄造船株式會社		高雄市平和町	400万円	730名	木造船新造2,500屯修繕3,000屯	船架51
須田造船鉄工株式會社		台南市市田町	50万円	22名	木造船新造修繕400屯	船架5
有限会社九二組造船所		台南市市田町	15万円	54名	木造船新造修繕300屯	船架5
東港造船株式會社		高雄州東港街	10万円	96名	木造船新造修繕300屯	船架2
建設株式會社造船工場		澎湖廳馬公街	12万円	43名	木造船修繕300屯	船架4
株式會社新高造船所		台中州新高港	100万円	40名	目下施設設備中	1
台東造船株式會社		台東廳新港庄	12万円	22名	木造船新造修繕100屯300屯	船架2

第一節 航空輸送

本府は逋信省と協力し、大日本航空株式会社に命じ実施せしめたる定期航空概況左の如し。

第一項 内台定期航空輸送

内地（日本本土）台湾間の定期航空は昭和十一年一月台北福岡間一週三往復を以て開始せられたるが、其の後逐年所要施設の改善、運航回数を増強を図り輸送効率の向上を期しつつありしが昭和十八年九月航空機乗員共軍に徴用せられ軍の命令航空となれり。

第二項 島内定期航空輸送

台灣島内に於ける定期航空は昭和十一年八月東線（台北—花蓮港）西線（台北—台中—高雄）の二線を以て開設せ

第三項 對外定期航空輸送

られたるが、其の後所要施設を改善し路線も亦島内循環線、台南馬公線を開設し逐年發展しつつありたるも、昭和十六年九月二十日以降各線共休止せり。

(一) 台北、盤谷線

本線は昭和十五年六月東京―台北―盤谷間週一往復を以て開設せられたるが昭和十六年九月二十日以降休止せり。

(二) 台北、盤谷臨時增便

本線は昭和十六年四月週一往復を以て開設せられたるが同年九月二十日以降休止せり。

(三) 淡水、盤谷線

本線は昭和十六年四月横浜―淡水―盤谷間二週一往復を以て開設せられたるが同年十二月十二日以降休止せり。

(四) 東京、西貢、盤谷線

本線は昭和十六年四月週一往復を以て開設せられたるが、同年十二月十二日以降休止せり。

(五) 台北、廣東線

本線は昭和十五年四月毎日一往復を以て開設せられたるが、昭和十六年十二月十二日以降休止せり。

第二節 飛行場

第一項 台北飛行場
(台北市頂東勢)

台北飛行場は昭和七年度に於て建設に着手し、其の後逐年用地の拡張、施設の増強を図り現在に至れり、尙其の概況左の如し。

所屬	用途	水陸別	面積	滑走路	附属施設 (×印は爆撃に依り大破)
交通局	公共用	陸上機用	1,650,000 平方米	東西 主90×1,000 米 北西 副60×750 米	×事務所 ×氣象観測所 ×照明施設 ×格納庫 (1) ×航空試験施設 ×通信施設
					大日本航空株式會社 ×事務場 ×修理工場 ×倉庫 ×格納庫 (2) ×燃料庫 (2)
(コンクリート) 舗装					
軍 愛國格納庫					

第二項 宜蘭飛行場 (台北州宜蘭市金六結)

宜蘭飛行場は昭和十一年度宜蘭市の建設に係り、公共用飛行場として島内定期航空の用に供されつゝありしが、其の後之を陸軍に移管せり。

第三項 台中飛行場 (台中州豊原郡公館庄 同 大甲郡大雅庄)

台中飛行場は昭和十二年台中州の建設に係り、公共用として島内定期航空の用に供されつゝありしが昭和十七年之を海軍に移管せり。

第四項 台南飛行場 (台南州新豊郡永康庄)

本飛行場は昭和十四年台南州の建設に係り其の後交通局に移管せしものにして其の概況左の如し。

所屬	用途	水陸別	面積	滑走路	附属施設 (×所は爆撃に依り大破)
交通局	公共用	陸上機	660,000 平方米	舗装せしものなし	×氣象観測所 ×事務所 ×燃料庫 (2) 大日本航空株式會社 ×燃料庫其の他
					台湾航空協會 ×格納庫 (2) ×修理工場 ×燃料庫

第五項 台南飛行場 (台南州新豊郡歸仁庄)

本飛行場は昭和十九年度に於て建設に着手せしものにして其の概況左の如し。

所屬	用途	水陸別	面積	滑走路	附属施設
交通局	公共用	陸上機用	1,680,000 平方米	南北120×1,800 米 東西100×2,300 米 マダカム舗装	×事務所 ×燃料庫 ×格納庫 (2) ×修理工場 ×燃料庫

第六項 台東飛行場 (台東廳台東郡卑南庄利家)

本飛行場は昭和十二年台東廳の建設に係り其の後用地の拡張を図り島内定期航空の用に供されつゝありしが、昭和十七年之を交通局に移管し、更に昭和十八年之を海軍に移管せり。

第七項 淡水飛行場 (台北州淡水街竿蓁林)

本飛行場は昭和十五、十六年度の建設に係り本島唯一の民間航空用水上基地にして其の概況左の如し。

所屬	用途	水陸別	清 水 区 域	附屬施設 (×印は爆撃に依り大破)
交通局	公共用	水上機用	開渡より下流の淡水河及淡水燈台を中心とする半径5,000米以内の海面一帯	交通局 清走台 ×事務所 氣象観測所
				大日本航空株式会社 ×事務所

第三節 附帯施設

第一項 台北航空機修理工場 (台北市頂東勢台北飛行場内)

本島には航空機修理施設皆無の爲、本府は昭和十五年度以降五箇年間に所要施設を充実せしむべく大日本航空機会社 に命じ、之を設置せしめたる処、翌十六年度より一部業務の開始を見、其の後逐年充実に來りたるも昭和十九年十月以降数次に亘る空爆に依り殆ど破壊せられ其の機能を停止するに至れり。

第二項 航空保安施設

本島に於ける航空保安施設左の如し。

(一) 航空無線通信施設

昭和十一年台北電信局に航空無線局を設置し、航空通信業務を開始したるが其の後逐年之が拡充強化を期すべく昭和十五年度に於ては新竹州桃園郡下に送受信所を設置し、後年更に島内各地に通信所を開設し航空無線通信施設を一段と強化せり。

(二) 航空無線嚮道施設

(イ) 航空無線標識局

本島に於ける航空無線標識施設に付ては昭和十一年台北州宜蘭市に標識局を、更に同十五年新竹州桃園郡大園に標識局を其の後台南市にも標識局を設置し、標識施設の強化を図りしが昭和二十年三月大園標識局を桃園に移設せり。

(ロ) 航空無線羅針所

本島に於ける航空無線羅針所は昭和十八年以降台北、淡水、台中、台南、高雄、屏東、花蓮港の各地に設置し航空保安の万全を期せり。

(三) 航空路照明施設

(イ) 飛行場照明施設

飛行場照明施設は昭和十四年度以降台北飛行場に着陸照明施設、場囲燈、丁字型風向標示燈を施設せるも数次の空爆に依り破壊せられ使用不能の現況なり。

(ロ) 航空路標識燈

航空路標識燈として台北附近より淡水方面に亘り簡易照明燈を設置しあり。

(ハ) 航空燈台

航空燈台は昭和十九年台北州七星郡関渡に一基設置しあるのみなり。

第四節 民間航空團體

第一項 財團法人台灣航空協會

財團法人台灣航空協會は昭和九年航空思想の普及、民間航空の啓発を目的として設置せられたる台灣國防義會航空部を母体として昭和十六年八月設立せられたるものにして、其の後台南州國防航空團を吸収すると共に各州（廳）に支部を置き所屬の輕旅客機練習機乃至滑空機を以て活動を開始したるが、所屬機等は數次に亘る空爆其の他の事情に依り全部使用不可能となり協會の活動能力停止の狀態なり。

第六章 通信事業及其の附帶事業

第一節 郵便

台灣に於ける郵便事業は明治三十三年郵便法の實施せらるゝに及び、制度の基礎確立せり。其の後制度施設の改善等本島の實情を考慮すると共に一面努めて内地と同一歩調を採る方針の下に改善普及を図りたる結果、今や制度並に施設の内容共内地と全く異なる所なきに至れり。管内郵便局は昭和十九年度末に於て普通局一五、同出張所一六、特定局一七六、同出張所一六、計二二三局を算するも其の普及狀態は本島の總人口を六百七十万とすれば人口約三万四人に對し、一局所を有する割合なり。郵便物の通達機關としては官、私設の鐵道に依るの外、從來台車軌道又は人夫擔送

に依るもの尠からざりしが、近來道路の開発に伴ひ自動車通達に依るもの増加し蘇澳、花蓮港間 枋寮、台東間 枋寮、恒春間の如き長距離に亘るものを始め、其の數三十七線路に及び台車送又は人夫擔送による通達線路は漸く其の影を潜めつゝあり。

水路郵便線路としては基隆—関門—神戸、隔日一回を幹線とし、基隆—那霸線週一回、基隆、福州上海線月二回、基隆—厦門線週一回、基隆—厦門—汕頭—廣東線月三回等の外高雄—馬公線、基隆—蘇澳—花蓮港—台東線等の沿岸線ありたるも現在は全面的に停止の狀況なり。

尙郵便物の航空通達に付ては昭和十年十月福岡台北間定期航空路開設と同時に、之が取扱ひを開始し翌十一年八月島内相互間に同十五年四月台北廣東間に同年六月台北盤谷間に相次で定期航空路開設せらるゝに及び、何れも開設当初より郵便物の航空通達を利用することゝし、新時代に則應する郵便の使命達成に多大の寄與を爲しつゝありしも、昭和十六年十二月大東亞戰爭勃發により是等の民間航空は全面的に中止せられたり。然れども航空郵便物は可及的に軍用航空便を利用之が送達を図り通信連絡確保に努め來れり。

各郵便局所にて取扱ひたる通常郵便物、小包郵便物取扱數左の如し。

通常郵便物		小包郵便物	
引	受	104,383,111 通	1,601,693 箇
配	送	102,907,343 通	1,447,158 箇

第二節 電信

第一項 概況

電信は清國時代の陸線及海底線に修理改良を加ふると共に、明治二十八年既に東は蘇澳、西は淡水、南は恒春に至る線路架設を見、同三十年には那霸淡水線の開通あり、三十一年淡水川石山線を支那より買収し、四十三年長崎台北間一番線を大正六年長崎台北二番線の開通あり、一方島内陸上線の改良増設、無線施設の拡充及電信局所の増加に努めたる結果、昭和十九年十二月末に於て陸上線七、二二一杆、海底線布袋良文港間六八杆（外に通信省所管に係る那霸台北線、長崎台北線一、二番線、台北川石山線及台灣總督府所管の澎湖廈門線あり）に達し有線電信取扱局所二二一、無線電信所一二を数ふるに至れり。（別表参照）而して島内主要間線は三十余線なるが現在は戦災の爲、西部は台北より嘉義迄、東部は花蓮港迄開通、南方方面は殆んど不通にして目下鋭意補修中なり、又内地との連絡は台北電信局に於て海底線及無線電信を併用して長崎、那霸（以上海底線）東京、大阪、鹿児島及福岡（以上無線）と通信せしむることとし、同局を内地台灣間通信の関門局としある処、之が現況は海底線は各線共海底に於て故障不通、無線は東京及福岡以外当方及對手側共設備の一部故障の爲目下休止中なり。

対外通信に付ては台北―香港間無線及台北マニラ間無線に依り南方諸地域と通信し居たるも、太平洋戦争勃発と共に右二線の連絡は杜絶せり（其の後香港とは二月一日、マニラとは八月一日各々連絡を開始せるも現在は再び不通状態にあり）支那との通信は支那事変発生後に於て台北、厦門間海底線、台北、廣東、台北、海口、台北、汕頭及台北

間各無線連絡に依り通信を疎通し來りたるが廣東、上海は對手側事情に依り現在不通なり尙前記台北川石山線は事変勃発と共に不通となりたる儘、現在に及び居れり。

無線電信局所は台北電信局及宜蘭無線電信局は固定局業務を取扱、基隆、台南両無線局は海岸局なるも固定局をも兼ね台東及花蓮港郵便局には中波無線機を設備し、沿岸航海航行の船舶との通信を取扱來りしが台東は戦災に依り、機器一部破損し目下対船舶通信は不可能の状態にあり。

又台北飛行場内に台北電信局分室を設け航空無線業務を取扱い、台北氣象台内及彭佳嶼に台北電信局分室を設け主として氣象通信を取扱ひつゝあり。

右の外島嶼線施設として澎湖及火燒島に、又漁船との通信用として高雄漁業無線通信所（高雄施設）あり。

第二項 支那事変及太平洋戦争に伴ふ措置

支那事変及太平洋戦争に伴ひ左の措置をなしたり。

（1）南支に於ける左記各地に対し通信機關を派遣し公衆通信業務を取扱ひたり。

廣東（昭和十三年十二月開局）海口（昭和十四年四月開局但し昭和十八年四月一日以降國際電氣通信株式会社に於て運用のことゝなれり）汕頭（昭和十四年八月開局）

（2）台灣島内有線通信不通の場合に備へ台北外六局に小型無線電信機を特設す。

（3）台北、基隆及高雄の三都市に通信代位局を新設し既設通信機關破壊せられたる場合、重要通信の確保を図るの措置をなす。

別表

有線電信局所				無線電信局所				計		合計
獨立電信局	電信取扱郵便局	電信取扱所	電報取扱所	郵便局の固定局	郵便局の附置の固定局	獨立の海洋局	郵便局の附置の海洋局	無線電信取扱所の固定局	無線電信取扱所	
1	171	25	24	221	2	2	2	3	1	12
										233

第三節 電話

台湾に於ける電話事業は改隸当時加入者は全島を通じ僅か二、四三二に過ぎざりしも爾來年を逐ふて拡充施設せられ、昭和十九年十二月末に於ては電話局所数一九四、加入者数二五、二〇六を示し、市外回線数三三四を算せり。内地台湾間電話連絡に關しては國際電氣通信株式会社の設備を使用し、昭和九年内地台湾間無線通話業務開始せる處、其の利用は逐年増加の一途を辿り、殊に事變發生以來内地台湾間に於ける各般の關係愈々緊密となり、之が利用著しく増加せり。又對外無線電話は内台無線電話回路の間隙を利用して昭和十六年四月一日台北と大連との間に同十五年一月十五日台北と上海との間無線電話連絡に依る通話取扱を開始せるが、前者は昭和二十年八月一日後者は同十九年九月一日對手側事情に依り休止せり。

太平洋戰爭發生するや電話の需要著しく増大したるを以て臨時電話の架設、通話の特別取扱、或は主要市外電話回路の供用等應急措置を実施し來れるが、昭和二十年一月以降本島に對する空襲漸く熾烈化するに伴ひ、市外回線市内

線共に甚大なる被害を蒙り、現在通話可能なる電話線は台北より台南迄及台北より花蓮港迄の回線を維持しあるに過ぎず、又市内線は台中、花蓮港を除きては殆んど全滅に陥りたるを以て目下極力之が復旧に努めつゝあり。

電話業務概要 (昭和18年度)

電話取扱所 (年度末現在)	194
電話加入者数 (同)	25,206 人
市内電話数	152,089,285 度
市外通話数	4,365,904 度

第四節 放送無線電話

第一項 概況

本島に於ける放送事業は昭和三年二月より開始せる試験放送を發端とし、昭和五年二月一日台北放送局の開設に依り本格的放送に入り、爾後昭和七年四月台南放送局、昭和十年五月台中放送局、昭和十五年九月民雄放送局、昭和十七年八月嘉義放送局、昭和十九年五月花蓮港放送局を逐次開局、以て今日に及べり、尙民雄大電力放送所並に嘉義放送局の開設を機に昭和十七年十月より開始せる二重放送は時局の要請に依り昭和十九年五月一日之を休止せり。

而して台湾に於ける放送事業は台湾總督府交通局の經營に係り施設、又官有に属するところなるが昭和六年台北放送局の開設と同時に社團法人台湾放送協會を設立して、之に(一)聽取者の増加勧誘(二)放送者の依頼(三)放送番組の編成及実施等の業務を委託經營せしめ來れり。而して之に對し台湾放送協會に於ては聽取者より月額一円五十

錢の聴取料を徴收し、其の経営に充当せしめ居るも、其の集金は都市に於ては直接集金し郡部に於ては特定郵便局に委託しあり。

第二項 放送事業の現況

(1) 放送施設

放送局名	設立年月日	呼出符号	空中線電力 (キロワット)	周波数 (キロサイクル)	放送所々在地	放送所々在地
台北	昭和6年1月	JFAK	10	1,020	台北州 海山郡 板橋街	台北市文武町
台南	昭和7年4月	JFBK	1	750	台南市福慶樓	台南市福慶樓
台中	昭和10年5月	JFCK	1	960	台中州大屯郡北屯	台中市新富町
嘉義	昭和17年8月	JFDK	0.5	1,040	嘉義市堀川町	
花蓮港	昭和19年5月	JFEK	0.1	1,070	花蓮港市米瀨	
民雄	昭和15年9月		100	1,080	台南州嘉義郡民雄	

備考 民雄放送所は空襲に因る被害の爲使用不能

(二) 放送番組

放送番組の編成及実施は台湾放送協会に委託するところなるが、内地人に対しては東京より送出する東亞同放送の入中継を主とし、本島人に対しては台湾語を以てする報道、告知、講演等の教養放送の外に台湾音楽、台湾演藝等の慰安番組を台北放送局に於て編成し、全島同放送を爲し來れり。尙之とは別に昭和十二年七月以來福建語、廣東語、北京語、英語等を以て主として報道を南支南洋向に短波放送し來りたるが昭和二十年八月二十四日を以て之を中止せり。

(三) 普及状況

本島に於けるラジオ聴取者の普及状況に關しては内地人は別として本島人に在りては内地に比し、普及率極めて低位に在りしが、島内二重放送の実現に伴ふ本島人向番組の編成実施せらるゝに及び、本島人聴取者数も漸増の傾向を呈し、殊に今次戦争の勃發に際しては飛躍的增加し、昭和十八年末に於て聴取者数七万を突破するに至りたるが、其の後受信機並に各種部分品の不足に因り漸減の勢を示しつゝあり、昭和二十年六月末現在に於ては聴取者総数九七、八二三人（内地人五三、九三二人、本島人四三、八九一人）の統計を示し居るも空襲に因る受信機の被害等の爲、現在実数に於ては更に著減し居る見込なり。

第五節 爲替貯金

第一項 概況

爲替貯金業務は明治二十九年四月郵便局設置と共に之が取扱を開始し、爾來逐年増加し來りたるが、昭和十九年度中に於ける爲替貯金の受拂は

総口数 一三、一〇一、〇〇二口
総金額 一、三六四、五二三、八六九円

にして其の増進、洵に目覚しきものあり、本島經濟界に重要な地位を占むるものと謂ひ得べし、昭和十九年度中に於ける取扱別業務状況は左表の如し。

昭和 19 年度中に於ける爲替貯金業務状況

取 扱 別	振替又は受入		拂渡又は拂戻	
	口 数	金 額	口 数	金 額
内 國 爲 替	1,166,714	105,247,691 円	1,077,805	95,233,447 円
外 國 爲 替	1,602	86,555	17,679	4,496,893
郵 便 貯 金	7,127,046	171,499,520	964,726	86,720,777
振 替 貯 金	576,511	137,466,236	283,034	107,183,912
其 の 他	308,096	253,201,742	1,578,789	393,377,096
計	9,179,969	667,501,744	3,922,033	697,012,125

但し内國爲替口数は爲替証書一枚の制限金額引上に依り、外國爲替は戦争關係の爲相当減少す。

第二項 貯蓄奨励

昭和十三年六月國民貯蓄奨励運動の実施せらるゝや本島郵便貯金も右趣旨に順應し、之が積極的奨励に努め年々予期以上の成果を挙げ、昭和十九年度に於ては全島貯蓄増加目標額七億円に對し郵便貯金の増加目標額を六千八百八十八万円と決定せられたるに付、銳意之が奨励に努めたるに結果、八千四百十万円の増加実績を收めたり。貯蓄奨励開始以來の増加状況は次表の如し。

年 度 別	現 在 高	前年に比し増減額	増加目標額	目標額に対する増加割合
昭和 12 年度	27,106,747 円	円	円	割
昭和 13 年度	34,838,764	7,732,017	4,600,000	16.80
昭和 14 年度	44,214,908	9,376,144	8,000,000	11.72
昭和 15 年度	55,917,423	11,702,515	10,000,000	11.70
昭和 16 年度	71,888,096	15,970,673	15,000,000	10.64
昭和 17 年度	96,428,488	24,540,392	17,000,000	14.31
昭和 18 年度	136,351,011	39,922,523	27,000,000	14.78

昭和十六年度迄の増加は原簿面に依り昭和十七年度以降は窓口預拂差増額に依る。

第六節 簡易生命保険及郵便年金

第一項 概 況

一、簡易生命保険

簡易生命保険は國民生活の安定を目的に日本國政府が經營する小口月掛の簡易なる生命保険なり。即ち政府が保険契約者又は第三者の生死に關し保険金額を支拂ふことを約し保険契約者が對償として政府に保険料を支拂ふべきことを約するものなり。本島に於ける本事業は昭和二年十月一日より逋信省所管（現在内閣逋信院所管）の下に振替郵便

貯金の媒介に依り業務の取扱を開始し、爾來逐年堅実なる発達を遂げ昭和十六年四月簡易保険法の施行を見るに至り
 愈々其の機能を發揮し島民の福利増進に寄與する所大なるものあり。

尙本年三月末現在に於ける契約概況は左の通りなり。

件数	一、九二六、六〇五件
保険料	二、八三五、一五四円
保険金額	五四六、八三三、三四八円
人口千人に対する加入人員	三四七人

二、郵便年金

郵便年金は國民の老後生活の安定を目的に簡易保険と同様日本國政府の經營する生存保険なり。即ち政府が契約者
 又は第三者の生存に關して其の者に年金を支拂ふべきことを約し、契約者が対償として政府に掛金を拂込むべきこと
 を約するものなり。本島に於ける本事業は創始当初簡易生命保険に比し見るべきものなかりしも昭和十四年九月本制
 度の畫期的大改正に依り制度の内容大衆化したる結果、飛躍的に發展を見本年三月末に於ける狀況は左の通りなり。

掛金拂込中のもの	件数	五、一二三件
年金額	一、五三二、一〇七円	
年金支拂中のもの	件数	四六八件
年金額	一三六、六九一円	

三、本島に於ける取扱機關

契約申込の受理、保険料の集金、保険金還付金の支拂、各種請求届書の受理事務等は全島各郵便官署に於て取扱、
 之等現業官署の監督及規畫事務は交通局通信部に於て掌る。

第二項 簡易生命保険及郵便年金積立金の運用

簡易生命保険及郵便年金の積立金は其の地方に還元するを原則とし、各種公共團體に対し極めて低利（年三分一
 厘）なる金利を以て貸付を爲すの外、民間特殊会社の株式購入及社債の引受等にも應じ、地方産業の振興並に島民の
 福利増進に貢獻する所大なるものあり。

昭和十九年三月末に於ける未償還額は二六、七四〇、四〇三円なり。

第三項 被保険者の福祉施設

被保険者の健康増進を目的に昭和十年四月簡易保険健康相談所を台北に開設し、爾後契約の普及に伴ひ順次左記の
 通り開設せられ、被保険者保健上の相談並に指導を爲し來りたるも、昭和十八年七月其の名称を簡易保険診療所と改
 称、実費診察及血液反応検査を開始し極めて低廉なる料金を以て治療に従事し、被保険者の保險衛生上延いては國民
 体位の向上に寄與する所大なるものあり。

昭和十九年度中の診療患者数は二一八、〇五八人なり。

昭和十年四月開設 台北簡易保険診療所

昭和十一年三月開設 台南 同

昭和三十四年四月開設	台中
昭和三十四年三月開設	嘉義
昭和三十四年十月開設	基隆
昭和三十五年一月開設	新竹
昭和三十五年六月開設	高雄
昭和三十九年六月開設	屏東
昭和三十九年八月開設	宜蘭
昭和三十九年十月開設	虎尾
昭和三十九年十月開設	彰化
昭和三十九年三月開設	同

第九編 水利土木

第一章 水利

第一節 概況

本島の耕地面積は八十八万六千八百四十甲（此の内、田五十四万八千一百一十一甲、畑三十四万六千二百二十九甲にして全島総面積の二割強）にして此の内灌漑排水面積五十六万五千九百九十九甲に達し、水田の多くは一年二期の稲作を爲し、尙且作付面積十八万三千五百九十九甲に達する甘蔗も灌漑を要するに拘らず、地形其の他の關係上灌漑用水之に伴はず排水施設も亦十分ならざるものあり。

之等に対して新設又は改良を積極的に実施するもの尠しとせず、本府は明治三十四年公共埤圳規則を設け埤圳の普及改良と利害關係者の統制を図り、又必要に應じて國庫又は地方費に於て補助することとし降て大正十年水利組合令を制定し、公共埤圳組合を水利組合に改むる方針を採り、極力助長したる結果、昭和十八年三月末に於ては水利組合四八、公共埤圳組合一（嘉南大圳組合）私設埤圳二四七、公私設埤圳の総灌漑排水面積五十六万五千九百九十九甲を算し、明治三十八年末に比すれば灌漑排水面積實に三十六万一千七百五十三甲を増加するに至れり。其の区分内容左の如し。

一、水利組合

水利組合は灌漑排水の爲、台湾水利組合令（大正十年律令第十号）に依り設置せる公共團體にして昭和十八年三月末總数四八、灌漑排水面積四十万八千八百八十五甲にして其の特徴左の如し。

(イ) 組合の設置は受益者五人以上創立者となり、規約を作り受益者二分の一以上受益地三分の二以上の同意を得て総督の認可を受けるに依り成立す。

(ロ) 組合の区域は受益土地に依り定まる。

(ハ) 組合員たる者は区域内の土地家屋其の他に作物の所有者並に不動産質権者及其の土地の主産物を原料とする製造業者中規約の定むる所に該当する者にして組合設置せられたるときは不同意者と雖も強制加入とす。

(ニ) 組合は組合の定むる所に依り組合費夫役及現金を賦課徴収することを得べく、必要に依り組合費其の他の徴収を州廳市街庄に囑託することを得。

(ホ) 組合徴収金の督促滞納処分等には國稅の制に依り台灣國稅徴収規則を準用す。

(ヘ) 諮問機関として評議會を有す。

二、公共埤圳組合

公共埤圳組合は台灣公共埤圳規則(明治三十四年律令第六号)に依り地方長官が公共の利害に關係ありと認定したる埤圳区域の利害關係人が行政官廳の認可を経て組織せる組合にして大正十年水利組合令の制定せらるゝや、其の大部分は水利組合に組織せられたる今日に於ては過渡的存在にして現在特殊事情に依り未だ残存せるもの嘉南大圳組合のみなり。

昭和十八年三月末灌溉排水面積十四万七百七甲に達する公共埤圳組合の特徴左の如し。

(イ) 地方長官に於て公共の利害に關係ありと認定したる埤圳区域の利害關係人が総督の認可を経て組織す。

(ロ) 組合員は土地所有者質権者小作人及埤圳主等直接の利害關係人とす。

(ハ) 組合の区域は行政官廳之を認定す。

(ニ) 組合は規約の定むる所に依り水租其の他の費用を徴収するを得べく必要に依り行政官廳に於て徴収して權利者に下附することを得。

(ホ) 議決機関として組合会を有す。

三、私設埤圳

私設埤圳は官公埤圳の刺戟と農業の發達に伴ひ益々發達し、昭和十八年三月末現在埤圳二四五、灌溉面積二万一千七甲に達せり。

埤圳灌溉面積累年比較

区 分	總 面 積	官設埤圳に 依るもの	公設埤圳に よるもの	水利組合に 依るもの	私設埤圳に 依るもの
明治 38 年 3 月末	甲 200,246	甲 1	甲 93,488	甲 1	甲 106,758
同 43 年 3 月末	233,737	3,817	155,424	1	74,496
大正 4 年 3 月末	249,974	11,216	155,424	1	76,454
大正 9 年 3 月末	314,737	11,488	162,304	1	95,487
同 14 年 3 月末	361,340	1	207,762	1	90,759
昭和 5 年 3 月末	455,169	1	80,192	190,389	88,039

同	6 年 3 月末	463,595	135,621	231,509	93,359
同	7 年 3 月末	463,713	136,628	234,024	93,063
同	8 年 3 月末	471,843	138,408	238,961	94,473
同	9 年 3 月末	475,555	138,879	240,290	97,386
同	10 年 3 月末	480,369	139,052	244,250	97,067
同	11 年 3 月末	500,661	139,558	250,431	110,672
同	12 年 3 月末	526,712	140,546	258,786	127,380
同	13 年 3 月末	543,673	140,700	285,113	117,860
同	14 年 3 月末	543,673	140,700	285,113	117,860
同	15 年 3 月末	548,968	139,849	321,694	87,425
同	16 年 3 月末	546,554	139,942	381,099	25,513
同	17 年 3 月末	559,942	139,967	398,727	21,248
同	18 年 3 月末	561,999	140,107	400,885	21,007

第二節 嘉南大圳

第一項 事業經營の現況

嘉南大圳新設事業は昭和五年四月主要工事の竣成を告げ、同六月区域内一帯に灌漑を開始し、爾來烏山頭貯水池を始め給排水路橋梁等、各種施設物及附屬構造物は組合に於て直接維持管理に当れり、然るに年々風水害の爲、五十万円内外の復旧費を要する状態にして是等は直接河川の氾濫に因るもの多く、区域内の河川整理を爲さざる間は暴風雨

等災害に免れ得ざるものにして、今尙多額の負担を有する組合としては不勝苦痛と不安を感じつゝあり。

昭和十一年度以降經常部水租を増徴し、専ら在來施設の改善及構造物の改修費に振向けつゝあるも、尙將來河川整理、排水施設の完備、排水利用、烏山頭放水路施設、濁幹線、排砂施設等幾多改善を要するものあり、又灌漑面積に於ては事業着手の当時十五万甲灌漑の予定なりしも、区域内の各河川は治水工事未済にして乱流氾濫の虞ある爲、埤圳新設に對し防水兼用の水路堤防を築造したる場所ありて此の堤外地となる部分は河川の氾濫を恐れ埤圳の利用をなさざるものあり、又一部埤圳工事遅延し細部に亘る水利施設未了なる爲、充分利用するに至らざりしも漸次埤圳工事遅延部分に於ける細部の施設を完了するに伴ひ、昭和十八年度末には十四万百七甲に達せり。又三年輪作式給水法実施に就ては灌漑開始の当初数年間は埤路の不安定、原野養魚池の耕地化作業未了、埤圳利用準備作業の未了及前期作物との關係等より輪作の一畝實施困難なると農家の都合其の他過渡期の措置として雜作区、稻作区等に蔗作を爲すもの等ありて輪作の実績予期の如くならず、昭和五年期蔗作輪番区内甘蔗作約三割、稻作輪番区内水稻作付約五割に過ぎざりしも其の後埤路の安定、細部施設の完備、農耕者の利用習熟と協調に依り漸次理想の給水方法に向ひつゝあり。

第二項 組合財政の現況

昭和五年全区域に亘り灌漑を開始し、新設埤路の經營に當ると共に組合財政計画を始め新設埤圳の維持管理に要する経費は水租として土地一甲步当年額八円を賦課徴收し來りたるが、昭和十一年度よりは既設諸構造物に對する積極的補修改善の必要に迫られ、逐次増額を成し昭和十七年度に於ては年額一甲步当十四円を賦課徴收することとせり。

埤圳新設工事費に充当したる借入金は昭和五年より昭和二十三年度迄十九箇年間年々蒙利に対し特別水租を賦課徴收し償還することゝせり。然るに此等水租賦課面積は当初十五万甲の予定なりしも前項記述の原因に依り、当初の予定に達せず、且灌溉開始早々のこととて其の効果未だ上らず加ふるに輪作式に習熟せざると折柄の農産物價格の暴落に遭遇し、組合の水租負担力が減殺せらるゝ等の諸理由に依り組合收入予算額に達せず、組合の財政窮迫せり依つて組合は經常の維持管理に當りては極力事務的経費を節約すると共に、借入金低利替及償還期限の延長等に就き極力努力し來りたり。偶々昭和十年法律第二十五号に基く政府貸付金処理委員会に於て國庫よりの借入金は償還期限を三箇年延長の上、利率を五分に引下げ延滞元利金は昭和十一年度以降十七箇年間分割償還に貸付條件変更案を可決せられ、尙其の他の借入金も夫々低利に借替を了し他面圳路の安定、耕地の改良、耕作方法の改善等に依る事業の効果漸次向上し、組合員の経済亦好轉しつつあり。

借入金調 (昭和18年4月1日現在)

借入先	現在高	利率	償還期	間
國庫	11,944,000 円	五分	自昭和10年度	至昭和26年度
同 (滯納金)	1,989,518	無利子	自昭和11年度	至昭和26年度
同 業 銀 行	294,829	四分八厘	自同 9 年度	至同 19 年度
同 勸 業 行	637,120	同	自同 9 年度	至同 23 年度
同 同	438,373	同	自同 9 年度	至同 22 年度
同 同	162,666	同	自同 9 年度	至同 22 年度

同 同	238,869	同	自同 9 年度	至同 26 年度
同 同	89,101	同	自同 12 年度	至同 26 年度
同 同	96,638	四分七厘	自同 13 年度	至同 27 年度
同 同	24,002	五分	自同 12 年度	至同 26 年度
同 同	944,956	四分三厘	自同 10 年度	至同 22 年度
同 同	306,539	三分	自同 16 年度	至同 25 年度
大日本製糖株式会社	104,512	同	自同 16 年度	至同 25 年度
塩水港製糖株式会社	205,731	同	自同 16 年度	至同 25 年度
明治製糖株式会社	115,827	同	自同 16 年度	至同 25 年度
台湾製糖株式会社	618,000	四分三厘	自同 18 年度	至同 22 年度
同 工 業 行	498,000	同		
同 同	265,796	同		
同 同	1,587,000	同		
同 同	20,549,437	同		
計				

第三節 水利事業の助成

第一項 低利資金の供給

本府は公共埤圳組合又は水利組合の埤圳新設拡充旧債償還等の爲、必要あるときは低利資金の融通を爲し、之が助成をなし來れり。現在水利團體の事業資金は殆んど起債に依るものにして之が利率の高低は直接の経営に重大なる影

響を及ぼし、経営者の等しく苦慮する所なるが、漸次低利資金の融通を受け農民負担の軽減を図り來れり。

第二項 國庫補助金下附

公共埤圳組合又は水利組合の事業にして工事費多額を要し、組合員の負担重き者に対しては國庫より補助金を交付し、之が助成に努めつゝあり、從來嘉南大圳に対し二千六百七十四万円、宜蘭第二水利組合（排水工事）に対し三万円、後村水利組合（現新莊水利組合）に対し六万二千二百余円、当公水利組合に対し十万九千二百余円を補助せり。昭和八、九年度に於て廳地方費に対し埤南改修工業費として七十四万九千七百円を補助し、更に工事施行中昭和九年八月颱風の被害を受けたるを以て災害復旧費補助として三万四千四百四十七円を昭和十年八月再度颱風に襲はれ、二万七千四百七十六円を夫々補助せり。昭和十六年度に於ては震災復旧の爲后里圳水利組合に対して二万九千八百八十九円竹東水利組合に対して一万円竹南水利組合に対して一万八千八百円、昭和十五、六兩年度に於て新竹水利組合竹頭圳改修工事に対して計四万二千二百四十五円を夫々補助せり。又刻下農産拡充上耕地造成の爲、本島開拓事業の嚆矢を爲す台灣拓殖株式会社の開拓事業に対し、之が助長奨励の爲昭和十三年度八万円、昭和十四年度二万五千元を補助せり。

尙本邦食糧増産の急速なる達成を必要としたる情勢に鑑み、第六項土地改良工事と併行し之が増産を爲すべく小集團地にして工事の比較的簡易なる土地を選び昭和十五年度より左の如く実施中なり。

年 度 別	工 事 箇 所	総事業費 円	國庫補助費 円	米増産額 千石	受益面積 千坪
昭和 15 年 度	91	4,986,568	1,092,789	119,000	12,249
昭和 16 年 度	38	4,106,327	1,910,445	49,000	8,993
昭和 17 年 度	19	2,471,894	1,155,894	46,000	6,662
昭和 18 年 度	28	2,982,739	1,434,866	44,000	6,189

尙十一ヶ年土地改良事業中の塩埔地方土地改良事業に対しては昭和十五年度より竹南地方の外八地方土地改良事業に対しては昭和十六年度より夫々事業期間に分割補助を爲すことを決定し、昭和十五年度より夫々補助金交付済なり。

第三項 水利統制調査

水利の統制及拡充強化は物資の拡充強化を期する上に於て最も緊要にして、殊に重要農産物増殖計画遂行上或は此等農産物を原料とし、其の他時局關係新興業の殷賑に伴ふ水力發電事業及水道事業の發達に依り水の需要方面著しく増大せられ、限ある水源水量を以てしては之等各種水の需要に充足せしむること不可能なり。依て之が應急対策として水の需給關係を徹底的に調査し、以て総合的合理的利用計画を樹立し、水利の統制を要する事態に切迫せられ、之が具体的方策としては先づ水の需要方面として、其の大部分を占むる埤圳の現況を調査し埤圳台帳の作製に依り水利権の帰屬を公定せしむると共に水の供給方面としては重要水源の河川流域量を測定し、水量を詳細適確に把握し、此の需給方面の調査を根幹として徹底せる水利統制及拡充強化を実施する爲、昭和十四年度予算にて本調査費として七

万三千六百十一円の計上を見、昭和十四年度より向ふ十箇年間に以て之が完成を期せんとす。

第四項 十一箇年土地改良事業計画

熱と光にて農業の天恵的好條件にある本島の水利事業は近年著しく整備拡充せられたりと雖も、之を詳細に検討する時は尙幾多改良並に拡張の余地あるを認められ、本府に於ては從來灌漑排水事業計画調査を以て全島に於ける五百甲以上の集團地域にして、灌漑及排水施設を爲すことに依り或は兩期作田に或は一期作田に或は輪作田と爲し得る土地の基本的概要調査を爲せる治水工事浜覆地、海埔地、原野、畑地の中より水源関係、事業効果、地方事情等を綜合考覈し、水利施設に依り工事実施可能見込確實なるもの二十三万五千八十三甲を選択し、之を第一期計画として十一箇年土地改良事業計画なるものを樹立し昭和十五年度より之が計画調査を爲し來りたり。

第五項 土地改良事業

十一箇年土地改良事業の一部として本府に於て既に之が実施計画調査終了せる次の各地方は昭和十五年度或は昭和十六年度より着手せり。

1 塩埔地方土地改良事業

曩に築堤工事完成せる下淡水工事の新生地たる塩埔地方の官有集團地及隣接地又は介在せる利害關係共有の民有地一万五千三百六十二甲に対し耕地造成並立体的利用價值増進施設たる土地改良事業を施行せんとするものなり。本事業費總額五百四十二万六千六百円に対し、之が完成後の收穫金の増加年額三百三万八千余円、土地價格の騰貴額一千

九百九十五万七千余円に達する見込なり。

2 三星地方土地改良事業

本事業は宜蘭、濁水溪治水堤防工事完成に依る新生地並に利害關係地合計四千三百五十一甲に対し、水源を宜蘭濁水溪に求め灌漑工事を施さんとするものにして本事業費總額百五十万八千余円に対し、完成後の收穫金増加年額七十八万三千余円、土地價格の騰貴額三百四十万余円に達する見込を以て工事実施中の処、種々の事情に依り本工事は昭和十九年十二月迄実施し一應中止するの已むなきに至れり。

3 高雄地方土地改良事業

本事業区域一万九千七百四十六甲中、灌漑施設を有する兩期作田四千七甲、單期作田前灌漑後期看天田三千八百二十甲看天田一千四百七十五甲、甘蔗畑四千九百七十四甲、雜作田五千二十甲、原野四百三十甲にして水源を下淡水溪に求め揚水機の設備をなし、工事完成後は兩期作田八千九百甲、甘蔗畑四千二十甲其の他三年輪作田四千八百二十六甲、兩期三年輪作二千甲となり、区域全般の農作物に対し合理的灌漑をなし、尙事業地灌漑区域と雖も排水不良なるを以て排水路の改善を併せて行はんとするものなり。本事業費總額五百九十万二千二百三十四円五ヶ年継続事業として完成後の收穫金の増加年額二百二十五万五千二百余円、土地價格の騰貴額二千七十七万六千三百余円の見込なり。

4 竹南地方土地改良事業

本事業地は一千六百四十甲（民有地一千四百四十甲、官有地五百甲）にして從來灌漑施設なき原野山林及畑作地一千二百四十甲、灌漑不充分なる四百甲に対し中港溪支流峨眉溪を水源とし、貯水池、灌漑排水用導水路幹線並支線工事

を施行せんとするものにして完成後は両期作田九百七十甲、三年輪作田六百七十甲となる本事業費総額二百八十七万九千二百二十四、三箇年継続事業にして工事完成後の收穫増加年額八十九万三千八百余円、地價騰貴額五百二十一万四千百余円の見込みなり。而して本工事用資材入手困難の爲工事は一時中止するの已むなきに至れり。

5 二林及虎尾地方土地改良事業

本事業関係面積二千百十七甲（二林一千五百三十甲、虎尾五百八十七甲）にして從來二林地方は畑地、虎尾地方は三年輪作地なるを二林地方麦興厝溪及萬興桃山を水源とし、虎尾地方は耕地内四箇所に井筒を沈下し、地下水を集めポンプ揚水し二林地方は三年輪作、虎林地方は両期作田及畑作灌漑を行なはんとするものなり。本事業費総額八十八万六千三百四十五円三ヶ年継続事業にして完成後は年額増収金五十六万八百余円の見込みなり。

6 鳳林地方土地改良事業

本事業関係面積は三千五百六十七甲にして万里橋溪に護岸工事を施し、耕地の安全を確立すると共に灌漑及排水工事を実施せんとするものにして、現在両期作田五百五十二甲、他は全然灌漑を有せざるも工事完成は両期作田五百五十二甲、單期作田六百五十九甲、三年輪作田二千三百五十六甲とす。事業費総額三百十三万八千三百円（五箇年継続事業）にして工事完成後は年額増収金百万七百余円、地價騰貴額六百七十九万九千四百余円の見込を以て工事実施中の処種々の事情に依り本工事は昭和十九年度以降中止するの已むなきに至れり。

7 八堡圳土地改良事業

本事業は八卦山地帯の集水面積一万五千甲よりの悪水を排除する爲、鹿港溪の根本的改修をなし、之を排除すると

新所の制水門を新設し、從來の本溪を水源とする灌漑区域の用水量の充足を計り灌漑の合理的施行に依り、七千八百八十三甲余の立体的利用増進をなさんとするものにして、本事業は八堡圳水利組合主体となり、総事業費三百九十万六千九百円、内國庫補助百九十五万三千四百五十円の四箇年継続事業なり、事業効果は年額増収金五十九万九千八百余円地價騰貴額三百六十八万九千二百余円の見込を以て工事実施中の処種々の事情に依り本工事は昭和二十年以降中止するの已むなきに至れり。

8 斗六地方土地改良事業

本事業面積は二万八百四十九甲受益面積一万七千七百五十二甲にして水源を濁水溪より司水し、灌漑排水工事を施行することに依り單期作田五千四百三十一甲、三年輪作田一万二千三百二十二甲に爲さんとするものなり、本事業は嘉南大圳組合主体となり、之を施行し総事業費一千五百五十六万九千五百円、内國庫補助五百七十八万四千七百五十円の六ヶ年継続事業なり。事業効果は年額増収金五百二十九万六千余円、地價騰貴額四千二百四十五万五千余円の見込を以て工事を実施し來たるも本工事種々の事情に依り昭和十九年度迄実施し一應中止の已むなきに至れり。

9 新港開拓工事

本事業地は台南洲北港郡下海浦地にして、昭和十二年に起工新港干拓工事第二期拡張工事に属し、事業面積二千二百六十四甲に対し、干拓工事及灌漑施設を施し給水源は鑿井に依る地下水及嘉南大圳牛桃灣排水路の余水をポンプ揚水に依り千六百六十七甲の耕地に導入、灌漑を行ふものにして両期作田九十二甲、單期作田七百五十六甲を造成せんとす。本事業は台湾拓殖株式会社経営にして総工事費四百九十万円、内國庫補助二百四十五万円の八箇年継続事業

なり。完成後は年額総増収金九十五万三千二百余円、地價騰貴額五百九十一万五千二百余円の見込を以て工事を実施し來たるも本工事種々の事情に依り昭和十七年度以降中止の已むなきに至れり。

10 崙背地方開拓工事

本事業は台南州虎尾郡下海浦地並官有原野五千九百六十一甲にして、干拓工事をなし四千二百二十七甲の耕地を造成し水田として利用せんとするものにして現在標高田十五米附近に堤防天端標五米の潮止堤防を築造し、耕地を保護するものとす。給水源は濁水溪及虎尾溪の二河川と許厝寮排水の二大排水路に求め、之を耕地に導入し灌漑を行ふものにして両期作田千六百九甲、單期作田二千五百十八甲を造成せんとするものなり。本事業は台灣拓殖株式会社及大日本製糖株式会社の経営にして総事業費八百八十八万三千円、内國庫補助四百四十四万五千五百円（十五箇年）九箇年継続事業にして事業効果は年額増収金百九十九万三千三百余円、地價騰貴額千七十三万四百円の見込を以て工事を実施中の処、本工事は種々の事情に依り昭和十九年度迄実施し一應中止するの已むなきに至れり。

11 額廟地方土地改良工事

本事業は台南州新屋郡額廟庄附近の塩水溪上流に灌漑用水源、台南市上水道用水源及塩水溪洪水調節のため貯水池を築造し、其の貯水池工事費の一部を負担し兩期作田六百四十八甲、單期作田二百九十九甲、看天田五百五十六甲、畑七百九十甲、原野百五十四甲を工事完成後は兩期作田六百四十八甲、單期作田二百九十九甲、三年輪作田千五百甲に爲さんとするものなり。本事業中土地改良關係工事は新豐水利組合主体となり、総事業費二百一十一万五千円内國庫補助百五万七千五百円の四箇年継続事業なり。

第六項 畑地擴張改良事業

本府の計画せる土地改良事業に依れば昭和十五年度以降十一箇年間水田十一万二千九百六十三甲の擴張を見るも、之が爲六万四千三百八十甲の畑地が失はるゝ事となるにより、現在と略々同面積を確保する要あるを以て之を林野の開墾に求む。先づ六万甲に対し昭和十五年度より十一箇年計画として本事業に依り助成することとせり。尙十五年度以降既往四箇年に於ける実績左の如し。

年 度	計 画			実 績			備 考
	擴張	改良	計	擴張	改良	計	
	甲	甲	甲	甲	甲	甲	
昭和15年度	2,000	2,000	4,000	2,126	1,609	3,735	甲助成金擴張100円 改良70円
" 16 "	6,000	5,000	11,000	1,909	4,909	6,818	同 150円
" 17 "	3,000	5,000	8,000	1,468	4,938	4,931	同 100円 灌漑100円
" 18 "	中止	4,300	4,300	中止	1,890	1,890	同 一般100円

第二章 道 路

第一節 概 況

指定道路 三、六八九軒余 内 從貫道路 四六一軒余 其他指定道路 三、一二八軒余

市街庄道 一三、五九四杆余

公認道路には指定道路と市街庄道との二種あり。前者は基隆より屏東に至る所謂從貫道路、其の他の重要道路にして内地の國府縣道に比すべく國庫、州又は廳費に於て維持修繕又は改築を爲し後者は内地の市町村道に該当し其の道路費の市街庄又は地方民の負担する所なり。指定道路中重要な路線又は市道の改善工事費に對しては國庫より補助し、街庄道には地方費より補助をなしつゝあり、領台後昭和十九年度迄に支出せる道路費は國庫五千八百余万円地方費五千六百余万円なり。

第二節 道路改良

一、台北新竹界間道路改良

從貫道路の基隆、台北間延長約二十九杆の區間は本島郊外道路高級舗裝の第一着手として、昭和十年度より同十九年度に至る六箇年継続の國庫事業として予算總額百六十一万余円を以て路体の改良及路面の舗裝を完了し、引続き昭和十七年度より同十九年度迄に台北橋左岸より新竹州界に至る延長約十一杆を予算六十三万余円を以て舗裝工事に着手し、内八杆二七〇米のセメントコンクリート舗裝を完成したるも殘區間二杆七三〇米は時局交轉に依り一先づ中止したり。

二、高雄州管内道路改良

從貫道路の内高雄州管内は總延長在來六十二杆にして其内台南高雄間は人口十一万の都市台南と開港都市とを結び

交通に四十三万余の人口を有するが爲、平時に於ても自動車、人力車、牛車等の交通頻繁にして夙に舗裝の必要を認め、昭和十四年度より三ヶ年継続、總予算六十五万円の國庫事業として此の區間約二十二杆の路体改良及路面舗裝を計画し、工事に着手せり。然るに右區間道路改良計画当初に於ては高雄屏東間は砂利道として狀態良好なりしも昭和十二年度に於て下淡水溪の架橋竣功し、此の間の自動車交通繁多となりたるを以て昭和十五年度に於て改めて總予算二百十九万余円を以て台南州界高雄間及高雄屏東間をも舗裝することとし、高雄州管内從貫道路の全部に對する改良工事を行ひ昭和十八年度に完成せしめたり。

第三節 新店礁溪道路改修工事

本工事は本島一周幹線一、〇〇四杆道路の一區間にして該當の首部を占め、蘭陽三郡と台北市とを聯絡する最短路にして行政上、産業上極めて重要な地位にあり、延六〇杆にして昭和十一年度より同二十年度に至る十箇年継続の國庫事業として總予算額參百九十參万余円を以て施行中にして内新店延長三十一杆、礁溪側一九杆、計五十杆は昭和十八年度迄完成し、目下中央部延長十杆に渉る區間を昭和十九、二十兩年度に亘り施行予定の処、昭和十九年度に於て一應幅員四米として開通を計り、昭和二十年度に於ては幅員を所定計画六米に擴張施行中なり。

第四節 花蓮港台東道橋梁架設工事

本島道路網の最大幹線たる所謂、台灣一周道路延長一千四杆は新店礁溪道の新設及花蓮港台東間百七十二杆余に所

在の大中橋梁の新設に依りて濁水溪橋の新設を残し一應改修を完了す。

本区間の橋梁架設は一周道路の完成上必要欠くべからざるのみならず、東岸唯一の商港たる花蓮港の利用に依る東台湾資源開発上必須の要件なるにより昭和十五年度より昭和二十二年度に至る八ヶ年継続の國庫事業として総予算三百四十二万余円を以て十五河川に対する架橋工事に着手し、卓溪知亞干溪橋梁は昭和十七年度に於て完成し、昭和十七年度麻子漏溪橋架設工事に着手中の処、時局の交轉により下部工事のみ完成したるも一時中止の已むなきに至れり。

第五節 中部横断道路開鑿

中央山脈によりて陸上交通の遮断せられたる本島の東西両地方は蘇澳、花蓮港間道路の開設に依りて昭和六年度より北部に於て自動車連絡の途開け、又昭和十四年度楓港呂家溪間道路の新設成りて南端に於て自動車連絡を可能とするに至りたりと雖も、此の南北横断道路は其の直線距離さへ実に三百二十軒の長きに及ぶを以て此の略中間に横断道路を新設することは、本島の交通上緊急なることなり、依て之を所謂能高越の路線を採りて昭和十六年度より其の開鑿に着手せり。本計画は総予算九百二十六万七千余円を以て台中州能高郡蕃地富士社より花蓮港廳蕃社銅門に至る自動車交通可能の道路を開鑿せんとするものなり。右の計画に基き昭和十六年度より工事着手せられしも其の後時局の推移に伴ひ工事費減額せられ、昭和十九年度迄に工費九十万円支出し延長約十軒を完成せるのみにて引続き施行中なり。

第六節 重要指定道路の改修

從貢道路、蘇澳花蓮港道、新店礁溪道楓港台東間を除く西部五州管内に於ける指定道路の内行政上及産業上特に重要な道路の改善を促進する方策の下に延長約一千二百八十三軒を指定し、第一期事業として昭和五年度以降十箇年間各州は之が改修を実施することとなり工事総額八百七十余万円を予定、國庫は之に対して二分の一乃至三分の一の國庫補助金を交附し、毎年二十八万五千円総額二百八十五万円を計上せり。工事は主として道路幅員（有効幅員平地部九米山地部五米）の拡張及小橋梁の新設並に之に伴ふ土工を完成せしむる方針のもとに工事を進行せしめたり。然るに上述せる路線内には尙後図に残されたる橋梁を新設改築其の他の構造に於て総て総額二千二百余万円に達するを以て之に対する第二期事業計画の確立は急務とする所なりき、然るに國庫及州財政の状態は之の第二期事業の完遂を期し能はさりしに付、昭和八年度より残工事の内緊急捨て置き難き工事を追加せしむる一方、新に改修するの必要を來したる路線を加へ補助に依り之等を完成せしむる途を開きたり。尙昭和十二年度よりは新に廳費を以て施行する道路事業に対しても國庫補助の制度を設けたり。而して当初年度より昭和十九年度迄十五箇年に於ける國庫の支出せる補助金は総額八百三十三万四千余にして改修道路の延長一千九百余軒に達せり。

第七節 屏東台東道開鑿

本島の東西を連絡する道路は北部に於て新店礁溪道あり、南部に於ては楓港台東道あり、然れども時局推移に伴ひ

屏東台東間直通自動車道の必要に迫られ、昭和十九年度中完成さすべく、予算額一千百六十九万円を以て高雄州屏東郡蕃地サンディモンを起点として中央山脈能高山の鞍部標高一、六八二米の箇所を横断し台東廳に入り知本溪に沿ひて台東郡卑南庄知本に至る延長二二〇軒の自動車道路の開鑿に着手し、昭和二十年三月十日開通せしめたり。然るに本道沿線は地質粗鬆なる風化岩石地帯を通過せるものにして一應開通を見たるも之が交通維持は頗る困難なるを以て目下引続き補修工事施行中なり。

第三章 河 川

第一節 河川管理と工事現況

一、河川の管理区分

昭和四年二月より本島に河川法を施行して以來、現在台灣總督の管理に属する準用河川三十河川なり。而して施行河川の工事施行に當りては工事費の百分の三十以内を所轄州費、又は廳費に分担せしめ準用河川の工事費に付ては工事費の百分の六十（廳費は百分の九十）を國庫より補助す。

二、河川改修並維持工事

現在改修工事施行中の河川にして北港溪八掌溪及阿公店溪三河川にして北港溪は昭和十四年度より二十四年度迄十

年八年度は昭和十四年度より二十二年度迄九箇年阿公店溪は昭和十四年度より二十年度迄七箇年（二十年度は事業繰越）の継続工事として施行中なり。而して昭和二年度以降順次改修工事に着手したるものにして宜蘭濁水溪は昭和十一年度に竣工、下淡水溪は昭和十二年度に竣工鳥溪及曹文溪は昭和四年度を以て竣工林辺溪は昭和十八年度頭前溪は昭和十九年度時局の爲に一應打開を竣工するに至れり。然るに之等改修河川は其の竣工に依り從來の河狀に一大變動を來すべきを以て新設工作物の維持は最も周到を極めざるべからず、依て宜蘭濁水溪は昭和十二年度より下淡水溪は昭和十三年度より鳥溪及曹文溪は昭和十五年度より林辺溪は昭和九年度より頭前溪は昭和二十年度より何れも十箇年の予定を以て維持工事を施行中なり。

本治水事業予算關係次の如し。

治 水 事 業 費

区 分	總 額	昭和十八年度 迄支出額	昭和十九年度 以降支出額	昭和十九年度 同 20 年 度	自 21 年 度 至 28 年 度
既定額	62,817,683 円	47,117,959 円	15,699,724 円	4,530,962 円	3,767,227 円
既定額	△2,910,166	—	△2,910,166	△1,075,919	△1,044,396
繰延増減額	—	—	—	△450,000	△100,000
追加額	1,786,160	—	1,786,160	738,224	117,224
改定額	61,693,677	47,117,959	14,575,710	3,543,271	2,940,055
修費	—	—	279,745	65,037	50,070
費	—	—	53,800	13,323	6,704
與	—	—	—	—	—

給與事務費	工費	給與事務費	工費	給與事務費	工費
460,686	132,703	68,037	259,946	38,472	15,779
13,742,908	3,720,430	2,406,582	7,615,896	5,661	17,032

三、局部的河川工事

其の他急を要し根本的改修工事を待つ能はざる各河川の局部的工事は一年限りの予算を以て大正六年度以降年々之を施行しつゝあり。

昭和十七年度迄に於ける右工事費平均予算額六十万余円なり。

四、準用河川工事補助

河川法準用河川に対する工事費其の他の費用は其の所轄州費又は廳費の負担なるも各準用河川共局部的工事の施行を要する箇所多く、州費廳費のみにては到底其の負担に堪へざるを以て昭和四年度以降河川法の規定に依り工事費の一部を國庫より補助し、昭和十八年度迄に補助したる総額は二百七十余円なり。

第二節 今後急施を要する工事

本島河川工事の現況は前述の如く改修工事施行の八河川を除く他の主要十九河川も地勢雨量其の他の關係上各特異性を有し忽諸に付すべからざるものあり、就中最も急を要する河川及之が工事費を掲ぐれば左の如し。

一、淡水河治水工事

淡水河は台北市西南に沿ひ北流する本島屈指の河川にして築堤に依り河道を一定し島都台北市及其の附近一帯の洪水氾濫を防禦せんとするものにして之が工事費約二千八百八十万円（戦前予算額）なり。

二、急水溪外三河川治水工事

台南州下急水溪及朴子溪は昭和十四年度治水工事を起工せる北港八掌の両溪と並び台南州下の平野を貫流する所謂緩流河川にして古來殆んど河川工事を施行せしことなき原始的河川なり。然も嘉南大圳灌漑区域内に在りて流身常に変動し、一朝洪水に際せば沿岸の土地決潰流失並に浸入地域頗る廣く嘉南大圳灌漑工事完成の今日と雖も現在の狀態にては同大圳の機能全きを得ざるのみならず、人家の浸水、田畑流失の慘狀を極むるものあるを以て兩岸に堤防を築造し適当に護岸を施行するの要あり。新竹州下後龍溪及台南高雄兩州界を貫流する二層行溪亦原始的河川にして年々洪水時に際しては沿岸耕地の決潰流失並に浸水等の被害は多額に上り、國土保全産業開發上忽諸に附すべからざるものありて緊急改修工事を施行の必要あり、其の工事費は左の如し。

急水溪	三百四十万円（戦前予算額以下同断）	朴子溪	三百四十八万円	後龍溪	三百四十七万円	二層行溪	六十二万円
-----	-------------------	-----	---------	-----	---------	------	-------

二、準用河川にして台中州下大里溪外五河川及台南州下の塩水溪の七河川は共に重要河川の一にして前者は大屯郡豊原郡及台中市に跨る沃野を網狀の如く濫流し、洪水時に於ける耕地の流失農作物並に人畜の被害は年々巨額に上るの實情にあり。塩水溪は新豊郡及台南市を貫流する台南平野六大河川の一に數へられる緩流河川なるも、年々の洪水被害は甚大を極め何れも原始的河川にして已に着手の高雄州下の阿公店溪に並び緊急改修工事を施行するの必要あり。

り、其の工事費は左の如し。

二六六

大里溪外五河川改修費 三百六十六万円 塩水溪改修費 三百七十六万円

四、台湾東部河川の整理

東部地方は今尙交通甚しく不便なるが爲、人口の移動少く密度極めて稀薄にして現在農耕面積は三万九千余甲、將來耕未墾地八万二千余甲を算するなり。然るに近時局部的には築港鐵道水利事業諸般の施設漸次充實され産業の開發亦見るべきものあるも、尙將來の施設に俟つべきもの甚だ多きを算す。就中、東部地方の河川は急峻なる山岳部より直下し、平地部に於ては殆んど河川の形狀を保ち得ず、網狀を呈す爲に道路、鐵道は之が渡河点を求むるに由なく已むを得ず山脚上流部に廻り、漸く彼岸に達することを得る実情なり。依て同地方の開發には先づ花蓮港廳下を從貫する花蓮溪秀姑巒溪及台東廳下卑南大溪及知本溪呂家溪を整理し、洪水防禦築堤を施し、次て其の目的を達せんとす而して各溪共東部開發上最も急を要するものあり。之を施行する予定にて昭和十二年度より東部地方開發事業費として一年度限りの予算を以て施行中なり。所要予算額左の如し。

花蓮溪 二百十二万三千円 秀姑巒溪 九十三万七千円 卑南大溪 四十三万円 呂家溪 五十万五千円
知本溪 十四万九千円

五、維持工事

改修河川の維持工事を要するは第一節第一項に於て述べたる如くにして、即ち宜蘭濁水溪は昭和十二年度、下淡水溪は昭和十三年度、烏溪及曹文溪は昭和十五年度、林辺溪は昭和十九年度、頭前溪は昭和二十年より何れも十箇年

維持事業として現に工事継続中なり。尙目下治水工事中の北港溪外二河川及其の他の河川共改修工事完成後は年々各河川に付き二十万円乃至五十万円程度の維持費を國庫予算に計上の要あり。

六、砂防工事

本島に於ける河川の上流間部は傾斜急峻土質脆弱にして土砂の流出量極めて多きと管て土砂打止工事の施行されたることなきに依り平地部に於ける治水工事と相俟つて砂防工事の緊要を認め、改修工事施行の下淡水溪宜蘭濁水溪烏溪曹文溪頭前溪及濁水溪の大河川に就き調査計画中に属し改修工事完成のものより順次之が工事施行を要す。

其の工事費は年々約五十万円を要する見込なり。

第四章 都市計画

第一節 都市計画

第一項 概況

本島に於ける都市計画法制定の必要は夙に論ぜられたる処なりしが、昭和十一年八月二十七日勅令第二百七十三号及律令第二号を以て台湾都市計画法關係法等特例及台湾都市計画法の公布を見、又之が施行に關し同施行規則、都市計画法委員會規則及府令第十一号台湾都市計画法關係土地區劃整理登記規則等公布せられ、孰れも昭和十二年四月一日より施行せられたり。次で昭和十五年三月二十一日府令第三十八号を以て委員會規則を改正し、中央地方の二委員會制

度とし中央委員会は総督府に地方委員会は各州廳毎に之を置くこととせり。是を以て都市計画の決定、都市計画事業の執行、都市計画の財源をなす都市計画税及受益者負担賦課徴収、建築物の統制地域地区の設定、土地区劃整理の施行等本島多年の懸案たる各種の重要制度確立し、本島都市計画行政上一新紀元を劃することとなり。然して將來の都市計画は過大都市の抑制、建物空地制限の引上都市内空緑地帯の造成に一段考慮を要するものなり。

第二項 都市計画の施行

從來都市計画を定めて地方廳に於て告示したる市街数は台北市外五十三市街庄を算したるも、其の計画は主として街路網及綠地計画に止まり、完全なる都市計画と謂ふことを得ざりしが、新法令施行後は近代的都市計画に即せる綜合計画を樹立し、之を遂行しつゝある実狀にして昭和十七年六月末現在に於ける都市計画区域及都市計画決定市街庄は台北市の外十市五十五街庄計六十六箇所に及べり。而して台北市外十市を始めとして市街の膨脹顯著なる都市に対しては其の都市に順應せる計画を樹立する要ありて、之が調査費として昭和四年度以降計上せる外昭和十一年度以降に於ては都市計画令施行に伴ひ要する経費を昭和十二年度以降に於ては都市計画事務従事の職員充実に要する経費を夫々計上し、調査計画樹立決定、都市計画事業に關する指導監督等に從事しつゝあり各年度別予算を示せば左の如し。

年 度 別	都市計画調査費	都市計画令施行に伴ひ要する経費	都市計画事務従事職員に要する経費	新高港工業都市建設事業費
昭和四年度	5,500 円	— 円	— 円	— 円
昭和五年度	17,408 円	— 円	— 円	— 円
昭和六年度	19,800 円	— 円	— 円	— 円

昭和七年度	18,655 円	— 円	— 円	— 円
昭和八年度	30,603 円	— 円	— 円	— 円
昭和九年度	18,655 円	26,905 円	— 円	— 円
昭和十年度	18,655 円	37,452 円	24,130 円	— 円
昭和十一年度	18,446 円	37,452 円	24,212 円	— 円
昭和十二年度	63,138 円	37,452 円	24,212 円	— 円
昭和十三年度	18,446 円	36,928 円	25,296 円	600,000 円
昭和十四年度	19,793 円	38,661 円	24,016 円	587,155 円
昭和十五年度	2,711 円	38,661 円	24,016 円	1,358,533 円
昭和十六年度	9,714 円	38,661 円	24,016 円	— 円
昭和十七年度	264,575 円	292,172 円	169,898 円	2,545,678 円

昭和十九年度主要都市計画事業及國庫補助一覽表

執行者	事業費 円	國庫補助 円	摘要
基隆市	62,352 円	19,588 円	
新竹市	70,000 円	36,000 円	
高雄街	492,700 円	63,000 円	
岡山	280,000 円	140,000 円	
計	905,052 円	254,588 円	

第三項 新高港工業都市建設事業

新高港工業都市建設事業は土地区劃整理の方法に依るものにして面積三千六百ヘクタール（内二、一〇〇ヘクタールは換地処分のみ施行）総工費一千三百四十二万五千五百八十円（上水道工事を含む）を以て昭和十六年度より工事実施中の処、時局の急変に依り昭和十九年度以降工事中止となれり。而して本事業の執行者は台中州知事なるも明治三十年法律第三十七号に依り台灣總督に於て直接施行するものなり。

第四項 主要都市計画一覽表

（昭和 18 年度末現在，昭和 11 年度迄は市区改正工事費）

都 市 名	起算年度	事業費		
		前年度計	昭和 17 年度	累 計
台北	明治 28 年度	10,137,717.06	1,130,710.00	11,448,427.06
基隆	明治 42 年度	4,748,369.92	62,352.00	4,810,721.92
宜蘭	昭和 6 年度	253,142.78	20,920.00	274,062.78
新竹	大正 9 年度	823,149.16	28,600.00	851,842.16
台中	大正 10 年度	1,412,098.86	40,000.00	1,452,098.86
新高港工業都市	昭和 16 年度	600,000.00	557,559.00	1,157,559.00
彰化	大正 10 年度	387,862.10	—	387,862.10
台南	同 10 年度	2,886,358.53	77,900.00	2,964,258.53
嘉義	同 10 年度	1,439,130.59	44,304.00	1,483,434.59

高雄	大正 6 年度	3,693,754.37	1,433,690.00	5,127,444.37
屏東	大正 10 年度	520,865.68	62,508.00	583,373.68
花蓮	明治 42 年度	1,136,520.27	72,000.00	1,209,520.27
台東	明治 41 年度	122,347.91	16,880.00	139,227.91
馬公	明治 39 年度	233,527.61	—	233,527.61
計		25,976,914.80	3,548,453.00	29,525,367.84

第二節 公園

第一項 市街地公園

現在全島市街地公園は台北市公園外二十二箇所にして総面積八三四、一四八アールに上るも其の大部分は都市計画公園に非ず。本島の如き熱帯都市の生活上必須の休養と慰安給源として始政当初より各地市街地共、其の設置に意を用ひ、之が経営管理に当りたるものにして就中台北、台中、台南公園等は其の美觀整ひ利用又大なり。

第二項 國立公園

台灣には世界に誇示するに足る國家的大風景に乏しからず、第三紀層の雄渾なる地形と紅檜の大森林と原始的なる高山風景とを以て傑出する新高、阿里山一帯豪宕卓拔なる大斷崖と風光明媚なる山嶽とを以て聞える次高タロコの秀麗なる山容と冷靜なる高原と豊富なる温泉とより成る大屯山等是なり。而して台灣の如く炎熱の地にして四季の変化に乏しく、心身の緊張を欠き健康を害し易き地にありては、如斯自然の大風景を保護すると共に之を開闢して國民に

利用せしめ心身の休養と保健の向上に資するは最も緊要のことなり。近時世論に於て國立公園設置の論漸く高く、多数島民の之に対する欲求日に熾烈となり、総督府に於ても亦之が必要を認め昭和八年六月國立公園調査会を設置し國立公園に関する重要な事項を調査せしめたるが、先づ國立公園法を本島に施行するを急務とし、鋭意調査研究の結果、昭和九年九月勅令第二百七十三号を以て國立公園法を台湾に施行するの件及第二百七十七号を以て台湾國立公園委員会官制（昭和十六年勅令第三一二号を以て廢止）の制定公布を見るに至り、昭和十一年二月第一回委員会を開催し、大屯、次高タロコ、新高、阿里山の三景勝地を國立公園候補地として決定し、昭和十一年度に於て之が区域調査を完了し、昭和十二年十一月第二回委員会の諮問を経て同年十二月二十七日、前記三箇所を正式公園として指定せり。而して右指定と共に速に國立公園の保護、又は利用に関する根本計画を樹立し、之が事業を促進し國立公園設置の目的を達成するの要あるを以て昭和十三、四年度に於ては大屯國立公園に就き特別地域及制限緩和地域設定に関する該業調査完了せるを以て十五年度には次高タロコ國立公園に就き特別地域設定其の他調査の一部を実施せり。然るに昭和十六年四月國立公園委員会廢止せられ、昭和十六年度より國立公園調査費を削除せられたるに依り調査を一時打切るの止むなきに至れり。さりながら熱帯地に於ては國立公園の如き國民の保健休養的價値大なる地域の積極的利用は島民保健上今後益々大を加ふることとなるべく、殊に麗はしの島、台湾の幸とも謂ふべき風景資源は対外的には觀光産業として大に利用開發の対象となるべきものなる。各國立公園の面積を示せば左記の如し。

大屯 八、二六五ヘクタール 次高タロコ 二七二、五九〇ヘクタール 新高阿里山 一八五、九八〇ヘクタール
計 四六六、八三一ヘクタール

第三節 上 水道

本府は領台後惡疫を防遏し生活の安定を図るの基礎は上下水道の敷設に在りとし、明治三十九年直営にて先づ淡水街に水道を設けたるを創とし、以來全島に亘り銳意之が完備に努め今日に於ては十一市を初め島内主要市街には概ね水道の敷設を見るに至り、其の大小数百三十三箇総工費三千四百二十八万余円（擴張費を含む）給水予定人口百五十六万余人（昭和十六年末現在）に達するも、尙水道の新設擴張を要する市街尠からず、而して上水道の敷設に付ては当初の國庫自ら經營主体となり、公共衛生費に費用を分担せしめ、後之を市街庄に移管し、大正九年地方制度改正後は市街庄之が經營主体となり、國庫は必要に應じ之に補助金を下附することとせり。最近に於て水道擴張中なりしものは新竹台南嘉義高雄岡山の四市一街にして新竹嘉義の三市水道は工事半ば完成したるも其の他は時局の急變に依り十九年度以降中止となりたり。

國庫補助一覽表 (昭和19年度)

執行者	事業費	國庫補助	備
新竹市	81,000	27,000	
台南市	249,999	83,333	
嘉義市	1,580,307	526,769	
高雄市	125,499	41,833	

岡 山 街 637,200 212,400
計 2,674,005 891,335

第十編 農 林 水 產 業

第一章 農業一般

第一節 概況

明治三十五年末に於ける本島の耕地は僅々四十五万甲、農家人口百八十九万六千余人、同年中の農産額は僅かに五千六百二十万余円なりしが、其の後急激なる農業の發達に伴ひ、昭和十八年末には耕地八十八万余甲、昭和十九年末農家人口三百二十七万余人にして同年中の農産額は五億三百余万円（概算）に上れり。次に農産物の主なるものを挙ぐれば、米第一位を占め、亞いで甘蔗、豚、甘藷、バナナ、粗製茶、鶏、落花生、パイナップル、黄麻及柑橘類なり。而して本島には尙相當の可耕未墾地あり、農法亦改善の余地尠からざるを以て本島農業の將來に付期待すべきもの多く、農業試験機關の整備と共に本府に於ては極力之が指導助長を爲しつつあり。

(イ) 耕地面積及農家人口

年 別	耕 地 面 積			農 家 人 口
	田	畑	計	
明治 38 年末	252,999 甲	198,032 甲	451,031 甲	1,896,931 人
昭和 18 年末	540,811	340,167	880,978	3,271,131

(耕地面積、昭和 17 年末)

(ロ) 自小作別耕地面積 (地目別登録地昭和14年4月1日現在)

自作地	面積	割合
自作地	372,762甲	43.67%
小作地	480,799	56.33
計	853,561	

(ハ) 自小作別農家戸数 (昭和18年)

自作農	戸数	割合
自作農	145,810戸	31.00%
自作兼小作農	141,872	30.16
小作農	182,692	38.84
計	470,374	

(ニ) 農産物総額累年比較

明治35年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
56,207,228円	551,826,342円	541,446,672円	561,870,000円	631,596,566円	530,430,005円

(ホ) 主要農作物作付面積生産高及價額

	明治35年			昭和18年		
	作付面積 (收穫面積)	生産高	價額	作付面積	生産高	價額
米	355,687甲	283,424石	20,229,603円	628,970甲	7,880,624石	256,749,577円
甘藷	16,526	1,567,025千斤	1,966,423	134,872	24,837,378千斤	125,079,096

甘藷	63,147 (明治42年)	501,160,297斤	1,829,235	165,971	2,343,963千斤	41,248,807
バナナ	560	10,536,062斤	252,099	16,691	235,153,141斤	13,563,499
粗製茶	28,308	20,808,665斤	19,216,928	40,799	13,199,183斤	11,473,938
落花生	13,340 (明治42年)	108,907石	382,372	17,727	195,687千斤	2,386,687
バナナ	1,224 (明治42年)	13,632,098箇	243,876	7,558	93,647,113箇	2,893,958
稲類	779	4,932,788斤	195,965	5,443	47,767,000斤	5,433,659
柑類	1,147	1,564,878斤	67,071	11,023	12,400,978斤	2,628,706
黄芋	1,686	1,658,728斤	247,714	3,243	1,675,473斤	1,255,797
麻						

(ヘ) 主要家畜及家禽飼養数

	明治35年末現在	昭和18年末現在
豚	779,179頭	1,257,262頭
牛	255,815頭	334,671頭
鶏	4,449,460羽	6,940,485羽

第二節 米

第一項 概況

米は島民の主食糧にして其の生産は本島農業の基軸をなすものなり、而して本府が産米の改良に着手せるは今を去る四十年前即ち明治三十九年にして、當時の年産額は四〇〇万石内外に過ぎず、而も品質劣悪品種雜敷にして赤米等

混入多く商品價値に乏しきのみならず、單位面積当收量も寡少なりき、其の後本府は地方廳及地方廳農會を指導督勵し赤米並に異品種の除去、栽培品種の限定、採種田蕃殖田による種粳の更新、育種場の設置耕種技術の改善等銳意之が改良に努めたる結果全く其の面目を一新するに至り、加ふるに大正十一年蓬萊米（日本稻系）の栽培に成功して以來之が改良と普及により逐年生産増加の一途を辿り、戦前に於ては年産九〇〇万石を突破し、四〇〇万石内外の消費余剰を移出するの盛況を呈し、本邦の食糧問題に甚大なる貢獻をなし來れり、斯くして昭和六年頃より本邦は漸く産米過剰の時代を現出し世界的經濟恐慌の余波を被りて産米の調節を必要とするに至り、昭和十四年度より本島米穀の移出管理を実施するに至りしも、人口増加の將來を思ふとき米穀は依然として増産の要あるを以て米増産十箇年計画を樹立し専ら土地生産力の増大に依る米の増産を図ることゝせるが時局の変轉に加ふるに朝鮮の大凶作の影響により食糧自給確立の要愈々切実となりたるを以て右の増産計画を逐次修正強化すると共に農地の擴張改良農業用水の配分調節農地の管理に依る作付面積の増大を図り、一面増産技術の普及徹底を図る爲各般の施策を講じ以て之が完遂に努め來れり、然れ共戦局の逼迫に伴ひ各種の生産條件急激に悪化し、前記の増産計画は遂行至難となりしを以て、近年は生産の実狀に則し本府に於て各年各期別に生産計画を樹立し、之を各州廳に割当て極力生産の維持確保に努めつゝあるも肥料勞力等生産資材の不足、天候不順其他により減産の已む無きに至り島内の需給すら樂觀を許さざる現狀に在るは甚だ遺憾とする所なり、最近四ヶ年の生産統計を示せば次の如し。

年度別	作付面積	甲	乙	丙
		1期	2期	1期
昭和16年	301,716.25甲 2期 365,274.11 計 666,990.36	13,866石 11,525	4,183,561石 4,209,479 8,393,040	
昭和17年	276,105.00 2期 359,543.75 計 635,648.75	13,904 12,125	3,828,826 4,359,445 8,198,271	
昭和18年	280,267.98 2期 348,702.20 計 628,770.18	13,646 11,632	3,824,448 4,056,176 7,880,624	
昭和19年	277,823.00 2期 341,634.00 計 619,457.00	13,975 10,506	3,882,461 3,589,414 7,471,875	

第二項 本年の産米概況

(一) 第一期作米の状況

第一期作米の生産計画は作付面積の割当二七四、九三九甲、生産目標三、八四一、二七九石なりしが中北部に於ては苗代の冷害播替に依りて植付適期を失すること二旬及至一箇月余に及び、南部に於ては植付期の水不足に加へ連日空襲により植付不能地を出し管理亦粗放に陥りたる爲全島を通じ著しき減収となれり、目下実收高調査中なるも恐らく二百四十万石程度に止まるべし。

(二) 第二期作米の状況

第二期作米の生産計画は作付面積三五四、五一〇甲生産目標四、〇二五、七二八石の割当を行ふと共に新なる供出

責任制度の許に其の供出の確保を期することとし特に適期植付と作付面積の確保を図る爲國民義勇隊、非農家学徒を植付に協力せしむると共に軍の全面的援助を受ける等各般の施策を講じたるも第一期作米植付遅延の影響は第二期作の植付適期を失せしむる結果となり、のみならず植付期に適々旱害打続き尠からざる植付不能地を出せる見込にして八月二十日現在の植付面積は割当の八〇％に過ぎず、其の後豪雨暴風雨相次で襲來し水田の浸水、埋没流出等の被害も加はりて生育順調ならず本期の收穫も亦相当の大減收となるべく今後の食糧需給は眞に憂慮すべきものあり。

第三項 産米の改良増殖施設

産米の改良増殖に関する各般の施設は中央並に地方農事試験機関に於ける品種改良、新種法の改善に対する試験研究の結果に基き施行し來れるが其の主なるものを挙げれば在來米の品種改良、蓬萊米の奨励、病虫害の駆除、施肥の改善、深耕、正條密植稈拔並に改良苗代の奨励等にして昭和二十年度実行予算を以て実施中の事業を示せば次の如し。

一、米品種改良奨励 総補助予算額 九六三、四八六円

(一) 原種田及採種田經營補助 八一五、四七六円

目的 優良且つ純系なる品種の迅速確実なる普及を図らんが爲、州廳又は州廳農業會經營の原種田及市街庄農業會經營の採種田經營費に付き補助するものなり。

(二) 種穀共同貯藏庫設置補助 四〇、〇〇〇円

目的 原種田及採種田生産穀の純度と発芽力を良好なる状態に於て保存せしむる爲、種穀共同貯藏庫の設置を奨励せんとす。

(三) 品種改良指定の試験補助 一〇八、〇〇〇円

目的 全島各農事試験場に於ける新育成品種の地方的適否を明かにし普及品種の改良に資せんとするものなり。

二、米穀増産奨励 総補助予算額 五〇五、三三二円

(一) 指導員設置費補助 一四一、三四二円

目的 合理的耕種法の奨励、施肥法の改善、病虫害の防除等に対する指導を徹底せしむる爲、全島各市郡に専任の指導員を設置せしむるにあり。

(二) 品評會開催費補助 三七、八二二円

目的 耕種法の改善を奨励促進し増收の実を挙げしむると共に指導の徹底を期せんとするにあり。

(三) 模範田の設置補助 一一三、四〇〇円

目的 米作者に対し実地に作米技術の模範を示し耕種改善基準勵行を奨励せんとするものなり。

(四) 種穀消毒費補助 一四四、三四二円

目的 第一期作に於ける稻熱病に因る被害を可及的軽減し米穀増産の一助たらしめんとするにあり。

(五) 水稻施肥試験補助 六八、四三六円

目的 地方の土性に應じたる合理的施肥適量を確認し増産の達成に資せんとするにあり。

三、食糧増産技術指導費 二〇、〇〇〇円

目的 本府に食糧増産技術本部を設け全島の農業技術の權威者を本部員に委嘱して実地指導に当らしめ増産技術の

滲透を図らんとするにあり。

四、自給肥料増産奨励

総補助予算額 五、四四六、〇五〇円

- | | | | |
|---------------|----------|-----------------|------------|
| (一) 堆肥傳習会補助 | 一二、四〇〇円 | (二) 堆肥舎設置費補助 | 二、〇〇〇、〇〇〇円 |
| (三) 調査督励費補助 | 五二、六五〇円 | (四) 自給肥料増産奨励費補助 | 二、四〇〇、〇〇〇円 |
| (五) 緑肥採種圃設置補助 | 四五〇、〇〇〇円 | (六) 肥料溜設置費補助 | 四五〇、〇〇〇円 |
| (七) 自給肥料審査会補助 | 八一、〇〇〇円 | | |

目的 金肥不足の可及的補填策として堆肥緑肥水肥等の徹底的増産施設を奨励するにあり。

五、優良農具の奨励

総補助予算額 四〇、〇〇〇円

- | | | | |
|-------------|---------|---------------|---------|
| (一) 深耕犁普及補助 | 二〇、〇〇〇円 | (二) 中耕除草器普及補助 | 二〇、〇〇〇円 |
|-------------|---------|---------------|---------|

目的 米作用優良農具の普及による耕種法の改善と労力の合理を併せ図り増産に資せんとす。

第三節 甘 藷

第一項 概 説

本島に於ける甘藷は米に亞ぐ主要食糧たるのみならず豚其の他の欠くべからざる飼料たり、又其の切乾藷は醸造原

料としての需要年々増加の傾向にありしを以て農事試験機関に於ける育成優良品種の普及を図ると共に良苗の育成挿苗法の改良密植等耕種法改善を併行的に指導奨励し來れるを以て戦前既に年産二五億斤を突破せり、戦争中液体燃料工業原料としての需要更に増大せるが其の生産は水田、甘藷作の減退、蔗作の拡張に因る間作への移行等の爲、其の総生産額は寧ろ減少の傾向を示せるを以て昭和十九年産甘藷より作付面積の大拡張を図り耕種法の改善と相俟て之れが増産に努めたる結果生産條件悪化し單位収量低下せるにも拘らず総生産高は三〇億斤余に達する見込みなり、最近三箇年に於ける生産統計を示せば次の如し。

年次	作付面積 甲	收穫量 斤	收穫高 斤	金額 円
昭和16年	146,656.27	19,244	2,823,289,543	36,828,112
昭和17年	156,353.35	16,591	2,593,983,676	39,192,648
昭和18年	165,971.01	14,123	2,343,963,940	41,246,607

第二項 本年の生産状況と二十一年度の計画

昭和二十年産甘藷の生産計画は荒蕪地の開墾作付の轉換、水田蔗作の減退等により作付面積を二二三、四九九甲拡張し四〇七、一七八万斤の生産目標を以て各州廳に割当を行ひ昭和十九年秋植より作付面積の確保を期すべく指導督励に努めたるも全島を通じ九月以降の乾燥甚しく爲に植付遅延し、作付面積又は計画に達せざる所多く生育も良好ならざりしが今春來の天候概ね順調なりしを以て相当の作柄を呈するに至れり、然れ共勞力不足の結果、切乾甘藷の製造は例年の如く進捗せず其の供出も振はざりしが終戦後、軍需の解消に依り補給食糧として充当し得る状態となれり

尙春植甘諸は目下收穫中なるが本年の産米事情其の他に鑑み山手開墾作付轉換等に依り作付の確保に努めたと生育又概して順調なりしを以て相当の生産を挙げ居る模様なり、次に昭和二十一年産甘諸の生産計画は産米減少必至の状況に鑑み補食食糧たる甘諸の増産を以て之が調節を図らんが爲、山手の開墾蔗作の大幅減退等に依り、作付面積を三四七、六五四甲に拡張し、五二二、四八四万斤の生産目標に基き各州廳に割当を行ひ目下秋作の植付中にあり、而して甘諸は貯藏性に乏しく運搬亦容易ならざる欠点あるを以て特に切乾甘諸、甘諸粉等加工方面の充実に努むべく各澱粉会社を之に協力せしむることとせり。

昭和二十一年産甘諸の各州廳別生産計画次の如し。

州 廳 別	作付面積		生産目標 千斤
	甲	乙	
北 州	23,313		264,769
新 州	52,193		543,965
中 州	90,818		1,043,343
南 州	98,226		1,378,706
高 州	49,214		653,068
東 州	10,610		139,308
花 港	19,250		284,320
蓮 廳	4,030		40,956
湖 廳			
計	347,654		4,348,431

備考 昭和二十一年産甘諸は昭和二十年秋植付及昭和二十一年春植付のものなり従つて昭和二十年秋作は目下植付中

第三項 甘諸の改良増産施設

甘諸の在來品種中には二三特長を有する品種なきにしもあらずるも概ね品種收量共に不良なるを以て農事試験所嘉義支所に於て多年に亘り交配育種に努め台第一号以下三十一号に至る、優良品種を育成せるを以て主として右を奨励品種として左記の施設を以て之が改良増産を図りつゝあり、昭和二十年度実行予算を以て実行中の事業次の如し。

一、品種改良奨励 総補助額 九二九、七五七円

(一) 原苗圃設置補助 二六一、二九〇円
目的 試験場育成の優良品種を繁殖し採苗圃の種諸を配布せしむるものなり。

(二) 採苗圃設置補助 七六八、四六七円
目的 原苗生産種諸を以て床代苗圃及蔓床苗圃を設置せしめ其の育成諸苗を栽培者に配布し優良品種の普及を図らんとするものなり。

二、甘諸増産指導員の設置 一〇九、〇一四円
目的 採苗圃の設置、挿苗法の改良密植其他耕種技術を指導し増産の実を挙げしめんとするものなり。

第四節 落花生

第一項 概 説

落花生は本島民の食糧油原料として欠くべからざるのみならず甘蔗、甘藷等畑作物輪作し地力維持上の重要作物なるを以て従来より優良品種を奨励し、之が増殖に資したるも海外よりの油脂の輸入盛なりし爲、其の生産振はず戦前の年産五〇万石内外に過ぎざりき、更に近年甘蔗、甘藷其他の作付増加に圧迫せられ減産の傾向にありしが兩年來油脂の輸入杜絶し加ふるに潤滑油としての需要増大せるを以て昭和二十年産より之が生産計画を樹立し増産に努むることとせり。最近三ヶ年の生産実績を示せば左の如し。

年次	作付面積	甲増収量	收穫量	金額
昭和16年	25,557.60	17,233	440,445	5,722,677
昭和17年	19,238.10	13,282	255,537	2,929,411
昭和18年	17,727.72	11,038	195,687	2,386,687

第二項 本年の生産状況並に昭和二十一年産の生産計画

前述の如く需要の急激なる増加に対処し、昭和二十年産即ち昭和十九年秋植及昭和二十年春植落花生より増産計画を樹立し、作付面積七一、六二七甲生産目標九六四、六〇〇石を各州廳に割当たるも従来に比し四倍以上の急増なりしを以て種子の不足配給の不円滑不適地への割当等の障碍ありて其の生産は概ね計画の半ばに過ぎざる見込みなり。昭和二十一年産落花生の生産計画は本年の需給実情に鑑み更に増産の要切なるものありしを以て、山手方面の開墾作付の轉換甘蔗作の大幅撤退等に依り作付面積一一二、二五三甲、生産目標一、二五〇、五九〇石、供出目標六〇二、六一〇石の計画を樹立し各州廳に割当を行ふと共に採種計画を指示して種子の配給を円滑ならしめ以て生産供出の確保

期すべく山下耕作の積極奨励中なり。昭和二十一年産各州廳別生産計画次の如し。

州廳別	作付面積	生産目標	供出目標
北 州	1,268	11,970	6,750
新 州	6,066	58,910	34,290
中 州	21,520	246,100	125,540
南 州	54,346	610,890	280,870
高 州	17,899	202,680	96,030
雄 州	2,825	32,000	13,770
東 州	4,924	47,180	24,930
花 州	3,409	40,860	20,430
湖 州	112,253	1,250,590	602,610
計			

備考

1. 生産目標及供出目標は100斤1石にて換算せり
2. 昭和21年産は昭和20年秋作及昭和21年春作にして秋作は山下植付中なり

第三項 増産施設

落花生の増産は作付面積を確保すること最も緊要なるを以て左記の補助金を各州廳に交付し、植付を指導督励せしめつゝあり。

増産奨励費 八四、二六一円

第五節 小麦及大麦

第一項 小麦

第一目 概説

本島に於ける小麦は古より海岸地帯の強塩分地に多少栽培せられたるも昭和七年頃より水稻兩期作田の冬季休閑地利用物として其の有望なるを確認せられ優良品種の選出に伴ひ漸次發達の機運を迎へ、昭和十五年に於ては作付面積五、七八八甲、生産高二九、三六五石に達せり、適々此の頃より本邦に於ける米穀の需給著しく逼迫し食用作物の生産拡充を急務とするに至れるを以て本府は昭和十六年度より左記の施設を以て小麦の積極的奨励に着手せるが現在の品種を以てしては北部の栽培に適せず其後殆んど停頓の状態にあり。昭和十九年奨励面積一三、〇〇〇甲歩にして最近三箇年の生産実績左の如し。

年次	作付面積 甲	甲当收穫 石	收穫高 石	金額 円
昭和 16 年	10,774	4,272	46,024	1,367,029
昭和 17 年	9,643	4,494	43,334	1,253,934
昭和 18 年	5,922	2,390	14,154	451,644

第二目 増産施設

昭和二十年度実行予算を以て実行予定のもの次の如し。

補助予算額 四六、四五六円

- (一) 指導員設置補助 一〇、〇八〇円 (二) 原種圃経営補助 三七六円
 - (三) 原種圃経営補助 三、五〇〇円 (四) 採種圃経営補助 三二、五〇〇円
- 目的 耕種法の改善指導の徹底を期すると共に優良品種の普及を図るに在り。

第二項 大麦

本島馬産計画に対処し馬産用大麦の増産を目的として、昭和十六年度より優良種子の購入費を補助し、之が奨励を行ひ來れるも本島の風土、大麦の生産に好適せざる所ありて殆んど停頓の状態にあり。最近三箇年の生産実績左の如し。

年次	作付面積 甲	甲当收穫 石	收穫高 石	金額 円
昭和 16 年	1,835	3,039	5,576	117,951
昭和 17 年	2,063	3,769	7,768	153,876
昭和 18 年	2,834	4,548	10,056	195,804

昭和二十年度実行予算による補助額左の如し。

大麦増産奨励費 優良種子購入補助 六五、一〇〇円

目的 奨励面積四、六五〇甲に対する優良種子の購入費を補助し以て作付面積の確保を図らんとするに在り。

第六節 特用作物奨励事業

第一項 概 説

本事業としては本邦に於て年々多額の輸入をなせる製油原料たる蓖麻及紡績原料たる棉苧麻、黄麻、亞麻の積極的奨励を行ひ來りたり、而して蓖麻は精密機械殊に飛行機の潤滑油として利用せられ航空事業の發達に伴ひ、其の需要は逐年増加の傾向にありたり、苧麻及亞麻は飛行機翼、ロープ、織布、天幕其他強力を要する糸類等として黄麻はヘシアンガンニー囊帆布索綱等として極めて重要な物資なり、幸にして本島は之等作物栽培に好適し將來之が増産を図らんか何れも自給の域に達せしめ得るものなり。

第二項 奨励実施中の特用作物

一、苧麻、黄麻奨励

本事業は昭和十七年度より五箇年計画を以て積極的奨励を爲し來りたり。

(一) 苧麻奨励

苧麻は多年性作物なるを以て毎年新植面積五七七甲を奨励し、昭和十八年度に於て一應計画面積に到達せるも昭和二十年度に於て更に甘蔗撤退地に一、〇〇〇甲の増加作付を図り二十年度も実施中なりしが終戦と共に積極的奨励を中止す。

(1) 奨励方針 品種改良耕種法並に製織法の改善を爲し特に甲当収量を昂上せしめんとす。

(2) 期 間 五箇年(自昭和十七年度 至昭和二十一年度)

(3) 目 標 (奨励五箇年後の生産)

栽培面積 四、一〇五甲、甲当収量 三、一〇〇五甲 一、〇〇〇斤 七〇〇斤 生産高 三、八五五、〇〇〇斤

(4) 奨励地域 各州廳(澎湖廳を除く)

(5) 奨励品種 宜蘭青心大有、内廣家種、阿緞皮種、細根種、鉄線種

(6) 奨励施設 A、肥料代補助 B、剥皮機設置補助 C、压榨荷造機補助

(7) 指導員設置費補助(苧麻黄麻奨励費として)

昭和十八年度苧麻作付面積及收穫高表

州 廳 別	作付面積 甲	收 獲 高 斤	一甲当平均收穫高 斤	價 格 円	百斤当平均價格 円
台北 州	291.98	225,986	774	136,641	60.48
新竹 州	548.75	117,408	214	84,392	71.87
台中 州	54.11	14,823	274	9,621	64.90
台南 州	329.51	161,394	490	136,550	84.60
高雄 州	585.95	869,642	1,484	665,142	76.48
花蓮 廳	147.00	135,885	924	99,148	72.96
台東 廳	270.90	150,335	555	124,304	82.68
計	2,228.20	1,675,475	752	1,255,797	74.55

(二) 黄麻獎勵

黄麻は昭和十四年度より二五、五〇〇甲を目標とし獎勵したるも十七年度以降に於ても米増産の關係上水田に植付けるべき面積より五、〇〇〇甲を減少二〇、五〇〇甲を實施中なり。

(1) 獎勵方針

品種改良耕種法並に製織法改善に依り纖維品質並に甲当收量を向上せしめんとす。

(2) 期 間 五箇年(自昭和十七年度 至昭和二十一年度)

(3) 目 標 (獎勵五箇年後の生産)

栽培面積 二〇、〇〇〇甲 甲当收量 一、六〇〇斤 生産高 三二、〇〇〇、〇〇〇斤

(4) 獎勵区域 各州廳(澎湖廳を除く)

(5) 獎勵品種 淡紅皮種、台中日胭脂種、桃園青皮種

(6) 獎勵施設 A、原種圃、採種圃及共同採種圃設置補助 B、共同浸水場設置費補助 C、共同压榨荷造所設置費補助(二十年度中止)

昭和十八年度黄麻作付面積及收穫高表

州 廳 別	作付面積	收 穫 高	一甲平均收穫高	價 格
台北	甲 612.20	斤 51,108	斤 835	円 11,025
新竹	154.16	107,812	555	23,596

台中	州 廳	2,858.77	2,307,198	807	539,157
台南	州 廳	5,606.13	9,149,438	1,632	1,884,025
高雄	州 廳	1,524.37	725,445	475	157,622
屏東	州 廳	80.00	26,677	333	5,263
花蓮	州 廳	144.02	32,957	229	7,249
澎湖	州 廳	2.99	2,343	784	778
計		11,022.64	12,400,978	1,125	2,628,706

二、亞麻栽培獎勵

亞麻纖維資源の増強緊迫化に伴ひ、昭和十四年度來地方試作を實施せるに冬期水田休閑期利用作物として有望なるを認められたるに因り、昭和十六年度以降十箇年計画を樹立し以て積極的獎勵をなしつゝありしが戦局の推移により昭和十八年度急速増産計画に改変し、面積一万五千甲、生産目標四千五百万斤を目標とし之が採織工場八箇所新設せしめ鋭意目的達成に努めつつあり、本年度は内地よりの種子移入見込立たざるを以て島内自給種子のみにて計画樹立の予定なりしが終戦と共に之が積極的獎勵を中止せり。

(1) 獎勵方針

軍用として需用増加並に國民生活安定上纖維資源の不足を補充せんが爲、亞麻の増産を図りつゝありたり。

(2) 期 間 五箇年(自昭和十七年度 至昭和二十一年度)

(3) 目 標 栽培面積 一五、〇〇〇甲 甲当收量 三、〇〇〇斤 生産高 四五、〇〇〇、〇〇〇斤

- (4) 獎勵地域 台北、新竹、台中、台南、高雄州
- (5) 獎勵品種 サギノー種 ベルノー種
- (6) 獎勵施設 A、優良種子購入費補助 B、種子消毒費補助 C、指導圃設置補助

昭和十八年度亞麻作付面積及收穫高表

別	作付面積	收穫高	一甲平均收穫高	價格
北	21.90	20,365	930	1,172.00
新竹	936.76	1,793,094	1,914	122,467.00
台中	1,565.00	3,488,194	2,229	255,677.00
台南	717.96	1,741,222	2,425	116,265.00
計	3,241.96	7,042,875	2,173	495,581.00

三、苧麻栽培獎勵

本島に於ける苧麻栽培狀況を見るに其の野生種全島に繁茂し、本島適作物たるは明なるも最近に至る迄未だ之が栽培氣運に達せざりき、然るに農業試驗所に於ては曩に苧麻の優良種たる佐久間種を選出すると共に、耕種法を闡明ならしめ之が試作を獎勵し、更に偶々米穀対策の一施設として、昭和九年度以降苧麻の田地栽培及製油工場の設置を獎勵せる結果其の市場性も大いに安定し今日漸く増産を図るの氣運に向ひ、優良獎勵品種たる佐久間種は採油率実に五二、九%に及び其の品質收量共に極めて良好なる成績を収めつゝあり。

特に今次事變に際し軍需品補給の爲、昭和十二年愛國苧麻運動を起し全島的に苧麻の栽培を獎勵したる結果、左記

の如く生産高激増するに至れり、戦近之が増産の必要性益々高まりたるに付一層積極的獎勵を行ひつゝありたるも終戦と共に之が獎勵を中止せり。

昭和十八年度苧麻作付面積及收穫高表

別	作付面積	收穫高	一甲平均收穫高	價格
北	426.90	79,406	186	16,182
新竹	924.68	117,774	225	23,870
台中	885.33	342,346	387	68,471
台南	2,809.90	918,837	327	185,513
高雄	1,167.32	543,971	466	160,852
東	366.10	69,559	190	13,912
花蓮	83.70	14,145	169	2,881
計	6,263.93	2,086,038	333	471,681

尙苧麻は元來他品種と混交し雜種を生じ品質の低下を來し易きものなるを以て常に優良種子を配布して、之が更新を図るを要し、且將來大面積の増殖を図らんが爲には、優良種子の豊富なる養成配布を必要とす。依て農商局附屬に東部及西部特用作物種苗養成所を設置し以て優良原種を育成し、之を州廳に配布し州廳に於ては之により苧麻採種圃を國庫補助の下に設置し之を増殖の上、之が普及徹底を図りつゝありたり。

(一) 獎勵施設

蓖麻採種圃設置費補助

優良種子を増殖し之を配付する爲、採種圃二六八甲、各州廳に対し設置せしめ之に対し設置補助金を交付しつゝあり

四、棉作奨励

本島に於ける棉作奨励に關しては國策的必要性と棉作諸條件の優秀性に基き、曩に昭和十七年度以降五箇年を期し本島棉作奨励計画を樹立し既に之が実施に着手せるが南支南洋方面の棉作に対する根拠的使命遂行上本計画は今後一層拡大強化するの緊要なるは論を俟たず既定方針に基き左記計画に依り積極的奨励をなしつつあり。

(1) 方 針 棉作技術の指導に依り單位面積当生産の増加を計ると共に栽培面積の拡張を奨励し先づ本島に於ける棉作の基礎を確立するものとす。

(2) 期 間 昭和十七年より昭和二十一年に至る五箇年

(3) 目 標 (イ) 栽培面積 一一、〇〇〇甲(二十年度に於ては別途三、〇〇〇甲の追加計画あり)

(ロ) 甲当收量 実棉 七五〇斤

(ハ) 生産高 実棉 八二五万斤 繰棉 二七五万斤

(4) 奨励区域 各州廳(台北州、澎湖廳を除く)

(5) 奨励品種 陸地棉、印度棉、埃及棉、海南島棉優良種

(6) 施 設 原種圃補助、採種圃補助、優良種子普及補助

(7) 指導員の配置 本府に専門技術員の設置を行ふ他、關係地方廳に対し指導員の設置を助成す

(8) 棉作指導所の設置

(イ) 事 業

A、種苗の養成配布 B、耕種並に經濟調査 C、病虫害に關する調査 D、指導員の養成 E、指導に必要なる

附帶事項

(ロ) 設置場所 台東街 東部棉作指導所 台南市 西部棉作指導所

(9) 優良種子の育成

(イ) 優良種子の配布、耕作者に対し優良種子の無償配付を爲す

(ロ) 優良種子の育成補助

昭和十八年度棉作面積及收穫高表

州 廳 別	作付面積 甲	收 穫 高 斤	一甲当平均收穫高 斤
台 北 州	125.30	2,216	20
台 南 州	441.47	6,310	14
台 中 州	2,820.17	905,023	320
台 南 州	238.42	18,661	78
台 東 州	112.87	4,120	37
台 蓮 花 港 廳	46.35	1,743	38
計	3,784.57	938,063	248

五、藥用作物獎勵

國民体力保全特に結核に対する特効藥「セファランチン」の原料たる紅頭ツヅラ藤は本島の特産物にして之が計画的増産を図らんが爲、昭和十八年以來五箇年計画を以て実施着手、昭和十九年度に於て台東廳に一般獎勵をなすに至りたるも食料自給確立の爲、産地増殖のみに止め、台東廳に於ては着々実施中にして本年度も引続き獎勵の予定なり

(1) 期 間 五箇年(自昭和十八年度 至昭和二十二年度)

(2) 目 標 栽培面積 一、〇五〇甲 甲当收量(生体量)二五、〇〇〇斤 生産高 二六、二五〇斤 セフアラチン 一〇、五〇〇斤

(3) 獎勵地域 台東廳 高雄州

(4) 獎勵施設 紅頭ツヅラ藤増殖補助

(5) 種苗養成所

(イ) 事業 A、種苗養成配布 B、耕種並に經濟調査 C、病虫害に関する調査
(ロ) 設置場所 台東廳 東部特用作物種苗養成所、鳳山街 西部特用作物種苗養成所

第七節 昭和二十年度に於ける重要農作物調整計画

本府は昭和十四年第二期作より米穀移出管理を実施し同事業の趣旨に従ひ、各種重要農産物の調和的發展を期する爲、是等各作物の計画的栽培を実施中なり、而して各作物の計画的栽培を実施するには先づ栽培面積の割当を爲さるべからず、即ち米穀増産の重要性に鑑み水田に於ける各作物の割当に重点を置き、先づ水田に於ては米増産計画に必要なる面積を確保し其の残余を順次甘蔗、甘藷、黃麻等の重要作物に割当て畑に於ては是等重要作物の計画、総面積中水田に割当てたる残余面積を確保する爲、一般農作物に優先に割当てを実施せり、尙本府に於ては作付調整を強化する爲、臨時農地等管理令第十條及第十三條の規定に基き、農地作付統制規則を公布すると共に不急農作物の作付轉換を行ひ以て食料の供給確保を図りつゝあり。

昭和二十年に於ける重要農作物の作付調整計画左の如し。

作物名	作付計画面積(甲)	生産目標
米 (20米穀年度)	581,634	6,070,214石
甘蔗 (20→21年期)	53,886	2,580千担
甘藷 (20年度)	347,654	5,348,431千斤
黃麻 (20年度)	20,000	31,000千斤
黃麻 (20年度)	4,105	3,320千斤
花 (20年度)	14,000	9,800千斤
小 (20年度)	13,000	127,400石
大 (20年度)	4,650	18,600石
亞麻 (20年度)	15,000	45,000百斤

備考 小麦及亞麻は両期作田の裏作期間を利用して栽培す

第八節 畑地拡張改良事業

本府は昭和十五年度以降十一箇年計画を以て畑地拡張改良事業を施行することとなり、同年五月十八日府議決定の事項に基き昭和十五年度以降既に五ヶ年本事業を実施し、目下昭和二十年年度の事業進捗中にして其の事業概要左の如し。

一、主 旨

(一) 畑地の拡張

本府の計画せる土地改良事業に依れば昭和十五年度以降十一箇年間に水田一二、九六三甲の拡張を見るも之が爲六四、三八〇甲の畑地が失はるる勘定なり、然るに將來米管に伴ふ本島重要作物増産計画を遂行せんとするには、畑に於て今後略々現在と同面積を確保する要あるを以て之を林野の開墾に求め十一箇年間に六七、三七四甲の畑地を造成せんとす。而して之が爲、内六〇、〇〇〇甲に対しては本事業に依り助成の方針を講じ残余の七、三七四甲は之を自然増加に俟つこととせり、尙右畑地の拡張は土地利用の現状よりして大部分之を山脚傾斜地に求める外なきを以て之が利用に当りては、國土保安並に地力の維持向上の見地より段階其の他の土地保護工作进行を講ぜしむる計画なり。

(二) 畑地の改良

本島畑地総面積三十四万余甲の約三分の一、即ち十万余甲は所謂傾斜畑に属し其の大部分は之を自然地形の儘利用せる状態なり、惟ふに傾斜畑経営の最も難点とする所は地力の維持困難なるにあり、殊に本島は地質肥軟高温多湿な

るが故に之が防止工作を施さざれば数年ならずして不作の荒地と化し延ては水魔の慘禍を招來するに至る虞あり。現に昭和十四年に於ける七千数百甲に及ぶ荒廢茶園或は山地バナナの墾園の如き其の卑近なる実例なり、之れ本事業を以て傾斜畑の改良を奨励せんとする所以なるが諸種の事情により五万甲を奨励面積とし之に依り其の効果及必要性を一般に認識せしめ他は之に準じて自力に依りて施行せしむることとせり。

二、奨励面積 畑地拡張面積 六〇、〇〇〇甲 畑地改良面積 五〇、〇〇〇甲

三、年度計画 本事業は十一箇年計画とし各年度奨励面積を次表の如くせり

年 度 別	畑地拡張面積	畑地改良面積
昭和 15 年度	2,000 甲	2,000 甲
昭和 16 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 17 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 18 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 19 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 20 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 21 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 22 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 23 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 24 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
昭和 25 年度	6,000 甲宛	5,000 甲宛
計	60,000 甲	50,000 甲

四、事業の実績

事業年度始めに於て右年度計画を各地方廳に割当て鋭意之が指導奨励に専念せしも農業力の拂底、労賃の高騰等あり計画通り進捗を見ざりしを遺憾とす、即ち昭和十五年度に於ては計画面積四千甲に対し三千七百三十五甲の助成を見たるも同十六年度に於ては計画面積一万一千甲に対し、其の助成面積六千八百十六甲となり、所期計画の遂行漸く困難となりたるを以て、同十七年度に於て実施計画面積を八千甲に減じ甲当補助を約五〇％引上げ、之が奨励に専念

したるも其の助成面積五千五百甲に減じ、一部甲当補助を倍額となし昭和十九年度に於ては全面的に補助を当初の倍額となしたるも其の実績は何れも実施計画の四五%を出でざる現状なり。詳細別表の通り（本事業は昭和十八年十二月以降耕地課主管）

昭和15. 16. 17. 18. 19年度既往5ケ年間畑地拡張改良事業実績

1. 面 積

(昭和20. 4. 25)

別 属 別	昭和15年度			昭和16年度			昭和17年度			昭和18年度		昭和19年度		計
	拡張	改良	計	拡張	改良	計	拡張	改良	計	年度 (改良)	年度 (改良)	拡張	改良	
北 台	甲 214	甲 155	甲 369	甲 263	甲 38	甲 301	甲 387	甲 154	甲 541	甲 178	甲 132	甲 864	甲 657	甲 1,521
新 台	591	618	1,209	217	793	1,010	529	649	1,178	704	60	1,337	2,824	4,161
中 台	346	434	780	482	1,625	2,105	170	887	1,050	406	75	998	3,425	4,423
南 台	39	134	173	471	887	1,358	96	1,050	1,128	264	125	606	2,442	3,048
雄 台	330	133	463	351	899	1,250	103	290	393	314	64	784	1,700	2,484
東 台	405	—	405	57	267	324	60	346	306	—	60	522	573	1,095
花蓮港	201	135	336	68	402	470	118	210	328	24	42	387	813	1,200
計	2,126	1,609	3,735	1,909	4,909	6,818	1,463	3,468	4,931	1,890	558	5,498	12,434	17,932
計 画	2,000	2,000	4,000	6,000	5,000	11,000	3,000	5,000	8,000	4,500	1,250	11,000	17,750	28,750
計画に對する率(%)	106	80	92	31	98	49	69	69	62	42	45	50	70	63

2. 補助金

別 属 別	昭和15年度			昭和16年度			昭和17年度			昭和18年度		昭和19年度		計
	拡張	改良	計	拡張	改良	計	拡張	改良	計	年度	年度	拡張	改良	
北 台	円 21,409	円 10,852	円 32,261	円 26,294	円 2,658	円 28,952	円 55,844	円 14,774	円 70,618	円 18,664	円 26,399	円 103,507	円 73,347	円 176,894
新 台	59,076	41,397	100,473	21,666	54,791	76,457	76,310	62,415	138,725	82,079	12,024	157,053	252,703	409,755
中 台	34,637	30,331	64,968	48,201	112,832	161,033	25,129	88,464	113,593	40,584	14,978	107,967	287,188	395,155
南 台	3,861	9,413	13,274	47,104	60,860	107,964	14,322	80,351	94,673	26,354	25,066	65,287	202,044	267,331
雄 台	32,981	9,337	42,318	35,080	62,007	97,087	12,561	28,850	41,411	35,481	12,868	80,622	148,543	229,165
東 台	40,533	—	40,533	8,737	16,603	25,240	9,031	24,001	33,032	—	12,000	58,201	52,604	110,805
花蓮港	20,072	9,424	29,496	3,887	29,602	33,489	17,709	20,964	38,673	2,447	8,322	41,668	70,759	112,427
計	32,596	110,754	323,323	190,869	339,352	530,221	210,906	319,819	530,725	205,606	111,657	614,344	1,087,188	1,701,532
計 画	200,000	140,000	340,000	600,000	150,000	750,000	450,000	500,000	950,000	500,000	250,000	1,750,000	1,740,000	3,490,000

第九節 耕地防風林設置奨励事業

本島沿岸地方に於ける冬季寒冷強烈なる北東季節風は水稻甘藷其の他農作物の生育を阻害し、其の収量品質を劣悪ならしむること多きを以て本府は昭和十五年度以降十箇年計画を以て全島に於ける其の被害面積五十七万甲（風階二以上の地域中の耕地面積）中被害甚しき地域三十万甲に対し耕地防風林の設置を奨励し以て農産物増産の一助たらしむるべき州廳及州廳農業会施行する耕地防風林設置奨励事業に対し、補助金を交付し之が助成を図り來りたるものに

して自昭和十五年度至昭和十七年度実施面積七八、四六〇甲なり。

第十節 肥料取締

販賣肥料消費高の年と共に遞増しつゝあるに鑑み、昭和二年八月より肥料取締法を施行し肥料取扱者をして不正行為をなすの余地なからしめ農民をして公正なる品質の肥料を安んじて、随時に購入せしむる方策を採り以て肥料政策の完璧を期すべく之が機關として、昭和二年七月台北市に肥料検査所を各州廳所在地及基隆港に其の出張所を設け、肥料の検査取締及之が研究調査を行ひ來りたるが戦争に因る海上輸送杜絶の爲、現在輸入肥料は皆無の現状に在り

最近5箇年間販賣肥料検査状況

区分	(年度)	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年
肥料業者数		2,379	2,275	2,194	2,157	2,150
取締法違反件数		1,514	606	529	646	322
収 件 数		2,646	1,504	913	831	633
分析肥料件数		1,160	637	654	567	594
成分不足件数		312	197	170	109	86

第十一節 小作事情の改善

第一項 不良小作慣行

日本本島の小作慣行には不良なるもの頗る多く今其の主なるもの並に之に依り生ずる弊害を挙ぐれば次の如し。

- 一、口頭契約多きこと、爲に契約の内容明確を欠き紛争の原因を爲す。
- 二、契約期間の定めなきもの多きこと、爲に掠奪農法行はれ土地改良施設行はれず。
- 三、畑小作料に前納多きこと、爲に著しく小作に不利なるのみならず不作に際し小作料減免の余地なし。
- 四、「鉄租」と称して小作料減免を認めざる契約多きこと、爲に一度凶作に遭ふときは小作人は甚大なる経済的打撃を受く。

- 五、物納小作料引渡の場所は小作人の住所なること、爲に小作人をして永く小作料を保管せしめ過重の危険を負担せしむ。

- 六、「積地金」と称して多額の保証金を徴すること（中北部）

- 七、「定頭金」と称して小作人より契約手付金を徴すること（中北部）爲に前号と共に小作人の経済を逼迫せしむ。

- 八、「佃頭」と称して小作人の轉賃を職業とする者あること、爲に地主小作人間を疎隔するのみならず両者間の中間利得を爲すを以て両者の経済に不利益を與ふ。

第二項 小作人の團體及小作爭議

從來本島に於ける小作紛争は悉く個人的のものなりしも、大正十三年頃より漸次團體的爭議を惹起し、次で大正十四年小作人の團體運動起りたるを始めとし、各地に小作人の團體簇出するに至り（台湾農民組合等）小作紛争は團體的爭議となるに至れり、而して小作爭議は大正十三年五件、大正十四年四件、大正十五年十五件、昭和二年四三一件

昭和三年一三四件、昭和四年二三件、昭和五年二六件、昭和六年一六件にして爾來爭議として特記すべき事件なく結局昭和二年を絶頂として別項に述ぶる本府の小作慣行改善事業開始と共に漸次下火となりたり。

第三項 小作慣行改善施設

本島の小作爭議は前述の如くにして小作人は頗る不安定なる地位に置かれ且、小作人の自覺と共に右事情は何れも小作爭議の原因となりたるを以て本府は小作事情改善の根本方策として不良小作慣行の改善を企図し、昭和二年より府に専任職員を設置すると共に州及州農会に補助金を交付して之が改善施設の奨励をなせり、而して本事業実施の方法は、州又は州農会をして市街庄を区域として地主小作人協調団体（業佃会其の他多種団体）を組織せしめ（郡内の右団体を以て郡の聯合会を組織）該団体の規定せる様式に依る合理的なる長期証書契約を団体に契約せしめ、自治的不良慣行の改善を図らしむると共に該団体の機関をして会員間の小作紛争の調停を爲さしめ、又其の他地主小作人間の融和を図るに必要なる各種施設も設置せしめたり、而して其の成績は頗る良好にして台北州下の一市及東部を除く外本島全部に普及し郡を区域とするもの四十五、市街庄を区域とするもの八十八に及びたるが昭和十九年一月全島州廳市街庄を通じ系統農業会設立せらるゝに及び其の傘下に於て之が事業を継続しつゝあり、今其の事業成績の概況（昭和十七年十二月末現在）を取纏め示せば次の如し。

一、不良小作慣行を改善する趣旨を以て団体の規約に於て定めたる長期証書契約締結状況は件数二四六、八二四件、面積三四四、七三五甲、地主数二〇七、一〇三人、小作人数一九八、八〇五人なり。

二、小作紛争調停状況は調停成立せるもの九二八件、調停不成立のもの四三件、調停未決のもの七六件、計一〇四七

件なり。

三、其の他地主小作人協調施設には団体の行ふものと地主個人の行ふものとありて其の主要なるものは次の如し。

（イ）団体の行ふもの

- （１）地主小作人懇談会 （２）小作人の農作物競作会農産品評会 （３）優良会員の表彰 （４）模範業佃の養成指導 （５）農業講習、講話会開催 （６）業佃共済会 （７）受佃施設奨励指導 （８）試験田園設置経営又は共同耕作事業奨励 （９）農事実行小団体の設置奨励指導 （１０）農繁期託児所設置奨励指導 （１１）小作人の農業経営に関する施設並に小作問題に関する諸調査等。

（ロ）地主の行ふもの

- （１）競作会競技会品評会 （２）改良堆肥豚舎、肥料溜建設奨励 （３）耕作資金、肥料代食糧等の融通 （４）改良農具購入補助 （５）農繁期託児所設置経営 （６）指導園、試験田等の経営 （７）其の他農業改良並に小作人の指導教養に関する施設等。

前述の如く小作改善事業は官民一致の積極的協力により概ね良好なる成績を収めつゝあるも尙、幾多改善を要すべき点あるのみならず事変下農村經濟事情の変遷により小作人の中には軍需鉦工業労働者等時局産業へ轉向せんとする傾向を生ぜるに鑑み総督府は現行小作慣行改善事業を強化拡充し、小作問題の調整を期すると共に將來の小作事情の推移に則し、小作に関する立法の考慮、尙昭和十四年十二月公布されし國家總動員法第十九條に基く小作料統制令同法第十九條に基く臨時農地價格統制令及同法第十三條に基く臨時農地等管理令を施行し適性小作料の維持に努めた

第十二節 農業統制

第一項 小作料統制

重要農作物の増産を図る爲、農業生産費の主要部分を占むる小作料の適正化を目的とし、昭和十四年十二月十八日より小作料の統制を行ひ、既設の小作料を一應昭和十四年九月十八日現在にて抑制し、特別の事情ある低額の場合は地方長官の許可を受け引上をなし、其の高額のものは市街庄長又は地方長官に於て之が規正を爲しつゝあり。

第二項 農地價格統制

小作料の統制と共に農地價格に付ても之が騰貴を防止する要あるを以て、昭和十六年二月農地價格の統制を行ひたり、即ち当該農地の地租額に一定率を乗じ算出したる價格を超へて賣買するを禁止し、特別の事情あるときは地方長官の許可を受けしめつゝあり。

第三項 農地管理

重要産物の生産確保を期する爲、農地又は耕作の目的に供することを得る土地に付、適正なる管理を行ひ農地潰廢の防止空閑地利用促進作付調整を実施しつゝあり。

第十三節 移民事業

臺灣の開發、地元農民に対する農業技術の指導、農産物増殖等の目的を以て明治四十年頃より内地人農民の移殖を開始せり。当初は私營移民事業を助成したるも其の成績芳しからず以て明治四十二年度に官營を以て東部台灣の花蓮港廳下に之を実施し、三箇村を建設し約六五〇戸を收容し尙引続き本事業を継続する予定なりしも、財政其の他の都合に依り大正六年度に一時之を中止し其の後は私營移民事業を助成する方針を採れり、此の間に於ける本事業は予期の進展を見るに至らず且つ其の成績芳しからざるを以て昭和七年度より再び官營を以て西部台灣の台中州、台南州、高雄州下の官有未墾地の開拓を開始し昭和十八年度迄、二十二箇村約一、一〇〇戸を收容し、引続き実施の予定なりしも太平洋戦争開始後、之を中止するの已むなきに到り、其の後は主として既設移民村の強化充實を図ることとせり、而して本島官營及私營移民現況は次表の如し。

支 那 別	村 名	建設年月日	戸 数	人 口
中 州	秋津村	自昭和7年度 至昭和11年度	156	780
	豐里村	自昭和11年度 至昭和12年度	149	745
	鹿島村	自昭和12年度 至昭和13年度	128	640
	鹿取村	昭和15年度	89	445
	八洲村	昭和16年度	100	500
	利國村	自昭和17年度 至昭和18年度	70	350
計			692	3,460

高 雄 州	昭和13年度		昭和13年度	昭和13年度
	△新	△昭	村	度
合 計	15	75	3	15
	18	90	15	75
	710	3,550	18	90
	25	125	710	3,550
出 産	100	500	25	125
	65	325	100	500
	190	950	65	325
	242	1,210	190	950
野 田 村	明治43年度	172	242	1,210
	大正2年度	171	172	860
	大正3年度	41	171	855
	昭和8年度	624	41	205
花 蓮 港 廳	計	2,130	624	2,130
	數	59	59	295
	△旭	59	59	295
	△鹿	23	23	115
中 東 廳	計	28	28	140
	△旭	6	6	30
	△鹿	57	57	285
	合 計	116	116	580
官 署	計	1,713	1,713	8,565
	數	59	59	295
	△旭	59	59	295
	△鹿	23	23	115
私 営 移 民 村	計	70	70	350
	數	1,783	1,783	8,915
	△旭	59	59	295
	△鹿	23	23	115

備考 △印は私営移民村なり

第十四節 畜産増殖奨励事業

第一項 概 説

本島の畜産は農業経営上將又日常生活上特に密接不可分の關係にあり、既に改隸前より有畜農業を以て進み、改隸後獸疫の撲滅と各種改良奨励施設を講じ今日に於ては農業生産額より見るも米、甘蔗に次ぐ重要産業として發展し來れり、支那事變勃發以來畜肉、皮革を初め各種畜産物の需要急増と農業勞力の補給上役畜の必要性加増せるに反し、輸入飼料の激減と食糧轉換等に因り飼料事情は益々窮迫を告げ、家畜は寧ろ漸減の一途を辿る傾向に在るを以て各種増殖の対策を講じ之が發展を期しつゝあり。

第二項 奨励実施中の畜産

(一) 豚

本島の豚は在來種に、バークシヤの種を交配改良の方針を以て進み、昭和十四年度より新に増殖計画を樹てバークシヤ種優良種牡豚を内地より移入の上、地方に貸付け又優良種牡豚及種牡豚の購入補助金を交付し、優良血液の普及と増産を促進しつゝあり。尚雜種蕃殖に依る退化を防遏し両者の美点を有せる優良品種を血清學的反應を應用し、

選出固定する方法を發見し在來種を基礎とする熱帶向優良品種の固定事業を計画し昭和十五年度より、総督府獸疫血清製造所に於て之が血清を製造し各州廳に配布し地方廳に設置せる專任技術員の型態度的検査に合格せるものを以て蕃種用基礎種豚として改良品種の固定事業を実施しつゝあり。斯の如く改良増産方策に万遺憾なきを期しつゝありと雖も飼料の不足と需要の増大は戰前百八十余万頭を保有し、世界主要豚國に比肩し得るに至りしも逐次漸減の一途を辿り、現在は百万頭にも足らざる状態にして肥盈率も亦著しく低下し、屠殺適期に達する迄には二箇年をも要するに至り肉豚の減少は特に著しきものあり。昭和十九年度より更に從來の助成金の増額の他仔豚生産獎勵金、豚舎建設補助金等を交付し助長獎勵施策を拡充すると共に公正円滑なる配給と消費の規正を実施する爲、昭和十六年四月以降肉豚配給統制規則を制定実施し肉豚資源の増産確保を期しつゝあり。又豚皮は從來食用に供せられたるも昭和十三年七月皮革配給統制規則を制定し食用を禁止し、牛、水牛、馬、山羊、猪、犬、鹿、兎及鮫と共に剥皮せしめ皮革資源の増産確保に遺憾なきを期しつゝあり。

(二) 牛

本島の牛は主として水牛及黃牛にして専ら農耕運搬用として使役せらるゝものなるも、事變勃發以來肉用として將又皮革資源としての軍需増大し、役牛の拂底甚しく已に昭和十四年以降畜産増殖計画に基き、内地より改良和牛を移入し肉質の改善を図ると共に昭和十九年度よりは食糧増産対策の一翼として役牛増産対策を計画し、水牛及黃牛の飛躍的増産に依り昭和二十三年迄には少くとも戰前に於ける牛一頭に対する耕地負担面積二甲四分四厘の比率（水牛三三〇、〇〇〇、黃牛及和牛四七、五〇〇）に迄復活せしむるを目標に國有種牝牛の貸付産額獎勵金の交付等を実施す

る。一面一般の屠殺を規正し、現在約三十二万頭に過ぎざるも稍増加傾向に在り、乳牛は從來より補充更新等専ら内地に依存したる關係上移入の杜絶と共に島内資源は極めて貧弱にして二千余頭を保有するに過ぎず、又乳製品も全く内地に依存せるを以て酪農業は見るべきもなく、昭和十九年度より島内自給自足を計画し、乳牛犢育成施設に対する獎勵費を補助し各州廳又は農業会に於て犢の育成を実施せしめつゝあり。

(三) 馬

内地馬産計画に呼應し昭和十一年以降産業並に國防上の基礎に立脚し、内地より適當なる牝馬を移入し之に優良牡馬を交配し以て耐熱性に富み、資質強健なる実用的有能馬を造成増殖するを主眼とし同年花蓮港廳下に種馬所を設置し東部二廳下に於ける種牝馬の種付及貸付等を行ひ、昭和十五年台南州下に種馬牧場を設置し、西部五州下に於ける種馬所業務と共に種馬の生産育成移入、幼馬の育成調教等を実施し、附帶事業として馬産技術員及蹄鉄工の養成を行ひつゝあり、各州廳下に於ては馬産牧場又は育成牧場を設置し、生産育成指導を実施すると共に各種獎勵施設を行ひ之が爲、多額の経費を要するを以て移殖馬購入費、牧野設置獎勵費、種馬所、裝蹄所、農乘馬鍛練所等の設置費に對しては國庫より補助金を交付助成す。尙馬事思想普及と馬産改良の施設として各州畜産会に於て競馬を開催し（昭和十九年台灣農業会に統合）之が抽籤馬の購入費賞金等に對して國庫より補助金を交付し収益は挙げて馬産獎勵施設の資に充当しつゝありし所、時局の変轉により非常措置として昭和十九年以降競馬の開催は一時之を停止したる關係上國庫より五十万円の補助金を交付し、競馬収益に依存せる各種馬産獎勵事業を継続せしめつゝあり。由來台灣に於ける馬産はその素地なく役装としては専ら水牛に依存せる關係と時局の關係に依る内地よりの馬移入の困難等に依り計

画に著しき齟齬を來し現在約二千頭を保有するに過ぎざる現狀なり。

第三項 飼料対策

事変勃發以來島内飼料資源は急激に逼迫し一面船腹事情の窮迫に依り輸入飼料は杜絶し畜産増殖上甚大の打撃を蒙り之が緊急対策として昭和十五年五月飼料配給統制規則を制定し、家畜飼料の確保と配給統制を実施する反面島内飼料増産を図る爲、昭和十四年度以降「サイロ」の普及獎勵米糠搾油工場設置による脱脂糠の増産確保等各種施設の獎勵助長と共に乾草調製其の他未利用資源の飼料化等の指導獎勵に努めつゝあり。

第四項 防疫

本島に於ける家畜傳染病の重なるものは「豚コレラ」及「家禽コレラ」にして全島に散在し領台当時より猖獗を極めたる牛疫は予防制遏其の効を奏し大正九年全く之が撲滅に成功し爾後その發生を見ず一方馬和牛等の移入増加に伴ひ新に傳染性貧血、ズルヲ病、ダニ熱等の發生増加せり。各州廳には獸疫の予防制遏に従事する専任防疫獸医を配置し總督府血清製造所は明治三十八年以降血清予防疫並診斷液類の製造配布（昭和十九年製造量血清類二〇〇万軒予防液類二三〇万軒）之等の試験研究を行ひ製品は島内のみならず南支海南島方面にも供給し当該地方の獸疫撲滅に貢獻しつゝあるも昨十九年十月以降二回に亘る爆撃により設備資材の被害甚しく、その本館は潰滅に歸したるを以て一部施設を台中州下に疎開し事業を継続中なるも、その能力の低下は免れず漸く島内の補給を充す程度に過ぎざる現狀なり。

州廳別家畜数調		(昭和20年9月1日現在)						
州廳別	水黄牛	乳牛	馬	豚	山羊	鶏(含七面鳥)	鵞	鴨
台北	22,370	500	130	126,000	1,600	876,300	336,300	25,600
台新竹	51,500	150	210	145,000	3,600	1,024,800	682,300	89,900
台中	64,550	500	380	185,000	14,000	769,000	291,000	166,100
台南	96,580	600	350	274,000	39,500	999,900	342,600	93,000
台高雄	55,190	350	250	167,000	3,100	831,200	217,000	13,900
台東	13,150	90	100	15,000	220	112,300	35,000	5,000
花蓮	15,360	90	80	25,000	250	133,500	64,500	18,100
澎湖	3,700	10	—	13,000	500	38,800	3,500	90
計	322,400	2,740	1,500	950,000	62,970	4,791,800	1,972,200	412,500

州廳別獸醫師数調 (昭和20年9月1日現在)

州廳別	人	数	摘	要
台北	160	120	台湾獸医免許規則に依る獸医を含む	
台新竹	135	190		
台中	180	18		
台南	180	31		
台高雄	180	31		
花蓮	180	31		

澎湖 6
計 840

昭和20年肉豚配給割当頭数表

別	(月別)	1. 2. 3 月	4. 5. 6 月	7. 8. 9 月	計
台北		21,150	16,879	18,953	56,983
新竹		11,550	7,941	9,562	29,053
台中		13,630	9,907	10,539	34,076
台南		20,370	14,947	14,252	49,569
高雄		36,060	21,919	15,820	73,799
屏東		2,370	1,184	986	4,540
花蓮		4,550	2,265	1,509	8,324
台東		1,080	1,489	879	3,444
計		110,760	76,531	72,496	259,787

第十五節 農業試驗場

台灣總督府農業試驗に關する濫觴は最も旧く領台直後明治二十九年九月に試作場を台北城内に設け、次で之を大龍洞に移せり。明治三十二年九月之を台北縣農業試驗場となし更に明治三十四年台北、台中、台南農業試驗場を設置せしが明治三十六年に至り是等の三農事試驗場を廢止し新に台灣總督府農事試驗場を設け、其の位置を現在の台北市富

化学部、昆虫部、植物病理部、畜産部、教育部、庶務部の七部とし農産の増殖改良に關する各般の試験研究を施行すると共に優良なる種苗及種畜の育成配布を行ひ、併せて農家の子弟に長期の農事講習を施し専ら本島農事進歩發達に資することとせり。大正七年七月農業界の進運に伴ひ、嘉義に支場を設置し主として熱帶農業上切望なる試験を施行するに至れり、當時農事講習生の養成は医学校を除きて斯種実業教育機關無かりし爲、本島農家の子弟をして向学の希望を満す有力なる施設として農業上の知識を授け以て地方農村の中堅人物を教養するに與つて功ありたり大正八年台灣教育令發布せられ、其の施行に伴ひ本島人子弟に対する農業教育の途も新に拓かれる結果、大正九年度を限りとし講習生の募集を停止したるが大正十一年三月迄に講習修了生を出したること約九〇〇名なり。大正十年設立せらるゝに當り従前別箇の機關として存在したる總督府研究所、糖業試驗場、園藝試驗場、種畜場、林業試驗場等と共に農業試驗場も之に統一せられたるが再び中央研究所解体せらるゝに及び獨立し今日に至れり。

一、本所及支所の名称

台灣總督府農業試驗所 台北州台北市富田町 台灣總督府農業試驗所士林園藝試驗支所 台北州七星郡士林街
福德洋 台灣總督府農業試驗所平鎮茶業試驗支所 新竹州中壢郡楊梅庄草埔坡 台灣總督府農業試驗所魚池
紅茶試驗支所台中州新高郡魚池庄水社 台灣總督府農業試驗所嘉義農業試驗支所 台南州嘉義市山子頂 台
灣總督府農業試驗所嘉義畜産試驗支所 台南州嘉義市紅毛埤 台灣總督府農業試驗所鳳山熱帶園藝試驗支所高
雄州鳳山郡馬松庄馬松 台灣總督府農業試驗所恒春畜産試驗支所 高雄州恒春街鸞鑿尊 台灣總督府農業試

驗所台東熱帶農業試驗支所 台東廳台東街台東

二、事業

(一) 研究、調査、試験、分析及鑑定

(二) 講習、講話及実地指導

(三) 種苗種畜益虫益菌其の他研究調査又は試験の結果に因る物料の育成製造配付及貸付

三、職員

所長 一人 事務官 專任 一人 奏任

技師 專任 二十人 奏任 内一人を勅任となすことを得

属 專任 六人 判任 技手 專任 三十五人 判任

第二章 糖業

第一節 概説

本島は往時より糖業を営む者ありたるも明治二十八年當時は年産僅か、二八九千万斤に過ぎざりしが総督府は積極的糖業奨励の必要を感じ調査研究の結果、明治三十五年以來品種の改良に努め、又開墾灌漑排水施設新式製糖機械器具据付等に奨励金を下付して甘蔗作付面積の増加栽培法の改良新式工場の増設を図り、原料採取区域を定めて原料需

年期には甘蔗作付面積一万七千甲、産糖高五千万斤なりしが、昭和十四年期には作付面積十六万七千甲、産糖高二億六千万斤、作業せし新式製糖工場四十九を算するの盛況を示し台湾産糖の最高記録を樹立せり。

(イ) 甘蔗作付面積及収量比較表

年 期	作 付 面 積	甘 蔗 産 額	甲 当 收 量
明治 36 年期	16,526 甲	683,000,000 斤	41,337 斤
同 42 年期	28,704	1,418,860,799	49,931
大正 3 年期	76,277	2,642,616,684	34,645
同 7 年期	50,450	6,817,535,109	45,314
同 12 年期	116,620	6,610,863,843	56,867
昭和 3 年期	108,318	9,697,644,652	89,529
同 7 年期	109,511	13,415,475,077	122,502
同 8 年期	84,330	8,811,199,559	104,485
同 9 年期	91,163	8,883,801,544	97,449
同 10 年期	121,628	13,477,260,178	110,807
同 11 年期	128,229	13,190,389,434	102,785
同 12 年期	124,555	14,271,874,418	114,583
同 13 年期	134,208	15,101,099,328	121,520
同 14 年期	167,362	21,384,942,440	127,776

同	15 年 期	174,294	16,628,467,918	95,405
同	16 年 期	162,066	13,987,308,519	86,303
同	17 年 期	161,299	17,082,749,267	105,907
同	18 年 期	161,354	16,820,471,592	104,246
同	19 年 期	154,094	13,804,821,724	89,587

(ロ) 全島砂糖生産額累年比較 (単位担)

年 期	分 糖 蜜 工 場	赤糖採集の区域の工場を有するもの	赤 糖 工 場	計
昭和 3 年 期	担 9,528,686	担 64,751	担 75,174	担 9,668,611
同 7 年 期	16,287,513	11,240	84,441	16,484,159
同 10 年 期	15,711,867	166,567	215,772	16,094,106
同 11 年 期	14,675,866	173,360	178,755	15,027,981
同 12 年 期	16,467,514	173,717	157,971	16,789,202
同 13 年 期	16,109,253	224,353	169,062	16,502,668
同 14 年 期	22,900,718	471,149	333,642	23,645,509
同 15 年 期	18,283,015	311,379	285,077	18,879,471
同 16 年 期	13,328,235	102,673	146,266	13,577,147
同 17 年 期	18,066,352	133,028	162,650	18,362,530
同 18 年 期	17,036,604	137,559	183,331	17,357,494
同 19 年 期	14,671,108	73,615	126,443	14,871,166

(ハ) 分糖工場及び工場一覽 (昭和17年10月初)

会 社 名	資 本 金 額	拂 込 資 金 額	分蜜糖工場数	一晝夜生産能力
4	円 335,200,000	円 371,510,930	工場 42	耐 63,530

註 会社, 台湾, 明治, 大日本, 塩水港

(ニ) 全島製糖成績 (昭和19年度)

工 場 別	作 業 工 場 数	原 料 使 用 高	砂糖製造高	糖蜜生産高
分蜜糖工場	45	斤 12,035,575,197	斤 1,467,110,871	斤 338,119,749
赤 糖 工 場	40	147,329,338	20,039,771	
計	85	12,182,904,535	1,487,150,642	

第二節 糖業奨励の主なる施設

第一項 蔗園の灌漑排水工事補助

明治三十五年以來蔗園に適當なる灌漑排水設備を爲す者に奨励金を交付せしが昭和五年度迄に下付せし奨励金総額約百八十万円、之に依り灌漑排水設備を完成せし蔗園総面積約十萬四千余甲に及べるも年度以降は予算の関係上一時中止の已むなきに至れり。

第二項 蔗苗更新

甘蔗の連作に依る退化を防ぐ爲大正二年蔗苗養成所を設置して優良蔗苗を養成し、大正五年より之を糖業者の設置する甘蔗中間苗圃に無償下附して増殖し更に一般蔗農に無償配布せしめ以て本島蔗園を毎三年以内に更新せしめんとするものにして成績良好なり、蔗苗養成所左の如し。

大南庄蔗苗養成所（台中州）設置年度 大正二年度 耕地面積 九六七甲

第三項 品種改良

台湾在來の甘蔗は竹蔗、紅蔗、蚶蔗等なりしが品質不良なるを以て優良品種の輸入普及に努め明治二十九年爪哇より「ローズバンブー」を同四十二年爪哇実生細莖種を其の後爪哇実生大莖種を輸入繁殖すると共に一面本島の氣候風土に適する特有の新品種を育成せんが爲、糖業試験所に於て鋭意之が研究に当り既に台湾第一号より第一三三号迄の実生種を育成せり。昭和十九年期之等品種別甘蔗植付歩合を見るに爪哇生種（大莖種）五六・三六%にして台湾実生種は急激なる増加をなし四三・〇六%を占むるに至り特にF一〇八は其の成績見るべきものあり。

品種別作付面積（一九四四年期）

	二七二五POT	面積	作付歩合
爪哇実生	二八八二	八七、五一三・五七甲	五六・三六%
二八七八	〃	六六、八四八・五三	四三・〇六%

台湾実生	FFFFF	〇〇〇〇六五	〇〇〇〇七	〇〇八	其の他
					九〇四・七八
					〇・五八
					一五五、二六六

第四項 試験研究機関（糖業試験所）

甘蔗栽培試験の機関として明治三十五年台南州大目降に甘蔗試作場を設置三十九年七月糖業試験場と改称、大正十年中央研究所を設けらるゝに及び農産部糖業科としては統一せられたり。尙本島産糖額の増加は取引発達促進上検査の必要あり、明治四十五年四月高雄に殖産局附属檢驗所を設け大正七年四月総督府研究所に併合せられ、大正十年中央研究所の一支所となれり。然るに昭和七年三月之等の糖業關係試験研究機関を統一擴張し、台湾總督府糖業試験所を台南市に新設し交配圃を高雄州万丹庄に設置せり、是れ本島糖業に關する一切の試験研究の中心機関にして我が糖業発達に貢献する所大なるものあり。

第三節 將來施設獎勵を要すると認むる事項

從來獎勵しつゝある前述の諸事項の外將來施設獎勵を要すると認むる事項次の如し。

第一項 排水施設の徹底

本島糖業最近年々十六万甲内外の蔗作面積を維持し來りしが全島の耕地中には排水不良の爲、甘蔗の作付不可能又生産不良の土地尠しとせず、即ち新式製糖所原料採取区域内七六万一千甲の耕地中、約一二万二千甲は排水不良塩分

過度土質重粘石礫等の爲に蔗作不適地として放置さるゝの事情にあり、就中排水不良地として將來の施設改良に俟つもの五万甲の多きを占む。由來甘蔗は停滯水を嫌惡すること甚しく排水の良否如何は直に生産に影響する所大なり。近來塩分地の改良行はれつゝありと雖も排水の徹底を免ざれば充分なる効果を挙ぐることに難し、而して本島糖業の發達は面積の確保と耕種改善、土地改良の促進等による立体的増收に邁進するの外なく就中土地改良は曩に総督府に於て実施し、其の効果見るべきものありたるも未だ完了を見ずして中止せられ居るも之が復活をなし、排水施設の徹底を図るは實に糖業のみならず他産業にも裨益する所大なるものあるべし。

第二項 地力の維持増進に関する施設の実施

本島の如く高温多濕且屢々豪雨に見舞はれ土壤沃度の損耗甚しき熱帶地域内の耕土に在りて、其の管理宜しきを失せんか地力は急速に激減し徒らに生産力の衰退せる不毛地を抱擁するの結果となるを以て速に蔗園の土性及地力の調査を断行し、施肥灌溉排水其の他適切な方法に依り合理的且經濟的に地力の維持増進を講ずるは正に焦眉の急なりとす。

第三項 耕地防風林設置

本島海岸地方に於ける冬季節風の産業上人畜衛生上に及ぼす被害影響實に甚大なるものあり、就中西部海岸地方に於ける農作地の被害は驚くべき巨額に上るべく之を單に主要作物たる甘蔗、米に就て見るも濕度の低下蒸発を促進莖葉の裂傷倒伏等に依り其の收量の減退品質の低下等に依る被害は年々数百万円に達すべく而して之が損害を軽減せんとせば防風林を設置するの外なし、近時地方廳又は製糖会社に於て、之が実行に着手せるものありと雖も其の規模尙

部分的なる憾あり之が強化を図るの要あり。

第四項 酒精の生産

本島に於ては多量の酒精の製造を要する次第なるが之が製造に関し研究を重ねたる結果、本島に於ては（一）原料としては甘蔗及其の主成物を主として傍ら甘蔗等の農作物に依るを適當とせること。（二）糖業と密接の關係あるを以て耕地の利用上糖業と調和を保たしむる要あること。（三）製糖場には原料採取区域設定あるを以て原料取得上確實性あるのみならず原料の採取運搬に對し已に機構を有すること。（四）酒精の生産に付經驗を有する等より製糖業者に經營せしむるを最も確實且生産費低廉なるべき結論に到達したるを以て之が生産は一部國營とするの外製糖業者に經營せしむることゝし、他の民間業者の介在は原料の競争を惹起し本事業の遂行を困難ならしむるのみならず、糖業の基礎を脅す虞あるを以て之を許さざることに決定し、昭和十二年より工場建設に着手し現在は全工場十五、年産能力十二万軒となり原料としては糖蜜砂糖蔗汁を使用せるも食糧増産政策に依り水田蔗作の減少に伴ふ砂糖減産を來せる結果今後の原料確保は最も慎重を要する問題なり。

第五項 耕地白糖の奨励

本島に生産せらるゝ砂糖は主として現在分密白糖なるが終戦に依り従前本島製糖法の主体をなせる炭酸法及亞硫酸法に依る耕地白糖製造法を復活し精製糖に遜色なく、且つ生産費割安なる製品を産出し以て島内消費糖は勿論、大陸移出糖とすべきは時宜に適したる措置と思料せらる。然して昭和十八年期迄の作業工場四十二工場中耕地白糖工場は三十五工場にして、耕地白糖の製造高を占し二三、九九二、四六七担に昇りたるも昭和十九年期は全工場を粗糖法に

改造しある現状なり。

第六項 工場電化

燃料及動力經濟竝に作業能率の向上を図る爲、落氣に依る直接原動機を改め電力に依る必要あり。本島に於ける製糖工場内諸機関は電化の方針を樹立し圧搾機の電化は勿論原動機の電化に成功し良好の成績を示すに至れり。

第七項 バガス工業化の促進

バガスは現在建築板紙原料に供せられつゝあるも其の量未だ大ならず其の大部分は製糖用燃料として消費せられつゝあり、然るにバガスを原料とする「ケーンパルプ」事業と本島不可欠の事業なる処より昭和十七年度に於ては塩水港パルプ台湾パルプ及台湾興業の三社五万噸の生産力を整備し、島内需要の外内地に移出し一部を中國に輸出せり。

第八項 製糖事業の合同

本島糖業は経営の合理化の爲、製糖会社数八社の内帝國製糖株式会社は大本島製糖株式会社に又新興製糖株式会社が台湾製糖株式会社に其の他夫々合併せられ現在日糖興業、台湾製糖、明治製糖及塩水港製糖の四社となれり。

第四節 原料採取区域制度

台湾糖業令第五條の規定に依り製糖業を許可したるときは当該製糖場に付、其の原料採取区域を指定するは旧製糖場取締規則第三條の規定と同一内容にして区域内甘蔗は台湾總督の許可を受けずして搬出し又、区域外より搬入すること又之を砂糖以外の製品原料に使用するを得ざるものとす而して原料採取区域の規定は耕地面積其の他の狀況を

自し其能力に適應せしむるものなるが此の原料採取区域制度に關し、地主或は会社を保護し農民を圧迫する制度なりとなすものあり、固より甘蔗生産者は前記の規定あるが爲に假令、他に有利なる購買者ありと雖も当該製糖場に甘蔗を供給せざるべからざるの拘束を免れずと雖も（一）一度總督府は台湾製糖業令第六條に区域内甘蔗は台湾總督の許可したる製糖期間に甘蔗作付前に於て台湾總督の認可したる買入價格其の他買入條件及獎勵方法に依り買取らしむることとし、又天災事變の爲、買取ること能はざる場合は台湾總督の許可を要するのみならず甘蔗農業保護上必要ありと認むる場合製糖業者に對し必要なる事項を命じ得るを以て甘蔗生産者は之に依り其の生産物に對し完全なる保証を與へられ（二）而も耕作者は次期に甘蔗を作るや否やの自由を有するが故に会社は甘蔗の對抗作物との關係上糖價下落したる場合と雖も政策的に比較的耕作者に有利なる代價を以て甘蔗を買取らせるべからざる弱身あるを以て原料採取区域制度は耕作者にとり不利なりと云ふべからず、況や耕作者は区域内に於て何等甘蔗を耕作するの義務を負ふものに非ず、唯甘蔗を望んで耕作したる場合の如上の拘束を受けるに過ぎず故に万一会社が自己の慾せざる買取價格其の他を發表したる場合に於ては甘蔗の作付を爲さざるは勿論、自由なるべく從て本制度を以て耕作者を不当に拘束するものなりとなすは認識不足と云ふべく（三）又製糖業者は此の制度あるが爲に安んじて工場の建設運搬施設に巨費を投じ更に区域内農家の私有地に對して迄も土地改良事業を実施し、又甘蔗栽培方法の改善指導病虫害の防除、耕作資金の低利貸付、肥料の配給並に貸付等を爲し、耕作者側の受くる利又極めて大なるを以て本制度は耕作者製糖業者の兩者共、共存共榮上稀に見る合理的方法にして台湾糖業今日の盛況を見たるは實に本制度の運用に負ふ所不尠と謂はざるべからず。

第三章 茶 業

第一節 概 況

茶は本島主要輸出品の一として本島産業經濟界に貢獻し來りたるも事變勃發後船腹の逼迫化に伴ひ、遂に昭和十九年末以來輸移出全く杜絶するに至れり、茶は主として本島北部に栽培製造せられ茶園は他作物との關係上殆んど産地に限らるゝものなるが其の生産は從來約二〇〇万斤ありたるも近年輸出の減退に伴ひ生産も亦急激に減少し昭和十九年度に於ては約七〇〇万斤に低下せり、更に本年度に於ては生産皆無の狀態にあり、而して從來の烏龍茶は北米合衆國及英國に包種茶は滿州國、中華民國、に紅茶は専ら滿洲國、中華民國、北米合衆國等に輸出せられたるも太平洋戰勃發以來輸出入に激減し昭和十九年末以來全く杜絶するに至りて今日に及べり、尙内地消費として相当額の移出ありたるも之亦前同様杜絶せり。

第二節 獎勵施設

一、街庄茶業技術員補助

台北州十二街庄新竹州十八街庄に茶業技術員を設置せしめ之が人件費の一部を補助し以て指導機關の充実に期しつゝありたるも昭和十八年度以來之が補助を中止せり。

二、茶業傳習所

從來本島には茶業に關する技術上の教育機關なく斯業の發達に伴ひ當業者の訓練養成を痛感し來りしが昭和四年度より茶業傳習所を新設し、毎年茶業者の子弟を收容して新進茶業技術者の養成をなしありたるも昭和二十年四月情勢の変化により之を廢止せり。

三、滿州向茶の指導

從來滿州國は支那茶の消費地として年額一千万斤の需要ありたるを以て同地向茶の製造指導の爲當業者に指導獎勵を爲しつゝありたるも昭和十八年度より之を中止せり。

四、山地茶園開發補助

輸出貿易の振興上紅茶の生産力拡充強化を図る爲、昭和十五年度より十一箇年計画を以て中南部山地一万一千甲を開發し「アッサム」種系茶樹を育成栽植を爲し、之が製品一千万斤の増産を爲さんとするものにして之が開發業者に對し開墾費及種苗費の一部を補助しつゝありたるも昭和十七年度より情勢の変化により中止せり。

五、輸移出茶検査施設

台湾茶は其の生産額の大部分を海外に輸出せるものなるを以て之が外國市場に於て市價を維持する爲、大正十二年より總督府に茶検査所を設置し不良茶の輸移出を禁止して其の品質の向上を図りたるも昭和十八年度より國營検査を廢止し台湾茶商公會をして自治検査を爲さしめつゝあり。

六、貿易振興施設

台湾茶の殆んど凡ては之を挙げて海外に輸出せらるゝ關係上其の貿易振興施設は極めて重要なるを以て總督府に於

ては世界各地に於て開催せらるゝ各種博覽会或は見本市等を機会に参加し之が宣傳に努むる外、或は見本茶を配布する等販路拡張に努め着々其の効果を挙げたり。而して之が積極的貿易振興を図るが爲には本島内に於ける茶の輸移出機構に付之が整備の要切なるものありたるを以て昭和十六年台灣茶輸移出統制規則を公布し、且台灣茶輸移出統制会社を指定機関として茶の輸移出を一元的に統制せり、次で昭和十八年台灣重要物資管理團の設立に伴ひ同規則は台灣茶移出統制規則と改正せられ同社は移出のみ統制することとなり今日に至りたるも終戦に伴ひ同規則は廢止せられたり

参 考

茶栽培、摘葉面積、粗製茶及價格累年表

年次	栽培面積 甲	摘葉面積 甲	粗製茶產額 斤	粗製茶價格 円
昭和13年	45,841	43,363	31,837,060	19,178,285
同14年	46,187	43,783	23,382,044	15,324,154
同15年	47,055	44,359	19,014,818	16,948,389
同16年	46,152	43,562	19,167,413	17,317,324
同17年	44,166	41,674	19,309,104	17,359,750

再製茶產額累年表

年次	烏龍茶 斤	包種茶 斤	綠茶 斤	紅茶 斤	計 斤
昭和13年	4,518,994	5,928,653	1,500	9,835,461	20,284,608
同14年	4,306,458	7,826,423	1,300	9,925,833	22,060,014

年次	烏龍茶 円	包種茶 円	綠茶 円	紅茶 円	計 円
昭和13年	2,106,858	5,069,832	12,500	10,383,501	18,372,690
同16年	103,150	8,473,315	14,100	9,946,667	18,537,232
同17年	321,307	12,275,454	21,027	5,615,441	18,233,229

再製茶價額累年表

年次	烏龍茶 円	包種茶 円	綠茶 円	紅茶 円	計 円
昭和13年	3,714,700	3,676,970	1,500	6,844,031	14,237,201
同14年	4,501,548	9,561,338	1,560	8,387,589	22,402,031
同15年	1,974,362	5,868,749	21,600	12,341,990	20,206,703
同16年	90,989	8,946,126	24,848	12,152,838	21,214,801
同17年	210,750	17,037,486	30,777	6,310,244	23,589,257

茶移輸出合計數量累年表

年次	烏龍茶 斤	包種茶 斤	粉茶及其他茶 斤	紅茶 斤	計 斤
昭和13年	4,103,892	5,685,892	1,185,325	8,082,365	19,057,474
同14年	4,110,344	7,143,834	1,486,210	8,615,135	21,355,512
同15年	2,478,651	3,894,124	540,062	8,707,243	15,620,080
同16年	4,594	8,233,486	606,548	5,897,534	14,802,162
同17年	32,732	8,571,175	1,184,129	6,163,484	15,951,520

茶 輸 移 出 價 格 果 年 表

年 次	島 産	包 種	粉 茶 及 其 他 茶	紅 茶	計
昭和 13 年	2,910,003 円	3,793,281 円	444,401 円	5,593,981 円	12,741,667 円
同 14 年	4,321,862 円	8,757,086 円	633,861 円	7,711,384 円	21,424,193 円
同 15 年	2,833,989 円	6,284,149 円	290,444 円	11,583,402 円	20,991,984 円
同 16 年	7,502 円	17,763,000 円	410,533 円	9,843,099 円	28,024,134 円
同 17 年	60,486 円	18,359,510 円	733,289 円	9,736,853 円	28,890,143 円

第四章 バナ、柑橘、其の他の青果物

第一節 概 況

本島青果物の生産額は昭和十八年に於て果実類約三千万円、蔬菜類約三千五百万円なり、果実中主なるものはバナナ、パイナップル類にして蔬菜中主なるものは大根、甘藍、大芥菜なり。

一、バナナを生産額は三億斤内外なり、其の内約三分の二は従来島外に販賣せられたり、全島到る処に栽培せらるゝも産業的に発達せるは台中、高雄、台南州なり。然れども昭和十七年以來甘藷等時局重要作物の増産対策に伴ひ作付面積は漸減の状況にあり。

二、柑橘類の生産額は約五千万斤にして従来内半数を島外に販賣せり、本島の氣候風土は柑橘類の栽培に好適し加

を示すに至れり、椪柑は新竹、台中州、桶柑及雪柑は台北州、斗柚、文旦、白柚は台南州を主産地とす。然れども時局下強力なる重要農作物の増産対策に伴ひ、勞力不足に因る手入不良其の他管理の不十分に因り次第に減産の状況を示すに至れり。レモン、バレンシヤ、グレープフルーツ、ネーブル等に就ては昭和十五年以降五箇年計画を以て増産を図りたるも戦局の推移に従ひ昭和十七年之が増産計画を中止せり。

三、其の他の果実にありては李、龍眼、パ、ヤ等にして主として生食用として消費せらる。

四、蔬菜にありては大根、甘藍、大芥菜、トマト、胡等生産大にして薑、甘藍、南瓜、茄等従来若干島外に販賣せられたり。

本島は氣象其の他の條件により採種困難にして種子は多く南支、日本内地に依存し來れり。一般に在來種と称せらるゝものは南支系統の品種にして品質良好ならざるも農病虫害抵抗性大なり、昭和十九年秋以來採種奨励に努力中にして現在略々自給の域に達しつつあり。

第二節 出荷団体

バナ、柑橘、パイナップルに付ては従来重要物産同業組合法に基き夫々各州廳青果同業組合、柑橘同業組合及パイナップル同業組合あり、夫々同業組合聯合会を組織せり、昭和十六年これら諸団体は統合され青果物全部を取扱ふ各州廳青果同業組合となり更に昭和十九年農業者の設立と共に吸収せられ各州廳農業者となれり。

第三節 配給機関

從來本島青果物は専ら島外出荷に力を注ぎ島内消費に對しては考慮を拂はれ居らざりしが其の後強力なる統制經濟の實施せらるゝに至り昭和十六年青果物配給統制規則公布され青果物の公定價格の實施と共に各州廳管外出荷は出荷団体たる各州廳同業組合（後に各州廳農業會）又は其の委託を受けたる者に非ざれば出荷し得ざることゝし、之が輸送と販賣は台灣青果株式会社（後に台灣青果統制株式会社）に委託し一元的統制を實施せり、又輸出入青果物も日本内地に於ける青果物の統制強化により強力なる移輸入機關を設けざれば入手困難となりたるを以て台灣青果株式会社を指定移輸入機關となし、玉葱、馬鈴薯、林檎、梨其の他を移輸入せり。又島内配給面に於ても前述公定價格を實施し台灣青果株式会社をして主要都市に於ける卸市場及全島各地に小賣市場經營せしめ一般消費者に對し配給の円滑を期したるも終戦と共に青果物の公定價格制度並に青果物集荷配給の統制を廢し自由經濟に基く其の円滑なる出廻り並に價格の安定を図ることゝせり。

第四節 蔬菜採種場

本島に於ては從來専門的指導的蔬菜採種事業は皆無にして農民の任意的自家採種に依りて辛じて種苗の継続に年々莫大なる不足量を島外より入荷し來れり、然るに戦争の勃發に因り島外よりの入荷殆んど皆無となり其の生産確保上洵に寒心すべき状態に立至りたるを以て昭和八年台南州嘉義郡蕃地ラウウヤ社に蔬菜採種場を設置し昭和十九年本事

の採種場を直營し昭和二十年九月大根種子（約六石二斗）を採種配付するに至れり。

第五章 鳳梨青果及鳳梨罐詰工業

第一節 概況

本島に於ける鳳梨の主産地は台中、台南、高雄の三州下にして之が罐詰工業は著しき發展を遂げ尙逐年進展の趨勢にして最近は空罐の入手困難に因り漸減しつつあり、昭和十七年の鳳梨作付面積八、九三〇甲、收穫高一、一六、二四九斤、價格五、四一五、六三六円、鳳梨罐詰製造高一、二一九、五一三函、價格一三、二八四、七二七円に達す鳳梨栽培適地は前記三州下に於て尙一、八九〇甲あり、又東部台灣には將來開發可能な余地尠からず品種亦本府の奨励施設と相俟て改良せられ罐詰工場の設備も大鳳興業株式会社（旧称台灣合同鳳梨株式会社）の設立に依り漸次改良せられ製品の統一向上生産費の低下を企図し以て本産業の發展に備へつゝあり。

最近三箇年間パンシ生産高

年 度	栽培面積	生産高	生産價格	罐詰製造高	同上價格
昭和 15 年	10,229 甲	128,858,216 斤	5,420,884 円	1,614,374 函	23,787,613 円
同 16 年	10,476	139,075,525	6,570,652	1,303,791	19,165,728

同 17 年

8,930

116,213,149

5,415,636

1,219,513

13,284,728

三三八

第二節 獎勵施設

一、鳳梨種苗養成所

本島に於ける在來種鳳梨は果形小にして纖維多きのみならず殊に種子は深く果肉内に有するを以て生食竝に罐詰として共に不適当なるに依り、大正十四年度より高雄州鳳山郡大樹庄に鳳梨種苗養成所を設置し、次で昭和四年高雄州東港郡万丹庄に鳳梨種苗養成所を増設し、優良種たる布哇産「スムースカイエン」種及ボルネオ産「サラワク」種の種苗を輸入し之が養成配布に努め尙種苗の改良を図る爲、昭和十六年鳳山街鳳山熱帶園藝試験所近接地に万丹養成所を移轉すると共に昭和十八年度に於ては大樹養成所を廢止し之が設備を鳳山に移し鳳山鳳梨種苗所の充實を図れり。昭和十五年度に於て二五七、八三〇本の種苗を養成配布せるも昭和十六年度に於て種苗養成所移轉の爲以降種苗なく時局の推移に鑑み昭和十九年度を以て事業を中止せり。

二、農産物罐詰検査

本島農産物罐詰の需要を廣く海外に求めて販路の拡張を図るには製品の統一品質の向上を図るを要するを以て本府に於ては昭和三年よりパイン罐詰の輸出検査を実施し昭和十三年よりトマト罐詰次で昭和十四年より筍、木瓜、マンガ、李罐詰の輸移出検査を実施し來れるも昭和十七年十一月行政機構の改正に依り本府直營を中止し自今台灣罐詰協会に於て自治検査を実施しつゝあるも現状は機能中止の状態なり。

本島パイン罐詰事業は驚異的發達を見たるも大正末期より群小工場濫立するに當り製品の統一を欠くのみならず、動もすれば粗製濫造の不正競争現はれ斯業の健全なる發達を妨げる虞あるを以て、昭和五年台灣鳳梨罐詰製造業營業取締規則を公布し、工場の濫立を防止すると共に既設工場の設備改善を誘導し以て斯業の發展を期し來りたるが近時トマト及其他農産物罐詰製造業の急進的發展を見るに至りパイン同様取締の必要を生じたるを以てトマト罐詰は昭和十四年より製造業を許可制と爲し之が濫立を防止せり。

最近三箇年間トマト其の他罐詰製造高

年 度	トマト罐詰	筍、木瓜、マンゴー、李罐詰
昭和 16 年度	275,151	111,811
昭和 17 年度	225,608	不明
昭和 18 年度	46,789	同

第六章 植物検査

本島の植物検査は海外より輸移入せらるゝ植物類の検査取締を勵行し、植物病菌害虫の侵入傳播を嚴に防止すると共に、内地、朝鮮、南洋群島に移出する柑橘及西瓜竝に内地に移出するパ、ヤ及トマトの検査をも行ひ取引の安全を期し、本島農林産業の保護助長に努め其の検査数量も本島斯業の發展に伴ひ年々増加の趨勢にありしが戦争の進展に

つは熱帯産物の調査を兼ねて其の輸送設備の調査を兼ねて行はる。

植 物 検 査 年 表

年 度 別	移輸入植物	移出柑橘	移出西瓜	移出木瓜	移出トナリ	要臨検船舶機	検査手数料
大正10年度	11,079	3,882,077	—	—	—	2,443	8,870.48
同 11年度	57,391	4,496,841	—	—	—	2,582	10,864.09
同 12年度	590,933	4,799,466	37,842	—	—	2,698	24,846.26
同 13年度	78,137	5,299,441	103,687	—	—	3,243	22,782.10
同 14年度	139,853	4,732,172	103,967	—	—	3,505	21,570.05
同 15年度	152,553	6,120,770	128,914	—	—	3,804	27,247.90
昭和2年度	169,405	5,976,530	136,771	—	—	2,816	27,616.10
同 3年度	166,440	6,292,526	171,519	—	—	3,442	33,492.60
同 4年度	191,177	6,991,003	197,905	—	—	4,356	35,377.80
同 5年度	193,256	6,219,095	154,802	—	—	4,633	29,791.05
同 6年度	204,435	6,361,298	192,692	—	—	4,814	34,069.05
同 7年度	157,524	8,170,191	207,820	—	—	4,849	39,109.95
同 8年度	234,615	8,291,464	237,209	—	—	4,897	42,767.50
同 9年度	176,302	9,668,372	200,712	—	—	4,065	41,368.40
同 10年度	480,552	10,007,997	181,646	—	—	4,765	41,077.45
同 11年度	541,144	10,638,151	224,087	—	—	5,923	46,156.05

年度	5,344,990	7,562,127	197,680	—	—	3,804	37,510.10
同 12年度	664,576	11,481,397	253,004	—	—	3,836	50,918.05
同 13年度	676,328	9,209,308	253,732	80,837	—	4,661	49,626.45
同 14年度	681,076	5,793,990	163,407	25,421	—	4,680	32,120.70
同 15年度	649,428	6,884,516	28,036	82,344	384,001	1,486	21,922.40
同 16年度	595,300	4,905,175	4,743	8,133	896,829	185	13,645.55
同 17年度	580,711	691,673	176	94	200	—	1,041.25
同 18年度	143,356	1,200	8	25	6	—	161.65
同 19年度	913	—	—	—	—	—	—
同 20年度	—	—	—	—	—	—	—

第七章 林 業

第一節 概 況

本島は山岳に富み一万尺以上の高峰四十八座を数ふる有様にして従つて立体的に其の森林地帯は熱帯より寒帯に亘り、材木の種類極めて多く其の林野に対する経営施設の如何は林産資源の開發に或は治水國土保安、水利水害並電源の開發等に影響する所極めて大なるものあり。其の林野の総面積は二百四十二万八千余甲に及び全島総面積の七割を占め大部分は國有林野にして民有林野は二十六万六千余甲に過ぎず全林野面積の約十一%に當る、従て國有林野の合

理的經營を爲すは台灣統治上極めて緊要なるを以て大正十四年度より森林計画事業に着手し、四十事業区の施業案の編成を終り着々其の運営を実施中なり。其の他本島の水利水害の現況に鑑み全島重要河川流域の荒廢林野に対しては治水造林並に山地砂防設備をなし水害の根絶を期すると共に、本島冬期の強烈なる季節風を緩和し農産物の増産、交通衛生等の莫大なる被害と脅威を免るゝ爲、海岸防風林の設置を爲して其の受益地帯の効果は全く驚くべきものあり、更に一方二億余立方米を包蔵する天然林の開発を爲す爲、林産物搬出道路の開鑿を爲し、民有林野に対しては國家産業經濟上頗る重要な意義を有する山脚地帯を占め居るを以て國庫補助金の交付等により鋭意民行造林の奨励を爲しつゝあり。

第二節 保安林

本島の林野は地形地質氣節等の關係により特に治水並に國土保安施設は緊急にして農地灌漑電源用水等の維持強化並に海浜地方其の他の飛砂防止防風等の防備調整は直接各般の農工生産力の増強と、又其の生産災害防止の使命を有し、保安林は其の母体なるを以て明治三十九年より保安林の調査編入を行ひ、之が保護取締を勵行すると共に急施を要する箇所に対しては地方廳委託に依り造林を実行するの外、民營の海岸砂防林に対しては毎年百八万本を標準とし種苗の無償下付を爲すと共に造林費に対する補助金を交付し、極力保安林の整備促進を計り編入目的の達成を期しつゝあり。昭和十八年末に於ける保安林は國有林三七〇、一六三甲余、民有林六、〇一五甲余、合計三七六、一七八甲余其の箇所数五〇七箇所此の内昭和十八年度末現在造林延面積は二八、一七五甲余に達し又種苗の無償下付は昭和十五年

更にし其の数二三、二八九、〇〇〇本に達す。

昭和十八年度末林種別保安林面積を掲ぐれば次の如し。

種 別	箇 所	面 積
飛砂防止林	91	11,234.5729
水源涵養林	129	261,257.5997
土砂打止林	175	92,899.2911
風致林	32	4,363.7182
魚防林	27	4,456.3389
風防林	37	1,319.0626
潮害防備林	8	252.1568
落石防備林	3	115.9885
水害防備林	5	279.5425
田標林	1	1
計	507	276,178.2732

因に現在の保安林は前記の如く明治四十年以降編入し來りたるものにて古きは編入後既に三十餘年を経過し地籍に著しき異動を生じ保護取締上支障尠からざるもの、或は編入後其の地況林況を四圍の環況等の変移に伴ひ、編入当時指定せる施業法の更改を必要とするもの或は編入目的の変化又は消失せるもの等あるを以て特に整備の急を要するものに対し、昭和十四年度以降毎年三三箇所宛檢討調査を行ひ、合理的に之を整備し編入の目的に副はしむると共に指

定を解除し差支なき箇所に対しては速に之を生産拡充の用に供しつゝあり、着手後日尙浅きも解除地域中農耕地として利用するに至りたるもの二千余甲に達せり。

第三節 森林施業案の実施

本島國有林野の合理的經營は治水國土保安上は勿論産業發達の基幹たるに鑑み、曩に大正十四年度より森林計画事業を開始し、一箇年の日子と総經費二百六十八万余円を以て主要林野に付二百八十五万九千甲の治水調査、百三十七万五千甲の区分調査、八十七万七千余甲の森林施業案編成調査を實行し昭和十年度を以て其の完成を見るに至れり。而して該森林施業案は二十九の事業区（外に施業計画地域一事業区）に分れ各事業区に付收穫及造林基本案を調整し適地適木殊に熱帶特殊林木の造成を考慮し林野の合理的利用と治水國土保安の万全を期せり。

第一項 造 林

本島に於ける造林事業は明治三十三年度より樟樹造林に着手したるを以て嚆矢とし其の後幾多の変遷を経て今日に及べり、而して昭和十年度以前の造林は官行斫材跡地造林、樟樹造林特種樹種造林竹造林、施業案造林並に保安林造林に区分せられ各々其の目的に従ひ實行し來れるも昭和十一年度全島二十九事業区挙げて施業案の実施を見るに至れる結果、保安林造林を除く外総て施業案造林に統一せられ昭和十二年度より樟樹の品種改良並に原料保統造林を、昭和十四年度より熱帶特用樹種栽培を、昭和十七年度より濶葉樹利用開跡地更新に伴ふ造林予算の実現を見るに至り、夫々施業案の指示する所即ち本島所要大材主として杉檜の自産自給と併せて樟樹其の他熱帶特用樹種チークワツ

トナリ等の樹種を行ひつゝあり、昭和十八年度に於ける造林事業費總予算二、四八七、二八九円にして造林面積九、〇〇〇陌其の内同年度新植面積は施業案造林二、六〇九陌樟樹臨時植栽一、〇九八陌濶葉樹増伐採跡地造林三五一陌を實行せり、而して昭和十九年度に於ては之が經費二、九〇二、二六〇円にして新植面積二、七〇四陌天然更新一、一五二陌其の外に既成造林地の撫育事業及之に附帶する事業を實行せり、而して昭和十八年度末の人工造林地面積は三一、五〇〇陌天然更新地面積は二、〇〇〇陌なり。

第二項 森林計画事業

第一次森林計画事業は大正十四年度に着手し、昭和十年度を以て本島三十事業区（施業計画地域を含む）八十九万二千陌に対する施業案の編成を完了し、昭和四年度より昭和十年度迄に已に九事業区の実施を見昭和十一年度に至り殘二十一事業区の実施を見るに至れり、而して本島重要河川の上流域を占め治水國土保安上重要なのみならず本島將來に於ける木材生産上重要な奥地九十万陌の國有林野に対し、昭和十三年度より第二次森林計画事業として之が施業案の編成に着手し、昭和十八年度之を完成せり。施業案は該事業区に対する森林經營法の一般方針確立の外に主として一施業期（十年間）の施業法を確立したるものなるを以て一施業期の経過を俟ちて検討調査を行ひ前案に依る實行成績を審査し次期施業案の編成を行ひ以て時運に適合することを期し此の検討事業を實行し來れり。尙十九年度以降は第二次森林計画事業に依り決定せる十事業区を含む全島四十事業区に対し臨時検討を急速施行中の処諸般の事情に依り一時停止中なり。

第三項 林産物処分

領台當時に於ける本島官有林野の產物処分は個々應急的措施を採り來りたりしが本島の特殊事情を考慮し、明治二十九年九月勅令第三百十一号を以て台灣官有森林原野及生産特別処分令を公布し引続き同年十月府令第四十四号を以て台灣官有森林原野產物賣渡規則を制定して官有林野產物特賣方法の原則と手續の根本を定め、爾來會計規則を併行適用し合理的に処理しつつあり、他面領台以來本島有林野に対しては之が施業に付何等計畫せられたるものなく林產物の拂下処分の如きも木材の需要に應じ受動的立場に在りて専ら希望者の出願を俟つて処理し來りしが、大正十四年より先づ全島國有林野中施業要箇所二十九事業地に対する森林計畫事業に着手、昭和十年度を以て全事業区の計畫案編成の完了を見たり、依て各事業区は順を逐つて昭和四年度より案の実行に移り同十一年度に至り全事業区の実行を見るに至れり。而して之が產物の処分も右計畫案の示す所に従ひ從來の立場を去つて積極的拂下をなすこととなり極力其の運営に努力しつつあり、尙施業案は編成地域に於ける林產物も將來に於ける計畫実施の主旨と地方林野產物需給の關係を考慮し必要に應じ拂下処分を行ひつつあり。

今過去五箇年に於ける拂下処分金額を表示すれば次の如し。

年 度 別	施產局所管	官林所所管 (製品を除く)	事實局所管 (薄木其他)	計
昭和12年度	155,061	165,239	8,978	329,334
昭和13年度	625,591	227,397	27,292	880,281
昭和14年度	614,956	258,528	8,851	882,335
昭和15年度	910,236	539,144	11,588	1,460,968

昭和16年度	1,507,701	566,679	25,648	2,100,024
昭和17年度	—	—	—	9,450,790

備考 事實局に於ける処分は昭和7年9月1日以降製腦事業が官營となりたる爲、同年度以降の処分金額は減少せり。

第四節 潤葉樹の利用開発

台灣に於ては年々平均約千九百万円の巨額に上る移入材を以て島内消費を充足し來りしが自給自足の立場より昭和十五年度以降に於て第七節に説明したる如く、山地搬出道路の開鑿と併行し約二十五万石（昭和十七年度以降七十五万石）の潤葉樹を増伐し、尙跡地には人工造林及天然更新に依り有用木を造成せんとするものにして既に昭和十五年度より所定の増伐を又昭和十六年度より第二節第一項に述べたる如く跡地の更新を夫々実行中なり。

第五節 森林治水事業

本島水利水害の現況に鑑み全島主要河川流域中荒廢に帰し緊急施設を要する國有地に対し、治水造林並に山地砂防設備を行ひ、本島各種水利の保持増進を策すると共に水害の根絶を期せんとするものなり。本事業は昭和十一年度より十箇年計畫を以て島都台北市の生命線たる淡水河（新店溪）流域に於て事業を開始し昭和十四年度よりは濁水溪、曾文溪兩流域に昭和十六年度よりは馬溪、下淡水溪（隘寮溪）の各流域に更に昭和十七年度より淡水河及曾文溪各流域の第二期事業及清水附近に於て新規に砂防事業を計畫実施し今日に及べり、次に本島民有林野に於ける治水事業は

昭和十五年度以降十箇年計画を以て之が奨励を行ひ、毎年十二万一千円の國庫補助金を各州廳並嘉南大圳組合に交付し民有林野治水事業の助成を爲しつゝあり。

第六節 海岸林事業

本島は概ね九月より翌年三月に亘り間断なく吹き続ける寒冷強烈なる北東季節風により産業、交通、衛生等總ての部門に対し莫大なる被害と脅威を受け、又夏季屢々襲來する颱風によりても少からざる被害を受けつゝあり、茲に於て防風林の施設は本島には特に重要なるを認め先づ其の根幹をなす海岸林の造成並之が完備を期せんが爲、昭和六年度より海岸の第一線國有地七六〇甲に対し六箇年計画を以て海岸林を造成し、更に引続き昭和十三年度より西部五州下に於ける海岸線國有地九二二陌に対し十箇年計画を以て海岸林を完成せんとするものにして、昭和二十年度を以て之が新植は完了するものなり。然るに海岸林は全海岸に対し一連的に造成せざれば充分なる効果を期待し得ざるものにして局部的に不成立地あるときは隣接海岸林の受益地帶並受益度合は甚しく減殺せらるゝものなり。此の意味に於て國有地の間に介在する民有地に対しても國營に併行して海岸林造成の要を認め、民力を以て之を爲さしむることゝせり、依て西部五州の海岸地帶、民有地一〇二軒五〇六陌に対し、昭和十六年度より七箇年計画を以て州の直營事業として之が造成を爲さしめ州予算に対し事業費の二分の一以内の補助をなし本事業の促進を計り來りたるものなり。

第七節 林產物搬出道路開鑿

本島は二億余立方メートルの森林を有するに拘らず年々用材百余万石七百万円の移輸入差を見つゝあるは生産材價の不廉なるに因由す木材生産費の過半を占むるは搬出費なるに鑑み、山地搬出道路開鑿の急務なるを認め、昭和十四年度より十箇年継続を以て予定路線九三〇軒の開鑿計画を樹て、同年度一九軒五を開鑿せるが最近時局の影響に依り島内木材の需要激増せるに反し、内地材の移入困難なる情勢を來せるを以て、昭和十五年度より既定計画を拡張し、昭和十八年度迄に一五一軒の開鑿を見、昭和十九年度に於ては一〇軒を開鑿せり。

第八節 民有林野の營林の監督並に民行造林其の他指導奨励

民營林業の普及發達は治水國土保安上は勿論、國家産業經濟上頗る重要な意義を有するものなるを以て總督府に於ては夙くも明治二十八年以降各地に官營苗圃を設置し、樹苗養成配付造林の実地指導を爲す外、官有林野貸下の制度を設け更に、明治四十年には台灣樟樹造林奨励規則同十四年には官有森林原野予約賣渡規則を制定し、鋭意民行造林の奨励並植林思想の普及喚起に努め來れり、而して大正十四年度以降は直接の指導機關たる各州廳をして本事業を經營せしめ總督府に於ては民林奨励監督事業費補助規則を制定し國庫補助金を交付し之が指導奨励をなし來りたる処なり。然るに近時木材並林產物の需要逐年増大したるのみならず、今次事変以來國際收支の關係上木材バルブ單寧及樹脂原料等の輸入制限に依る國內資源の開發利用或は生産力補充計画の遂行に伴ひ、官民有林野を問はず森林資源の過伐増産を余儀なくせられ、特に民有林に於ては軍需單寧資材現地用木炭軍用材等莫大なる数量の供出をなし永年蓄積せられたる資源の消耗も著しく一段と荒廢を激發しつゝある現状にして、國土保安上は因より戦時經濟上憂慮す

べき現狀にして、而も從來總督府に於ける施策は民有林の營林の監督は勿論之が指導獎勵に対する要員の配置なく民有林業振興上遺憾の点尠からざるものあり、今日之が根本的対策を樹立し積極的民行造林の促進を図るに非ざれば資源の拡充は勿論民營林業の衰退は目を逐ふて増大し、國土保安上幾多の支障を招來するに至るを以て總督府に於ては、昭和十六年度より新規予算を得て總督府及地方廳に於ける民有林に対する營林の監督並に指導獎勵に従事する職員を新設すると共に各州廳をして生産力拡充並資材としての用材薪炭パルプ用材及今日國防上不可欠の靱革用揮発油料塗料等熱帶特用資源の増殖を図り、本島に於ける劃期的民營林業の振興を期せんとする計画を以て目下着々進行中なり。

第九節 林產品の生産及配給統制

本邦内外地に通ずる木材、木炭其の他の林產物は戦争の進展すると共に漸次逼迫の度を加へ当初は潤葉樹の利用開發、木炭の改良増産を図る等其の緩和に努力したるも更に其の逼迫の度の深刻化するに伴ひ、木材の生産統制其の規格検査をも加ふるに至り配給の統制をも爲しつゝ専ら重点主義に基く配給の合理化を図るに至れり。然るに終戦決定に伴ひ之が必要を見ざるに至り、木材を始め其他の林產物に関する生産配給等の統制並に其の機構は廢止することゝし目下施策実施中なり。

第十節 木炭改良増産獎勵

カッリン、イロ、スギ、ヒノキ等の木炭の増産と内地及中南支方面の逼迫に對應し品質優秀なる木炭の増産を獎勵し、島内需給の円滑を図り併せて輸移出の増大を期せんとするものにして築窯窯造木炭倉庫傳習会の諸施設に対し要せし費用の二分の一以内の獎勵金を交付して之が改良増産に努めつゝあり。

第十一節 單寧生産獎勵

今次事變勃發するや爲替管理の立場より靱皮用單寧の輸入制限せらるゝの止むなきに至り、之が不足の一部を補ふ目的を以て從來單寧含有量僅少なる關係上企業的に之が製造の行はれざりし想思樹の靱皮を利用して靱皮用單寧エキスを製造せんとする計画を樹て、昭和十四年度より製造施設費に対し國庫補助金を交付する予定にありし処、企業的採算並に製造方法等に相当困難なる事情ありし爲、昭和十四年中には企業化するに至らざりき、然るに本事業の現在及將來の重要性に鑑み、昭和十五年四月漸く新竹市に資本金十九万円を以て台灣單寧興業株式會社設立せられ之が製造事業を始めることとなり、固定資金十九万円を以て工場設備を鋭意建設中なりし処、昭和十六年五月漸く完了する運びとなり、昭和十四年一月一月以來生産供出しつゝありし想思樹皮を以て昭和十六年度に於ては靱皮一、五〇〇噸より單寧エキス約四百噸を製造し一方一、二〇〇噸の靱皮は紛碎の儘使用する計画を以て目下操業中なり。而して總督府としては本事業を助成する爲、台灣單寧興業株式會社に対して之が設備に付昭和十五、十六の両年度予算を以て七万円の補助金を交付せり、然るに右單寧會社は昭和二十年の空爆に依り被害を受け操業不能に陥れり。

第十二節 澎湖島造林事業

凜烈なる季節風と灼熱の陽光に暴露せる澎湖島は全嶼荒涼として見るべき林地なく爲に、島民は産業、交通、衛生等各部門に甚大なる障害を受け植林の希求せらるゝこと切なるものあり、依て多年の経験を基礎として特殊なる造林方法に依り島内の要地百五十陌に對し十年計画を以て植林をなし、島民の福祉増進に寄與せんとするものなり、而して本事業は昭和十四年度より実施せられ、昭和二十年度に於て所期の新植を了するものなり。

第十三節 林野面積林産總額及木材需給狀況

本島に於ける林野面積、林産總額及木材需給狀況左の如し。

種別	國有	公有	私有	計	昭和15年末現在
	甲	甲	甲	甲	
森林	1,646,862	13,620	221,371	1,881,853	
原野	499,706	1,891	44,764	546,361	
計	2,146,568	15,511	266,135	2,428,214	
(ロ) 林産總額					(單位千円, 千円以下切捨)
昭和11年	15,147	16,664	17,292	24,813	27,694
昭和12年					
昭和13年					
昭和14年					
昭和15年					

区分	生産	移入	輸入	計	移出	輸出	計	消費
	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量
数量	1,530	2,954	18	2,572	233	45	268	3,834
價格	12,388	33,306	215	33,521	7,195	957	8,142	37,767

第十四節 試驗研究機關(林業試驗所)

本島に於ける林業試験の機關としての林業試験所は試験分類を殖育科、施業科、利用科の三科に分ち各種有用樹木の育生繁殖品種の改良、人工林及天然林の撫育並に有用木材の利用に關し基礎的試験より企業化試験に至るまで林業各般に亘り、試験し居るものなるが就中造林試験としては鬆革用單寧原料樹種即「トータルバーフ樹」キニーネ原料たる規那樹松脂採取用松樹、桐油用樹蔓の他安南漆、クス、バルサ等の有用樹種の育成及改良試験を行ひ又森林施業試験としては樺櫟等重要林木の撫育及間伐試験に重点を置くの外防風林の造成試験其の他森林の保護及國土の保安に關する試験を行ひ又木林利用試験としては独り台灣産のもののみならず廣く南洋材に就ても其の材の性狀及強度等基礎試験をなしつゝあるの外、木材パルプの製造に關する基礎的及企業的試験並に木材ベニヤ合板に關し試験を行ひ、又更に木材以外の林産物に就ては松脂採取試験、漆液採取試験、相思樹皮及木麻黃麻樹皮等單寧原料樹皮よりする單寧採取試験、其の他山地産各種纖維樹脂樹油に關する試験及調査を行ひ夫々成績を挙げつゝあり、尙敘上の試験中造

林試験の如き実地に行ふ必要のあるものは蓮華池、中捕、恒春及マリブルの四試験支所に於て夫々試験所本部と一貫せる連繫の下に試験しつゝあり。

第八章 水産業

第一節 概況

本島水産業は其の地理的條件と当局の奨励に依り最近顯著なる発達を遂げ、昭和十六年度に於ける水産総額は五千五百万円に達し、之を明治三十五年の百三十七万円に比すれば実に四十倍に当る躍進振りを示し、殊に廣大なる南支南洋に於ける水産資源の開拓亦本島水産業に俟つ所大なるものあり。本島に於ける水産業の前途定に洋々たりと謂ふを得べし、現在本島を中心とする主なる漁業は汽船トロール漁業、機船底曳網漁業、鮪延縄漁業、母船式鮪漁業の遠洋漁業を首位に沖合漁業として旗魚突棒漁業、さわら流網漁業、網延網漁業、鯉漁業又珊瑚漁業等行はれ、又沿岸漁業としては定置漁業、寄網漁業、旋網漁業、地曳網漁業にして漁場は日本海流の流過区域はカツヲ、ソウダカツヲ、マグロ、カチキの漁場とせらる北方彭佳嶼より長崎縣下五島列島に連る百濤線内の所謂支那東海の海棚は、シヅ、エソ、タチ等の底棲魚の漁場、隣接支那海及東京灣方面はレンコンダヒ、アオマツタヒ、エソ等の底魚漁場にして、尙フィリッピン以南の南洋漁場はカツヲ、マグロ、カチキ等の浮魚の好漁場たり、而して之等漁業は主として基隆、高雄蘇澳及新港を基地とし、台灣沿海は勿論遠く南支那海、スルー海、セレベス海方面に出漁しつゝあり。又近時竣功

は干潟地多く古來養殖業行はれ、其の養魚地面積鹹淡水合計三万九百十五甲歩を算し、現下食糧対策上重要な役割を負荷しつゝあり。次に水産製造方面に於て見るに鯉節、竹輪、蒲鉾、カラスミ等の在來品の外、近時新に魚丸、鮪罐詰、鯉マサケチャツブ罐詰及鰯肉利用フィッシュソーセージ製造業擡頭し現在四工場を數ふるに至れり。

又皮革資源の充足を目的とし本島に饒産する鮫皮の鞣皮工業化を図り、優良原皮の増産奨励と併せ年産二十万枚の製皮工場建設せられ本工場の成立を見、昭和十八年中の水産製造総額八千四十余万円に上れり、然るに漁業生産に必要な重要資材の配給は時局の推移と共に益々逼迫の度を加ふるに至るを以て之が有効適切なる運用に依り、生産の増加を図らんには企業との合同、漁業組織の改善及漁撈方法の轉換等に依り漁業能率を維持増進せしむるにあり、而して必要方面への配給に遺憾なきを期する爲、生産配給共に計画的に実施するを要し、更に生産及配給の計画は其の末梢に至る迄透徹せざれば克く其の効果を期待し得ざるを以て、生産配給消費の一貫作業を理念とする生産配給組織の整備をなさざるべからざると爲し之が具現化の爲、特定の海岸漁業の單一的なる運営に任ずる事業会社及水産物の一元的集荷配給の業務を担当する配給会社を設立せしめたるの外、更に沿岸漁業及養殖業者を一丸とする水産業團體の整備統合を策し、又は陸内水面の高度利用の爲、必要予算を計上して鯉及鯛の増産を図りたる一方虱目魚苗の集荷配給に万全の策を講ずる等島民蛋白自給源の確保に邁進しつゝあり、而して戦争終結するに至るや戦争遂行上強化し來れる水産業並に水産物の統制は其の必要なに至りたるを以て水産に関する統制法令は之を速に廢止することゝせり。今最近三箇年間に於ける本島水産総額及水産業者の數並其の漁船の種別隻數を示せば左の如し。

1. 生産額

区分	昭和16年度		昭和17年度		昭和18年度	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額
漁獲	135,431 斤	38,647,076 円	55,166 斤	31,476,925 円	26,729 斤	22,583,409 円
養殖	19,951	9,772,329	23,374	11,854,580	9,913	9,604,878
製造	—	6,293,640	—	7,769,062	—	10,405,824
計	—	54,713,145	—	51,100,567	—	42,594,111

2. 水産貿易

区分	年次	昭和16年	昭和17年	昭和18年	主 要 品 別	
					品 名	数量 金額 円
貿易総額		31,570,016 円	17,413,577 円	6,617,873 円		
輸入額		854,090	2,051,629	582,829	{ 乾海月 魚干 乾魚 鮮魚 魚干 蝦 蟹 魚貝類	39 42 366 148 115 270 161,381 199,505 170,456 544,071 559,058 96,799
移入額		22,637,876	13,605,070	5,129,696		
輸出額		3,877,559	1,055,153	708,878		

移出額	4,600,491	681,725	296,470	{ 海藻類 藻類 藻類	136 35 3	107,916 42,748 39,600
入超額	15,013,916	22,975,821	4,607,177		—	—

3. 水産業者数

区分	昭和16年	昭和17年	昭和18年
専業	49,003	48,199	46,207
兼業	64,887	69,936	67,208
計	113,890	118,135	113,415

4. 漁船の種類別隻数

区分	昭和16年	昭和17年	昭和18年
汽船	8	8	12
汽動機船	1,498	1,495	1,427
動力を有せざるもの	4,291	5,907	5,581
筏	7,200	7,744	8,888
計	12,997	14,754	15,902

第二節 水産行政

一、水産奨励

本島の水産は其の地勢並に海況上等を遠洋漁業に依存せざるべからず、殊に本島は南支南洋漁場開發の基地たる枢要の地位を占むる關係上、水産獎勵の対象は南支南洋漁場を開拓実施を目標とする遠洋漁業の振興を第一義的に考慮し、兼而時局の要望に即應せしむる如く善導するの要あり、此の見地に立脚して獎勵実施し來れる処にして其の概要次記各項の通とす。

(一) 海洋漁業獎勵

(イ) 母船建造費補助

漁業用燃油の合理的運用と漁業能率増進を図る試案として、昭和十五年度に於て比島東海、セレベス海、バンガ海印度洋を漁場とする母船式鯖漁船方式の出漁を獎勵し、水産物増産獎勵費より四六、〇〇〇円補助金を交付し、之を實施せしめたるが更に昭和十六年度以降六箇年計画により右母船式鯖漁業母船六隻の建造助成を企図し、昭和十六年度に於て一隻を建造せしめたるが其後島内水産事情の推移に因り之を中止するの止むなきに至れり。

(ロ) 漁船建造補助

時局下重油其の他漁業用資材消費規正の強化に対処する爲、昭和十六年度以降一般漁船の建造獎勵を中止したるのみならず、老朽遭難等に因る代船の建造をも抑圧せる結果、島内動力付漁船は著しく弱体化するに至れり、仍て右早急復旧を図る爲、本件助成費を更に拡充強化し之を継続実施の要あり。

(ハ) 漁業改善施設補助

当予算は海洋漁業の生産著減せる実狀に対処し、島内沿岸漁業の大宗たる定置漁業の振興を策する目的を以て、昭

和十六年度に於て、その本島定置漁業は四月乃至六月の漁獲量、其の生産額約三、五〇〇吨（島内沿岸漁業総生産額の約二〇％に当る）に及び斯業の消長は島内水産食糧の需給關係に至大の影響あるところなり、然るに近年惣田鰹の洞游時期並に其の経路に變更を來し、前年も極めて不振の実情に在り、仍て業者に対し經營費の一部を補助し技術員を派遣以て漁具漁法の改良助成と共に新規漁場開拓に資せんとす。

(ニ) 漁業組合補助

時局下漁業用資材並に勞務逼迫の実情に対処し集團操業に依る物的及人的資源の効率的利用生産維持を図る爲、共同操業、共同計算、共同出荷の方法を採らしむることとし是等施策の運用を円滑ならしむる爲、昭和十六年以來島内全漁業会に対し指導員の設置を助成し來りたる処、時局の推移に依り島内需要水産食糧は之を自給自足せざるべからざる事態に立到り、沿岸漁業の増産並に生産物の円滑なる配給に關しては右指導員の活躍に期待するもの甚だ多きを加へたる実情に鑑み、昭和二十年度に於ても之を継続実施せんとす。

(ホ) 試験出漁船補助

本島水産の根幹をなす動力船漁業振興策の一環として操具漁法の改良並に新規漁場の開發を図る目的を以て、昭和十六年以降四月乃至七月本島東部沖合に於ける鯖延縄漁業及四月乃至九月台灣海峡に於ける鯖鮫類底縄漁業の出漁に付補助し來りたる処、右両漁業は何れも其の漁場漁業は何れも基地より比較的近距离に在り、而も漁獲率甚だ高く島内水産食糧の増産上極めて有効適切なるを確認し得たり、仍て昭和二十年度に於ては島内動力付漁船の減少せる実情

をも合せ考慮し、即ち小型船に依る近海底曳網漁業一組の出漁助成に止めんとす。

(ハ) 講習会講話会補助

水産関係従業員に対し技能の向上を図るは漁業能率の増進を図る上に最も緊要とする所なるを以て昭和十九年度に於ては台湾水産業会に対し奨励金を交付、之が講習会を開催せしめ又各州廳水産業会主催甲板部機関部及漁業組合実務講習会に対し之を継続実施中なり。

(ト) 指導員補助

漁業の合理的経営に依り漁業経営費の低減を図る目的を以て昭和十三年以降各州廳に奨励金を交付し右指導員(技手)各一名宛を設置せしめ來りたる処、昭和二十年度に於ても之を継続実施しつゝあり。

(ニ) 漁業共同施設奨励

昭和十九年度に於ては州廳水産業会漁業会等の施設する漁船機関診療所、ラヂオ診療所、石花菜増殖施設人工漁礁、鯉苗養魚池、漁具倉庫及漁具染場等に対し、奨励金一八、三六九円を交付し之を助成せるが、昭和二十年度に於ても略前年同様の事項を助成しつゝあり、尙右の外台東、台南、高雄及澎湖の各州廳水産業会の施設せんとする魚塩の築造に対し補助金約一一四、三〇〇円を交付の予定なり。

(三) 水産物冷蔵加工奨励

(イ) 製氷冷蔵庫建設補助

生鮮魚類の需給調節を図るを以て、昭和十八年度に於ては高雄州下湖内庄漁業会に奨励金を交付し頂茄莖に製氷能

止の現状なり。

(ロ) 水産加工設備補助

昭和十六年度以降魚市場の残滓利用を目的とする加工場又は季節的に多産する惣田鯉、鯿等を対象とする加工場の建設に対し助成し來りたるが、昭和二十年度に於ては台南州下に多産する虱目魚の加工を目的とし日光食品株式会社により建設せらるべき加工場の建設を助成せんとす。

(四) 鯉苗養成所

昭和十八年度以降養鯉の振興を目的とし鯉苗の増産奨励中の処、昭和十八年度に於ては一、〇二五万尾同十九年度に於ては一、八一〇万尾の生産に関し、夫々奨励金を交付せる結果業者間に至大の反響を喚起し本年度に於ては八、〇〇余万尾の生産を期待せらるゝに至れり。仍て本年度は生産鯉苗に対する奨励金の交付は之を中止し本予算は來年度一億尾の放養を目標とし其の生産に必要な親鯉を本年度に於て確保せしむる爲、必要な助成費(鯉苗増産施設補助仮称)に流用せんとす。

(五) 鱸皮増産奨励

時局下皮革資源の確保を目的とし、昭和十三年度に於て拓洋水産株式会社に補助金三万円を交付し、同社に年産二十万枚の鱸皮工場を建設せしむると共に昭和十四年十月皮革配給統制規則の改正に伴ひ、皮附鱸肉の販売を禁止し皮の販売者は右会社指定し、尙優良鱸原皮の増産確保の爲、奨励金を交付し極力之が蒐集に努め來れる処昭和二十年

度に於ても引続き之を実施しつゝあり。

(六) 水産皮革検査員設置費補助

前項鱈原皮蒐集に關し昭和十四年十月より關係州廳水産會に補助金各月一〇、〇八〇円宛を交付し右検査員を設置せしめ以て鱈魚休竝に剝皮の検査に従事せしめ來りたるが昭和二十年度に於ても之を継続実施しつゝあり。

(七) 澎湖島振興水産奨励

澎湖島振興五箇年計画は昭和十四年六月より馬公漁港施設、餌料補給も実施、將來漁遁難港魚貨物運搬船竝に漁船溜の一部等逐次実施せられ爲に、同廳下の水産業は面目を一新するに至りしも振興委員會に於て決定せられたる経費と配付予算とは相当の差異あり、尙資料の入手難等の事情に依り当初の事業計画に比し其の成績必しも良好なりとは言ひ難く且は業界要望の推移等あり、更に追加実施を要すべきもの多々あり、就中船溜の築設竝に沿岸漁場の造成等の実施は同廳下水産業の振興上極めて緊急なるに鑑み、昭和十九年度に於て白沙庄吉貝に船溜を設置せしめたる次第なるが本年度に於ては漁塩を築設せしめんとす。

(八) 水難救助事業補助

本島は海岸線極めて單調にして良港湾に乏しきのみならず低氣圧の衝路に當り漁船の水難事故極めて多く本島漁業の發展を阻害する所多なるものあるに鑑み、昭和十五年度以降補助金を交付し台湾水産業會各州廳水産會の共同事業として漁船相互救済事業を実施し來れる所なるが更に昭和十六年度に於ては水難漁業勞務者、救済事業案を圖し略前段同様の仕組に依り実施せしめつゝあり。

明治四十一年始めに本島漁業の萎縮不振なる実情に鑑み之が改良發達を圖らんが爲、主要漁業地に内地人漁業者の移住を奨励(自明治四十一年至同四十四年)したることあるも間もなく離散轉業若は歸國する等概ね失敗に終れり、由來本島沿革は灣澳堆礁に乏しく沿岸漁業の資源豊ならざるも沖合は到る處、好漁場に富むを以て機船漁業の必要を認め、大正十五年昭和二年の兩年度に亘り新に修築成りたる蘇澳港の利用と繁榮の爲本府支援の下に台北州は動力船漁業者四十九戸を招致せる所夏季に於ける適種漁業の發見未だなる爲、之等漁民の漁閑期の生活は一時憂慮せらるゝ所ありしも官の指導奨励の結果、現在に於ては既に生活安定を得るに至れり、之に伴ひて自由渡來の移住者相次ぎ現時の盛況を呈するに至れり。亞いで昭和七年台東廳下新港漁港修築と相俟つて更に漁業移民奨励事業を開始し初年度に於ては合宿所、漁具倉庫、製品倉庫、処理加工場、貯水庫、船揚場、漁船及漁具等の共同施設をなし先づ試験移民三組(一組三名)を招致し永住の確信を得さしむる目的の下に右施設を以て一箇年以内現地の漁業に試験的に従事せしめたる結果安住の見込ある者を家族移民に引直し、宅地の割当、家屋建築費、漁船漁具新調費、飲料水施設費医療費等補助を爲す方法を採用以後毎年此の方法を繰返し優良移民の扶植を計り、昭和十二年度迄に合計四十五戸の移住を見たり、其の結果は漁場の開發、新規漁業の勃興を促進し漸次生活の安定を得つゝあり、如上新港移民奨励事業は第一期計画完了せるも新港漁港の繁榮は一に漁業の進展に在るを以て本移民招致戸数を百戸とする方針の下に、昭和十三年度に於て更に二十五戸を追加招致し、計七十戸の移住を見たり。次に昭和十四年花蓮港第一期工事完成と相俟つて台灣東部海区の開拓を計らんが爲、本府は同年度以降四箇年継続を以て機船漁業に經驗を有し技術優秀なる内地

漁業者百戸の移住計画を樹立し、初年度たる昭和十三年度に於ては移民指導所指導員宿舍及各種共同施設（漁具倉庫、漁具染場、雨天作業場）並に昭和十四年度に入植せしむべき家族移民給與家屋二十四戸の建設をなし、昭和十四年度に於て大分、高知、鹿児島各縣下より三組二十四戸を昭和十五年度に於ては静岡、大分、沖繩各縣下より四組二十六戸を招致し、次いで昭和十六年度には高知、沖繩の兩縣下より三組二十四戸、計七十四戸の家族移民を入植せしめたり、尙昭和十八年度に於ては年次計画に基き二十六戸の入植を実施すべきものなる處、時局下諸情勢に鑑み移民招致を中止し専ら既設移民の内容充実を計ることとせり。

三、水産用資材水産業及水産物、配給統制に関する事項

（イ）水産用資材配給統制の実施

漁業用重油綿網、鰯糸、マニラロープ、トワイン及水産罐詰用空罐水産用鋼材養殖用餌肥料等の配給統制に關しては其の配給の適正を期する爲、之を水産事務として担当し實際所要量の調査査定を爲し、之が割当に關する事務は台灣水産業会をしてせしめつゝあり。

（ロ）水産業統制の実施

漁船並に漁業用資材の減少に対処し漁業の効率化を計り以て島民の蛋白質給源を確保すると共に台灣を拠点とする南支南洋漁場開發の推進力たらしむる爲、台灣に於ける主要業者たる日本水産株式会社及林兼商店を中心に在日漁業会社並に個人漁業者を糾合して台灣水産統制令に基き昭和十九年二月南日本漁業統制株式会社（資本金五千万円拂込額三千二百八十六万円）を設立し、本府指導監督の下に海洋漁業の一元的经营を行はしめつゝありたるが終戦の決定に

自由な漁業をなさしむることとせり。

（ハ）鮮魚介生産配給統制の実施

漁業用資材の制約に伴ふ漁獲減に対処し魚類の生産を計画化すると共に適正なる配給を実施して島民生活の安定を確保する爲、國民総動員法に基き昭和十七年一月鮮魚介の生産配給統制規則を制定、之に基き本府に於ては生産業者の團體に出荷命令を發し販賣業者に対し配給割当を命じ配給の割当を圖り來りたるが、昭和十九年八月台灣水産統制令に基き台灣に於ける鮮魚介並に塩干魚類の輸入業者及販賣業者を以て台灣水産物配給統制株式会社（資本金一千万円拂込額五百二十万円）を設立し右会社を本規則に基き配給機關に指定し、本府の方針に依り都市並に農村に対し最も適正なる配給を実施せしめつゝありたり、然るに終戦に依り配給統制は其の必要なきに至りたるを以て鮮魚介の配給統制規則を廢止し会社は普通商會社として水産物の自由販賣を行はしめつゝあり。

（ニ）塩乾魚類の配給統制実施

最近に於ける鮮魚介の生産減は之に對する需要の増大と相俟ちて其の需給關係逼迫し惹て塩乾魚介類の配給過程に混乱を來すの情勢に在りたるを以て本島消費の大部分を占むる移入塩乾魚類に付、昭和十八年八月台灣塩乾魚配給株式会社（資本金七十万円全額拂込）を設立し移入塩乾魚の一元的機關として内地品を確保し、之に本府の指示に依り適正配給を実施し來りたるが、前記台灣水産物配給統制株式会社設立に當り、本社は之に吸収合併し、一方昭和十九年九月塩乾魚は藻類配給統制規則を公布し、右統制会社を配給機關に指定し鮮魚介塩乾魚介類の綜合配給を実施しつ

あり、然るに戦争の終結に依り配給統制は其の必要なに至りたるを以て鮮魚介と同様塩干魚類の配給統制規則を廃止し会社をして自由販賣を行はしめつゝあり。

四、水産団体

昭和十九年四月台湾に水産業団体法の施行せらるゝや従來の水産會法に依る水産會及漁業組合の兩系統団体を統一的の團體に統合整備し、之を漁村單位の漁業會、水産業會及台灣水産業會の三階段に組織せしむるの外、新に一定の漁業者をして特別漁業會を設け得る途を拓き、漁業會と共に上級の水産業會に加入して名実共に主として沿岸漁業及養殖業の整備發達を図り、且つ會員の漁業及其の經濟の發達に必要な事業を行ひ、以て會員の福利増進相互扶助生産の増強等直に漁業繁榮に役立ち得る機關たらしむべく之が円満なる發達を期し指導助成しつゝあり。而して昭和十九年度末に於ける水産團體の設立せられたるもの左の如し。

普通漁業會	六六	特別漁業會	二	州廳水産業會	八	台灣水産業會	一	計	七七
-------	----	-------	---	--------	---	--------	---	---	----

九、水産実務教育
本島に於ける水産技術者養成の目的を以て昭和十一年其の創設を見たる本府水産講習所は逐次其の内容を充実に、昭和十二年度に於て新校舍及附属建物設備並に練習船の建造を以て一應施設の完了を見たり。本所は國民學校高等科卒業程度の甲種水産學校の内容を爲すものにして漁撈製造養殖の三科とし毎年度の募集人員は漁撈三十名、製造十名、養殖十名とす。然るに昭和十八年台灣教育令を改正せらるゝに當り之を台北州に移管州立実業學校に改編し現在に至る。

第三節 水産試験調査事業

本府の水産試験機關は明治四十三年に水産試験費の計上を見、試験船凌海丸（四〇屯六五馬力）を建造し本島近海の漁業試験並に海洋調査を実施せるに始り其の後、大正二年新竹州桃園郡に淡水養殖試験所又澎湖廳馬公に重要貝類養殖試験所を設置す。大正七年後者を廃止し台南市に鹹水養殖試験所の設置を見、更に大正十二年台北州基隆市に鰹節製造試験所を設け、越えて昭和四年右分立せる機關を整理統合の上、殖産局附属水産試験場を設立し、支場を基隆及台南に置き基隆支場には漁撈製造及海洋調査に関する調査試験を掌らしめ、台南支場に於ては淡水及鹹水兩水族の養殖試験を分掌せしめ事業の分野を瞭然たらしむると共に試験機能の發揮に努め來りたるが、更に昭和六年凌海丸を廃止し新に照南丸（四一七屯七〇馬力）を建造し、同時に試験機關充實の爲、職員を増置を図り主として南方漁場の調査試験に任せしめたり、昭和八年基隆支場を本場に改め漁撈、製造、海洋調査並庶務の四部を置き茲に一應の整備を見るに至れり。次で昭和十四年には本府水産皮革の増産施設と相俟て鱗皮鞣革法の化学的試験機關として高雄支場を設置し、之が研究に従事せしめたり。

然るに本試験場は從來殖産局に附属し其の予算は臨時に計上せられ居りたるも台湾に於ける水産業の重要性に鑑み試験調査機關の整備確立を図ることなし、昭和十六年度に於て經常部予算に組替へ機構をも漁撈、海洋、水産加工養殖及庶務の四科一課（台南、高雄兩支所を設く）とする獨立機關たる台灣總督府水産試験所の設立を見たり。

第十一編

商工業、台拓、米穀管理、工業、電氣、鈷業

第一章 商業

第一節 概 説

昭和十二年日華事変勃発するや本島に於ける経済は之を起点として徐々に戦時統制経済の段階に入り戦争の長期化すると共に、之が経済に及す重圧は漸次深刻となり次で太平洋戦争勃発に依り、國家の人的物的総力を戦争遂行に結集する爲に産業経済の完全なる統制を不可欠とする段階に立到りたり。本島に於ても中央の方針に基き物價、賃金、労務の徹底せる統制を爲すと共に各種軍需並に國民生活必需物資の生産、輸入、配給の統制を強化する外、更に企業経営に対しても統制整備を行ひ、本島産業経済は茲に完全なる國家の統制の下に運行せらるゝに至れり。然るに終戦に伴ひ右の戦時経済統制の目的は全く失はるゝに至りたるを以て本府は戦後に於ける國民主要食糧を確保し、悪性インフレーションの進行を防止する等急激なる経済の混乱を惹起せしめざる様慎重なる考慮を拂ひつゝ島民の統制に面する重圧感を除き、経済社会の明朗化と活潑化とを図る爲、可及的速に統制を撤廃緩和するの方針の下に所要の措置を実施しつゝあり。即ち生鮮食糧品その他副次的食糧品の價格統制を撤廃し各種配給統制をも亦撤廃し各種統制機関の整理を行ひ、企業許可令及会社経理統制令の適用排除を図ることに依り企業経営の自由を復活せしめたり。

第二節 企業統制

企業に対して採られたる統制としては第一に挙ぐべきは企業許可令あり、企業許可令は戦時下生産配給機構の合理的整備に資せんとするの趣旨に在り、本令は昭和十六年十二月より本島にも之を施行せり、之に依り本府に於ては戦争遂行に適せざる企業の設立を抑止するの方針を採るに至り次で企業整備令の施行を見、昭和十九年当初より約一箇年間に亘り企業整備を断行したるも事實は本事業の社会経済機構に及ぼす影響が頗る甚大なるに鑑み遂に本令の発動を見るに至らず、本島企業整備要綱を設定し之に依り可及的に不必要なる圧迫摩擦を避けつゝ此の大事業の遂行を期せり。企業整備は戦時不急不要の企業を消極的に防がんとする企業許可令の施行を以てしては戦争遂行に適せざる段階に應じ実施せられたるものにして積極的に戦力の増強、主として物資配給の適正円滑化竝に商業界に於ける不急不要人員の重点部門への轉用を目的とせるものなり、之に依り本島に於ける商企業体は約半数を減じ配給部門の戦時態勢は著しく面目を一新せり。

二、次に企業の組織に付特筆すべきは統制会社の設立及商工組合の結成なり、統制会社は統制会社令に依り主として卸賣企業就中総動員物資其の他島民の最低生活確保を完からしむるに必要な物資即ち木材、石炭、金属、砂糖、ゴム等を始め、医療医薬物資、繊維、生果、水産物、紙文具、雜貨等の諸物資を取扱ふ重要な企業に付設立せられたり、亦商工組合は統制会社の制度の活用を適當とせざる中小商工業部門に付廣く之を結成せしめ以て当該部門の企業経営の徹底を期し今日に至りたり。

三、同最近に於ける本島の会社企業の現況を見るに株式会社は一、一三二社（総数の六一、七〇％）、資本金総額八億九千七百七十六万五千円（総額の九五、九二％）、合資会社は五七六社（総数の三一、四二％）、出資金総額三千十八万円（総額の三、二五％）、合名会社は百二十六社（総数の六、八八％）、出資金総額七百七十四万円（総額の〇、八三％）有限公司は六九社（総数の三、七六％）、出資金総額五百五十六万円（総額の〇、六％）なり。茲に最近十箇年に於ける各種会社（第一表）新設会社（第二表）を表示すれば次の如し。

各 年 末 現 在 会 社 十 箇 年 比 較

（單位千円）

年次	組 織	株 式 公 司		合 資 公 司		合 名 公 司		有 限 公 司		計		
		社 数	資 本 金	社 数	出 資 額	社 数	出 資 額	社 数	出 資 額	社 数	資 本 金	
		總 額	拂 込 額							總 額	拂 込 額	
昭和 8 年	444	447,965	285,210	475	18,066	70	7,702	—	—	989	472,733	310,978
" 9 "	448	444,339	290,720	532	16,833	82	8,249	—	—	1,062	469,441	315,822
" 10 "	462	451,235	301,504	532	16,613	93	12,817	—	—	1,087	480,655	330,934
" 11 "	542	557,197	386,661	593	23,080	97	12,650	—	—	1,232	552,929	422,391
" 12 "	636	568,269	394,506	557	22,979	103	5,295	—	—	1,296	596,543	422,780
" 13 "	757	674,551	400,220	636	22,544	119	5,835	—	—	1,512	702,946	428,617
" 14 "	919	764,719	435,387	599	24,649	123	7,798	—	—	1,641	779,126	467,794
" 15 "	1,096	830,688	515,012	582	26,249	153	7,284	7	1,310	1,819	865,532	549,856
" 16 "	1,218	864,137	565,780	597	28,414	131	7,519	45	3,820	1,946	900,456	549,856
" 17 "	1,131	891,765	630,785	507	24,612	126	7,741	69	5,573	1,833	929,619	668,712

新設会社十箇年比較

三十四
(單位千円)

年次	組織	株式會社		合資會社		合名會社		有限會社		計	
		社數	資本金 總額 拂込額	社數	出資額	社數	出資額	社數	出資額	社數	資本金 總額 拂込額
昭和8年		41	6,463 5,821	107	1,408	19	221	—	—	167	8,192 5,550
" 9 "		40	5,729 2,321	109	1,318	13	359	—	—	162	7,406 3,998
" 10 "		28	22,214 13,426	96	1,845	15	302	—	—	169	24,361 15,609
" 11 "		91	48,721 24,859	126	9,236	27	1,103	—	—	244	55,060 31,198
" 12 "		117	59,007 11,556	100	1,948	13	605	—	—	230	41,560 14,109
" 13 "		133	69,503 25,329	104	2,453	20	417	—	—	257	72,373 28,199
" 14 "		208	77,942 26,964	89	2,153	16	1,348	—	—	313	81,443 30,465
" 15 "		169	35,670 17,216	65	2,496	22	677	7	1,310	263	40,154 21,700
" 16 "		140	50,836 26,821	53	1,585	13	658	34	2,270	240	55,351 31,335
" 17 "		181	35,274 24,708	10	418	4	221	24	1,652	191	37,565 26,999

四、右の企業統制は終戦に伴ひ戦争遂行の目的を失ふに至りたるを以て、其の大部分は撤廃緩和するの方針に出で戦時産業の平和産業への迅速活潑なる移行並に國民動員の円滑なる復員を目途とし統制會社令及企業許可令の適用排除を爲し以て戦前の自由企業の復活を可能ならしむると共に各種物資の生産配給の統制の撤廃緩和と相俟つて商業界の明朗活潑なる再建を図ることとせり。

第三節 物資統制

第一期

曩に日華事變の發生を見るや中央に於ては輸出入品等に対する戦時措置に関する法律を公布施行し、輸出入品の制限を実施し之に伴ひ、各種物品の使用を制限せり。本島に於ても右に順應し、皮革使用制限規則、綿製品製造制限規則、毛製品ステープル、ファイバー等混用規則、ゴム使用制限規則等を公布施行し國內向民需品中不急不要品の製造を制限せり。

第二期

昭和十六年太平洋戦争の發生を見るに及び本島に於ける生活必需物資も漸次減少を示せるを以て從來の消極的な統制より積極的統制へと移行せり、即ち生産配給消費と一貫し之が統制を実施し以て島民生活の安定を計れり、本島に於ける其れと物資の必要度合の強弱の相違物資の種類の相違等に依り配給統制の方式及強弱を異にす。

一、生活必需物資に付ては其の殆んど大部分が移入品たることの結果、船腹の減少に伴ひ此等移入品は殆んど移入杜絶の状況にありたるを以て島内の需給は之に伴ひ急速に逼迫の度を増加すべきこと、又空襲に基く生産工場の被害をも考慮し、之が配給に当りては重点配給の方針に依り必需物資の最少限度の確保を計れり。昭和十八年以降の需給状況左記の如し。

1. 纖維製品

種 別	昭和18年中販賣金額	昭和19年中販賣金額	昭和20年中予想金額
織物	21,160,182 円	10,225,298 円	1,523,855 円
既製品	12,480,974	3,533,105	4,052,131
生産資材繊維品	1,605,501	1,272,203	532,976
計	35,246,697	15,030,606	6,108,962
2. ゴム製品			
品 名	昭和18年配給実績	昭和19年配給実績	昭和20年予想量
地下足袋	820,000足	427,000足	336,000足
布短靴	245,000足	192,300足	120,000足
自転車タイヤ	106,000足	552,250足	295,000足
	119,200本	106,000本	20,000本
3. 皮革製品			
品 名	昭和18年配給実績	昭和19年配給実績	昭和20年予想量
革靴	201,960足	167,241足	100,000足
4. 紙文具			
品 名	昭和18年配給実績	昭和19年配給実績	昭和20年予想量
洋紙	3,296万封度	2,498万封度	1,200万封度
洋紙筆	445,962箱	362,000箱	300,000箱
	12万冊	4万冊	1万冊
5. 厨房用品			
品 名	昭和18年配給実績	昭和19年配給実績	昭和20年予想量
釜	57,685箇	10,208箇	5,000箇
茶碗	4,000,000円	3,000,000円	1,000,000円

二、取扱業者及最終消費者が明確なるものに付ては極力法令に基く配給統制方式は之をさけ府議決定の要綱に基き配給統制をなせり。

三、空襲に依る被害を予想し台湾重要物資営團をして各地に罹災者及船舶遭難者用の救護物資を備蓄し罹災救助に遺憾なきを期せり。

第三期

終戦に伴ひ配給統制は比較的戦禍を蒙ること少く且物資も亦著しく逼迫するに至らざる本島に於ては、其の要なきに至りたるを以て之を廃止し以て民需物資の生産意欲の向上を期しつつあり。

第四節 物 價 統 制

一、戦時に於ける物價の昂騰は健全なる財政的措置を不可能ならしむると共に國民生活を危殆ならしめ以て國民經濟の基礎を失はしむるものなるを以て事変發生以來、浮動購買力の吸収、貯蓄の奨励、物資の生産確保、配給の合理的消費の規整等極力物價昂騰抑制の爲め対策を講ずると共に直接的には以下述ぶるが如く、價格の統制を行ひ以て戦

時經濟の運営竝に國民生活の安定に努力し來りたり。即ち昭和十二年八月に先づ暴利取締令を公布、次で昭和十三年九月物品販賣價格取締規則を制定、不取敢綿毛人造纖維製品、皮革、鉄屑等數種の物品價格を指定せるも戦争の長期化特に第二次欧州大戰の勃發後は物價騰貴の傾向は一般に著しく、而してかゝる物價騰貴の放任は予算遂行を阻害し、産業基礎を脆弱にし又國民生活の安定を脅すに至り、之に対処する爲には箇々物品の價格停止、或は公定價格の設定等を全面的に擴張するを必要とするも其の爲には相當の時日を要し、且一般的騰勢顯著の際に於ては不徹底の嫌あるを以て、昭和十四年九月十八日物價其の他の一般的價格引上停止、所謂九・一八停止令を断行することとし價格統制令の制定公布を見るに至れり。

二、價格統制令に依り統制の対象とせられたるものは價格、運賃、保管料、損害保険料賃賃料又は加工賃にして全般的に昭和十四年九月十八日（指定期日）以上に引上げることが禁ぜられたり（停止價格）但し商工農業者等の組合その他之に準ずる者にして指定期日の額に代るべき額に定め行政官廳の認可を受けたるときは其の額を以て指定期日に於ける額と看做し（協定價格）又指定期日に額なき場合、又は必要なる時は台灣總督其の額を定め（公定價格）尙指定期日に於ける額ある場合に其の額著しく不当と認めらるゝ場合に於ては行政官廳、その引下を命じ得ることとし物價の統制に万全を期し得ることとせり、然し乍ら其の施行の当初に於ては本島の特種事情に胚胎せる逆轉問題、物價割高等の各種問題あり、就中本島に於ける生活必需物資の大部分は之を内地移入に俟つ關係上移入品と離れて本島の物價対策を考慮し得ざるものありて其の調整に相當困難ありしも各地域又は業者間の價格の凹凸を是正する爲、關係業者間に自肅價格を協力せしめ之を認可し、又眞に己むを得ざる特種事情に基くものには例外許可を行ふ等の應急

を以し來り其の決定を見たる件數並に点数は別表に示せる通りなり。

三、請負料、修繕料、手間賃等は当初價格統制の外に置かれたりしが之等各種の料金は直接又は間接に一般物價に影響を與へ之を放任するときは物價統制上支障を來す虞ある爲、昭和十六年國家總動員法を改正、從來の價格等の外、更に修繕料其の他の財産的給付に付ても適當なる統制を爲し得ることとせり。

四、地代及家賃に付ては一般物價統制と密接なる關聯を有し且又銃後國民生活の安定を期する爲、昭和十四年以降地代、家賃の統制を行ひ既存の地代、家賃は原則として之を据置き唯その著しく不当に高額なるものは適當に之を修正すると共に將來新に生ずる地代、家賃に付ては各地方別に適正標準額を定め以て高額なる地代、家賃の抑制を図り且貸地、貸家の経営に適正なる利潤を認め、その供給を促進することとせり。

五、土地建物の價格に付ては指定期日に於ける價格決定の方法無き爲、價格統制令より除外せられしが生産力拡充に因る産業勃興並に軍需工場の膨脹に因る需要の激増、先高見越に依る賣惜み等の諸原因に因り、或は土地分譲又は土地建物の取引に於ける投機的傾向に因り其の價格は急激なる昂騰率を示すに至り、之を放置し置くときは地代、家賃統制令の維持勵行を困難ならしむるのみならず時局に緊要なる事業に必要な土地又は建物の取得に法外なる特價を要求せらるゝこととなり、延いては生産費の昂騰を招き低物價政策にも背馳する結果となるを以て、昭和十五年十一月宅地建物等價格統制令公布せられ、同年十二月本島にも施行を見るに至り一般宅地建物の價格の不当なる値上を防止するを得たり。

六、斯くて戦争進展に伴ふ経済界の情勢に即應し物價の安定を図ると共に他面、金、白金、鉛、銅其の他の非鉄金屬、皮革、石油、綿、羊毛等の重要物資確保の爲、之等の不急不要方面への使用製造販賣等を禁止し、配給機構を整備して物資の需給調整に努め來りしが更に之を徹底する爲、奢侈品並に所謂規格外品の製造販賣を禁止制限すべく昭和十五年八月奢侈品等製造販賣規則を制定公示し物品を指定して其の製造又は販賣を制限し爾來必要に應じて其の適用範圍を拡充し來りたり。

七、以上の如く戦時経済運営上重要な物價の安定に付ては各種の措置を講じ來りたるが物價調整に當りては一般経済界の動向を知悉する要あるを以て、昭和十三年には台灣物價中央委員会を設けると共に、昭和十五年には全島主要なる地に物價調査員を置き商工会等の代表者等を之に充て経済界の推移と物價統制の実施並に其の影響等を調査せしめ以て其の対策に万全を期し來りたり。

八、昭和二十年八月十五日大詔煥發せられ、今次大戰の終結を見るや比較的戦災を蒙ること少く且つ民心安定せる本島に於ては急激なる変動を惹起せしめざる配慮の下に自由なる平時の経済体制に復歸せしむべく比較的弾力性に富む各種物資に付價格統制は之を撤廃緩和する等必要な各種の措置を講じつゝあり。

價格等統制令に依る事務處理狀況

處分別	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年
額の指示	件 1	件 10	件 254	件 436	件 不明	件 不明
例外許可	16	98	112	224	〃	〃

品名	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年
米	8 点	31 点	15 点	41 点	〃	〃
小麦	5 点	17,471 点	81,206 点	49,795 点	17,298 点	10,432 点
大豆	1 点	2,734 点	15,801 点	9,532 点	7,430 点	2,710 点
金	3 点	6,597 点	31,337 点	16,796 点	2,524 点	2,351 点
化学工業品	1 点	1,751 点	7,275 点	1,233 点	1,339 点	512 点
燃料	1 点	—	156 点	54 点	61 点	—
食料	2 点	1,648 点	1,756 点	531 点	660 点	217 点
木材	1 点	31 点	3,708 点	12,191 点	2,790 点	2,987 点
雜品	1 点	4,710 点	21,173 点	9,458 点	2,494 点	1,655 点

第五節 貿易

日華事變の發生に依り一時杜絶せる対華貿易は占領地域の擴大並に現地物價高の影響に因り円域向輸出の増加の傾向となりたる爲め、昭和十四年十月府令第百十六号を以て臨時輸出入許可規則を公布し輸出入貿易の統制を行ひたり之台灣に於ける貿易部門に対する統制の始なり、爾來五箇年間國際情勢の變化並に國內態勢の強化に伴ひ當時の情勢に則應すべく前後四回の改正を行ひ來りしが、昭和十八年二月府令第十九号を以て貿易統制令施行規則を全面的に改正すると同時に右施行規則と競合する商品別貿易關係法令の改廢をなし、併せて本貿易の一元的調整機關として台灣貿易会を指定し、本島高度計画交易の円滑なる運営を期し來りたるも時局は益々戦力の増強、産業の開發並に民生の

安定を要請すること切なるものあるも國內各地域間の物價の高低は円滑なる物資交流を阻害し交易計画遂行上多大の支障あるを以て同年三月法律第八四号を以て爲替交易調整特別會計設置等爲替交易調整法を公布四月一日より内外地を通じ実施せらるゝに至れり。本島に於ても之が実行に万全を期する爲、從來の台灣貿易会を改組し昭和十九年一月律令第一号を以て「台灣重要物資管理令」を公布國家管理の充實を期しつつありしが同年八月台灣戰場態勢強化整備要綱に基き從來本府に於て処理し來りし許可承認事項中計画並特別非常措置關係を除き全面的に權限の委譲を行ひ本島貿易の迅速化並調整機關の強化に努め今日に至れり。

最近五箇年問貿易対照表

(單位圓)

	昭和 19 年	昭和 18 年	昭和 17 年	昭和 16 年	昭和 15 年
輸出	95,513,426	108,189,878	103,510,715	114,108,675	106,766,866
區域	83,824,610	92,589,287	97,283,098	109,937,434	94,153,487
南洋	11,190,426	14,837,114	4,731,327	742,916	552,273
其他	498,390	763,477	1,496,290	3,428,325	12,061,206
輸入	43,437,087	46,796,951	46,899,872	52,664,796	56,060,037
區域	40,280,500	40,882,338	42,897,091	36,953,163	41,144,862
南洋	3,038,191	5,723,085	3,801,499	5,795,865	5,692,745
其他	118,396	194,528	201,285	9,479,702	9,222,430
合計	138,950,513	154,989,829	150,410,590	166,773,471	162,826,903

第二章

台灣拓殖株式會社

第一節 概 説

台灣拓殖株式會社は本島及南支南洋に於ける拓殖事業の經營及拓殖資金の供給をなすを目的とし、昭和十一年台灣拓殖株式會社法に依り設立せられたるものにして此の資本金三千萬圓、内半額は政府之を出資し、台灣に於ける官有地官有未墾原野山林等の土地中、價格一千五百萬圓に相当するものを以て之に充てたり。同社は昭和十一年十一月二十五日創立總會を開催し、同年十二月五日より業務を開始し、爾來銳意各般の調査を行ひ時局に順應逐次之が具体化を図り實現に邁進しつつあり、然るに國際情勢の推移は南方共榮圈に於ける我國必須の重要資源の開發及本島に於ける急進なる高度國防國家体制の整備を焦眉の急務とせられたるを以て更に島内に於ける生産力の拡充並に海外事業の擴張を図り以て時局の要請に順應し、且創立の使命を達成する爲には資本増額の必要に迫られ其の増資を昭和十七年六月三十日の定時株主總會に諮りし處、満場一致可決せられ是に於て増加資本金三千萬圓、内千五百萬圓は政府の現物出資とし、残り一千五百萬圓（參拾萬株）を昭和十七年七月五日現在同會社株主名簿に登録せられたる株主に対し其の所有株一株に付一株の割合を以て割当たり、目下実行中の事業概要略左の如し。

第二節 島内事業

第一項 社有地の貸付

政府出資土地は創立当時の現物出資一万五千余甲と昭和十七年十月資本増加に当り政府より現物出資を受けたる二千六百余甲、計一万七千六百余甲なり、此の間公用又は其の爲賣却処分をなしたるもの七百九十一甲余にして現在に於ける総面積は一万六千八百六十一甲余なり。

第二項 開墾事業

当社は創立当時に樹立したる開墾計画に基き官有未墾原野中開拓上急を要し、而も利用上適切と認めらるゝ土地に對しては拂下又は貸下を出願目下鋭意開墾中にして墾成地中の西部各事業地には総督府の米穀増産計画に呼應し主として水稻を栽培し、東部各事業地には綿花苧麻及蓖麻等を栽培中なり、現在出願中の土地は二万三千二百二十六甲余なり、此の外日糖興業株式会社との共同事業に依る崙背原野の開墾事業は総面積千二百二十七甲にして耕地面積八百七十二甲、総工費二百九万七千円、此の内國庫補助金五十二万二千八百円にして昭和十五年六月工事に着手、同八年六月完成し目下水稻、甘蔗、甘藷等を栽培中なり。

第三項 干拓事業

干拓に依る耕地の造成は本島農産資源の拡充強化上未墾原野の干拓と併行し之を実施するの要あり、本島の西部海岸は自然の遠浅をなし砂州の新生する所多く干拓適地なるを以て同社は創立当初約二万甲の干拓に依る耕地造成計画を樹て、先づ昭和十二年度に於て台南州下斯港地先海捕七〇四甲の干拓工事を起し十七年十月竣功を見たり。本工事に要したる総工費は百二十五万一千余円にして此の内國庫補助金十六万五百円なり、本干拓工事竣功に依り得たる五

土地の隣接地面積二、二六四甲にし對総工費三百三十万円を以て工事に着手せるが諸種の事情にて一應昭和十七年度を以て打切ることとせり、尙此の外十六年度より日糖興業株式会社と共同經營にて台南州下崙背面積一、七〇〇甲に對し総工費三百八十九万八千二百円を投じ十九年三月之を竣功せしめ目下水稻及甘藷を栽培中なり。

第四項 栽培及造林事業

一、事業地及干拓地の經營 同社の直營事業地として官有貸下地及干拓地

都蘭事業地	台東廳新港郡都蘭庄	七七七甲	初鹿事業地	台東廳台東郡卑南庄	八七〇甲
萬安事業地	同 開山郡池上庄	八四三甲	新開園事業地	同 開山郡池上庄	九五五甲
池上事業地	同	八七七甲			
鶴岡事業地	花蓮港廳鳳林郡瑞穗庄	七一四甲	大里事業地	花蓮港廳玉里郡富里庄一、	〇六〇甲
長良事業地	同 玉里郡玉里街	四六九甲	新港事業地	台南州港北郡口湖庄	七〇四甲
新化事業地	台南州新化郡玉里庄	南化庄 楠西庄 一、	九四〇甲		
銃櫃事業地	台中州新高郡魚池庄	頭社庄	九〇〇甲		
獅潭事業地	新竹州大湖郡獅潭庄	六〇〇甲			

を經營し主として本府の奨励に依る作物を栽培中にして初鹿、都蘭、新開園事業地は棉花纖維作物及相思樹、池上事業地はデリス、鶴岡、多里事業地は苧麻、竹林、長良事業地は煙草、新港事業地は米、甘藷、新化事業地は甘蔗地の

他雜作、銃櫃事業地は茶桐、獅潭事業地は桐を各事業地に振当たり、本年度主要作物栽培面積は水稻七〇甲、棉花八〇甲、煙草五四甲、苧麻二五三甲、デリス八五甲、マンバリヘンプ五甲、ナタールバーク五甲、桐九〇甲、想思樹一三〇甲、竹二五甲、紅茶五甲等とす、猶紅茶は台中の銃櫃事業地に於て年二〇〇甲宛のマツカム種茶園の経営を目論見しが時局の急轉に依り、暫く之を現狀維持に止め形勢觀望中なり、又甘藷は時局下食糧物資として重要なのみならず且又同社嘉義化学工場向原料としても尠多なる数量を必要とする爲、本府の増産計画と相並び一層増産の必然を痛感し同社自らも事業地及社有地に於て六、五〇〇甲の栽培計画を樹立し目下之が計画及実施中なり。

一、苧麻棉試驗工場

従前は苧麻産経営に當りて全く廢棄物として顧みられざりし短莖苧麻及屑苧麻等を之が簡單に棉狀化する方法が発見せられてより同社は鶴岡大里兩事業地に於ける短莖苧麻を收集し是れを棉狀化し以て國策纖維資源の増加を図ると共に栽培業者の收益増加を慮り、栽培事業の附屬設備として本年花蓮港廳下瑞穗庄に該工場を建設し製造試驗中なり。

第五項 鈹 業

(イ) 三德炭鈹

本鈹区は新竹桃園郡龜山庄及台北州海山郡鶯歌街に亘る面積二五四、〇一三坪あり、埋藏量豊富にして運搬至便なり、又炭質は油炭系に屬し、コークス原料に價する優良炭なり、当社は昭和十五年之を買收し隣接地に獲得すると共に諸設備の擴張を爲し増産の実を挙げつゝあり。

(ロ) 三 八 鈹

台北州海山郡鶯歌街に在り鈹区面積三六二、〇九二坪埋藏量相当あり炭質優良にして芝炭素に屬し運搬亦至極便利なり、昭和十六年九月之を買收し経営をなしつゝあり。

第六項 移 民 事 業

花蓮港台東兩廳下の大里、都蘭、初鹿、新開園、万安各事業地に西部より本島人三五三戸を移住し開墾及苧麻綿、蓖麻、甘藷等の栽培に従事経営中なりしが昭和十五年九月末の暴風雨に依り住家倒壊し耕作物の被害甚大なるものあり爲に一部の者は退去するに至り昭和十八年二月現在二九七戸（一、五六五名）なり。

第七項 貸 附 及 投 資

同社の資金貸付に就いては台拓資金供給規則に依り之を行ひ移民其の他一般（個人）に對し十九年八月末日現在に於て金額三百六十九万七千余円にして低利貸付を爲し時局下緊要なる農鈹産物の生産拡充を極力援助しつゝあり、又一面左表に示す如く各種事業に投資なしつゝあり。

島内投資一覽表 (昭和17年8月末日現在)									
会 社 名	12年度投資額	13年度投資額	14年度投資額	15年度投資額	16年度投資額	17年度投資額	計		
台灣棉花株式會社	750,000	—	—	—	—	—	750,000		
台灣國產自動車株式會社	25,000	25,000	—	—	—	—	50,000		
台東興發株式會社	2,500	—	—	1,900	—	—	4,400		
							三八七		

台湾バルテ工業株式会社	6,250	—	6,250	—	—	—	12,500
台湾野蜜株式会社	62,500	—	62,500	—	—	—	125,000
台湾産産興業株式会社	—	837,500	376,875	△439,350	—	—	875,850
南日本塩業株式会社	—	1,200,000	600,000	750,000	240,000	210,000	3,000,000
東邦金属製錬株式会社	—	125,000	—	—	75,000	—	200,000
星規那産業株式会社	—	250,000	—	142,000	—	—	392,000
台湾化成工業株式会社	—	—	443,750	443,750	642,000	21,400	1,743,500
拓洋水産株式会社	—	—	1,000,000	—	—	—	1,000,000
新興窒素工業株式会社	—	—	62,500	125,000	62,500	△250,000	—
南日本化学工業株式会社	—	—	937,500	937,500	—	—	1,875,000
台湾産金株式会社	—	—	250,000	—	—	—	250,000
台湾卑寧興業株式会社	—	—	—	50,000	—	—	50,000
南日本汽船株式会社	—	—	—	75,000	37,500	—	112,500
台湾通信工業株式会社	—	—	—	—	105,000	—	105,000
日本協同証券株式会社	—	—	—	37,500	—	—	37,500
台湾石炭株式会社	—	—	—	—	500,000	—	500,000
台湾石綿株式会社	—	—	—	—	600,000	—	600,000
台湾石油株式会社	—	—	—	—	62,500	—	62,500
台湾故銅鉄屑統制株式会社	—	—	—	—	250	—	250
計	847,250	2,437,500	2,994,625	2,530,525	2,764,100	174,000	11,747,000

備考 1. △印は投資回収高を示す 2. 昭和17年度投資額は昭和17年8月末日現在とす

第三節 島外事業

第一項 廣東水道事業

廣東攻略後軍に於て水道の復旧を計画し本府に協力を求められしを以て本府は之が経営を同社に下命せし処、同社は多数職員を派遣し昭和十四年四月十日より営業を開始したるが昭和十五年十月、中國側に返還し既投資額及之に附帶する費用を以て之を借款とし経営を更めて同社に委託せられ爾來漸次順調なる経営を続け居れり。

第二項 海南島関係事業

一、農林開發事業

(イ) 一般概況

同社は海南島進出以來夙に農林事業に重点を置き海口近郊たる秀英及瓊山に苗圃を三亞に蔬菜園を開設し、本島在來諸品種の考察優良品種の搬入試作農民の技術指導を行ふと共に、各地に於て農林事業に關する基本調査をなし積極的開發に當り數年有餘人員資材等の整備せらるゝと共に事業は順調に進捗し水稻(蓬來種)甘蔗、蔬菜其他纖維作物の栽培に多大の成果を收めつゝありたるが同社は昭和十九年四月資本金壹千万円を以て台拓海南産業株式会社を設立し之が事業を踏襲せり。

(ロ) 秀英瓊山農園

昭和十四年五月より海口近郊秀英及瓊山に苗圃を設置し特用作物(棉花、黃麻、デリス、キャッサバ、サイザル等)

の試作試験、優良品種、採取其の他蔬菜の栽培配給、緑肥の栽培を爲しつゝあり。尙農業基本調査として氣象、土壤、病虫害、農事旧慣調査をなすと共に近郊農村に優良種苗の実配付及農業技術実施指導を行ひつゝあり、尙瓊山等に農園は軍用蔬菜の栽培を目的とし経営中なり。

(ハ) 三亞蔬菜園

三亞港を中心とする地域は北部同様蔬菜の欠乏甚しく之が爲、同社は昭和十四年十月より三亞方面に蔬菜供給の目的を以て三亞港市に十町歩の蔬菜園を開設し目下軍官民に対し新鮮なる蔬菜の栽培配給を目的とし本島在來種及台灣内地産優良種の栽培に鋭意努力中なり。

(ニ) 陵水農場、南橋分場

昭和十四年九月農政委員会の認可を得たるものにして陵水事業地六万四千町歩なり、十五年二月陵水市に事務所を開設し目下水稻、サイザル、甘藷、蔬菜其の他纖維作物を主体として現作業進行面積一、二〇〇町歩余にして特に水稻にありては蓬來種栽培に多大の成功を収め現下重要な食糧増産に寄與しつゝあり、南橋分場は昭和十五年五月開設せるものにして事業地総面積一、五〇〇町歩なり、主として林産資源の確保を期すべく目下ゴム、ナターールバーク、安南漆、油桐等の撫育管理を行ひつゝあり。

(ホ) 三亞農場、馬嶺分場

三亞農場は食糧増産確保を目的とする水稻栽培を主眼とするものにして昭和十六年四月開設し、総面積一千町歩にして目下全面積に対し作業進行中なり、馬嶺分場は昭和十四年九月陵水農場と共に農政委員会の認可を得たるものに

二、自動車事業

(イ) 一般概況

交通の整備は海南島經濟開發の先決要件たるに鑑み同社は本島占拠後直ちに自動車事業に着手せるが營業開始以來漸次治安の回復に伴ひ海口、三亞を中心に營業路線の拡張を計りつゝありしが昭和十七年二月一日陵水邁寧間路線開通し茲に島内循環路線の完成を見るに至れり。現在総路線三〇線一、八二七杆に及び海口、三亞を中心としてバスを定期に運行し其の他貨物の運輸に多数の「トラック」を配備し交通運輸に万全を期しつゝあり。

(ロ) 自動車講習所

海南島青少年にして日語講習所出身者を集め之に技術を修得せしめ同島の交通事業に従事せしむることは一面宣傳工作と平行し職を與ふると共に同島の開發に寄與し且事業の進展に伴ふ技術労力の自給を計るべく十四年十月一日自動車講習所を開設し爾來既に四回に亘る修了者八十名を見るに至れり。

三、其の他の事業

(イ) 建築事業

海南島産業開發に必要な勞力物資の供給は治安地域の拡大と共に益々増進し邦人の進出日を逐ふて増加の傾向にあり、而して邦人活動の本拠をなすべき各種建築物の造営は最も緊急を要する状態なる処、現地三省連絡會議に於ては同社に建築事業を下命せられたるに依り昭和十四年七月より事業に着手せり、爾來本島の産業開發進展に伴ふ各開

発会社の事務所、住宅等の新改築工事漸次増加の傾向を示し今次榆林都市計画施行に当り土木、建築工事は多忙を極むるに至り第一期に於ては土木約五十万円、建築約二百万円程度の工事あり。

(ロ) 井戸堀工事

台北市寺田商会を招致し海南島人職工をも使用せしむる井戸堀工事にして既に海南島進出邦人に必要なる数量の完成を見たり。

(ハ) 煉瓦製造

軍の下命に依り三亞方面にて一ヶ月約二十万個の製造能力を有する工場を設置すべく台湾より煉瓦工約二十名を招致し海南島人苦力数十名を使役し榆林と洋田にて施工に着手し十四年十一月最初の製品二万三千個の製造に成功し目下第一工場のみにて月産約四十万個を製造しつつあり、第二、第三工場完成の暁には月産百五十万個の予定なり。

(ニ) 製氷事業

海南島に於ける氷の供給は在住邦人並に同島人の日常生活上及保健衛生の必需品にして一日も其の遷延を許さざるものあり、同社は軍官廳、病院其の他一般需要者に対し低廉且衛生的なる氷を供給する目的を以て海口に製氷工場を建設し差当り日産九噸の「デイズル」製氷機械を据付け、昭和十四年十一月より事業に着手せり。而して現在製氷高は夏期需要期に於ては一日五噸―六噸、冬期閑散期三噸―三・五噸なりしが今回更に五噸製氷機を増設し本事業の目的達成に努力中なり。

(ホ) 生産事業

海口市一円を区域として新鮮且衛生的なる獸肉の供給を目的とし海口市に常時牛二〇頭、豚五〇頭を解体し得る屠殺場を建設し昭和十四年七月より業務を開始せり、而して業務開始以來逐年島民の屠殺利用向上し昭和十六年に於ては一部増設を実施せり、尙本事業目的達成の爲將來主要都市に対し漸次之が設備を進める予定にして本事業に附帶して軍に対し牛肉及豚肉の供給も行ひつゝあり。

2、酪農事業

海口市を中心として派遣軍及病院並に一般邦人に対して新鮮牛乳を供給する目的の下に酪農事業を経営中にして現在乳牛十八頭を飼養し、生乳一日三斗余を搾取し居れり、然れども海口市に於ける牛乳の需要は一日八斗に達する見込にして乳牛の増飼は緊急事とせられつつあり、之が爲目下軍の援助に依り香港乳牛の大量輸入を画策中なり、尙本事業に附屬して流水坡に分場を設置し乳牛の育成並に牧草の自然自作を目的とし目下キャッサバ、甘藷、落花生、クローラリア、玉蜀黍、大豆等各種作物を作りつつあり。

5、皮革事業

皮革資源の獲得を目的とし同社は昭和十四年度以降原皮の買収並に製革を経営しつつありしが本島に於ける鞣革設備及技術は頗る拙劣なるを以て同社は目下海口市に年一万枚鞣製程度の製革工場を建設中なり、而して本年度原皮取扱数は月二千余枚、製革数は月約三五〇枚なり、尙將來原皮出廻りの状況により他地方にも設備を爲し以て本事業の発展を図らんとするものなり。

4、生畜移出事業

廣東軍竝に海口駐屯軍部隊需要の肉豚の買付移出納入を当面の目的とし更に將來香港其他へも搬出せんとする目的の下に昭和十四年度以降島產畜產の輸出を行ひつゝあり、本年度上半期に於ける成績は生産地に於ける治安の回復に伴ひ生豚の出廻りは著しく好調を示したるも下半期に於ては一時治安悪化の爲搬出激減したる爲、搬出豚数は月平均生豚六〇〇余頭となりたるも今後は漸次治安の好轉に伴ひ取扱頭数の増加を期待し得る見込みなり。

5、化成事業

同社屠畜場に生産する獸骨を利用し骨粉骨油、製造を計画せるものにして本年度に於て簡單なる工場設備を行ひ製造に着手せり。

(一) 牧畜事業

畜産地域に台湾より種牛を輸入し之が繁殖育成により島内産牝牛を基礎とする肉役牛の改良増加を図り、我國畜産資源の確保を期する爲、陵水、藤橋、新村に亘る事業地面積約二万町歩に対し本計画を立て、昭和十五年九月藤橋事務所を開設し、二十年後には常時牧牛二万頭飼養を目標とし之が経営に着手せり、尙本牧畜事業に附帶して軍及病院竝一般邦人に対し牛乳補給の目的を以て三亞に於て酪農事業を経営しつゝあり、更に事業地域内一部農耕地に對しては水稻栽培、蔬菜栽培の直營竝に奨励を行ひ農村の指導と相俟ち全般的農業開發に資せしむる予定なり而して藤橋、新村に於ける畜牛頭数は一時一千頭に達したるも昨年末牛疫の流行に依り相当被害を蒙り約七百頭を飼養中なり。

(ト) 採石事業

本島に於ける米穀管理は本島重要産業の調和的發展と農家經濟の安定向上等を以て昭和十四年十一月実施せる移出管理を以て其の端を開きたるものなるが其の後幾何もなく米穀事情の變化に際し移出米のみならず島内消費米に付ても之を政府の管理下に置く必要を生じ昭和十六年十二月台湾米穀等應急措置令の公布に依り本島產米竝に輸入米をも含む米穀の全般的管理を実施するに至りたり、右に依り生産米は自家用米を除き總てを政府に於て之を買取り管理することとなりたるのみならず配給部面に於ても消費の基準量(別紙現行基準量)を制定し配給券の全島的統一を図り配給制度を確立し重複配給防止に努めたり(別紙二参照)然るに太平洋戰の進行に伴ひ主要食糧品の生産集荷配給機構の徹底的整備強化を図り食糧品需給の全般の万全を期するの要緊切となりたるを以て昭和十八年十二月台湾食糧管理令を公布し、生産供出集荷は總て農業會を以て統制せしめ新に台湾食糧管團(農業概要別紙三)を設置し全島の食糧配給機關たらしめ以て食糧の運営に万全を期しつゝありたるも戰爭の長期化竝に戰場の近接するに伴

第三章 米穀の管理

第一節 米穀の國家管理

台湾に於ける米穀管理は本島重要産業の調和的發展と農家經濟の安定向上等を以て昭和十四年十一月実施せる移出管理を以て其の端を開きたるものなるが其の後幾何もなく米穀事情の變化に際し移出米のみならず島内消費米に付ても之を政府の管理下に置く必要を生じ昭和十六年十二月台湾米穀等應急措置令の公布に依り本島產米竝に輸入米をも含む米穀の全般的管理を実施するに至りたり、右に依り生産米は自家用米を除き總てを政府に於て之を買取り管理することとなりたるのみならず配給部面に於ても消費の基準量(別紙現行基準量)を制定し配給券の全島的統一を図り配給制度を確立し重複配給防止に努めたり(別紙二参照)然るに太平洋戰の進行に伴ひ主要食糧品の生産集荷配給機構の徹底的整備強化を図り食糧品需給の全般の万全を期するの要緊切となりたるを以て昭和十八年十二月台湾食糧管理令を公布し、生産供出集荷は總て農業會を以て統制せしめ新に台湾食糧管團(農業概要別紙三)を設置し全島の食糧配給機關たらしめ以て食糧の運営に万全を期しつゝありたるも戰爭の長期化竝に戰場の近接するに伴

ひ國家管理の対象となるべき米穀の生産竝に供出数量は漸く憂慮すべき状態に立至りたるを以て、昭和十九年七月二十八日閣議決定を以て米穀等の増産及供出奨励に関する特別措置を講ずることとなり、昭和十九年第一期作米より之を実施したり該措置概要左の如し。

- 一、割当供出量は稲の作付前に定むること
- 二、割当供出量は部落の共同責任を以て生産供出すること
- 三、供出量の割当は食糧需給計画上の所要量を根拠とすること
- 四、一定量以上の供出に対しては一定の奨励金及報奨金を交付すること

然るに本措置は昭和二十年産米以降内地同様廃止することとなりたるが米穀の生産事情は漸く本島自体の需給の均衡をも失ふの惧れ多大となりたるを以て、昭和二十年第一期作米より米價の大幅引上げを実施し（需給計画の項に既述）更に昭和二十年第二期作米以降「米穀の生産竝に供出確保対策」（別紙四）を樹立供出量二百二十一万一千石の割当を行ひたり、然るに終戦に伴ふ諸情勢の急激なる変化に依り今後に於ける米穀の供出確保は愈々困難なるべきを予想せらるゝに至りたるも食糧問題は依然として民政上重要な根本問題なるを以て地方長官に対し米穀の生産竝に集荷に関しては引続き全力を集結すべき旨を通牒すると共に、供出優良者に対しては褒賞用として衣料一万五千貫、繊維製品約五十一万四千着分を有償又は無償にて交付するの外、食塩の特配を行ふこととし目下実施中なり。

年 齢 別		現行基準消費量				(二万塊、半成尺)			
(数へ年とす)		米 作 者	普 通 人	重 労 者	軽 労 者	妊 婦	機 車		
1 歳 - 4 歳		130	130						
5 歳 - 9 歳		230	230						
10 歳 - 13 歳		340	340						
14 歳 - 25 歳		520	390	520	390	390			
26 歳 - 65 歳		260	330	260					
66 歳									

別紙二 米穀重複配給防止対策要綱

一、一般消費者

- (イ) 米穀配給券を全島共通のものとする
- (ロ) 島内移動の場合一世帯全部の移動に付ては配給券に配給原票竝に停止証明書を添へ之を本人に携帯せしめ、移動先に於て配給を受けしむること、但し一世帯の一部移動の場合は配給停止証明書を配給組合に於て発行し之を本人に携帯せしめ移動先に於て配給を受けしむること

二、特殊消費者

- (イ) 署又は市郡役所に於て判明する轉出者竝に死亡者等に付ては署又は市郡役所より配給組合に通報すること
- (ロ) 官立又は私立病院の入院患者に付ては十日毎に其の期間の入院患者及退院患者の住所氏名及世帯主名を直接

配給組合に通報せしむること

(ハ) 通過部隊又は駐屯部隊に於ける現地調辨に対する配給は部隊長の証明により所要量を配給し右証明書は一箇月分を取纏め米穀事務所に送付すること

三、島外との移動

(イ) 鉄道部隊旅行案内所又は船会社に於て乗船切符を購入したる者に付左記調査を依頼すること

出発乗客氏名、年令、現住所、職業及世帯主氏名、右調査は十日毎に取纏め米穀事務所に通報すること

(ロ) 米穀事務所は右資料に依り関係配給組合に通報すること

四、特 配

(イ) 学生及在郷軍人の演習、各種集合訓練、講習会、団体旅行等に付ては原則として食米を携行せしむること、し已むを得ざる場合は州知事又は廳長の許可を経て特配をなすこと

(ロ) 冠婚葬祭には原則として特配をなさざること、但し事情已むを得ざるものに付ては市街庄長の認むる範囲の特配をなすこと

(ハ) 軍用犬に付ては軍用犬協会の証明により配給をなすこと

(ニ) 來客者用は島内よりのものは特配をなさず島外よりのものに付ては奉公班世話役及区長の証明により配給をなすこと

(ホ) 軍事施設従事者に対する配給に付ては昭和十六年五月二日米業秘第四〇号米穀局長照会の要領により取扱を

市郡配給組合又は郡庄單位共精共販又は配給業者は移動に依る配給停止又は新配給をなしたる時は別紙様式に依り報告を月二回州配給組合に報告すること

六、州配給組合は別紙様式に依り翌月十日迄に毎月の移動報告を米穀商及米穀事務所に送付すること

昭和十九年度米穀需給実績

一、供給

昭和十八年十一月米穀現在高 四三四、五四四石

昭和十八年第二期作米実收高 四、〇五六、一七六石

昭和十九年第一期作米実收高 三、八八七、四三〇石

精麦(米粉) 四、五二七石

乾 麵 代替量 一一、四九五石

甘 藷 二二六、〇七九石

計 八、六一〇、二五一石

二、需要

輸移出高 内地へ 九二五、七七三石

沖繩へ 二二三、七五六石

南支へ 二二、五九八石

南方諸方面 五二五石

來年度へ繰越米 五九五、二六七石

特殊用米 六六三、七七九石

三、差引消費高

飯米用 五、八九六、一三一石

種粃用 一九五、七五六石

酒造用(加工業用を含む) 七七、五六六石

参考

昭和十九年度米穀人口 六、七三六、三七六人 飯米用消費高 五、八九六、一三三石
同一人当年消費高 〇、八七五三石 同一人一日当消費量 二、三九八合

昭和 20 年米穀年度需給計画

(イ) 昭和 20 米穀年度上半期需給計画

区 分	数 量	摘 要
1. 供 給	石 3,309,793	
1. 11月1日 現 在 高	724,306	
2. 19年2期 米 供 出 高	1,478,950	
3. 20年1期米早期供出米	72,000	
4. 米 穀 代 替 食 糧	34,936	
甘 藷	14,379	
乾 麵	7,935	
米 粉	7,715	
澱 粉	4,868	
1. 需 要	3,309,743	
1. 一 般 消 費 者 用	2,286,251	

19年11月決定割当供出高 2,609,000石なりし処現在の状況に鑑み其の90%即ち130,450石減を見込みたり2月迄供出見込(2月中毎迄植付完了のもの)ものの作付1万甲当12石として生産高12万石の6割とす

3月以降 62,555石を 節減せり(消費期間は台北新竹両州及台東澎湖各属は7月迄台中州7月上旬台南高雄両州は6月迄とす)

前年度の実績を採る

3. 酒 造 用	2,000
4. 池 内 地 移 出 済	114,000
5. 沖 縄	94,000
6. 南 支 那	4,000
7. 特 殊 用	462,084
A	348,004
B	214,000
8. 備 蓄 用	5,000
9. 予 備 米	21,180

前年度物動計画割当済にして残存り本年度に積出したるもの(内17,170石は青縄に仕向変更)

積出済20,074石

14,000石予定の所 4,000石に打ち切り積出済

1,813石

2月5日迄指図済 405,398石

同 193,989石

当初予定 178,000石中工場用等を残し他を削減す。

(ロ) 昭和 20 米穀年度下半期需給計画

区 分	数 量	摘 要
1. 供 給	一 石	
1. 繰 越 米	49,300	
2. 1 期 生 産 予 想 米	936,800	
3. 2 期 早 出 米	195,400	
4. 甘 藷 代 替 量	160,000	
5. 前年上期 早 出 米	40,000	
6. 農 家 保 有 米	501,800	

所有量の1割減とす

計	1,883,300
2. 需	
1. 民	需
2. 特	殊
3. 特	殊
4. (A) + (B)	
計	1,611,100
3. 差	引
引	過
過	不
不	足
足	米

昭和 19 年米穀年度政府買入実績

月 別	蓬 萊 米	在 來 種 米	丸 種 米	長 種 米	計
11月	1,292,703	280,332	9,773	1,009	1,543,817
12月	401,900	249,740	73,451	20,196	745,287
1月	552,059	175,621	520	2,880	731,080
2月	687,758	221,827	2,079	3,740	515,403
3月	522,176	244,588	877	3,003	773,644
4月	612,846	226,834	3,281	3,418	856,397
5月	455,273	230,280	3,180	2,672	691,393
6月	584,159	149,890	1,651	1,630	737,425
7月	290,840	149,120	793	177	1,440,830
8月	1,097,380	262,380	1,267	134	1,360,161

10月	756,865	104,224	1,945	52	1,073,087
計	9,414,148	3,060,813	103,352	38,568	12,617,279

第二節 米 價 の 公 定

台湾に於ける米價の公定は昭和十八年十二月律令第二五号、台湾食糧管理令及昭和十八年十二月府令第二九九号、台湾食糧管理令施行規則に基き実施しつゝあり、即ち生産者が各州廳農業会に対し政府に賣渡すべき旨の委託を爲す場合の粃の價格は粃の生産費を基礎とし、物價其の他の經濟事情を參酌して作付前に決定發表し、各州廳農業会が生産者の委託せる粃を玄米に調整の後政府に賣渡す場合の價格、即ち玄米の政府買入價格は右の粃價格に玄米調整料粃摺歩合運賃諸掛等を參酌し決定せり。而して政府が一般消費に充つる爲、配給機關たる台湾食糧管理團に賣渡す場合の價格は家計費及物價其の他の經濟事情を參酌し決定すると共に右の賣渡價格に台湾食糧管理團の配給諸經費を加算し小賣價格を公定し來れり、尙從來生産者の販賣粃に対し粃千斤当二十九円四十四錢を生産確保補給金として交付し來りたるものを昭和二十年第一期作米以降右生産確保補給金を七十八円十錢に引上げ交付しつゝあり。

5. 昭和 20 年第 1 期作玄米買入價格

(檢収場所に於ける上米)

州 庁 別	蓬 萊 米	在 來 種 米	丸 種 米	長 種 米
台 北	17.32 円	16.18 円	18.13 円	16.17 円

		F102			
新竹	竹	17.32	16.18	18.13	16.17
新竹	中	17.28	16.14	18.10	16.14
新竹	南	17.32	16.17	18.13	16.11
新竹	雄	17.36	16.21	18.17	16.21
新竹	東	17.46	16.31	18.28	16.31
新竹	港	17.46	16.31	18.28	16.32

6. 粳, 玄米, 糯米, 碎米の價格

種類別	穀 (千斤当)	玄米の政府、食糧営團小賣價格 (10斤当)			糯米 (50斤当)	碎米 (60斤当)
		賣渡 (千斤当)	玄	米	五分搗	
菜	蓬	¥ 130.20	¥ 18.05	¥ 3.34	¥ 3.46	¥ 11.56
菜	梗	¥ 118.10	¥ 16.89	¥ 3.15	¥ 3.26	¥ 10.52
菜	丸	¥ 137.50	¥ 18.77	¥ 3.46	¥ 3.58	¥ 12.31
菜	長	¥ 116.40	¥ 16.70	¥ 3.12	¥ 3.23	¥ 11.52
						¥ 13.41

備考 本表の價格は概は台北州産穀、他は全島 (但し食糧営團小賣價格は本表價格より10錢上げ) 共通の價格にして概は屑米は上屑の價格なり

第三節 其の他の主要食糧の管理

本表以外の管理の対照となる主要食糧は管理令に甘藷切乾甘藷及其の他の食糧 (麦類、雜穀、麥粉、澱粉、馬鈴薯

及芋、ササバ、甘藷、馬鈴薯及ササバの加工品たる食糧及麵類) を規定し居るも現在政府の直接買入賣渡を爲すものは小麦、甘藷及切乾甘藷にして小麦は政府より直接台灣製粉組合に賣渡し、甘藷及切乾甘藷は米穀と同一の配給要な限度に於て政府管理を実施し居り雜穀、澱粉及麵類中乾麵は政府買上を爲さず食糧営團をして取扱しめ其の配給は政府の指示に依ることとし其の他は所屬團體の自治統制と爲し居れり。

第四節 台灣食糧営團

一、設立の理由

從來米穀其他主要食糧の配給機構は各種類別に組織され而も各地区々に其の機關を組織し居り各種食糧の綜合的且計画的配給制の実施並に之が実施に依る消費節約等は到底期待し得ざるのみならず且任意組合又は個人なるが爲、業務上其の他の監督は極めて困難なる状態に在るを以て区々たる之等機關を一機關に整備せしむることとし食糧管理令の規定に基き、昭和十九年一月台灣食糧営團を設立せしめ、台灣總督の定むる食糧配給計画、各州廳内に於ける地方的食糧配給に關し州知事又は廳長の定むる配給計画に基き主要食糧を配給すると共に台灣總督の指定する食糧を貯藏せしむることとせり。

二、資本

食糧営團資本金は八百万円 (全額拂込) にして政府及民間各四百万円、民間出資は公募に依り出資者數三、一六二名なり。

三、機關及事務所

四〇六

現在理事機關として理事長一名、理事二名（内參與理事三名）、監査機關として監事二名、諮問機關として評議員若干名あり、何れも台湾総督の任命に依るものなり、事務所は台北市に本部を、各州廳に支部を設置し、市街地に支所、郡に出張所を置き、其の下に摺精工場、配給所を設け全島一貫せる方針の下に各地方の実情に副ふ如き配給の態勢を整備す。（直接工場五三二、委託工場一五七
配給所一、一〇〇内外、職員及従業員五、七五二人）

四、監督

營團は台湾総督之を監督し其の支部の業務に關しては州知事廳長も亦之を監督するものとす。

五、取扱物資及配給方法

營團取扱物資は米穀、甘藷、切乾甘藷、麦類、澱粉、麵類とし其の配給方法左の如し。

(イ) 米 穀

米穀は總て州廳の指示に依り政府より買受け之を摺精し政府の指示せる消費基準量に基き一般消費者に配給を行ふ
(ロ) 甘藷切乾甘藷

政府の買入れたるものの賣渡しを受ける外、州廳農業会より買收したるものの配給を行ふ其の配給は主に米穀代替
用とす

(ハ) 麦 類

移入品は總て營團に於て移入し小麦原麦は台湾製粉組合をして買取販賣を以て製粉せしめ島産小麦粉は製粉組合よ

り買受け製粉、小麦は政府の指示に基き配給す

(ニ) 雜 穀

輸入は台湾重要物資營團より、移入は中央食糧營團より、島産は州廳農業会により買受け配給す

(ホ) 澱 粉

移入は日本澱粉株式会社より、島産は州廳澱粉工業組合より買受け配給す

(ヘ) 麵 類

政府の指示に依り台湾乾麵工業組合に委託製造せしめ製品は主に米穀代替とし配給す

六、取扱実績 昭和十九年度（自十九年四月至二十年三月）各種別取扱実績左の通り

米 穀	八、四四九、二四〇袋	生 甘 藷	二五、三四五、一〇五斤	切乾甘藷	八〇三、二〇五斤
移入小麦	五三、〇〇〇俵	小麦粉	一九五、六八九袋	移入大麦	二五、六九九袋
醬 麦	二〇、九六八叭	滿洲大豆	一四、八三五、二四〇斤	落花生	一、五六七、五〇五斤
胡 麻	五〇五、二八八斤	其他豆類	三二八、九七一斤	脫脂大豆	一二八、七〇〇斤
脫脂落花生	五九、二五八斤	澱 粉	六、八六四、八八七斤	麵 類	五、一五七、八二八束

第四章 工業

第一節 概 説

昭和十二年迄の本島工業は僅かに農産品加工業程度の域を出でざりしが戦争勃発に伴ひ本島が南方作戦の兵站基地として重視せらるゝに至るや工場の新設拡張相次ぎ本島工業界は未曾有の活況を呈するに至れり、即ち鉄鋼、酸アルカリの基礎工業の外各種の近代工業勃興し産業生産額も従来首位を占めつゝありし農業に代り第一位を占め、所謂本島工業化の過程を具現するに至れり、然れ共戦争の推移に伴ひ島外との交通漸次逼迫するや本島工業も亦至大の影響を受け又昭和十九年十月前後よりする空襲の激化は島内各地の工業地帯及工場に甚大なる被害を被り、本島工業の様態は漸く交貌を呈するに至れり、斯るを以て本島に於ける戦力の維持確保の爲、所謂自活自戦態勢の整備確立を目途とし島内原材料による工業の切換建設を行ふと共に空襲の被害を減少する爲、工場の疎開を実施し、疎開実施の工場数は九十に垂々とせり、既往都市に於ける工場は大半空襲に依り被害を受け工場の疎開又其の進行の半にして中止となり其の大部は未完成の状態に在るを以て工業生産の現況は極めて低位に推移するを余儀なくせられつゝあり。最近に於ける工業生産高重要工業品生産状況空襲被害状況左表の如し。

業 種 別	生 産 額	昭和十七年度	
		千円	総額に対する百分率 %
紡績工業	11,670	1.7	
金属工業	48,034	6.9	
機械器具工業	32,411	4.6	
窯業	24,773	3.5	
化学工業	89,824	12.8	
製材及木製品工業	13,727	2.0	
印刷及製本業	12,632	1.8	
印刷品工業	408,510	58.3	
食料工業	58,476	8.4	
其他の工業	700,072	100.0	
総計			

重要工業品生産状況				
品 名	18 年 3 月	19 年 3 月	20 年 3 月	
砂 鐵	36 吨	1,577 吨	92 吨	
石灰 (4月)	957 吨	1,135 吨	154 吨	
カーバイド (不明)	(不明)	1,132 吨	157 吨	
酸性曹達 (4月)	591 吨	59,413 立米	17,021 立米	
アルミニウム	1,239 吨	605 吨	1	
		984 吨		四〇九

事業別	工場数	被害状況			
		大被害	中被害	小被害	被害
電力発電所	4	3	—	1	1
金属工業	10	7	—	3	3
機械器具工業	25	19	3	3	3
化学工業	35	31	1	3	3
窯業及土石工業	15	10	4	1	1
窯業及木製品工業	15	12	8	—	—
紡績工業	15	11	1	3	3
紡績工業	62	45	12	5	5
食品工業	21	14	3	4	4
其他	202	152	27	23	23
合計					

セメント	40屯	44屯	—
耐火煉瓦	20,005屯	36,783屯	5,638屯
耐火煉瓦	—	1,506屯	825屯
耐火煉瓦	3,525坪	1,824坪	—
耐火煉瓦	(4月)	5,077坪	6,360坪
耐火煉瓦	3,334坪	74屯	13屯
耐火煉瓦	(不明)		

第二節 鉄鋼業

鉄鋼業は、高雄製鉄株式会社、本工場は昭和二十年二月集中爆撃の爲操業不能に陥りたる爲、現有設備たる高炉五基を、後者三五屯一基に依り鉄鋼を南海興業株式会社に於て海綿鉄を東邦金属製鉄株式会社、連港工場に於て含ニッケル鉄、粗ニッケル及フェロクロム、台湾電化株式会社基隆工場に於てフェロシリコン、同社羅東工場に於てフェロマンガンを台湾電力株式会社に於て特殊鋼を鐘ヶ淵工業株式会社松山工場に於て電気銑融鉄を生産し來れるが工場の現況次の如し。

- (1) 高雄製鉄株式会社、本工場は昭和二十年二月集中爆撃の爲操業不能に陥りたる爲、現有設備たる高炉五基を一基に圧縮し台北州海山郡鶯歌街に疎開工場建設中なりし処時局の急変に伴ひ之を中止し対策考中なり。
 - (2) 台湾重工業株式会社汐止工場、本工場現有設備たる高炉一基は昭和二十年五月以降の連続空襲の爲、炉況極めて悪化し八月中旬操業を断念し吹下しをなせり。
 - (3) 南海興業株式会社汐止工場、本工場の設備一部は空襲に依る被害を受けたるも残余の設備を以て海綿鉄及コークスの製造を継続中なり。
 - (4) 東邦金属製鉄株式会社花蓮港工場、本工場は昭和十九年十月の爆撃に依り多大の被害を受けたるも其の復旧に努め昭和二十年五月より一部操業中にして更に現有設備の一部を利用しカーバイト製造を開始せり。
 - (5) 台湾電化株式会社
- (イ) 基隆工場に於けるフェロシリコンは製品の内地移送困難となりたる爲、該品の滞貨を見たるを以て同設備を利用し、カーバイト製造を計画せるも受電不足せるを以て操業中止の状態にあり。

(ロ) 羅東工場はフェロマンガン原料不足せる爲、該品の製造不能となりたるを以て現在はカーバイト製造中なり。

(6) 台湾電力株式会社松山工場、本工場は現在設備の高周波電気炉二基中一基は現在操業中なるも一基は既に台北州七星郡内湖庄に疎開中なりしも時局の急変により操業を中止せり。

(7) 鐘ヶ淵工業株式会社松山工場、本工場にては電気炉に依り銑鉄及高周波炉に依り融鉄製造中なりしも後者は時局の急変に依り製造中止せり。

第三節 軽金属製錬業

軽金属事業は日本アルミニウム株式会社高雄及花蓮港の両工場に於て旭電化工業株式会社高雄工場に於てマグネシウムを製造し之を内地に供給し來れるが右は何れも昨年十月及本年一月以來數次に亘る空襲に依り被害を受け操業不能となれる一方内台輸送の断絶せる爲、之が製錬を中止し其の有する施設は他の重要事業に流用して戦力の増強に寄與し來れり。

第四節 機械工業

本島の有する機械工場は三一五工場にして其の規模は内地に於ける街工場程度なるも今次大戰中手榴彈、迫撃砲彈、地雷、爆雷等の兵器、小型船舶の機械並に修理、航空機及自動車の部分品、築城關係の機械器具其の他軍需一般機械器

具の製作、修理並に修理等を担當すると共に重要工場の機械修理に當り來りしが本年を以て空襲激化せる爲、右の如く右三一五工場の内、重要なもの五工場を撰択し山脚地帯に疎開を計画し之が完成を促進中なりしも時局の急変せる爲、右疎開計画を中止すると共に事業の轉換に付考究中なり。

第五節 化学工業

今次大戰中時局の要求する物資にして化学工業製品の主なるものはアンモニア、硝酸、硫酸、硫安、石灰、窒素、セメント、曹達、有機化成品、カーバイト、酸素、耐火煉瓦、火薬、油脂、ゴム製品等なりしが

(イ) アンモニアに付ては従來内地よりの供給を受け居りたるが内台交通の断絶に依り島内自給の要を生じたるを以て台湾電化株式会社基隆工場に硫安工場施設を実施中にして、約七〇％程度完成せり。

(ロ) 硝酸に付ても従來内地よりの供給により需要を充し來りたるが内台交通断絶に依り島内自給を計画し、台湾肥料株式会社基隆工場に之が設備を爲したるも操業に至らずして空襲を受け之が修理を促進中の処近時漸く操業可能の域に達せり。

(ハ) 硫酸は台湾肥料株式会社基隆工場又高雄工場に於て製造中なりしが近時原料不足の爲、操業を中止し今日に及べり。

(ニ) 石灰窒素に付ては台湾電化工業株式会社基隆工場に能力二、〇〇〇瓩の設備を有し島内需要の一部を供給し來りたるが本年頭初以來の空襲に依り電線並に送電設備破壊せられたる爲、電力供給不足し爲に殆ど操業不能の状

況にあり。

四一四

(セ) セメンは台湾セメント株式会社高雄工場、台湾化成工業株式會社蘇澳工場、南方セメント竹東工場、建設中、に依り島内需要を充足し來りたるも近時敵機の頻襲に依り被害を受け操業極めて不円滑なりしも万難を排して生産を繼續し今日に及べり。

(ク) 曹達は旭電化工業株式會社高雄工場、錦ヶ淵曹達工業株式會社台南工場及南日本化学工業株式會社高雄工場に於て島内需要を充足し來りたるが前二者は本年年初以來の空襲に依り操業不能に陥り、現在南日本化学工業の高雄工場に於て細々ながら操業をなし今日に及べり。

(コ) カイバイトは台湾電化工業株式會社基隆工場に於て生産し來りたるが本年々頭以來の空襲の激化に依り電力供給不足の爲現在程度の減産を爲せり、尙右の外台湾有機合成株式會社が新竹に於てカイバイト及ブタノール工場を建設中なるも所屬設備の内地よりの移入困難なる爲現在建設を中止しあり。

(カ) 酸素は帝國酸素株式會社台北工場、台湾酸素合名株式會社台北工場、東光興業株式會社高雄工場及台湾電化工業株式會社基隆工場に於て生産し來れるが、容器の不足の爲充分なる成績を挙げ得ざる現狀なり。

(キ) 耐火瓦は台湾窯業株式會社北投及高雄両工場、七星窯業所、北東工場、台湾炉材株式會社北投工場に於て生産し現に島内需要の大半を充足しあり。

(ク) 火薬、本製品は大半を内地よりの供給に待ちたるものなるが内台輸送断絶せるに對処し、現在台湾窒素株式會社高雄工場に於てカリリクトの製造を爲しつゝあり。

(ケ) コーキングは台湾コーキング株式會社高雄工場及板橋工場に於て自動車及自動車のタイヤ、チューブ等を製造し製品の製造を実施中なり、而して特にタイヤ及チューブの製造に付ては設備拡充中なるも内地より設備の一部輸送中絶せる爲進行不円滑なる現狀なり。

以上從來戦争の要求する重要製品の製造に重点を置き之が振興を図り來りたるが今般時局の激変に對処して右の外民需物資特に紡績工業、各種食料品工業等に重点を置く化学工業の轉換を考究中なり。

(コ) 油脂 相当規模の搾油工場を経営するものとしては杉原産業株式會社、台湾油脂株式會社、台湾花王有機株式會社、豊國殖産株式會社等あり、之が原料は大豆、コブラ等主として外國に依存し來れるも近來落花生、胡麻、蓖麻子、砂糖等島内原料に限定せられ操業率極めて低下せり。尙右會社は食料油、潤滑油、石鹼製造設備をも有するものとす。

(ク) 製紙及パルプ 洋紙工場としては台湾興業株式會社が島内に於ける唯一のものにして從來島内需要の各種品目を生産し自給自足し來れり、右の外は東亞製紙株式會社の新設せられあり、將來ヘトロン紙の生産を企圖し居れり、和紙工場は島内十九を数へ需給概ね均衡を保ち居れり、島内に於けるパルプ工場は台湾パルプ工業株式會社及塩水港パルプ株式會社の二社にして其の製品は島内需要を充足するのみならず從來中國、滿洲に輸出せられたり。之が原料は甘蔗バガスなるを以て之が島内供給力は無限なり。

第六節 工業助成

台湾の特殊資源を利用する特殊工業の発達を図る目的を以て補助金を支出し之が助成に努め來れり、即ち昭和十九年度に於ては島内原料に依る自給自給態勢確立の要請に對應し金十一万四余を以て工作機械製造、航海計器製造、鑿岩機製造、乾電池製造、合板製造諸事業の振興を推進し又五十二万四余を以て石炭脱硫試験、赤燐製造試験、電極製造試験、バガス乾溜試験、フルフラール製造中間工業試験、工具製造試験、耐酸鑄鉄製造試験、海藻よりの駆虫剤製造試験、落花生膠着劑製造試験、含ニッケル鉄製造試験、特殊硝子器具製造試験、木捻製造試験、電解隔膜製造試験、坩堝製造試験、ベルト製造試験、島産原料に依る陶磁器製造試験、代用原料に依る硝子製造試験、島産コードに依る自動車タイヤ製造試験、白銑処理試験、伸銅試験、熔接棒製造試験、特殊鋼製造試験、クランクシャフト製造試験等にて試験研究の完成を促進し自給態勢の確立に努め、昭和二十年度に於てはアルミニウム事業に對し價格報獎金十一万四余を支出し、又八十五万四を以て石炭高温乾溜試験、轉炉製鋼試験、耐酸磁器製造試験、雷管製造試験、雷汞製造試験、塩素酸加里製造試験、含ニッケル銑製造試験、島内原料に依るフェロマンガ製造試験及台湾技術協會技術相談所等試験研究の完成を促進し自給生産態勢の強化に努めたり。

第七節 試験研究機関（工業研究所）

台湾總督府は産業的開發の其の基礎を自然科学的研究に置くことの極めて重要なを認め、明治四十二年台湾總督府研究所を設け中に化学部を置き以て工業的調査、試験、研究に當らしめたり。越へて大正十年既設の農事、糖業、林業及園藝の各試験場並種畜場等を研究所に統一して新に中央研究所創設せらるゝや工業試験研究の爲、工業部の設

置を見るに至れり、爾來二十年本島の産業は駁々乎として發展の一途を辿り殊に最近工事に於ては日華事變の勃発を契機として各種工業勃興の機運極めて旺盛となり逐年顯著なる発達を見るに至り工業台湾建設の時運に際会せり、然るに本島文化産業の進展、對南方事業の進歩自然科学長足の進歩に伴ひ中央研究所の事業は年と共に廣汎多岐複雑となり農業、林業、工業及衛生に亘る廣範圍の研究機関は其の運営漸く不利なるものあるに至れり、即ち各部事業の増大と研究の高度化とは各其の目的に隨ひ對策に應じ専門技術者の自由にして責任明瞭なる運営に俟つに非ざれば十分の發展を期待し得ざるに至れり、仍て中央研究所は之を各部毎に獨立せしむることとなり、昭和十四年四月中央研究所官制廢止と同時に新に台湾總督府工業研究所官制公布せられ從來の中央研究所工業部を主体として之を拡充強化して工業的試験研究の昂揚に邁進することとなり、爾來着々所期の目的に向ひて進みつつあり。

第八節 物資動員

政府は大太平洋戰爭完遂の爲絶対に必要なる軍備の増強を中心とし重要物資の大東亞共榮圈内に於ける自給体制の確立、國民生活必需物資の需要確保を重点として物動計画の策定を見たりしが本府も之に順應し各種重要物資の需給調整に關する実施計画を設定し或は時局の進展に對應し各種統制の強化を図り又は設定計画の再検討をなし、本島の實情に即せる実行方策を加味し其の實施に努めたり、而して大東亞戰開始以後重要物資の輸入杜絶の爲、消費節約を一層強化し代用品の使用奨励及廢品回收の徹底特に十六年度より實施の金屬類特別回收は逐年之が範圍擴大強化を図り実行に當り物資動員計画遂行に遺憾なきを期したり。更に十九年度以降内地物資の移入困難の増大に伴ひ物資の非常

買上、港頭滞貨処理、隱匿藏物資の活用等を実施し島内自給態勢の確立に努力し來りたり。尙現在迄に既に一定の方針を樹立し配給統制を実施しつゝあるものは法令に依るもの鉄鋼、鉄鉄、故銅、鉄屑、自動車タイヤ、チューブ、皮革、綿糸、肥料、米穀、砂糖、飼料、薬及薬工品、石炭並石油、木炭、木材、雜纖維品、鮮魚貝、塩乾魚、海草類、法令に依らざるもの亜鉛、鉄板、線材製品、王冠コルク、熔接棒、鋼索、ドラム罐、スコップ、シャベル、磨帶鋼、電線管、五ガロン罐、船舶鎖、粉碎用ボール電信用線材、美裝鋼板、珪素鋼板、サツシユ、特殊鋼、鑄鋼、銅、鉛、亜鉛、アンチモン、錫、螢石、水銀、アルミニウム、家庭器物、石綿製品、内地製機械器具、島内製機械器具、電氣機器、自動車、自轉車並に同部分品及附屬品、自動車修理部分品、軸受、電氣通信、製備用綿花、特殊糸、織物、鐵道用毛ボロ、地下足袋、ゴム底布靴、自轉車タイヤ、チューブ、荷車用タイヤ、人力車用タイヤ、ゴム、ベルト、ゴムホース、粗摺ゴムロール、燐寸、松脂、漆、工業藥品、医薬品、化学藥品、麥粉、セメント、染料、火藥、アスファルト、硫黃、洋紙、亞麻布ボース、黃麻、黃麻袋、マニラ麻、シザル纖維等に及びたるも全般終戦に伴ひ其の要解消せるを以て九月十日其の大部分を廢止せり、尙殘存せるものに付ては可及的速に之が廢止に付計画中なり。

第五章 電 氣

第一節 概 況

本島に於て電氣の実用に供したるは改隸直後、明治三十一年總督府製藥所に小型發電機を設け、台北に於ける特殊

建造物に点燈したるを以て嚆矢とす、其の後明治三十六年總督府は一般の需要に供する目的を以て台北電氣作業所を開設し、台北州文小郡新店庄に龜山水力發電所を開設、明治三十八年之が建設を了すると共に台北市街に其の供給を開始したり之本島に於ける電氣事業の創始たり。爾來電氣の供給事業は全島的に官營の方針に拠り明治四十年勅令第二〇四号に依り台灣總督府電氣作業所の經營と爲し、次で明治四十一年勅令第一八七号に依り臨時台灣工業部に四十二年勅令第二七一号に依り台灣總督府土木部に移したるが四十四年勅令第二六三号に依り台灣總督府作業所の經營する所となり大正八年に及べり、其の間明治四十二年高雄方面、四十四年台中方面に供給を開始一應本土主要拠点に事業の創設を了したり、而して官營に依り供給の急速に望み難き新竹、嘉義其の他の地方並に本島東部及澎湖等辺限の地域に在りては夫々地方的に民營事業に依る供給をなさしめたり。官營電氣事業は其の後電氣業勢の拡張を計り本島西部主要地域全般に亘り事業經營をなすに至りたるが、大正八年日月潭水力發電工事の起業を機に之を半官半民事業に移すこととし、同年律令第一号台灣電力株式會社令に依る資本金三千萬圓の台灣電力株式會社の設立となり官營事業は之を一千二百萬圓に評價して政府の現物出資と爲したり、台灣電力株式會社は昭和九年日月潭發電所を完成し、更らに引続き西部各所に發電工事を着手せり、其の後本島東部に於ても港灣施設の整備に對應して電源開拓の急務なるを認め、昭和十四年資本金二千萬圓の東台灣電力事業株式會社を設立して之をして東部河川の開拓に當らしむることとせり、尙從來官營事業の区域外に在りて各所に事業を經營しつゝありし民營の電氣事業者間に於ても漸次事業の合同を計りたる結果、台灣電力株式會社、台灣電燈株式會社、台灣合同電氣株式會社、恒春電氣株式會社、南庄電氣商會、花蓮港電氣株式會社及東台灣電力株式會社の七事業に整理統合され居りたる處、電氣事業法の強化拡充を期す

る爲に地域的に西部電気事業は之を総て台湾電力株式会社に東部所在の各電気事業は東台湾電力興業株式会社（東台湾電力株式会社と改称）に夫々合併若くは買収せしむることとし昭和十八年中に之を完了し、更に昭和十九年台湾電力株式会社は東台湾電力株式会社を買収し茲に全島一元的に連系完了せり。

第二節 日月潭水力発電工事

大正六年政府は日月潭を利用し濁水溪の本流を之に引入れ門牌潭に十万千瓦ワットの発電所を設置し発生電力は之を南北両送電線路により台北及び高雄方面に送り以て本島に於ける電力供給の根幹たらしめんことを計画せり、依て之が実施の任に充つる爲、大正八年八月政府の行ふ電気事業を一千二百万円に評價の上現物出資と爲し、民間より一千八百万円を募集し、資本金三千万円の台湾電力株式会社を創立せり。本計画は起工後資金梗塞の爲、大正十一年一時工事の進行を見合せ、更に大正十五年当時の事情に鑑み一應工事の打切をなす等の迂余曲折ありたるも、昭和三年工事再興計画を樹立し資金調達に關しては政府保証及出資の件に付議会の協賛を得たり、右に依り昭和六年外債資金の調達成り設計其の他諸般の点に専ら改善を加へたる上、同年工事に着手し昭和十年予定通り其の竣功を見たり、其の概要左の如し。

(イ) 発電所	名称	日月潭第一発電所	出力	最大一〇〇、〇〇〇キロワット
	使用河川	濁水溪	平均	五八、八〇〇キロワット
(ロ) 工事費	日月潭工事費決算額は再興前に於ける工費	二六、二六四、五七〇円、再興に於ける工事費	三八、〇	

三二、二七八円にして総額六四、二九六、八四九円なり。

(ハ) 資金 再興前工事費は円貨社債並に株式拂込金に依りたる処再興後、工事費は其の主要部分を外貨債に求めたり、猶既に議会の協賛を得置きたる政府出資四百五十万円は工事費予算変更の結果之を要せざることとなり。

第三節 大甲溪開発発電工事

大甲溪開発事業は台湾に於ける重化学工業の所要電力最大四十五万千瓦ワットの電源を確保し併せて治水並に水利部に於ける中部台湾の総合的国土開発に資せんとする目的を以て昭和十七年度以降八箇年の継続事業として國費を以て大甲溪の上流達見地籍に高さ二〇〇米の「コンクリート」堰堤を建設し三億二千八百万立方メートルの湛水をなし得べき貯水池を築造し、別に台湾電力株式会社をして下流六箇所に発電所を建設せしめんとするものなり。右政府事業たる貯水池の築造に要する経費は総額一億三千五百万円にして内台電をして三千五百万円の受益負担をなさしむべき方針を定め当府は右計画を目的とし之が実施上先決要件たる輸送設備と動力設備とを先づ完成せしむべく経費五千五百万円を以て、昭和十七年以降三箇年継続事業として工事に着手することとし、更に台湾電力株式会社をして前記負担金の内、一千五百万円を以て堰堤工事関係諸機械其他の設備を政府事業と併行して行はしめ鉱工局（当時内務局）土木課に大甲溪開発係を設け之が実施監督に当らしめ鋭意工事の進捗に努めたり、延長四十軒に及ぶ達見道路を昭和十八年度末迄に開通せしめ其他輸送設備たる鉄道並に鉄道工事及動力設備等も昭和十九年度中に完成せしむべく努力せ

るも事業を一箇年間（昭和二十年度迄）繰延ぶるの止むなきに至り、更に其の後に及び既定進路及動力設備等の維持的工事の外は総て工事を打切り休止することとなりたり、尙本事業の休止に伴ふ台湾電力其他下請負関係に關する補償等今後に残されたる問題あり。大甲溪は台中州を東西に貫流せる一二四軒の大河にして其の水源は中央山脈系次高山系及白姑大山系に属する海拔三、〇〇〇米を突破する諸峻に圍繞され流域一、二七二平方軒を有す、其の河川勾配の概況を見るに河口より一〇二軒の上流大保久附近の河床は海拔約一、四二〇米に達し大保久より一八軒下流達見に於ける河床は海拔約一、二三四米を有せり、而して達見より下流河口迄は平均七〇分の一の勾配にして就中達見、明治間二三軒の区間は約四三分の一の急端なるに反し達見、大保久間は九〇分の一の緩流をなし而も貯水池に好適せる域を包蔵せり、本川流域内の年雨量は二、六〇〇耗以上なり、其の流出量は観測値に乏しく的確に断定し難きも昭和十年九月一日以降久良栖（集水面積八二二平方軒）に於ける実測の結果より各所の流量を検討するに若し達見附近に大堰堤を築造し、上流一帯を貯水池となすときは河川流量を著しく調節し以て大甲溪の全發電計画に大なる貢獻をなすべく他面下流に於ける淡水による被害の激減本川を水源とし、新に六、五五〇甲の土地改良に要する灌溉用水を確保し新高港附近に於ける工業用水の提供等其の効果蓋し尠なからざるべし、而して達見附近は堰堤位置として前述の如く大局より観て急流と緩流との分界点而も達見に於ける兩岸相迫れる箇所を閉塞するものなれば絶好の地利を有することは容易に首肯せらるべし、依て具さに地形及地質を考察し其の位置を上下二箇所（約一、五〇〇米相距る）にとり比較検討の結果達見鞍部と対岸絶壁とにより形成されたるV型の峽谷を横断して高さ二〇〇米、体積百五十万立方米の大堰堤を築造し、三億二千八百万立方米の有効貯水を貯溜せんとするもゆにして其の内容左の如し。

一、貯水池

位 置	台中州東勢郡蕃地達見、大保久間	有効貯水容積	約三一五、〇〇〇、〇〇〇立方米
満 水 位	標高 一、四二〇米	湛 水 面 積	約六五平方軒
低 水 位	同 一、三〇〇米	湛 水 周 長	約四十軒
利用水源	一二〇米	背 水 距 離	約十八軒
全貯水容積	約三二八、〇〇〇、〇〇〇立方米	集 水 面 積	五二六平方軒

二、堰堤工事

型 式	コンクリート造り拱型重力式	堤 頂 幅	一〇米
高 さ	二〇〇米	敷 幅	一七六米
堤 頂 長	二九〇米	堤 体 積	一、五〇〇、〇〇〇立方米
上流測勾配	一〇%	堤頂標高	一、四二五米
下流測勾配	八〇%	堤長と満水	五米

三、輸送設備

（イ）道路工事 道路工事は左記の通り （ロ）鉄道工事 鉄道工事は台中線豊原より分岐し豊原東勢間にし
て其の内容左の如し。

改修区間 明治—佳陽間 四三、五軒 区 間 豊原—東勢

補修区間	東勢—明治間 三七、〇杆	杆程	一四、四杆
有効幅員	三、五米	軌間	一、〇六七米（單線）
路面工	厚さ一〇厘碎石敷	停車場	豊原、石岡、東勢（三箇所）
最急勾配	二十分の一	最急勾配	千分の二五
（ハ）索道 索道は其の計画内容左の如し			
互長	六九杆	各線共 一時間六〇秒	
区間	東勢—達見間一線四五、〇杆（セメント輸送） 稍來—達見間一線三四、四杆（砂輸送）	最大輸送量 二、〇〇〇噸	

三、予算

年度	予算額	年度	予算額
昭和十七年度	一一、二〇〇、〇〇〇円	昭和十九年度	一八、〇〇〇、〇〇〇円
昭和十八年度	一二、〇〇〇、〇〇〇円	昭和二十年度	四一五、〇〇〇円
		計	四一、六一五、〇〇〇円

四、台湾電力株式会社負担諸般設備費

年度	金額	年度	金額
昭和十八年度	二、六五四、七二〇円四四〇	昭和十九年度	二、八三四、三四六円〇五〇

昭和十八年度

四、一五二、三五四円〇八〇

計

九、六四一、四二〇円五七〇

第四節 電気事業の整備統合

本島の電気供給方法は其の發達の初期に於ては本島西部地方を北部、中部、南部の三主要區別に分ち全然別個に発電し送電し來りたり、東部地方も亦然り、而して事業主体は官營電気作業所を基幹とし、之に配するに地方電気事業者を補助とし發展し來れるものなるが西部に於ては大正八年台湾電力株式会社の設立を見、官營事業を承継して之に代り、又東部に於ては昭和十四年東台湾電力興業株式会社の新設ありたるを以て斯業の整備統合は本島を東西に二分し両者を中心として行はるゝに至れり、斯くて漸次小規模発電を廢して大規模発電系統よりの受電に代へ又送電連絡を緊密にして電力の融通を計る等統合による効果向上に努め、西部に於ては日月潭水力電気工事の完成により同発電所を中心とする十五万四千ポルト送電幹線を基幹として又東部に於ては花蓮港工業地帯間大電源を基幹として夫々統合を進むることゝなれり、從來本島西部に於ては台湾電力株式会社配電区域は他電業者の夫れと無條件に重複し居り之等に基づく二重施設或は不当競争の如き弊害の發生を除去する爲には之等配電区域の整理を爲すの要あるを認め西部所在の全配電事業者、即ち台湾電力株式会社、台湾電燈株式会社台湾合同電気株式会社（但し台東区域を除く）恒春電気株式会社及南庄電気商會は総て之を台湾電力株式会社に統合したり。又東部に於ても西部に倣ひ配電部門の一元化を計ることゝし東部所在の全配電事業者即ち花蓮港電気株式會社及台湾合同電気株式會社、台東区域並配電關係産業組合、馬太鞍、新港、及里壠の各組合は総て之を花蓮港電気株式會社（東部電気株式會社と改称す）に統合し更に

之を東台灣電力興業株式会社に統合（東台灣電力株式会社と改称す）したり依りて本島電気事業は東西兩地帯に各一事業者を存することとなりたる處、更に昭和十九年該地帯を一括統合し台灣電力株式会社が一元的經營をなすに到り整備統合を了せり。

第五節 發電水力調査

水力資源の開發に關する調査は昭和十一年度以降五箇年繼續予算二千三百三十千余円の計画を以て左記河川に付之が調査に着手したり。

水系		河川	水系	河川
淡水河	大嵙崁溪	頭前溪	頭前溪	
秀姑巒溪	秀姑巒溪	馬溪	南北港溪	
大甲溪	大東溪	濁水溪	濁水溪	
大安溪	大安溪			

然れ共右調査河川は全島河川の半に充たず且本島工業振興計画の進捗と共に愈々全島に亘る調査の急務を要するものあるに付、左記残余の河川に付ても十三年度より五年計画予算二十二万三千四百余円を以て調査を進め昭和十七年度を以て完了せり。

淡水河	基北勢河溪	秀姑巒溪	新武呂溪
濁水溪	萬有蘭溪	卑面大溪	新武呂溪
大南溪	南溪	知本溪	知本溪
大濁水溪	北濁水溪	下淡水溪	楠梓仙溪
タツキリ溪	北濁水溪	東港溪	隘寮溪
花蓮溪	萬里橋溪	林辺溪	林辺溪

茲に調査の成果を述べれば次の如し。

流量調査に關しては前記諸調査河川に於て測水所總數五四箇所に付実測回数二、七九四回にして氣象調査に關しては全島山岳地を主としたる二五五觀測所に付調査を及し、而して水力地点の調査に關しては島内河川の經濟的有利に開發し得る一三河川に付調査せる結果、渾水時一〇〇キロワット以上を發電し得る地点一三七、其の概定最大發電力總計二、八一〇、六三四キロワットを選定し得たり、調査の整理としては調査資料を整備し、次の如き原簿を作製保管したり。

- (イ) 水力地点原簿 (ロ) 河川流量原簿 (ハ) 氣象原簿 (ニ) 地形原簿 (ホ) 野帖整理原簿

尙本島の發電水力調査は昭和十七年度を以て主要河川に於ける其の基本的調査を概ね完了したりと雖も發電水力の最重要素たる河川流量は変化極りなきものにして之が長期間に亘る変化を究めざるに於ては發電水力地点計画の確立に全きを期し難きものなしとせず仍て本年度以降原簿維持として河川調査を前年度に引続き継続すると共に第一次基本調査に於て調査せる水力地点の計画事項の修正及び未調査河川に就いても水力地点の計画を考慮し台灣發電水力の調査に遺憾なからしめんとす。

第六節 電氣事業

一、供給区域 昭和十九年度末現在
台灣電力株式会社、台北州、新竹州、台中州、台南州、高雄州、澎湖廳、花蓮港廳、台東廳
備考

一、台灣電力株式会社は昭和十五年八月十日台灣合同電氣株式会社を合併し、恒春電氣株式会社及南庄電氣商會を譲受け、更に昭和十五年十二月一日台灣電燈株式会社を昭和十九年八月一日東台灣電力株式会社を合併せり。

2 資本金及發電力 (昭和19年度末現在)

事業	資本金	拂込資本金	社債及借入金	積立金	發電力		
					水力 kw	火力 kw	計 kw
台灣電力株式会社	154,800,000 円	96,750,000 円	228,285,890 円	25,229,860 円	266,945 kw	54,284 kw	320,229 kw

(昭和19年度末現在)

3 電氣需要数

事業	電燈		電力(キロワット)	電熱(キロワット)
	燈数	キロワット		
台灣電力株式会社	1,458,722	—	223,735	10,032

備考 電力には小口電力、大口電力を含む

4 損益 (昭和19年度末現在)

事業	利益	損失	純利益	配当率	
				上期	下期
台灣電力株式会社	31,369,847	24,388,233	6,977,614	7分	6分

5 電燈料金 (定額料金中には器具損料10銭を含む) (昭和19年度末現在)

事業	定額					従量1キロワット時
	5 燭光	10 燭光	15 燭光	40 燭光	60 燭光	
台灣電力株式会社	円 .75	円 .85	円 .95	円 1.30	円 1.50	銭 18

6 電力料金及電扇電熱料金 (昭和19年度末現在)

事業	電力料金		電扇電熱	電熱1キロワット時
	従量1キロワット時	電料金	電料金	
台灣電力株式会社	晝 夜 間	晝 夜 間	晝 夜 間	銭 5.0
	低圧 4.0銭—2.50銭	5.0銭	1.40 円	
	高圧 4.0銭—2.50銭	2.20 円		

7 発電力累年比較

年次	供給用			合 計
	台湾電力株式会社	其他の会社	計	
	キロワット	キロワット	キロワット	キロワット
昭和12年	水 166,550 火 21,064 計 187,614	1,932.5 1,902.0 2,834.5	168,482.5 21,966.0 190,448.5	169,527.7 552,405.4 221,532.9
昭和13年	水 166,550 火 18,564 計 185,214	1,082.0 1,932.5 3,014.5	168,482.5 19,646.0 188,128.5	169,637.5 55,707.3 225,344.8
昭和14年	水 166,500 火 53,564 計 220,064	3,932.5 980.0 4,912.5	170,482.5 54,544.0 225,026.5	171,672.5 96,998.3 268,670.8
昭和15年	水 167,657 火 54,024 計 221,681	2,860.0 540.0 3,400.0	170,517.0 54,564.0 225,081.0	171,663.0 102,167.0 273,830.0
昭和16年	水 180,660 火 54,024 計 234,684	16,235.0 510.0 16,745.0	196,895.0 54,534.0 251,429.0	198,041.5 104,702.35 304,743.89
昭和17年	水 196,960 火 54,024 計 250,984	16,235.0 310.0 16,545.0	213,195.0 54,334.0 267,529.0	214,341.50 104,502.35 318,843.85
昭和18年	水 222,410 火 54,034 計 265,444	40,235.0 310.0 40,545.0	251,645.0 54,334.0 305,979.0	252,791.50 104,502.35 357,293.85

8 発電々力量累年比較

年次	台湾電力会社	其他供給事業者	計
	キロワット時	キロワット時	キロワット時
昭和12年	569,122,103	9,958,998	579,081,101
同 13年	680,868,689	14,044,129	694,912,818
同 14年	804,147,411	15,217,815	819,365,226
同 15年	817,231,713	15,511,452	832,743,165
同 16年	1,008,170,248	16,492,042	1,024,662,290
同 17年	1,032,910,699	63,887,123	1,096,797,822
同 18年	1,059,918,832	111,848,493	1,171,767,325

9 電気需要数累年比較 (其の一)

年次	電 燈			電 力			大 口 電 力		
	需用家数	燈 数	キロワット数	需用家数	キロワット数	需要家数	キロワット数		
昭和12年	台湾電力会社	226,950	795,391	6,193	23,143	98	84,063		
	其の他の会社	65,554	175,360	1,500	5,086	13	1,975		
	計	332,504	970,751	7,693	28,229	111	86,038		
昭和13年	台湾電力会社	277,722	847,989	6,569	24,674	114	92,026		
	其の他の会社	68,383	187,199	1,662	6,023	11	1,737		
	計	346,105	1,035,188	8,231	30,697	125	93,763		
昭和14年	台湾電力会社	284,526	902,426	7,038	27,235	129	102,128		
	其の他の会社	73,143	205,685	1,770	6,638	12	2,025		
	計	357,669	1,108,111	8,808	33,873	141	104,153		

昭和15年	台湾電力会社 其の他の会社 計	365,491 11,956 377,447	1,166,741 32,189 1,198,930	68,611 1,505 70,116	8,827 215 9,042	36,057 1,241 37,298	150 3 153	114,238 983 115,221
昭和16年	台湾電力会社 其の他の会社 計	389,158 13,025 403,181	1,268,111 37,875 135,986	76,720 11,887 78,601	8,700 232 8,932	38,121 1,265 39,386	183 5 188	150,856 6,662 157,521
昭和17年	台湾電力会社 其の他の会社 計	409,589 13,388 422,977	136,125 39,800 175,925	82,337 1,999 84,336	9,315 250 9,565	41,541 1,521 43,062	208 8 216	156,626 18,500 175,126
昭和18年	台湾電力会社 其の他の会社 計	417,584 13,994 431,578	1,436,653 44,320 1,480,973	87,440 2,222 89,662	9,621 279 9,900	45,724 1,662 47,386	244 8 250	161,567 37,429 198,996

10 電気需用数累計比較 (其の二)

年次	電熱その他 需用家数	キロワット数	総計 キロワット数	外に電気事業者に供給 事業者数		キロワット数
				事業者数	キロワット数	
昭和12年	台湾電力会社 其の他の会社 計	25,682 2,475 28,156	6,892 661 7,553	5 1 6	4,700 140 4,840	
昭和13年	台湾電力会社 其の他の会社 計	28,012 2,518 30,530	7,385 782 8,167	5 2 7	4,700 140 4,840	
昭和14年	台湾電力会社 其の他の会社 計	23,768 2,341 26,109	7,332 881 8,213	5 2 7	4,740 300 5,040	

昭和15年	台湾電力会社 其の他の会社 計	26,518 802 27,320	8,544 142 8,686	227,450 3,871 231,331	— — —	— — —
昭和16年	台湾電力会社 其の他の会社 計	33,349 1,437 34,786	9,427 187 9,614	275,124 10,004 285,128	— 1 1	1,800 1,800 1,800
昭和17年	台湾電力会社 其の他の会社 計	39,189 1,543 40,731	9,867 190 10,057	290,371 22,210 312,581	— 1 1	— 1,800 1,800
昭和18年	台湾電力会社 其の他の会社 計	40,997 1,241 42,238	10,589 229 11,818	305,320 41,542 346,862	— — —	— — —

11 用途別電力利用状況 (昭和16年末現在)

種別	供給用		自家用		総計	
	需用家数	キロワット数	需用家数	キロワット数	需用家数	キロワット数
紡績工業	154	1,657,253	2	250,000	156	1,907,253
金属工業	610	76,812,836	1	800,000	611	77,612,836
機械器具工業	354	3,241,380	—	—	354	3,241,380
化学工業	164	3,742,621	1	5,300,000	165	9,042,621
製材及木製品工業	371	9,290,480	2	4,642,000	382	13,922,486
印刷及製本業	634	4,929,890	5	1,180,000	639	6,109,890
食料品工業	300	348,685	—	—	300	348,685
	2,192	22,636,049	70	36,926,500	3,262	60,562,549

雑工業業	1,163	2,308,157	—	—	1,163	2,308,157
鉱業	152	38,076,936	2	743,000	154	38,819,936
農業及水産業	1,841	7,631,328	6	73,350	1,847	7,704,678
其の他	34,968	29,723,693	5	1,400,000	34,973	31,122,693
軍用	11	132,000	—	—	2	132,000
計	43,905	201,520,314	103	51,314,850	44,008	252,835,164

備考 昭和16年度以降本件調査なし

12 投下資本累年比較

年次	拂込資本金	社債	借入金及支拂手形	積立金	計
昭和12年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	42,937,250 3,569,500 46,505,750	69,627,121 — 69,627,121	7,975,798 1,486,889 9,444,687	15,195,518 1,014,071 16,209,589	135,716,687 6,070,460 141,787,174
昭和13年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	45,750,000 3,753,500 49,503,500	67,428,986 — 67,428,986	7,372,853 2,191,596 9,564,449	16,755,676 1,282,571 18,038,247	137,297,515 7,227,667 144,525,182
昭和14年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	51,812,500 8,753,500 60,566,000	75,129,658 — 75,129,658	6,560,225 2,786,762 9,346,987	16,955,476 1,514,371 18,469,847	150,457,859 13,054,634 163,512,493
昭和15年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	57,187,500 11,184,000 68,371,500	92,560,270 — 92,560,270	7,638,947 4,149,477 11,788,424	18,144,514 155,871 18,309,385	175,541,231 15,488,348 191,029,579
昭和16年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	70,662,500 16,184,000 86,846,500	100,121,905 — 100,121,905	8,441,578 3,751,311 12,192,889	20,735,640 180,834 20,916,474	199,961,623 20,116,145 220,077,768

昭和17年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	77,400,000 23,684,000 101,084,000	118,251,905 118,251,905 —	12,676,849 3,712,599 16,389,448	22,955,600 221,853 23,177,453	231,284,354 27,618,452 258,902,806
昭和18年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	96,750,000 22,500,000 119,250,000	117,782,200 — 117,782,200	15,897,188 9,800,704 25,697,892	22,342,722 — 22,342,722	252,772,110 32,300,704 285,072,814
昭和19年 台湾電力会社	96,750,000	142,467,200	85,818,690	25,229,860	350,265,750

13 損益累年比較

年次	利	益	損	失	純益
昭和12年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	14,726,528 2,585,863 17,312,391	16,996,234 2,800,622 19,796,856	10,984,307 2,010,369 12,994,676	12,658,497 2,170,975 14,829,472	4,337,737 629,647 4,967,384
昭和13年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	20,032,589 3,019,111 23,051,700	20,956,985 2,025,766 22,982,751	15,645,472 2,312,035 17,957,507	15,888,430 1,562,842 17,451,272	4,387,117 707,076 5,094,193
昭和14年 { 台湾電力会社 其の他の会社 計	25,754,716 872,506 26,627,222	25,754,716 872,506 26,627,222	19,305,390 733,485 20,038,875	6,449,326 139,021 6,588,347	

昭和十七年	台灣電力会社 其の他の会社 計	26,799,777 1,308,226 28,108,003	20,302,241 1,149,120 21,451,361	6,497,536 159,106 6,656,642
昭和十八年	台灣電力会社 其の他の会社 計	33,738,883 730,318 34,469,200	25,027,518 663,071 25,690,589	8,711,364 67,247 8,778,611
昭和十九年	台灣電力会社	31,365,847	24,388,233	6,977,614

第七節 台灣電力株式会社

昭和十九年末に於ける会社の事業經營の現況次の如し。

(1) 発電設備	水力 二六箇所	常時出力 一三二、七〇五「キロワット」
設備出力	二六六、九四五「キロワット」	
常時尖頭出力	二二四、四二五「キロワット」	
火力 九箇所		
設備出力	五四、三一四「キロワット」	常時出力 四二〇「キロワット」
予備出力	一八、六六四「キロワット」	補給水力 三五、一七〇「キロワット」
(2) 変電設備		
連絡用出力	「キロボルトアンペア」	供給用出力 「キロボルトアンペア」

(3) 送電設備	一五万四千「ボルト」	計回線延長 二、四九八軒
	六万六千「ボルト」	
	三万三千「ボルト」	
	一万一千「ボルト」	

(4) 配給設備	延長 一一、九三四軒
(5) 供給数量	
電 燈	一、四八〇、九七三燈 八九、六六二「キロワット」小口電力 九、九二二口 四七、三八六「キロワット」
大口電力	二四九口 一九八、九五六「キロワット」電 熱 四二、五三八口 一〇、八一八「キロワット」
計	三四六、八六二「キロワット」
(6) 発電電力量	一、〇〇四、四二八、七四〇「キロワット」時

將來の計画

(1) 最大需要電力実績	
昭和十年実績	七二、一三四「キロワット」
昭和十二年実績	九五、七一〇「キロワット」
昭和十四年実績	一一九、七〇〇「キロワット」
昭和十六年実績	一五七、九七〇「キロワット」
昭和十八年実績	一七七、一一〇「キロワット」
	昭和十一年実績 八三、五四三「キロワット」
	昭和十三年実績 一〇九、七〇〇「キロワット」
	昭和十五年実績 一三一、四〇〇「キロワット」
	昭和十七年実績 一七二、四二〇「キロワット」

(2) 会社の電源計画 目下建設中に属する発電所及計画中に属する発電所左の如し。

霧社第一発電所 二〇、〇〇〇「キロワット」既着手 豊原第一発電所 七一、〇〇〇「キロワット」既着手
天冷発電所 七一、〇〇〇「キロワット」既着手 烏來発電所 二二、五〇〇「キロワット」既着手

第六章 鉱業

第一節 概況

本島に於ける鉱物の分布状況を見るに金属鉱物は極北部より東部に限られ、石炭は北部を主とし、石油は北部及南部に生産す、鉱業は本府の指導助成と業者不断の努力に依り逐年発展を遂げ來り台湾鉱業規則の規定する鉱物三十三種中鉱業権を許可したるもの二十七件、昭和十九年一月現在鉱区數一千四百四十七、面積四億三千三百八十五万余坪にして同年中の鉱産総額は六千三百二十四万余円に及び、其の中産額最も多きは石炭の四千二十九万円でして総額の六四%を占む現在稼行中の主なる鉱物は台北州下合瓜石鉱山の鋼鉱、平林鉱山の水銀鉱、新竹及台南州下海岸及河川流域のジルコン石及モナズ石、台北州及新竹州下の石炭、新竹及台南州下の石油及天然瓦斯、花蓮港廳下豊田鉱山の石綿、台北州下粉島林の雲母、同北投及草山地域の硫黄等なり、本府に於て現在実施中の主なる施設は鉱物及地質調査、金属鉱床調査、石炭調査、油田調査、工業原料鉱物調査等重要地下資源に対する調査を實行すると共に新鉱床の開発

し又石炭買収價格補償金、銅及石炭には之が増産の促進を目的とする特別價格補償金制度を實施する等予計措置を講じ其の効果を挙げ來れり、又台湾鉱業規則の施行に併行し戰時下特に重要鉱物の増産を確保する爲、昭和十三年以降台湾重要鉱物増産令及石油資源開發法を施行し、更に石炭及石油の需給調整に關しては台湾石炭配給統制令、石炭配給調整規則、コークス配給統制規則、石油販賣取締規則及特殊石油配給統制規則等を公布し鉱務行政の遂行に万全を期しつゝあり。

第二節 金属鉱業

第一項 金

本島に於ける稼行金山は台北州下の金瓜石及瑞芳の二鉱山にして其の他に台北州基隆郡金包里、花蓮港廳秀姑山溪畔地域竝に鳳林郡瑞穗庄、台東廳新港郡下に金鉱床の賦存するも何れも試掘探鉱調査の結果稼行價值充分ならず休止中なり。

(イ) 金瓜石及瑞芳鉱山は本島東北端に位し相隣接する両山の開發は實に光緒十九年(明治二十六年)に遡り基隆川筋の砂金の開發に端を発せるものなりと言ふ、金瓜石鉱山は現在日本鉱業株式会社の經營に係り昭和九年以降資本と技術の傾注に依り坑内外採鉱鍊設備を近代化し金増産に努力し來りたるものにして其の青化製鍊設備は昭和八年度以降に於ける政府の産金政策と相俟つて増設に増設を重ね、昭和十四年第三期精鍊設備の完成後は鉱石処理能力月

三九、〇〇〇匁、産金量年二五匁を産出するに至れり、而も産金増加の必要は其の後も愈々増大したるに鑑み更に鉱石処理能力月一八、〇〇〇匁を有する青化製錬所第四期拡張を計画し資材労力の入手難を克服して之が建設に努め殆んど完成の域に到達したる処、政府の金政策の変更に依り昭和十八年度以降金鉱の操業を休止すると共に二次に亘り設備の大半を他の重要施設に轉用、現在に於ては鉱石処理能力月二万匁に減少したる儘休止の状態に在り、此の間本府に於ては同鉱石に対する技術的指導監督を加ふると共に探鉱奨励金製錬設備助成金鑿岩工養成補助金並産業割増金等を交付し施策の万全を期し今日に至れり。

(ロ) 瑞芳山は台陽鉱業株式会社の経営に係り本府の積極的産金奨励施策と経営者不斷の努力に依り異狀なる發展を遂げ、昭和九年の産額は一匁を超ゆるに至れり、爾來順調なる經營を続け昭和十二年には年産一、八匁の最高記録を示せり、此の間本府に於ては金瓜石鉱山と同様探鉱奨励金、設備助成金並に機械工養成補助金、産金割増金の交付等に依り積極的に増産の促進を図り來りたるも産金政策の急激なる轉換に依り、昭和十八年以降事業を縮少し資材労力の大半を金瓜石鉱山の銅部門並に石炭鉱山に轉用し産金は激減したる処、更に最近戦争遂行の防衛施設に対する供出其の他に依り爆藥資材労力等生産要素の逼迫化に依り能率甚しく低下し遂に昭和二十三年三月限り之が事業を廢止するに至れり。

第二項 砂 金

台灣に於ける砂金地域は基隆川沿線並に東部海岸タツキリ溪大濁水溪等の流域にして台灣の重要砂金たる基隆川筋の砂金の發見は今其の実情を詳にせざるも文献に徴するに明治元年より遙に以前の事となり、爾來年と共に盛況の一

之を廢止し採金嚴禁せり、明治二十九年鉱業規則の發布に依り一般に採取を許可せらるゝや再び盛況を呈し、明治三十五年には産額六〇〇匁を示し、本島砂金鉱業は全盛期なりしが爾來漸次衰頹し、最近殆んど見るべきものなき狀態なり、此の間日華事變の勃發に依り政府は金價額の引上げ、砂金採取機の無償貸與、其の他設備の補助等を行ふに及び昭和十三年には一四七匁余の近年に於ける最高記録を現出するに至り、昭和十四年には政府の慫慂により台灣拓殖株式会社と日本産金振興株式会社協同出資に依る台灣産金株式会社を設立し、全島の砂金賦存地に對して試掘調査及砂金の採取事業を行はしめたり、尙本府に於ても「タツキリ」溪上流及大濁水溪上流並に西部霧社濁水溪上流蕃地に於ける河岸段丘及高位段丘に賦存する砂金の試掘調査並に採取を大々的に開始し以て本島砂金の開發に盡力し來れり、然るに昭和十七年以降政府の金政策の轉換と資材労力等の供給困難とに依り經營甚しく困難となり、現在に於ては基隆川筋の一業者を除き他に於ては砂金事業者皆無の狀態となれり。

第三項 銅

現在台灣に於ける産銅は金瓜石鉱山のみにして政府の金政策の轉換に依り全部門の労力資材等を挙げて銅増産の爲に轉用し極力計画増産の遂行に邁進し來りたるを以て其の鉱石品位は低下せるにも係らず、昭和十八年には純銅五、三〇〇匁の産出を示したり、爾來探鉱奨励金設備の新設、改善、補助金、銅價格の引上げ等積極的施策に依り極力増産を助成し來りたるが太平洋戦争の激化に伴ひ、鉱石採掘用爆藥の不足資材の入手難労力の逼迫等に依り生産計画年六、〇〇〇匁の実行は困難なるに至れること並に資材及労力を戦争防衛施設に轉用することの必要に迫られ、昭和二

十年四月生産計画を変更して上銅鉱の採掘に依り七〇〇匁、沈澱銅の採取に依り一、〇〇〇匁、合計一、七〇〇匁としたるが其の後に於ける生産諸要素の悪化は之が実行も不可能ならしむるに至り、現在生産著しく減少を示せり、尙沈澱銅に依る採取銅に於ける屑鉄の入手難と採取率の向上を図る爲、加硫收銅法設備の完成を見つゝあるが本府に於ては昭和十九年度に於て之が建設助成金二十五万円を交付せり。

第四項 水 銀

台湾に於ける水銀鉱山は台北州基隆郡平溪庄平林地内に於ける平林鉱山の外、金瓜石鉱山にも之が賦存あり、前者は日本鉱業株式会社の経営に係り鉱床状況貧弱なる爲、永らく休業状態にありたるが太平洋戦争下重要鉱物として之が確保を図る目的を以て昭和十七年五月以降稼行に着手し、爾來本府の積極的助成に依り、昭和十九年度には約一匁の生産を見たり、昭和二十年に於ては低品位鉱石処理の爲、山元に一日処理能力一五匁の小規模なる浮遊採鉱場を設置し（八月末完成）鉱石の有効処理を図りつゝあり、金瓜石鉱山に於ける水銀鉱は自然水銀を伴ふ含金銀銅並に砒素を含む複雑なる鉱石なるを以て選鉱製錬共に極めて困難にして目下之が有効処理方法を研究中なり。

第五項 砂 鉄

砂鉄鉱床中現在稼行に堪ゆるものは基隆郡金山庄及淡水郡八里庄海岸區域に賦存し、前者は前田鋼業株式会社、後者は吉田純造の経営に依るものにして之が採取量は漸次増加の傾向にあり、昭和十九年度に於ける産量は三、七〇〇匁なり、從來砂鉄の採取方法は極めて簡單且幼稚にして海浜砂中に波浪の爲、自然淘汰を受け集約したるものを採取し之を旧式金槽と称する人力淘汰法を以て分離したるものなるも鉱石の有効処理並に大量生産には不可なるを以て

本府に於ける「テーブル」処理を計画し目下建設中なり。

第六項 マンガン鉱

本島に於けるマンガン鉱の賦存地域は台北州蘇澳郡西帽山地内にして稼行鉱山は砂田隣太郎個人経営に依る西帽山マンガン鉱山あるのみなり、曩に本府に於て実施したる調査に依れば其の推定埋藏量は相当豊富なるも品位低く（三五％以下）現在地表に近くの良い部のみ採掘により「燐寸」高級ガラス用に供さるゝのみにして今後大量を望む場合は試掘調査等に依り之が賦存状況を究むるの要あり。

第七項 ジルコン及モナズ石

ジルコン及モナズ石は主として新竹州及台南州に相当豊富に埋藏せるが之が開発に關しては其の重要性に鑑み、昭和十七年度以降台湾稀元素株式会社台北及新竹州及國安産業株式会社（台南州）に於て之が開発に当らしめつゝあり会社は之を採鉱の上ジルコン石は之を九〇％程度の品位に選鉱し内地に送り、又モナズ石に付ては稀元素工業化学工場に於て化学処理を行ひ、トリウム、セリウム、ネオジウム等を製出しつゝあり、昭和十九年中に於ける生産実績ジルコン一四〇、七三九匁、モナズ石二、二二三匁なり。

第三節 石炭 鉱業

第一項 概 況

台湾に於ける石炭は本島北端より新竹州下大安溪に亘る地域に分布し其の埋藏量四億匁と称せられ現在稼行中のも

のは所謂北部炭田にして台北州下基隆郡及台北市を中心として生産総額の九割を占むるも最近新竹州下の炭田も漸く開発の機運に在り、埋藏量豊富なる見込にして將來産炭の中心は漸次新竹州下へ移行するものと思料す、台湾炭の炭系は上、中、下、三系より成り各炭系は夫々数層を爲し炭層概して薄く而かも地殻の変動に依り傾斜又は膨縮を伴ふもの尠らず炭質は基隆郡下猴硐及武丹坑附近のものは火山作用に依り炭化を促進せられ局部的に無煙炭となるものもあるも其の他は総て瀝青炭又は褐炭なり、台湾炭を代表するものは中部炭系にして紫炭と称せられ黒色乃至黒褐色を有し一般汽罐用燃料に適し、又下部炭系のもは油炭と称し漆黒色にして粘結性強く冶金用コークスの原料に供せらる、上部炭系は炭化の程度低く黒色を呈し所謂埋木に類するものにして重要用途に供し難く総じて炭質は脆弱にして風化し易く硫黄分多きを欠点とするも灰分少く揮発分多きを以て火着の良好なるを其の特徴とす。

第二項 生産

本島に於ける石炭は古くより之が採掘を爲し居たるものゝ如きも領台當時は殆んど廢坑の状態にして本府に於ては直に北部炭田の調査を実施すると共に鋭意之が開発に努めたる結果、生産機運を醸成し更に明治三十九年七月台湾鉱業規則(律令)を公布するに及び鉱業が一般に許可せらるゝこととなり、漸く増産の相を呈し同四十一年本島に於ける縦貫鉄道全通するや一般産業の発達と共に船舶の出入頻繁となり、次で製糖工場の新設等に依り島内に於ける需要が急激に増加し、石炭の生産も之に追従して明治末期に於ては二一五万噸、歐洲大戰後の大正八年には百十萬噸、同十四年には百七十萬噸と増加の一途を辿り、続いて昭和二年南支に對英ボイコット勃発するや國內炭の供給杜絶し、本島炭之に替り南支方面向輸出活潑となり之が爲、本島の炭況益々好況を極め新企業の誘發等に依り同年の生産は百

萬噸に達するに至れり、然るに排英ボイコット總動の反動に引続き世界的な不況は本島の大半が海外を販路としたる關係より其の影響亦甚大にして、昭和三年以降は漸次減退を見るに至り昭和七年の如きは百三十五萬噸に減産、昭和八年以降は本島に於ける諸産業の興隆並に船舶燃料の需要増加等に依り再び發展を続け、日華事變の勃発するや昭和十二年の如きは二百八十三萬噸と云ふ新記録を示せり、然るに本島に於ける石炭鉱業は炭層稀薄なると褶曲膨縮常ならざること等自然的制約を受けること多大にして亦採掘箇所を深部移行等に依る採炭條件の悪化は生産資材の入手不円滑等に依り拍車をかけ加ふるに昭和十六年に於ける太平洋戦争勃発前後より船舶燃料、輸移出炭の激減等に依り山元駅頭港頭の滞貨累積し、爾來戦争に依る生産條件の悪化に伴ひ逐年減産を示し、需給甚しく逼迫の趨勢に傾きたるを以て本府に於ては

(一) 石炭の分布及品質に関する基本的調査(昭一四開始)

(二) 生産計画の樹立

(三) 石炭増産奨励金、新坑開発助成金、生産費補償金、買取價格報償金、特別價格報償金等の交付(昭、一五以降) 雜工場用等に止り其の数量及生産量の四〇％程度に過ぎず其の他は主として船舶用燃料及輸移出炭として島外に供給せられたり、然るに昭和十二年支那事變勃発以來各種生産力拡充計画実施並に重要産業の興隆に伴ひ、需要著しく増大し、就中交通運輸業、電氣事業、化学工業、窯業等に於て特に急激なる需要増を見るに至りたるのみならず地理的並に經濟的事情より中南支一帯に對し、更に大東亞戦後は南方諸地域に對し其の緊急需要を充さざるべからざる事情に在りたるに反面生産は戦争下に於ける生産條件の悪化に依り反て減産の一途を辿り、本島の石炭事情は極度の

区分	昭和14年度	昭和15年度	昭和16年度	昭和17年度	昭和18年度	昭和19年度
前年度より繰越 生産額 (現金無煙炭) 供給	118,029 2,616,575 8,990 1 2,743,594	209,966 2,826,841 6,500 1 3,043,307	291,966 2,826,841 5,350 3,084,598	543,736 2,310,965 11,825 2,866,526	337,368 2,323,665 4,400 2,665,433	293,636 1,661,953 — 1,955,589

[illegible]

第一項 概況

本島に於ける油田地域は全島の過半を占め地質の構造、石油の埋藏に適し油質亦優良なるに加へ石油層と密接なる關係に在る天然の噴出地域亦極めて廣汎に亘り噴出量大にして之が用途亦カーボンブラツク及重要化學工業原料として利用せらるゝを以て極めて重要視せらる、本島に於ける石油鉦業は總て帝國石油株式会社の經營に係り現在稼行中の地域は新竹及台南の兩州下にして原油は主として新竹州下出礦坑に於て生産せられ台南州下凍子脚及竹頭崎に於ては少量の噴出を見たるも現在産油を見ず、鉦山を別記すれば左の如し。

- 竹東鉞山（新竹州）瓦斯 錦水鉞山（同）瓦斯、原油 出磺坑鉞山（新竹州）瓦斯、原油
 凍子脚鉞山（台南州）瓦斯 大重溪鉞山（同）瓦斯 片山鉞山（同）瓦斯
 竹頭崎鉞山（同、）現在試掘中

而して石油の試掘に關しては明治四十二年度以降補助金を交付して之が促進を図り着々実績を挙げ來り、就中出礦

油田の開発は最も成功を収めたるものなるが昭和九年度より該補助金を年額三十万円に増額し、更に本島に於ける油田は油層の關係上深試掘を要するものあるを以て斯に三千米の試掘井に對し之が経費の半額を補助することとし、昭和十一年度以降同三十年代に至る間三五五万円の補助金を交付し來れるが一方時局は石油の急速増産を希望するの要あるに鑑み之に對処する爲、昭和十三年度以降三箇年繼續補助金總額一百六十万円を以て淺掘井に對しても之が補助金を交付したるが他面未開發油田に於ける淺層の開発を促進せんが爲、五百米級油井に對しても補助金を交付し、淺掘補助と合せて總計五、七三七、二五〇円を交付せり、右の結果深部油層試掘を助成したる錦水口式三十三号井に於ては深度三千五百米に於て日産約三ヶの原油の産出を見、三箇年間日産二ヶの産出を続けつゝありて本島に於ける深部油田の存在を認むることを得、又竹頭崎口式第四号及第五号井は夫々深度約千米及七百五十米に於て良質の原油噴出し本島淺部油田の將來に大曙光を齎したり、尙前記補助計画の實施と共に天然瓦斯の急速増産を図る爲、更に昭和十七年度以降試掘助成せられつゝあるも戰事下、資材勞力技術等生産要素の惡化に依り、試掘計画意の如くならざりしも昭和十七年度二本二十万円、同十八年度及十九年度に於て三本計八十三万円の補助金を交付せり。

第二項 需 給

本島に於て消費する石油は揮發油に付ては島内産油を以て充當しつゝあるも燈油、輕油、機械油及重油は大部分之を日本内地より移入に依存せざるべからざる実情なるが最近日本内地の生産狀況竝に海上輸送等の關係上之が移入は計画數量の半にも達せず、特に最近殆んど移入杜絶の狀態に在るを以て此の儘推移するに於ては勿論交通運輸は重要工場事業場の操業にも甚しく惡影響を與ふるの虞れありたるを以て島内生産及植物油其の他代用品の増産を促進す

るべく努力するに付ても其の取得を迅速に實施し極力供給力の増大に努め、更に配給に於ても重油に依る配給の合理化を強化し以て需給調整の万全を期し今日に及べり、而して燃料酒精を除き揮發油其の他も島産極めて僅少にして今後に於ける補給も島外に仰ぐの外なき実狀にあり、依而在庫品を照合し今後平和産業に支障なからしむる配給の適正化を期しつゝあり、尙現在の月配給數量概ね左の如し。

燃料酒精	一、八〇〇ヶ	揮發油	五〇ヶ	燈油	六〇ヶ
輕油	四〇ヶ	重油	二〇〇ヶ	機械油	一三〇ヶ

尙前記の如く島産極めて僅少なるものあるも配給制度を採用せば在庫品に依り今後五、六箇月は維持し得る見込なり、次に石油精製業は島産原油を対象とする日本石油株式会社台灣製油所あるのみにして戰爭中爆撃に依り相當の被害ありたるも製油裝置に異狀なく作業続行中なり。又南方原油の処理を目的とする高雄製油所も本年二月略完成せるが原料の還送なく作業開始に至らずして昭和二十年六月産業設備營團（在東京）に賣却せられたり。

台灣製油所に於ける最近二箇年の生産実績竝に計画

品 目	昭和十八年度 生産実績	昭和十九年度 生産実績	品 目	昭和十八年度 生産実績	昭和十九年度 生産実績
航空揮發油	一、七九六ヶ	一、八七二ヶ	普通揮發油	二、一一七ヶ	二、二〇七ヶ
燈油	七二三ヶ	九二〇ヶ	輕油	一、一四九ヶ	六八二ヶ
機械油	二二五ヶ	一九〇ヶ			

第五節 其の他の鉱業

第一項 石 綿

本島に於ける石綿は主として東部山岳地帯（花蓮港及台東廳下）に比較的廣範圍に分布し角閃石系に属し鉱量多きも性質溫石綿に化し低劣なり、石綿の生産は從來花蓮廳豊田附近山地に於て個人經營に依る小規模鉱山あるに過ぎざりしが調査の結果此の地域には相当豊富なる埋藏あること確認せられ之が合理的開發を目的とし、昭和十六年九月台灣石綿株式会社（資本金三百万円）を設立し爾來極力増産を企圖し來り、昭和十八年度に於ては精製石綿八七〇瓩の成績を見たるが十九年度に至り勞力及資材等の不足に依り其の生産実績は五四四瓩に低下せり、尙石綿の増産を図る爲、毎年探鉱獎勵規則に依り獎勵金を交付する外（昭和十九年度交付額一一九、八五六円）之が設備に對して助成すべく石綿精製工場建設に對し十萬円の補助金を交付せり。

第二項 硫 黃

本島に於ける硫黃の年間需要量は近年約二萬瓩程度なるも島内生産は其の一割にも達せず、パルプ用製糖用の大口需要に關しては総て内地産硫黃に依存し來れる状態なり、分布状況は概ね台北州七星山及大屯火山一帯に限られ教者の經營者に依り小規模經營に於て古くより稼行せられ來れるが其の鉱量貧弱品位亦低劣なるのみならず、鉱山は山地辺陲の地に位する爲大規模經營に適せず、昭和十二年の生産量一、三〇〇瓩を最高とし、爾來年々減産の傾向を示せり、然るに近年硫黃移入の困難化に伴ひ島内需給の逼迫せるに鑑み、探鉱獎勵金の交付技術指導等之が増産助成を圖

昭和十八年度に於て年産約八〇〇瓩の成績を収めたるも其の後戦争の進展に伴ひ勞力資材等の不足に依り同様の増産を見るに至らず其の生産額は一七八瓩に低下せり。

第三項 黒 鉛

台灣に於ける黒鉛は其の分布狹少、性状土狀黒鉛にして品位亦良好ならざる爲（含有固定炭素三〇—四〇％程度）用途も制約せられ、從つて殆んど鉱業として成立すること困難なり、其の島産の需要は從來大部分を内地（主として朝鮮産）に仰ぎたるも近年輸送其の他の事情に依り、日本内地に依存し得ざるに至りたるを以て昭和十七年台北州宜蘭郡下に於て台灣黒鉛合名会社及文山黒鉛鉱業所が夫々、日星庄及礁溪庄に之が開發に着手し、昭和十九年度に於て前記二者合計八九五瓩の生産を挙げたるの外、更に昭和十九年度に至り台中州東勢郡下の東亞黒鉛鉱業に依り稍良質の黒鉛に付採鉱に着手せるも台灣今後に於ける積極的開發には尙充分なる研究調査を要す。

第四項 雲 母

雲母は鉱床の見るべきものなく從來鉱業として稼行せることなかりしが今次戦争の進展に伴ひ之が開發の緊迫せるに鑑み、主として軍需に充当する爲、昭和十八年度末より台北州蘇澳郡粉島林に於けるベプニタイト鉱床に付、台灣拓殖株式会社をして探鉱に着手せしむると共に一部採掘を継続し來り、昭和十九年度に於て三八瓩二五三（生雲母三六二瓩、剝雲母三瓩四三、屑及粉三四瓩八四八）を生産せるも良質雲母の歩留少く事業として成立すること困難なる状態に在り、尙右事業助成の爲昭和十九年度に於て探鉱獎勵金二九、〇〇九円を交付せり。

第五項 白 雲 石

本島に於けるパルプ事業用マグネシヤは総て日本内地及滿州國方面より入手の上使用し來れる。処戰爭に依る船腹の拂底に伴ひ之が入手困難となりパルプ事業に大いなる支障を招來せるを以て花蓮港廳下チャンカン溪流域一帯に比較的豊富に賦存せる白雲石（ドロマイト）を代用すべく同廳下豐田商事社に依り昭和十九年十一月之が採取に着手、同年度中一、六八四屯の生産を見たり、パルプ用として白雲石はマグネシヤに比し効率低劣なるも石灰石を使用する場合に於けるが如き欠点少く且操業の簡易なる点及礦量の大なる点等より見て今後之が利用上調査に値するものと思料す。

第六項 燐 鉍

台北州基隆郡綿花峻及澎湖島の一部に古くより之が存在を知られたるも埋藏量品位共期待出來ざるも今後研究を進むべきものと思料す。

第六節 地下資源調査

第一項 地質調査機關

台灣に於ける地下資源調査事業は久しく鉍務課に於て鉍務行政の傍之を實施し來り稍々本格的に實施せる大正十五年以降も其の調査機關は鉍務課内の一係たるに過ぎざりしが、昭和十九年五月五日勅令第三百二十四号を以て官制を公布、台灣總督府地質調査所として獨立するに至れり、現在所長技師（奏任）の下に第一部（基本調査及土木地質調査）第二部（金屬鉍床調査、工業原料鉍物調査）第三部（炭田調査、油田調査）第四部（測量及製図）の四部及庶務

課を構成せらる。

第二項 基本図幅調査

基本地質図幅調査は大正十五年より技師一、技手二を以て一班を編成して之を開始し、全島を縮尺五万分の一、地質図幅百二十区に分ち台灣地質図幅を完成せんとするものなり。五万分一地質図幅一図を完成するには一班にて一箇年を要し、従つて全図幅の完成には長年月を要するを以て昭和十年本計画を建直し重点主義により交通不便地區不備にして調査困難なる高山地帯の五十一図は一應之を十万分一図十五図として調査刊行することとなしたるを以て第一期に完成するものは五万分一地質図幅六十九図十万分一地質図幅十五図となりたり、而して昭和七年度以降油田調査の定員の内、技師一、技手三を本図幅調査に應援せんと二班の編成を以て之に當ることとなりたるを以て昭和十四年度迄に五万分一図幅二十三図、十万分一図幅八図の完成刊行を見たり。昭和十四年後半期以後に於ては砂金鉍床調査に全員を動員せられ、且大東亞戰爭勃發後は各種軍需鉍物資源調査の爲、本調査の定員は挙げて緊急資源調査に充當しつゝある状態にして加之應召軍要員として南方轉出者等多數出せる爲本調査は昭和十五年以降中止の状態なり。

第三項 土木地質調査

本島工業化建設の進展に伴ひ電源調査、貯水池及堰堤構築、工業地帯建設、港灣施設、鐵道道路建設の大土木工事及食糧増産計画実施に伴ふ水利施設等の爲、基礎地盤地質調査の要増大するを以て從來より鉍物及地質調査の傍、許す限り受託調査の形式にて右の要求に應じ來りたるが昭和八年度以降は図幅調査事業の一部を繰延べ日月潭、清水溪、霧社及八斗子等の各發電所工事予定地域の基礎地盤調査及尖山埤鹿寮溪等の水利用貯水池の地盤調査、基隆市嘉

義市等上水道拡張工事地域の地質調査を実施、近くは大甲溪発電工事関係事業地及達見堰堤構築予定地の地盤、地質調査及清水溪天然「ダム」利用問題に関する基礎調査に従事、大東亞戦争後半に於ては台湾要塞化に伴ふ築城工事に全面的に協力し來りたり。

第四項 金屬鉱床調査

本島中央山脈及斜面に分布せる結晶片岸地帯に主として賦存する金、銀、銅、硫化鉄「マンガ」等の既知重要金屬鉱床十三箇所の調査を目的として昭和十二年度以降五箇年計画、予算年額四万三千円、定員技師二、技手四を以て本調査を開始したるも昭和十四年度後半期以降段丘砂金の發見に伴ひ砂金鉱床調査に全力を傾注することとなりたる爲に此の内七鉱床の調査を完了せるに止まれり、其の後図幅調査の成果として發見せられたる金、銅、硫化鉄、ニッケル等の重要金屬鉱床の露頭十七ヶ所を數ふるに至るを以て第一期調査にて未調査となりたる六ヶ所を加へて二十三箇所の金屬鉱床露頭賦存区域及磁鉄鉱、ジルコン、モナズ石等特殊鋼合金劑、人造石油触媒等を使用せらる重要鉱物を含む漂砂鉱床の調査を目的に昭和十七年度以降更に五ヶ年計画を以て第二期調査実施中なり、而して昭和十八年以降特に地質調査所独立後に於ては是迄の事業計画に捉はれることとなり、且應召南方轉出等による人員減少に對処して緊急戰需物資の調査及採掘指導に従事し來れり。

第五項 工業原料、鉱物調査

本島は硫黄、明礬石、石灰石、白雲石、石綿、白雲母、ジルコン、モナズ石、バナジウム、ラテライト、水晶、珪砂、白土等の各種工業原料鉱物の賦存に恵まれ居ること從來の諸調査により知られたる処なるも未だ其の調査の爲に

經費計上せられざりしが、昭和十七年度地下資源調査費、年額九万三千円計上せられたるを之が調査を開始することとし金屬鉱床調査及低質図幅調査の定員を流用し先づ硫黄、石灰石の調査を開始したり、引続き白雲母鉱床、石膏鉱床、白土鉱床等の調査を行ひ十九年度以降は應召等により極端なる人員減少に對処しつゝ白雲母、白雲石鉱山の採掘指導に従事し來れり。

第六項 油田調査

台湾には天然瓦斯、石油、流火山等石油、地表徴候甚だ多く其の分布は中央山脈地域を除きたる全面積の三分の二の廣きに及ぶ、油田調査昭和二年度より四箇年継続事業として經費年額約五万円、定員技師二名、技手五名を以て新竹台南及高雄三州下の既知八油田面積約四千平方呎につき之を実施せり。本調査は昭和六年度を以て完結せられたるも尙台北、新竹、台中及台南各州下の一部及東海岸山脈地帯の廣大なる地域に亘る含有第三紀層の調査に手を触れず且主要産油地たる中部油田、南部油田の中間区域の調査未了の爲、兩者の含油層の對比を困難ならしめ居るを以て之等地域に引続き油田調査を進むる必要を認め、昭和十年度より六箇年計画にて技師三、技手五の定員を以て第三紀層地帯約一万平方呎の調査を実施せるが右の結果一時衰微の傾向にありたる出礦坑及綿水油田の隆昌及竹東、凍子脚、六重溪、牛山、竹頭崎等各新油田の開發を見るに至り多大の成果を收めたり、然るに未だ地表徴候の存する未調査区域及概査を終れるも精査未了の区域を存し且調査区域間相互に連絡を欠くの状態の儘存せるを以て更に第三期計画として昭和十六年度より六箇年計画を以て面積一千平方呎の概査と約六百平方呎の精査を続け併せて約一万九千平方呎の踏査を実施、各調査区域の連絡關係を明にし本島油田全体の地質構造及層位關係を明かにし本島油田の開發促進を

図る目的を以て之が調査を開始せるが大東亞戦争勃発後の石油事情の変化により本調査員を以て台湾産業の維持発達
の爲に重要な炭田調査に振り向けつゝありて油田調査は昭和十七年度より一時中止なり。

第七項 炭田調査

石炭の調査に関しては昭和十四年度以降定員技師一、技手四、経費約十一万円を以て石炭埋蔵量調査実施せられた
るが本調査は主として試錐による方法を以て鉱務課鉱業係の職員の手にて実施せられ地質調査所独立後も本経費は其
の定員と共に鉱務課に配置せられつゝあり、地質調査所としては従来共鉱務課よりの依頼に應じて協力援助を爲し來
りたり、大東亞戦争勃発後石炭の重要性増大し來り石油事情に重大なる変化ありたる後は油田調査担当職員を以て新
炭田開発の目的を以て南庄、カラパオ両炭田の埋蔵量調査、阿里山炭田概査等に従事、十九年度來の石炭事情悪化後
は稼行炭坑の技術指導を実施して石炭増産に積極的に協力しつゝあり。

第十二編 財政金融及貿易

第一章 財政

第一節 特別會計

第一項 台灣總督府特別會計

第一目 本府財政の獨立

明治三十年本府特別會計の設置(明治二十八年臨時軍事費)せられ、次で明治三十二年度「二十箇年財政計畫」を樹てたる當時に於ては本府の歳計は明治四十二年度迄一般會計より総額三千七百四十万円の補給を得て経理すべき予定なりしも其の後右計畫に基きて土地調査、專賣制度、事業公債法、地方税制等幾多の劃期的事業の実施せらるゝやそれに伴ひ歳入の増加実に予期以上速かなりしと又一般會計に於ても偶々日露戦役に遭遇して歳計上種々の都合ありしとに依り、本府特別會計の明治三十七年度迄総計三千四十八万円を一般會計より補給を受けたるのみにて明治三十八年度に至り全く財政の獨立を得たり、爾來台灣經濟の順調なる發展に伴ひ其の財政も益々充實し事業交通教育衛生其の他各般の國家施設は活潑に実施せられ台灣財政は台灣今日の發展を來したる物的基礎たる使命を果すを得たり。

第二目 台灣財政と内地財政との相互依存關係

内地財政より台灣財政への援助の主なるものは

(1) 明治二十九年より同三十七年度に至る補充金其の総額は三千四十八万円

(2) 明治三十四年度より大正三年度に至る内地負担砂糖消費稅收入の台灣財政への受入額其の総額は五千五百九

十三万円

(3) 台湾事業法に依り台湾の鉄道、港灣其の他各般の産業基礎施設の爲にする公債金の法律限度二億七千三百四十万円

(4) 昭和十八年度法律第九十四号に依る米穀の増産又は供出確保及企業整備の資金に充てる爲の公債金の法律限度一億三千二百万円

台湾財政より内地財政への貢献は昭和十二年度に初る軍事資金分担にして昭和十一年度より同十九年度迄の繰入総額は三億八千七百九十七万円なり、昭和十一年に至る迄は台湾は日本の軍事費に付て全く其の負担を免れ來りたるものにして昭和十二年度以降の繰入は余裕金及租税專賣等の増徴額の一部なり、昭和二十年度の繰入予定額は二億八千八百八十七万円にして未だ其の繰入を実施せず。

第三目 昭和二十年度予算概況

要之本府の財政は過去幾多の曲折を経つゝも年を逐て愈々膨脹し來りたるものにして今之を其の昭和二十年度予算歳出入共各々八億二千八百余万円に就きて見るに明治三十年度決算歳入一千一百余万円、歳出一千余万円と照比して歳入に於いて約七十五倍、歳出に於て約八十三倍を突破するに至りたる程にして之畢竟本島産業の興隆を立証するものに他ならず而して又其の歳入の主なるものは租税並營業收入にして、前者は總收入の約二〇%、後者は總收入の約四四%を占め、如何に本府財政が經濟景況の波動に導向せしめらるべき性質のものなるが亦自ら容易に推断し得らるべし。

然るに本年度は本年一月以降漸次激化する空襲被害等の爲、財政は重大なる打撃を被り歳入は激減し之が經理には異常なる苦心を要する所にして之が歳入欠陥は左表の通り三億四千六百八十三万余円に達する見込みなり。

歳入欠陥額表

經常部		臨時部	
租税及印紙收入	四二、一四四、九八七円	臨時租税及雜收入	四三、六九一、九九四円
官業及官有財産收入	二五八、四〇四、一七七円		
雜 收 入	二、五九四、六六九円	合 計	三四六、八三六、八二七円

第二項 台湾官設鉄道用品資金特別会計

台湾官設鉄道資金會計法は明治三十五年法律第十三号にて制定され明治三十五年五月勅令第一二七号にて施行期日は明治三十五年より定めらる、初年度に於ける資金は僅に十万円なりしが爾來鐵道事業の發達に伴ひ、大正七年度に於て法律の最高額五十万円に達したるを以て昭和二年三月本法を改正（法律第五号）して資金最高額九十万円を百万円と爲すと共に其後漸次繰入増額して昭和十二年度に於て再び法律の最高額百万円に達したるを以て昭和十五年三月法律第一五号を以て本法を改正し資金最高額を二百万円とし、昭和十五年度に於ては二十万円を台湾總督府特別會計より繰入増額し資金額を百二十万円となし、昭和十七年度に於ては五十万円を増額し三度法律の最高額二百万円に達し資金予算は一千七百万円に増額され以て鐵道及自動車事業の円滑なる進展を期しつゝあり。

第三項 台湾米穀移出管理特別会計

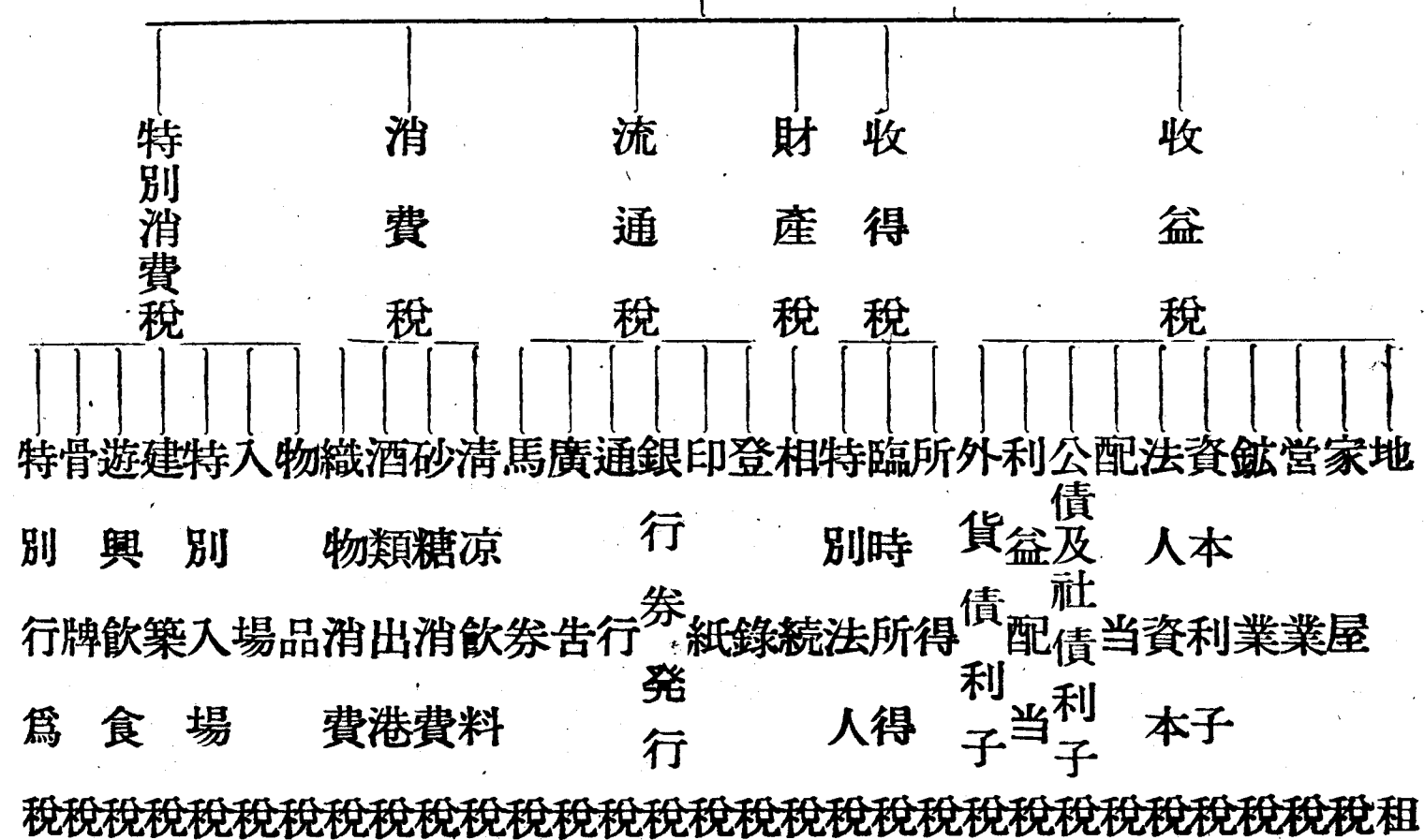
本島に於ける劃期的産業政策である台湾米穀移出管理事業は第七十四議会の協賛を経て昭和十四年十月一日より台湾米穀移出管理特別會計法及台湾米穀移出管理令（昭和十四年律令第四号）に基き実施せらるゝに至り之が爲、主管局たる米穀局が設置せられたり、本事業の目的とする処は本島重要産業の調和的発達並に農業經濟の安定向上等を圖ると共に積極的には土地生産力を向上し以て本島特有の農業資源の利用開發を徹底し本島の産業的使命を達成せんとするものにして本事業の運用を円滑ならしむる爲、中央と緊密なる連絡を採り一定年次の生産目標を樹て米穀生産に計畫性を加へ月別の移出計畫に依り移出を爲し、又管理米の買入は島内各州に設置せられたる納入組合より之を爲すことゝなれり、而して昭和十四年産米の内地及朝鮮を通ずる米穀事情の異変に際しては克く其の急を救済し、爾來島内米穀の需給調整を期しつゝ移出米穀の確保に努め來りたるも、時局緊迫に伴ふ戰時下食糧政策に対処せんが爲には極力米穀の浪費逸脱を防止し供出促進を図り、移出米のみならず島内消費米及主要食糧農産物等に付ても之を管理し食糧全般に亘り周到なる需給計畫を樹立し内地移出米穀の増大、島内配給の円滑なる運行を期し以て内外地を通ずる我國食糧政策に即應するの要あるを以て、昭和十六年第七十七臨時議會に於て台湾米穀移出管理特別會計法の特例に關する法律及台湾米穀等應急措置令（昭和十六年律令第十一号）の制定を見、尙本法律施行に伴ひ昭和十六年度追加予算として歳入六五、六六三、五四九円、歳出七五、七四一、二〇二円の公布となり、島内消費米並に主要食糧農産物及其の加工品の買入賣渡を実施することゝなり米管令の運用と相俟つて綜合的食糧対策の確立遂行を期しつゝあり。

第二節 國 稅

第一項 概 說

台湾に於ける租稅制度は昭和十二年に於て國及地方を通ずる全般的稅制整理の結果従來の所得稅、地租、區區稅、印紙稅、倉庫稅、台灣銀行券發行稅、砂糖消費稅、織物消費稅、酒精稅、膏鹽稅、關稅、車稅、酒類出港稅、及臨時利得稅の十四種類の外、新に營業稅、資本利子稅、家屋稅、昭和十四年創設、釐金稅、法人資本稅、外貨品特別稅、相続稅及揮發稅の八稅目創設せられたり、昭和十二年に事業稅として利益配當稅、公品及社債利子稅、通行稅、入場稅、特別入場稅及物品稅を課することゝなり、昭和十四年に建築稅及遊興稅を新に追加課稅し、昭和十五年に特別法人稅及配當稅を、昭和十七年に清涼飲料稅、廣告稅及馬券稅を、昭和十八年に特別行爲稅を創設し、昭和十九年即ち昭和二十年五月一日印紙稅を廢止したり、現在台湾に於て施行せらる國稅体系は次の如し。

一、內國稅



第二項 各税の沿革及現制

一、所得稅

本税は明治四十二年法人の所得（第一種）に対してのみ賦課せられ、爾來相當の成績を挙げ來たりたるを以て大正十年新に本島に於て支拂を受くる公社債銀行預金の利子及島外居住者にして本島に本店又は主たる事務所を有する法人より受くる配當賞與（第二種）竝に第二種の所得に属せざる個人の所得（第三種）に対しても課税することなれり昭和十二年の税制整理に當りては第一種、第二種に於て十割、第三種に於ては三割程度の増徴を行ひ、爾後昭和十二年八月には台灣、北支事件特別税令に依る所得特別税としての増徴、昭和十三年四月には台灣事變特別税令に依る増徴而して昭和十五年四月には台灣所得税令の改正に依る増徴、更に昭和十七年四月には大東亞戰爭の財源に充つる目的を以て増徴を行ふ等逐年改正増徴を行はれたり。

二、配当税

本税は昭和十五年創設せられ從來の利益配当税が高率配当に課する臨時税なるに對し、本税は利益配当に對し普遍的に其の二割一分相当額を源泉的に徴收するものなり、而して昭和二十年度徴收予算額は六百六十六万一千百五十円なり。

三、特別法人税

本税は従来各種の租税を免除し來れる産業組合等の特別の法人に対し應分の負担をなさしむる爲、昭和十五年創設せられたり、而して特別の法人（市街庄農業会、州廳農業会、台灣農業会、産業組合、市街庄信用組合、漁業会、州廳水産業会、台灣水産業会、自動車運送事業組合、自動車運送事業組合聯合会、台灣産業金庫、統制組合）の余剰金の性質に應じて其の八分乃至二割六分相当額を賦課徴収す。昭和二十年度予算税額は四十六万四千五百十七円なり。

四、地 租

改隸當時の土地制度は各地方区々にして其の関係帳簿類、或は兵火に焼かれ、或は隠匿せられ散逸して取纏め難く到底租税賦課の基準を求むること不可能なりし爲、総督府は施政当初の四大事業（縦貫鉄道、土地調査、基隆築港、廳舎新營）の一なる土地調査事業を起し其の終了を待つて地租規則を制定せり、此の新規則による改正率は明治三十七年下半期より先づ西部台灣に適用し、大正三年より台東、花蓮港に同五年澎湖廳にも施行し始めて全島劃一の制が布かるゝことゝなれり、但し初めは旧慣に基き單に田畑養魚地のみに止めしが大正四年度より建物敷地にも及し土地の収益高地味の良否、水利運輸の便否等を基礎として定めたる等級を以て賦課の基準と爲せり、然るに右の規定は前記建物敷地に対するものを除きては改定後十数年を経過し、地方の農業状態は當時と大いに異りたるを以て大正四年度以來更に調査に着手し、同七年度中に之を終了し租率及各筆の地租を改定し、八年度より之を新租率とせしが其の後十数年を経過し市街庄の發展、交通の發達、水利施設の整備、農業の改良等諸般の事由に依り土地の収益状態は大いに異りたるを以て、更に昭和五年度以降調査に着手し、同九年度にて之を終了し再び租率及各筆の地租を改訂し同

時に山林雜種地にも新に賦課することゝし、昭和十年分地租より之を新規準としたりしが其後昭和十七年に至り、更に改訂を必要を認められ昭和十七、十八兩年度を以て調査を完了し三度税率の改訂を行ふと共に池沼塩田鉱泉地、牧場及原野等にも新に賦課することゝなれり、昭和二十年度予算税額は一千七万八千三百六十九円なり。

五、家 屋 税

昭和十二年の税制整理に基き創設を企図され昭和十二年六月の台灣家屋調査令に依り創設に関する準備調査を行ひ昭和十四年四月より実施せられたり、昭和二十年度予算税額は百十五万四千五百九十円なり。

六、營 業 税

本税は当初地方税として徴収し來りたるも昭和十二年の税制管理に際し國税として創設せられたるものにして其の課税標準は賣上、收入、購買、報償金額等所謂外形標準を採用し且収益六百円程以上の營業に対し課税することゝせり、昭和二十年度予算税額は二百九十五万一千六百七十八円なり。

七、資本利子税

本島の税制整理計畫に基き昭和十二年に創設せられ台灣に於て支拂を受くる資本利子を甲種乙種に区分し賦課するものなり、昭和二十年度予算税額は二十七万六千六百五十二円なり。

八、法人資本税

本税は昭和十二年三月創設せられ法人の資本に収益を認め其の資本額に付課税するものにして昭和二十年度予算税額は二百九十九万六千九百九十円なり。

九、相 続 税

本税は昭和十二年創設せられたる財産税の一種にして昭和二十年度予算税額は百十二万九千三百十八円なり。

一〇、釐 業 税

本税は明治二十九年に創設せられたる釐区税と昭和十二年に創設せられたる釐産税とよりなり、釐区税は特許税たる性質を有し、釐区千坪毎に年八十銭を徴收し釐産税は收得税の性質を有し釐産物の價格の千分の五相当額を徴收するものなり、昭和二十年度予算税額は四万九千三百四十円なり。

一一、外貨債特別税

本税は昭和十二年三月創設せられ台湾に住居所を有するものを外貨債の利子に課税するものにして、昭和十八年度は三万七千三百八十三円の歳入ありたるも、昭和十八年三月外貨債処理法の施行に依り外貨債へ切換へられたる爲、外貨債利子の支拂無きに至れり。

一二、台湾銀行券発行税

台湾銀行法の規定に依り保証準備発行制限高二千万円を超過して爲したる銀行券の保証準備発行額に対し課税するものなるが其の後改正せられ、昭和十六年三月より二億四千万円を超えて発行せらるゝ台湾銀行券発行額に課税せらるゝことゝなれり、昭和二十年度予算税額は三千九十万円なり。

一三、登 録 税

明治三十二年勅令を以て登録税法中、土地の登記に関する規定を除き之を施行せるが大正十一年登録税法中土地の

登記に関する規定も施行するに至れり、昭和二十年度予算税額は百五十万円なり。

一四、砂糖消費税

明治二十九年三月清國政府時代の税率を参酌し糖業税則を發布し蔗事税と砂糖税とを課することゝせるが三十四年十月一日之を廢止し、砂糖消費税法を勅令を以て台湾に施行することゝせり、爾來十数回に亘り税率改正賦課物件の拡張等をなし、昭和十五年色相課税制度を撤廢し製造方法課税制度とし課税方法の根本的改正を行ひ現在に至れり、即分密せざる砂糖を第一種、その他の砂糖を第二種とし第一種を甲、乙に分類、樽は黒糖及樽入白下糖を甲、其の他を乙とし、第二種も同様甲乙に分類、蔗糖の重量全重量の百分の八十六を超えざるものを甲とし其の他のものを乙とし氷砂糖等を第三種とし製造場より引取る際消費税を徴收する外、家庭用以外の用途に供する砂糖、糖蜜、糖水には特殊消費税を課し居れり、昭和二十年度予算額は三千四百八十九万一千七百九十円なり。

一五、織物消費税

明治三十七年非常特別税として毛織物に消費税を課したるに始まり其の後課税範圍を拡張し其の他の織物にも課したるが、明治四十三年織物消費税法を勅令を以て台湾に施行し現在に至れり、即ち織物に対して綿糸のみを以て組成する織物及全重量百分中五十以上の綿とステープルファイバー混紡糸のみを以て組成する織物又は全重量百分中五十以上の綿とステープルファイバーとの混紡糸と綿糸とを以て組成する織物以外のものに対しては、織物の價格の百分の十五の税率を以て製造場より引取る際引取人より消費税を徴收することゝせり、

一六、骨牌税

明治三十五年より骨牌税則（律令）を実施せり、製造者は一製造場毎に免許料年額六十円を納付する外、骨牌一組に付二十銭の収入印紙を貼用せしめたるが、大正十五年より免許料制度を廃止し現在麻雀にありては一組二十円、トランプ、花札、株札に対しては一組三円、台湾特殊の四色牌に対しては一組二十銭の税率を以て収入印紙を貼用せしめ居れり、昭和二十年の納税見込高は三十万円なり。

一七、廣告税

本税は昭和十七年創設せられたるものにして台湾文化に則し紙に依る廣告を課税の対象とせり、現行制度は昭和十九年の改正に係り新聞雑誌の廣告に対しては廣告料金の百分の三十、ポスターに対しては一枚に付二十銭、チラシ其他に対しては千箇又は其の端数に付六十銭の割合を以て課税せり、昭和二十年予定税額は二万六千九百九十八円なり。

一八、馬券税

本税は昭和十七年創設したるものにして競馬の勝馬投票券賣得金を課税の対象とせり、即ち勝馬投票券の賣得金の百分の四及利戻金の券面超過額に対し百分の十の割合を以て課税し來れるも競馬の中止に依り昭和二十年度予算税額なし。

一九、清涼飲料税

本税は亞熱帶たる台湾に於ける此の種の飲料の必需性に鑑み之が実施を見合せ居りたるが財政の需要に依りて昭和十七年より課税することとし爾來二回の改正を爲し、現行制度は昭和十九年の改正に依り炭酸瓦斯含有飲料を課税の

対象として玉ラムネ壘詰一石に付五十円、其の他の壘詰一石に付七十五円、壘詰以外のもの對し其の使用量一匁に付三十円の税率に依り製造場より移出の際課税しあり、昭和二十年度の予定税額は六十二万三千九百円なり。

二〇、特別行爲税

本税は昭和十八年に創設せられたるものにして奢侈的行爲の課税の対象とし写真の撮影、調髪及美容、書畫の表装、金融機關の保護預りに対し料金の百分の五十、織物及被服類の染色、被服類の仕立写真機等の修繕に對し料金の百分の四十印刷及製本に對し料金の百分の三十の税率を以て課税せり、昭和二十年度予定税額は六十七万五千六百十五円なり。

二一、臨時利得税

本税は昭和十年より実施せられたるものにして時局の影響により利益の増大せる法人及個人に對し其の利得に付賦課せるものなり、昭和十二年以降本税逐年改正増徴が行はれ殊に昭和十五年には第一種所得税中の超過所得税、之に統合し戦争所得税としての機能を發揮し來れるものなり、昭和二十年度予算税額は七百九十七万五千四百一十円なり。

二二、大東亞戦争特別税

昭和十二年事變勃發に伴ひ北支事件特別税後創設せられ所得特別税等五種類を課税せる處、昭和十三年支那事變特別税創設せらるゝや之に包攝せられたり、本税令に基き当分の間、所得税法人資本税出港税を増徴し利益配当税公債及社債利子税、通行税、入場税及特別入場税並に物品税を新に課することとなり、昭和十四年に建築税、遊興税を追加せり、昭和十五年遊興税が遊興飲食税と改められ昭和十八年本税の名称が現行の如く改められたり。

(一) 利益配当税

本税は当初配当率年七分を超える利益配当に付課税せられしが配当税の創設に因り配当率年一割を超えるものに付課されることとなり、昭和二十年度予算税額は十九万五千七十三円なり。

(二) 公債及社債利子税

北支事件特別税令の公債及社債利子特別税として創設せられ支那事変特別税令に於て公債及社債利子税となり、公社債の利子に付賦課するものにして國債に付ては利率年四分、國債以外の公社債に付ては利率年四分五厘を超える利子額に對し課税するものなり、昭和二十年度予算税額は六万二千二百四十二円なり。

(三) 通行税

支那事変特別税令に基き昭和十三年四月より施行せられて昭和十五年以降の税制改正に際し本税に付ても相当の増徴を行ひ収入増加を図ることとなり、昭和二十年度予算税額は二百二十万六千七百七十六円なり。

(四) 建築税

昭和十四年より施行せられ建築價格一万円以上の家屋に付其の建築價格より五千円を控除したる金額に對し百分の十の税率に依り賦課したりしが昭和十六年十二月よりその課税範圍を拡張すると共に税率を百分の二十に引上げ増収を図ることとなり、昭和二十年度予算税額は一万五千二百七十一円なり。

(五) 入場税及特別入場税

本税は昭和十三年に創設し入場者を以て納税義務者としたるも徴税成績に鑑み經營者を以て納税義務者と爲すを安

当とし昭和十九年の改正に依り間接國税とし入場税は演劇、映畫、演藝、觀物、競馬場等に入場する料金を以て、撞球、ゴルフ、スケート場等の使用料金に對し、前者は百分の八十五乃至百分の百七十、後者は百分の八十五乃至百分の百八十の割合により、特別入場税は学生生徒の運動競技場の入場料に對し百分の十五乃至百分の三十五の税率を以て課税しあり、昭和二十年度の入場税の予算税額は百四十四万三千三百七十八円にして特別入場税は時局の影響に依り皆無なり。

(六) 物品税

本税は昭和十二年物品特別税として創設し翌十三年物品税に改正、爾來相亞で五回の改正を爲し昭和十九年の改正後今日に至れるものにして奢侈的物品を課税の對象とし第一種は小賣の際、小賣價格に對し五階級に分ち百分の二十乃至百二十、第二種は製造場より移出の際、移出價格に對し第一種と同様の税率に依り、第三種は飴、葡萄糖、麦芽糖及蜂蜜の重量に依り毎百斤十二円、サツカリン每一疋五十円の税率に依り課税しあり、昭和二十年度予算税額は六百二十三万四千五百九十六円なり。

(七) 遊興税

本税は当初藝妓の花代のみを課税の對象とし昭和十四年に創り専ら奢侈の抑圧と購買力の吸収を目的としたるものにして殊に昭和十九年の改正に當りては正に禁止的税率を以て之に臨みたり、即ち藝妓の花代百分の三百、其の花代百分の百二十、飲食料金最低百分の三十、最高百分の八十とせり、昭和二十年度の予算税額は五百四万九千二百九円なり。

第三項 關 稅 (出港税を含む)

第一目 關稅制度

本島の帝國稅關は改隸当初清國稅務司より引継を受け明治二十八年六月淡水、基隆、安平及打狗に開關したるを其の濫觴と爲す、明治二十九年三月稅關官制の發布あり、清國海關の例に倣ひ右の外、台南を加へ五稅關を置き淡水稅關長は其隆稅關長を、安平稅關長は台南、打狗兩稅關長を兼ねたるが間もなく台南稅關は廢止せられ基隆、打狗兩關は夫々淡水、安平各稅關の支署となり明治四十二年五月安平稅關も廢止せられて淡水稅關の支署となり茲に全島稅關統一の實現を見、本關は曩には淡水港口に、後には台北大稱埕に於かれたるも基隆港勢の發展に順應し大正十年七月本關を基隆に移し台北に出張所を設け後に之を支所に昇格したり、然るに其後高雄港勢の異常なる躍進は同港に稅關新設の必要を生ぜしむるに至り、昭和九年六月稅關官制が改正せられて同年七月一日より高雄稅關が開關せられ基隆、高雄の二稅關となりたるが太平洋戰爭勃發するに及び船舶稼行率及港灣荷役的増強の要請忽諸に附するを得ざる狀勢となり、内地にては稅關が廢止せられて海運局が新設せられ港灣行政の統一が實現せられたるを以て、本島も之に即應して稅關を廢止し基隆、高雄に港務局を新設し、從來の稅關を初め州港務部、交通局、海軍出張所、築港及埠頭事務所を之に統合し港灣行政の統一が茲に實現するに至りたり。港務局は總務、運営及築港の三部より成り關稅行政は總務部に於て之を分掌す、其の管轄区域は基隆港務局に在りては台北、新竹、台中及花蓮港の三州一廳管内にして台北、淡水、花蓮港に支局を、蘇澳、旧港、梧棲に出張所を置き、高雄港務局は高雄、台南台東及澎湖の二州二廳管内にして安平に支局を、台東、車城、北門及馬公に出張所を置き夫々關稅行政に關する地方的事務及關稅警察事務を執

行せしむ而して基隆港務局管内には基隆、淡水、高雄港務局管内には高雄、安平、台南港務局管内には台南、高雄、清英條約に依り開港たりしものを、明治二十九年二月締盟各國との通商條約、本島施行方に關し中外に爲したる帝國政府の宣言に依り確認せられたるものなるが右の内、安平、淡水兩港に往時に於けるが如き殷賑を見る能はず現在僅かに機帆船の出入あるのみにして大量貨物の輸出入の新高築港が未完成なる爲、基隆、高雄の二港に依る外なき現狀にあり、右の外昭和十四年四月花蓮港築港第一次工事竣工に依り同港を開港に指定したるも開港後、内外情勢の交轉に因り庶幾に反したるを以て昭和十八年十二月之を閉鎖したり、尙改隸後對支貿易の必要上戒克船に限り其の出入を許したる所謂特別開港場なるものあり、蘇澳、旧港、後龍、梧棲、鹿港、布袋、東石、馬公及東港の各港が指定せれ嘗ては其の貿易額四十万円に達し地方經濟に裨益せし所尠からざるものありしも戒克貿易の衰退と共に漸次閉鎖され昭和十八年十二月後龍港の閉鎖を最後として本制度は廢止せられたり。

第二目 各稅の沿革及現制

一、關 稅

改隸当初に於ては船舶貨物に對する關稅制度は便宜上暫く旧慣に依ることとし輸出入稅率も清國海關稅率を襲用したるも明治二十九年締盟各國との條約を本島に施行すべきことが中外に宣言せられ、輸出入稅率は内地と同事となるに至り明治三十二年内地に於ては關稅定率法施行と共に輸出稅が廢止せられたるも本島に於ては財源保続の必要上台灣輸出稅及出港稅規則を公布し、暫時之を存続したるが明治四十三年以降之を廢止し、爾後今日迄實質的には内地と何ら異なる所無しと雖も法制的には沿革上聊か異なるものあり、即ち内地に於て明治三十二年關稅法が施行せられ稅關

法が廢止せらるゝや一部を除き之を本島に施行すると共に別に律令を以て台灣關稅規則施行せられ、又明治三十四年律令第十三号（台灣關稅規則に依る訴願に關する件）の施行を見たるが右二律令は昭和十二年廢止せられ爾後名実共に内地と同一制度となるに至れり、而して關稅收入は明治四十二年以來内台關稅統一なる名目の下に、内地一般會計に編入せられ一部を關稅取締費交付金として總督府特別會計に繰入れられたるが大正九年制度改正に依り全部を擧げて台灣特別會計の收入に繰入せられ以て今日に及べり、昭和二十年度予算稅額は三十万三千五百七十八円なり。

二、屯 稅

改隸当初に於ては關稅と同じく清國海關の旧慣に依りたるも明治二十九年締盟各國との條約本島に施行せらるゝや之を廢止し、船舶出入港手数料を徴收することとなり西洋形船及日本形船は稅關法に依り支那形船は律令に依り夫々異りたる料率が定められたるが明治三十二年之を統合し律令を以て今日に及べり、屯稅は内地に比し西洋形船に在りては三割、日本型及支那型船に在りては三割乃至四割三分低廉なり、又基隆、高雄兩港勢發展の爲大正五年以降薪炭及食糧品積込の爲竝に仲繼貿易の爲入港したるものに対しては屯稅免除の規定を設けたり、昭和二十年度予算稅額は一万九千九百六十四円なり。

三、酒類出港稅

本稅は台灣酒類專賣令に依る酒類を移出する際、酒稅法の定むる稅率に依り課稅するものにして昭和九年の創設に係り昭和十五年の改正後今日に至れり、昭和二十年度予算稅額は九千円なり。

第二章 金 融

第一節 金融機關

本島に於ける金融機關の主なるものは銀行、信託会社、保險会社、無盡会社、台灣產業金庫、市街地信用組合及市街庄農業會等にして何れも当局の庇護の下に健全なる發達を続け米糖二大産業を中心とする農業或は近來頗に勃興せる工業等に必要なる資金を供給し文字通り本島經濟の發達を動かして重要な役割を果し來れり。又戰時中は特に貯蓄增強に意を注ぎ浮動購買力を吸収して悪性インフレーションの防止に努め克く經濟秩序を維持し得たり。

第一項 銀 行

現在本島に本店を有する銀行は台灣銀行、台灣商工銀行、華南銀行、彰化銀行及台灣貯蓄銀行の五行にして支店のみを有するものに日本勸業銀行及三和銀行あり、台灣銀行は本島の産業開發と南支南洋に於ける貿易金融機關たらしむる目的を以て明治三十二年に設立せられ、發行權を有する本島の中央銀行として幣制の改革、各種産業就中糖業の發達に寄與する所大なるものありたり。商工、彰化、貯蓄の三行は専ら島内の金融に従ひ華南銀行は島内及南支南洋の金融に従事す。

日本勸業銀行は明治三十六年以降台灣銀行と代理店契約を締結し、更に大正十二年に台北に支店を開設し、爾來台

中、台資、信託、證券にも支店を開設し、不動産、金融機關として重要な役割を占め、和銀行は内台爲替及中商
子金融の最大なる貢獻を爲し來れり、是等各銀行の島内に於ける昭和九年來の營業狀況は次の如し。

貸出金額 九億二千四百万円 貸出金額 九億一千三百万円

手形交換高 十四億二千二百万円 爲替取組高 七十七億七千三百万円（昭和十八年中）

この最近十箇年の増加高は預金額に於て七億五千二百万円、貸出額に於て六億六千一百万円、手形交換高に於て十
四千万円、爲替取組高に於て五十八億六千四百万円にして大なる躍進を示せり。

(イ) 銀行島内支店数、資本金額及預金、貸出金額調 (昭和20年6月末日現在)

銀行名	本店	支店	代理店	數計	資本金額			預金	貸出金
					公稱	拂込			
台銀	1	15	1	17	60,000,000	円	37,500,000	369,831	126,274
商工	1	30	9	40	5,000,000		2,583,850	254,564	98,210
華南	1	5	5	11	5,000,000		3,850,000	20,704	17,578
彰化	1	18	16	35	4,800,000		2,840,000	147,183	61,203
貯蓄	1	11	19	31	1,000,000		250,000	106,467	7,627
三和	1	3	1	3	1	円	1	24,420	58,624
勸業	1	5	1	0	1	円	1	26,672	132,025
計	5	87	50	142	75,800,000		46,923,850	1,046,641	1,101,540

(ロ) 島内銀行預金貸出金額高 (単位千円)

年別	預金	貸出金
昭和10年末	172,070	252,647
同11年末	180,366	277,342
同12年末	186,889	300,513
同13年末	249,168	307,037
同14年末	321,193	362,420
同15年末	361,877	457,648
同16年末	420,724	523,881
同17年末	522,421	607,225
同18年末	630,051	710,170
同19年末	924,260	913,270
同20年末	1,146,837	1,101,540

(ハ) 手形交換高 (単位千円)

年別	総額	一箇月平均
昭和10年	372,442	31,036
同11年	393,007	32,750
同12年	412,785	34,398
同13年	500,774	41,730

昭和14年	657,031	54,752
昭和15年	916,944	76,412
昭和16年	1,003,416	83,619
昭和17年	1,149,045	95,753
昭和18年	1,242,054	103,514
昭和19年	1,422,287	118,523

(二) 爲替取組高調

(單位千円)

年 別	總 額	一箇月平均	送 先 大 凡 割 合		
			島 内	島 外	外 島
昭和9年	1,909,935	159,161	6.4	3.6	
昭和10年	2,384,188	198,682	6.5	3.5	
昭和11年	2,600,211	216,684	6.6	3.4	
昭和12年	2,843,106	236,924	6.6	3.4	
昭和13年	3,455,315	287,942	6.8	3.2	
昭和14年	4,189,207	349,100	6.5	3.5	
昭和15年	4,525,391	377,115	6.6	3.4	
昭和16年	6,222,263	518,521	6.4	3.6	
昭和17年	6,751,577	562,631	6.8	3.2	
昭和18年	7,773,556	647,796	7.0	3.0	

第二項 信託会社

昭和十八年末に於て信託会社と称せしものは其の比較的有力なるものみにも八社を数へたりしが其の所謂信託業務の監督に付ては何等の法的根拠なかりし爲、貯蓄奨励金利政策等に尠からず逆行する結果を招來せり、ここに於て昭和十九年八月信託法及信託業法を施行し最も有力なりし大東信託株式会社、台湾興業信託株式会社及屏東信託株式会社の三社を合併して新に台湾信託株式會社を創設し之が育成に留意し來りたり、爾來同社は金銭信託及不動産信託に特に力を注ぎ着々として本島に於ける重要な金融機関として組織機能を整備し來れり、昭和二十年三月三十一日に於ける同社の狀況左の如し。

公称資本金	一〇、〇〇〇千円	拂込資本金	二、五〇〇千円
金銭信託	一八、一〇〇千円	貸付金	一一、八〇〇千円

第三項 保險会社

保險会社は内地に本店を有する会社の進出に俟つもの多く、本島に本店を有する会社は大成火災海上保險株式會社の一社のみ、同社は公称資本金一千万円、拂込二百五十万円で最近に至り社運の見るべきものありたり内地よりの進出會社にして、本島に支店を有する会社は生命保險會社十五、損害保險會社十二に及べり、昭和十八年には戦争死亡傷害保險法、十九年には戦時特殊損害保險法を施行して國家保險法を実施せり。

第四項 無盡會社

昭和十九年十二月末に於ける無盡會社概況左の如し。

会社数 三 資本金総額 八十五万円 給付金契約高 七千六百三十六万円
掛金契約高 七千九百五十九万円 未收無盡掛金高 三十九万円
にして最近十箇年に於て給付金契約高に於て四千五百四十七万円、掛金契約高に於て四千六百八十九万円に増加を示す。

(イ) 無盡会社概況

(昭和19年末)

会社名	店数		資本金		給付金契約高			未收無盡掛金
	本店	支店出張所	公称	拂込	千円	千円	千円	
台湾商業無盡	1	9	500,000 円	250,000 円	55,469	57,632	千円	269
台湾南部無盡	1	3	200,000	200,000	15,431	16,203		81
東台湾無盡	1	1	150,000	75,000	5,467	5,755		38
計	3	13	850,000	625,000	76,365	79,590		298

(ロ) 無盡会社業績調

(単位千円)

年 別	給付金契約高	掛金契約高	損 失
昭和10年末	30,899	32,705	
同 11年末	34,438	36,412	
同 12年末	37,223	39,287	
同 13年末	39,007	41,115	

第五項 産業金庫

昭和十九年初め営業団体の統合に即應し従来産業組合聯合会を解散し、台湾産業金庫令を制定して四月一日台湾産業金庫を設立せり、本金庫は所屬團體に対する金融の円滑を図ると共に所屬團體の行ふ金融事業の指導統制を行ふを目的とす、昭和二十年三月末の國庫は左の如し。

出資総額	五百万円	拂込済額	二百六十万円
預金総額	一億八千二百万円	貸付金総額	四千七百万円

第六項 市街地信用組合及市街庄農業会

大正二年律令を以て産業組合規則を制定し其の準拠すべき所を示すと共に所得税、營業稅等を免除し之が育成發達を計りたるを以て漸次産業組合の發達を見るに至れり、大正六年に至り産業組合法の一部改正に依り市街地信用組合の制度設けられたり、昭和十九年一月に台湾農業会令施行せられ農業團體を統合せるを以て従來の農村信用組合は市街庄農業会に吸収せられ其の金融部として従來通りの活躍をなしつゝあり、昭和十九年末に於ける市街地信用組合は

左の如し。

組合数	三九	組合員数	六万五千八百七十四人	出資金総額	八百十七万八千円
貯金総額	一億四千七百六万円	借入金総額	九十三万円		
貸付金総額	五千七百四十二万円	割引手形	百十五万円		

最近十箇年に組合数に於て十七、組合員数に於て四万六千四百八十九人、出資金総額に於て五百十六万円、貯金総額に於て一億二千七百五十七万円、貸付金四千一百五十二万円の増加を見たり、又市街庄農業会左の如し。

組合数	二百六十六	組合員数	地区内の該当者全部	出資金総額	二千五百二十七万円
		貯金総額	三億六百十八万円	借入金総額	五百十七万円
		貸付金総額	一億六百万円		

尙最近十箇年間に出資金総額に於て一千九百九十一万円、貯金総額に於て二億四千七百七十七万円、貸付金総額に於て四千四百六十七万円の増加を見たり。

市街地信用組合状況		(金額は單位千円)									
区別	昭和	10年末	11年末	12年末	13年末	14年末	15年末	16年末	17年末	18年末	19年末
組合数	22	22	22	22	21	22	25	25	25	25	39
組合員数	19,285	20,586	11,229	21,288	26,224	32,864	34,996	31,968	36,681	66,874	
出資金総額	3,061	3,270	3,426	3,515	3,889	4,335	5,195	5,482	5,617	8,178	

貯入金	金	19,492	20,711	20,465	26,031	36,052	46,499	49,988	59,155	75,408	174,067
貸付金	金	118	213	339	112	117	999	608	1,271	1,348	930
割引手形	金	15,908	17,413	18,645	18,636	21,320	29,897	32,610	35,578	39,180	57,426
		738	643	599	635	800	1,130	1,066	1,037	—	1,151

市街庄農業会状況

(金額は單位千円)

区別	昭和	10年末	11年末	12年末	13年末	14年末	15年末	16年末	17年末	18年末	19年末
組合数	373	382	400	406	417	418	416	419	390	266	
組合員数	300,501	328,089	357,362	396,081	468,342	547,863	186,745	610,362	645,148	地区内ノ者全部	
出資金総額	13,365	13,917	14,509	15,795	17,257	18,795	19,480	20,123	20,236	25,279	
貯入金	金	58,411	67,290	63,732	87,235	120,381	134,045	140,456	160,959	250,292	306,185
借入金	金	13,722	17,914	23,812	18,750	16,948	25,260	25,836	25,270	24,157	5,178
貸付金	金	61,438	74,826	82,294	83,417	93,618	112,061	124,619	129,670	144,351	106,100

備考 18年迄は農村信用組合、19年は市街庄農業会を掲げたり

第二節 台灣銀行券

台灣銀行券発行高は逐年増加の趨勢を示し本島經濟社會の發展に表示し居りたるも十九年よりは其の増加著しく經濟秩序保全の爲、貯蓄増強に殊に留意し來る所なり。

台湾銀行券発行高				(単位千円)	
年	別	発行	高		
昭和12年	6月	未	75,489		
昭和12年	12月	未	112,033		
昭和13年	12月	未	140,018		
昭和14年	12月	未	171,169		
昭和15年	12月	未	195,685		
昭和16年	12月	未	252,845		
昭和17年	12月	未	289,274		
昭和18年	12月	未	415,554		
昭和19年	12月	未	796,080		
昭和20年	3月	(最)	1,021,008		
昭和20年	8月	15日	1,433,190		
昭和20年	8月	31日	1,651,000		
昭和20年	9月	11日	1,930,000		

第三節 金融統制

戦時経済に入りてよりは資材資金の需要の調節、公債消化政策、悪性インフレーション防止等の見地より金融統制を行ふ爲、幾多の統制法令の実施、爲替管理、國民貯蓄の増強等に努め來れり。

(イ) 統制法令の施行

臨時資金調整法、銀行等資金運用令、会社経理統制令等を主たるものとし設備資金、事業資金、配当金等の統制を実施し資金の重点金運用を図れり。

(ロ) 爲替統制

外國爲替管理に付ては太平洋戦勃發以降過去の外資獲得の目的は一八〇度の変貌を遂げ専ら海外よりの國內へのインフレ流入防止に重点を置きて施策を爲し來たり、敵産管理に於ては敵産管理法施行令、敵産管理法施行規則等ありて外人關係取引取締規則と相俟ちて外人の取扱又は行爲に關し戦力増強の爲に管理し來たり。

(ハ) 國民貯蓄、増強

生産力拡充資金、公債消化資金の供給の爲、就中終期には悪性インフレーション防止の見地より國民貯蓄の増強には行政廳金融機關一般島民の熱烈なる協力に依り目覺しき実績を挙げ十九年度末には其の総額二十億円を超えるに至れり。

各年度本島國民貯蓄目標と実績				(単位千円)	
年	別	貯蓄目標額	貯蓄実績額		
昭和13年度	年度	56,000	108,000		
昭和14年度	年度	100,000	151,000		
昭和15年度	年度	200,000	210,000		
昭和16年度	年度	280,000	210,000		

同	17 年 度	300,000	320,000
同	18 年 度	400,000	465,000
同	19 年 度	700,000	580,000
同	20 年 度	1,000,000	
計		2,980,000	2,039,000

第四節 戦時非常金融対策

空襲其他戦時災害発生せる場合に於ては本島中央銀行たる台湾銀行と密接に協力し金融情勢と民心の安定の爲、非常措置を採り得ることとせり。其の内容の主たるものは預貯金の無制限支拂預金等の便宜代拂及生活應急資金融通金融機関及緊急産業等に対する台湾銀行よりの急速なる融資等にして幸にして是等の措置は本島の経済秩序維持に貢献する所大なるものあり。

第五節 終戦前後金融機関と金融統制の解除

金融面に於ける最近の努力は悪性インフレーションを防止し経済秩序を維持する爲、貯蓄の増強により昭和十九年度迄は其の実績大いに見るべきものありたるも本年度にありては空襲の激化の爲、等しく鈍調となりたり、終戦後に於て漠然たる一般的不安の爲拂戻増加せる実情にあり、かくては経済秩序の維持に困難となり島民生活の根拠を脅す虞なしとせず金融施策に明示して民心の安定を図ること重要なり。又臨時資金調整法銀行等資金運用分、会社経理統

制令等の金融統制法令は之を改廃し自由経済への移行を示して平和産業の復旧発展を期し生活必需物資の増産に依る島民生活の安定を希求しつつあり。

市内金融機関現金受拂高調

(単位千円)

月	日	受 入 高	支 拂 高	差引増減(△)高
8 月	15 日	4,878	7,117	△ 2,239
	16 日	6,712	13,158	△ 6,446
	17 日	9,036	14,106	△ 5,070
	18 日	10,733	12,806	△ 2,073
	20 日	7,427	12,205	△ 4,776
	21 日	6,474	17,347	△ 10,873
	22 日	6,992	7,414	△ 422
	23 日	6,603	9,341	△ 2,738
9 月	24 日	6,859	10,601	△ 3,742
	25 日	9,995	12,328	△ 2,333
	27 日	10,588	14,098	△ 8,510
	28 日	8,753	8,401	352
	29 日	9,001	7,554	1,447
	30 日	7,620	7,158	462
	31 日	10,113	12,660	△ 2,547
	1 日	14,031	15,559	△ 1,528

第三章 貿易

第一節 概況

台湾の貿易は之を外國貿易と内地貿易（台湾内地間）とに大別し得るところ先づ之を総括して日本帝國領有下五十年間に於ける推移の概況を觀るに明治三十年に於ては輸出額千五百万円、輸入額千六百万円、計三千万円に過ぎざりしが之れより十三年経過したる明治四十三年に至り一億円台を示現し踵いで七年後の大正六年に於て二億円台を更に六年後の大正十二年及十三年の兩年に於て三億円台を算し、爾後九年間即ち昭和八年迄は財界最も不況を呈したるが昭和六年再び三億円台に逆轉せるを例外として各年四億円台を持続し越へて昭和九年に於て五億円台を実現し其の後は比率極めて急調なる膨脹を果ね昭和十四年遂に十億円を突破し、翌十五年に至り輸出五億六千六百万円、輸入四億八千万円、計実に十億四千七百万円と最高記録を印したり、而して翌十六年以降は今次世界交局の影響即ち就中國國際通商機構の瓦壞、平和産業の梗塞、船腹拂底等を要因として年と共に急激なる退歩を辿り、昭和十九年は終に四億七千五百万円に降りたり、然れ共斯かる最近の変調貿易は姑く之を措き前記台湾貿易の最盛期たる昭和十五年に於ける貿易総額を明治三十年の其れに比較すれば正に三十四倍に相当せり、斯の如き本島貿易の長足なる進歩発

展は實に改隸後に於ける施策の成果、即ち特に文物制度の整備と産業交通の發達とを以て之が最大の要因となすべく又一面人口の増加、通貨膨脹に因る物價の騰貴等自然力に負ふところ亦尠しとせず、次に本島貿易に於て外國貿易と内地貿易との比重を見るに改隸と同時に發足したる内地貿易は從來の因襲的關係を有する外國貿易に對して暫時劣勢の地位を免れざりしは論を俟たざるが大勢外國貿易は對外政策の羈絆を受け内地貿易は自由貿易たる優越性を發揮し兩者の地位は間もなく顛倒すると共に内地貿易は益々顯著なる發展を遂げたり、即ち明治三十年の内外貿易の百分比に於て外國貿易は八一%を、内地貿易は一九%を示し居りしが七、八年後（明治三十七、八年頃）に至り早くも兩者伯仲するの狀態となり、更に其後兩三年間に於ける内地貿易の發展は實に目覺しきものありて明治中葉乃至昭和初期に亘る二十一年間は外國貿易二〇%台を、内地貿易七〇%台を以て経過し、昭和五年以降に於ては遂に前者の一〇%台、後者の八〇%台となりて大勢一應安定したる感ありたるが、昭和十八年以降今次戰爭の影響を蒙り兩者の比重は同十九年に於ては前者の二九%後者の七一%と恰も明治四十二、三年當時の狀態に還りたり。

第二節 外國貿易

本島の外國貿易は内地の其れと同様に大体年輸入超過を示し來りたるが近年日、滿、華、四經濟ブロックの構成就中隣邦に對する經濟的協力政策本島工業化の進歩等に因り昭和十四年に至り狀勢を一変し特に翌十五年以降は各年五、六千万円台の大出超を擧ぐるに至りたり、而して貿易對手國は輸出に於て中華民國は常時の最大顧客にして其の他は時代に依り相当消長起伏を示せるが関東州を含む滿洲國、北米合衆國、香港、英吉利、佛蘭西等を以て主要なる

ものとす、輸入に於ても元來中華民國が第一位に在りしが滿洲建國後、同國の顯著なる經濟的發展と日滿經濟の緊密化とに依りて關東州を含む同國が最大對手國となり、爾來中華民國は偶々昭和十九年に於て第一位に復帰したるを除きては第二位に降たり、而して爾余のものは大體香港、北米合衆國、英吉利、獨逸等が之に亞ぐ主要國なるが大東亞戰爭は早くも其の勃發前の國際情勢の惡化と共に特に對歐米方面との貿易に至大なる影響を與へ從來の國別貿易額に著しき變調を齎したるは當然のことなりとす。

第三節 内地貿易

本島對内地貿易は之に對する諸要素の整備充実に伴ひ當然發達の過程を辿りたるが、更に外國貿易と比較して内地貿易自体の有する有利なる條件は一層之を躍進せしめなり、即ち明治三十年に於ける移出入合計は僅に五百八十万円に過ぎざりしが、大正四年に至り一億円台上り続いて同八年には二億円台を突破し、同十四年には三億円台となり其の後は昭和九年に四億円台を示現せる迄聊か發展の步調緩慢の感ありしが、爾來世界的軍拡動向の旺盛なるものあるに伴ひ内外經濟界頗る活況を呈すると共に本貿易も極めて急速なる躍進を告げ、昭和十四年遂に八億円を突破し更に翌十五年に至り内地貿易史上に於ける最高貿易額として八億八千万円を算したり、然れども右は單に價額面に於ける觀察にして貿易の實質に於ては既に退歩の道程に在りしものなり、斯くて其後は戰爭拡大の影響益々深刻化し之が爲物價の騰調亦愈急なるものありたるにも拘らず貿易額は遂に逆轉只管減少の一途を辿りたり、次に貿易尻を觀察するに帝國領有後の數年間、即ち明治三十六年迄に在りては島内産業未だ幼稚にして移出力を發揮するに足らざりしが

一方初期建設時代として比較的多くの資材を内地に需めたる關係土入超を辿りたるが、爾來島内産業の飛躍的發展を背景として收支の狀勢一變して僅に明治四十年及大正二年の兩年に於て例外的の入超を見せたる外は総て出超を以て終始したり而して其の額は時に多少の消長ありしも大體年と共に増加し殊に大正十二年に於て前年の四千五百万円より一躍して九千八百万円を算して以來、昭和十四年に挙げたる一億五千二百万円を最高記録として最低八千万円を降らざる堅調を持続したるが同年以降隣邦人の優先的輸出貿易の堅持は移出余力の減殺となり出超額の急減と甚だしき不調とを呈示したり。

第四節 主要貿易品

第一項 輸出入主要品

本島外國貿易に於ける主要品を觀るに輸出に在りては極めて最近に於て致したる變調を別として米、烏龍茶、包種茶、砂糖、塩乾魚、樟腦、燐寸、綿織物、石炭等を一貫的の重要品として挙げ得べく、又大正年代に入りて酒精を昭和中葉に至りて鳳梨罐詰及芭蕉寒を更に降りて紅茶、纖維素、パルプ、葉煙草及毛織物等を加へたる事も特筆すべきものとす、今輸出貿易の最盛を謳はれたる昭和十六年の其れを親ふに斷然頭角を表はせるものは消費市場を殆んど中國及滿洲に限る砂糖にして約三千八百万円を算し、輸出貿易額の実に三三%を占めたり、次に齊しく中國及滿洲國を主要顧客とする包種茶一千七百万円を算し総額の一二%に當り、以下滿洲を最大の中國を次位の消費市場とする鳳梨罐詰の七百二十万円（六%）偶同年に於て中國のみの獨占に帰せる石炭の六百九十万円（七%）滿洲國の外、獨逸等

を主要市場とせる紅茶の六百四十万円（六％）中國及滿洲のみを顧客とする芭蕉実の五百万円（四％）同じく蜜柑の三百九十万円、中國を唯一の需要國とする纖維素パルプの三百六十万円等之に次げり、次に輸入品にありては或は昭和の初葉頃より殆んど影を絶ち、或は近年に至りて頻る不勢に陥りたるものもあるも大凡輸入貿易上重要な地位を比較的長期に亘りて把握せるものとして米、大豆、砂糖、燈油、阿片、漢藥、綿織物、ガンニー囊、鉄、機械類、木材、包蓆、大豆、油槽等を挙げべく又本島産業の発達と共に中途にして登場し一時優勢を誇りたるものに重油、揮発油、黄麻、セメント、ドルマイト及マグネサイト、鋳、硫酸アンモニウム其の他前掲以外の肥料等を指摘し得べし、今輸入貿易の最盛を記録したる昭和十五年に於ける之が実績を觀るに滿洲よりする大豆油槽は依然輸入の大宗品として一千五百五十万円を算し、輸入貿易総額の二八％を占め次位は滿洲産大豆にして七百八十万円を計上し同じく一四％に當り以下中國産の外、若干の佛領印度支那産及泰國産を交へたる米（三百二十万円同六％）關東洲産を主とする硫酸アンモニウム（二百二十万円同四％）米國及南ボルネオよりする重油（二百十万円同四％）同じく揮発油（二百万円）關滿産及中國産の飼糧（百五十万円）中國及滿洲の産に係る前出以外の肥料（百四十万円）等順次之に次げり。

第二項 移出入主要品

内地貿易に於ける主要品は移出に於て米、芭蕉実、砂糖を以て三大宗品とせるは周知せられ居る処なるも其の外に於ては夫々重要品として登場せる時期の不同あり、又晩近移出市場より姿を殆んど消したるもの等あるも相當の期間に亘りて移出貿易を支配したるものとして茶、鳳梨罐詰、樟腦酒精、帽子、纖維素パルプ、洋紙、石炭、鋳アルミニウム、木材等指摘し得べし、今移出貿易の最も盛んを極めた昭和十四年に於ける重要品を見れば砂糖、は二億二千九

百万円にして移出総額の実に四五％を、米は一億二千五百万円にして二五％を夫々占め、芭蕉実は近年相對的に下向に傾き酒精と共に千六百五十万円と同額を示し、移出総額中占める歩合僅かに三％なれり、以下鳳梨罐詰（一千二百万円）洋紙、（六百二十万円）木材（四百七十万円）石炭（四百五十万円）樟腦（四百万円）等之に次ぐ、次に移入に於ては比較的長期に亘り全貿易の支配的地位を占たるものとして米、小麦粉、塩、乾魚、錫、清酒、麦酒、紙糸、煙草、燐寸、絹綿織物、紙類、セメント、鉄機械類、木材、肥料等を数へ、尙近年は台灣工業化の進捗に伴ひ電氣用カーボンクリオリットコークス其他硫黄を含む工業藥等登場を見たり、今移入貿易の最高記録したる昭和十五年度を一べつするに内容に於て一千四百万円を算する硫酸アンモニウムを筆頭に魚粉配合肥料及過燐酸肥料を以て全移入額の殆んど九割を占むる肥料が四千二百万円に上り移入品の首班に値し移入総額の一〇％に相等し、木材が之に亞ぎ約二千九百万円に上り七％に當れり、第三位二千二百萬円の鉄材にして五％に當り、以下塩乾魚（約一千八百万円四％）絹綿織物（約一千七百万円四％）ガンニー囊（約千三百万円三％）鉄製品（約一千二百万円二％）紙類（一千万円二％）自動車及同部分品（七百五十万円）電氣機械及部分品（七百三十万円）紙卷煙草（六百三十万円）罐詰食物（六百二十万円）味の素類（五百三十万円）小麦粉（四百八十万円）石鹼（四百万円）を以て主要なるものとす。

(イ) 貿易總額比較

(單位千円)

年次	輸 出	移 出	計	輸 入	移 入	計	合 計
明治30年	12,625	2,105	14,857	12,659	3,724	16,383	31,240

同	40 年	9,741	17,635	27,376	11,231	19,750	30,971	58,347
大正	6 年	40,216	105,497	145,713	21,099	67,745	88,844	234,557
昭和	2 年	44,588	202,079	246,676	65,840	121,108	186,948	433,652
同	12 年	29,916	410,259	440,175	44,229	277,895	322,124	762,299
同	13 年	36,220	410,104	456,454	38,709	327,950	366,659	823,113
同	14 年	83,194	509,744	592,538	56,042	357,608	408,649	1,001,288
同	15 年	106,766	459,288	566,054	56,060	425,653	481,813	1,048,867
同	16 年	114,107	379,790	493,904	52,669	372,842	424,507	918,410
同	17 年	103,511	419,628	513,139	46,900	337,620	384,519	907,606
同	18 年	108,190	292,713	400,903	46,800	291,927	328,727	729,629
同	19 年	95,913	215,691	311,204	43,437	121,289	164,727	779,926

(口) 主要輸出額累年比較

(單位千円)

品目	年度	昭和10年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
米		35	26	3,213	3,351	1,178	1,282	1,154
芭蕉	実	767	999	487	2,713	5,049	2,282	230
蟹	柑	566	530	1,142	3,521	3,879	2,189	524
烏龍	茶	3,814	2,540	4,036	2,828	6	20	14
包種	茶	2,815	2,446	8,334	6,068	16,771	16,857	22,591
紅茶	茶	1,490	5,888	5,476	7,962	6,385	5,369	5,003
砂糖	糖	5,556	2,560	30,572	36,962	37,644	49,271	42,001

塩	乾	魚		1,604	200	824	3,317	655	176	—
鳳梨罐詰				771	1,620	2,130	4,508	7,241	2,443	2,623
樟腦加工油及同副産物				—	381	696	571	667	33	151
樟		脂		2,038	1,860	1,980	1,605	841	234	954
綿織物				2,082	1,290	82	2	39	—	2
絹織物				1,665	1,850	305	65	173	7	6
石炭				1,334	1,369	4,678	9,266	6,877	9,015	4,918
纖維素パルプ				—	—	39	873	3,593	4,506	4,609

(八) 主要輸入額年比輸

(單位千円)

品目	年次	昭和10年	昭和12年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
米	麦	—	—	—	3,170	2,117	847	46
小	豆	1	17	89	420	—	—	—
大	豆	4,265	5,056	6,231	7,773	6,262	8,058	8,833
綠	豆	295	350	511	223	625	53	—
菰	魚	675	557	294	259	730	461	—
重								344
堯								
	油	1,315	—	—	2,080	332	—	—
	油	1,742	—	—	1,974	1,929	—	—
燈	油	398	—	—	196	125	—	—
黄	麻	379	618	1,088	842	1,658	—	—

	ガ ソ ニ	炭	3,566	2,776	2,706	1,811	3,242	788	1,875
石	71	525	140	223	229	321	296		
フ ク ア ネ サ イ ト	—	—	152	453	1,192	823	1,115		
燐	72	182	155	577	262	525	675		
鉄	195	320	411	437	287	609	970		
包	475	737	656	890	440	696	1,743		
鐵	2,456	3,748	1,272	1,043	1,494	818	624		
銅	66	130	183	1,478	383	492	509		
大豆	14,614	13,575	20,327	15,495	10,323	13,021	12,090		
硫磺	5,165	1,412	1,461	2,155	4,139	2,611	3,108		
ア ン モ ニ ウ ム	689	914	1,543	1,436	2,782	883	2,204		
其 の 他 の 肥 料	176	489	80	215	169	10	—		
木									

(二) 主要品移出額累年比較

(單位千円)

品目	昭和10年	昭和12年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
米	105,540	126,171	125,288	84,243	10,735	76,155	66,028
乾	1,291	2,941	822	260	399	—	—
芭	9,476	11,736	16,519	25,645	17,766	11,029	5,402
糖	145,977	188,986	229,254	185,592	156,510	185,524	97,451
蜜	1,270	1,560	1,212	1,617	—	217	274

(ホ) 主要品移入額累年比較

(單位千円)

品目	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年
小麦	1,927	1,775	1,945	1,699	1,949	1,240	1,696
小	4,513	5,084	7,625	4,825	9,096	3,724	4,075
小	2,066	2,605	3,923	1,884	1,265	339	36
子	2,514	3,976	4,388	9,266	3,711	1,637	464
素	4,735	5,039	9,344	17,845	12,965	6,076	1,346
乾	1,432	2,010	1,911	1,485	1,404	1,281	1,272
魚							
乳							

魚	2,222	3,050	3,084	4,266	3,383	—	—
精	979	1,096	1,080	511	856	2,047	2,734
鹽	7,307	7,600	11,211	10,411	3,711	6,176	2,249
鳳梨	2,116	1,011	1,063	1,202	1,302	633	20
油	2,360	2,616	4,030	3,115	3,377	614	1,474
精	6,767	7,430	16,622	14,397	13,213	14,732	16,016
子	3,018	3,267	3,801	4,746	3,394	2,947	5,643
炭	707	2,563	4,489	4,520	1,525	2,420	581
石	9,835	19,181	14,936	18,150	15,037	15,387	17,621
鐵	1,290	2,058	4,718	7,195	3,994	1,050	656
木	—	1,647	6,165	7,058	7,421	5,050	906
洋							

				1400				458			
罐詰食物	2,665	2,967	6,430	6,201	6,830	2,043	458				
麥油	2,021	2,746	5,124	3,727	3,347	2,621	2,081				
紙煙草	7,212	7,850	5,505	6,328	4,276	2,306	3,966				
清酒	3,146	3,959	6,908	3,718	2,626	2,214	3,015				
石鹼	1,808	2,683	5,484	4,056	4,327	1,733	901				
燐寸	1,184	1,135	2,799	1,998	1,732	3,346	2,313				
燐類	1,075	2,078	2,605	3,188	2,932	5,016	6,511				
未織物及物類	20,265	21,635	19,751	16,549	15,951	40,387	29,452				
綿織物	2,041	1,785	4,374	3,240	3,232	5,583	3,091				
毛織物	3,084	3,035	4,508	12,847	6,916	9,884	5,401				
ガソリン	2,052	3,110	3,305	3,426	2,965	4,923	1,926				
メリヤス肌衣	5,061	6,339	7,450	10,081	7,839	5,822	4,355				
紙	8,150	8,990	2,571	2,405	2,524	1,268	414				
セメント	1,481	1,561	2,189	2,795	3,986	3,079	2,127				
陶磁器	15,388	23,537	19,296	22,045	21,549	10,086	9,211				
鐵	914	1,840	2,079	2,126	2,013	877	532				
家庭橋梁、船舶、船渠の建築材料	5,035	7,028	10,630	11,952	11,121	8,876	9,299				
鐵製品	2,988	3,970	4,209	3,335	2,657	2,580	1,521				
自轉車同部分品	5,051	6,032	5,761	7,572	4,894	5,096	3,725				
自動車同部分品	—	1,201	3,957	7,290	6,152	4,312	4,025				
電氣機械同部分品											

木肥	材	10,211	13,056	18,989	28,646	16,816	5,463	5,490
	料	22,772	37,750	37,264	42,032	36,500	25,486	10,282

(一) 最近の主要國別貿易比較 (單位千円)

國別	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年
總額	106,766	24,109	103,511	108,190	95,513
滿洲	6,223	12,407	8,513	9,266	5,090
關東	22,920	30,217	23,978	24,399	70,524
華北	65,011	67,313	64,792	58,925	36,675
北支	—	—	26,926	32,579	15,771
中支	—	—	23,373	14,212	18,096
南支	—	—	14,493	12,134	2,879
香港及澳門	—	—	1,061	3,741	8,760
南洋方面	12,613	1,192	3,670	11,097	8,760
其の他の諸國	2,977	1,497	763	50	50

國別	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年
總額	96,060	52,665	46,900	46,800	43,437
滿洲	24,114	19,609	3,774	3,627	5,685
關東	6,151	4,720	16,639	14,224	1,606

中 華 民 國	9,656	12,179	6,639	542	32,939
北 支	—	—	2,376	6,046	417
中 支	—	—	10,180	7,636	15,311
南 支	—	—	4,082	261	17,212
香 港 及 澳 門	—	1	72	5,459	401
南 洋 方 面	16,138	8,958	3,268	198	2,637
其 他 の 諸 國		7,197	663	198	118

- 備考 1. 北支には蒙疆を南支には海南島を含む
2. 南洋方面とは比律賓、佛領印度支那、泰國、緬甸、英領印度、馬來、北ボルネオ、東印度支那を謂ふ

第一章 概 況

本府の専賣事業は明治三十年阿片専賣に始まり、爾後逐次その対象を拡大し現在に於ては阿片、塩、苦汁、樟腦、煙草、酒、石油、酒精、燐寸、度量衡の十種類に及び其の対象の廣汎なる点及び本府財政上占むる地位に於て甚だ特色を有す専賣收入と台灣特別會計歳入との比率、専賣差益、各種目別専賣差益は左の如し。

(昭和18年度迄実績)

専賣收入の財政的地位			歩 合	
年 次	台灣歳入經常費部	専賣收入經常費部	歩	合 %
明治30年	5,315,879 円	1,640,210 円		30.85
同 38年	21,699,929	10,605,085		48.87
同 40年	28,850,117	15,945,435		55.26
大正5年	46,220,987	20,146,956		43.59
昭和元年	96,688,368	42,688,363		44.20
同 10年	123,407,834	51,004,857		41.33
同 11年	138,144,214	56,969,482		41.24
同 12年	153,455,476	61,404,101		40.51
同 13年	176,713,771	68,188,630		48.59
同 14年	216,356,142	83,283,529		38.49

円〇千

同 15 年	245,853,437	90,294,296	36.72
同 16 年	265,864,600	100,043,763	37.62
同 17 年	305,863,135	117,575,336	38.44
同 18 年	390,665,034	157,901,909	40.42
同 19 年 予 算	478,630,060	231,154,553	48.30
同 20 年 予 算	548,763,221	270,628,837	49.32

専 賣 差 益 調

(昭和18年度迄実績)

年 次	専賣收益(經常部)	支 出(經常部)	差 益	同 上 率
昭和 10 年度	円 51,004,857	円 26,452,425	円 24,552,432	% 38
同 15 年度	90,294,296	48,571,829	41,722,467	86
同 16 年度	100,043,763	54,942,250	45,101,513	82
同 17 年度	117,575,236	69,466,300	48,108,936	69
同 18 年度	157,901,909	73,282,454	84,619,455	115
同 19 年度 予 算	231,254,553	91,269,779	139,885,164	153
同 20 年度 予 算	270,628,837	90,280,779	180,348,058	190

各 専 賣 別 差 益 調 (經常部)

(18 年 度 迄 実 績)
(19, 20 年 度 予 算)

区 分	昭和16年度	昭和17年度	昭和18年度	昭和19年度 予 算	昭和20年度 予 算
煙 草	円 3,901,039	円 4,084,564	円 6,003,533	円 10,317,170	円 10,870,904

樽	支 出	3,994,271	8,917,779	9,907,877	9,905,226	12,361,306
	差 益	△ 93,232	△ 3,733,215	△ 3,904,344	411,944	△ 1,490,402
阿 片	入 出 差	8,747,994	2,999,886	1,874,644	6,129,010	4,931,550
	支 出	5,510,663	3,945,405	3,270,787	4,001,845	4,721,637
	差 益	3,237,331	△ 945,519	△ 1,396,143	2,127,165	209,913
煙 草	入 出 差	1,841,522	1,493,334	1,108,450	1,094,040	324,620
	支 出	1,167,796	1,582,563	999,118	1,002,112	325,665
	差 益	673,726	89,299	109,332	91,928	1,045
酒 及 精 油	入 出 差	41,716,437	51,001,588	62,635,470	88,062,307	113,427,085
	支 出	18,694,058	20,398,305	21,481,734	25,994,983	22,627,359
	差 益	23,022,379	36,611,283	41,153,736	62,057,375	90,799,726
石 油 及 燃 料	入 出 差	42,497,915	50,457,216	72,689,614	104,206,203	116,838,376
	支 出	24,054,747	26,800,216	23,252,339	33,468,706	26,750,404
	差 益	18,443,168	23,657,000	49,437,375	70,737,497	90,087,972
石 油 及 燃 料 酒 精	入 出 差	1,338,860	4,297,370	7,236,839	10,683,846	9,228,925
	支 出	1,520,715	4,279,862	9,254,038	9,878,666	10,290,389

円〇千

明治三十年本島專賣の嚆矢として世界の注目の下に開始せられたる阿片專賣は爾來五十年間に其の目的を完了し、

昭和二十年六月十七日を期し阿片專賣を終止すべく方針樹立せられたるにより当局に於て昭和十九年九月以降阿片製造を打ち切りたり、阿片烟膏の販賣は当局より地方廳に配布、保管轉換し、地方廳は元賣捌人に、元賣人は小賣人に、小賣人は吸食特許者に販賣す。阿片烟膏の製造中止せられたるに伴ひ粗製モルヒネも亦之が製造を中止せり、而して該粗製モルヒネは從來厚生省のみ保管轉換し來りたるものなり。

第一項 生 產

本島專賣塩の主たるものは天日塩にして他に大正十年度より煎熬塩の製造を實施し來りたり、天日塩は塩水を塩田に導き蒸発、濃縮、結晶せしむるものにして煎熬塩は濃縮せし鹹水を火力により煎蒸して製造す（台灣製塩株式会社に安平煎熬工場年産能力二万五千屯）更に本島に於ける食用塩は主として天日塩を其の儘使用し來りたるも保健衛生に考慮を要する点あり、高級塩の配給を妥當と認め機械操作を加へ品質良好衛生的食料品として粉碎洗滌塩を昭和十二年より供給するに至れり、然るに各種工場の發達、物價勞銀の昂騰の影響を受け、昭和十年五千人を算せし製塩業者は同十四年度末に於ては三千二百人に減少し生産亦減退して年産十五万屯の確保困難となれり、依て昭和十六年四月一日既設塩経営を五会社及一千有余の個人業者を台灣製塩会社に合同せしめ大企業組織に改め塩田施設の改善及塩田経営の合理化を図りたり、次いで近時工業塩の需要激増の狀況に鑑み、資本金一千五百万円を以て南日本塩業株式會

社の設立を見、同社に依り台南及高雄州下に約六千甲歩（生産約四十万屯）の開設計畫樹立せられ昭和十三年十二月着工せり、以來未曾有の氣象不良、諸物價勞銀の高騰、資材の入手難と闘ひつゝ工事進捗中の処、昭和十六年度迄の完成面積二、二七七甲（総面積三、三〇〇甲）を以て一應打切り残余は頭初の計畫を變更し採鹹塩田となしたり、更に鐘ヶ淵曹達工業株式会社は新豊郡下安順庄に自社製造原料の確保を目的として工業塩田（約六百二十七甲）を開設し塩田より製造せる塩を溶解し之を飽和鹹水となし、電解法に依り苛性曹達の製造をなすと共に副生する塩素、水素を利用し諸化学藥品を製造することとなり、昭和十七年一月着工既に完成せり、食塩專賣開始以來必要に應じ塩田の開設維持改良災害復旧に関する工事費の一部又は全部を補助し來り、下附したる補助金は年額最高五十八万円にして累計二百五十一万余円となるが昭和十五年度限り打切れり、右の外既設塩田改善充実の爲修築費補助として毎年五千三百七十一円の補助金を支出しつゝありたるも昭和十五年度より五千百七円に減額せり、塩田面積及製塩従業者戸数は左の如し。

既 設 塩 田		塩田總面積	製塩従業者戸数	摘 取
年 度 別	摘 取			
明治 32 年	甲 354		708	
大 正 7 年	1,685		1,899	
昭 和 9 年	1,928		1,807	外に採鹹塩田 184 戸 塩田従業者 58 戸
同 13 年	2,292		1,637	同

同 16 年	2,279	1,311	同	75 戸
同 17 年	2,279	1,328	同	87 戸
同 18 年	2,269	—	同	

工業用塩田

年 度 別	塩田總面積	生 産 高 騰	摘 取	取 得
昭和 14 年	甲 482	騰 2,308		
同 15 年	1,242	18,134		
同 16 年	3,380	77,096		
同 17 年	3,300	145,337		
同 18 年	3,300	193,557		

第二項 収 納

人日塩は製塩者より百匁当二匁十七錢乃至二匁六十一錢、煎熬塩は七匁三十二錢、工業用塩は三匁九十五錢にて何れも専賣局に之を收納す。

人日塩取納数量及補償額

年 度 別	取 納 数 量	補 償 金 額	摘 取	取 得
昭和 32 年	戸 11,038	戸 31,730	輸出塩 7,743 匁	68,041 匁
大 正 2 年	101,800	369,269	なし	

昭和9年	160,763	932,824	同
同 13年	174,200	862,290	同
同 16年	206,195	2,052,330	同
同 17年	338,967	5,465,479	同
同 18年	473,197	6,670,486	同

煎熬塩收納数量及補償額

年度別	数量	補償額	単位
大正10年	4,197	126,462	円
昭和9年	30,342	676,621	
同 13年	27,259	629,426	
同 16年	13,703	451,120	
同 17年	16,796	621,437	
同 18年	15,740	651,642	

第三項 販 賣

一、島内 賣

昭和十八年度販賣数量並に賣捌人及小賣人数左の如し。

(イ) 昭和十八年度販賣数量 一〇一、五九一、九四〇担 (ロ) 賣 捌 人 六九人(昭和二十年四月現在)
普通 用 六九、七九四、三八〇担 小 賣 人 二、九四七人(同)

特別 用 三一、七九七、五六〇担

(一) 普通用塩の販賣

普通用塩は専賣局より賣捌人に、賣捌人より小賣人に、小賣人より一般消費者に賣捌く、但し賣捌人は一回の買受数量千疋以上の場合に限り、小賣人賣の價格を以て直接消費者に賣捌を得る事とす、賣捌人には賣捌高の多寡に依り七級迄の等級を設く、賣買差益は百疋当煎熬塩は八十一錢乃至一円七十二錢、天日塩は七十一錢乃至一円六十二錢とす、小賣人は一般賣捌定價に専賣局長の認むる賣捌人の營業場より自己の營業場迄の運賃実費を加へて賣捌くことを得、賣買差益は百疋当煎熬塩一円十錢、天日塩一円なり。

(二) 特別用塩の販賣

特別用塩は一回の買受数量六千疋以上の場合に限り特別價格にて専賣局より直接消費者に賣下ぐるものにして其の用途左の如し、但し醬油醸造用及味噌製造用に付ては一年の使用量三万屯以上たる場合に限る制限を附す、曹達工業用、煎熬塩用、再製塩用、石鹼製造用、魚類及海獸類塩藏物、獸皮及魚皮保存用、選種用、灌水器用

二、島外 賣

移輸出総額左の如し。

昭和十六年度移輸出総額 八六、六六〇、〇〇〇疋 同十七年度 同 一二三、八二九、八六〇疋
同 十八年度 同 一二六、三五四、一九五疋 同十九年度 同 五九、三八三、九三〇疋
内地移出天日塩は大日本塩業株式会社、煎熬塩は台灣製塩株式会社をして夫々取扱はしめ、台灣製塩株式会社の七

股産塩及南日本塩業株式会社の工業塩は夫々台湾製塩南日本塩業株式会社をして取扱はしめつゝあり。

第四章 苦 汁

天日塩製塩に於ける副産物たる石膏及苦汁は何れも重要資源にして特に本島に於ては天然石膏の資源なく又苦土加里資源に乏しきを以て当局に於ては昭和十九年九月苦汁專賣を実施し之れが資源の確保を計ると共に石膏は簡易なる操作に依り塩田に於ける増産を図りセメント原料として斯業に寄與する処勢からず。

石膏及苦汁生産高		苦汁		取 取	
年 度	石 膏	苦 汁	好 好	取 取	取 取
昭和十五年	565 屯	1,943			
同 十六年	166	3,029			
同 十七年	2,384	26,172			
同 十八年	7,085	37,168			
同 十九年	1,431	2,388			

第五章 樟 腦

第一項 原料、粗製樟腦、樟腦油、採取及收納

昭和十九年樟腦採取実施計画は粗製樟腦及樟腦油は五百五十万瓩を標準とし略々標準に近き生産額を収めたる。然るに、戦時以來漸次勞力不足の影響を蒙り、昭和十四、五年度に於ては、年四百十五万瓩内外に減産せり。昭和十六年七月米國に於ける日本資産凍結令施行せらるゝに及び從來樟腦輸出に依る外貨獲得政策は一変し國內に於ける軍需資材増強を対象とし加ふるに大東亞共榮圈に於ける樟腦の需給關係及山元に於ける製腦事情を斟酌し樟腦、樟腦油年産目標を約二百十萬瓩に変更せり。而して各年度に於ける実績左の如し。

原料樟腦、樟腦油收納数量		(單位瓩)	
年 度	樟 腦	本 樟 油	芳 樟 油
昭和十四年度	716,350	2,447,054	1,403,573
同 十五年度	694,373	2,288,244	1,567,055
同 十六年度	379,308	1,451,792	1,042,544
同 十七年度	247,231	938,926	712,428
同 十八年度	182,578	654,390	603,370
同 十九年度	151,767	542,877	448,836

第二項 專賣樟腦油製造

山元に於て製造したる樟腦、樟腦油の中、山製樟腦は当局に於て昇華法に総て一定の品質に調理す、之を改良乙種樟腦油と称す、樟腦油は之を分別蒸溜して樟腦及副産油を抽出す此の樟腦を再製樟腦と称し、山製樟腦と共に改良乙種樟腦の原料に使用する。

專賣樟腦(改乙)製造高

(單位斤)

区分	昭和14年度	昭和15年度	昭和16年度	昭和17年度	昭和18年度	昭和19年度
台北南門工場	1,579,209	1,172,465	914,855	610,207	576,387	320,805
神戸出張所	526,830	478,846	386,282	175,876	—	—
計	2,096,039	1,651,311	1,301,137	786,083	576,387	320,805

再製樟腦及收納高

(單位斤)

区分	昭和14年度	昭和15年度	昭和16年度	昭和17年度	昭和18年度	昭和19年度
台北南門工場(製造)	1,298,597	1,181,209	810,730	439,995	736,359	252,327
神戸出張所(收納)	620,259	520,710	405,599	153,423	—	—
計	1,918,856	1,701,919	1,216,329	593,418	736,359	252,327

第三項 專賣樟腦の販賣

一、國內賣

往時は内地の需要に対しては直接本府專賣局より供給したりしことありしも昭和三年十一月内地專賣局と本府專賣局との協定に依り樟腦の内地供給は内地專賣局に於て之を取扱ひ本府專賣局は台湾内及外國への供給のみを担当することとなりたる爲、爾來本府は内地の需要者に直接供給することなく精製樟腦原料に充つる爲、日本樟腦株式会社(台北支店)に供給するに過ぎず、而して内地への供給に付ては前年度に於て内地專賣局との間に一箇年分の供給協定を爲し、内地專賣局に於て該協定に基き供給せられたるものを内地の需要者に供給するものなり、尙本府專賣局より内地專賣局に融通の樟腦賣渡値段は両局にて協議の結果、セルロイド原料用賣渡價格に拠ることとなし居れり、現在に於ける賣値を示せば左の如し。

改良乙種樟腦國內賣値表

(正味百斤当り)

用途別	神戸	渡台	台北	渡臺	臺東
精製樟腦原料用	—	¥642	—	¥639.50	—
セルロイド原料用	—	360	—	357.50	—
其の他用	—	360	—	357.50	—

二、外國賣

太平洋戰勃發により現在欧米向の取引は皆無となりたるが欧米に対する従来の販賣方法は前述のセルロイド國內賣値に輸出諸費を加算したるものを基準とし賣約當時の爲替相場換算により米國向は弗建、歐洲向は磅建とし販賣は日本樟腦株式会社に委託し同社は更に三井物産株式会社に委任し同社に於て直接販賣の衝に當り來りたり。

專賣樟腦國內賣渡高

区分	数量	金額	摘要
昭和14年度	計 斤	2,406,920	¥5,575,773
同 15年度	—	1,807,000	6,535,480
同 16年度	—	1,023,000	3,627,795

同 17年度	526,290	1,671,652
同 18年度	614,380	2,062,209
同 19年度	338,800	2,037,126
平均	119,398	3,585,005

専賣樟腦(仕向地別)輸出高 (單位斤)

区分	昭和4年度	昭和5年度	昭和6年度	昭和7年度	昭和18年度	計
英 國	64,200	3,000	—	—	香港、ボルネオ、 佛印 49,600	116,800
佛 國	54,900	—	—	9,200	134,300	208,400
支 那	—	—	21,000	369,780	275,800	656,580
米 國	602,160	210,000	—	—	—	812,160
泰 蘭	—	—	—	98,300	113,800	207,100
計	721,260	—	21,000	78,820	120,200	199,020
				561,100	693,700	2,210,060

第四項 副産物

樟腦油より再製樟腦を製造する際副産物として諸種の油類を生ず副産物は白油、赤油、藍色油、芳油、高級芳油、ゲラニオール、ターピネオール等にして從來は其の儘海外に輸出し居たるも最近殆んど全部國內に於て処理せられ高級香料として内外の需要に向けられてゐる。

副産物生産高

(單位斤)

区分	白油	赤油	藍色油	芳油	B芳油	A芳油	グラニオール	ターピネオール	計
昭和4年度	507,122	483,157	34,220	—	142,484	99,428	74	44,486	1,310,871
同 15年度	478,634	486,596	29,875	113,700	86,864	92,483	—	41,695	1,326,853
同 16年度	332,890	333,000	18,195	48,600	86,015	39,190	—	40,175	898,085
同 17年度	165,067	164,557	3,810	—	26,294	—	—	10,451	370,179
同 18年度	315,117	313,524	21,518	—	80,785	—	—	58,490	785,434
同 19年度	134,527	125,617	5,066	—	7,066	—	—	28,907	301,183

副産物現行賣値一覽表

(昭和20年9月1日現在)

性 別	單位	本局渡正味	神戸渡正味	備 考
白 油	百斤当り	131.00	135.00	18年度以降は台北のみにて神戸渡はなし
赤 油	同	161.50	165.00	同
藍 色 油	同	94.00	97.50	同
高級芳油	A 一筋当り B 同	6.93 3.00	6.95 3.00	同 同
ターピネオール	百斤当り	144.00	—	同
グラニオール	同	368.00	370.00	同

第六章 煙 草

第一項 原 料

一、原料葉煙草

煙草は煙草試験場に於ける試験の爲、直管耕作をなすものの外総て政府の許可を受けたるものをして耕作せしめ其の耕作に係る葉煙草を賠償收納し製造の原料に供す。

昭和二十一年の実績左の如し。

煙草耕作面積 二、六八四・二六九^甲 葉煙草收納量目 一、六四二・七五三・五^担 賠償金額 四、六五八、九二〇・一五^円
而して現在耕作せる葉煙草は黄色種及支那種の二種類にして其の内訳左の如し。

(イ) 黄 色 種 (面切煙草原料)

区 分	昭和18年 期 ^甲	昭和19年 期 ^甲	昭和20年 期 ^甲
耕作面積	4,628.3285 ^町	4,681.4115 ^町	2,426.2572 ^町
收納量 ^町	7,482,997.5	6,522,048.5	2,534,750.0
区 分	昭和18年 期 ^甲	昭和19年 期 ^甲	昭和20年 期 ^甲
耕作面積	351.1821	371.7115	259.0118

(ロ) 支 那 種 (刻煙草原料)

收納量 ^町	885,685.5	850,960.5	118,003.5
------------------	-----------	-----------	-----------

二、原料葉煙草の耕作現況と收納

原料葉煙草の耕作現況は黄色種は島内に於ける需要の激増に伴ひ之が自作自給と中南支向原料及製品の輸出等専ら之を供給の円滑化を図る方針の下に食糧作物並に重要國策作物との摩擦を避けつゝ年々耕作面積の拡張を図り來りしも昭和十七年期の五、六六六甲を最高として戦争の長期化と共に中支産雜糧の入手難と諸資材の入手難に基因し漸次減反の止むなきに至れり、支那種は昭和八年以降完全に自産自給の域に達せしも近年黄色種同様の事由に依り減反の止むなきに至れり、葉煙草收納の耕作者の耕作せる葉煙草を全部当局に於て賠償收納す、而して賠償價格は一担當を單位として黄色種は七箇等級とし支那種は六箇等級とす。

(イ) 葉煙草收納量目及賠償金

種 別	昭和18年 期	昭和19年 期	昭和20年 期
黄色種	7,482,997.5 ^町 11,525,047.51 ^円	6,522,048.5 ^町 11,958,159.90 ^円	1,524,750.0 ^町 4,399,218.80 ^円
支那種	885,685.5 ^町 1,010,297.25 ^円	805,960.5 ^町 959,388.65 ^円	118,003.5 ^町 259,601.35 ^円
計	8,368,683.0 ^町 12,536,045.16 ^円	7,328,009.0 ^町 12,917,548.55 ^円	1,642,753.5 ^町 4,658,920.15 ^円

(ロ) 現行葉煙草賠償價格表

種別	優等	1等	2等	3等	4等	5等	6等
黃色種	円 3.40	円 2.70	円 2.10	円 1.60	円 1.20	円 .80	円 .80
支那種	—	2.70	2.10	1.60	1.20	.80	.80

第二項 製造及製造煙草の輸移入

煙草は從來台北、松山両工場に於て製造し來りたる所、昭和十九年度に於て其の一部を嘉義及台中各支局に、昭和二十年度に於て同じく一部を台北州南港及花蓮港玉里に分工場又は独立作業場として疎開せり、右製造煙草の種類は両切紙卷四種、葉卷四種及刻四種なり。即ち

両切紙卷 黒潮、曙、つはもの、日の出 葉卷 新高、マボラス、ノーコー、大屯
刻 白菊、水仙、玉蘭、日の丸

昭和十九年度の製造高は両切三十二億八千八百八十九万八千本、葉卷二十六万七百二十本、刻は六十五万五千二百二十疋なり。昭和二十年度製造予想高は空襲被害等戦争の影響を蒙り両切紙卷は十九億六千八百八十五万本にして十三億千九百四十八万本の減を示し、葉卷は製造を廢止し、刻は六十六万九千九百疋にして一万四千七百八十疋の増加見込なり。

煙草製造高

年度別	両切	葉卷	刻
昭和十四年度	本 2,237,718,930	本 513,710	瓦 916,255,000
同 十五年度	2,728,194,906	733,700	967,842,500
同 十六年度	3,267,760,000	667,315	972,938,525
同 十七年度	3,296,161,200	721,180	837,270,000
同 十八年度	3,853,520,000	530,325	782,995,000
同 十九年度	3,280,898,000	260,725	655,120,000

製造煙草輸移入数量

(昭和19年度)

区分	口付	両切	刻
内地製品	本 16,800,000	本 13,000,000	瓦 13,161
外國製品	—	—	—

製造煙草の輸移入價格

(昭和19年度)

区分	口付	両切	刻
内地製品	円 189,000	円 22,730	円 111,561
外國製品	—	—	—

第三項 販 賣

一、輸出原料葉煙草

本府專賣局より賣渡したる原料葉煙草及煙草類左の如し。

種 別	数	量	金	額	種 別
本島產黄色種	529,778	箱	3,495,414.310	円	
煙 草 類	1,040,000		52,613.800		
計	1,569,778		3,548,028.110		

二、製造煙草の販賣

製造煙草は專賣局より賣捌人及小賣人を経て消費者に供給す、昭和十九年度中の販賣高の口付六千九百万本、両切三十六億九千四百万本、葉卷八万本、刻百五十二万四千兩にして、金額は七千九百七十八万円なり。

賣捌人 八四名 小賣人 約六、〇〇〇名

賣捌人の手数料は七階級とし定價の千分の十一乃至三十五にして小賣人の手数料は一率に定價の千分の五十とす。

製造煙草賣下数量					
(昭和19年度)					
区 分	口 付	面	切	葉 卷	刻
台 灣 製 品	本	3,685,078,590	本	80,315	1,496,521
内 地 製 品	—	9,135,860	—	—	28,296

外 國 製 品	—	—	—	—	—
計	69,109,000	3,694,214,450	—	80,315	1,524,818

製造煙草賣下價格					
(昭和19年度)					
区 分	口 付	面	切	葉 卷	刻
台 灣 製 品	円	68,914,425	円	58,544	7,787,453
内 地 製 品	—	30,025	—	—	761,837
外 國 製 品	—	—	—	—	—
計	2,263,381	68,944,450	—	58,544	8,520,290

三、製造煙草の需給狀況

昭和二十年度の煙草製造量は資材勞力両面より検討し二、八一六、〇〇〇兩と予定せるも之は昭和二十年度島内消費予想量四、三六〇、〇〇〇兩の約六五%を賄ふに過ぎず島外よりの輸入杜絶と相俟ち島内煙草需給狀況は相当逼迫を告げ居る現状なり。

昭和二十年度煙草販賣予定					
区 分	單 位	数	單 價	金 額	備 考
両 切	—	137,000	円	39,628,150	
葉 卷	1万本	34,000	513,150	17,447,100	
計				57,075,250	

曙	同	63,000	326,550	20,572,650
つはもの	同	40,000	37,560	1,502,400
刻		—	—	23,688,420
白	20 貯	2,800	559,800	1,567,440
水	同	24,000	410,520	9,852,480
玉蘭	同	3,000	279,900	839,700
曙(特殊用)	1 貯	700,000	10,329	7,230,300
かつは計	同	150,000	27,990	4,198,500
合		—	—	63,210,570

製造煙草輸移出入数調

年 度	單 位	輸 入 数	輸 出 数	備 考
昭和 14 年度	貯	1,035,176	251,443	
同 15 年度	"	904,897	209,900	
同 16 年度	"	594,717	41,338	
同 17 年度	"	396,487	225,087	
同 18 年度	"	208,016	253,493	
同 19 年度	"	42,962	176,684	
同 20 年度	"	—	—	

第七章 酒 類

酒類の事實を開始せるは大正十一年七月にして創業以來着々設備の充實改良と製造方法の改善を圖り其の賣上高も逐年増加し、昭和十九年度に於ては其の製造高二八一、三〇三、九一七円に達し專賣收入の中樞をなす。

第一項 製造及輸移出入

酒類は総て台北、樹林、板橋、新竹、宜蘭、台中、埔里、嘉義、台南、屏東、花蓮港、台東の各支局、出張所又は工場に於て製造し民營を許さず、而して製造酒は清酒（凱旋、福祿）米酒、紅酒、藥酒、鳳梨酒、洋酒等にして清酒洋酒等は内地人其の他は本島人之を飲用す、酒類輸移入は專賣局又は專賣局の命を受けたる者之を行ふ、移入の主なるものは清酒、麥酒にして尙島内製品たる高砂麥酒の買上をなす。

酒 類 製 造 高 比 較

酒 名	單 位	昭和 16 年度	昭和 19 年度	備 考
清 酒	箱	105,868	61,465	
米 酒	"	251,630	140,257	
紅 酒	"	60,058	58,818	
藥 酒	"	35,610	25,440	
洋 酒	"	901	1,476	
其 他	"	2,500	4,450	

品名	計	入	輸	入	高	比較	昭和16年度		昭和19年度		摘要
							目	單位	目	單位	
酒類	計	入	輸	入	高	比較	291,567	231,906	18,244	96度品	
酒精	計	入	輸	入	高	比較	42,059	18,244	96度品		
移入	計	入	輸	入	高	比較	62,201	732	—		
輸	計	入	輸	入	高	比較	513	—	—		
	計	入	輸	入	高	比較	62,714	732	—		

內地移出酒類実績

品 目	昭和 16 年度実績			摘 要
	数	量	金 額	
老 加 皮 酒	328	増	円 8,356	昭和 16 年度 452,856 昭和 19 年度 327,817
五 米	146		5,893	
糖	6		1,747	
計	482		15,996	
備考	昭和 18 年度以降の船腹獲得難より移出を中止す			
島 内 酒 類 需 要 高				摘 要

第二項 販賣

酒類の販賣は本局支局又は出張所より賣捌人に配給し、賣捌人より小賣人に、小賣人より一般消費者に販賣す。

賣捌人 九三名 小賣人 五、五〇〇名（昭和二十年六月末現在）

- (1) 賣捌人に付ては賣捌人に対する賣下代金は担保を提供四ヶ月間延納を許す。
- (2) 小賣人に配給する場合は現金制を採る。
- (3) 定價を以て一般消費者に賣渡す。
- (4) 賣捌人の受くる手数料は交通の便否、距離の遠近等を一級乃至七級とす、即ち左の如し。

1	級	同	2	級	同	3	級	同	4	級	同	5	級	同	6	級	同	7	級
定價の 1分7厘			2分			2分5厘			3分			4分			5分			6分	

- (5) 小賣人の受くる口銭は一率に定價の五分なり。

酒類賣渡高

種類	昭和16年度			昭和19年度		
	数	量	金額	数	量	金額
内地酒	14,656	酒	2,483,618	5,190	酒	2,864,149
本島酒	102,870		8,617,640	70,834		15,803,404
米酒	244,586		14,224,082	154,531		31,350,215
紅藥酒	60,889		5,051,148	62,693		20,036,556
洋酒	34,709		3,943,561	31,728		12,969,552
種酒	7,403		2,449,128	2,358		2,017,096
精酒	5,717		261,329	4,997		1,308,734
柏酒	—		82,992	—		43,516
内地酒	40,945		3,428,549	2,267		566,188
本島酒	55,565		3,456,358	20,509		4,076,391
米酒	3,544		277,430	3,176		1,268,169
紅藥酒	570,884		44,375,835	358,283		91,303,971
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						
精酒						
柏酒						
内地酒						
本島酒						
米酒						
紅藥酒						
洋酒						
種酒						

同	古	東	13	7	210
同	新	竹	5	4	120
同	南	靖	28	30	900
明	南	投	23	—	700
治	南	總	9	—	—
製	南	總	20	20	600
糖	藤	頭	9	8	240
同	溪	湖	7	25	75
同	台	東	27	—	—
同	新	營	10	—	—
鹽	嘉	義	30	20	600
水	嘉	義	—	—	—
港	嘉	義	—	—	—
製	嘉	義	—	—	—
糖	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—
同	嘉	義	—	—	—</

配給状況

現在に於ける酒精の配給状況概ね左の如し。

燃料酒精	一、八〇〇坪
酒造原料用	七〇〇〃
工業用其他	一〇〇〃
計	二、六〇〇〃
備考	軍需用を除く

第九章 度量衡

本島に於ける度量衡器は其の製作、修復、販賣に關しては營業免許制なりしも明治三十九年四月之を改め、器物の正確統一を目的とし台湾度量衡規則により其の製作修復及賣下を官營とせり。

第一項 製作

当局に於て取扱ふ度量衡器、計量器の種類は左の如し。

度量衡器

- 一、度器 直尺、曲尺、疊尺、卷尺、鏈尺、縮尺、タクシイメーター、特殊度器
- 二、量器 撻斗概、化学用量器、特殊量、瓦斯メートル、水量メートル、ガッリン量器
- 三、衡器 台秤、上皿天秤、化学天秤、上皿秤、木秤、自動秤、特殊衡器
- 四、計量器
 - 1、計圧器、圧力計、真空計、聯成計
 - 2、溫度計、体温計、寒暖計、其の他溫度計
 - 3、浮秤
 - 4、生糸織度檢定器
 - 5、乳脂計

此等度量衡器は島内自製自足を目標とし努力し來るも其の種類多種にして自足し難く特殊の度量衡器は内地より移入に俟てり、殊に大東亞戦争以來製作、移入共に減少し昭和十九年度に於ては予定計畫に対し製作三〇%、移入一〇%の実績なり、現在に於ては製作機能殆んど停止状態に在り。

製作官署 度量衡所(台北市) 台南支局(台南市)

修履官署 度量衡所 台中支局

台南支所 花蓮港支局

第二項 販 賣

度量衡の販賣は左に依り行ふ。

賣下官署 十四ヶ所 特殊販賣營業所 百六十五ヶ所

年度別收入及損益左の如し。

年 度	收 入	損 益 (△損)
大 正 5 年	円 129,000	円 9,700
同 15 年	353,915	52,761
昭 和 6 年	451,515	74,308
同 16 年	1,307,643	128,988
同 17 年	1,208,630	201,721
同 18 年	1,198,790	126,171

第十章 燐 寸

燐寸專賣は昭和十七年六月二十四日附台湾燐寸專賣令公布に依り同年七月一日より実施せり。

第一項 製 造

台湾燐寸株式会社を昭和十七年七月附を以て買収し翌七月八日より製造を開始せり、昭和十九年十月新竹燐寸工場
の完成を見、同月より製造を開始せり。之が製造実績並現在の製造状況及原料材料關係左の如し。

一、燐寸製造実績

年 度 別	製 造 実 績		計	備 考
	台 中 工 場	新 竹 工 場		
昭 和 17 年 度	屯 6,471.80	屯 1	屯 6,471.80	
同 18 年 度	7,766.07	1	7,766.07	
同 19 年 度	6,823.20	1,228.60	8,051.80	
同 20 年 度	1	287.00	287.00	20年度は8月迄
計	21,061.07	1,515.60	22,576.67	

二、現在の製造状況

(1) 新竹燐寸工場

(イ) 関西工場のみ操業

(ロ) 生産実績 四月 九九屯 五月 七三屯 六月 二四屯 七月 五七屯 八月 三四屯

(ハ) 工場能力

関西工場二〇〇屯、新竹工場を補修の上一部機械設備を増設すれば月産一、〇〇〇屯能力

(2) 台中燐寸工場

塩素酸加里皆無の爲、本年度当初より製造中止、工場能力一、〇〇〇屯なり

三、原材料材料関係

燐寸専賣當時は原材料総て内地依存なりしも其の後鋭意努力の結果、島内に於て自給を完了せるも戦時中爆撃に依り生産中止又は削減等を來し燐寸の現状左の如くなるも之が復旧容易なり。

(1) 塩素酸加里

在庫四、八〇〇吨之に依り硫黄燐寸一、七〇〇屯製造可能の見込みなり、之が島内自給策として南日本化学工業株式会社高雄工場に於て生産中なりしも爆撃に依り送電設備を破壊せられたるため生産中止の止むなきに至る。

(2) 赤燐

台湾電化株式会社基隆工場に於て生産中なりしも爆撃に依り一時中止せり。

第二項 販 賣

燐寸の販賣機關は賣捌人及小賣人の二階段にして賣捌人は三九名、小賣人は概數三千名なり。

賣捌人は所定の賣捌区内に於て小賣人に燐寸を賣捌し、小賣人は消費者に賣渡す、燐寸賣渡數量は其の當時の數量に比し著しく不足せるを以て昭和十八年十一月配給割当制を採用現在に至りたり昭和十七年度以降の販賣実績左の如し。

年 度	家庭燐寸	新 高	かぶと	並 型	機用燐寸	煙草用燐寸	計
昭和17年度(7月以降)	2,624.8	8,373.9	5,106.9	2,615.6	—	—	18,721.2
昭和18年度	9,334.4	8,287.0	5,029.8	8.3	60.8	57.5	22,777.8
昭和19年度	2,986.4	6,628.9	122.0	—	207.6	93.1	10,038.0

第十一章 石 油

石油は國防上産業上極めて重要性大なるを以て從來石油業法、人造石油製造事業法、石油配給統制規則等に依り生産配給兩方面に亘り強度の統制を加へ來りたるも大東亞戰勃發に依り之が徹底的配給統制の強度化を要請せらるゝに至りたるを以て昭和十八年七月一日、内地、朝鮮と同時に石油の事實を実施し今日に及びたり。

第一項 專賣石油の種類

專賣石油は揮発油、燈油、輕油、重油、機械油、石油、副製品及此等の類似品にして政府の指定せるものなるも現

在次の通りとす。

- (1) 炭化水素を主成分とする揮発油、燈油、軽油、重油（原料として輸入する重油を除く）
- (2) 炭化水素を主成分とする電気絶縁油、スピンドル油、冷凍機油、ダイナモ油、タービン油、マシン油、マリ
ンエンジン油、内燃機油、シリンドー油及台車油
- (3) 燃料酒精

第二項 販 賣

石油の販売機関としては甲種、乙種の両賣捌人の外別に小賣人を置く、甲種賣捌人は政府より賣渡を受け、之を乙種賣捌人に賣下げ乙種賣捌人は之を消費者に販賣す、小賣人は乙種賣捌人より買受け之を消費者に販賣するものなるも其の取扱品種は燈油、揮発油の如く零賣を必要とするものに限り其他の石油は取扱はざるものとす。

第三項 收納及購入

石油專賣は所謂販賣專賣なるを以て許可を與へて民間にて製造せしめたるものを收納す、現在本島の製造業者は日本石油株式会社の一社とす、本島に於ける石油の製造高は島内需要の一、二割程度にすぎざるを以て残余不足分は石油配給統制株式会社をして内地製品を移入せしめ、之を購入し南方還送油は直接共同企業株式会社より購入しつゝあり。

第四項 需 給 状 況

本島石油需要中燃料酒精を除き揮発油、燈油、軽油、機械油、重油等は其の生産極めて少く其の大部分は之が補給

島外に仰ぐ外なき現狀にあり、従つて現在燃料酒精、揮発油を除き其の他の油は在庫がきを以て其の他の島外より平和産業の運行に支障を來すの虞あるを以て戦時同様の配給割当制度を継続実施中なり。

(1) 製造狀況

品 種 別	製造会社名	能 力	現 在	備 考
揮 発 油	日本石油株式会社	350	250	バラインベツチを除く
燈 油	同	58	50	
軽 油	同	83	30	
機 械 油	同	1	8	
重 油	同	13	1	

(2) 配給狀況

燃料酒精	一、八〇〇軒	軽 油	四〇〇軒
揮 発 油	五〇軒	重 油	二〇〇軒
燈 油	六〇軒	機 械 油	一三〇軒

備考 配給高に対し製造高少きものは総て当局在庫係一月量より支給しつゝあるものにして今後島外より輸入なくも六箇月は略々配給上支障を來さざる見込なり。

専賣開始後油類製造数量調		製造者日本石油株式会社苗栗製造所	
種 類	銘 柄	昭和18年度 7月—3月	昭和19年度 4月—3月 計
揮 発 油	91号航空揮発油	—	686,600

三〇

同	82号航空揮発油	—	25,400	25,400
同	87号 同	832,450	451,650	1,284,100
同	971号 同	384,316	556,200	940,516
同	2号工業用揮発油	226,126	108,540	234,666
同	15号 同	172,401	2,880	178,282
同	自動車用揮発油	1,354,500	2,169,060	3,523,560
同	酒精・炭性用石油	163,096	99,790	262,886
同	台 宝 油	427,402	620,106	1,047,508
同	揮発油吸収用燈油	—	117,100	117,100
同	別 2 号 輕 油	627,362	755,577	1,382,939
同	別 1 号 重 油	—	76,000	76,000
同	床 別 ヲ シ ス 油	61,176	59,850	332,016
同	機 別 ヲ シ ス 油	—	49,460	49,460
同	計	4,251,820	5,878,213	10,130,033

石油類購入実績表

(單位立)

摘要

種 類	昭和 18 年度	昭和 19 年度	計
航空揮発油	830,100	1,404,000	2,234,100
普通揮発油	2,526,504	1,923,860	4,450,364
燈 油	4,357,880	1,745,358	6,103,238
輕 油	940,574	948,871	1,889,445

電 機	6,701,629	6,964,341	13,665,970
機 械	2,283,910	1,873,338	4,157,248
計	17,643,597	14,859,514	32,503,365
無 水	11,504,180	4,849,504	16,353,694
含 水	—	21,868,952	22,868,952
精 油	11,504,180	26,718,466	38,223,646
計	29,147,777	41,578,234	70,726,011
合 計			

石油類賣渡実績表

(單位立)

(單位立)

種 類	昭和 18 年度	昭和 19 年度	計
航空揮発油	—	1,404,000	1,404,000
普通揮発油	3,685,576	2,004,500	5,690,076
燈 油	4,165,351	1,639,158	5,804,509
輕 油	762,678	948,871	1,711,549
重 機	2,220,215	8,047,995	10,268,210
計	1,711,518	1,873,308	3,584,826
無 水	12,572,338	15,917,832	28,445,170
含 水	10,884,100	3,546,215	14,430,315
精 油	—	24,443,712	24,443,712
計	10,884,100	27,989,927	38,874,027
合 計	23,411,438	43,907,759	67,319,197

第十四編

雜

第一章 國有地処分

第一節 土地処分の沿革

第二項 土地の國有区分調査

台灣の土地に付ては領台直後明治二十八年所有權を証明すべき地券其の他確証なき山林原野は総て之を國有とし、開墾地に付ては明治三十一年九月より明治三十七年三月迄東部二廳及澎湖を除く行政区域内の土地調査を行ひ、田畑養魚池、建物の敷地合せて四十二万余甲の民有地を査定し林野に付ては明治四十三年十一月より大正四年三月迄全島行政区域内の林野調査を行ひ三万一千余甲の民有地を査定せり。

第二項 林野整理及之に依り決定せる不要存置林野の拂下

前述の土地調査及林野調査に依り本島西部行政区域に於ける國民有区分決定せるも更に國有地の要存置不要存置の区分を決定する要あるを以て大正五年四月より同十五年三月迄林野整理事業として先に決定せる國有地中の林野に付要存置林野を区分し要存置林野三十一万九千余甲及不要存置林野三十九万八千余甲を決定せり。

爰に於て右不要存置林野の内十九万二千余甲は縁故者に拂下げ殘余の不要存置林野二十万六千甲を、又拓殖及土地整理一般に開放し処分するの必要を認め、明治二十九年以來台灣官有森林原野特別処分令、台灣官有財産管理規則

(第六條第三号及第五号を除くの外昭和十二年四月一日廢止せらる) 國有財産法(第二十四條及行政訴訟を除く外昭和十年四月一日台灣に施行せらる) 台灣塩田規則、台灣糖業獎勵規則、台灣樟樹造林獎勵規則に依り出願せる者に対し其の資力經濟起業方法を審査し事業成功確実と認めらるる者に予約賣渡貸渡所有權無償付與等をなし來れり。

第三項 無斷開墾地に対する処置

國有林野の無斷開墾は領台前よりの陋習なるを以て林野取締規則、台灣保安林規則及台灣森林令に依り開墾者に対し夫々制裁を加へ日本人に対しては無斷開墾賣渡買受を許可せざる方針を採り、例外として一家の生活の爲に零細なる土地を自ら無斷開墾せる者に対しては特に許可をなしたり。

第二節 國民有地面積及國有地処分に現況

第一項 現在の民有地

本島の總面積三百七十七万七千余甲(新南群島を除く)の内民有地調査、林野調査に依り査定したる民有地及林野整理以來拂下げたる土地を合せ昭和十八年一月一日現在の民有地總面積百二十二万三千五百余甲にして其の地目別面積左の如し。

内 訳	
田	五四一、二九七甲
建物敷地	四二、五三〇甲
畑	三三三、一二五甲
塩 田	五、二二一甲

養魚池 一一、一八四甲

林野其の他 三〇六、一三〇甲

計 一、二二九、五七七甲

(備考右民有地中には要存置林野を解除するものを含む)

第二項 現在國有地面積

本島總面積三百七十七万七千余甲の内、昭和十七年一月一日現在の國有地は前述の民有地百二十二万九千五百余甲を控除したる残部即ち二百四十七万八千余甲にして、内公用財産十五万五千余甲、公共用財産十九万七千余甲、營林財産百四十六万余甲、雜種財産六十五万余甲を算し、此の未処分地中蓄地に属するもの四十八万二千余甲、普通行政區域に属するもの五万八千余甲なり、而して普通行政區域に属する未処分地中地形位置等の關係上民營に適せざる等の事由に依り要存置林野に決定せるもの一万余甲不要存置林野四万八千余甲なり。

第三項 國有地処分の現況

右不要存置林野に対しては台灣官有森林原野及產物特別処分令、台灣官有財産管理規則其の他の法令に依り予約賣渡貸渡並讓與交換貸付準貸付等の処分を爲し來れり、之より先大正十三年頃より土地の賣渡貸渡等の出願漸次増加して之が処置停滯したるを以て大正十五年度より經費年額十九万四千余円、七箇年継続の官有地整理事業として停滯願件の調査整理を爲し、又本島に於ける領台以前よりの陋習たる無斷開墾を一掃せんが爲、昭和二年度より年額六万六千余円、六箇年継続の官有地整理事業として全島に亘る不要存置林野中の無斷開墾地を調査し之が競賣処分を爲せり然るに右兩事業の目的たる前記停滯願件の調査整理を要するもの更に増加停滯したるを以て、昭和八年度より經費年

額二十万円千円、五箇年継続の予定を以て右両事業を一括し官有地整理事業として之を続行せり、而して官有地整理事業は予定の通昭和十二年度限り一切之を打ち切り將來尙無斷開墾の整理を要するものに付ては之を後図に譲ることゝなせるも同年度末に於て土地の賣渡貸渡等の出願処理停滯せるのみならず過去の事例に徴し、將來尙年々出願継続するものと認めらるゝを以て從來に引続き経費年額十六万余円を以て官有地整理事業（後に述べる國有集團地、調査國有既墾地管理、國有土地利用開發調査及國有零細地処分を含む）を継続施行中なり。

第三節 國有地処分に関する方針

第一項 方針確立の爲國有集團地調査

本島國有集團原野十三万七千余甲は本島の産業開發及地方財政上極めて重要な使命を有するものに付大体的方針として將來の爲保留し來れるも近時之を對象とする拓地殖民事業漸く勃興の氣運に向ひ之が本格的処分を必要とするに至りたるを以て該処分と根本方針を樹立する爲、官有地整理事業の一部として昭和十三年度より同十五年度に至る三箇年の予定を以て前記集團地原野の周密なる經濟調査を行ひ、調査面積十三万六千三百十六甲余、内処分面積一万一千百八十七甲余、賣渡代金七十三万三千九百四十九圓余、一箇年貸付料十四万四千四百四十二圓余に及び昭和十五年十二月を以て完了せり。

第二項 無斷開墾地整理の爲國有既墾地管理

無斷開墾に依り國有地と化し居る土地約三万三千甲に付ては急速に之が實地調査を施行し、適當なる者に之を貸付

して不法なる土地利用狀態を合理化すると共に國有地收入の増加を計る必要あり、之が爲官有地整理事業の一部として昭和十四年度より同十六年度に至る三箇年の予定を以て國有既墾地の調査を施行し、面積一万二千五百六十二甲余の処理を爲し、年額貸付料四十七万八千七百六十四圓余の収益を上ぐるに至り昭和十六年十二月を以て完了せり。

第三項 山地利用開發

時局下の本島主要農産物増産計畫、本島特産物増産計畫、熱帯有用植物の植栽企業遂行の爲には營林的要存置林野準要存置林野各帝國大學演習林未区分地等約二百萬甲の國有林野の利用開發に俟たざるべからざるものあるを以て昭和十六年度より昭和二十年度に至る五箇年間の予定を以て國有土地利用開發調査事業を開始せるも時局の轉換等により予定の進捗を見ず十八年度迄に調査せる面積三十一万七千甲なり。

第四項 國有零細地の処分

大面積の無斷開墾地は殆んど整理せられたるも小面積の所謂零細地に属する開墾地は依然として残存せるを以て昭和十七年、十八年の兩年度に於て之が拂下を実施せり、処分面積二八〇余甲價格五十五万余円なり。

第五項 國有不要存置林野処理の現況

不要存置林野にして米、甘蔗、甘藷其の他の重要作物等を栽培せしむる目的を以て企業家に予約賣渡又は貸付等を許可せる面積は現在十二万余甲あり、又比較的利用開發容易と認めらるゝ集團地に対しては内地人農業移民を招致し既に昭和十五年度末迄に移民千五百戸に対し面積五千余甲の移民用地の割当を了し予約賣渡を許可せる面積千五百九十五甲余にして其の他は処理進行中なり。

第二章 南支南洋に関する施設

台湾総督府は南支在留邦人保護施設として明治四十一年以來福州、厦門、汕頭、廣東に於ける邦人子弟の初等教育を施すべき学校施設費を補助し教員を派して兒童教育の助成を爲し、又厦門、福州、汕頭、廣東等に博愛会医院を設、置助成して邦人の保健衛生に資すると共に中國人に対しても日華親善に貢献し又善隣協會を設立して厦門、福州及香港並盤谷に於て各種新聞を経営せしめ且つ其の経費を補助して与論誘導に努めたり。

然して南洋に於ける邦人の企業は歐洲大戰當時勃興せるものにして大正十年度に於ては企業投資額一億円余りに達したるも戦後内地財界の反動と数次の恐慌に依り打撃を受け各事業とも衰退の徴を呈せり。

本府は大正三年以降資金難を訴ふる南洋に於ける邦人事業家に補助金を交付し、又医院の設置経営に補助して在留邦人の保護助成に努めたり、然るに南支南洋に於ける邦人の兒童教育医療通信等の文化施設は当時稍々好調にありしが一面邦人企業助成の頗る貧弱なりしを以て、昭和四年より南洋企業助成に主力を注ぐと共に南洋に於ける邦人企業助成方針を改め試験補助、独立補助、其の他特殊のもの外は南支南洋に於ける事業家にしても而も華南銀行より資金を借入し其の事業が將來有望且つ助成を要すべきものと認めらるゝものに対しては昭和四年以降補助金を下附したり。

而して南支南洋施設費総額は支那事變勃發前迄は例年著しき増減なく大体七十万円程度なりし処、事變を契機とし

て我國朝野の南方に対する関心頗る昂揚し來り本府に於ては所謂南方の拠点たる台湾の使命に鑑み種々施策する要あり、即ち昭和十二年度に於ては同施設費は八十六万円の増額を見、総額百三十五万六千余円に、昭和十三年度に於ては総額百五十五万二千余円、同十四年度は総額四百七万三千余円、同十五年度には総額五百三十八万七千余円、同十六年度は八百十八万二千余円と、累年増額の傾向を示し來れる処、昭和十七年度に於ては大東亞戰勃發に依り現地に於ける邦人企業も其の多くは作戦進行中中止のやむなきに至りたる事情等の爲、十七年度以降は幾分減額され、十九年度は七百二十八万余円なり。

別表

各年度別南支、南洋施設費予算総額

大正三年度	六七、一五二、八九〇	大正四年度	一一五、九五〇、九五〇
同 五年度	一一五、四九五、〇八六	同 六年度	二九二、三一〇、五八七
同 七年度	二九六、二七七、九八六	同 八年度	五六五、六八五、一〇三
同 九年度	七三七、六九五、四七一	同 十年度	八二八、三九〇、三七〇
同 十一年度	八四八、三九〇、三七〇	同 十二年度	八九六、九五二、三九六
同 十三年度	八九九、七二三、一六〇	同 十四年度	七六〇、九二三、六五三
同 十五年度	七五三、二七三、三九一		
昭和二年度	七六二、六二二、二〇五	昭和三年度	六六二、六九八、一九三

同 四年度	七六二、九五五、二七三
同 六年度	五六六、〇八八、一一九
同 八年度	五八二、五六五、二八〇
同 十年度	五八二、八二一、五四〇
同 十二年度	一、〇六一、九九五、九三〇
同 十四年度	四、〇七三、五八七、〇〇〇
同 十六年度	八、一八二、九四八、〇〇〇
同 十八年度	不詳

同 五年度	六八八、〇七九、四六八
同 七年度	五八二、二六三、三九〇
同 九年度	五八二、六八二、三二〇
同 十一年度	六一七、七一八、四六〇
同 十三年度	一、五五二、七二九、〇〇〇
同 十五年度	五、三八七、四四五、〇〇〇
同 十七年度	七、六一八、八六一、〇〇〇
同 十九年度	七、二八一、六〇三、〇〇〇

081-2-18.19

日本人の海外活動に関する歴史的調査

通卷第十八冊（九） 樺太篇

第一部 総論

第二部 産業及経済 其の一

第二部 産業及経済 其の二

第三部 交通及通信

第四部 文化

主要統計

大藏省管理局

昭和廿五年十二月拾六

舊交同和協會

目次

第一部 總論	一
第一章 序說	一
第二章 地理誌	三
第一節 位置及面積	三
第二節 地形、地質、河流	三
第三節 聚落	四
第三章 氣象	六
第四章 戶口	七
第五章 資源	八
第六章 貿易	二
第七章 金融	三
第八章 財政	四
第一節 總說	四

第一節	歲入	一五
第二節	歲出	一六
第三節	租稅	一六
第四節	國有財產	一七
第五節	市町村財政	一八
第六節	市町村財政	一九
第九章	行政	二
第十章	法律	三
第十一章	司法	三
第十二章	原住民	三
第二部	產業及經濟	二四
第十三章	概說	二四
第十四章	水產業	二五
第一節	總說	二五
第二節	漁撈	二七
第三節	製造	二七

第四節	養殖	二八
第五節	水產物検査	二九
第六節	海獸保護獵獲	二九
第七節	水産に關する團體及會社	三〇
第十五章	林業	三〇
第一節	總說	三〇
第二節	林政	三〇
第三節	森林の利用	三三
第四節	造林	三五
第十六章	殖民及農業	三六
第一節	總說	三六
第二節	殖民	三六
第三節	土地	三六
第四節	農業	三七
第十七章	鉦業	三八

第一節	總	一六
第二節	鐵業制度	一八
第三節	鐵物	二〇
第四節	石炭	二二
第五節	石油	二四
第六節	其の他の鐵業	二六
第十八章	工業	二七
第一節	總	二八
第二節	パルプ及製紙工業	三〇
第三節	石炭液化工業	三二
第四節	釀造業	三四
第五節	製材業	三六
第六節	製糖業	三八
第七節	罐詰業	四〇
第八節	酪農業	四二
第九節	ツンドラ工業	四四

第十九章	電氣事業	四六
第一節	總	四八
第二節	電氣供給事業	五〇
第三節	自家用電氣施設	五二
第二十章	商業	五四
第一節	總	五六
第二節	物資及物價	五八
第三節	商業團體	六〇
第二十一章	産業試験	六二
第二十二章	金融機關	六四
第二十三章	樺太開發株式會社	六六
第三部	交通及通信	六八
第二十四章	交通	七〇
第一節	總	七二

第二節	道	路	一六
第三節	鐵	道	一九
第四節	臺灣及航路權識		一四
第五節	航	路	一七
第六節	自動車其の他		一五
第二十五章	通	信	一四〇
第一節	總	說	一四〇
第二節	郵	便	一四〇
第三節	電	信	一四一
第四節	電	話	一四三
第五節	放	送	一四四
第六節	爲替及貯金		一四四
第七節	簡易生計保險及郵便年金		一四六
第四部	文	化	一四七
第二十六章	概	說	一四七

第二十七章	教	育	一四九														
第一節	總	說	一四九														
第二節	學	校	教	育	一五〇												
第三節	社	會	教	育	一五三												
第二十八章	社	會	事	業	一五三												
第二十九章	保	健	衛	生	一五五												
附	參	考	主	要	文	獻	資	料	一五五								
主要統計	一五七																
第一表	都	市	別	人	口	趨	勢	一五七									
第二表	現	住	戶	口	趨	勢	一五九										
第三表	昭	和	十	六	年	末	現	在	種	族	別	人	口	一六〇			
第四表	昭	和	十	八	年	末	現	在	種	族	別	人	口	一六二			
第五表	昭	和	十	八	年	度	末	林	野	面	積	及	森	林	蓄	積	一六二
第六表	木	材	パ	ル	プ	原	木	需	要	調	一六三						
第七表	埋	藏	炭	量	一六三												

第四十表	昭和十六年現在鐵道數、面積及延長	一六
第四十一表	各埠別埋藏炭量	一八
第四十二表	樺太炭分採結果例	一六
第四十三表	炭炭量、移輸出炭量及島内消費量	一九
第四十四表	移輸入炭一覽	一四
第四十五表	島内石炭用別消費量	一六
第四十六表	昭和十三年工產物生産額	一九
第四十七表	昭和十六年工產物生産額	一九
第四十八表	島内パルプ及紙生産高	一八
第四十九表	昭和二十年現在各製紙工場生産能力等	二〇
第五十表	我國木材パルプ生産量	二三
第五十一表	昭和十六年大銀行貸付及預金額	二三
第五十二表	郵便物取扱數	二三
第五十三表	電報取扱數	二三
第五十四表	電話通數	二四
第五十五表		

第一部 總 論

第一章 序 說

樺太は特に南半は古くから日本と交渉があり、日本に次いで露國も亦樺太に關心を持つやうになつて、日露互に領土權を主張して譲らず、十九世紀の中葉頃は日露雜居の地とせられ、其の後も日露兩國の間に屢々紛議が重ねられたが、明治八年（西曆一八七五年）五月、兩國間に千島樺太交換條約が締結せられて正式に露領となり、滿三十年の星霜を経過して後、明治三十八年（西曆一九〇五年）九月、日露講和條約の結果、北緯五十度以南の樺太は日本の版圖に歸したのである。

露領時代の樺太は流刑植民地とせられ、「流刑罪人」、「流刑殖民」、「流刑農民」及此等に随伴して來た「自由人」の手に依つて開拓せられたに過ぎなかつたので、産業上も、交通上も見るべきものがなかつた。

日本が南樺太（以下概ね單に樺太と略称する）領有した当時、比較的盛んであつた産業は漁業であつて、古くから専ら日本人の島嶼漁業者に依つて開拓されたものであるが、日本の統治の進展と共に、殆んど無人の曠野に等しかつた開拓地に日本の技術、資金、資材及労力の移植が行はれ、其の豊富な天然資源は殆んど全く日本人の創始的努力に依り逐次開發せられて、水産業の外、パルプ製紙業、石炭鋳業、石炭液化工業等各種産業が発達し、樺太は日本經

として、日本の経済にとつて眞に不可欠の地域と目せらるゝに至つたのである。其の主要な理由は、日本の復興と共に北支那の躍進の途上に在つたが、太平洋戦争の勃發後は、木材及労力の不足、華北の治安が顧みせられて、漸次不振とならざるを得なかつた。

第二章 地 誌

第一節 位置及面積

樺太は、日本列島の北端に位し、東はオホツク海に臨み、西は間宮海峡を隔て、沿海州と、南は宗谷海峡を挟んで北海道と對してゐる。

しかして北緯五十度線を以て日蘇の國境としてゐた。

緯度の極点は東は東經百四十四度五十五分、西は同百四十一度五十一分、緯度の極点は南は北緯四十五度五十四分、北は同五十度に位し、南北の延長は四五・六籽、東西の幅員は二七・五籽乃至一五七籽であるが、地方に偏在する位置のために、本島の氣候は概ね寒冷であり、又文化の中心地から稍々隔離している憾がある。南樺太の面積は三六、〇九〇・三方籽で、樺太島全面積七四、四一五方籽の約半分を占め、之れを台灣と比較すると、稍々大きい。

第二節 地形、地質及海流

樺太は南北に延びた狭長な島であり、日本の北部を縦貫する山系が入つて來ているが、概して單調な丘陵性の地形を呈している。河川は地形が狭長な上に、半國道雨地帯の一つであつたため、日蘇兩國に跨つて流れる幌内川を除い

は、何れも全長、六、七キロに達し、河川沿岸には低濕地が多い。平野は北部の幌内川流域、南部の内淵川、鈴谷川などである。平野は北部に殆んど大部分が泥炭の厚層から成るツンドラ地帯であるが、南部平野は隣接する河川によって扇状地が發達して、農耕地や聚落の場所として、比較的に利用に適している。湖沼には潟湖が多く、その他湖沼が甚だ多い。海岸は屈曲に乏しい鈍い弧形の海岸線から成つて居り、段丘の發達していることも、樺太の地形の一特色である。島嶼は極めて少ない。

樺太の地形と地質とは大体一致して、東部山地帯、中央低地帯及西部山地帯の凡そ三大部分に分けることが出来る。樺太を構成する地質及岩石は主として結晶片岩類、古生界、白堊系、新生界の第三系及第四系の岩石その他花崗岩、安山岩等であつて、その分布は中央低地帯の両側で著しく異なり、東側は主に結晶片岩類、古生界等に属する花崗岩から來り、西側は白堊系及第三系のやうな新期の岩石である。

樺太の沿岸には寒暖の二流があり、寒流は樺太の東海岸を洗い、暖流は西海岸を流れる。そのため一般に西海岸は東海岸に比べて、著しく高温であつて、東斗、置岡のやうに不凍港を發達させ、又西海岸の暖流は鯨來游の要因となつてゐる。

第三節 聚 落

樺太に移住した日本人には漸次堅実な定着性が見られるやうになつたが、しかも尙開發の途上にある殖民地の常として、人口の移動が甚しく、殊に過去に於てはこの現象が特に激しかった。従つて聚落の盛衰興亡も頗る顯著であつた。

樺太は古くから日本人漁夫の活躍を見た土地であり、領有後も当初は水産が唯一の産業であつたから、先ず海沿ひに沿部地方に漁業聚落が發達した。然るに全島内を蔽ふ無盡蔵とも稱すべき森林の利用のため、木材業が起り、次いでパルプ及紙の製造が始まり、製紙工場を中心として聚落が形成され、尙森林の伐採が漸次盛んとなるにつれ、樺太は南部から漸次北上するやうになり、製紙工場も亦原料木を追ふて、順次北部に勃興するに至つた。又パルプ製紙工業の勃興は炭礦の開發をも促すに至つたのであるが、近時日本の石炭需要の増加と共に、二十億噸の埋藏量を包擁する樺太は、我國に於ける新興産炭地として注目されるに至り、急激に西部惠須取以北の炭田地方に聚落の勃興を見るに至つた。

しかしながら聚落の形成がかくの如く急激であつたため、その依存する産業の消長は直に聚落の盛衰興亡に影響を及ぼし、市街地では製紙工業の消長、海岸地方では漁獲物、平原地方では農作物の豊凶が直に附近の聚落の人口の増減を來たす有様であつた。

樺太に於ける聚落の發達が製紙工業に負ふところ極めて大であつたことは、都市の内殆んど全部が製紙工場所在地であつたことから推すことが出来、しかも此等の聚落は内地のやうに自然に成つた聚落ではなく、日本人の移住と共に大體的に無人の原野に新しい都市計画を行つて建設されたものが多いので、都市は井然たる街区の市街地をなすものが多く、殊に平原地にそれが著しかった。(別表第一表参照)

第三章 氣象

樺太は前述の如く、西海岸特にその南部地方は暖流に洗はれるので、比較的溫暖であるが、東海岸地方は、寒流の影響を受けて寒冷であり、又中央部地方は山脈に囲まれてゐるので、大陸的氣候を呈し寒暑の差が甚しく、して世界同緯度の他の地域に比べて一般に氣溫が低いのは近海に暖流が少いこと、主として亞細亞大陸の影響によるものである。

年平均氣溫は海馬島の五度五分から敷香の水点下零度一の間にあつて、暖候季は四月から十月に全く、平均氣溫は氷点上であるが、十一月から一月迄は寒候季に屬し、氣溫は氷点下に沈降する。各地を通過する風は、最も暖は八月である。暖候季に於ては南風流行し、寒候季には北風卓越するが、八月、九月の候には東風多し、十一月の候には西風が盛んである。

降水量は一般に夏秋の候に多く、冬春の候に少く、年間總量は九百釐を越える地方は稀で、我國宜蘭地區に類した。降雨日数は南部は秋冬の候に多く夏季に少いが、北東部は之に反し夏季に多い。年の降雨日数は百を越え、一月は十日を越える。

濕度は年平均八十パーセント内外を示し、我國に於ても多濕の方に屬し、台灣と伯仲の間にある。

第四章 戸口

樺太の人口は朝鮮、台灣と異つて、原住民が少く、殆んど自由に移住した日本人ばかりで構成せられてゐるのが特色であつた。当初は雁去燕來の一時的出稼日本人が多かつたが、拓殖の進展に伴つて漸次定着するやうになり、堅実な人口増加の趨勢を辿つて來たのであるが、人口の密度は甚だ僅少で、昭和十六年（西曆一九四一年）末に於て一方料僅に一一・二六人に過ぎない。人口分布の狀況を見ると、氣候が比較的溫暖で開拓の早かつた眞岡・本斗等西海岸南部、之に次いで豊原・大泊等の中南部が早くから密度高であつたが、昭和十六年末に於ては石炭鋳業の急激な勃興を見た恵須取以北の西海岸北部が最高の密度を占めるに至つた。

男女別の割合は昭和十六年末に於て女百人に対し男百二十五人強で著しく男が多いが、南部に於ては漸次兩者の均衡を得てゐた。配偶關係については未婚の男子が非常に多く、年齢の構成も女子は概して年齢と反比例して遞減してゐるが、男子は心身共に旺盛な青壯年が非常に多かつた。以上の事實は、樺太が未だ發展途上に在る殖民地であることを示す人口構成上の特異性である。

尙太平洋戦争勃發後は、内地人男は召集・徴用の關係で若干減少を示し、其の代りに主として炭礦勞務者として朝鮮人勞務者が移入され、朝鮮人の人口が稍々増加するに至つた。（別表第二乃至四表参照）

第五章 資源

樺太は豊富な天然資源を包擁するが、我國領有当初は殆んど未開發の状態に在り、領有後に於ても、氣候・風土及位置等不利な自然的條件に制約されて、之が開發は遅々たるものがあつたが、日本の經濟の躍進と共に各種産業勃興し、特にパルプ・紙・石炭・海産物等日本經濟に不可欠な資源の供給地として重要視されるに至つた。

資源の大宗は先づ森林に指を屈する。即ち昭和十八年（西曆一九四三年）末に於て樺太の全面積三二七万陌中林野面積は其の九割強の二九八万陌を占め、しかもこの林野面積の殆んど全部が國有森林原野に属した。しかして森林蓄積量は八億九千八百万石に達し、その八割強はトドマツ・エゾマツの如きパルプ資材として好適な針葉樹であり、從つて我國パルプ資材の給源地として断然王座を占めてゐた。即ち内地材は過去の濫伐に禍ひされて、大正七、八年（西曆一九一八、九年）を最高として漸減傾向に轉じ、北海道材は増伐に次ぐ増伐を以てしたため、大正十五年の二百五十余万石を最高記録として、その後は著しく使用量を減じ、之に代つて樺太が我國木材パルプ原木の需要に對して八割程度を供給するに至り、又島内パルプ製紙工業の發展は我國パルプ需要量の四割以上を供給する外、多量の洋紙を生産して輸入防遏に多大の貢獻をした。（別表第五及六表参照）

森林に次いで豊富な資源は石炭であつて、炭田面積は全面積の約二割を占め、その推定埋藏量は未調査区域を除き二十数億噸と称せられた。又其の炭質は良好で、用途も極めて廣汎であるため、我國石炭需要の激増するや、之に

對應して石炭鉱業は驚異的發達を遂げ、年産約六百五十万噸、内約四百万噸を島外に移出するに至つた。尙液体燃料の増産を図るため、石炭を原料とする人造石油事業の企業化を見るに至り、未だ処女地とも云ふべき樺太鉱業の前途は洵に洋々たるものがあつた。（別表第七表参照）

次に水産資源は樺太の東海岸には世界三大漁場の一つに數へられるオホツク海を控へ、又西海岸には暖流が流れてゐるので、水産の分布は複雑し、且魚族は豊富であつて、夙に沿岸漁業の發達を見、領有以來樺太に於ける産業の根幹を爲し、之が盛衰は一般經濟の消長に及ぼすところ甚大であつた。主要な魚族は鯨、鮭、鱒であるが、それ以外の魚族を目的とする漁業も漸次隆盛に向ひつゝあつたが、近年沿岸漁業は勢ひ濫獲の弊に陥つたので、その荒廢を防止し沿岸漁田の保護涵養を図るため、遠洋漁業への進出が期待されてゐた。

最後に農畜産資源については、樺太は我國唯一の亞寒帯に位し、ポドゾル地帯を形成するため、この氣溫と土性に適應する麦類・馬鈴薯・豆類・甜菜等が有望視せられ、その經營形態としては有蓄農業が恰適とされてゐたが、耕地面積は農耕適地三三一、三一七陌の僅か一割程度に過ぎなかつたため、農産品は自給自足を困難視せられ、農業の前途は頗る遼遠なるものがあつた。

尙以上の賦存資源を利用する第一次的生産及第二次的生産の總額は工業の勃興と共に逐年増勢を辿り、昭和十六年に於ては約三億八千万円に達し、パルプ製紙工業を以て代表される工産物はその半額を占めて首位を示し、鉱産物・水産物・林産物・農産物及畜産物が之に次いだ。

因に樺太の國民所得の一端を窺ふ資料として、毎年一人当り生産額を見ると、昭和四年（西曆一九二九年）には約

四百二十円であつたのが、同十年頃から漸次増加して、同十五年には約一千円に達し、又國民所得の蓄積とも云ふべき國民貯蓄額は昭和十三年度に於て五千二百余万円、一人当約百五十円であつたのが、同十九年上半期に於ては三億九千六百余万円、一人当約一千円に著増した。(別表第八表参照)

第六章 貿易

樺太は氣候・風土及位置等の外賦存資源の關係上、産業の發達は極めて跛行状態を示し、特殊のものを除き自給度極めて低く、全く内地に依存する經濟であつた。即ち生産財は殆んど全部を内地からの供給に俟つたばかりでなく、消費財の如きも食糧の外工業製品等概ね内地に依存せざるを得なかつた。之に対し樺太から内地に供給し得るものは製紙・パルプ・石炭・水産物・木材等であり、此等は遙かに移入額を償つて余りあり、我國必需資源の補完的意味に於て、日本經濟に貢獻するところが多かつた。尙將來は人造石油の供給地としても有望視されてゐた。

今対内地貿易の趨勢を見るに、大正十三年(西曆一九二四年)に於ては、其の総額約一億円、移出超過額約二千七百万円であつたのが、昭和十六年(西曆一九四一年)に於ては、それ／＼約四億円及一億二千万円に達し、順調な發展を示してゐたが、太平洋戦争の勃発と共に漸次輸送力逼迫の影響を受けるに至つた。しかして移入品の主なるものは、米・蔬菜・果実・味噌・醤油・菓子・麦酒・煙草・布帛類・金屬製品・機械類・工業藥品等であり、移出品の主なるものは製紙・パルプ・石炭・海産肥料・昆布・塩乾魚・木材等であつた。(別表第九乃至十一表参照)

尙対内地以外の内國貿易及外國貿易に關しては、その額極めて微々たるもので、それ程重要ではなかつた。

第七章 資金

一三

樺太は原住民が少く、且露領当時は産業として見るべきものがなかったため、我國官民の一致協力に依り今日の經濟力を扶植するに至つたのであり、従つて之が開発資金は主として内地からの導入に俟つた。即ち大口資金は樺太に着目した企業家が之を内地の金融機関に仰いで事業設備に投下したのであり、領有当時から盛んであつた漁業の如きも、露領時代の出稼漁業の遺風として、当初は其の仕込資金を北海道方面に依存したのであるが、北海道拓殖銀行が樺太に進出し、明治四十四年（西曆一九一一年）より一般拓殖資金の供給を行ふこととなり、交通機関の整備、資源の開発、事業の拡張、信用程度の向上等に伴ひ、右拓殖資金の融通は増加の一途を辿つたが、樺太の開発は一に資金の誘致に俟つべきところが多いので、昭和十六年には政府半額出資の下に資本金五千万円の樺太開発株式会社が設立され、開発事業の経営及開発のため必要な資金の供給に當る推進的機関となつた。その他樺太に於ける庶民金融機関としては貯蓄銀行、産業組合、無盡会社、質屋等があつた。尙樺太廳の拓殖事業費が陰に陽に産業の振興と開発に貢獻するところは多大であつた。

今樺太の銀行取引に付若干附言すれば、銀行預金は昭和元年（西曆一九二六年）迄は長期間利用可能な定期預金が少く、拓殖上必要な長期資金の融通は自ら阻止せられた感があつたが、その後拓殖の進展、島民富力の増進、島外居住者よりの送金等に依り、定期預金は預金総額の大半を占めて、一般銀行界に於ける預金の構成状態と同様の現象を

呈し、金融は堅実、経営は容易となつた。銀行資金については当初は貸金が常に運用資金たる預金に比べて遙かに少額であつたが、資金の融通は逐年急激な増加の一途を辿り、資金は預金を遙かに超過し、この趨勢は昭和初年迄続いたが、昭和六年以降は預金が急激に増加し、常に貸金を超過するに至つた。尙貸金中には大藏省預金部地方貸付額を含み、この地方資金は島民の郵便貯金及振替貯金の一部が還元されたものであり、樺太の開発、文化の向上、災害の復興等に寄與するところ蓋し大なるものがあつた。（別表第十二及十三表参照）

又大藏省預金部地方資金と並んで、簡易生命保険積立金も保険料の地方還元として社会公共事業のため、低利融通された。

第八章 財政

第一節 總 說

樺太の歲計は領有当初は臨時軍事費特別會計に属したが、明治四十年（西曆一九〇七年）四月、樺太廳の設置と同時に特別會計を設け、租税その他の收入及一般會計の補充金を以てその歳出に充て、之を経理することになり、現在に及んだ。

樺太廳の歳計は拓殖の進展と民力の増進に應じ、年度毎に略々上昇線を描いて膨脹して來たが、昭和三、四年頃から財界不況の影響を受けて漸減し、昭和七年度を底として再び膨脹に轉じ、その後逐年増加の趨勢を示し、同十五年度からは遂に一億円を超過するに至つた。即ち歳計の面から拓殖發展の跡を辿れば、明治四十年度から大正六年度に至る約十年間は開拓草創の所謂準備時代とも云ふべく、歳計は専ら樺太自体の收入及國庫補充金に依り維持せられ、拓殖經營上未だ積極的施設を講ずるに至らなかつたが、次いで大正七年度から昭和三年度に至る間は、拓殖の基調を爲す鉄道建設改良、道路開鑿及港湾修築等の事業が施行せられ、之が事業費財源を公債若しくは借入金に求めることになり、樺太の歳計並びに拓殖史上二紀元を劃した。昭和四年度以降に於ける歳計は昭和七年度迄は財界不況の影響を受け、歳入の減少は次第に深刻化し、之がため緊縮方針に基き極力歳出の節約が図られたが、同八年度からは漸次

財界の好轉と共に歳入も增收に轉じ、同九年度には歳出に於て新に綜合的計画に基く樺太拓殖事業費が計上せられ、同十年度に於ては事実上國庫補充金に依存せず、歳計の自立を見るやうになり、爾後毎年相当の剰余金を生じ、財政の基礎愈々鞏固となり、歳計は益々健全な發達を遂げつゝあつた。然るに太平洋戦争の進展に伴ひ、戦争に基因する輸送の硬塞漸く顯著となり、その結果バルブ用材及坑木拂下数量の減少は歳入に影響するところ尠からざるものがあり、加之行政機構の改変に伴ふ鉄道及通信事業の一般會計移管に依り、之が経費の当然減があつたため、昭和十八年度以降の歳計に於て相当の低減を見るに至つた。（別表第十四表参照）

第二節 歳 入

歳入は明治四十年度決算額を一〇〇とすれば、昭和十六年度決算額は八、八〇七に達し、躍進の跡著しいものがあつた。歳入の主要なるものは、当初は一般会計よりの補充金最も多く、之に次ぐものは前年度剰余金の繰入、租税及印紙收入、森林收入の順位であつたが、大正八年度からは森林收入が首位となり、その後永く歳入総額の四割内外を占めて重要財源を構成するに至り、前年度剰余金の繰入之に次ぎ、補充金と租税及印紙收入はそれ〴〵歳入総額の一割近くを占めて相伯仲してゐた。又最近に於ては鉄道及自動車收入も著増して、歳入総額の一割を突破することがあつた。然るに太平洋戦争勃發後は、租税收入は激増して特に臨時軍事費特別會計繰入財源として重要な部分を占め、昭和十八年度に於ては遂に森林收入を凌駕するに至つた。又同年度より鉄道及通信事業の收入は一般会計に移管されることとなり、官業收入は激減した。（別表第十五表参照）

第三節 歳 出

歳出も大体に於て拓殖の進展と共に逐年増加の趨勢を示し、特に拓殖施設については、鋭意之が財源の確保に腐心された。即ち施政以來一般会計より補充金を受ける外、大正七年度以降必要に應じ事業公債を發行して拓殖施設の財源に充てたが、森林収入の激増に伴ひ相当多額の剰余金を生じ、財政上相当の余裕を存するに至つたことは拓殖事業の遂行を容易ならしめ、昭和九年度以降に於ては、総合的拓殖計画に基き新に拓殖事業費を計上し、積極的に開拓の實を擧げることになつた。

明治四十年度以降昭和八年度迄の間に於ける拓殖事業費の累計額は六千七百七十五万一千余円に達し、歳出累計額二億九千六百五十六万八千余円の二割強を占め、又この期間に於ける國庫補充金は二千七百五十四万五千余円、事業公債受入金は三千四百八十三万二千余円であり、拓殖事業費に對し前者は四割、後者は五割一分の割合を示してゐた。又昭和九年度以降に於ける道路開鑿改良、鉄道建設改良、港灣修築、船灣修築改良、河川改修、電信電話拡張改良、土地改良、水産増殖、産業振興、殖民等の拓殖事業費は年々歳出総額の二割強を占め、その主要財源は森林收入であつた。尙昭和十八年度迄の拓殖事業費累計額は二億数十万円の巨額に達した。(別表第十六及十七表参照)

第四節 租 税

樺太に於ける租税は当初特別法令に基く戸数割、營業税及雜種税の三種に過ぎなかつたが、爾來數次の改廢又は内

地の税法施行に依り、漸次國税としての体系が整へられた。今終戦時に於ける現行種目を示せば、直接國税として市街宅地税、所得税、營業收益税、特別法人税、鉦区税、漁業税、資本利子税、法人資本税、利益配当税、相續税、外貨債特別税、公債及社債利子税、臨時利得税、建築税、通行税及登録税、間接國税として酒税、砂糖消費税、織物消費税、清涼飲料税、骨牌税、物品税、揮発油税、遊興飲食税、印紙税、酒類出港税、廣告税、馬券税、入場税、特別入場税及特別行爲税があり、又その他の國税として関税及噸税があつた。その内所得税、營業收益税、酒税、物品税、遊興飲食税及臨時利得税は何れも二百万円内外を占め、税收中の主要なるものであつた。尙租税とは異なるが、煙草專賣益金収入も二百万円を突破してゐた。

第五節 國 有 財 産

樺太廳設置當時軍政機關たる民政署より引継を受けた財産は明確を欠き、正鵠な数字は求め得られない。

しかしてその後に於ける國有財産は資料の關係上樺太廳所轄の公用財産のみについて述べれば、大正三年度に於て三、八五二、九三四円、同九年度に於て六、九八六、二四六円、昭和五年度に於て四五、二二三、一四一円、同九年度に於て四九、八八六、〇三六円、昭和十九年度末に於ては一億円を突破し、又樺太廳以外の各省の國有財産並びに公用財産以外の營林財産及雜種財産をも加算すれば、総額約十四億円に達するに至つた。尙終戦當時樺太に現存した國有財産は樺太廳所轄のもの外、大藏・文部・司法・通信・運輸・陸軍・海軍等各省所轄の財産があつた。(註)

(註) 茲に國有財産と云ふのは、同台帳に登録せられた公用財産、營林財産及雜種財産の三種であつて、公共財産は

含まれてゐない。又國有地であつても、雜種財産として國有未開地に編入登録するに至らないものは含まれてゐない。

第六節 市町村財政

大正十一年に自治制度が実施せられて以來、市町村は漸次その形態を整備しつゝあつたが、その財政状態は基本財産の見るべきものが無く、且使用料、手数料その他の税外収入も亦僅少であつて、市町村費の大部分は之を税收入に頼るの外なく、又一方拓殖の進展に伴ひ諸般の公共的施設益々多きを加へ、逐年経費の膨脹を來たし、財源の窮乏に苦しみつゝあつた。

しかして市町村税として賦課し得べきものは直接國税の附加税及特別税であつて、此等は歳入総額の半分以上を占め、尙臨時多額の支出を要するときは主として借入金に依り、之が償還は後年度の税收入を以て充当するのを常例として來た。(別表第十八表参照)

第九章 行政

樺太の統治に關しては明治四十年四月一日樺太廳の設置を見、爾來所謂外地統治として、單一長官の下に綜合行政が施されたが、昭和十七年十一月一日を期して断行された全國的行政機構の整備強化に伴ひ、内外地行政一元化が實現され、更に同十八年四月一日からは内地行政に編入されるに至つた。

綜合行政時代の樺太廳長官は、その権限が朝鮮及台灣總督の如く強大ではなかつたが、しかし所管大臣(明治四十年五月迄は内務大臣、同六月から内閣總理大臣、大正二年六月再び内務大臣、同六年七月更に内閣總理大臣となり、昭和四年六月以降は拓務省の新設に伴ひ拓務大臣となつた。但し郵便及電氣通信に關する事務については通信大臣、貨幣、銀行及関税に關する事務については大藏大臣、度量衡及計量に關する事務については商工大臣が所管大臣であつた)の監督の下に、概ね全管内の行政事務全般を統一管掌する権限を與へられてゐた。その行政組織としては、樺太廳に長官々房の外務部課を置いて所部の事務を分掌せしめ、更に長官管理の下に支廳、警察署、林務署、鐵道事務所、郵便局、無線電信局、氣象台、中央試験所、医院、結核療養所、職業指導所、博物館、圖書館、學校等を設けて、所謂綜合行政の形態を整備しつゝあつた。然るにこの綜合行政制度は前述の如く、昭和十七年十一月内外地行政一元化の實現に伴ひ拓務省が廢止せられ、三度内務大臣の監督下に置かれるに及び解体の運命を辿るに至り、同十八年四月からは終に外地統治に終止符を打たれることになり、樺太の行政は大きな変貌を遂げることゝなつた。尤

も樺太の地理的特性、開発の現状、統治の沿革等に鑑み、遽かに都道府縣並に綜合行政の全部を解体することは避けられ、陸運、通信、海運、航空及氣象に關してのみ、それ／＼運輸省、逓信省又は文部省が直轄することとなり、その他の事務については各主務大臣の指揮監督下に、依然として樺太廳長官が可成廣汎な權限を委ねられた。

尙地方自治に關しては、近代的地方制度の端緒が開かれたのは大正十一年四月からであつて、当初は官治的色彩極めて濃厚であつたが、その後住民の政治的自覺と多年郷土に於ける自治的經驗とに依り、良好なる成績を示したので、昭和四年七月大改正を行つて、略々内地の制度に近似した町村制が施かれ、又昭和十二年六月には市制が施かれるに至つたが、更に昭和十八年四月樺太が内地行政に編入せられるに伴ひ、内地の市制、町村制が若干の特例を設けて全面的に適用せられるに至つた。尙終戦時に於ける市町村数は一市、十四町、二十七村であつた。

第十章 法 制

樺太は司法制度に關しては、内地の法律はそのまゝ樺太にも施行されたが、その他の事項に關しては、所謂外地として内地と別個の法域を爲し、樺太にのみ施行することを目的としたもの以外の法律は、その規定事項の性質上当然樺太にも施行せられたと認むべきものゝ外は、特に勅令を以てその全部又は一部を樺太に施行することを定める必要があつた。しかして勅令を以て内地の法律を樺太に施行する場合には、官公署の職權、法律上の期間等特定の事項に關し、勅令を以て別段の規定を設けることが出來た。又命令中勅令はその規定事項の性質上、当然樺太に施行せられることがあるが、閣令及省令は原則としては樺太にその効力を有せず、之に相当すべき事項は、樺太廳令を以て之を定めることが出來た。

しかしながら實際には内地延長主義に基き特別立法に依ることなく、内地の法律が勅令を以て樺太に施行せられたものが多く、尙昭和十八年四月以降は樺太が内地に編入せられるに伴ひ、内地と共通法域となるに至つた。

第十一章 司法

明治四十年三月軍政が撤廃されるや、司法事務は行政事務と分離され、同年四月より司法省管轄の下に裁判所の設置を見るに至り、その構成並びに司法行政の職務及監督等はすべて裁判所構成法に依り、内地の普通裁判所と同一に律せられた。

第十二章 原住民

樺太に在住する原住民としてはアイヌ、ニクブン、（又はギリヤーク）オロツコ、キーリン、サンダー及ヤクトの六種族があり、明治三十九年末の人口は僅かに一、二、九一人に過ぎず、その後二千名を超えたこともあつたが、昭和十六年末に於ては一、六九七人を算した。

原住民中最も人口の多いのはアイヌであつて、全人口の約八割を占め、領有当時は東西両海岸及中央内淵川沿岸に散在してゐたが、保護善導の必要上一定の地域に集團させることとし、漁業の傍ら農業に利便な土地を選定して、大正元年から東海岸及西海岸の九箇所に順次集團させられるに至つた。アイヌは北海道から復歸して内地の戸籍を持つた所謂有籍アイヌと樺太在來のアイヌとに分れ、後者は前者に比して、その智能、文化の程度が著しく低いが、それでも他の原住民に比べては、内地人とも接触が久しく且優れてゐるので、昭和八年からは法律上アイヌは全く内地人と均しく処遇されることとなり、従つて教育についても内地人児童同様、公立小学校に於て義務教育を授けられることとなつた。

アイヌ以外の原住民は何れも北部に居住し、オロツコ及ニクブン以外はその数も極めて少い。

しかして此等の原住民は何れも内地人社会の競争場裡に伍し、自立して行くことは到底出来ないで、農業、漁業その他に関し、特殊の制度を設けて指導誘掖し、生活の基礎を安固にすると共に、子弟の教養、衛生思想の向上喚起等に重点を置き、彼等の風習を毀けぬ範圍で、自由文化の恵沢に浴させるやう努力が拂はれた。

第二部 産業及經濟

第十三章 概 說

樺太の産業は日本人の領有と共に起り、爾來日本の經濟力を背景とし、それに依存して躍進したのであつて、其の生産を維持し販路を確保するためにも、日本經濟とは密接不可分な關係にあつた。即ち樺太の主要産業は樺太自体の自給と云ふよりも寧ろ内地の必要充足を目的として勃興したのであり、生産の維持擴張用の資材又は其の生産確保用の原材料は石炭を除き、殆んど凡て之を内地に依存してゐた。尤も自給自足を目的とする地場産業も次第に発達し、特に太平洋戦争後は急速に各種工業の振興が図られつゝあつたが、其の前途は極めて遼遠たるものがあり、食糧其の他の生活物資も内地よりの供給に俟つことが大きかつた。尙開發の進展に伴ひ次第に地場資金の蓄積を見つゝあつたが、大口の産業資金は概ね内地から誘致されたものであつた。

之は要するに樺太の産業構造が其の地理的條件、賦存資源等の關係上、極めて跛行的形態を示してゐたのであるが、しかし森林、石炭の如き豊富な天然資源を利用する特殊の大規模産業及水産業が果した我國必需資源に対する補完的役割は多大なるものがあつた。尙太平洋戦争勃發後は主として資材及勞力の欠乏、輸送の逼迫の影響を受け、樺太は漸次孤立經濟化するの止むなきに立到り、内地に依存した産業は自然縮少を余儀なくせられ、其の實力を遺憾なく發揮することが出来なかつた。

第十四章 水産業

第一節 概 說

樺太に於ける鯨、鰹、鮭等の漁業は徳川幕府時代から出稼漁業として日本人に依り行はれ、明治八年千島樺太交換條約の結果樺太が露領に属した後に於ても益々繁栄に向ひ、明治三十六年には日本人漁場主三十名、漁場九十九箇所、使用漁夫三千九百三十一名、漁獲高鯨、鮭、鰹等十万九千五百五十石、露人漁場主三十三名、漁場七十九箇所（内二十五箇所は日本人の賃借経営）、使用日本人漁夫三千三百五十一人、漁獲高鯨、鮭、鰹、昆布等十一万七千三百三十二石に達し、露領樺太南部漁業の最盛時と言はれた。故に明治三十八年樺太が我が領有に歸するや水産行政は特に重要視せられ、主要漁族たる鯨、鰹、鮭について、其の漁利を保持し該漁業の健全な發達を期するため、建網制度を採用し、其の漁場は露領時代に設けられた漁区に基き之を定め、日本人の經營した漁場は從來の經營者に免許し、其の他の漁場は競争入札に依り特許した。鯨、鰹、鮭以外の漁業に於ては鯨、鰹、鮭の蓄殖保護に妨げのない範圍内に於て一般に之を許可したが、之等の漁業に従事する者の多くは資力乏しい樺太定住の漁業者であつて、其の漁業の収益は鯨、鰹、鮭に比し少く、其の生計の維持にも困難を來たす狀況であつたが、大正四年以來数次に亘り漁業法規の一部を改正して、樺太定住の漁業者を以て組織する漁業組合に対し、鯨、鰹、鮭の専用漁業を免許し、組合員は一

漁業に従事する傍ら、専用漁場の区域内で鰺は刺網、鰯、鮭は曳網に依り漁獲し得ることゝなつた。其の後更に数回に亘り漁業制度が改正され、定置漁業は鰺については建網、鰯、鮭については建網又は瓢網、専用漁業は、鰺については刺網及小建網又は地曳網、鰯、鮭に付ては小建網又は地曳網を使用させ、其の他鰺の刺網及流網、鰯の延縄漁業が漁業組合の組合員に限り許可せられた。鰺、鰯、鮭以外の漁業は介類、藻類等の区劃漁業及海鼠、牡蠣の漁業並びに水産植物採取業は免許に依るものゝ外は之を許可漁業とし、其の他は届出に依り自由漁業とされた。然るに昭和十二年に至り更に漁業法規を改正し新に定置漁業中に鰺落網を加へ、鰺、鰯、鮭の漁業は従來通り免許漁業として取扱ひ、唯鰺流網漁業、鰺刺網漁業及鰯延縄漁業については免許漁業に該当するものゝ外は一般許可漁業となし、漁業取締の完璧、沿岸漁業の統制整備、資源の涵養、沖合漁業への進出等新時代に適應した漁業制度の確立を見るに至つた。

尙原住民たる土人に対しては例外規定を設け、土人にして土人以外の者を使用せずして漁業を爲す場合に於ては、免許を要する漁業を除き、鰯、鮭の捕獲については慣行の区域及特に定められた区域に於て、其の他の水族の採捕に付ては自由に之を放任した。

しかして明治四十年の水産総生産額は五百七十万円、其の中肥料は約四百二十万円、食料品は約百五十万円であつたが、大正五年には総額約八百四十万円に達し、其の中食料品が約五百万円、肥料は約三百万円、魚油が約三十五万円を占め、大正六年からは総額一千万円を優に突破するに至り、昭和元年には約二千万円に達し其の中肥料は一千万円を超え、食料品は七百数十万円、魚油は約八十万円を占めた。其の後昭和十三年迄は水産業は余り振はなかつた

が、昭和十四年から急激に躍進し、昭和十六年の総生産額は約五千六百万円、其の中食料品は約二千六百万円、肥料は約一千四百万円、魚油は約三百万円であつた。

第二節 漁撈

樺太の漁場は其の地形、海流等に依り、西海岸、亞庭灣及東海岸の三海区に大別することが出来る。西海岸は海岸線の延長約百三十里であつて、其の南部に周圍約三里の海馬島がある。此の海区は寒暖二流の影響を受け、鯨、鰹、鮭、鱈、蟹、鰈、鰻、鯖、烏賊、蛸、鮐、鮫、北寄貝、昆布、海苔等の水産が頗る豊富であるばかりでなく、露領沿海州とは一衣帶水を爲し、漁業の前途は実に洋々たるものがあつた。亞庭灣は其の海岸線約七十里、東海岸は約二百里に達し、其の北部には周圍約半里の海豹島がある。此の兩海区は西海岸の如く暖流の恵を受けることが多くないが、亞庭灣の鯨、昆布、鰈、海鼠、帆立貝、遠淵湖に産する伊谷草、牡蠣、東海岸の鰹、鮭、鰈、蟹、鮭及海豹島の鰓鰂は最も有名であつた。之等の水産中最も産額の多いのは鯨、鰹、鮭であるが、其の他の漁業も漸次隆盛に向ひ、最近漁船漁具の改良に伴つて、著しい進展を示してゐた。しかして此等の漁業に従事する者は大正三年末に於て戸数三、一九二戸、人口一四、〇一九人であつて、総戸数及人口の夫々二割四分強を占め、漁業の重要性を窮ふことが出来るが、昭和十六年末に於ては戸数五、八〇二戸、人口二一、七六八人となり、総戸数及人口の夫々八分弱、五分強に減少したが、昭和十七年末は若干増加を示してゐた。（別表第十九表参照）尙昭和十七年末の漁船数は無動力漁船一三、〇八八隻、動力附漁船一、〇二四隻、計一四、一〇二隻であり、最近に於ける動力附漁船の増加は著しい。

ものがあつた。

一、鯨 漁 業

鯨漁業は其の産額漁業中の首位を占め、昭和十六年に於ては一千五百万円を超え、総漁獲生産高の過半を占めてゐた。領有当初より大正二年頃迄は西海岸の野田、泊居沿岸が最も優秀で、全島鯨漁獲高の過半を占めてゐたが、漸次減退し、之に反し当時漁場として價値を認められなかつた亞庭灣の各地及東海岸の榮浜以北の漁場が漸次漁獲高を増加するに至つたが、昭和六年に至り東海岸は異常の不漁に遭遇し、爾來鯨の洄游は僅少となつたが、亞庭灣のみは各地共豊漁を呈し、常に其の首位を占めてゐた。然るに昭和八年頃から西海岸特に眞岡、本斗沿岸の漁況は頓に活況を呈し、昭和十年に至り亞庭灣が稀有の凶漁に遭遇し昔日の觀なきに至つたに反し、断然頭角を現はし、爾來鯨漁業の独占舞台となつた。

しかして鯨漁業發展の経路を漁獲高から見ると、明治四十年の漁獲高は二十三万四千余石（百石は七五、〇〇〇匁）で、爾後二十万石台を上下し、大正四年には一躍三十万七千余石に達したが、其の後漸次低下し、大正十年は十四万八千余石に激減した。次で大正十二年より再び好漁に向ひ、大正十五年には四十五万七千余石を示し、昭和三年より昭和七年に至る間は豊漁相踵ぎ、昭和六年の如きは七十二万九千余石と云ふ実に樺太創始以來の最高記録を出し、鯨漁業の黄金時代を現出した。然るに昭和八年は三十六万七千余石に減じ、昭和九年には五十四万一千余石となり聊か小康を得たが、昭和十年の漁獲高は再び三十一万八千余石に減少し、昭和十一年には稍々増加したが、昭和十二年より激減し、昭和十三年には十八万二千余石となり、昭和十四年からは幾分回復したが、昭和十五年より再び減じて、

昭和十六年には三十八万二千余石となつた。

鯨漁業の漁期は流水期の遅速、寒流の影響等其の年の海況に依つて多少の差異はあるが、概して西海岸が最も早く、亞庭灣之に次ぎ、東海岸が最も遅れる。過去の漁況に依つて大別すると、西海岸は四月上旬より五月上旬、亞庭灣は四月下旬より五月中旬、東海岸は五月下旬より六月上旬となつてゐる。此の外六、七月の候西海岸に於ては夏鯨が、又亞庭灣及東海岸に於ては七月から十月に亘つて小鯨が漁獲されるが、其の数量は春鯨に比して僅少である。

尙本漁業は定置漁業に依るものと、専用漁業に依るものとに大別せられ、定置漁業に使用する漁具は明治三十九年は露領時代の例に倣ひ、一漁業權に付建網一統及曳網一統であつたが、翌四十年より曳網を廢し、副網に代へ建網二統を使用した。然るに大正九年七月漁業法規全般の改正に依り、一漁業權に付一建網の制に改め、鯨、鮭と鯨とは別個の漁業權となし、鯨漁業權に対しては副網に代へるに待網を以てし、更に大正十一年漁業法規の改正に伴ひ、待網に代へるに建網を免許した。又専用漁業に使用する漁具は大正四年専用漁業權が設けられた當時は、刺網に限られてゐたが、大正十一年刺網と地曳網又は船曳網の併用を認められ、大正十五年更に刺網と小建網又は地曳網を用ふることに改正せられた。（別表第二十表参照）

二、鱒 漁 業

鱒漁業は樺太に於ける重要漁業の一つであつて、昭和十六年の産額は三百八十余万円に達してゐる。本漁業は日本人の最も早くから着手したもので、明治二十八年以前の露領時代に於ては本島の最大漁業であつた。明治四十年の漁獲高は九万六千余石（百石は二〇、七〇〇匁）に過ぎなかつたが、漸次増加し、大正元年には十二万七千余石を挙

げ、大正六年には二十万八千余石に達し、統計上の最大数字を示したが、翌七年は三万石に減じ、大正十年は七万七千余石に上つてゐる。更に大正十五年は十五万余石に増加し、昭和五年には七万四千余石に減じたが、昭和十年は十六万三千石に達し、爾後隔年毎に豊凶を繰り返し、昭和十六年には九万四千余石を示してゐる。其の漁場は西海岸及東海岸を主とし、亞庭灣内は少い。漁期は東西両海岸で差異が著しく、西海岸は六月上旬既に漁期に入り、七月上旬には終漁し、亞庭灣は六月中旬より八月中旬で、盛漁期は七月上旬より八月上旬である。東海岸は七月上旬に始まり七月中旬より八月中旬迄が盛漁期である。本漁業の漁具中定置漁業に使用する漁具は従來建網に限られたが、大正九年漁業法規の改正に依つて瓢網の使用が認められた。又専用漁業に使用する漁具は大正四年には地曳網を使用せしめたが、大正十一年漁業法規の改正に際し、漁場の状況に應じて地曳網及船曳網の内何れかを選ばせることとなり、大正十五年更に小建網を使用させることゝなつた。

三、鮭 業

鮭は夏期と秋期との二期に漁獲せられ、前者を夏鮭又は時シラスと称し、後者を秋アヂと称してゐた。夏鮭は東海岸幌内川附近が主産地で、秋鮭は西海岸の南部並びに東海岸の内淵川、幌内川附近で多獲せられる。本漁業は比較的豊凶の差がないが、既往の漁獲高は大正八年の一万九千余石（百石二〇、七〇〇疋）が最大で、昭和十年の漁獲高は八千余石に減少したが、昭和十六年には約一万五千石、其の價額百十万余円に達してゐる。夏鮭の漁期は六月中旬より八月中旬の候で、特に幌内川附近は七月初旬より七月中旬が盛漁期である。又秋鮭は八月下旬より九月下旬の間である。本漁業に使用する漁具は鱒漁業と同一である。

四、鱒 業

鱒は露領時代既に其の豊饒なのを認められてゐたが、當時は僅に鱒漁業者の食料に供せられた程度に過ぎなかつた。然るに我國領有後は北海道、東北方面より渡航して本漁業を経営する者が多く、明治四十年には四十五万八千余石（一束は六四・五疋）の漁獲があり、大正元年には八十三万六千余石に達し、大正六年頃より鱒製品の販路が欧米へ開けて、輸出製品の名声が一時に揚つたため、益々活況を呈し、大正八年の漁獲高は五千九万六千余石に上つたが、大正九年以降は欧米市場の変動と一般經濟界の不況とに依つて、其の事業が緊縮せられ、其の漁獲も頗る減少した。大正十五年頃より再び活況に向つたが、昭和四年以降は漸次減退し、昭和十年の漁獲高は二十三万六千余石であつたが、昭和十六年には回復して四十五万二千余石、其の價額三百五十七万余円に達した。

鱒漁業は大略春漁と秋漁とに分れ、春漁は西海岸と亞庭灣で、秋漁は大正三年頃迄は東海岸敷香方面を除く大部分の沖合で其の漁獲を見たが、爾來東海岸は漸次衰退した。漁期は大略二月上旬より六月下旬迄を春漁とし、秋漁は九月中旬に始まり翌年一月下旬で終つてゐる。秋漁は秋冬期に当るため荒天の日多く、従つて出漁日数が少く、漁獲高は春漁に比較して僅少である。漁具は延縄で、生鰯、塩鰯、生柔魚、生鱒、生章魚等を餌料として使用してゐるが、冬期は餌料の不足に困窮してゐた。本漁業は従來川崎船に依るものと発動機船に依るものとがあつたが、近時発動機船は年と共に増加し、遠洋漁場開拓の機運に向ひつゝあつた。

五、鰯 業

鰯の主産地は亞庭灣及西海岸であつて、主として小型発動機船に依る延縄又は建網を以て漁獲せられた。漁期は西

海岸地方に於ては一月より早春に至る鰯の抱卵期を盛漁期とし、亞庭灣内は五月中旬より六月中旬に至る間である。昭和十年の漁獲高は三千石（一石は九〇・六・二疋）であつたが、昭和十六年の漁獲高は一万四千余石、五十八万余円に達した。

六、鰈 漁 業

鰈の種類は十数種に及び、其の分析も亦極めて廣い。大正六年頃迄は東海岸が好漁場として知られてゐたが、爾後亞庭灣及西海岸も漸次漁業者が増加し、殊に西海岸は顯著なる發達を示してゐた。漁期は殆んど周年で、東海岸及亞庭灣は六月下旬より十月上旬に至る秋漁を主とし、西海岸は三月下旬より十一月下旬に亘る春秋の二期である。漁具は主として延縄と手繰網であるが、昭和十年以降發動機船に依る手繰網は機船底曳網漁業として取扱はれるに至り、遠洋漁場への進出の氣運にあつた。昭和十六年の漁獲高は九十万余円であつた。

七、鰻 漁 業

鰻は西海岸及亞庭灣に洄游を見たが、最近に於ては主として西海岸に洄游し、専ら落網及流網に依り漁獲せられるが其の漁獲高は極めて微々たるもので、昭和十六年には一万円に達しなかつた。漁期は概ね六月下旬より十月下旬迄である。

八、鮫 漁 業

鮫は油鮫最も多く、東海岸の南部、亞庭灣及西海岸の南部に多く洄游する。其の漁獲高は最近に於て増加しつつあつたが、昭和十六年の生産額は二十六万余円に過ぎなかつた。

九、蟹 漁 業

蟹漁業は明治四十二年輸出向蟹罐詰業の創始と共に漸次發達に向ひ、當時は西海岸南部が好漁場とされたが、大正三年以降は漸次漁場が拡大され、西海岸一円となり、亞庭灣と共に著しい發展振りを示し、就中大正五年以降は欧州戦乱の影響を受けて、罐詰製品の價格が昂騰し、爲に蟹罐詰工場の増加を來たし、之に伴ひ蟹漁業も亦殷盛を極め、大正六年には五百二十万一千尾を漁獲し、其の價額は三百八十六万四千余円の巨額に達した。然るに蟹罐詰工場の増加は遂に蟹の濫獲となり、数年を出でずして沿岸漁場の荒廃を來たし、大正九年には九十七万四千尾に減少し、其の價額は百八十九万六千余円に過ぎなかつた。依つて其の後蟹の蕃殖保護上蟹罐詰工場の整理縮少、蟹漁業の許可制限等を行つたが、遂に往時の盛況を回復するに至らなかつた。一方東海岸でも昭和四年以來蟹罐詰工場の増加と共に蟹漁業も亦隆盛となり、昭和九年には對外爲替の關係上著しい進展を示したが、早くも西海岸及亞庭灣と同様漁場の狹隘を告げるに至つた。しかして蟹の蕃殖保護のためには、一般に雌蟹及背甲五寸以下の稚蟹の漁獲禁止し、且つ一定の禁漁期を設ける等、努めて漁利の維持が図られたが、昭和十年の二百八十八万五千余尾を峠とし、爾來一般に不振となり、又蟹罐詰業は其の後休業となつたので、最近に於ては蟹は専ら食膳に供せられてゐた。昭和十六年の漁獲高は激減し、僅かに二十五万一千余尾、十三万七千余円に過ぎなかつた。蟹漁業の漁期は西海岸は禁漁期の關係上、春秋の二期に分れ、大略三月上旬より六月下旬を春漁とし、九月下旬より十一月上旬を秋漁としてゐる。亞庭灣及東海岸は春秋二期を通じ、四月下旬より十月下旬の間である。

尙蟹漁業は主にタラバ蟹を目的として漁獲されてゐたが、花咲蟹等も其の利用化に伴つて、漸次漁獲高を増加して

ゐた。

十、昆布・漁業

昆布は他の漁業と異つて容易に採取せられる關係上、露領時代に既に採取され、明治三十二年頃約五千五百石（百石は七五・〇〇〇疋）の收穫を挙げてゐた。我が國領有後は雜漁業者が競つて採取に従事した結果、頓に其の生産額を増加して、明治四十年には四万一千余石を採取し、其の生産額は二十万八千余円に達した。大正五年より沃度製造事業の勃興に伴つて、ケルプの原料として、食用に適しない昆布類の利用の道が開けて、各地に其の製造工場が新設せられるに及び、同年には五万二千余石、其の製品價額四十三万三千余円に達し、爾來昆布製品の需要に伴つて益々隆盛に向つたが、略々隔年毎に豊凶があり、昭和十年は三万一千余石で百万円を超え、昭和十五年には五万一千余石、二百八十六万四千余円に達したが、昭和十六年には二万四千余石、二百二十万二千余円に減じた。昆布は其の分布廣く全島沿岸に亘つてゐるが、主産地は西海岸及亞庭灣で、東海岸に比し一般に品質優良である。昆布採取の最盛期は七月下旬で、漁具としては捻棒、鎌、鉤等が使用されてゐた。

十一、伊谷草採取業

伊谷草は亞庭灣の遠淵湖に限り産せられる浮藻である。明治四十三年頃より此の藻類を原料として寒天製造方法が研究され、大正四年に至つて遂に優良寒天の製造方法が発見されるに及び、初めて其の眞價が認められた。大正十年の採取高は二万八千貫で、寒天製品價額は二万円に過ぎなかつたが、昭和二年には十八万貫、二十三万円に達し、漸次採取高を増加し、昭和十年には六十三万八千余貫、四十八万二千余円を挙げるに至つた。採取期は五月より十一月

の候で、採取方法は極めて簡易で、長さ三尺内外のホークを以て掻き集めて採取する。

十二、其の他の漁業

其の他樺太では鰻、氷下魚、海鼠、ふじこ、海扇、北寄貝、柔魚、鯖、鰕、玉筋魚、鮪、胡瓜魚、鮎、海苔、銀杏草、さるめん、海羅等が漁獲又は採取されたが、其の量僅少なので説明を省略する。

尙沿岸到る処に海豹が棲息し、昭和十年の捕獲は一千六百頭に及んだ。又本島の沿海には鯨族が來遊し、一時亞庭灣を根拠として捕鯨業が行はれたことがあり、大正元年には五十八頭、大正十年には八十二頭、昭和二年には三十九頭を捕獲したが、昭和六年以降は休止状態にあつた。

次に漁業の種類を制度の上から見れば、免許漁業、許可漁業及届出漁業の三種に大別され、免許漁業は更に定置漁業、区劃漁業及専用漁業に区別される。定置漁業は主として鰈、鱒、鮭、建網であつて、領有以來個人企業形態で經營されたが、昭和十七年十二月此等を統合して樺太漁業株式会社（昭和二十年樺太水産振興株式会社に吸収合併）が設立されるに至つた。専用漁業は漁業会（漁業組合の後身）に対する免許、即ち鰈、鱒、鮭、建網及刺網又は地曳網漁法であつて、沿岸漁業の大宗を爲し、定置漁業と相俟つて水産の大半を占める状況であつた。免許漁業以外の主要漁業は漁業の取締と漁源の涵養及保護のため許可漁業とされ、特に機船底曳漁業については昭和十七年八月底曳網漁業者を統合して、樺太海洋漁業株式会社（昭和二十年樺太水産振興株式会社に吸収合併）が創設されて、本漁業の許可は同社に限定して、鰈、鱒、鮭の増獲が図られた。尙昭和十九年十月以降は増産の見地から漁業会員に対しても、百隻以内に於て小型機船底曳網漁業が許可された。又緊急増産措置として遊休定置漁場並びに定置漁場保護水域の合

以活用を図るため、特に昭和十九年より、百統以内に於て鯨小建網或は鯨曳網を許可されることとなつた。昭和十九年十二月一日現在の免許漁業権及主要漁業の許可件数は次の如くである。(別表二十一及二十二表参照)

(一) 免許漁業権

(イ) 定置漁業	鯨 建 網	
	鯨、鮭 建 網	鯨 落 網
計	三三四件	二二三
	九	五三六
(ロ) 専用漁業	鯨刺網及小建網	
	鯨、鮭 小建網	其 他
計	三三	八三
	三	一三三
(ハ) 区劃漁業	介類養殖業	
	藻類養殖業	計
	六	八

(二) 許可漁業

鯨延縄漁業	六七件
鮭、鮭延縄漁業	二四六
鯨延縄漁業	一〇二

鯨延縄漁業	二二八件
蟹刺網漁業	九九
昆布採取漁業	二、三五九
海獣漁業	三四九

第三節 製 造

水産製造物中主なるものは鯨、鯨、鮭、鯨、鯨等の素乾、煮乾、塩蔵、塩乾、魚粉、冷凍、罐詰、肥料、魚油等であつて、明治四十年の製造高は五百七十四万余円であつたが、昭和元年には一千八百五十一万余円に達し、其の後不振状態が暫らく続いたが、昭和十四年には一躍三千二百三十三万余円に昇り、昭和十六年には四千三百八十万余円、昭和十八年には、四千七百三十万に達し、概ね其の二割を樺太内の消費に充て、八割は蛋白質給源として主として内地に移出し、若干を満洲、支那に向けて輸出しつゝあつた。

一、鯨

鯨の大部分は昔から漁業者自ら主として之を搾粕に製造し、其の副産物として鯨油が生産された。又身欠鯨並びに鯨の製品も次第に増加すると共に、品質の改良に意が用ひられるに至つた。塩鯨は明治四十五年來數年に亘り、定置漁業者によつて製造され、支那に試賣されたが、米國品に圧倒され、其の成績良好でなかつたので大正五年以後殆んど中止された。然るに昭和七年以來再び本事業を計画するものがあり、年と共に製造業者の数を増し、上海大連台灣

等へ輸出せらるゝやうになつた。又近時燻製練の製造に従事する者があるに至つたが、其の産額は未だ見るべきものがなかつた。尙生賣鰯は貯藏並に輸送機関の完備に伴つて、年々増加の傾向を示してゐた。

二、鱈

鱈は漁業者の手に依り大部分は塩鱈に製造され、卵は筋子として製造されてゐたが、近時は島内で鱈詰原料とするもの及内地への冷蔵運送が盛んに行はれ、生賣の数は年と共に多くなつた。

三、鮭

鮭は塩鮭と筋子に製造され、又生賣されるものも尠くなかつた。夏鮭は一時鱈詰に製造されたことがあつた。近時燻製品が製造されるに至つたが、其の額は多くはなかつた。

四、鱈

鱈は主に棒鱈、塩鱈に製造されたが、夏季は搾粕又は開鱈として製造された。尙近時島内各地並びに内地へ生賣されるものも増加するに至つた。鱈の副産品たる鱈肝油は主として肝油製造業者に依り製造せられ、主要な鱈漁業地には其の工場を見ない所はなかつた。

五、鰯

鰯は主として明太魚に製造されたが、夏季は搾粕又は開鰯に製造された。

六、鰈

鰈は生賣又は冷凍されるもの外、殆んど搾粕に製造された。

七、鰻

鰻は大部分を搾粕に製造し、更に副産物として鰻油を採取してゐた。

八、蟹

蟹の中最も多く利用せられたものはトラバ蟹、アブラ蟹であつて、領有以來少量の食膳に供せられるものを除いては、全部蟹罐詰に製造され、甲殻は蟹殻として肥料に製造されてゐた。しかして蟹罐詰は本島輸出水産物の王座を占める重要商品であつたので、樺太廳は之が製造業を統制し、工場の濫設を戒め、資源の涵養と製品市價の維持向上に努力したが、近時蟹罐詰業は休業となり、蟹は専ら食膳に供せられるのみとなつた。

九、昆布

昆布は漁業者各目に依り、其の種類、品質等に應じて反昆布、花折昆布、トロロ昆布、島田昆布等に製造せられ、食用に適しないものは沃度製造の原料として、ケルプに製せられてゐた。沃度及加里の製造は大正六、七年頃は盛んに行はれたが、其の後殆んど休業状態となつた。又各種の細工昆布も漁業者の副業として、多少製造された。

第四節 養 殖

樺太の沿海は従來世界三大漁場の一と称せられ、其の棲息魚族が豊富であつた關係上、蕃殖保護並びに養殖に関することは従來深く考へられなかつたが、近年魚族減退の徴候があり、今の中に之が対策を講じて沿海漁業の漁利を維持しやうとして、逐年此の種事業の研究並びに擴張を官民協力実施するに至つた。しかして此の種事業の主なるもの

鱒、鮭並びに鯉人工孵化、昆布増殖、タラバ蟹人工孵化、伊谷草増殖、介類移殖、鮭人工孵化、岩海苔増殖、鯉、鱒等の事業であつた。其の主なるものを説明すれば次の如くである。（別表第二十三表参照）

一、鱒、鮭人工孵化事業

鱒、鮭は河川に遡上して産卵し、其の稚魚は河を下つて海洋に出て成育し、再び河川へ遡上して産卵するものであるから、此等鱒、鮭の増殖を図るには、河川を保護して親魚の遡上を完全にし、産卵の荒廃を防止し安じて産卵せしめ、孵化した稚魚は阻害されることがなく無事降下し得る様、助成することが肝要である。しかし天然産卵では其の産出した卵の四割乃至六割位孵化するに過ぎないが、之を人工採卵して孵化室に收容し、卵の手入を爲しつゝ孵化させる時は、遙に多数孵化させることが出来る。即ち鱒卵は八割乃至九割、鮭卵は九割乃至九割七分の孵化を爲すことが出来る。従て一方遡河魚類の蕃殖を保護するために、明治四十年以來保護河川の設定、海面及湖沼に於ける蕃殖保護区域の設定等に依り、天然蕃殖に意を注いだが、大正十一年より始めて水産試験場に於て鱒、鮭人工孵化事業に着手するに至り、其の後樺太廳助成の下に水産会に於ても之が事業を經營するに至つた。

二、鯉人工孵化事業

鯉の人工孵化は昭和十四年度の調査試験に依り、十五年度より事業が開始された。

三、昆布増殖事業

昆布胞子の浮游時期である八月下旬より十月上旬迄の間に、一箇十五貫匁以上の硬質の石を海底に投入すると、満二箇年で天然産に比し良質多量の昆布を採取することが出来る。此の昆布増殖事業は大正十一年頃始めて漁業組合に

より試みられたが、効果顯著でなかつたため一時中絶し、昭和六年頃より再び盛んに行はれるやうになり、樺太廳も補助金を交付して之を奨励した。

四、タラバ蟹人工孵化事業

タラバ蟹は親蟹となる迄には七、八年を要する模様で、且つ洄游の範圍も廣くなく、又底棲水族であるために兎角濫獲の結果減退に陥り易いので、人工採卵孵化試験を施行の結果、昭和九年から本事業を開始するに至つた。其の方法は蟹漁業期中の三月より五月の間に於て、蟹の腹部附屬肢六箇に附着してゐる発眼卵を附屬肢と共に切取つて、孵化期の中に懸垂し、更に之を筏で海中に懸垂すると、卵は普通收容後七日乃至十二日で孵化して、孵化器から自然に脱出して外界へ游出する。しかし其の孵化率は平均九十パーセントの良好な成績を挙げることが出来た。

第五節 水産物検査

水産物検査は始め水産組合に依り行はれたが、水産物の大部分は島外に移出されるので、其の製品を改良して取引の円滑と價格の向上を図ることは、本島漁業者の經濟のみならず一般經濟に多大の影響を及ぼすことになるので、大正三年末樺太廳に水産物検査所を設置し、主要水産製品の検査を施行するに至つた結果、改良の実顯著に著がり、市場では特殊の製品を除き、樺太物の販路益々拡大し、其の聲價遙に先進地たる北海道産品を凌駕し、殊に鯉、鮭、昆布等は断然優越の地位を占めるに至つた。しかし検査品目は二百余种に亘り、昭和十八年中検査総数一、八七三、七四五点、検査手数料収入額十二万円に達した。

第六節 海獸保護獵獲

樺太の海豹島は米領プリビロフ並びに露領コンマンドルスキー群島と共に、臘肭獸の蕃殖場として世界に有名である。海豹島は北知床岬の南方凡そ十哩、周囲に砂浜を繞らし、全長三百五十間、幅五十間、高さ五十尺の一岩島に過ぎないが、凡そ百年前米國捕鯨船に依り始めて発見されて以來、臘肭獸の獵獲は、各國獵船隊の跋扈を擅にし、多きは一年に二万八千頭を獵獲し一時其の種族が殆んど絶滅せんとしたことがある。明治三十八年樺太が我國の領有に帰するや、海豹島の臘肭獸獵獲を禁止し、尙免許獵船に対しても島の周圍三十哩以内に於ける獵獲を禁止し、又監視員を派遣して取締りに当らせた。明治四十四年日英米露四國間に臘肭獸保護條約が締結せられ、北太平洋に於ける臘肭獸の海上獵獲を禁止し、各締約國政府で年々獵獲数を定め、國際的に其の保護蕃殖を図ることとなつたので、樺太廳は毎年吏員を派遣して臘肭獸の保護並びに獵獲に當らせ、條約の範圍内で蕃殖上支障のない三・四才牡獸及老犬獸の撲殺を爲すと共に、蕃殖上有害と認める一切の行爲を禁止したため、臘肭獸の数は年々著しく増加し、之に伴ひ分娩兒数も亦逐年増加するに至り、條約締結當時最大上陸数七千四百一頭、産兒数二千七百頭であつたのが、昭和十年には上陸頭数三万八千八百一十一頭、産兒数一万四千頭の多数を算するに至り、又昭和十六年には上陸頭数三万七千四百頭、産兒数一万六千頭に上つた。

臘肭獸の獵獲数は大正年代は一千頭に満たなかつたが、昭和二年から同十四年迄は大體二千頭内外で、其の獸皮は英米露の各締約國に対し一割当を分配し、残余は島内並びに國內に販賣し、毛皮の優秀なものは裝身具用として利用

せられ、肉、内臓其の他は塩藏又は乾燥して販賣されてゐたが、昭和十五年には獵獲数三千頭に達し、昭和十七年には六千頭、昭和十八年には一万頭、昭和十九年には三万頭を獵獲した。

第七節 水産に関する団体及会社

水産に関する団体としては古くから漁業組合及同聯合会、水産組合、水産会並びに水産聯合会があつたが、最近に到り水産業団体法の制定を見、以上の諸団体は解消して新に漁業会、樺太製造業会及樺太水産業会が昭和十九年五月迄に設立を見るに至つた。尙、昭和十七年九月に水産食糧の集荷配給に當る樺太海産物統制組合（出資金二百万円）が設立された。

漁業組合は明治四十一年に組織され、之に定置漁業権を與へたのに始まり、大正五年更に之に専用漁業権を附與し越えて昭和十年には全漁業組合を一齊に保證責任に依る漁業協同組合に改組し、更に昭和十一年には漁業組合聯合会が組織されるに至つた。漁業組合の主なる事業は漁業資金の貸付、共同販賣、共同購買、共同貯蓄、遭難救恤、講習講話、其の他魚介藻類の蕃殖保護等であつて、昭和十六年には組合数五十二、組合員数五千八百八十四名に及んだ。

水産組合も漁業組合と共に其の歴史は古いが、昭和十六年には定置漁業者を網羅した樺太定置漁業水産組合、海産物製造業者に依つて組織された海産物製造業水産組合、販賣業者を以て組織した海産物販賣業水産組合等があり、組合数五、組合員数三百八十名に及び、水産業の改良發達と組合員の共同利益の増進に努めて居つた。

水産会は定置漁業者及一般漁業者は勿論、水産製造業者、取引業者、保管業者等を網羅して、昭和三年各支廳の管

轄区域毎に設立され、水産業に関する調査、指導、奨励等に当り、又昭和四年には之等水産組合より成る水産聯合会が設立された。

次に水産に関する諸会社については領有以來幾多の変遷があつたが終戦時存在した主要会社の中で、最も歴史の古いのは樺太寒天合資会社（資本金六十万円）で、大正九年十月の創立に係り伊谷草を原料として寒天の製造に當つてゐた。其の他の会社については太平洋戦争中其の整備統合が図られ、昭和十七年一月に冷凍冷蔵製氷及焼竹輪製造を目的として樺太水産株式会社（資本金三百五十万円）が、八月には機船底曳網漁業及其の漁獲物の製造加工を目的として樺太海洋漁業株式会社（資本金二百万円）が、又十二月に鯿、鰯、鮭、鯖等の漁獲及其の製造加工を目的として樺太漁業株式会社（資本金一千万円）が設立されたが、之等三社は資材及労力の逼迫のため、昭和二十年三月樺太水産株式会社を主体とする樺太水産振興株式会社（資本金一千二百万円）に統合された。

鰺鮓の漁獲については昭和十七年十月樺太海獣興業株式会社（資本金百万円）が設立されたが、同十九年九月更に樺太開発株式会社に吸収合併されるに至つた。

尙昭和十八年十二月に海藻類を原料とする塩化加里、アルギン酸、ソーダ、マンニット及沃度の製造を目的として樺太水産化学工業株式会社（資本金百二十五万円）が設立された。

第十五章 林 業

第一節 総 説

樺太の森林は魚族及石炭と並んで、樺太に賦存する天然富源の太宗を爲すものであり、実に樺太開発の根源を爲し來つたものであるのみならず、將來に於ても亦其の保続すると否とは樺太の盛衰に係る重大な關係に在ることは、樺太諸般の文化施設を財政上より之を見、又直接間接森林に依拠する島民多数の生活基礎を辿れば、自ら明かな所であつた。樺太に於ける森林の重要性を先づ各種産業の生産額の点から見れば、林産物並びに森林よりの生産物と見るべき生産物中のパルプ及紙の生産額合計は本事業の操業初期は水産物生産額に遙かに及ばなかつたが、大正七年に於ては遂に之を凌駕して首位を占むるに至り、其の後年と共に躍進して、昭和元年には四千四百二十余万円に達して、総生産額七千九十余万円の過半を占め、又昭和十年には九千三百二十余万円、総生産額一億三千八百余万円の約七割となり、昭和十五年には二億円を突破するに至つた。尙又其の他の産業と雖も、樺太に於ては特に林業並びにパルプ工業と密接不離の關係に在つて發達して來たものが多かつた。しかしパルプ工業の消長は直ちに樺太全般の産業並びに島民の經濟に至大の影響を與へるものであるのみならず、本邦パルプ資材の約八割は樺太の森林より供給せられ我國に於て生産するパルプの四割以上は樺太に於て生産されるのであつて、従つてパルプ工業は國民經濟將亦我國文

化の上に於て、眞に重要な産業であつた。しかして王子製紙株式会社の調査に依れば同会社の直系傍系事業の職員、工員、山林事業労務者の数は其の家族を合算するときば十万を超え、終戦時に於ける樺太全人口の三割近くを占めてゐた。更に又本島森林に依る収入は樺太廳歳入の主要なものであつて、始政以來昭和九年度に至る歳入決算額について之を見るに、森林収入の合計は普通収入の五割余を占め、昭和十年度以降は實に概ね六割に達し、太平洋戦争後は租税収入の増加顯著なるものがあつたが、尙且つ森林収入は普通収入の四割強を占めて、樺太廳財政の根幹を爲してゐた。

翻つて樺太の森林の状況を観るに、領有当時は殆んど鬱蒼たる処女林を以て蔽はれて居つたのであるが、人口の加と共に利用の激増と山火に依り、漸次蓄積の減少を來し、更に大正八年より同十二年に至る未曾有のマツチムシの大被害に依り、約八千八百万石の森林が其の犠牲となり、之が急速利用のため行はれた斫伐数量の激増と山火の頻発とに依り、南部森林は急速に破壊せられ、其の後重ねて大正十五年來各地に顯著に發生したヤツバキヒムシの被害を見、領有当時二十億石と称せられたトドマツ、エゾマツの森林蓄積は急激に減少するに至り、此の儘に推移するときは鋳業用、漁業用、地元普通用等島内消費用材にも不足を來す惧れあるのみならず、延ては島民の生活資源を枯渇せしめ、本島拓殖の將來をも憂慮せられるに至つたので、昭和七年林政の改革を斷行し、施業案の編成に依り年伐量を査定し、之に基き伐採量を制限すると共に、山火防止其の他森林の保護に努め、進んで造林並びに撫育事業擴張に依る森林の造成を図る一方、立木処分について制度、手續に改正を加へ、更に各般に亘り產物利用の集約化を図つた。

樺太の樹種は概ね喬木四十九種、亞喬木十一種、灌木八十六種、蔓性灌木十三種、亞灌木十五種、合計百七十四種

とされるが、林業上價值の高いのは僅に松科のエゾマツ、トドマツ、グイマツ、白樺科のシラカンバ、エゾノダケカ、ンバ、柳科のオホバヤナギ、エゾクロヤナギ、ドロ等に過ぎない。其の中エゾマツ、トドマツは分布廣汎で、南端より北に至る間海岸山野共に密林をなし、本島森林の大部分を占め、混淆林を形成するを常とするが、トドマツは北部に、エゾマツは南部に至るに従ひ、夫々漸次稀薄となる。しかして此等の森林は概ね國有に屬し、國有森林原野の面積は昭和十一年度土地利用基本調査完了の結果に依れば、全島面積三百二十七万陌中其の八七パーセントたる二百八十四万陌を占め、又其の森林蓄積は昭和十八年度末に於て約八億五千万石、其の中トドマツ、エゾマツは八割近くたる約六億六千万石を占めてゐた。尙此の外試験林、大學演習林及公私有林の面積約十萬陌、其の森林蓄積約五千万石があつた。(別表第五表参照)

第二節 林 政

樺太は領有当時先住民族極めて少く、森林は悉く國有林であつた關係上、森林政策も亦自ら特異性を帯びてゐた。領有当時は全島を蔽うてゐた林木の價值ある利用方法の發見にのみ苦心し、植伐の平衡、更新の促成等には関心の要がなかつたので、本格的に保続、増殖及管理に力を注ぎ初めたのは、年々パルプに巨額の資材を伐採され、又島外への移出材が激増し、他面虫害や山火に禍された大正の末期からであつた。即ち大正十五年には択伐作業を採用し殖民關係地上の皆伐法と併せ、年伐標準量を算定し、標準量と供給量との平衡に意を用ひたが、既往契約に係る年期契約の關係により、其の伐採は標準量を超え、又其の伐採に關しても種々情弊が纏綿した結果、過伐盜伐の弊に陥り易か

つたので、昭和七年樺太の林政史上未曾有の大改革を断行し、其の第一歩として積弊の根源たる拂下方法を変更し、國有林野産物の処分は住民の生活上、拓殖上及公益上特に必要とする場合を除き、隨意契約を極力制限し、代へるに競争入札を以てするの方針を確立し、同時に從來最も弊害の多い年期賣拂制度を廃止し、現存の年期賣拂契約については契約履行の能不能等を考慮して適宜整理の上存続を認めることとし、一應需給の調整を得られる態勢が整へられた。

然るに昭和十三年頃より石炭鉱業の急激な発展と、軍需用材の供出要請等により、再び増伐が続行されたが、昭和十七年以來特に輸送上の深刻な影響に依り、パルプ製紙工業の操短、一部炭礦の休廃止の已むなきに至り、之等に対する林木の生産及需要は漸減するに至つた。尙昭和十九年七月より林産物検査所が設けられ、木材の検査をすることゝなつた。

今樺太の森林行政について詳説すると次の如くである。

一、行政組織

明治四十年樺太廳の設置と共に、同廳に林務課を設け、一切の森林行政を掌らしめ、又実行官廳としては各支廳に林務係を設けて地方森林行政に当らせることにしたが、其の後幾度か機構の改正を見、就中森林行政事務の特殊性を考慮して、大正五年には森林主事が置かれるに至り、又大正八年より発生したマツケムシに依る被害木処理のため、大正十一年には臨時森林作業所が設置され、被害木処理事業の完了と共に、昭和二年には森林作業所と改称されたが、昭和五年に至つて支廳林務係が廃止されて、新に林務署が各地に設置せらるゝと共に、森林作業所の事務は林務

署に引継がれた。然るに昭和十七年十一月行政簡素化実施に伴ひ、林務署は廃止されて再び支廳の一課となり、更に島内樞要の地に支廳林務出張所が設けられた。

二、森林警察

森林警察については領有以來種々取締方法が講ぜられたが、林木の利用の激増と拓殖の進展につれ、不法伐採及火氣取締の忽せに出来ぬのを痛感されるに至り、大正十一年に森林法中の保護に関する規程並に罰則が施行され、一方森林主事の増員、森林行政機構の整備に依り、森林取締の徹底が図られ、又昭和四年の山火大被害に鑑みて、火防巡視員の設置、入林取締の強化等山火警防の改革が行はれ、其の後も種々の措置が講ぜられたが、森林警察の二大眼目たる森林の誤盗伐防止、山火の警防に対し漸く実績を挙げるに至つたのは、昭和十年以後のことであつた。

三、保安林

保安林は大正二年大泊町附近に水源涵養の目的で設定されたのを嚆矢とし、其の後拓殖の進展と林業の合理的經營に伴ひ、魚附林、風致林等各種の保安林予定地が設定され、更に護岸、土砂扞止、防風雪等の國土保安及治水を目的とするものが増加の傾向に在つた。

四、愛林思想の普及

愛林思想の普及を図るため昭和三年樺太山林会が組織され、又全島の森林は國有林のみで公私有林がないため、動もすれば森林に対し無関心にならうとする憾みがあつたので、島民の愛林思想喚起と無立木地の急速緑化とを併せ行ふ方針の下に、公私有林造成の奨励が企図された。更に昭和八年の山火に顧み、昭和九年には山火防止徹底のため

財団法人樺太山火防止協会が設立された。

五、昭和林政改革

樺太の森林の重要性に鑑み、領有以來森林の利用開發に特に力が致され、諸般の研究が続けられると共に、之が管理經營についても諸制度の樹立改善が行はれたのであるが、特に昭和七年に行はれた林政改革は樺太の林政に新轉期を劃するに至つた。又昭和八年には樺太拓殖調査委員会が拓務省内に設置され、右委員会林業關係委員は全島樞要の各地を实地踏査の上、夫々詳細なる答申を爲し、本島森林政策の指針たらしめた。今昭和七年以來の改革事項中主なるものを説明すれば次の通りである。

(イ) 農林適地区分の確立並びに施業案の編成

森林施業案は森林經營の根本であるが、未だ林地並に將來の拓殖用地の区分が確定してゐなかつたので、先づ施業案編成の前提として、林地区分は昭和七年度より同十一年度に至る間に於て、次に施業案の編成は昭和八年度より同十二年度に至る間に於て、夫々一應完了し、尙之が基礎調査として最も迅速且精密を期し得べき航空写真に依る林相調査は昭和九年度を以て完了した。而して右の施業案は利用の進行に依り森林狀況に相違を來たし、尙木材の需給にも変化を來たし、更に又昭和十三年より同十六年に亘つて虫害の大被害が発生したので、(被害材積約二千石)之を一定年度毎に檢討を加へる必要を生じ、昭和十三年度より第一次檢討調査を進め、同十八年度迄に重要地区に付ての調査を終了した。又昭和十五年度よりは從來利用困難として調査を差控へた未利用林についても調査を開始した。然るに太平洋戦争の進展に伴ひ、勞力、資材等極めて窮屈となり、平時に編成した施業案を以ては時局の要請に副ひ得

ない部分もあるので昭和十九年度より戦時植伐案の編成調査が開始された。

(ロ) 立木賣拂調査方法の改善

從來の立木調査方法を改善し、伐採者に対し賣拂の証たることを明確ならしめるために、皆伐調査の場合に於ても賣拂毎木の胸高に極印を打記し、又跡地検査の用に供するために根株に極印を打つことにし、更に調査員をして各自の責任を各木に付明かにするために、調査毎木に番号を記入し、必ず調査員に対する实地監査をする制度として、何処までも調査並びに伐採の嚴正に主眼を置いた。

(ハ) 立木賣拂單價の査定

從來は搬出の便否、材の良否に關係なく、又市況の著しき変化あるにも拘らず、止むなき事情もあり、同一單價を踏襲使用して來たが、此の一律の單價を以て処分する制度は幾多の弊害の因となるので、市場相場を基準として搬出の便否其の他に依り、個々に算出する方法に改めた。

(ニ) 島外移輸出數量の統制

從來樺太材の島外移出數量は年々一千万石を超え、所謂北洋材の市價低落に重大な關係があつたので、極力移出の制限に力を致し、既に引渡済みに係るものゝ大數量をも、産地にストックせしめる等の方法を講じて、市價の維持安定に努めた。

(ホ) 島外移輸出用特賣並びに年期賣拂制度の廢止

樺太森林蓄積は次第に減少し、今後の標準年伐見込數量からして、地元消費用材、鋸業用材、パルプ用材等の島内

需要を全部充たし得るや否や頗る憂慮されるに至つたので、仮契約の實行以外の島外移輸出の特賣は、昭和七年以降之を廢止し又止むを得ない事情のために処分を要する場合は、公賣の方法に依り公正を期することとした。又年期賣拂制度は今後殆んど必要としないのみならず、從來弊害の淵源とも認めたので、昭和七年に之が制度を廢止した。

(ヘ) 森林保護政策

林力の保続増進を図るため、誤盗伐防止に対しては森林伐採取締巡視並びに伐採跡地検査を嚴格に勵行し、又昭和九年度冬山より買受人より請書を提出させて、賣拂処分林木以外のものを伐採搬出せる者に対しては、多額の過急金を徴収する等の方法を講じて、積弊の芟除に努めた。又森林火災に対しては樺太山火防止協会の設立、林野火防組合の刷新等を図つた。

(ト) 造林事業の拡張

可及的速かに過去に於ける荒廢した無立木地に造林して、林力の維持補足に意を用ひ、人工造林並に天然更新補助作業の事業を拡張し、又從來官行造林のみであつたのを、更に今後は民間の造林を奨励して、造林目的のために無立木地を無償で貸付し、又苗木は無償交付のこととし、之が成林後は該土地を譲與し得ることとした。

第三節 森林の利用

森林の利用開發については領有以來各種の調査試験並びに研究が行はれたが、特に森林蓄積の大部分を占めるトドマツ、エゾマツの利用方法については早くも明治四十一年に樺太にパルプ工業を興し、之を其の資材に供すべきであ

るとの斷案が得られた。即ちトドマツ、エゾマツは其の材質が優良で數量も多く、本邦他に類を見ないので、輸入防邊の見地からも、樺太開發の點からもパルプ工業の創業は緊要と考へられ、内地資本家に之が着手を慫慂したのであるが、當初嚴寒に於ける事業繼續能否や勞力其の他の點に於て、果して事業の成功を期し得られるかを懸念せられ、實現容易でなかつたが、遂に大正三年大泊に、同四年泊居にパルプ工場が設立せられ、操業の開始を見た。時恰も歐洲戰亂に際會し、パルプの輸入が杜絶したので、需要頗る多く、良好な成績を挙げ、本島パルプの名声頗る昂まつた。爾來打ち続く好況に伴ひ、豊原、落合、眞岡、野田、惠須取、知取の各地に工場が設立され、之が經營は、王子製紙株式会社、富士製紙株式会社及樺太工業株式会社の三社鼎立の状態であつたが、昭和八年五月三社は正式に合併し、王子製紙株式会社の独占經營に移り、益々事業進展の狀況にあつた。更に本島パルプ工業の研究は漸次進歩し、製紙パルプ以外に人絹パルプの製造に進出を見、昭和七年四月日本人絹パルプ株式会社が設立せられ、同年六月同社敷香工場の建設操業を見たが、同社は後に王子製紙株式会社に合併されるに至つた。尙昭和十二年六月に除間伐事業の開始により生ずる細徑木利用のため、珍内川畔に簡易曹達パルプ工場が新設された。

一方大正八年から同十二年に至る間に於て、マツケムシによる森林の大被害があり、約八千八百万石に達する被害木の急速利用の必要上、大正十一年から同十五年に至る五箇年に整理の計画を以て、官行斫伐を開始し、急激に大量の処分が行はれた。此の被害木処理は大部分一般用材として島外へ移出されたが、時偶々関東大震災に遭遇し、復興用材として其の安價な点より大に歓迎せられ、一躍樺太材の需要を喚起し、被害木伐採整理完了後に於ても依然年期的な一時の賣拂として大量の処分が繼續せられ、一方伐採の進出と共に年々山火の猛威も拡大せられ、さしもの樺太

の大森林も急激に破壊せられるに至つた。其の後財界は漸次不況に傾き、しかも依然として島外移輸出数量の減少を見ないことが、一層北洋材市價を低落させ、森林収入に依存する樺太廳財政も亦著しく困難を來すと共に、樺太森林の保続的年代の問題は實際出材について見るに、甚しく標準量を超過し、極めて憂慮せらるゝに至つたので、昭和七年林政の一大刷新を行ひ、森林の利用についても島内消費本位と爲したため、島外移輸出数量は激減するに至つた。試みに島外移輸出数量の変遷を述べれば、大正元年は僅かに一万八千七百九十三石に過ぎず、同九年より漸く三十万石台に達したが、マツケムシに依る被害木整理に着手してから、同十一年には俄かに二百五十万石となり、同十五年には一千万石を突破し、被害木整理後に於ても昭和四年迄は一千万石の大数量が移出され、其の後經濟界の不況に入つても猶九百万石の移出を見る程伐採が繼續せられたが、昭和九年は六百九十万石、昭和十年は四百六十万石と漸減し、昭和十八年には三十万石に過ぎなかつた。しかし此の中大正九年から開始された官行斫伐による伐採数量は大正十一年乃至十三年には被害木処理の關係上、二百万石を超えたが、昭和五年以後は年々概ね五十万石を占め、昭和十六年には百万石に上つた。因に昭和十八年迄の官行斫伐累計は二千九十八万余石であつた。

更に森林の利用については昭和十三年頃より石炭鋸業が急激に發展し、巨額の鋸業用材が必要とされ、更に一般用材の需要増加に促され、昭和十五年以來増伐が続けられたが、昭和十七年以來特に輸送上の深刻な影響により、パルプ製紙工業の操短、一部炭鋸の休廢止等を見、又木材の移輸出梗塞し、局部地域的の滞荷材を生ずるに至つた。

しかして以上の森林利用に當つて最も留意すべきは森林の保続的經營を図ることであつて、林力を保続しつゝ、しかも必要欠くべからざる需要量を充足することが肝要であるが、昭和七年迄は自然的、人爲的幾多の原因が相重つ

て、濫伐又は過伐の弊が絶えなかつたことは上述の如くである。然るに昭和八年度より同十二年度に至る五箇年間に全管内事業区の施業案が編成せられ、これに依り材況、蓄積に激変、激減の無い限り、永久に持續伐採せらるべき標準年伐量は八百八十万石とせられ、此の外に不要存置林、未利用林等の如く保続的年伐量算定の標準とすることが困難で、短期間に伐採を終るもの、一箇年間に伐採すべき数量が特殊年伐量として加算せられた。しかして既往の森林伐採量は、大正十年より虫害の關係で激増し大正十一年には一千三百八十万石、大正十五年には一千九百万石を突破し、其の後は漸減したが、昭和九年には二千万石を超え、昭和十二、三年頃から發生した虫害の關係もあつて、同十五年には二千八百万石に達した。然し其の後は漸減に轉じ、昭和十八年の伐採量は一千五百万石であつた。之が必要の大宗はパルプ製紙工業であつて、王子、富士、樺工の合併以前は各社一箇年三百万石宛の範圍内で毎年供給量を決定する契約であつたが、昭和八年三社合併の際は一ヶ年七百八十万石供給のことに決し、又日本人絹パルプ株式会社に対しては年百五十万石供給のこととされた。尙島内パルプ工場の消費原木量は昭和九年（工場数八）に於て約五百二十万石、同十年（工場数九）には約五百四十万石、更に十一年には六百万石近くに達した。尙此の外北海道及内地のパルプ工場に於て消費された樺太材は昭和九年度に於て約百八十万石、同十二年度に於て約百四十万石であつた。

（別表第二十四乃至二十七表参照）

尙最後に製炭業について若干説明すれば、木炭の生産はすべて黒炭生産で、主としてハンソキ、カバ類を原木として大正九年に製炭高四千五百吨であつたが、其の後増加し昭和四年頃は一万吨を超えたが、普通年産は七千吨程度であつて、各地に製炭組合を組織し、品質の改良と販賣の嚴制が図られたが、製炭事業地の奥地移行に伴ひ次第に減産

の用途を通り、一方昭和十二年頃より之が使用量は激増し、需給関係が極度に逼迫したので、昭和十四年度からは官行製炭事業が開始された。尙製炭組合は昭和十八年樺太農業会設立と共に解散し、其の事業は農業会に継承された。

第四節 造 林

領有後バルブ工業の發展に伴ひ天然林の利用は大に進んだが、其の伐採跡に対しては既存天然性後継樹の生長に依る自然の成林が期待せられる程度であつた。然るに頻発する山火のため伐採跡地の烏有に帰するもの多く、所期の天然更新は著しく妨げられたのみならず、大正八年原生林に発生したマツケムシの惨害も加はり、林力保続上至大の不安が感ぜられるに至つたので、大正九年トドマツ、エゾマツ、グイマツ等に重きを置き、造林用苗木養成に着手すると同時に、落合方面に播種造林が試みられ、爾來播種及植樹によつて山火跡地の復旧に力が注がれた。尙保護施設としての防火線は大正十一年から、林内歩道は昭和四年から実施され、又天然更新の助成並びに其の撫育は將來造林事業の主体となる見込で、昭和四年から半ば試験的に施行された。其の後昭和九年に拓殖計画の一環として造林十五箇年計画が樹立され、(別表第二十八表参照)山火跡地又は天然更新困難な未立木地の内將來林業用地たるべきものにつき、十五箇年間に官民併せて約九万陌の人工造林を行ふと共に、山火警防上或は廣く營林上緊要と認める地域に対し、それ〴〵防火線及林内歩道を開設し、天然更新に関しては小規模に研究的施業を進めつゝ、一般状況の推移を観察して徐に対策を講ずることとし、その経費総額は約八百万円と予定された。

かくて造林事業の基礎の確立を見たが其の後炭礦用材の激増其の他の事情のため、数次に亘る改訂を見、更に積極的な大造林の必要を認め、昭和十六年度以降十五箇年を以て完遂すべき大造林計画が確立されたが、(別表第二十九表参照)太平洋戦局の推移に伴ひ本計画をそのまゝ実行することは至難となつたので、之が整理縮少の止むなき事情に至つた。

次に造林事業の実績を官行造林及民間造林に就て述べれば

(イ) 官 行 造 林

大正九年以降主眼を播種造林に置き、簡易迅速に山火跡地の緑化を図る方針で進んだが、多くが其の成績予想に反したので、寧ろ造林費が増嵩しても、成林の確実性ある植樹を主として行ふべきであるとし、昭和三年から播種を漸減すると共に、主力を植樹に注いだ結果其の成績良好であつて、充分成林を期待することが出来るに至つた。然るに其の後太平洋戦局の急迫に伴ひ、造林事業は漸次縮少の止むなきに至り、昭和十九年度に於ては計画の僅かに三九パーセントを実施したに過ぎなかつた。(別表第三十表参照)

(ロ) 民 行 造 林

本事業は昭和十一年に始まり、公共団体、(市町村)重要産業者(製紙、炭礦会社)及個人に対し事業費の補助をして、植樹事業並びに之に附随する防火線、林内歩道の設置等の事業を奨励し、樺太開発株式会社も昭和十六年より造林の傍ら苗圃の経営及植林を行ひ、其の成績は年と共に向上しつゝあつたが、其の後戦局の推移に伴ひ、重要産業等の比較的大口施業者は労力、物資等の不足のため、昭和十九年度に於ては其の面積激減した。(別表第三十一表参照)

尙大正三年頃より設けられた東京、北海道、九州、京都の各帝國大學演習林に於ても學術的な研究の一端として造林に努力していた。

第十六章 殖民及農業

第一節 總 說

樺太の總面積三二七万陌中農牧適地は四六万陌（内農耕適地三三万陌）と推定せられ、優に四万戸、二十万人の農民を收容し得るとせられたが、昭和十八年に於ける農家戸数は漸く八、三〇〇戸、耕地面積は三万陌、農産物生産額は、八七〇万円であつて、食糧自給率は僅に一割五分程度に過ぎなかつた。

即ち樺太は我國唯一の亞寒帶ポドゾル地帯に属し、寒冷なる氣候、特殊的土壤等の自然的條件に制約され、農業經營上幾多の困難があるのは免れ難いところであつたが、明治三十八年我が領有と同時に専門の學者、技術者に委嘱して農業に関する各種の調査を行つた結果、此の処女未開の國土を開拓するためには、先づ移動性の、少い農業移民の招致を第一とすることが明かにされ、翌三十九年より農業者の移住が奨励されたが、明治四十年樺太廳設置と共に、此の方針が再確認されたばかりでなく、更に本島産業の中樞は土地の利用生産を図る農業にありとの建前の下に、土地処分の規定を定め、又農具の貸付及購入補助、種牡牛馬及普通牝牛馬の貸付及購入補助、種蓄の飼養費補助、農産加工及共同倉庫設置補助、農事團體及畜産團體事業費補助、公獸医の設置等各種の助成方策を講ずると共に、大正八年には農業移民に対して移住費及開墾費を補助する等、極力農業者の移住を奨励したが、農業移民は任意に渡航移住し

て、比較的土肥が肥え、開墾に便利な箇所或は交通至便の土地を選定して、各自希望する土地の処分を受けたので、殖民地は無秩序に散在し、共同的施設をするにしても不経済の点が尠くなかつたため、大正十五年従来の移民收容方法の外に、新に指定移民制度を設けて、指定地の貸付を受けた者に対し三百円乃至四百円以内の補助金を支給することゝなつたが、昭和三年には更に之を改めて官営施設の徹底に依り、理想農村建設の目的を以て集團殖民地制度が設けられ、内地よりの移住者を集團的に一定の殖民地に移住せしめることゝした。然るに日支事変勃発後、各種時局産業の勃興と勞力不足に基因し、昭和十二年以降相当数の離農者があつたため、同十四年からは島内移住の堅実な着農者に対しても百五十円の移住奨励補助金を交付することゝし、又既設農村の振興充實を期する目的の下に、既設農村中より十九箇所を選定し、是等指定地に將來部落の中堅人物たり得る優良なる者を移植し、以て既住農家を指導せしめることゝした。

農業移民の基礎となるところの土地に関しては、土地処分の前提として明治三十八年殖民地選定即ち農耕地、牧場地、共同放牧地、防風林等の利用目的により、それらの区分調査事業に着手し、翌三十九年には農耕地、宅地、牧場、公共用地等それらの目的に應じて区劃測設の事業を開始し、土地貸付が実施されるに至つた。又土地の合理的利用方途を確立するため、昭和九年より土地利用基本調査が実施されて、地味、地形、水利の便否、降霜時季及交通の便否等を明確にして農耕地或は牧場地乃至は林業地として經營するところの經濟的價值を決定する資料が整へられた。

本島農畜産業の開發を企図する上に、農耕地の改良は最も重要な事項として、明治四十二年に大排水溝の掘鑿を行つたのが、土地改良の始めであつて、爾來毎年繼續して行はれ、昭和八年よりは酸性土壤の改良が計画的に行はれるに至つた。

かくして施政以來年を閲すること茲に四十年、其の間農業經營の実績に鑑み、更に開墾補助、家屋建築補助、堆厩肥舍設置補助、農畜産技術員設置費補助、製酪工場設置補助、牛酪製造補助等各種の補助施設を増加し、或は株種圃の設置、農畜産物の検査、牛馬籍規則、種狐登録規則、畜牛結核病の検査、種牡牛馬の検査、競馬規則、公獣医の設置、獣医蹄鉄工取締規則を施行する等幾多の奨励方法を講じたばかりでなく、一方試験場、試作場等を設けて農業の積極的發達を図つて來たのであるが、内地の水田農業地帯より渡來した農民の多くは畑作農業殊に有畜農業經營の經驗を持たず、且資力極めて乏しかつたため、各種の補助があつたにも拘らず、尙農具、家畜等經營要具の整備困難であつて、常に狭げなる耕地を擁し、しかも穀菽偏重の粗放的無肥料耕作を繰返す者が多かつた。加之各種産業の勃興に伴ひ農業者の中には好況時代を夢みて永住定着の念を欠く者が多く、爲に農業的開發を閑却しがちであつたので、かゝる悲觀的狀態に在つた本島農業を更生させるため、昭和十年には樺太製糖株式会社が設立されて甜菜の栽培が奨励され、又昭和十六年には樺太開發株式会社が設立されて遊休未開地の開發を図り、農牧場の經營に依り食糧を増産する外、移民事業を經營しつゝあつた。

第二節 殖 民

樺太廳は施政以來殖民の根本方針を定着性に富む農牧移民に置き、之が招來に對して努力を続けたため、農家の移

住は逐年増加の趨勢を辿り、其の間殖民の制度にも幾多の変遷があり、時代時代によるそれ／＼特質を持っていた。即ち此等制度の変遷により農業殖民時代を分けて黎明時代、自由移民前期並びに後期、指定移民時代及集團移民時代の五期とすることが出来る。

一、黎明時代（明治三十九年—同四十五年）

明治三十九年應急的に農業移住者に対して從來露人の耕作した既墾地及露人の遺した建物の貸付、種子給與、家畜貸付等が行はれたが、同四十年樺太廳の設置と共に移民政策の根幹たる基礎的法規が制定され、一般移住者に対し汽車汽船の運賃特別取扱、移住者取扱所及仮移民体泊所の設置等の便宜が図られ、又農業移住者のために農耕適地の選定及区劃をして收容すべき戸数が予定され、之が募集に關しては主として北海道及東北、北陸諸縣廳に移民事務取扱嘱託を置いて該地方の移住者に対する便宜を計り、以て其の入地を實行するに至つたが、此等移住者は留多加、大泊、豊原、眞岡等専ら交通便利な南部地方に蜷集する状態であつた。（別表第三十二表参照）

二、自由移民時代前期（明治四十五年—大正七年）

前時代に引續いて移住奨励に努めると共に、新に團體移住者の希望によつて、予め入地箇所を選定して貸付予定存置地を設け、専ら團體移住者の便を計るやうにしたため、大正三年迄は農業移住者は著しい増加を見たが、大正三年移民の積極的募集宣傳を廢し、同五年には移民事務取扱嘱託を一時廢止し、一方特に産業奨励補助規則を制定して大に農家の福利増進に意を用ひるところがあつたが、其の後農業移住者は、漸減の一途を辿るに至つた。しかして之が理由の主たるものは大正四年頃より俄然漁業の全盛時代を現出したのと、パルプ工業の操業開始に伴ひ、渡來者は漁

業或は林業に従事し、延いて島内在住農民の心理にも多大の影響を及ぼし轉業する者多きに至つたのみならず、時恰かも歐洲大戰に際会し内地商工業の殷盛は斯業従事者の需要を増加させるに至つた等の事情に依り彼等を驅つて農業移民として移住させることは益々困難となつたためである。（別表第三十三表参照）

三、自由移民時代後期（大正七年—同十五年）

前期後半の成績不振に鑑み、農業移住者招來策として、大正八年四月移住奨励補助規則を制定して、移住費及開墾費の補助（移住費は十五才以上の者に対して一人五円又は一戸十五円以内、開墾費は十円以内）を爲すに至つた。又移民事務取扱嘱託を復活して移民の募集に當つたところ、偶々大正八、九年に亘つて本島南岸に發生したマツケムシによる被害木伐採のために造材事業一時に勃興し、尙北部に達する道路開墾工事の開始と共に、一般労働者の渡來激増せる折柄、歐洲大戰後の一時的な好景氣に驅られて、一攫千金の希望を抱いて移住し來つた農家は相当多く毎年二千数百戸を下らぬ有様であつた。

本來農業移民の方針はこれまで自作小農者に限つて移住せしめたが、大正九年に至り一大変革を行ひ、農業工藝品製造を目的とした大地積未開地の賣拂又は貸付予定存置地の処分を行い、資本家に依る小作農移住も可能となつたが、これは大地積の所有權独占と木材目的の狡猾な資本家の悪用するところとなり、其の実績見るべきもなく、却つて害惡を及ぼすに至つた結果、間もなく中止された。

茲に小農團體移住者の便宜のために、前期の初めに設けられた貸付予定存置地の取扱は其の後一時中絶されたが、立木を目的とした大地積の処分を行ふ趨勢につれ、賣拂予定存置地等の名称の下に、再び團體移住の目的を以て貸付予

定存置を希望する者が多くなり、再び処分を爲すに至つた。然るに此の予定存置地の取扱は不良団体長等の繞出を誘致し、彼等は巧みに団体移住の美名の下に一時的に移住者を入地せしめ、全地積の立木を農耕上の支障木として無償で伐採販賣し、独り巨利を占める惡辣なる利權屋と化するに至つた。しかも此等移住者は立木の伐採後は開墾にも從事せず、定着の意志もなく、従つて土地を無雜作に放棄して何等顧るところなく、只管森林を追ふて轉々し、或は他の勞働に轉業する者も多い状態で、前述の如く目覺ましい收容を見たにも拘らず、其の定着率は僅かに四十五パーセントに過ぎない有様であつた。(別表三十四表参照)

四、指定移民時代(大正十五年—昭和三年)

從來の所謂自由移民時代には移住者が任意に自己の希望する殖民地を選択し、土地貸付を受けて開墾に従事する状態であつたから、農家の多くは無秩序に散在し移民收容上の不統一を免れぬばかりでなく、土地利用上にも不經濟の點が多かつた。かくの如き状態では將來農家の福利のためにも、又堅実な農村開發のためにも、其の実績の挙らない弊を考慮した結果、從來の自由移民收容方法の外に、大正十五年より新に指定移民制度を設けた。即ち指定地内に官營を以て農耕道路及大排水溝を施設して、新移民、旧移民共に其の恩恵に浴せしめた。しかし此の指定地の先住農家は交通至便、地味豊沃、開墾容易等の好條件の土地に順次入地しているため、其の後に移住する指定移民は不利な立場に在るので、これに対する均衡を図るため、指定移民には三百円乃至四百円以内の補助金を交付し、尙牛馬貸付に優先權を付與した。しかし大正十五年は此の指定移民の宣傳のために費され、昭和二年に至つて初めて三二八戸を收容したが、僅かに收容予定戸数の約半数に過ぎないで、次の集團移民制度に代えられるに至つた。(別表第三十五表

参照)

五、集團移民時代(昭和三年以降)

昭和三年に至り更に進んで諸般の施設を完備せしめた一定の殖民地に、素質優秀な移住者を厳選して、毎年三百戸を限り之を集團的に收容し、其の助成を一層厚くし、以て理想農村の建設を目標とし、本島の南部より北部に漸次開拓の大業を完成しやうとする集團移民の積極的方針が確立され、同七年よりは内地移住者の入地後補欠の出来た場合等には、島内で分家した農家の子弟や移住後土地処分を受けない漁業者で、農業に轉ずる素質優良な者も亦之を集團殖民地に收容することゝなつた。かくして逐年積極的に移住者招致に努力した結果、内地各方面に於ける樺太事情に關する認識が深められ、且先住知己を頼つて渡來する者が漸く増加して來たこと、既設農村充實の必要から、同八年以降從來の積極的宣傳を中止すると共に、同九年より新に確立された拓殖計画の實施に伴ひ、此後集團移民は毎年百五十戸宛、自由移民は三百戸宛を入地せしめ、集團、自由両移民に対する補助特典の懸隔も漸次解消することに方針が改められた。しかし集團移民制度の實施以來、移民の定着率は良好であつて、顯著な実績を挙げつゝあつたが、日支事變の勃發以來、内地に於ける農村青年の應召、生産力拡充に伴ふ農村人口の都市移動等のため、農家を樺太に移住させることは極めて困難となり、太平洋戦争の勃發は更に一層此の困難を加重するに至つた。しかしながら戦争の経過と共に、島内食糧の増産が強く要請されたので、昭和十九年より樺太開發株式会社に於ても移民事業を行ふことゝなり、主として北部方面に百一戸の農民を移植し、殖民地の經營に當つた。

今此の時代に於ける移民に対する助成方策の概要を述べれば、次の通りである。

イ、農耕道路及排水溝の掘鑿

官營を以て施行し、耕地内に自ら小排水溝を掘鑿した場合は其の經費の四割以内を補助した。

ロ、移民共同小屋の設置

集團移民に対し入地後臨時に共同宿泊させるため、殖民地内適當の箇所に共同小屋を設置した。

ハ、移住者指導所の設置

集團殖民地内に其の農村が大体自立自營の域に達するまでを限度とし、移住者指導所を設置し、指導員を配置して移住者に対する万般の指導斡旋をした。

ニ、拓殖医、産婆の配置

集團殖民地内に拓殖医、拓殖産婆を置き、保護衛生に万全を期した。

ホ、農産物共同調製所及農業共同倉庫施設補助

昭和五年から一時集團殖民地に於て農事実行組合が施設した共同調製所及共同倉庫の建築費等に対し約八割の補助をしたことがあつた。

ヘ、教育施設補助

集團殖民地に対しては優先的に小学校校舍新增築の補助金を支給した。

ト、移住奨励補助

移住者一戸に対し三百円乃至四百円以内の移住費を補助したが、後に至り島内移住者に対しても百五十円の補助金

を支給し、其の後補助額は島外移住者五百円、島内移住者三百円に改められた。

チ、土地の貸付及無償譲與

未開地は一戸につき五町歩乃至十町歩を標準として無償貸付し、五年若しくは七年以内に所定の家畜を有して其の土地に居住し、十分の七以上を成墾すれば其の全地を無償で譲與したことは従前と同様であつた。

リ、家屋建築費補助

移住者が住宅を建築した場合は従前と同様其の建築費に対し補助が爲されるが、補助金額は三百円以内とされ、後五百円以内となり、更に一千円内外に改められた。

ヌ、官營拔根及開墾

集團移民に対しトラクターで一戸当一町歩の官營拔根及開墾を行つたが、昭和八年以降は其の面積を二町歩に増加し、又同十一年よりは新來の自由移民に対しても同様の助成が爲された。

ル、種子無償給與

入地初年に限り優良種子を無償で給與した。

ヲ、開墾奨励補助

一般移住者に対し自力に依り開墾した場合、其の開墾費の四割以内を補助した。

ワ、特殊土壤改良奨励補助

酸性土壤改良のための石灰は其の必要量の八割以内を、肥料は必要量の五割以内を給與した。

カ、其の他

移住者として移民休泊所の利用、汽車汽船の運賃割引等の特典に浴せしめられた外、農業者として農具購入補助其の他一般農業奨励上の補助を受けた。

しかして昭和三年より同十六年に至る迄の收容農家戸数は別表第三十六表の通りであり、又領有以來昭和十六年迄の総移住農家戸数は島内移住者を含め約三万三千戸で、其の内島内移住者約七千百戸を除いた約二万五千九百戸が島外よりの移住者であり、此等移住農民は大部分北海道より渡來した者であり、東北地方之に次ぎ、其の他中部、關東近畿、中國、九州各地方よりの渡來者を含んでいた。尙島外移住者約二万五千九百戸を昭和十六年末農家戸数八千三百四十二戸に対比するときは、其の定着率は僅かに三割強に過ぎなかつた。之に対し集團殖民地の農家定着率は別表第三十七表の示す如く、昭和九年末現在に於て九十一パーセント九を示し、其の成績良好であつた。

第三節 土地

一、土地調査

拓殖の基礎である土地の調査は、早期に於て行ふことが必要と認められ、明治三十八年早くも専門の學者及技術者に委嘱して全島を実地に踏査せしめ、其の答申により同年十一月先づ殖民適地の選定調査に着手し、同四十二年に第一期調査を終了した。第二期調査は大正九年に至つて再開し、昭和八年迄続行され、以上二回の調査に依る選定済の農耕適地二〇二、二七九陌、牧場適地二五〇、一〇五陌、改良後農耕適地二二、七七八陌、泥炭地七、五一七陌、合

計四八二、六七九陌であつた。又昭和九年よりは拓殖十五箇年計画に基き土地の合理的利用方途を確立するため、土地利用基本調査が行はれ、併せて農牧適地の選定も行はれ、本調査は同十一年度を以て全島の調査が一應完了した。一方選定済の土地につき、更に利用目的に従ひ具体的調査を行ふべき土地区劃は、明治三十八年始めて大泊に宅地を区劃して當時の移民を收容したのを嚆矢とし、爾來地味の良否と交通の便否とに鑑み、殖民地として区劃を測設したものは、昭和十六年末迄に於て約三十九万六千陌に及んだ。其の主なる内訳を示せば、農耕地は五町歩乃至十町歩を普通農家一戸の收容に充てることとして、区劃した面積二〇二、二四九陌、市街宅地は普通七十八坪を一戸分とし十九市街地につき区劃した面積七五〇陌、部落宅地は農村にあつては一戸の標準を普通九百坪とし、漁村にあつては一戸の標準を三百坪とし、尙六百坪内外の附屬畑を測設し、漁閑を利用するの農耕を奨励し、以上部落宅地の区劃面積は三、三六四陌に達した。尙又昭和三年からは國有地民有地間、民有地相互間の境界を調査するに至つた。

二、土地処分

本島領有後諸種の企業者が渡航するので、明治三十八年より重要部落に漸次市街区劃を施して其の使用を認許し、農牧業を目的とする者に対しては、同三十九年より一部分の区劃の測設を終つて之が貸付を開始したが、土地処分に關する法規の正式制定を見たのは同四十年三月であつて、其の後同四十四年に本格的に法規の整備が図られた。しかして國有未開地は隨意契約を以て賣拂又は貸付けられたが、直ちに賣拂を爲すのは殆んど特殊の事業に供する場合に限り、他は何れも貸付の際附せられた一定の條件を成就した後賣拂又は讓與に依り、民有に歸するのを通則とした。土地の貸付は原則として有償であるが、農耕、牧畜、造林及之に直接附隨の用途に供する場合は拓殖殖民の見地

から無償で貸付し、専ら農牧業を目的とする移住者の便益を図りつゝあつた。賣拂又は貸付すべき地積の制限は其の使用目的に依り一定しないが、一人に付耕作及之に直接の附随の用途に供する土地は三万坪、牧畜及之に直接附随の用途に供する土地は五十万坪、造林及之に直接附随の用途に供する土地は五百町歩、市街宅地及部落宅地に供する土地は千五百坪、其の他の事業に供する土地は一万坪を限度とした。但し農耕目的地は借地人に於て一万五千坪に対し一戸の割付を以て移住農業者を收容するときは九万坪迄を貸付し、造林目的地は公共団体、会社其の他の法人に対して前記所定面積の五倍迄、特定の重要産業を営む者に対しては五十倍迄増加すること等が出來た。しかして領有以來昭和十六年末に至る迄の土地処分面積は貸付地八六、七五二陌、賣拂地二〇、九九八陌、讓與地五九、四〇六陌であつた。

三、土地改良

樺太に於ける農牧適地の多くは、亞寒帶の特異性として濕地及酸性土壤であつて、直接農耕に適する土地は僅かに河流汪溢土地帶（沖積土）の五万陌に過ぎないとされ、しかも此の内一万五千陌は濕地帯に属している有様であつて、樺太の亞寒帶農業を興起發達させるのには、土地を改良するために、排水の施設と酸性土壤矯正する目的の石灰施與とは何よりも先決問題であつた。加ふるに台地及山地土地帶の農耕地は樹木の伐採跡地であつて、樹根甚しく、之が除去は極めて困難であつた。又区劃地内の農耕道路及一般交通道路に対する農村連絡道路の有無良否は農地施設上の重要問題であつた。

されば樺太廳では農業移民入地後の明治四十二年から地味肥沃であるが低濕地であるため、農耕地として利用の出

來ない土地を改良する目的で、官營を以て大排水溝を掘鑿し、同時に排水路の掘鑿土で排水路に接続して排水道路を造り、大正二年よりは補助金を交付して簡易な農耕道路を部落民に造らせ、同四年より小排水溝掘鑿にも補助金を交付して、大排水溝と相俟つて土地の改良發達の途を講じた。しかして此等施設の完璧を期するには、河川と其の支配流域との關係を充分に調査しなければならぬとの見地から、大正十年から主要河川の流域に対し土地改良基本調査を行ふこととなり、昭和十一年迄に九万陌余の調査を終つた。更に各農村に官營を以て連絡道路又は幹線道路及小排水溝の集水溝たる大排水溝の開鑿を行つたが、移民の渡島日と共に増加した結果、從來顧られなかつた台地及山地土地帶も区劃を増設し、農業經營地として諸施設を施すに至つた。尙昭和三年より集團移民が実施せられるに及び、此等新移民が入地初年度に於て最も困難を感じるのは耕起播種であるから、少くとも自家用作物だけでもすぐ播種が出来るやうにとの建前から、官營を以てトラクターで貸付地一部の拔根開墾を行ひ、次いで昭和八年よりは酸性土壤の矯正のために毎年石灰の施與を行ふこととなり、又最近に於て排水施設だけでは完全な改良を望み得ない泥炭地に対し冬期間雪上に於て客土を行はせて、之が経費を補助すると共に、強泥炭地平野に対しては官營を以て河川洪水の濁流を導水放流し、含有土砂を沈澱させ、客土を行ふこととなつた。かくして明治四十三年以來、官營を以て施設した大排水溝は昭和十六年末現在に於て延長八四五、七八八米に達し、大正二年より農業者に補助金を交付して各自の農耕地内に小排水溝を掘鑿せしめたものは同じく延長二、四一〇、四九四米、暗渠排水溝を掘鑿せしめたものは延長三、〇二、七九九米に及んだ。又昭和十六年末現在に於ける農耕道路延長は官營一、五四九、一九八米、補助二、〇〇二、二六九米に達した。尙酸性土壤改良については、農耕適地面積三十三万陌の大部分が強酸性土壤であるが、昭和十九

年末迄の石灰施與実績は約二万陌、耕地面積約三万陌の三分の二程度に過ぎなかつた。

第四節 農 業

本島農業の開発は明治初年我國より開墾目的の移住民を送つたことがあり、樺太と千島との交換後は露國政府が農業に染手したが、其の実績に見るべきものがなかつた。明治三十八年我國の領有と同時に、農業に関する各種調査を行つた結果、本島の氣候風土は有畜農業に恰適することが確められ、其の後続々農業開発に関する具体的計画が立案されたが、農業開発の基礎が本格的に確立されたのは、昭和九年に至つて拓殖十五箇年計画が樹立せられるに及んでからであつた。即ち本計画に依れば、本島農業の進展は飼畜農業の合理的發達に俟たねばならず、それがために飼料の經濟化農畜産加工の殘滓を利用するに如かないので、本計画に於ては製糖、製粉、煉乳、製酪等の農畜産加工業の勃興を骨子とし、此の見地から加工原料たる甜菜及小麦の作付を奨励すると共に、甜菜栽培地帯に於ては牛馬貸付、牝牛馬購入補助等に依つて、十箇年間に農家一戸当り乳牛二頭、耕馬一頭を所有せしめ、其の他の地帯に於ては乳牛一頭、耕馬一頭を所有させるやうに計画した。

元來本島の氣候は著しく冷凍であつて、盛夏の候でも平均氣温十八度内外に過ぎない。しかも晩霜遅く初霜が早いので、農作期間が極めて短く、僅かに五箇月内外である。従つて農作物の種類も甚しく限定せられ、且早熟性品種でなければ之が栽培は至難であつた。又土壤の性状は所謂ボドゾル系土壤で、之が地味地力は総じて豊かでない。従つて單位面積当り生産量少く、且時に冷害のため收穫の減少を來すことがある。しかしながら土壤の改良方法を講ずる

ときは生産力を發揮し得るばかりでなく、早熟性品種を選び成熟の促進に留意すれば、氣候風土に適する作物は必ずしも少くはない。しかし本島の適作物は試験調査の成績に依れば、食糧作物としては燕麥、小麦、裸麥、蕎麥、馬鈴薯、飼料作物としては燕麥、蚕豆、瑞典燕麥、牧草、販賣作物としては燕麥、小麦、青豌豆、菜種、亞麻、馬鈴薯、甜菜等とされた。又山野には到る処家畜の飼料に供し得る野草の自生豊富であり、且風土は飼料作物の栽培に頗る適しているので、家畜衛生に適した氣候と相俟つて、家畜の飼養上は最も有利な條件を備へていた。以上の自然的及經濟的條件に照應し、本島の農業奨励方針は自給自足を基調とし、販賣作物を適宜加味した飼畜農業を以て其の要諦とされた。即ち畜産を加味することに依つて、冬期間に於ける余剩勞力の合理的利用を図り、一面之に依つて移入化學肥料に代替する自給肥料を潤沢にして地力の維持増進に資し、且乳肉卵の生産に依つて氣候の變調に依る收穫減の緩和に努め、更に特有の販賣作物の作付、擴張と之が加工販賣に依つて、収入の増加と輪作の合理化とが期待せられた。

しかし樺太廳は夙に農業の振興に留意し、屢々農業の奨励補助に関する規定を制度改廢して、之が助長振興を図つて來たことは、既に前述した通りであり、かくして農産物生産額は明治四十二年僅かに一七六、六一二円であつたのが、耕地の擴張に依る作付面積の増大、適作物の選定、優良種子の普及、生産技術の向上に伴ふ單位面積の増收等依つて、大正六年には九七四、六七五円となり、昭和二年には三、五四二、五九〇円に著増し、更に昭和十二年には五、八一、七六八円、同十六年には八、一二三、八三四円に達した。又畜産物生産額は大正四年僅かに、七一、四一五円の少額に過ぎなかつたが、有畜農業の奨励に伴つて家畜及家禽の数も非常に増加し、大正十年には、五八七、

三二九円となり、逐年増加して昭和十五年には遂に四、九七二、八六五円に達した。
次に農業の概況について更に説明すれば、

一、農業者戸口

本島の農業者は主として内地より移住して來た者の外、島内に於て他業より轉業した者から成り、農業戸数は専業及兼業を含め、明治四十一年には僅かに八三〇戸に過ぎなかつたが、其の後漸増して、大正三年には四、二六四戸に達した。然し大正五、六、七の三年間は四千円を割るに至り、同八年から再び増勢に轉じて、昭和七年には遂に一万戸を超えるに至つたが、昭和十二年以降は相當の離農者を生じ、同十三年は九、三二五戸、同十八年には八、二九一戸という、全島総戸数七七、五〇九戸に対し一割一分弱を占めた。尙昭和十六年農業戸数八、三四二戸（農業人口四五、四二七人）中専業農家六、六一五戸、兼業農家一、七二七戸であり、又自作農家六、三八九戸、（総農家戸数の七割七分）小作農家一、一六一戸（同一割四分）及自作兼小作農家七九二戸（同九分）であつた。

二、耕地

本島の耕地面積は明治四十一年末一、〇九六陌であつたが、十年後の大正六年には九、四八五陌、即ち約九倍に増加し、更に昭和元年には二三、二〇五陌、同十二年には三四、八八八陌の多きに及んだが、其の後各種時局産業の勃興と勞力不足等に基因し、離農者が増加したため、耕地面積も之に伴つて次第に減少し、昭和十八年には三〇、〇三五陌、農耕適地三十三万陌の僅かに一割程度に過ぎなかつた。尙昭和十六年末に於ける農耕地三〇、二三九陌中自作地は二六、〇〇〇陌で八割六分、小作地は四、二三九陌で一割四分であつた。又耕作耕地三陌未満の農業者の数を百

とすれば、三陌以上五陌未満の耕作者六十一、五陌以上十陌未満の耕作者二十九、十陌以上十五陌未満の耕作者四十
五陌以上の耕作者は三・七であり、一戸当り平均耕作面積は三・六陌強であり之を明治四十一年の一・三陌、大正六
年の二・四陌、昭和九年の二・七陌に比較すれば年と共に漸増を示してゐた。

三、作付

各年次作付面積増加の趨勢を見ると、明治四十年末作付面積は八七四陌であつたが、大正六年には七、三九六陌、
昭和元年には一四、〇〇五陌、同十年には二五、八二六陌となり、同十二年には二九、五三四陌に達したが、事変及
戦争の影響に依り其の後漸減して、昭和十八年には二五、九九一陌であつた。しかして一戸当平均作付面積は昭和十
六年末に於て二・九陌で、之を明治四十一年の一・三陌、大正六年の一・九陌、昭和二年の一・五陌に比較すれば、
耕地面積と同様幾分増加を示している。次に作付面積と耕地面積との比較を見ると、作付面積は耕地面積に対し、明
治四十年は九割五分、大正六年は七割八分、昭和二年は六割、同十二年は八割五分、同十八年は八割六分であつた。
作物の種類は本島は四十五度以北に位するので、気温は内地、北海道に比し低いけれども、水稻栽培を除いては略
々北海道と大差なく、麦類を始め豆菽類及蔬菜を合せて四十余种に及んでいた。食糧作物中到る処に於て栽培された
ものは麦類、豆菽類、馬鈴薯、根菜類、葉菜類等であつて、作付面積の最も多かつたのは燕麦で、馬鈴薯、豌豆、甜
菜、小麦、蕎麦、裸麦が之に次いだ。燕麦は近時食糧として的一般需要も高まつて來たが、主として家畜飼料に供せ
られていた。馬鈴薯は本島特産とも稱すべき重要作物であつて、食糧としては勿論、無水アルコール、澱粉、酒精等
其の利用價值が高いので、漸次之が製造原料として相当多量の需要を見るに至つた。豆菽類中最も廣く栽培されたの

に豌豆及蚕豆であつて、從來豌豆は輸移出品として、蚕豆は家畜飼料として利用されたが、日支事変後輸移出制限と畜産増加につれ、両者とも飼料に供せられる一面、代用食として利用された。飼料作物としては燕麦、豆菽類の外、牧草、瑞典蕪菁、家畜ビート等が栽培され、殊に牧草は燕麦に次ぐ作付面積を有していた。工藝作物中本島に適するものは甜菜、罌粟等であつて、就中甜菜は昭和十一年樺太製糖株式会社の操業開始を見るに及び、急激に其の栽培面積が拡大された。甜菜は輪作関係から本島農業経営上根幹的不可欠の作物であつて、且浅澤たる葦菜根冠は家畜飼料として大なる價值を有するので、逐年増産の傾向に在つたのであるが、昭和十七年よりは減産に轉じつゝあつた。果樹は一般的に栽培する者はなかつたが、將來有望とされたのは林檎及葡萄であつた。(別表第三十八表参照)

四、畜産

本島に於ける畜産は北方農業の特質に鑑み、農業経営の基礎を爲すものであつた。即ち寒冷なる自然環境下の本島農業は大面積を短期間に営農することを必要とする結果、経営組織に適當の家畜を加味し、畜力の利用に依り耕作勞力を補ひ、長期間に亘る農閑期の余剩勞力を飼畜に活用することが最も合理的とされ、且家畜生産物に依り食糧並びに肥料の自給確保が出来るものとされた。樺太廳では此の見地から亞寒帶農業を確立するため、夙に樺太農法経営標準を定め、樺太をそれらの自然的並びに經濟的條件の相違に應じて三大地区に区分し、それら各地区の實情に即し、農家一戸当り耕馬一頭、乳牛二頭乃至六頭、豚乃至緬羊一頭乃至二頭、其の外家禽、家兎の飼育標準を明かにし且領有以來諸般の助成政策を実施し農事及畜産の振興を図り、又昭和十九年度よりは畜産の一層積極的な改良増殖を図るため十箇年計画を以て種畜場の設置に着手しつゝあつた。

尙家禽、家禽の飼育趨勢については別表第三十九表の通りであるが、昭和十八年末現在に於ける牛は八、四〇一頭、馬は一五、四六三頭であつた。

イ、畜牛

畜牛は在來種と領有後北海道其の他から移入したものと、二つに大別出来る。在來其の移入の経路については詳かでない、又現在では見ることが出来ない。北海道より移入したものはエアシャー、ホルスタイン、シンメンタール、ショートホン、ブラウンスキス、デボン種等であつて、樺太廳では過去の実績に依つてエアシャー及ホルスタインの兩種を奨励品種と決定して奨励した結果、在來種は最初はエアシャー種で改良され、其の後製酪事業の勃興に伴つて北海道からホルスタイン種を購入して貸付したり、補助金を交付して購入させたりしたので、最近では、在來種は殆んどホルスタイン種に依り改良され、現在畜牛の七割以上はホルスタイン種を以て占めていた。種牡牛に関しては明治三十九年五頭を移入して種付に供用して以來、樺太廳試験所から民間に貸付した頭数は相當数に上つた。

尙昭和十六年末に於ける飼養戸数三、一五二戸、成牛六、二八〇頭、犢一、七四八頭であつて、同年中の牛乳搾乳高は六二、〇四八頭、九五五、四七七円を算し、屠殺頭数は一、四六六頭、四二五、三一六円であつた。

ロ、馬匹

馬匹を大別すると在來種と領有後内地や北海道から移入したものと二つに分れる。在來種は其の大部分は蒙古種に属する西比利亞馬と称せられたが、今では其の跡を絶つていた。領有當時は農耕の上には勿論、交通及通信の上にも極めて重要な使命を持つていたので、樺太廳では北海道や岩手縣から牝馬を購入して貸付したり、補助金を支給し

て牝馬を移入させた。主として、トロツター、ハクニー、ノルマン等の雜種及サラブレッド、ベルシユロン、クライスデル、アングロアラブ等の系統に属し、優良な駒を産し、馬匹改良上效果顯著なものがあつた。樺太廳では大正二年以來中間種を獎勵品種と定めて獎勵に當つた。尙明治三十九年以來樺太廳試験所から民間に貸付した種牝馬の数も相当多かつた。

ハ、養 豚

在來種は領有當時殆んど食用に供せられ、今日其の跡を絶つていた。明治四十年樺太廳はバークシャー種とチェスターホワイト種との雜種を移入したが、其の後民間に於てバークシャー種及ヨークシャー種を移入し、養豚は殆んど此の二種を以て占められるに至り、成育甚だ良好であつたので、樺太廳では右二種を獎勵品種として種畜の配付をしていた。養豚は年に依つて相当の増減があつたが、其の原因の一つは飼料關係に依ることは勿論であるが、主に牛肉市價の高低に左右せられたためであつた。尙昭和十六年末に於ける飼養戸数一、二一〇戸、成豚一、二五四頭、仔豚一、六三二頭であり、同年中の屠殺頭数は一、八二四頭、一九四、六二二頭であつた。

ニ、緬 羊

牧羊業は占領當時露人の遺棄した緬羊五頭を飼養したのがその嚆矢であるが、劣等種であつたため、之を食用に供し、其の跡を絶つた。明治四十四年樺太廳は北海道からシュロツプシャー種牝四頭、牡一頭を購入して種畜場に收容し、大正二年再び同種牝一頭を購入して飼養試験を継続した。又大正八年より四年間同種を米國より輸入して繁殖させたが、其の成績が良かったので、同十四年より之を一般農家に集團的に拂下げたが、專業的緬羊牧場の經營に至つ

ては尙疑問とされた。

ホ、山 羊

山羊の飼育も樺太に適したが、其の用途が狭いため、産業としては余り一般に普及されなかつた。

ヘ、家 兎

家兎は其の毛皮が優良で且飼育が容易なので、樺太廳では農家の副業として一戸に対し牝兎四頭、牡兎一頭を飼育させる方針で、自家食用及養狐飼料として利益あるメリケン種及イタリアン種の飼育を獎勵していた。

ト、家 禽

家禽は雞が主で、領有後移入されたものはレグホーン種を最多とし、ミノルカ種、アングルシヤン種、オービントン種、横斑プリマスロック種、名古屋種其他數種を数へたが、飼養試験の結果、單冠白色レグホーン種及横斑プリマスロック種を最適のものと認め、之を獎勵品種に決定し、一般に其の飼養を獎勵し、試験所からも種禽や種卵を配付した結果、総羽数の九割は此の兩種を以て占められるやうになり、其の成績も良好であつた。

尙昭和十六年末に於ける飼養戸数二、九〇七戸、総羽数八一、九五九羽、同年中の産卵数は四、一一一、〇一六箇
四〇九、七八二四であつた。

チ、養 狐

養狐事業が本格的に始められたのは、大正四年樺太廳種畜場で行はれた飼養試験が嚆矢であり、時恰かも歐洲大戰の余波を受けて毛皮市場が好況に恵まれ、且樺太廳では養狐業の用地として一万五千坪以内の未開地を貸付する途を

開いたので、養狐業経営者が続出して、競つてカナダから銀黒狐を輸入して其の蕃殖事業を開始するに至つた。然し當時は一般の養狐に対する技術経験乏しく、蕃殖育成の成績は意の如くならないで失敗に歸したもの少くなく、又大正十一年の毛皮市價下落は一時飼養者を激減せしめることゝなつた。其の後種々苦心の結果、蕃殖の方法に成功するに至つたため、再び養狐熱の勃興を見、樺太廳に於ても昭和九年種狐の登録を実施して之が改良に努めたので、爾來逐年堅実な發展を辿つていたが、太平洋戦争後、毛皮輸出の途絶絶し、市價の低落に加ふるに飼料の不円滑は其の飼育頭数を頗る減少せしめるに至つた。

尙昭和十七年一月末現在の飼養場数四六五、飼養頭数四、三二九頭、其の内銀黒狐は四、二〇五頭を占めて圧倒的多数を示し、赤狐、黒狐、紅狐及十字狐は何れも少数であつた。又昭和十六年中の毛皮の生産は六、五四九枚であつた。

第十七章 鈹 業

第一節 総 説

樺太の鈹業は、露領時代に於ては、海岸附近三ヶ所の炭礦で極めて短期間少量の石炭採掘を見た程度で、殆んど問題とされてゐなかつた。我國領有と同時に、直に島内の地質及鈹物の調査に着手し、明治三十八年及同三十九年の兩年間に、略々概察的調査を終了し、其の結果、島内には全般的に豊富な石炭を埋藏し、其の他にも有用鈹物の存在することを知ることが出来た。尙其の後調査を続行し、石炭の外石油の有望なことが確められたが、領有以來鈹産物としては石炭の外、殆んど見るべきものがなかつた。

樺太の石炭埋藏量は、樺太廳にて調査を完了した地域だけでも、二十数億噸に達し、全部では恐らく三十乃至四十億噸に達するものと推定され、其の炭質も良好で、用途も極めて廣汎であつた。然るに樺太は北方僻遠の地で交通が不便であつたのと、往時は島内に大なる工業の發展を見なかつたため、石炭鈹業は当初極めて振はず、其の後製紙パルプ事業の勃興と共に、之への供給を大量消費先として、毎年僅かづゝ其の出炭量を増加する状態に過ぎなかつたが、昭和十一年以降に於ては島内に於ける各種産業の勃興、島外移出量の増加に依り、石炭の需要を増加したため、勢ひ出炭量を急速度を以て増大し、殊に日華事変勃發後は内地の石炭需要増加に促されて、急激な發展を見るに至

り、殊に製鉄用原料炭、瓦斯発生用炭或は特殊用炭の給源地として重要視せられ、昭和十六年の出炭量は約六百五十万噸に達して、石炭黄金時代を現出するに至つた。従つて各炭礦何れも多太の資本を投じて、設備の新増設及改良、採炭区域の拡張を行ひ、新規着手炭礦の続出を見るに至り、來るべき島外移出量の激増に対応する出炭量の飛躍的增加を期待されてゐたが、太平洋戦争に基因する船腹不足は樺太炭の内地輸送に大影響を與へ、西海岸北部炭礦のみに於ても約二百万噸の貯炭を生ずるに至り、茲に於て樺太の石炭鉱業は一大難關に直面し、出炭制限の止むなき状態に立ち到つた。即ち其の第一手段として、既に昭和十八年に一部炭礦の休廃止が行はれたが、更に昭和十九年に於ては海上輸送の見込全く失はれたため、從來島外移出のみを目的として稼行してゐた西海岸惠須取以北の炭礦全部の出炭を一時停止するの止むなきに至り、樺太の石炭鉱業は再び島内需要量を充たす程度の出炭量にまで減少し、終戦を迎へた。

第二節 鉱業制度

樺太の鉱業制度は幾多の変遷を経て、所謂封鎖炭田制度を除いては、すべて内地と同様となつたが、其の沿革を述べれば、明治三十八年八月から同四十年三月迄の間は、後日に於ける鉱業制度樹立のため、基礎調査が行はれると共に、制度確立前に天與の鉱利が先占乱掘されるのを防止するため、軍令を以て全域に亘り鉱物の採取を嚴禁し、又鉱産物の島外移出を禁止して、絶對的に鉱物を封鎖した時代である。次いで明治四十年四月樺太廳の設置と共に、内地鉱業法の一部を施行することにしたが、別に樺太鉱業令を公布して、普通の出願手續に依り鉱業權を許可する区域以

外を封鎖区域として、この封鎖区域については本令に依つて鉱種及鉱区を指定し、且許可の際納付すべき金額を競争入札に付して、落札者に鉱業を許可することとした。要するに本島開拓の大局より見て鉱利保護上何等支障のない区域は、之を開放して一般の先願主義に依らしめることとし、封鎖区域としては現在の三大炭田の外、惠須取及北名好両炭田の区域に止めたのである。然るに明治四十五年に至り樺太鉱業令は廢止され、封鎖炭田に関する事項は若干の変更を加へられて、特別法に依つて規定されることとなつた。即ち從來封鎖区域内の鉱業許可は賣山主義に依るものであつたが、之を変更して石炭の採掘量に應じて採掘料を徴收することとし、尙許可した本旨に悖らないやうにするため、採掘許可條件を新しく附加することが出来ることとなつた。

かくの如く封鎖炭田制度は樺太特有のものであり、一見徒らに石炭の有望地域を封鎖し、爲に石炭鉱業の發達を阻止してゐたやうであるが、鉱業は大資本の投下に依る大企業組織に依つて、始めて有利な經營を爲すことが出来るものであり、又若しも同一炭田区域内に、鉱業權者の異なる大小幾多の炭礦を隣接錯綜して存在させたならば、炭礦相互間に遺棄せられる鉱利の損失は勿論、機械其の他の諸設備の重複等不利不便の尠くないものがあるが、本制度は此等の缺點を除き、適當の時期に於て、適當の資格者に之が採掘を許可し、最も合理的な經營を爲さしめやうとしたものであつた。

しかして明治四十五年に定められた封鎖炭田区域は從來の区域から惠須取及北名好両炭田区域が除外されたものであり、南部、中部及北部の三大炭田に分れ、此等封鎖炭田中、中部川上川流域一円は大正二年四月三井鉱山株式会社に採掘が許可され、北部内川附近及南部内幌附近は何れも昭和三年十二月に、前者は三井鉱山株式会社に、後者は南

樺太炭礦鐵道株式会社（三菱鉱業株式会社の傍系）に採掘が許可された。尙此の封鎖炭田に関する法律は其の後改正されて、人造石油事業に対しては、競争入札に依らないで隨意契約を以て、石炭採掘を許可することが出来ることとなり、其の結果中部内淵川流域一円は、昭和十四年十二月に樺太人造石油株式会社に採掘を許可された。又此の封鎖炭田区域は昭和十五年に一部改正が行はれ、南部封鎖炭田中から南名好川上流地方の一部分が除かれて、樺太廳の鉱区となり、後樺太開發株式会社に政府が之を現場出資し、同社に依り稼行されるに至つた。かくして封鎖炭田の主要部分は概ね開封されるに至り、本制度設置の趣旨は殆んど貫徹されたと言つてよかつた。

第三節 鉱物

本島に於ける鉱物は石炭を主とし、その他の鉱物としては金・砂金・含銅硫化鉄鉱・クロム鉄鉱・マンガン鉄鉱・ニッケル鉱・褐鉄鉱及辰砂鉱等が存在するとされたが、未だ重要な鉱床は発見されなかつた。（別表四十表参照）又石油は各地に含油層が発見され、一部試掘が行はれたが、未だ出油を見るに至らなかつた。非金屬鉱物及有用土石類としては石灰石・海綠石・柘榴石・硅藻土・ストロンチウム・ペントナイト（漂白土）・耐火粘土等があつたが、埋藏量多量を期待されたのは、石灰石及海綠石だけであつた。

今主要鉱物の賦存状況について若干述べれば次の通りである。

一、石 炭

樺太に於ける炭田の面積は全面積の約二割を占め、其の主なるものは北部、中部及南部の三封鎖炭田、西海岸北部

炭田並びに東海岸炭田等であつて、主として白堊系より成る樺太中央山脈の兩側に発達する第三系中に胚胎し、之を分つて上部夾炭層及下部夾炭層の二群とする。下部夾炭層は北部は西海岸國境地方より、南は能登呂半島に至る迄発達してゐて、厚い所では約七百米に及び、炭層は北部では一般に薄い、中央部の泊居、内淵及川上方面では良く発達し、多数の良質厚層を挾有し、豊富な埋藏炭量を有してゐる。上部夾炭層は下部夾炭層の上位に在るもので、更に東海岸上部夾炭層とに分つことが出来る。東海岸上部夾炭層は北は幌内川の西方國境地方より、南は白浦に至る間、断続的に南北に長く分布し、更に南方知床半島にも局部的存在を認められ、何れも稼行に足る数枚の炭層を挾有してゐる。西海岸上部夾炭層は更に又北部及南部の二群に大別され、北部の夾炭層の厚さは四百米に及び、最も良く発達した処では十三枚の稼行炭層を挾有し、炭層は一般に厚層であつて、厚さ十八米に達するものがある。又南部の夾炭層は層厚約三百米に及んでゐる。之を要するに上部夾炭層は東西両海岸地方に於て其の分布廣汎であつて、炭層概して厚く、本島石炭鉱業上極めて重視されてゐた。炭質は西海岸北部に属するものは良好であつて、發熱量大で、灰分少く、粘結性を有し、製鉄用原料炭に適するが、東海岸及西海岸南部に属するものは、不粘結性であつて、前者に比し、何れも水分多く、發熱量小である。

埋藏炭量は終戦時迄樺太廳にて調査を完了した区域のみを計上しても、炭層の厚さ二尺五寸以上、水準下二千尺迄を計算して、約二十四億噸に達してゐるが、未調査区域の埋藏炭量を推定加算すれば、優に三十億噸に達するものと推定される。前記二十四億噸の内訳は封鎖炭田と民有炭田と略々相半してゐるが、封鎖炭田の調査は略々完了したのに対し、民有炭田に於ては尙幾多の優良炭を豊富に埋藏した未調査区域が残されてゐた。（別表四十一表参照）

樺太の石炭は一部黒褐炭或は無煙炭に属するものもあるが、大部分瀝青炭に属するもので、其の性狀に依り、大體粘結性強く發熱量大なるもの、粘結性微弱又は不粘結性で揮発分多きもの及不粘結性で發熱量少く水分多く風化し易いもの、三種に区分することが出来るが、全般的に見て、灰分及硫黄分が極めて少ない特長を持つてゐる。(別表第四十二表参照)

二、石 油

樺太の諸処に油砂又は石油の滲出個所の存在したことは、既に領有以前から語り傳へられたところであるが、領有後含油層の發見せられたのは、明治四十年本斗町附近に於てあり、次いで翌四十一年野田町附近二ヶ所で、石油臭を有する青色砂岩の存在を發見したので、西海岸に含油層の存在が明かとなり、其の後の調査の結果、西海岸に於ては知志仁附近、名寄及智來附近、野田附近、眞岡附近並びに内幌及本斗附近の第三系中に、東海岸に於ては落合及丸山附近の第三系中並びに氣屯附近の白堊系中に何れも含油層の存在が確められ、屢々其の試掘が試みられたが、遂に未だ出油を見るに至らなかつた。

二、石 灰 石

石灰石は南部知床半島と、北部國境振戸山附近に埋藏せられ、特に北部國境附近のものは品質優良であつて、其の埋藏量は恐らく三億噸以上に達するものと推定された。しかし之が原石並びに製品は製紙パルプ製造用、寒天製造用、農耕地の酸度矯正用、燈火用、土木建築用其他にも莫大な需要があつたにも拘らず、輸送關係上北部石灰石の利用は長く不可能視せられ、専ら南部に於ける輸送利便の箇所のみ、僅か採掘されたのに過ぎず、需要の大部分を内

地より移入してゐたのであるが、昭和十九年より漸く北部の石灰石も採掘の運びに立ち到つてゐた。

四、海 綠 石

海綠石は本島の海成層中に廣く分布し、其の埋藏量は甚大なるものと推定された。海綠石砂岩の用途は化學的操作に依つて、之より硫酸加里或は塩化加里を精製し、加里肥料として使用するを普通とするが、從來我國に於ては加里肥料を独逸及米國より輸入してゐたので、本島に於ける海綠石砂岩の發見は我國肥料界に一大衝動を與へ、將來を有望視され、海綠石より加里分を抽出する研究或は之を粉碎して肥料として畑に撒布する研究等が行はれたが、結論を得るに至らず、たゞ海綠石より優良な硬水軟化剤を製造する試験に成功せるのみであつた。

五、其の他の鉱物

其の他の鉱物中稍々見るべきものとして、褐鉄鉱、水銀鉱、硅藻土、ストロンチウム、ベントナイト及耐火粘土等を挙げる事が出来る。

褐鉄鉱は豊原市附近に数万噸埋藏せられ、製鉄事業を起すには量僅少であつたが、將來セメント工業操業開始の時には、之に供給すべき鉄分原料として予定されてゐた。

水銀鉱は大泊女麗附近の河川に辰砂が相当量沖積することより必らず之が根源なる水銀鉱床が存在するものとして、鋭意探鉱を行つてゐたが、遂に發見するに至らなかつた。

硅藻土は留多加、大豊方面に少量埋藏せられ、之を採取して、食料品の加剤として利用された。

西海岸宗仁附近及伊皿附近にはストロンチウムを含んだ石灰質岩を發見し、一部採鉱してストロンチウム抽出に使

用し、更に探鉱を進めてゐた。

樺太の夾炭層主として上部夾炭層中には屢々ベントナイト質頁岩を挾石してゐるが、特に樺保附近には品質優良なるものが存在し、又白浦に於ては炭層の下磐に優良なる耐火粘土層の存在を発見し、夫々開発計畫中であつた。

第四節 石炭鉱業

一、沿革

樺太の石炭鉱業は明治四十一年に、後の川上炭礦の一部に樺太廳試験鉱場が開設されたのが最初で、次いで翌年には、泊居炭礦の前身の樺太廳泊居採炭試験所が設置され、何れも相当量の出炭を見ただけでも、前者は交通不便のため間もなく中止され、後者も諸種の事情のため明治四十五年に休業するに至つた。以上は官営であるが、其の当時民営として開坑に着手されたものに、西海岸北部の安別及西柵丹の両炭礦があつたが、此等は僅かに明治四十四年の下半期を稼行しただけで、経営困難に陥り休業した。

茲に至つて樺太の石炭鉱業は一時殆んど中絶の形になつたが、大正二年に至り、中部封鎖炭田の一部開封に依つて、川上炭礦が民営として採掘に着手し、翌三年には泊居採炭試験所が泊居炭礦として事業を復活し、其の上東海岸に白浦炭礦が開坑せられる等、漸く樺太の鉱業も其の緒に就き、爾來稼行炭礦の増加、發展と共に、出炭量も次第に多くなり、特に昭和年間に入つてからは、パルプ製紙工業の隆盛と共に、石炭の需要量が増加したため、毎年十萬噸宛の増産を示し、島内需要石炭の殆んど全部を自給するに至つた。更に昭和五年から同七年に至る間は深刻な世界的

不況の余波を受けて、各種産業の減産に影響せられ、殆んど出炭量の増加を示さなかつたが、昭和八年經濟界が恢復に向ふと共に、島内島外に於ける石炭需要は急激に増加し、之に伴い石炭鉱業も躍進して、同九年には約百二十萬噸に達し、同十年には百五十萬噸を突破する生産を挙げ、続いて十一年には二百萬噸を超え、同十二年には二百五十萬噸、同十三年には三百四十三萬噸となり、同十六年には遂に六百四十七萬噸に達し、特に惠須取以北の炭田が急激に開坑されて、全出炭量の六割強、即ち約四百萬噸は此の方面から採掘されて、専ら島外に移出されるに至つた。一方樺太廳では積極的に炭礦の増産を促進するため、昭和十五年以來、新坑開発助成金及増産奨励金を交付すると共に、炭價抑制に因る損失補償の方途を講ずる等種々助成しつゝあつたが、太平洋戦争後の海上輸送力逼迫の影響を受けて、山元貯炭が増加したため、出炭も減産に轉じ、昭和十七年及同十八年の出炭量は各々四百九十余萬噸に減じ、遂に昭和十八年十月第一次の炭礦整理を行ふの止むなきに至り、此の結果北栄、三浜、小田洲、美田及北辰の五炭礦は廃止され、惠須取、杉森及南珍内の三炭礦は休止された。次いで同十九年八月には石炭鉱業の中心地である惠須取以北の全炭礦について、第二次整理が行はれ、興南・豊畑・名好・三福・諸津・白鳥澤及上塔路の七炭礦は廃止となり、安別・北小沢・千緒及小恩内の四炭礦は休止され、西柵丹・塔路及太平の三炭礦は保坑炭礦として、現状施設の維持のみを行ふことゝなつた。しかして昭和十九年八月現在の貯炭高は以上惠須取以北の炭礦だけでも、約二百二十萬噸に達してゐた。尙以上整理炭礦の勞務者及資材等は急速に九州及常磐の炭田地域に轉換されることゝなり、一万名に達する勞務者が徵用の上内地に輸送され、次いで資材及機械設備の内地轉換を行ひつゝあつたが、之が遂行は殆んど其の緒に就いた程度に終つた。

以上の如き炭礦整理の結果、西海岸に於ては珍内・大栄・内幌及南名好、東海岸に於ては内川・泊岸・知取・樫保・白浦・内淵及川上の合計僅か十一炭礦のみが稼行を継続することになり、昭和十九年の出炭量は約四百万噸に減少した。しかして同二十年は残存炭礦のみの稼行に依り、約二百六十萬噸を出炭する計畫であつたが、終戦前後に於ける一時的の出炭減のため、約二百萬噸にまで激減した。此の二百萬噸の各炭礦別内訳は大体に於て珍内・大栄・白浦各炭礦各々十萬噸、南名好・樫保各炭礦各々十二萬噸、知取・内川各炭礦各々十三萬噸、内幌・川上各炭礦各々三十萬噸、内淵炭礦約四十五萬噸であつた。(別表第四十三表参照)

二、稼行炭礦の状況

次に樺太に於ける稼行炭礦の状況について述べれば、最も稼行炭礦の多かつたのは昭和十六年で、経営中のもの三十五、起業中のもの四の多きに達してゐた。此等の炭礦の中、比較的早期に着手されたのは主として交通便利であつた東海岸地方で、西海岸方面の炭礦は後期に着手されたものが多いが、其の大部分は主として西海岸惠須取以北に於けるもので、昭和九年から同十三年までの間に、相次いで十二炭礦が新規着手され、樺太石炭鉱業最盛期の基礎を築いたのであつた。しかして此等各炭礦の資本系統は何れも大資本会社に依るものが多く、昭和十六年の全出炭量の中、三菱系及王子系の炭礦に於て各々二十五パーセント、三井系の炭礦に於て十五パーセント、帝燃系及日鉄系の炭礦に於て各々七・五パーセント、合計八十パーセントは此等五会社にて出炭をし、残りの二十パーセントが其の他の群小会社の出炭となつてゐる。従つて樺太に於ける炭礦経営は比較的確實に且合理的に行はれてゐたと言ふことが出来るのみならず、各炭礦の出炭能力も内地のそれに比較すれば非常に大で、塔路及大平の両炭礦の如きは何れも年産

百万噸以上、川上・内幌・上塔路・北小沢・西柵丹及内淵の各炭礦は何れも四十乃至六十萬噸の出炭可能の設備を備へ、最小能力が炭礦と雖も五萬噸程度で、一炭礦当平均出炭能力は約二十五萬噸となり、又鉱夫の出炭能率も坑内外夫一人当り平均〇・九四噸に達してゐた。かくの如く樺太の炭礦が急速に出炭能力を増し、且能率の良好であつたことは、樺太の炭田が何れも処女炭田であつた上に、炭層の賦存條件が非常に有利良好で、採掘が極めて容易であつたことに基因するもので、必要に應じていくらかでも増産し得る可能性を有し、將來我國に於ける石炭の供給地として、実に有望重要なものであつた。(別表第四十四及四十五表参照)

三、炭礦の設備

樺太の石炭鉱業が急激な發展段階に入つた時期、即ち昭和十年から最盛期であつた同十六年に至るまでの各炭礦の技術及設備面に於ける進歩の状況について述べると、各炭礦とも何れも將來に於ける大増産の影態を備へる準備として、各種機械の新增設、坑内外運搬施設の整備、選炭及発電設備の改良拡充、採炭方法の改善等を極めて積極的に行つた。しかし各炭礦に於ては何れも未だ十分の探鉱を施行して居らなかつたので、起業の進捗に努める一方、試錐、探炭坑道の掘進或は地表調査に依る新炭層の発見、地層の変化、炭層の賦存状況等の調査に努めた。又從來各炭礦とも坑口水準上を主として稼行してゐたが、事業進捗に伴ひ、漸次水準下採掘に移行するものが多くなり、何れも斜坑に依つて之を行ひ、延長千米以上に及ぶ岩盤斜坑の開鑿を見るに至り、又採炭法は從來無充填長壁式、柱房式又は残柱式が多かつたが、保安、自然発火防止、能率増進の見地から、全充填長壁式及局部充填長壁式に、特殊事情のものを除き、殆んど全部が移行した。坑内掘進及採炭用としては鑿岩機、截炭機、コールピック等を使用し、原動力とし

ては圧搾空氣の使用が頗る増加し、坑内運搬設備に於ては斜坑運搬機として捲揚機の外ベルトコンベヤーをも使用し、主要水平坑道及片磐運搬機として電車、メインテール捲機、エンドレス捲機等の外にベルトコンベヤーを使用し、切羽運搬機としては主としてチェーンコンベヤーを使用し、此の方面の機械化は大に促進された。又各炭礦とも増産遂行のため、順次線路の敷設、重軌條の使用、機械運搬への傾向を示し、車輛設備としては運搬能率の向上を図るため、鉄製炭車を使用する炭礦著しく増加し、坑内に二廂鉄製炭車、坑外に五廂鉄製炭車を使用するものもあつた。排水設備としては電気タービン唧筒を使用するもの多く、通氣設備としては機械通氣が一般に行き渡らず、主要扇風機を備へる炭礦は比較的少かつたが、局部扇風機は甚だ多く使用された。坑内照明としては電気安全燈を使用する炭礦益々増加し、揮発油安全燈を使用してゐた炭礦も何れも電気安全燈に移行の傾向を示した。選炭については機械選炭設備を有するもの著しく増加し、又動力供給用の自家發電所の新增設も甚だ多くなり、發電設備を有する炭礦は二十を超えた。

四、石炭の需給

本島に於ける石炭の需給關係については、大正三年の頃に至る迄は、島内に於て何等一定した石炭の消費先なく、従つて明治四十四年には出炭量の約二割即ち五千余噸を島外に移出し、又大正二年には其の出炭僅かに八十三噸に激減したが、何等の痛痒を感じなかつた。然るに大正三年末に王子製紙株式会社大泊工場、同四年に樺太工業株式会社泊居製紙工場の操業が開始せられ、引續いて各地に製紙工場の建設を見、次いで鉄道の開通、人口増加等に伴ひ、島内に於ける石炭需要量は年々増加するに至り、之を歩調を合して出炭量も漸次増加を示したが、到底島内の産出炭の

みでは其の需要を充たすことが出來ず、不足分を北海道、九州及撫順よりの移輸入炭で補ふといふ状態で、昭和元年に於ける移輸入炭の如きは約十萬噸、即ち島内消費の約三割にも達した。しかしてかくの如き現象は昭和四年迄続いたが、同年中に於ける封鎖炭田の一部開封に依る内幌及内川両炭礦の着手に依り、昭和五年には略々島内産出炭のみで、島内需要を充たすことが出来るやうになり、其の後次第に出炭量を増加し、輸入炭の如きは皆無となり、移入炭と雖も少量の特殊炭に過ぎなくなり、之に反して島内の産出炭はたゞに島内の自給自足を爲すに止まらないうで、島外への移出量を漸増させ、昭和十年の如きは約五十萬噸の移出を行ふに至り、此の傾向は年と共に高まつて行き、昭和十六年の移出量は遂に四百萬噸に達したが、其の後輸送力の逼迫に依り移出困難となり、昭和十八年の移出量は二百五十五萬余噸に過ぎなかつた。しかしして島内の石炭需要量は、大正八年に至つて漸く十五萬噸に達し、昭和元年には三十一萬噸となり、同十年には九十六萬噸余、同十六年には二百三十萬噸余に達するに至つた。需要の大部分を占めたのは工場用炭で、主として製紙工場の燃料として使はれ、之に次いで最近著しく使用量を増したの是一般家庭用炭であつた。これは從來は一般家庭用に薪材を使用する風習があつて石炭の使用が普及しなかつたのが、最近薪材の減少と共に其の價格が騰貴するに至り、之に反して石炭の價格は低廉であつたので、次第に石炭を使用する者が多くなつて來たためであつた。次に炭礦の山元自家用炭の需要も出炭増加に伴ふ多量の動力發生用炭の使用に依り著しく増加した。其の他船舶燃料用炭、鉄道用炭及人造石油製造用原料炭の需要も年と共に増加しつゝあつた。昭和二十年に於ける樺太の用途別石炭需要量は工場用約百萬噸、家庭用約五十萬噸、人造石油製造用約三十五萬噸、鉄道用約十萬噸、船舶燃料用約五萬噸、炭礦自家用約二十五萬噸、その他雜用約五萬噸、合計約二百三十萬噸位であつた。(別表第

尙近時樺太に於ては石炭の配給は之を統制し、炭礦産出の石炭はすべて配給統制機関である樺太石炭統制株式会社(資本金五百万円)が一手に生産費に適正利潤を加へた價格で買上げ、消費者には政府で定めた低價格にて之を使用せしめ、依つて生じた損失を同会社に補償するといふ方法で、配給の円滑、低物價政策の実施をしてゐた。

五、石炭の輸送

樺太の石炭鉱業に關しては、石炭の輸送事情は甚だ重要な問題であつた。先づ陸上について之を述べれば、東海岸には南北を通じて縦貫鐵道が敷設されてゐるのみならず、東海岸にある各炭礦は殆んど全部鐵道沿線にあり、或は之に近距離にて連絡する専用鐵道にて連絡し、石炭の輸送には極めて便利であつた。之に反し西海岸に於ては南部方面一部の海岸に沿ひ鐵道が敷設されてゐるだけであつて、其の沿線にある炭礦の石炭輸送には便利であつたが、久春内から惠須取を経て國境に至る間には鐵道の敷設なく、石炭の陸上輸送は不可能であつた。従つて鐵道沿線或は専用鐵道で之に連絡する炭礦は何れも島内需要炭の供給を目的とするが、鐵道の敷設されていない地方、主として惠須取以北に存在する炭礦は海上輸送に依る石炭の島外移出を目的として稼行してゐた。之がため惠須取以北には常に大量の貯炭があるに拘らず、此等を島内用石炭の主な需要地である東海岸方面或は西海岸南部方面へ輸送することが出來ず、此等の方面に存在する炭礦は、極力増産をせねばならないといふ奇現象を呈した。

海上輸送に關しては、樺太の炭礦は何れも極めて海岸に近く、僅かの距離で海岸迄容易に搬出出来る利点を有し、各炭礦毎に積込棧橋或は船澗を設けて舁積で沖合の本船に石炭を積込む方法に依つて、比較的能率良く、海上輸送に

依る島外移出を行つてゐた。しかし此の方法は多大の労力を要するのみならず、荒天の際の積込不可能、冬季に於ける作業停止等に依る不利益が尠くないので、惠須取港を修築し、更に惠須取港を中心として海岸に沿ひ鐵道を敷設して、島外移出炭はすべて惠須取港に鐵道にて集中し、岸壁に依る本船への直積を行ふべく、工事の進捗中であつた。

第五節 石油試掘

領有後始めて石油試掘を行つたのは、大正十二年十月より着手された樺太廳直營の本斗試掘井であつたが、これは予定深度にも達せず、しかも出油を見ないで中止するに至つた。其の後は久しく石油の試掘に手を染める者がなかつたが、油田調査の進行に伴ひ有望地域の確認されたのと、樺太廳が石油試掘奨励補助金を交付して積極的に試掘を助成するに至つたので、昭和四年七月に日本石油株式会社が本斗町附近で石油試掘を開始し、爾來引続き西海岸及東海岸十数箇所で試掘が試みられたが、深度最大約三千米に達し、一部少量の瓦斯及石油の湧出を見たが、採算的産出量を見るまでに至らず、昭和十五年以降試掘を中止してゐた。

第六節 其の他の鉱業

一、石灰石探掘事業

樺太に於ては製紙及パルプ工場用として、又酸性土壌の中和剤等として年々数万噸の石灰石を必要とし、其の一部は南部知床半島方面の石灰石を早くから探掘して之を供給し、不足分は之を内地から移入してゐたが、前記知床半島

方面の石灰石は品質も良好でなく、又埋藏量も多くないので、將來に備へて調査の結果、北部國境の振戸山附近に極めて良好且莫大な埋藏量に達する石灰石が存在することを発見した。しかし非常に不便な場所でなく、開採に着手する時期に立ち到らなかつたが、樺太に於けるセメントを自給すると共に、石灰の自給をも爲す意図の下に、昭和十九年八月敷香に樺太セメント工業株式会社が創立せられ、同社の附屬採石場として之を開採することとなり、石灰山の採掘施設を進め、一部採掘に着手すると共に、東海岸鉄道終点古屯より採石場に至る約五十軒の輕便軌道工事を進捗中であつた。

二、其の他の鉱業

(イ) 水 銀

大泊郡女麗附近には水銀の砂鉱床が存在し、極めて最近に至り、樺太開發株式会社の子会社たる樺太水銀鉱業株式会社（資本金百万円）で探鉱事業に着手してゐたが、未だ予定の出鉱を見るに至らなかつた。

(ロ) ベントナイト

樺保炭礦の炭層下磐に極めて優良なベントナイト層の存在を発見したので、之を採取し、乾燥、粉碎して、石鹼原料、塩代用品、煉炭粘結剤等として供給すべく、樺保炭礦株式会社が樺保に工場を建設中であつたが、操業開始を見るまでに至らなかつた。

(ハ) 耐火粘土

白浦炭礦の炭層下磐に厚さ約一米の極めて耐火度の高い、耐火粘土層の存在を発見したので、之を採取し、耐火粘

土を製造すべく、南樺太炭礦株式会社が白浦に工場を建設中であつた。

第十八章 工業

第一節 総説

樺太は天然資源特に水産、林産等の粗原料が豊富である上に、助成原料である石炭は殆んど無盡藏と稱せられたが、工業の發達は特殊の大規模企業及飲食品工業を除いては概して立ち遅れの状態であつた。これは人口が稀薄で労働者が高く、又資本の缺乏及交通の不便等に基因するところが大きかつた。しかし最近に於ては本島の資源は漸く一般識者の認めるところとなり、企業家の視聽を惹くと共に、労働者の渡來する者漸次増加して來、殊に太平洋戦争勃發後樺太に於ける自給自足態勢の強化が要請されるに及び、各種工業勃興の氣運に向ひ、着々工業化の過程を進みつゝあつた。

今樺太の工業發達の沿革を辿れば、先づ酒類釀造業及水産罐詰業が起つたが、本格的な工業としては森林の利用が第一に着目され、明治四十三年樺太廳に臨時工業調査所が設けられ、附屬工場を大泊に設置し、松脂からテレビン油製造、樟腦製造、木材乾餾、パルプ製造等の試験研究が行はれ、四十四年には豊原にも乾餾工場を設けて白樺其の他潤葉樹を乾餾して醋酸、石灰、木精及タールを製造して島外に移出したことがあつたが（本事業は大正六年に民営に移されたが、同八、九年の經濟界の変動に依り化學製品の價格が下落したため、工場の維持困難となり、大正十年に

閉鎖するの止むなきに至つた）大正三年末に三井合名会社に依つて針葉樹を利用するパルプ工場の操業開始を見たのが、一大時期を劃して本島後日の隆盛を齎す契機となつた。更に近年本島産石炭は試験分析の結果液化事業に好適なことが判明し、昭和十年に石炭低溫乾餾工業が開始され、次いで本島産甜菜の工業化が企てられ、昭和十一年より製糖工場の操業が開始された。又本島特有の資源であるツンドラ利用の工業が昭和十四年に起り、特に太平洋戦争勃發後は機械器具の製作修理、造船等の機械工業及ゴム、タンニン剤等の化學工業等が勃興し、又セメント、製塩の如き大工業も操業開始の運びに立ち到つてゐた。尙寒天、味噌、醬酒、酪農等の飲食工業は古くから起り、又近時窯業も盛んになりつゝあつた。

しかして工業生産額は大正四年に於ては各種生産総額九、四三四、二三四中二、二二六、五七二円を占め、水産額の六、〇六一、二四八円に次いで第二位であつたが、同六年には生産物総額二七、五九八、五五三四中其の五割即ち一三、六七九、九〇七円を占めて第一位に躍進し、爾來引続き生産物総額中の首位を保持し、年に依り消長はあつたが、昭和元年には三四、一〇四、六四三円に達し、同五年には約倍増して六四、二四〇、五六三円となり、同十年には八二、四二二、一五一円、同十二年には一億円を突破し、同十五年には遂に二億円を超える盛況を示したが、同十六年には稍々減じて一八六、七三八、三六〇円となつたとは云へ、依然として生産物総額三七九、九五三、一九六円の約五割を占めてゐた。

工業物中の太宗は古くは水産罐詰及酒類であつたが、大正四年以降はパルプ及製紙が筆頭となり、同年に於ける工業額中に占める割合は未だ僅かに二割五分に過ぎなかつたが、翌五年には五割に達し、其の後年と共に其の比重を高

めて、昭和十六年に於ては九割近くを占めるに至つた。尙最近に於ける主要生産物の生産額は別表第四十七表及第四十八表の通りであり、之に依れば、パルプ及製紙に次いで酒類の生産額が多く、昭和十三年に於ては更に水産罐詰、砂糖、石炭乾餾製品、バター等の順位であつたが、同十六年に於てはパルプ及製紙、酒類に次ぐものとしては石炭乾餾製品、バター、砂糖等であつた。

第二節 パルプ及製紙工業

樺太に於けるパルプ製紙工業の創設に關しては、明治四十一年頃から熱心に研究が続けられ、明治四十三年に至り三井合名会社は人を瑞典へ派遣して樺太材の試験研究を行つた結果、大泊にパルプ工場を建設のことに決定し、大正二年三月其の建設に着手し、翌三年十一月竣工、十二月操業を開始した。これが我國に於けるサルファイトパルプ工場の嚆矢であつた。次いで大正四年九月には泊居に樺太工業株式会社のパルプ工場の操業開始を見たが、時恰かも歐州大戰でパルプ及紙の輸入が杜絶し、紙價の昂騰はパルプ工場建設の氣運を促進し、爾來大正六年一月には王子製紙株式会社豊原工場、同年四月には日本化学紙料株式会社落合工場、大正八年には樺太工業株式会社眞岡工場、大正十年には王子製紙株式会社野田工場、大正十四年には樺太工業株式会社恵須取工場、大正十五年には富士製紙株式会社知取工場がそれ〴〵操業を開始するに至つた。尙落合工場に於てはクラフト紙の需要激増に對應し、苦心研究の結果工場の増築を行ひ、大正十三年九月之が製造を開始したが、これ我國に於けるクラフト紙製造の嚆矢であつた。

大正三年に操業を開始した大泊工場は其の後王子製紙株式会社に譲渡され、又日本化学紙料株式会社落合工場は大

正十一年六月富士製紙株式会社に合併されかくして樺太に於けるパルプ工場経営は一時王子製紙、富士製紙及樺太工業の三社鼎立の状態に在つたが、昭和八年五月三社の合併に依り、爾後王子製紙株式会社の單獨経営となつた。此の間昭和六年十月より大泊工場は不況のため一時休業したが、同八年八月より再び運轉を開始した。しかして我國人造纖維事業の勃興に伴ひ、昭和十年には日本人絹パルプ株式会社が敷香に工場を設けるに至つたが、同社も其の後王子製紙株式会社に吸収されるに至り、かくして王子製紙株式会社は資本金三億一千万円を擁し、島内九箇工場を運轉してパルプ及紙の製造に當り、昭和十三年に於ける生産額はパルプ二六三、五九三噸、七四、六八一、〇六九円、紙一八一、一三三噸、五二、六二一、〇〇三円に達し、又昭和二十年現在に於ける生産能力はパルプ四六九、四〇〇噸、紙二二三、五二〇噸であつたが、太平洋戦争勃發後、輸送力の制限と硫黄其の他主要副原料の入手困難のため操短を余儀なくせられ、大泊工場は昭和十九年一月休業し、泊居工場は製塩工場に轉換せられやうとしてゐた。しかして昭和十九年に於ける生産額はパルプ一八一、一〇〇噸、紙一四三、一〇〇噸に激減し、又昭和十九年十一月二十八日現在の製品滞貨量はパルプ五二、八三〇噸、紙一一四、八一〇噸であつた。(別表第四十九乃至五十一表參表)

第三節 石炭液化工業

パルプ及製紙工業に次いで樺太に於ける國家的産業として、発展の道程にあつたのは石炭液化工業であつた。しかしながら本工業の操業は比較的新しく、三菱鉱業株式会社の傍系たる南樺太炭礦鉄道株式会社(資本金千万円)が同社経営の西海岸内幌炭礦の附帶事業として、昭和十年四月石炭低溫乾餾工場の運轉を開始したのに始まり、昭和十

八年八月には帝國燃料興業株式会社の子会社たる樺太人造石油株式会社（資本金四千万円）が内濶に於て石炭低溫乾餾法及直接液化法の併用に依る液化工場の一部操業開始を見るに至り、頗る將來の發展を刮目されてゐた。

内幌に於ける低溫乾餾工場の操業当初に於ける規模は、独逸ルギ会社の特許に係る内熱式低溫乾餾炉一日原料炭処理能力約百六十五噸のもの二基を備へ、一年間約十萬噸の低溫乾餾を行ひ、約五萬噸のコーライト、約七千五百噸の重油、約九百噸の揮発油其の他ビッチ、コークス、パラヒン等を産出することになつてゐた。同工場は其の後三菱石炭油工業株式会社（資本金二千万円）に引継がれ、昭和十五年末には石炭処理能力二十六萬噸に拡張され、同十七年に於ける生産実績は二十四万二千余噸の石炭を処理して揮発油二、五一五噸、重油九、八八九噸、輕油二、三九一噸、コーライト一、三三三、一六一噸、パラヒン六八五噸、ビッチ五、四二六噸、クレゾール一八八噸、其の價額合計六百八十二万二千余円を得、其の成績甚だ良好であつた。爾來同工場は引続き毎年順調に操業を続け、揮発油及輕油は主として島内の需要に充て、其の他の製品は内地方面に移出してゐたが、戦争の終期に近づくに従ひ、船腹不足が原因として海上輸送が出来なくなり、遂に終戦時には約十萬噸のコーライトを貯藏するに至つた。又内濶に於ける低溫乾餾及直接液化工場に於ては航空揮発油、自動車揮発油、輕油、重油等約十五萬噸の製油を爲さうとするものであつて、昭和十九年度に於ては低溫乾餾炉八基の内四基が完成して操業中であり、約二十五萬噸の石炭を処理して揮発油約二千五百噸、重油約二万三千噸、合計約二万五千五百噸の製油を爲す外、副産物として半成コークス約十五萬噸を製造し、製品は内幌工場と同様処理する予定であつたが、之亦船腹不足が原因して終戦時には約七萬噸のコーライトを貯藏するに至つた。尙三菱石炭油工業株式会社及樺太人造石油株式会社の両者は昭和十九年十月帝國燃料興業株式会社（資本金二億五十萬円）に吸収合併されるに至つた。

第四節 釀造業

領有後日本人の移住に伴つて先づ釀造業が起り、明治四十年末には既に酒類製造工場四十一、其の釀造高は濁酒を合せて四、三二五石を算した。しかがしなら酒類の供給は其の大部分を主として内地及北海道に仰がねばならない状態が長く続いたが、運賃の高價と輸送に多数の日子を要する關係で、結局島内で釀造する方が價格も低廉なので、釀造業は漸次發展を遂げ、設備の改善と技術の向上に依つて品質も向上し、一面人口の増加に伴つて生産量も逐年増加し、又一般の嗜好向上に伴ひ、濁酒の如き劣等酒は漸次減少し、清酒、焼酎及酒精含有飲料等内地に比して遜色ない醇良品を生産するに至つて、移入酒は次第に防遏され、昭和十年度に於ては釀造場四十五、造石数七二、三八二噸、價額三百二十五万七千余円に達し、更に同十六年度には釀造場五十一、造石数一〇三、六六三噸、價額一千三百二十七万九千余円の多額に上り、パルプ及製紙事業に次ぐ重要産業となつた。

主要なる会社企業としては昭和十二年に王子製紙株式会社の子会社として樺太酒精工業株式会社（資本金五百萬円）が設立されて、パルプ廢液を原料として酒精を製造するに至り、合成清酒釀造原料にも供せられるに至つた。同社は後に王子醱酵株式会社（資本金五百萬円）と改称され、最近に於ける生産実績は酒精八、八〇〇石、粘結剤六二三噸、木華油二〇三石であつた。しかして合成清酒製造企業としては樺太製藥株式会社、樺太酒精株式会社、興北酒造株式会社等があつたが、此等の会社は昭和十九年四月合同して、昭和酒精株式会社（資本金四百五十萬円）を創立した。

又清酒生産原料米の移入は昭和十四年以降漸減されるに至つたので、最近に清酒醸造業の整備が図られた。

第五節 製材業

建築材、鉄道用材等島内用材の需要増加に伴ひ、製材業の経営者数も次第に増加し、大正十二年には四十六工場、製材能力原本九四九、〇〇〇石に達した。従来製材は單に島内の需要を充たす程度であつたが、一時関東大震災の影響で移出の激増を見、非常な活況を呈したこともあつたが、昭和九年末には工場数六十一、従業員七百十六人、製材価額二百二十万四千余円となり、昭和十八年に至つて六十九工場を統合して樺太製材株式会社(資本金七百五十万円)が設立され、製材の一元的強化が図られた。

第六節 製糖業

樺太に於ける甜菜の栽培が有望なことが確められ、昭和十年七月甜菜を原料とする製糖事業が樺太製糖株式会社(資本金五百万円)の創立によつて開始されたが、其の後漸次他作物の價格昂騰を招來し、加ふるに労力の不足は本作物の如き集約的栽培を必要とするものを次第に忌避するの風が増大し、甜菜の栽培面積も漸減するに至り、原料買上價格の引上、栽培者に対する各種助成金の増額等が行はれたのにも拘らず、減反の一途を辿り、同会社の経営も困難に陥り、昭和十三年の砂糖生産額は百五十五万九千余円であつたが、同十六年には六十六万一千余円に減少し、会社の維持が困難となつたので、昭和十九年には同会社の改組が断行され、資本構成上農家と有機的連繋が図られ、又其

の名称は樺太興農株式会社と改められ、製酪事業をも同会社が一元的に經營することゝなつた。

第七節 罐詰業

罐詰業の主たるものは蟹罐詰であつて、明治四十年製造を開始して以來、漸次勃興し、大正元年の生産高は七十余万円に達して、工産物の首位を占めたが、大正四年以來パルプ工業の開始と共に第二位に落ちた。即ち同五年の生産高は二百三十五万余円でパルプの二百五十二万余円に相次ぎ、同六年には三百三十七万余円に達して、輸出品の王座を誇つたが、其の後蟹の漁獲減少の傾向を示したため、同八年には二百四十七万円に減じて、遂に醸造業にも凌駕されるに至り、同九年には蟹罐詰工場の合同と製品の統制が断行され、同十年の生産高は七十九万余円に激落するに至つた。しかし其の後は昔日の盛況を恢復するに至らなかつたが、却て健全な發展を辿り、鱒罐詰等の製造も盛んになつて、昭和十年には三百三十八万余円の生産額を挙げるに至つたが、翌十一年には百十七万余円に急落し、同十三年には再び二百五十万余円に恢復したが、以來余り振はなかつた。

第八節 酪農業

酪農業は大正末期より本格的に始まり、各地に酪農組合が設立され、乳牛の増加と共に、バター生産も増加し、昭和十六年末現在の製造場数は十二、其の生産額七九六、八六六円、其の内バターは一八一、八七四疋、七六九、八三七円、チーズは九、三二九疋、二四、六七九円であり、此等の製品の大部分は内地に移出された。尙酪農業は昭和

十九年より酪農組合その他二、三企業体の統合吸収を見て、樺太興農株式会社の一元的経営とされるに至つた。

第九節 ツンドラ工業

ツンドラは樺太特有の資源であり、幌内川、多來加湖地方のツンドラ泥炭乾物の蓄積推定量は七億九千万匁とせられ、之が利用に關しては、明治四十二年以來、研究が重ねられた結果、漸く昭和十四年四月敷香に資本金百万円の樺太ツンドラ工業株式会社が創立され、ツンドラを原料として粘結剤、活性炭、ツンドラ板、ツンドラ粉末、活性炭用纖維素等を製造することとなり、昭和十七年度にはツンドラ板二五一、五八六枚、ツンドラ粉末六二、六二九貫を生産し、同十八年三月には資本金を四百万円に増資し、鋭意事業の發展に努力中であつたが、不幸にして同年十月工場が焼燼し事業上大蹶跌を來した。

第十節 其の他の工業

昭和十三年樺太廳統計書に依れば、同年に於ては以上に挙げた工業の外、銑鉄鑄物業一、建築用及家具用金物製造業四、内燃機關製造業十、船具製造業四、造船業九、其の他の機械器具製造業十三、セメント製品製造業一、工業藥品製造業四、植物性揮発油製造業一、魚油製造業二、建具及家具製造業七、其の他の木製品製造業二、醬酒、味噌及食酢製造業五、清涼飲料製造業三、水産品製造業五、冷蔵業一、澱粉製造業十八、製麵業一、菓子、パン及水飴製造業四、印刷業三十を数へたが、(従業者五人以上を使用する工場に付調査) 何れも中小工業の域を出でず、又何れも

少数の例外を除き、僅かに島内消費の一部を充足する程度で、各種工業の發達は未だ幼稚たるを免れなかつた。しかしながら其の後、特に昭和十六年以後に於ける工業の振興には著しいものがあり、各種工業の勃興を見たが、今其の主なるものを示せば次の通りである。

一、鉄工業

イ、樺太農機具製販株式会社(昭和十七年設立、資本金七十五万円)

農業用機械器具の製作修理、馬車馬桶の製作修理を目的とする。

ロ、王子工作株式会社(昭和十八年設立、資本金二百万円)

航空機及自動車の修理、部分品其の他一般機械の製造を目的とする。

ハ、樺太造船株式会社(昭和十八年設立、資本金二百万円)

機帆船、艇、漁船の製造修理を目的とする。

ニ、樺太中央鉄工所(昭和十八年設立)

各種鉄工業用機械器具の製作修理、再生銑鉄の製造を目的とする。

二、化学工業

イ、樺太ゴム工業株式会社(昭和十七年設立、資本金六十万円)

ゴム靴、地下足袋、布靴、合羽、手袋、再生ゴム等の製造を目的とする。

ロ、樺太水産化学工業株式会社(昭和十八年設立、資本金百二十五万円)

海藻類を原料とし塩化加里、アルギン酸、ソーダ、マンニツト及沃度製造を目的とする。

ハ、樺太産業株式会社（昭和十九年設立、資本金五十万円）

製紙副産物等を原料とし染料、グリース、クレンザー、石鹼並びに煉瓦等の製造を目的とする。

ニ、樺太セメント工業株式会社（昭和十九年設立、資本金五百万円）

差当り原石年間十二万噸を採掘し、セメント六万噸、農業用石灰六千噸の製造を目的とする。

ホ、樺太塩業株式会社（昭和二十年設立、資本金六百万円）

製塩量年一万二千噸、苦汁二万九千石の生産を目標として操業準備中であつた。

ヘ、其の他建設中のものにウインター油、粗製グリセリン、切削油、洗濯石鹼、洗料、粉末石鹼の製造を目的とする工場、ゼラチン、カルシウム、膠の製造を目的とする工場及タンニン剤を製造する工場があつた。

三、繊維工業

興亞産業株式会社（昭和十六年設立）

イラ草繊維、マニラ麻再生ロープ、繩の製造を目的とする。

四、窯業

イ、樺太窯業株式会社（昭和十六年設立）

家庭用陶磁器等の製造を目的とする。

ロ、樺太開発株式会社（昭和十六年設立）

煉瓦及土管等の製造に当つた。

ハ、南樺太炭礦株式会社（昭和十九年着工）

耐火煉瓦、モルタル、耐火物等の製造を目的として建設中であつた。

第十九章 電氣事業

第一節 総説

樺太に於ける電氣施設としては、明治四十一年に陸軍守備隊が発電機を設置して営舎内に電燈を点火したのが嚆矢であり、同四十三年守備隊の引揚と共に其の運轉が休止されたが、同年資本金十萬円の樺太電氣合資会社が創立されて、右発電所の貸下を受け、豊原市街一円に電燈の供給を爲したのが、電氣供給事業の濫觴であつた。次いで大泊、真岡等にも電燈供給事業の開始を見たが、當時は漁業の外見るべき産業なく、従つて人口稀薄で電燈の需用少く、事業の経営は容易ならぬものがあつた。大正三年に大泊にパルプ工場が創設されて以來、各地にもパルプ工場が建設されて、工場の動力及燈用として自家用の電氣施設が勃興し、其の發電余力を以て電氣事業の兼営或は之より受電して供給事業の経営が行はれ、且人口の増加と共に往年の需用不足に依る経営難は漸次緩和されるに至つた。しかし此等業者の中には事業が小規模であつて、業績も振はなかつたものが多かつたので、昭和三年樺太電氣合資会社の後身たる樺太電氣株式会社（資本金五百萬円）の出現以來、小規模業者は漸次之に統合されるに至つた。尙石炭鉱業の發展と共に炭礦に於ける自家用電氣施設も次第に増加した。

樺太に於ける發電設備は全部火力發電であつて、しかも其の施設者は殆んどすべて製紙業者及炭礦業者の占めると

ところで、又發電電力量の約九十三パーセントは此等の事業に消費され、一般供給事業の需用量は僅かに七パーセントを占めるに過ぎなかつた。即ち昭和十八年度に於ける総發電力一一九、四一三キロワット中製紙業者の發電力七八、八八〇キロワット（全体の六十六パーセント）、炭礦業者三二、九八二キロワット（同じく二十七パーセント八）、石炭油化業者六、一〇〇キロワット（同じく五パーセント一）、其の他の自家用發電力一、二八〇キロワット（同じく一パーセント）であり、一般供給業者の發電力は僅かに一七一キロワット即ち全体の〇、一パーセントに過ぎなかつた。又同年度の総消費電力量三七二、六八〇キロワットアワー中製紙業者の消費電力量は二四二、六六七キロワットアワー（全体の六十五パーセント）、炭礦業者九〇、四六三キロワットアワー（同じく二十四パーセント）、石炭油化業者一二、九〇七キロワットアワー（同じく三パーセント四）、其の他の自家用消費電力量一、九九七キロワットアワー（同じく一パーセント）で、一般供給業者の供給に係る消費電力量は僅かに二四、六四八キロワットアワー、即ち全体の六パーセント六であつた。これ樺太に於ける電氣事業が所謂開發電力と称せられた所以であつて、又以て樺太に於ける産業の実情を窺ふに足るものがあつた。

しかしながら電燈普及の状況は僻陬の豊山漁村の小部落を除き、主要部落には概ね滲透し、たゞ電力の需用のみは主要市街地を出でない状況であつた。

かくの如く供給事業は殆んど全く自家用電力の余剰電力に依存してゐる実情であつたが、各自家用電氣事業者の発電設備は割拠分立の状態であつて、常時電力の相互融通に於て円滑を欠くは勿論、設備の重複濫立等經濟上改善を要する点が尠くなかつたので、發送電及配電の一元的統制を図るため、昭和十八年四月、資本金八百萬円の樺太配電

株式会社が設立され、樺太電氣株式会社を始め既存電氣供給事業の全部を之に統合し、同社をして新規電源の開発、送電網の整備を行はしめ、又家用発電所間の送電連絡を緊密にし、相互融通を期せしめることゝなつた。

しかして電源の開発については、樺太廳に於ては火力発電の外、將來水力電氣の開発の必要を認め、昭和十八年度より二二、二〇〇キロワットの電源拡充を目途として重要河川に付、鋭意調査を進めつゝあつた。

尙電氣料金は人口の密度低く、小都邑各地に点在する關係上、電氣事業としての能率頗く悪く、又勞賃及建設費の割高に基因し、内地及他の外地に比し、高價なるを免れなかつたが、事業の改善及統制に依つて、漸次低減されつゝあつた。樺太配電株式会社供給に係る電氣料金は昭和十八年に於て電燈定額十六燭光一ヶ月一円五錢、從量一キロ時当り二十三錢、電力は一キロ時当り九錢であつた。

第二節 電氣供給事業

明治四十三年始めて樺太に電氣供給事業が開始されてから、大正六年迄の間の電氣事業開業地は豊原、大泊、眞岡及泊居の四市街で、當時は領有日尙浅く、人口稀薄であつて、電燈の需用極めて少く、電氣料金は相当高額であつたが、採算上之が経営は頗る困難であり、爲に経営者は頻繁に変更された。

大正七年より昭和二年迄の間は本事業の勃興期であつた。即ち歐洲大戰の果、各地にパルプ工場の建設を見、又虫害木急速処分による木材事業の勃興等で、島内經濟界に急激な好況を齎し、人口亦著しく増加して、電氣の需用向上し、往年の経営難は漸次緩和されると共に、電氣事業の前途を有望視し、各地に之が計畫を爲す者が現れ、此の期間

に事業の開始を見たものは二十一の多きに達した。しかして昭和二年末に於ける電燈の需用戶数は二一、〇七一戸、総戸数四四、三二三戸の約半数であつた。

昭和三年に至り、樺太電氣株式会社が創立され、次第に各地の電氣事業を買収し、全島の配電区域三十四箇町村中二十六箇町村は同社の營業区域として統制されるに至つた。しかして同社は極力設備の改善を図り、能率の悪い発電所は之を廢止して他より受電し、或は能率の良い新式のものに變更し、又既設送配電線路を改修して、主要市街には晝間配電線を新設又は増設し、更に農漁村部落にも配電する等電氣の普及を図ると共に、電氣料金の低下に努力した結果、昭和十三年末に於ける電燈需用戶数は三五、三〇八戸、総戸数六五、三八八戸の六割近くに達した。尙昭和十八年四月に至り、発送電及配電の一元統制に當る樺太配電株式会社が設立された。

第三節 家用電氣施設

家用電氣施設は主として製紙事業用、鋳業用及石炭油化工業用のものであつて、製紙事業用の電氣施設は大正三年十二月に大泊パルプ工場に汽力発電所が設置されたのが嚆矢であり、其の後製紙事業の發展と共に、各地に之が建設を見た。又鋳業用の電氣施設は大正七年六月川上炭礦に汽力発電所が設けられたのを始めとして、其の後炭礦事業の好況に伴ひ、各地に之が施設の実現を見、坑外用の電燈電力は固より、機械採炭の普及につれ、坑内にも電氣設備が設けられるやうになつた。此等家用発電所は大正十一年末所数七、発電力七千キロワットであつたが、昭和五年末には所数十七、発電力四七、六五一キロワットとなり、同十三年末には所数四十、発電力八一、四一六キロワット

に達し、同十八年の発電力は一一九、二四二キロワットで、其の内六分程度を一般供給用に賣電してゐた。

第二十章 商業

第一節 総説

樺太の領有と共に商業者は各種の商品を携帯して渡來し、主として上陸地点である大泊に於て天幕を張り、又は仮小屋を設けて商店を営み、又料理店、飲食店、貸座敷等の業者の渡來するものも多かつた。明治三十八年八月二十一日現在の來島者五百六十七名中商業者は八十名を占めてゐた。其の後大泊、豊原及眞岡の各地には自然市街が形成され、營業者も次第に増加するに至つたが、明治四十二年に大泊港が開港となり、貿易を行ふやうになつてから、面目に一新し、次いで大正十一年二月、眞岡の開港を見、尙港灣の修築、鉄道の開通、道路の新設等に伴ひ、商業も益々隆昌の傾向を示した。当初は新領土の通弊として、所謂一攫千金を夢想し、浮薄なる商業者の渡來するものが頗る多かつたが、爾來幾多の經濟界の変動はかゝる不健全分子を駆逐し、着実な商業者は漸く其の基礎を確立するに至つた。しかしながら樺太の商業は全く水産業、パルプ工業或は石炭鑛業等に依存して急激に發展した寄生的性格が強いので、従つて例へば鯨の豊漁不漁の如き自然現象や、パルプ工業の如き經濟界の変動に極めて敏感に影響され、属々浮沈を免れなかつた。

尙十三年末の商業戸数は一〇、三四〇戸で、総戸数六五、三八八戸の一割強、同人口は二八、〇六二人で、総人口

三三九、三五七人の一割弱で、其の内訳は商業的職業一八、九三二人、接客業八、七三八人、金融保険業三九二であつた。

第二節 物資及物價

樺太は鋼材、セメント、繊維製品、其の他の工業製品、食糧等主要生産財及消費財の全部又は大半を内地よりの移入に依存し、（註一参照）専ら内地に対してパルプ、製紙、木材、石炭、海産物、海産肥料等を移出してゐた。従つて移入品については運賃諸掛等の割高、運送途中の危険負担の高率性等に基因し、内地に比し物價水準は二割程度高位にあり、又島内生産品についても、賃金其の他建設費等の割高（註二参照）のため、特殊のものを除き勢ひ原價高を免れなかつたが、取引は常に円滑に行はれ、統制経済時代に入つても比較的よく低物價政策が堅持された。

（註一） 例へば食糧の如きも昭和十九年度移入計畫に依れば、米穀、小麦粉、食用油及煉粉乳は所要量の全部、砂糖は約五割、味噌及醬酒は約八割を内地より移入することゝなつてゐた。

（註二） 最近に於ける樺太の協定賃金と北海道の公定賃金との比較は次の通りであつた。

イ、工場職工	二割九分高
ロ、鉾山鉾夫	三割三分高
ハ、工場日傭勞務者	二割六分七厘高
ニ、鉾山日傭勞務者	一割四厘高

ホ、土木建築勞務者	二割八分七厘高
ヘ、貨物取扱勞務者	二割六分七厘高
ト、林業勞務者	一割八分三厘高

第三節 商業團體

本島の主要市街地には夙に商工會議所類似の經濟團體が設置せられ、専ら商工業の改善發達に努めて來たが、大正十一年九月に至り、商業會議所法が施行されて、前記團體に代つて商業會議所が設立され、昭和三年一月商工會議所法の施行に伴ひ、商工會議所と改称せられ、又商工會議所の連絡協調機關として樺太商工會議所聯合会が設置されたが、更に昭和十八年三月商工經濟会法の施行に依り同年十月、樺太商工經濟会が設立され、又重要市街地には其の支部が置かれるに至つた。

又昭和十五年九月、商業組合法が施行されて、商業者の協同組合として生活必需品小賣商業組合、商業組合聯合会等の設立を見たが、同十八年商工組合法の施行に伴ひ、新に同法に基いて各地に配給統制組合が設立され、尙昭和十九年に至つては、統制会社令に基く各種配給統制会社の設立を見るに至つた。

第二十一章 産業試験

明治四十年貝塚に種畜場を設け、種牡牛馬を北海道より購入して優良種畜の生産育成を図ると共に、並川に仮農事試験場を設け、適種適作物の試験調査を試みた。之が即ち本島に於ける農事試験事業の濫觴であつた。越えて同四十年前者は樺太廳種畜場、後者は樺太廳農事試験場と改称され、同四十四年小沼に両場相次いで移轉されたが、農事試験場は大正元年更に並川の附屬農園に本場を移した。其の後本島の農業経営は有畜農法に即せしめる必要があるに鑑み、大正七年六月種畜場を農事試験場に合併し、小沼を其の分場とすると共に宇遠泊の農事試験農園を分場に改め本場の所在地である中部地帯と其の自然條件を異にする西海岸地帯の農事試験に当らせた。大正九年に至り並川の農事試験場は再び小沼に移轉され、後に至つて試験部門を追加拡充して農事、畜産及化学の三部が設けられた。

水産に關しては明治四十一年十月西海岸樂磨に樺太廳水産試験場が設けられ、主として水産製造に關する試験調査が行はれたが、大正七年其の試験事業を拡充し、從來の製造部に加ふるに漁労、養殖の二部を置き、又同十三年保恵に翌十四年多蘭泊に各附屬淡水魚増殖試験場を設けて各種の試験研究及調査が行はれた。

次に林業に關しては明治四十二年樺太廳に臨時工業調査所が設置され、大泊に松脂工場、豊原に木材乾餾工場を設け、主に林産製造に關する工業的試験が行はれたが不幸にして所期の成果を見ないで大正五年之を廢止するに至つた。一方天然更新及人工造林に關する試験は大正元年豊原の近郊大沢の試験林で開始されたが、偶々大正八、九年頃

マツケムシの發生猖獗を極めたのと、数次の山火に襲はれた結果、遂に所期の目的を達せず、中止されるに至つた。しかし大正十三年再び森林経営に關する試験調査が計畫され、東海岸保呂に試験林を設け、天然林に關する各種の試験調査を行ふと共に他方大沢試験林の虫害山火跡地に人工造林に關する試験が実施された。

かくして農事畜産、水産並びに林業等に關する、試験調査の事業は各別の機關に於て行はれて來たけれども、其の規模は概ね狭少であつたので、昭和四年九月此等の機關を統合して樺太中央試験所が創設され、農事、畜産及林業に關する試験部門は、之を小沼に置き、水産に關する試験部門は引続き樂磨に分置し、宇遠泊旧分場は之を宇遠泊農事試験支所と改める等、試験研究の陣容が整備された。更に昭和十二年一月惠須取に農事試験支所が開設され、同十三年三月には化学工業部が新設され、本島特殊工業資源の開発利用に關する試験研究が開始され、又同十六年五月保健部の新設を見て、本島の自然的條件に適應する衣食住の生活様式創建のため試験研究が開始され、同時に敷香に支所を開設して東海岸北方の特殊地域に於ける農事、畜産及林業に關する調査試験及研究が開始された。しかし最近に於ける中央試験所の経常費は年額約六十万円であつた。

以上各種産業試験に依つて挙げられた成績については専門的事項に亘るので之を省略するが、本島産業開發に貢獻したところは極めて多大であつた。

第二十二章 金融機関

本島に於ける金融機関としては銀行の外、産業組合、無盡業、質屋等があつた。しかして銀行は後述の如く夙に北海道拓殖銀行が進出して次第に島内枢要の地に店舗を設けて一般銀行業務を行ふに至り、本店銀行としては大正五年に樺太銀行が創立され業務を営んだが、昭和十六年には同行は北海道拓殖銀行に吸収合併されるに至つた。産業組合は大正四年以來設立され、庶民金融機関として銀行の手の及ばなかつた分野に進出して顯著な發展を遂げ、無盡業、質屋等も資力信用薄弱な一般庶民に金融の便を與へる上に寄與するところがあつた。尙島内資源の開發を推進するたため、昭和十六年に樺太開發株式会社が設立されて、開發資金の供給に當つた。

一、銀行

領有直後、北海道拓殖銀行は政府の命に依り中央金庫事務の取扱を爲す傍ら、預金及爲替業務を行ふことゝなつたが、当時一般銀行業務は行へなかつたので、本島の拓殖資金の供給に對しては全然沒交渉の状態であつたので明治四十年同行後援の下に泰北銀行支店を樺太に設置して一般銀行業務を行はさせた。明治四十四年に至り北海道拓殖銀行法の改正に依り、同行の營業区域は樺太にも延長されることになり、大正三年四月には樺太に於ける泰北銀行の業務全部を繼承し、爾來同行は主要市街地に支店を設け、一般普通銀行業務、不動産漁業榨工場財團等の各種担保貸付、農業者漁業者等の十人以上の連帶貸付、公共團體各種組合に對する貸付の外預金部地方資金の取扱を行ふ等、拓殖資

金の供給に多大の貢獻をした。

本島に於ける産業資金の供給を円滑ならしめる目的を以て、樺太廳の補助を得、大正三年五月設立された樺太金融株式会社は同五年十月定款を変更して、資本金五十万円の樺太銀行を創立し、商業銀行としての業務を開始するに至つたが各種産業の發展に伴ふ資金の需要漸次多きを加へて來たので、同八年三月資本金を二百万円に増加し、本島唯一の本店銀行として經濟界の發展に盡すところがあつたが、昭和十六年十一月金融機關一元化の趣旨に依り解散の上、北海道拓殖銀行に業務を譲渡するに至つた。

右の外本島に於ける唯一の貯蓄銀行として、大正十一年四月北門貯蓄銀行（昭和十四年二月北海貯蓄銀行と改称）が支店を豊原に設置して、島民貯蓄心の向上に努めると共に庶民金融に當つた。

尙昭和十六年末に於ける銀行貸付及預金額は別表五十二表の通りである。

二、産業組合

産業組合は大正四年豊原に信用組合が設立されたのが嚆矢であつて、当時銀行資金は一部少数者に利用せられるのみであつて、一般需要は充たされなかつたので、一般金貸業者の金利は自然高利となり、普通月四歩乃至五歩の間にあり、漁期中特殊の場合は月六歩乃至七歩に上るやうな状態であつたので、産業組合の数は年と共に増加し、大正十四年には産業組合聯合会の設立を見るに至り、其の後益々普及し、殊に昭和十四年十月以降は逐次全農村に遍く組合の設立を見、其の事業成績も近年顯著な進展を示してゐた。しかして昭和十六年末に於ける産業組合総数八十五中信用業務を扱ふものは七十七を算し、其の貯金及貸付金はそれ〴〵一四、七八八、三三〇円及九、五八六、一三四円で

あつた。

三、無盡業

無盡業は大正十年頃より始められ、昭和四年末に於ては業者数四十一、資本金二百二十余万円、給付金契約額一千九百余万円の多きに達したが、庶民金融機関としての重要な使命に鑑み、昭和六年四月無盡業法の施行と共に整理が行はれ、同十六年末現在の業者数は五、資本金二百六十二万余円、給付金契約高五百十五万余円であつた。

四、質屋

私営質屋は夙に庶民金融機関として各地に於て相当利用せられ、又公益質屋は昭和七年以來設置され、前者に比し遙かに低利なので、庶民階級の福利増進に與つて力があつた。昭和十六年末現在に於ける私営質屋数五十六、其の年間貸付高六十七万八千余円、又公益質屋は三を算し、貸付高十三万三千余円であつた。

第二十三章 樺太開發株式会社

樺太の開發は領有以來官民不斷の努力に依り漸次其の成果が挙げたけれども、尙其の前途は遠きものがあり、之が急速開發は多年の懸案とされてゐた。しかしながら一般に収益率の比較的高くない、事業の經營は民間のみの資本に俟つことは到底困難であり、かたゞ樺太の産業經濟は各種事業を綜合的、多角的に經營することに依つて、始めて其の健全な發達を期することが出來ると考へられたので、此の目的のために昭和十六年七月樺太開發株式会社が創立されるに至つた。同社は資本金五千万円で、政府及民間が半額宛出資し、政府出資中には南名好所在の石炭鉦区（評價額二百五十万円）を含んでゐた。又民間出資は樺太に事業關係を有する会社に割当てられ、其の一部は会社設立後樺太在住希望者に公開賣出された。尙政府の持株は後配株とされた。しかして本会社の事業種目は（一）鉦業、林業、農業及畜産業、（二）農林畜産物の加工事業、（三）經濟開發のため必要な資金の供給、（四）以上各項に附帶する事業、（五）其の他經濟開發のため必要な事業と定められてゐたが、差当り直營事業として石炭採掘事業、斫伐事業、造林事業及農牧場經營事業の外、逐次殖民事業、海獸獵獲加工事業、窯業等に着手し又開發資金の供給については北海道拓殖銀行の業務との調整上、株式引受に依る投資を行ふこととし、水産、鉦工業、農畜産、電氣、造船、製塩等各種産業に投資し、其の総額約一千五百数十万円に及んだ。しかして以上の資金調達のためには拂込金額の三倍迄樺太開發債券の發行を認められ、且社債額面五千万円までは政府に依つて其の元利支拂の保証を與へられた。

然るに本会社は創立匆々にして太平洋戦争の勃発と共に経済事情の急激な変化に遭遇し、事業の経営に頗る困難を感ずるに至り就中資金の梗塞、資材労力の不足、輸送力の逼迫等のため当初計畫の遂行は甚だ容易でなかつた。

次に本会社の直営事業の概況を述べれば次の通りである。

一、石炭採掘事業

本会社の鉱区は政府が現物出資した南名好鉄区であつて、本鉱区は昭和十五年四月封鎖炭田区域から除かれて樺太廳所有となり、東洋拓殖株式会社が請負つて採掘準備の一部を進めてゐたものを引継いだもので、当初年産百万吨を目標として起業を開始したが、昭和十六年末以來戦争の影響に依る極端な配船不足に加へて、炭層調査の結果、斷層褶曲意外に多いことが發見されたため、当初計畫を大縮少し、年産二十万吨を目標の下に、之が建設資材、労力等は島内に於ける遊休資材、余剩労力等を振向けることとして、動力設備、運炭設備、選炭場、積込設備、建物設備等の一切を完成し、採炭作業も四坑口に於て堀進及採炭が順調に進み、昭和十八年度の出炭目標六万四千吨、同十九年度十五万吨、二十年度二十万吨を予定してゐた。しかして昭和十九年上期に至る迄の出炭高合計は十三万二千余吨であつた。

二、斫伐事業

王子製紙造林及官行斫伐については従前通り引続き行はれたが、炭礦業者、木工場等の行つてゐた造材事業は一括本会社が行ひ、木材利用の合理化、價格の調整及配給の円滑を図ることとなり、之がため樺太廳より毎年林木の拂下を受けて、丸太材として島内炭礦、製材工場其の他に対する供給に當つた。各年の造材狀況は昭和十六年七十六万六千

余石同十七年七十一万八千余石で、予定量を遙かに下廻る成績であつた。然し其の附帶事業として行つた、木炭生産事業は相当好成绩を収めた。

三、造林事業

本事業も時局の關係上予定計畫を縮少せざるを得なかつたが、植栽、苗圃とも比較的良好の成績を収め、昭和十九年上期末現在の苗圃事業成績はトドマツ、エゾマツ及グイマツの播種面積二六、二八二平方米、床替面積七六、四二七平方米に及び、又植林成績はトドマツ、エゾマツ、信州唐松の植林面積一、七四〇町歩、植栽本數四百十九万二千本に達した。

四、農牧場の経営

急速な食飼料の増産に寄與するため、昭和十七年以來各地に農牧場を開設し、何れも飼畜機械化農牧場として、鋭意遊休未開地を開発すると共に、樺太に適合する家畜の積極的増産を圖つた。

五、殖民事業

昭和十九年より殖民事業を実施することとなり、四箇所に百一戸の移民を入地せしめて之が指導に當り、拔根開懇より共同畑の耕作迄略々予定通り進捗せしめ、尙基本施設として開拓民訓練所の建設を始め、畜舎、住宅等の建築を完成させた。

六、海獣事業

昭和十九年九月子会社たる樺太海獣興業株式会社の事業全部を譲受けて、海獣獵獲並に之が加工事業を經營し、十

九年度に於て臘肉獸三万頭を獵獲した。

七、窯業

本島内の住宅其の他建築物改善の一助に資するため窯業に着手し、煉瓦工場は労務者の不足に禍ひされ、昭和十九年中の生産高は目標たる煉瓦三百万個の約六割に過ぎなかつた。又土管工場は同年九月より生産を開始したが、同様労務者不足のため月産僅かに四千本に過ぎなかつた。

八、投資事業

本会社は昭和十九年現在に於て樺太製材、樺太興農、樺太漁業、樺太水産、樺太配電、樺太火薬工業、樺太水産化学工業、樺太造船、樺太セメント工業、樺太水銀鋳業、樺太農機器製販、帝國燃料興業及樺太石炭統制の諸会社並びに樺太農学会及水産学会に投資し、其の後更に樺太塩業株式会社に投資する等其の総額約一千五百数十万円に達した。

第三部 交通及通信

第二十四章 交通

第一節 総説

島内交通施設の主なるものは道路、鉄道、港湾、航路、自動車等であるが、露領時代に於ける道路は僅かに森林の一部を伐開して漸く通行する位の所謂踏分道路で、道路として見るべき価値なく、日本の占領と共に軍用道路が開鑿され、漸く一部に車馬の交通を見るに至つた。更に樺太廳の設置以來、道路の開鑿に力が注がれた結果、年を逐ふて道路網の拡充改善を見るに至つた。

鉄道は占領と同時に軍需品輸送のため陸軍鉄道部隊が急設した大泊、豊原間の輕便鉄道を以て嚆矢とし、軍政廢止後樺太廳で此の軍用鉄道に改善を加へ、更に線路を延長し、其の後地方鉄道も敷設され、一應の整備を見つゝあつた。

本島産業の發達に伴ひ内地との交通が頻繁になつたので、内外交通の重要機関たる連絡港の設備を完成するため、大正初年以來、大泊、本斗、眞岡及敷香諸港の修築に意を注ぎ、最近に至り更に恵須取港の修築に着手するに至つた。

た。又沿海に於ける小汽船及漁船の繋留と避難所の施設のために、船入瀬も逐次築造された。

港湾の修築と同時に航路網の整備に努め、大正十二年稚内、大泊間の連絡航路が開始され、翌十三年には稚内、本斗間の連絡航路、同十五年には大泊、真岡、小樽、青森間の連絡航路の開始を見るに至り、本島の航運は年と共に発達し、又樺太廳は命令航路を設け、年々補助金を交付し、島内奥地に寄港の増加を図つた。

又道路の開鑿改修が着々行はれるにつれ、自動車の利用は逐年増加し、次第に各地に自動車線が開通し、尙交通機關の不充分な辺陲の地方には古くから駅通制度が設けられ、郵便物取扱や旅行者の宿泊、人馬の供給等運輸交通の便が図られた。

しかしながら之を大観するに樺太に於ける交通施設は未だ不備なるを免れなかつた。即ち道路の東西二條の縦貫線に配するに四條の東西横断線を幹線とするのみで、鉄道も亦東西両海岸線と一條の東西横断線を主要とするに過ぎなかつた。更に海陸連絡施設として大泊、真岡、本斗、恵須取及敷香の五港があつたけれども、恵須取は工事中であつて、未だ港湾の形態を備へるに至らず、敷香も未だ本格的港湾施設は備はらず、真岡及本斗は一應港湾としての形態を備へたけれども、尙改善を要する点多く、ひとり大泊港だけが比較的に整備してゐる程度であつた。

第二節 道 路

露領時代には道路として稍々見るべきものとしては大泊より豊原を経て北上し、内路より北樺太オノールを経てアレキササンドルフスクに至る幹線道路の外二、三小路の通するものがあつたに過ぎなかつた。しかも其の構造粗惡で

あつて、且幹線道路と雖も大半は荒廢し、降雨の際は交通全く杜絶する状態であつて、之が改修に關しては領有後創始的努力が拂はれた。

領有後拓殖の進展、人口の増加と共に各種事業が勃興するに従ひ、道路の普及は益々緊要となつたので、年々新道を開鑿すると共に旧道を修築し、次第に道路網の普及発達を見るに至り、又主要市街地には漸次道路舗装が施されるに至つた。本島は地形上道路の設定は勢ひ海岸線に依らざるを得ないので、幹線道路の配置は東西両海岸の縦貫線と之を連結する横断線に分たれた。しかしして本島の路線は右幹線の外、官公署所在地、樞要都邑等を連結するため幹線より分岐した路線及農村殖民部落を連結する農耕道路より成つてゐた。昭和十三年末現在に於ける主要道路の延長は二、五二六軒、農耕道路は三、三九二軒、排水溝は二、九三三軒、又橋梁総数は八八二其の内コンクリート橋五五其の他は殆んど木橋であつた。

尙明治四十年で以降昭和十六年度迄に道路開鑿改良のために投ぜられた國費の累計額は一六、八〇四、四七九円に達した。

第三節 鉄 道

一、國有鉄道

本島に於ける鉄道は、明治三十九年九月陸軍鉄道大隊が軍需品輸送のため大泊、豊原間に軍用輕便鉄道を敷設したのに始まり、此の軍用輕便鉄道は、同四十年四月樺太廳に引継がれ、同年八月より一般營業を開始するに至り、爾來

之に改善を加へると共に新線が建設され、又地方鉄道を買収するに至つたので、昭和二十年現在に於ける國有鉄道の營業路線は五、其の延長七〇五杆一（海岸支線三、其の延長四杆九を含む）に達した。

尙昭和十七年十一月末現在に於ける車輛数は機関車九二、客車一三二、貨車一、四四一、雪掻車二四、合計一、六八八台で、其の従業員数は三、六〇七人であつた。

今各營業路線について説明を加へれば、

イ、東海岸線（大泊港―敷香間及落合―榮浜間 三四二杆四）

本線は大泊、豊原間の軍用輕便鉄道に端を發し、明治四十三年十一月軌間三呎六吋の普通鉄道に改築され同四十四年十二月には豊原より北上して榮浜に至る新設工事が竣工した。しかして昭和三年には大泊突堤竣工に伴ひ、海陸連絡の便を図るため大泊港駅が新設され、同年十一月より大泊港、大泊間が開業し、又同十六年三月には落合、敷香間の樺太鉄道株式会社線を買収して、東海岸全線の一元的運営が実現された。尙榮浜、榮浜海岸間には海岸支線があつた。

ロ、敷香線（敷香―古屯間八三杆八）

北方開發の重要性に鑑み東海岸線の延長として敷香、上敷香間は昭和十六年十一月一般營業を開始し、更に氣屯、古屯間が昭和十八年度に、次いで上敷香、氣屯間が同十九年度に竣工して、全線が開通するに至つた。

ハ、川上線（小沼―川上炭山間二二杆九）

東海岸線小沼より分岐して西北方炭山に至る鉄道で、島内家庭用、工業用炭の輸送を主とし、大正三年四月小沼、

奥川上間が開通し、奥川上、川上炭山間は同十一年十月三井鉱山株式会社に依つて敷設されたものであるが、同十四年二月同社より樺太廳に無償譲渡されるに至つた。

ニ、豊眞線（豊原―牛井間八三杆八）

首都豊原と西海岸の要地眞岡とを連結する接路に当り、中間に鬱蒼たる大森林と留多加川流域の豊饒な殖民地を擁し、拓殖上重要な使命を有する路線であつた。大正十年起工、同十四年十月豊原、鈴谷間、同十五年十一月牛井、逢坂間の開通を見、更に昭和三年九月鈴谷、逢坂間を開業し、其の全通を見るに至つた。

ホ、西海岸線（本斗―久春内間一七三杆二）

西海岸南部の要地本斗より眞岡、野田、泊居を経て久春内に至る區間であつて、從來西海岸の交通は海運を主とし、たけれども、沿岸各地の著しき發展に鑑み、大正七年起工、同九年十月本斗、眞岡間の營業を開始し、同十一年十月眞岡、野田間、昭和四年十二月眞岡海岸支線、同五年六月野田追手間、同年十一月追手、泊居間、同年同月本斗海岸支線、更に昭和十二年十二月泊居、久春内間の開通を見るに至つた。尙久春内、惠須取間一四四杆九は昭和十二年より建設に着手されたが、同十七年に至り工事を中止された。又建設中であつた惠須取鉄道株式会社の惠須取線は昭和十九年に樺太廳に買収された。

以上國有鉄道の運輸成績については拓殖の進展、人口の増加、線路の延長等に依り、之が利用は逐年増加し、殊に
大正十二年五月より鉄道省の稚内、大泊連絡航路、同十三年十月より北日本汽船株式会社の稚内、本斗連絡航路、更に同十五年四月より北日本汽船株式会社及日本郵船株式会社の大泊、眞岡と小樽、青森間の航路を経由し、鉄道省線

との連帯運輸が開始せられるに及んで、本島内地間の交通は一層繁くなり、又大正十五年十月南樺鉄道株式会社線、昭和二年十一月樺太鉄道株式会社線及同六年十月南樺太炭礦鉄道株式会社線の開通に依り、此等とも連帯運輸の便を図るに至り、業績は次第に向上し、昭和九年以降は利益を生ずるに至つたが、昭和十六年には赤字経営の樺太鉄道株式会社線を買収したので、却て欠損を生ずるに至つた。

しかし昭和十三年度の運輸成績は旅客百九十二万八千余人、手小荷物取扱約三千五百題、バルブ、木材、石炭等の貨物取扱百四十四万二千余題に達し、其の營業收支は客車、貨車、自動車其の他雜收入を含めて収入額三、六八二、〇四八円、之に対して支出額三、二〇一、六九一円で、差引利益四八〇、三五七円であつた。又昭和十六年度の營業收支は樺太鉄道を買収したため、収入額七、二一九、四八四円に対し支出額八、五三四、六九九円で絶対額はそれぞれ増加したが、差引一、三一五、二二五円の欠損となつた。

尙明治四十三年度以降昭和十六年度迄に鉄道に投ぜられた國費の累計額は建設費三五、三四九、七一八円、改良費二〇、四〇一、〇一九円に上り、樺太廳拓殖事業費中首位を占めた。

二、地方鉄道

樺太に於ける地方鉄道は何れも其の性質上幹線たるべき位置にあり、本來國有として敷設すべきものであつたが、國家財政の都合上一時に之を促成することが出来なかつたので、一時民間企業者に代行させる意圖を以て免許されたものであつた。即ち大正十五年には南樺鉄道株式会社（資本金百二十万円）の南樺線一九六（新場―留多加間）が開通、昭和二年には樺太株式会社（資本金千万円）の樺鉄線二四七五（落合―敷香間、但し当初は落合―知取間、

昭和五年に知取―南新間、同十一年に南新間―敷香間の開通を見た）が開通、六年には南樺太炭礦鉄道株式会社（資本金千万円）の本斗―内幌炭山間一六六の開通を見、更に同十八年より樺太人造石油株式会社の内淵線二三五（大谷―川南間）が開通した。又建設中の惠須取鉄道株式会社の惠須取鉄道株式會社の惠須取線一八六（惠須取―大平間及惠須取―藻原音間）は昭和十九年に樺太廳に買収された。

しかし樺太廳は地方開發の重要性に鑑み、樺太鉄道株式会社及南樺鉄道株式会社に対し、大正十二年以來補助金を交付して來たが、前者は東海岸縦貫線として交通網の基幹に属するので、昭和十六年に至り樺太廳に買収されるに至つた。

今、現存地方鉄道について若干説明を加へれば、

イ、新場、留多加線

本鉄道は大正十五年十月開通を見、南樺鉄道株式会社の経営に係り、沿線には留多加川流域の農耕適地を擁し、開通當時は鬱蒼たる森林に囲まれ、バルブ原木輸送上の重要路線とされた。

ロ、本斗、内幌炭山線

本鉄道は南樺太炭礦鉄道株式会社の手に依り昭和六年に開通し、主として石炭輸送のために設けられ、後に三菱石炭油工業株式会社（資本金二千万円）に譲渡され、更に昭和十九年十月には帝國燃料興業株式会社に譲渡されるに至つた。

ハ、内淵線

本鉄道は内淵炭田の開発と人造石油工場の建設に伴つて樺太人造石油株式会社に依つて計画され、昭和十八年に開通を見たが、同十九年十月同じく帝國燃料興業株式会社に譲渡された。

三、軌道

本島に於ける軌道は大正十三年頃始めて敷設され、交通機関未發達の時に於て交通の要具として重用されたが、交通機關の整備と共に何れも營業不振に陥り、残存したものは僅かに三井鉱山株式会社の經營に係る内川軌道（内川―敷香間一六軒三、昭和十一年七月開業）のみであつた。

第四節 港灣及航路標識

本島の海岸線は極めて屈曲に乏しく、天然の良港は甚だ少かつた。露領時代は何等港灣施設は見られないで、全然放任の状態に置かれた。領有後大泊、之に次いで真岡には早くから簡單な海陸連絡設備が設けられたが、汽船の接岸を目的として重要港灣の修築は大正五年に着工された本斗港を以て嚆矢とし、同九年には大泊港、同十年には真岡港次いで昭和九年には敷香港、同十四年には惠須取港の着工を見、大正五年度以降昭和十六年度に至る迄の樺太廳港灣修築費は二五、〇五四、六六六円に達した。以上主要港灣の外地方港及漁港にも称すべきものに船入洞があり、沿海航行の小汽船及漁船の繫留並びに避難所として沿革樞要の地に築設され、樺太廳船入洞修築改良費は大正十一年度以降昭和十六年度に至る迄に於て七、四〇七、九二〇円に達した。

又航路標識は露領時代に於ては僅かに一ヶ所の燈台を有するだけであつたが、領有後各所に燈台が建設され、燈標

燈竿等も施設されるに至り、出入船舶は年々増加するに至つた。

今主要港灣の概況を述べれば次の通りである。

一、大泊港

本港は亞庭灣の北隅にあつて、本島の咽喉を握し、北海道及本州との連絡の要衝に当り、且魚族豊富な亞庭灣沿革一帯の商業中心地に位し、又政廳所在地たる豊原を始めとし、鈴谷、留多加、内淵等各河川流域の農耕地帯を控え、加ふるに埋藏量豊富な川上、内淵炭田を背後に擁し、此等産業の開発と相俟つて一般貨物の中継港並びに石炭、パルプ製紙類の移出港として最も重要な港灣であつた。

本港は大正九年度以降修築工事を施され、港灣設備最も整備し、新旧両埠頭に合計五千噸級四隻、三千噸級五隻、二千噸級二隻の接岸可能となり、雜貨七十萬噸を処理することが出来たが、未だ防波堤の施設なく、泊地の靜穩を確保し得ない欠陥があつたので、昭和十八年度以降防波堤工事を施行中であつて、之が完成後は雜貨九十七萬噸を処理し得る見込であつた。尙昭和十六年中に於ける入港船舶一、六一六隻、八五三、二三九噸、乗降船客は乗込人員一二九、三六〇人、上陸人員一二七、五八五人であつた。

二、真岡港

本港は西海岸の中央部より南に偏し、西海岸に於ける交通産業の樞要地点に位し、附近は水産業の中心地として商業が頗る盛であり、水産物、製紙類の大量貨物を始め、一般貨物の吞吐港として本島有数の重要港であつた。尙昭和十六年中に於ける入港船舶は一、九七三隻、一、二四四、六二六噸に達し、乗降船客は乗込、上陸それぞれ約一万六

千人であつた。

三、本斗港

本港は西海岸南部の要港であつて、本島唯一の完全な不凍港に属し、沖合には約二軒の岩礁が略々海岸に平行して露出し、天然の防波堤を形成してゐるので、天恵の少い本島港湾中最も地形に恵まれ、又沿海には夙に沖合漁業が発達し、漁船の出入頻繁であり、尙南部炭田の開発と共に石炭低温乾留事業の創業を見るに及び、此等生産品、水産物並びに一般物資の吞吐港として港勢著しく發展した。尙昭和十六年中に於ける入港船舶は九八一隻、三〇二、三八一噸、乗降船客は乗降船客は乗込人員三六、六六三人、上陸人員四七、六三六人であつた。

四、敷香港

本港は北方に多來加灣を擁し、幌内川河口に臨む東海岸北部の要港であつて、夙に木材の移出港として著名であつたが、次第に奥地産業が開発せられ、又人絹パルプ工場の設立を見るに及び、港勢は躍進的發展を遂げ、尙陸上交通機関の整備に依る後方地域の拡大に伴ひ物資の集散益々増加の趨勢にあつたが、未だ港灣としての本格的施設は備はつてゐなかつた。尙昭和十六年中に於ける入港船舶は一六九隻、二四九、八二九噸、乗降船客は乗込人員五九三人、上陸人員一、一九六人であつた。

五、恵須取港

本港は西海岸北部地方の開発拠点として、産業交通の中心地であるのみならず、殊に昭和十三年頃以來背後地帯に於ける石炭鉱業の殷賑に伴ひ、之が積出港として益々重要性を加へるに至つたので、昭和十四年に一万噸級四隻、六

千噸級二隻を繋岸し、石炭四百万噸、雜貨五十万噸、木材十二万噸の処理能力ある港灣の修築に着手し、爾來工事中であつた。昭和十六年中に於ける入港船舶は八五一隻、五五一、二二五噸、乗降船客は乗込人員四七、五五八人、上陸人員五四、一六四人であつた。

第五節 航 路

本島の海運は領有以來産業の開発並びに各種の施設と相俟つて逐年隆盛に向つたが、殊に大正十二年稚内、大泊連絡船が運航されてから急速の進歩を爲し、翌十三年には稚内、本斗連絡、同十五年には大泊、眞岡と小樽、青森間の船車連絡が開始せられるに至つた。大正五年の入港船舶は三、四八二隻、二、〇四三、〇八九噸であつたが、同十二年には四、六三七隻、四、四四二、一五八噸となり、昭和元年には一一、五〇五隻、六、七三一、六三〇噸に達し、同三年には一四、九〇四隻、八、三三四、二七六噸といふ未曾有の記録を出したが、昭和十六年に於ては一二、一八六隻、五、九九二、三八六噸であつた。しかして以上の如く發展の途上にあつた本島海運も太平洋戦争の勃發後は船腹不足のため、次第に不振に陥るに至つた。

一、命令航路

命令航路の主たるものは樺太廳命令航路で、樺太廳は奥地の開発、人口の増加、物資の集散等の現況を調査し、命令航路に年々補助金を交付し寄港地を増加しつゝあつたが、此等の航路は内地起点、北海道起点及島内沿岸の三つに大別することが出来た。内地を起点とする航路中大阪を起点とするものは東廻西海岸線、(大阪、恵須取線)東廻東

海岸線、(大阪、敷香線) 東廻湾内船(大阪、大泊線) 及西廻西海岸線(大阪、真岡線) の四線であり、裏日本を起点とするものは北陸東海岸線(伏木、敷香線) 及北陸湾内線(敦賀、大泊線) の二線で、別に北陸西海岸線(伏木、恵須取線) があつたが、昭和九年度以降北鮮雄基まで延長され、北鮮北陸西海岸となつた。次に北海道を起点とするものは函館を起点とする西海岸線(函館、安別線) 及東海岸線、(函館、能登線) 小樽を起点とする西海岸線(小樽、須取線) 及東海岸線(小樽、敷香線) の外、北海道北端と西海岸を連結する本斗、稚内線があつた。又島内沿岸線としては西海岸に真岡、安別線、恵須取、安別線及本斗、白主、海馬線があり、東海岸に敷香、遠内線、敷香、能登線があり、湾内に大泊を基点として湾内の東西両海岸を航行する航路があつた。尙大泊湾内では碎氷船をして冬期結氷期間中船舶の海陸連絡のため、大正五年より碎氷に従事させてゐた。しかして以上島外を基点とする命令航路には内地の汽船会社が当り、島内沿岸線は専ら島内運輸会社が之に當つてゐた。昭和十六年度中に命令航路に就航した船舶は三十五隻、総噸數五三、八四九噸、其の航海回数一、一九二回、乗客人員一九三、九八〇人、取扱貨物一、〇〇〇五六九噸であつた。

其の他命令航路として、樺太に來航するものに通信省及朝鮮總督府の命令航路があり、前者は函館又は小樽を起点として真岡、恵須取等に往復し、後者は仁川を起点として内地を経て大泊、真岡迄延航された。又別に鐵道省連絡線は大正十二年北海道宗谷本線の全通を機として汽船二隻を以て稚内、大泊間を夏期毎日、冬期は隔日に運航してゐた。

二、自由航路

命令航路以外に内地樺太間及島内沿岸を航行して物資の輸送に當る定期自由航路は何れも夏季だけ就航し、奥地の開發に伴ひ其の運航回数も年々多くなつてゐたが、日支事變以來、不定期船の來航が頗る増加し、其の多くは夏季に於て石炭、木材或は特殊貨物の運送を主とし、其の出入は太平洋戰爭勃發までは逐年増加の趨勢にあり、其の取扱數量は巨額に上つた。

第六節 自動車其他

拓殖の進展、道路の開設に伴ひ、各地に乗合自動車線が開通し、交通極めて頻繁となり、奥地と雖も交通の不便を應ずることがないやうになつた。又陸上小運送機關としての貨物自動車も年と共に増加したが、太平洋戰爭後、官公衙、重要工場、炭礦、農業會等特に必要と認めるもの以外の貨物自動車は全面的に統合されて樺太を四地区に分け、一地区一事業者として四会社の設立を見るに至つた。(豊原陸運株式会社、樺太東北運輸株式会社、樺太西南運輸株式会社及恵須取陸運株式会社) 尙昭和十九年十一月現在に於ける貨物自動車台數は六一八台であつた。

更に交通機關不備の僻地の地方に於ける物資の輸送及一般旅行者の便益に資するためには驛通制度が設けられ、必要の箇所に驛通を設置して旅行者の宿泊、人馬の供給及郵便物の繼立等に備へることとし、明治三十八年先づ大泊、豊原間に之を設け、爾來交通機關の整否、開發の程度其他諸般の事情を斟酌し、適當に普及改廢が行はれ、昭和十六年末現在の驛通數は三十三であつた。

第二十五章 通信

第一節 総説

本島に於ける通信事業は領有当時野戦郵便局に於て野戦郵便事務の外普通郵便事務の一部を、又軍用通信所に於て軍事通信の傍ら公衆電報を取扱ひ、更に電話は軍用通信所及主要官衙に設置せられたのに端を発した。

明治四十年四月軍政廃止と共に、樺太廳に於て在來の通信機關全部を継承し、郵便局の設置、逓送集配の改善、電信電話の拡張改良等に努めたが、長足の進歩を遂げて内地に劣らぬ施設を見るに至つたのは、大正十一年以降の積極的努力に依るものであつた。尙明治四十年度より昭和十六年度迄の電信電話拡張及改良費の累計額は七、五六五、五一三圓であつた。

第二節 郵便

樺太廳始政当初に於ける島内の郵便逓送施設は頗る微々たるもので、鉄道郵便線路は大泊豊原間一線、通常郵便線路は僅かに六線で人夫送を主とし、又水路郵便線路は本島内地線（函館—小樽—大泊—真岡）及本島沿岸線（東廻線及西廻線）の二種に區別され、冬季に入ると沿岸線は中絶し、本島内地線だけとなつた。然るに道路の改修、鉄道

の敷設等交通機關の整備と共に逓送方法の改善、逓送回数が増加が図られ、昭和十六年度末現在に於ける逓送線路は鉄道便六九〇軒、自動車、車馬又は馬橋送便七三五軒、人夫送便三七三軒となつた。又水路便も線路実数一、七四三軒に達し、島内相互間の連絡は四月以降十一月迄樺太廳命令船路に依つて逓送され、本島内地間の連絡は鉄道省連絡航路（稚内、大泊間）及樺太廳命令航路（稚内、本斗間）に依り逓送された。

郵便物の集配は拓殖の進展及人口の増加に伴ひ、年々集配区域の拡張並びに集配回数の増加が行はれたが、郵便物の集配は内地と異なり、道路の設備が不充分なものが多いため、冬期酷寒又は吹雪等の際は甚しく困難を極めた。

尙北樺太に往復する通常郵便物を北緯五十度線の國境に於て、日蘇兩國間に交換することが、昭和二年二月より実施され、爾來毎年凡そ十二月から三月迄の間に、最初は毎週木曜日、後に至り月、木曜日の二回交換が行はれた。

尙郵便物取扱増加の趨勢を示せば別表第五十三表の通りである。

第三節 電信

一、有線電信

樺太内地間の有線連絡は、樺太廳施政当初は札幌、豊原線だけであつたが、明治四十年八月小樽、真岡線が増設され、越えて大正九年十二月札幌、大泊間に増設を見、島内の傳送系統も自然三分され、内地電報の疏通は著しく緩和された。昭和四年に至り設備、人員等の関係より豊原局集中主義を採り、大泊局の対札幌線は豊原に移された。其の結果、小樽、真岡線は西海岸の主要部分と北海道の密接な關係を有する地域間とのみに縮小せられ、其の他はすべて

豊原局へ集中され、其の後施設の拡充と共に、対内地通信は頗る順調となつた。又島内各局を連絡する回線は豊原局を根幹として通信網を形成し、遂に北は國境附近より南は亞庭灣口に達するに至つた。

日露連絡電信については大正三年五月サガレンに於ける電信連絡に關する日露協定が締結され、同年十一月より豊原、アレキサンドロフスク間に電報の送受を開始するに至つた。其の後歐洲戦争の終る頃、露國內に革命が起り、自然通信休止の状態になつたが、大正十四年ソヴィエト聯邦政府が樹立されるや、同年五月より日蘇連絡通信の復活を見た。

二、無線電信

本島の開發に伴ひ、沿岸各地へ物資の移入又は魚肥、木材等本島特産物積取のため來航する船舶は年々多くなり、加ふるに沿海州方面に航行する船舶も漸次増加したので、此等船舶の通信を媒介するため、大正十年八月大泊に無線電信分室が設置され、爾來北海航路に對し貢獻するところ尠からざるものがあり、又海底電信線の障碍若しくは輻輳の際に於ては一般電報疏通の補助を爲して來た。しかしながら年々電報の増加に伴ひ通信輻輳するに及んで、一朝海底電信線の障碍發生せんか、大泊無線のみでは内地との連絡が不安を感じられるに至つたので、昭和六年八月豊原に最新式の短波無線電信機を裝置して、専ら樺太内地間電報の疏通を図ることとなつた。更に其の後西海岸北部炭田の開發に伴ひ、惠須取にも無線局が設備されるに至り、又島内無線連絡のため、敷香、真岡等にも無線施設が設けられた。

三、利用狀況

しかして本島の住居は殆んど領有後内地より移住した日本人なので、内地とは密接な關係を有し、又島内は地勢及交通の關係上郵便を以てしては急速所用を弁じ得ない不便があるので、此等の理由に依り、個人間の消息は固より商取引には必然的に電報を利用することが多く、其の取扱増加の趨勢は別表第五十四表の如くである。

第四節 電 話

一、電話通話

本島に於ける市外電話施設は領有当時軍事上の必要に依り、各軍用通信所又は主要官衙間に施設したのに始まり、樺太廳施政当初は之をそのまゝ繼承したもので、市外電話を取扱ふ郵便局は僅かに豊原、大泊、真岡の三局に過ぎず他は支廳又は支廳出張所、部落に依つては巡查駐在所等を接続してあつた。ところが地方開發の進展と共に、次第に拡張整備され、昭和十年度に於ける市外電話回線は豊原を中心として、延長四千五百余軒に達する狀況で、西は安別より白主迄、東は散江より亞庭灣頭に至るまで殆んど普及しない所はなかつた。尙官廳用電話の外、私設電話は交通通信機關の充分でない山間僻地等で相当利用された。

二、電話交換

本島の電話交換施設は軍政時代に大泊及豊原に於て各軍衙並びに御用商人等の間に電話を架設し、当該通信所の手により取扱はれたのが其の濫觴である。樺太廳施政と共に軍より引繼を受けた施設を以て一般公衆を加入させることとなり、其の後各地に交換業務が開始され、加入者数も年々増加し、昭和十六年度末に於ける加入者数七、一二一名

に達した。尙公衆電話は大正八年豊原駅前設置したものを嚆矢とし、漸次主要市街地の要所に設置された。

三、内地連絡電話

内地と樺太とを声で連絡する要望は久しい間続けられたが、遂に昭和九年十二月より一般通話が開始され、従来島内のみに限定されてゐた声の交換が遠く北海道及内地各府縣とも出来ることとなり、通話區域の拡張と共に、漸次取締増加の傾向を示してゐた。

四、利用状況

以上電話利用増加の趨勢を示せば、別表第五十五表の如くである。

第五節 放送

放送無線の施設は國民生活上欠くことの出来ない文化施設で、社會各般の進歩發達は之に俟つところ大なるものがあるが、本島には最近まで放送局の設置がなかつたため、遙か内地の放送を聴取しなければならない状態であり、従つて器具高價であるのみならず、之が受信に多大の困難を感じて居つたが、官民の熱心な要望と日本放送協會の努力の結果、昭和十五年五月以來工事に着手し、同十六年十二月より豊原放送局の發足を見るに至り、聴取戸数は昭和四年僅かに八二六戸に過ぎなかつたのが、同十六年度末には二〇、五三八戸に達した。

第六節 爲替及貯金

本島は金融機關の普及が充分でなかつたため、預金及送金の郵便局を媒介するものが頗る多かつた。

一、郵便爲替

島民の日用品は大部分内地から供給を受けたため、之に対する送金と、出稼人が内地へ送金する關係上、拂渡に比して振出が口数、金額とも圧倒的に多く、昭和十六年に於ける振出口数は八二〇、四七一〇口、金額五七、一七四、〇三五円に対し、拂渡口数三三五、四九〇口、金額二五、四一六、三〇四円であつた。

二、郵便貯金

領有当初は永住の目的で渡來する者比較的少く、勤儉貯蓄の美風に乏しく、僅かに官吏等の俸給生活者が一時的預入をする位のもので、郵便貯金の取扱が甚だ振はなかつたが、其の後本島の開發につれて、永住する健全なる思想が發達し、漸次貯蓄心が涵養され、且最も確實な貯蓄機關であるため、郵便貯金を利用する者年々増加し、昭和十六年度に於ける預入口数一、九八七、六六〇口、金額五四、八二六、三三七円、拂戻口数三七一、二二三口、金額三九、八一七、八三七円、しかして同年度末現在の預入口座数四八〇、〇四九、貯金額五〇、五一〇、四八一円であつた。

三、郵便振替貯金

事業資金の運轉に振替貯金を利用する者が漸次増加したのみならず、代金引換郵便及集金郵便の取立金も大部分振替口座拂込とするのが確実なので、簡便な送金方法として普く利用されるやうになり、郵便爲替の領域を侵すの觀さへあつた。昭和十六年度に於ける拂込口数六七九、七六三口、金額三六、六二二、四三三円、拂渡口数五四、二二五〇口、金額四一、〇七〇、一八九円であつた。

第七節 簡易生命保險及郵便年金

簡易生命保險の取扱は大正十五年十月より開始され、更に昭和六年十月より小兒保險も実施され、爾來事業は頗る好調を保ち、昭和十六年度現在の契約件数二四七、五二三、保險料二八五、九九四円、保險金額六一、七〇二、一五二円であつた。又郵便年金も昭和三年十月より実施され、漸次事業の進展を見、昭和十六年度末現在の件数二、七七四、年金額四六九、六五五円であつた。

しかして簡易保險積立金の一部は各種社会公共事業資金として地方に還元され、開始初年の昭和二年度より同十六年度末に至る貸付高累計は一〇八件、三、七五三、四〇〇円に達した。又被保險者福祉施設として各地に簡易保險健康相談所が開設され、輕費診療に従事する外、交通不便な僻陬地に至るまで巡廻健康相談を実施し、昭和十六年度に於ける四ヶ所の健康相談所に於ける患者取扱数は一二三、五四三人、一ヶ所当り一日平均取扱数は一〇九人であつた。

第四部 文 化

第二十六章 概 説

本島の住民の大半は領有後北海道及各府縣から渡來した移住者を以て構成せられてゐるので、内地の文化がそのまま移植され、政治、經濟の制度は固より教育、社会制度、宗教、風俗習慣に至るまで、本島固有のもとして特記するほどのもの又は特色あるものは一つもなかつた。しかして本島は我國文化の中心から可なり離れてゐるので、多少文化に遅れてゐるところもあつたが、一方新興の殖民地であつた關係上、住民の出入も繁しく、中央方面との交渉も多かつたので、それ等の刺激を受けて距離の遠隔な割合に進歩を示してゐた。

領有当時の移住民は概して移動性に富み、一攫千金を夢みて渡來した者が多くて、隣保相助の美しい隣人愛といふものが薄かつたが、次第に内地の延長として地方制度も整ひ、学校、公会堂等も設けられ、社会教育や社会事業の施設も施され、墓地までも選定されるに至つたので、島民は安堵し、此処を墳墓の地と落着いて活動するやうになり、過去に於ける殖民地的氣分は漸次薄らぎ、淳朴敦厚な人情を醸成しつゝあつた。

しかし本島の住民は全國各地方から集合してゐるので、衣服や冠婚葬祭の如きも其の趣を異にしてゐるものが多かつたが、風俗は大體北海道、奥羽地方と変りがなかつた。尙近年生活程度が向上するに従ひ、男女の服裝や頭髮其の

他の装飾の如きは内地の近代都市と余り異なるところがないやうであつた。又住宅の建築様式も近年大に進歩し、旧式の本造住宅は漸次減少し、最新式の様式に依る堅牢なコンクリート式の建築物も多くなりつゝあつた。

かくして樺太は施政四十年に及び教育は初等教育、中等普通教育、実業教育及専門教育の諸学校が概ね普及し、青年團、博物館の他の社会教育施設も次第に整備され、更に社会的事象の複雑化と共に社会事業も漸く發達するに至つた。又衛生設備も漸を追ふて備はり、衛生思想の普及發達も市街地に於ては意を強うするに足るものがあつた。

第二十七章 教 育

第一節 総 説

明治三十八年本島占領と共に渡航者相踵ぎ、豊原、大泊、眞岡の三地方は忽ち市街を形成し、学齡兒童も亦漸く多きを加へて來たので、翌三十九年此等の市街地に小学校が開設され、樺太廳設置と共に廳立に移管された。一方各地に私立の簡易教育所乃至小学校が相踵いで設置され、かくて廳立、私立相並んで教育の普及が図られたが、大正九年に至つて全部公立に統一され、教員給は金額國庫負担とし、物件費は町村支弁とすることになつた。初等教育が漸く普及するに及び、中等普通教育機關設置の必要を生じ、男子教育のために明治四十五年大泊に廳立中学校が創立され、次第に各地にも之が設立を見るに至つた。一方女子教育のためには大正四年大泊に私立女学校が設立され、同五年には豊原に廳立高等女学校の創立あり、其の後各地にも次第に高等女学校が設立されるに至つた。

初等教育の普及と共に之が教員の養成が必要とされるに至り、大正七年小学校男子教員養成機關が大泊中学校に附置され、又女子教員養成機關としては同九年豊原高等女学校に教員講習所の附設を見たが、昭和十四年に至り、此等を統合した樺太師範学校が創立されるに至つた。

実業教育としては昭和四年以來各地に公立実業補習学校の設置を見、又同九年には農業の指導啓発に当る中堅人物

養成の目的を以て廳立拓殖學校が設置され、同十五年には更に鉱工業の發展に対応し、廳立工業學校の設置を見るに至つた。尙前記実業補習學校は後に至つて実業學校に昇格された。

更に青年教育に於ては昭和十四年に從來の公私立青年訓練所が青年學校に改められ、又青年學校教員養成のため、昭和十六年に青年學校教員養成所が樺太師範學校に附設されたが、同十九年には樺太青年師範學校の創立を見るに至つた。

尙又樺太廳豊原医院には医学講習所が附設されてゐたが、昭和十八年五月には同病院を附屬医院とする樺太医学專門學校の誕生を見た。

かくの如く學校教育は逐年整備を見るに至つたが、一般民衆に対する社会教育の必要も痛感されて、各地に男女青少年團の設置、講習会の開催、博物館及圖書館の開設等社会教育施設も漸次備はりつゝあつた。

第二節 學校教育

一、初等學校

昭和十九年度に於ける學校数は初等科のみを置くもの一〇〇校、高等科のみを置くもの二校、初等科及高等科併置のもの一七二校、合計二七四校、別に分教場が一あつた。児童数は初年科男三〇、七七六名、女三〇、〇一七名、合計六〇、七九三名、高等科男六、四五〇名、女五、七九一名、合計一二、二四一名、全部總計七三、〇三四名（朝鮮人、露人及支那人兒童數二、七四六名を含む）で、年々三千名内外の就學兒童の増加を見つゝあつた。しかしなが

ら校数の約三分の二は單級若しくは複式學校であつて、規模小さく、分布狀態も亦粗であり、且兒童は移動性大なる加ふるに自然的及文化的教材共に内地と大に趣を異にする等樺太の特殊事情も存し、教育に關する諸事情も甚だ大なるものがあつたが、昭和十八年度に於ける兒童の就學歩合は九九・四五パーセント、出席歩合は初等科男四二・八一パーセント、高等科九三・九六パーセントであつて、内地に比し何等遜色がなかつた。しかし初等教育に關する人件費は最近年度に於ける年額百數十万円を國庫の支出とし、物件費等自ら金出する事用が負担となり、農墾部落及集團殖民地に於ける學校建築費に対しては國庫金より補助金を交付し、教育經常費に對しても學校兒童に應じ補助をしてゐた。

二、青年學校

昭和十九年度に於ける學校数は公立一六七校、同分教場四校、私立一九校、合計一八六校であつた。併置校舎を有するものは公立一校、私立一校だけで、其の他は初等學校に併置されてゐた。児童数は初年科男五、九八五名、女五、九八五名、合計一、九七〇名、出席歩合は初年科男四二・八一パーセント、高等科九三・九六パーセントであつた。物件費等自ら金出する事用が負担となり、農墾部落及集團殖民地に於ける學校建築費に對しては國庫金より補助金を交付し、教育經常費に對しても學校兒童に應じ補助をしてゐた。

三、中等學校

昭和十九年十一月現在の中等學校数は廳立の中学校五、高等女學校四、農業學校二、工業學校二、合計九校であつた。其の生徒定員は七、〇五〇名であり、公立中学校は高等女學校五、農業學校二、工業學校二、合計九校で、其の生徒定員は七、〇五〇名であつた。

専門學校

専門學校は医学専門學校、師範學校及青年師範學校の三校で、何れも樺太廳の設立に係るものであつたが、樺太の移入に伴ひ、昭和二十年より文部省に移管された。

第三節 社会教育

島に於ける社会教育としては夙に青少年團の發達を見、図書館は廳立一及公立二があり、博物館は昭和十三年に建設と相俟つて内容の充実を見、其の他成人教育に関する施設も着々其の緒に就きつゝあつた。

第二十八章 社会事業

本島の社会事業としては從來慈善救済及釋放者保護の外見るべきものがなかつたが、近來人口の増加と時運の推移に伴ひ社会的事象も漸次複雑化し、社会事業の發達を促すこと漸く繁く、最近豊原及大泊等の主要市街地に於ては自治團體又は民間篤志家の手に依り無料宿泊所、託兒所、公益質屋、授産場等の設置を見、又市町村に於ては方面委員を設ける等既設社会事業團體の事業擴張と相俟つて漸く社会事業の發達を見つゝあつた。

第二十九章 保健衛生

市人は北河原気帯に属するので其の地理的、風土的條件に禍ひせられ、当初は住民が永住の氣風がなく、従つて衛生思想も原始的で、衛生思想も遂に幼稚であつたが、次第に住民の自覺と衛生關係機關の努力と相俟つて、衛生思想も漸く向上し、衛生思想も普及して、面目を一新しつゝあつたが、内地に比し未だ充分でないものがあり、殊に衛生行政に於て特に其の感を深くするところであつた。

市民の生活環境は多期間極めて長く且極寒のため蟄居生活を営む結果、紫外線の不足を來すと共に、蔬菜類の不足、因るビタミンの欠乏と全般的な酸性土壤に因るカルシウムが不足勝なのに依り主要疾病として結核を最高に肺炎、肺病、肺腫瘍其の他呼吸器病等の死亡率が高く、佝僂病性疾患、ロイマチス等の疾病も亦高率を示した。しかしながら一般死に至るに結核及乳兒の死亡率等の推移を見るに、住民の自覺と予防対策の積極化に伴ひ、漸次減少の一途を辿り、昭和十七年度に於ては一般死亡率人口千対十四・七、乳兒死亡率出生百対七・七、結核死亡率人口一万対二十一・二を示し、内地に比し大差なき域に到達した。尚出生率は全國人口千対三十であるのに対し、樺太に於ては四十であつて、一般衛生状態は漸次向上の兆を示してゐた。

保健機關としては樺太医学専門学院附屬病院一、廳立綜合病院二、同結核療養所一、公立病院二、その他病床二十床以上を有する私立病院が三十八あり、又廳立病院の置かれてない地域に開業する医師には公医を命じ、受持区域を

指定して一般診療、傳染病予防、種痘、一般保健事務等を担任せしめてゐた。

上水道は全島的に良質ではなかつたが、上水道の設備ある都市は豊原、大泊、真岡、本斗、泊居、惠須取、知取及落合の八ヶ所に過ぎず、其の他の地方では泉水、井水、河水をそのまま或は濾過装置をして使用してゐる状態であつた。

附 參考主要文獻資料

- 一、樺太廳施政三十年史（昭和十一年八月二十三日樺太廳發行）
- 二、昭和十五年樺太要覽（昭和十六年一月二十五日樺太廳發行）
- 三、昭和十七年樺太要覽（昭和十八年一月十日樺太廳發行）
- 四、樺太炭礦案内（昭和十六年四月十日樺太鉱業會發行）
- 五、第八十六議會答弁資料（昭和二十年樺太廳作成）
- 六、ダイヤモンド産業全書バルプ（昭和十三年六月七日ダイヤモンド社發行）
- 七、明治四十年乃至昭和六年樺太廳累年統計表（昭和八年六月十日樺太廳發行）
- 八、昭和十三年樺太廳統計書（昭和十四年十二月二十日樺太廳發行）
- 九、昭和十六年樺太廳統計書（昭和十八年十月三十日樺太廳發行）
- 十、森林統計要覽（昭和十一年八月五日樺太山林會發行）

第五部 主要統計

第 1 表 都 市 別 人 口 趨 勢 （樺太廳施政 30 年史及昭和 16 年樺太廳統計書に依る）

市 町 別	昭和16年	昭和10年	昭和 5 年	大正14年	全 9 年	摘 要
惠須取町	39,026	26,549	17,774	7,258	636	昭和 8 年 1 月町に昇格，西海岸北部に在り，製紙工場所在地，附近に豊富なる炭田，林木，沃野あり
豊 原 市	37,160	34,689	31,903	22,010	12,125	昭和 12 年 7 月市に昇格，南部の中央低地帯に在り，樺太廳及製紙工場所在地にして同島の政治，経済，文化の中心地
敷 香 町	30,310	29,490	12,576	2,123	2,259	昭和 6 年 1 月町に昇格，東海岸北部に在り，製紙工場所在地，附近に木材炭田あり
塔 路 町	30,270	—	—	—	—	昭和 13 年 4 月町に昇格，西海岸北部に在り石炭，鉄業の勃興に伴ひ急激に發展す
落 合 町	25,135	14,858	14,893	8,818	5,490	南部の中央低地帯に在り，製紙工場所在地附近に肥沃なる農耕適地，奥地に豊富なる炭田あり
大 泊 町	21,779	24,030	33,315	25,460	12,490	南部海岸の開港場，海陸交通の要地，製紙工場所在地，附近に漁場多く亞庭灣漁業の中心地
真 岡 町	19,193	19,422	15,938	13,137	9,239	西海岸南部の開港場，海陸交通の要地，西海岸第一の商業地，製紙工場の所在地，附近に農耕適地，漁場多し
知 取 町	18,216	18,426	19,257	10,930	698	大正 15 年町に昇格東海岸に在り，製紙工場所在地，附近に炭田あり

第 3 表 昭和 16 年末現在種族別人口 (昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

種 別	戸 数	人			1,000 分 比
		総 数	男	女	
内地人	72,054 (251)	386,058 (1,272)	211,932 (615)	174,126 (657)	949.58
朝鮮人	2,883	19,768	13,603	6,165	48.62
計	74,937	405,826	225,535	180,291	998.20
原住民	92	425	199	226	1.05
外国人	88	306	179	127	0.75
総 計	75,117	406,557	225,913	180,644	1,000.00

- (註) 1. 内地人の中には樺太内には旧アイヌ人を内書した。
2. 原住民はオロツコ、ニフツン、キーリン、サンダー及ヤクーツである。
3. 外国人は露國人、中華民國人、波蘭人、土耳古人等である。

第 4 表 昭和 18 年末現在種族別人口 (第 86 議會答弁資料に依る)

種 別	戸 数	人			1,000 分 比
		総 数	男	女	
内地人	73,492	373,223	194,628	178,595	933.76
朝鮮人	3,827	25,765	18,213	7,552	64.46
計	1	1	1	—	—
原住民	77,320	398,989	212,842	186,147	998.22
外国人	102	413	190	223	1.03
総 計	87	295	168	127	0.75
	77,509	399,697	213,200	186,497	1,000.00

第 5 表 昭和 18 年度木材野面積及森林蓄積 (第 86 議會答弁資料に依る)

区 分	面 積	蓄 積			積 計
		針 葉 樹	闊 葉 樹		
國有林	2,839,456	711,113,857石	135,690,786石		846,804,643石
試験林	7,986	2,630,253	56,401		2,686,654
大學演習林	59,725	45,208,421	3,532,366		48,740,787
公私林計	33,876	—	—		—
	2,941,043	758,952,531	139,279,553		898,232,084

(註) 1 立方米は 35,937石である。

第5表 木材パルプ原木需要調 (農林省調査)

区 分	昭 和 10 年	同 11 年	摘 要
内地	127,458石		
北海道	1,589,859		
太平洋	6,663,219		
計	8,480,536	259,570	製紙用, 人絹用共

第7表 埋 藏 炭 量 (樺太廳調査)

炭 田 区 分	埋 藏 量	摘 要
樺太炭田	57,000,000石	1部は昭和3年12月開封, 稼行中
樺太炭田	8,000,000	1部は大正2年4月及昭和14年12月開封, 稼行中
樺太炭田	430,513,000	1部は昭和3年12月及昭和15年4月開封, 稼行中
樺太炭田	1,300,000,000	
樺太炭田	200,000,000	
樺太炭田	700,000,000	
樺太炭田	1,000,000,000	
樺太炭田	2,000,000,000	
樺太炭田	2,000,000,000	

- (注) 1. 埋藏炭量は、地質調査により探掘許可となるべき炭田である。
2. 本表は、太平洋以下 500 米 (2,000) 尺迄、炭層は厚さ 0.76 米 (2 尺 5 寸) 以上のものを計算した。

第8表 年 次 別 生 産 額 (昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

年 次	総 額	工 産 物	鉱 産 物	水 産 物	林 産 物	農 産 物	畜 産 物	住宅戸口に対する 1戸当り 1人当り
大正 4	9,434,233	2,226,572	179,576	6,061,248	351,660	543,762	71,415	681 155
" 14	64,545,161	30,807,253	2,739,970	16,566,438	9,508,523	3,779,561	1,145,416	1,725 341
昭和 4	105,831,189	64,363,142	5,743,322	19,370,641	11,552,492	3,306,456	1,495,136	2,063 421
" 7	71,296,569	44,509,551	5,200,889	9,939,337	7,410,571	2,946,591	2,289,630	1,231 243
" 8	97,651,996	62,735,030	6,703,919	11,236,581	11,547,337	3,615,313	1,813,816	1,663 325
" 9	126,561,635	75,462,817	9,119,161	13,664,234	113,294	4,058,930	2,143,199	2,074 404
" 10	138,020,759	82,421,151	11,475,813	15,740,775	121,928,218	3,744,531	2,710,271	2,211 428
" 11	151,470,456	87,775,171	15,375,128	18,581,648	22,531,913	4,218,837	2,987,759	2,415 471
" 12	187,258,847	112,619,638	19,421,095	16,923,283	28,562,190	5,811,768	3,620,573	2,956 573
" 13	239,684,183	144,318,268	32,954,442	19,148,111	33,429,011	6,085,008	3,749,343	3,666 706
" 14	293,247,079	153,619,300	46,310,070	38,962,088	41,448,867	8,167,697	4,739,057	4,084 823
" 15	401,675,192	207,497,616	73,483,794	47,122,867	60,574,952	8,023,698	4,972,865	5,519 1,007
" 16	379,553,196	186,738,300	83,388,007	56,507,287	41,952,053	8,123,834	3,243,655	5,058 935

一六四

第3表 移出・入品 總價額 (昭和16年 樺太廳統計書ニ依ル)

年	次	總	額	移	出	移	入	出	超
大	正	14	162,072,332	64,605,210	37,467,312	27,137,898			
唱	和	5	115,388,494	80,025,132	35,328,362	44,696,770			
"	"	10	131,000,331	92,949,722	38,055,209	54,894,513			
"	"	15	439,000,438	294,714,128	144,342,310	150,371,818			
"	"	16	438,316,509	263,775,886	144,570,623	119,205,263			

第10表 昭和16年移出品
(昭和16年樺太廳統計書に依る)

價 額	146,825,234 円	66,723,821 円	17,040,542 円	11,769,434 円	9,501,829 円	263,775,886 円
	紙及パルプ	木材製品	海 産 物	海 産 肥 料	木 材	其の他共計

第11表 昭和16年移入品
(昭和16年樺太廳統計書に依る)

價 額	米	金 屬 製 品	機 械 類	工 業 製 品 等	其 他 類 物 及 廢 物	共 計
42,466,211 円	20,715,043 円	16,918,078 円	8,830,851 円	6,827,049 円	9,850,007 円	144,570,622 円

（昭和 16 年樺太廳統計書ニ依ル）

[illegible]

第13条 経費の算定額と年次別算給額 (第86議事答弁資料に依る)

年 度	貯 蓄 増 加 額	年 度 末 貯 蓄 総 額	1 人 当 貯 蓄 額
昭 和 13	13,617,901	52,012,372	153
" 14	26,260,458	81,292,830	228
" 15	32,324,256	113,817,086	285
" 16	52,923,418	166,340,504	572
" 17	46,210,871	232,551,375	—
" 18	88,310,690	322,922,065	806
" 19 上半期	71,870,878	396,592,943	1,000

(註) 株式、債券、預金、郵便貯金、簡易保険、郵便年金、農業組合貯金、無盡資金、生命保険、公債、國債貯金の合計額を示す。

第 14 表 津太廳歳入歳出決算分類比較表 (第 56 歳會算并資料に依る)

年 度	歳 入		歳 出		歳 入 歳 出 差 額	
	経常部	臨時部	合 計	経常部	臨時部	合 計
明治 10	1,087,046	629,496	1,666,452	530,111	672,877	1,211,988
大正 1	1,456,987	839,772	2,296,759	981,604	1,066,073	2,077,077
" 5	2,356,532	1,415,921	3,772,453	1,138,693	969,790	2,108,483
" 11	6,528,482	14,273,076	20,801,558	6,022,444	12,025,145	18,047,589
昭和 1	14,618,053	7,673,974	22,292,027	8,937,238	8,796,861	17,734,099
" 5	18,237,112	5,131,829	23,368,941	14,580,619	6,599,100	21,179,719
" 11	32,842,728	15,626,606	48,469,334	18,317,133	14,910,899	33,228,032
" 15	81,917,901	61,832,515	146,770,416	38,247,750	62,358,169	100,605,919
" 17	83,285,314	68,107,731	151,693,036	39,051,929	74,935,017	113,986,976
" 18	60,798,783	79,017,601	129,816,384	19,354,301	79,201,560	98,555,941

第 15 表 歳 入 決 算 分 類 比 較 (第 86 歳會算并資料に依る)

年 度	歳入総額	租 税 及 印紙収入	官業及官有財産収入*		公債及借入金	補 充 金	利除金繰入	其 の 他
			官業及官有財産収入*	其 の 他				
明治 40	1,666,452	27,744	48,201	218,966	—	629,406	—	742,135
大正 1	2,296,759	281,495	99,735	406,528	—	591,819	169,949	747,233
" 5	2,681,406	213,301	562,867	623,799	—	293,575	329,255	658,609
" 10	15,773,205	1,285,727	2,947,547	1,605,462	4,173,291	1,433,000	3,109,807	1,218,371
昭和 1	22,322,027	2,249,792	10,942,749	3,811,898	1,786,562	1,577,343	618,814	1,334,869
" 5	26,544,532	2,688,068	9,590,722	6,636,912	—	1,600,000	3,752,469	2,276,361
" 10	42,904,592	2,266,629	15,209,653	7,928,090	—	—	15,339,451	2,160,769
" 15	115,587,921	10,400,257	43,497,440	17,576,237	—	4,407,838	36,871,332	2,834,817
" 16	146,770,416	12,556,722	53,371,192	18,681,159	—	5,926,492	50,537,210	5,697,591
" 17	151,693,036	21,986,051	49,602,137	18,243,804	—	11,153,419	46,164,497	4,543,128
" 18	129,846,384	39,405,635	33,344,901	1,131,202	—	13,743,455	37,706,060	4,515,131

第 16 表 拓 殖 事 業 費 決 算 年 比 較
(樺太廳施政 30 年史及昭和 16 年樺太廳統計書及第 86 議會答弁資料に依る)

年 度	港 灣 費	船舶修築 及改良費	鉄道建設費	鉄道改良費	道路開鑿及 改良費	土地改良費	電信電話 拡張改良費	其の他	計
明治 40	円	円	円	円	円	円	円	円	円
明治 41	—	—	—	—	59,030	—	13,878	—	72,914
明治 42	—	—	—	—	157,554	—	21,079	—	178,633
明治 43	—	—	—	—	66,709	—	35,034	—	101,743
明治 44	—	—	381,903	—	200	—	8,068	—	390,171
大正 1	—	—	176,305	—	2,055	—	11,167	—	189,527
大正 2	—	—	317,071	—	9,735	—	20,641	—	347,447
大正 3	—	—	288,241	—	65,665	—	20,033	—	373,939
大正 4	—	—	162,511	—	33,292	—	27,501	—	223,304
大正 5	—	—	127,838	—	45,419	—	7,539	—	180,796
大正 6	61,772	—	—	125,505	40,832	—	20,357	—	240,466
大正 7	215,343	—	—	147,968	21,875	—	18,727	—	403,913
大正 8	222,047	—	254,601	196,189	13,477	—	36,135	—	722,449
大正 9	260,814	—	1,765,425	116,223	52,672	—	21,787	—	2,216,921
大正 10	553,694	—	1,915,954	354,353	90,875	53,187	60,011	—	3,028,074
大正 11	1,655,293	—	1,260,103	1,399,209	116,852	38,315	98,988	—	4,568,760
大正 12	2,345,854	99,305	2,423,310	1,726,620	97,829	54,314	198,867	—	6,946,099
大正 13	2,067,105	15,686	2,902,212	381,036	122,312	115,079	310,760	—	5,914,190

昭和 13	1,337,702	84,315	2,929,663	232,613	77,380	83,037	153,847	—	4,898,517
昭和 14	940,654	134,406	2,188,507	629,193	87,674	88,822	179,534	—	4,248,790
昭和 1	881,576	189,384	2,322,532	141,136	149,501	116,911	270,016	—	4,071,356
昭和 2	822,995	335,581	1,959,490	222,044	229,110	139,170	452,062	—	4,160,452
昭和 3	313,186	240,542	2,026,326	2,583,821	228,435	137,650	451,397	—	5,981,357
昭和 4	180,497	165,914	1,027,999	2,404,672	1,299,148	326,648	681,921	—	6,086,799
昭和 5	147,018	198,662	954,785	709,957	822,312	384,794	346,808	—	3,564,336
昭和 6	64,538	554,070	109,610	182,489	1,145,450	310,056	273,399	—	2,639,612
昭和 7	124,075	552,936	—	402,340	739,520	459,910	229,819	—	2,508,600
昭和 8	56,108	608,094	—	407,633	1,194,135	475,804	253,624	—	3,484,190
昭和 9	315,226	607,980	—	298,880	1,241,351	586,927	705,827	488,792	6,039,143
昭和 10	1,074,710	610,980	755,180	467,928	1,231,359	630,693	377,818	2,472,419	9,621,087
昭和 11	1,335,648	805,252	1,401,112	806,287	1,336,936	891,324	397,724	2,889,056	9,863,339
昭和 12	1,292,431	647,137	1,110,965	785,795	1,429,116	751,700	401,794	3,963,647	10,382,585
昭和 13	832,431	607,493	1,402,157	947,645	1,139,878	663,884	389,483	4,694,388	10,677,359
昭和 14	958,698	425,060	1,309,193	792,568	1,091,670	696,608	319,412	5,617,872	11,211,081
昭和 15	2,250,052	212,154	1,992,320	1,053,827	1,100,891	775,679	391,476	6,711,653	14,488,052
昭和 16	4,745,199	312,969	1,784,405	2,884,788	1,364,244	1,055,660	359,020	6,173,655	21,679,940
合 計	25,054,666	7,407,920	35,349,718	20,401,019	16,804,479	8,836,172	7,565,513	38,294,454	159,713,941

(註) 「其の他」の内訳は河川改修費，殖民費，産業振興費，水産増殖事業費，國有林事業経営費，燃料資源調査及開発
助成費等である。

第 17 表、 昭和 12 年度以降歳出決算比較 (第 86 議会答弁資料に依る)

年 度	経 常 部	臨 時 部					合 計
		営繕土木費	補助費	樺太廳 拓殖事業費	石炭増産 対策費	臨時軍事費 入	
昭和 12	18,848,082	1,052,291	2,144,861	10,382,535	—	16,957,422	35,805,505
" 13	22,014,199	1,262,682	2,207,571	10,677,359	—	17,439,208	39,453,407
" 14	25,843,161	1,556,255	2,300,414	11,211,081	—	21,465,551	47,308,712
" 15	30,353,927	2,312,234	2,581,015	14,488,052	5,183,670	6,776,472	65,050,711
" 16	38,247,750	3,417,004	2,004,934	21,679,940	9,088,687	10,883,129	100,605,919
" 17	39,051,929	2,843,889	1,551,370	23,715,102	14,907,589	19,021,341	94,935,047
" 18	19,354,301	2,513,980	1,812,484	16,897,251	18,472,118	22,173,542	79,201,360
							98,555,661

第 18 表 市町村歳入歳出決算比較 (樺太廳施政 30 年史及昭和 16 年樺太統計書に依る)

年 度	歳 入				歳 出	
	市 町 村 税	其 の 他	総 額	市町村税 1 戸当	総 額	經常費 1 戸当
大 正 12	1,077,380	515,460	1,592,840	40	1,451,062	34
昭 和 1	1,707,816	1,194,718	2,902,534	46	2,764,796	42
" 5	2,179,958	929,667	3,109,625	38	3,152,486	35
" 10	2,303,771	1,326,421	3,630,192	37	3,363,851	—
" 15	4,949,631	4,818,888	9,768,519	68	8,912,128	—

第 19 表 漁 業 者 戸 口

(昭和 16 年樺太廳累年統計表昭和 16 年樺太廳統計書及第 86 議会答弁資料に依る)

年 次	総 数				事 業 者				兼 業 者			
	戸 数	人 数	男	女	戸 数	人 数	男	女	戸 数	人 数	男	女
大正 3	3,192	14,019	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 5	3,717	17,609	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和 1	3,640	16,431	8,861	7,570	2,909	13,115	7,062	6,053	731	3,316	1,799	1,517
" 10	6,008	27,838	15,487	12,351	5,131	23,859	13,238	10,621	877	3,979	2,249	1,730
" 16	5,802	21,768	12,482	9,286	5,307	19,955	11,556	8,399	495	1,813	926	887
" 17	5,957	26,490	14,367	12,213	5,213	23,330	12,738	10,592	744	3,160	1,629	1,531

第 20 表 主要水産物魚獲高 (樺太廳施政 30 年史及昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

種 別	明治 40 年	大正 5 年	昭和 1 年	同 5 年	同 10 年		同 16 年	
					数	價 額	数	價 額
鯿	175,737,000 斤	165,986,250 斤	342,808,161 斤	447,977,376 斤	238,751,241 斤	3,888,820 円	286,542,134 斤	15,572,283 円
鱒	19,063,682	13,642,100	30,747,071	15,252,819	33,905,447	1,409,557	19,573,301	3,886,997
鮭	800,676	1,129,392	2,129,884	2,447,939	1,753,354	264,790	3,064,220	1,115,004
鱒	29,552,280	49,560,252	31,575,240	24,306,210	15,254,175	687,045	29,189,115	3,578,585
鱈	3,547,500	1,310,000	2,871,840	5,570,708	8,005,857	115,707	8,653,055	906,090
鮫	—	—	—	—	163,563	1,850	3,587,571	260,638
鮪	—	—	—	—	47,377 尾	17,840	270,763 尾	161,442
鰺	—	4,661,634 尾	801,439 尾	2,851,035 尾	2,885,590 尾	505,569	259,133 尾	137,858
昆 布	31,322,250	39,437,250	17,807,688	3,788,404	23,362,584	460,601	18,558,821	533,180
其の他共合計	—	—	—	—	—	8,007,215	—	29,515,442

第 21 表 主要漁業従業状況 (昭和 6 年樺太廳累年統計表及昭和 16 年樺太果年統計書に依る)

年次	鯿建網				鮭建網				鰺建網			
	漁場数		着業使用人数		漁場数		着業使用人数		漁場数		着業使用人数	
	漁場数	着業使用人数	使用人数	使用船数	漁場数	着業使用人数	使用人数	使用船数	漁場数	着業使用人数	使用人数	使用船数
大正	6	363	278	2,419	2,602	321	269	5,198	757	117	2,254	244
昭和	1	479	267	6,656	1,374	282	202	3,829	515	68	1,204	148
"	5	433	254	6,664	1,525	258	183	4,028	495	54	1,167	106
"	10	385	199	5,197	1,298	251	149	2,915	458	54	819	122
"	16	342	162	4,134	900	232	171	3,606	643	83	1,340	228

第 22 表 鱒, 鰺, 蟹 漁 業 及 昆 布 採 取 業 状 況 (昭和 6 年樺太廳累年統計表及昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

年次	鱒			鰺			蟹			昆布		
	漁業者	従業者	漁船	漁業者	従業者	漁船	漁業者	従業者	漁船	漁業者	従業者	漁船
大正 6	497	4,478	495	1,089	4,292	1,252	922	4,663	1,002	2,643	8,192	2,719
昭和 1	277	2,542	285	183	648	195	142	979	160	2,289	6,749	3,257
〃 5	181	1,691	185	396	1,585	406	172	1,279	187	3,036	10,116	4,397
〃 10	213	1,983	218	334	1,270	332	3	180	19	3,735	13,636	5,953
〃 16	280	2,035	271	325	1,550	325*	186	502	51	3,252	7,947	4,085

第 23 表 主要魚族人工孵化成績 (樺太廳施政 30 年史, 昭和 17 年樺太要覽及第 86 議會答弁資料に依る)

魚 名	大 正 13 年		昭 和 5 年		同 9 年	
	採 卵 数	放 流 数	採 卵 数	放 流 数	採 卵 数	放 流 数
鱒	粒 一	尾 一	粒 3,700,500	尾 2,445,268	粒 29,328,500	尾 24,516,864
鮭	1,081,100	1,025,219	31,745,859	28,579,699	58,308,806	53,733,228
鱒	—	—	—	—	—	—
鱒	—	—	—	—	—	—

第 23 表 (續)

魚 名	同 16 年		同 18 年	
	採 卵 数	放 流 数	採 卵 数	放 流 数
鱒	粒 24,484,500	尾 20,080,984	粒 13,485,450	尾 11,566,043
鮭	22,596,981	18,169,558	46,533,500	40,741,268
鱒	2,552,900,000	2,118,470,000	9,199,600,000	7,452,191,000
鱒	406,000,000	100,000,000	1,854,000,000	187,500,000

第 24 表 國 有 林 伐 採 量
(樺太廳施政 30 年史, 昭和 16 年樺太廳統計書及第 86 議會答弁資料に依る)

年 度	用 材	薪 材	計
自明治39至昭和9合計	石 218,131,455	石 26,127,295	石 244,258,750
昭和 10	16,939,749	3,018,127	19,957,876
“ 11	18,526,406	2,990,664	21,517,070
“ 12	16,936,272	2,728,170	19,664,442
“ 13	17,344,167	2,672,255	20,016,422
“ 14	20,444,667	2,621,145	23,065,810
“ 15	25,088,752	3,043,252	28,132,004
“ 16	18,243,822	2,577,643	20,821,465
“ 17	12,371,320	2,015,748	14,387,068
“ 18	13,548,417	1,743,600	15,292,017
總 計	377,575,025	49,537,899	427,112,924

(註) 3石5937 (斗 1 立方米)

昭和 18 年度國有林用途別處分數量 (立木) (第 86 議會答弁資料に依る)

[illegible]

量数 給需材用 表 26 第 (丸太)

(昭和 16 年樺太山林會發行森林統計要覽 12 頁及等 86 議會答弁資料に依る)

(1) 需 給 関 係										
年 度	生 産 量	移 入 量	前年在荷量	計	移 出 量	輸 出 量	本年在荷量	計	差引需要量	
昭和6(実績)	石 11,616,294	石 3,455	石 4,358,376	石 15,978,125	石 8,029,228	石 125,008	石 3,847,320	石 12,001,556	石 3,976,569	
" 7	14,563,886	508	3,847,320	18,411,714	8,919,118	445,857	5,197,957	14,562,932	3,848,782	
" 8	13,663,749	2,659	5,197,957	18,864,365	8,843,353	356,656	4,020,720	13,220,729	5,643,636	
" 9	13,970,603	37,094	4,020,720	18,028,417	6,525,515	382,203	4,246,272	11,153,990	6,874,427	
" 10	10,484,482	3,730	4,246,272	14,734,484	4,439,993	190,546	4,958,180	9,588,719	5,145,765	
" 18	5,452,149	5,000	10,716,494	16,173,643	301,940	2,671	10,135,618	10,440,229	5,733,414	
" 19	6,774,200	21,557	10,135,618	16,931,375	346,185	28,784	10,438,695	10,813,664	6,117,711	
" (見込)20	7,806,043	25,000	10,438,695	18,269,738	1,002,647	71,216	11,097,875	12,171,738	6,098,000	
(2) 需 要 量 内 譯										
年 度	パ ル プ 用 材	製 材	原 木	鋁 業 用 材	其 他	計				
昭和18(実績)	石 3,401,240		石 546,347	石 567,420	石 1,218,407	石 5,733,414				
" 19(見込)	3,279,111		1,285,000	353,600	1,200,000	6,117,711				
" 20	3,048,000		1,500,000	350,000	1,200,000	6,098,000				

第27表 木材材別使用量 (ダイヤモンド産業全書パルプ48, 9頁)

木材の產地及工場所在地	昭和7年	同8年	同9年	同10年	同11年	同12年
北海道 樺太材 内 計	石 1,292,612 3,703,791 327,030 1,134,944 — 5,165,765	石 1,367,864 3,768,742 457,275 1,272,583 — 5,498,600	石 1,476,000 4,035,081 347,000 1,461,179 (39,962) 5,843,260 (39,962)	石 1,642,000 4,016,692 270,000 1,428,888 (25,200) 5,715,580 (25,200)	石 1,589,859 4,191,131 269,450 1,366,797 (20,127) 5,827,378 (20,127)	石 1,679,350 4,910,250 250,000 1,129,900 (18,000) 6,290,150 (18,000)
内地材 内 計	970 — 970	2,917 — 2,917	3,360 — 3,360	53,762 — 53,762	127,458 — 127,458	30,000 — 505,770
朝鮮材 内 計	276,302 — 276,302	313,807 — 313,807	314,331 — 314,331	226,252 — 226,252	241,512 — 241,512	240,350 — 240,350
滿洲材 内 計	(184,112) — (184,112)	(209,152) — (209,152)	(162,127) — (162,127)	(139,000) — (139,000)	(116,989) — (116,989)	(120,000) — (120,000)
合 計	6,735,649 (184,112)	7,183,008 (209,152)	7,636,951 (202,089)	7,637,594 (164,200)	7,786,207 (207,568)	8,744,620 (208,000)

第 28 表・昭和 9 年造林 15 箇年計畫 (樺太廳施政 30 年史に依る)

種 別	1箇年施業標準	15箇年施業目標	摘 要
苗木 人工 天然 防火 歩道 林内	14,499,300本 6,000陌 600陌 75,000米 150,000米	217,489,500本 90,000陌 9,000陌 1,125,000米 2,250,000米	官行、民間1箇年3,000陌苑 天然更新の撫育を主とする

昭和 16 年度以降造林 15 箇年計畫 (第 86 議會答弁資料に依る)

年 度	天然更新	播 種 及 植 樹							合 計
		官 播		民 行		樹 行			
		種	植	付	計	一般民行	開發公社	計	
昭和 16	20,000	1,000	5,700	6,700	7,000	1,000	7,000	13,700	
" 17	20,000	1,000	6,000	7,000	7,500	1,000	8,500	15,500	
" 18	20,000	1,000	6,500	7,500	8,300	1,000	9,300	16,800	
" 19	20,000	1,000	6,500	7,500	8,900	3,000	11,900	19,400	
" 20	毎年 20,000	毎年 1,000	同 6,500	同 7,500	同 14,000	同 5,000	同 19,000	毎年 26,500	
" 29	20,000	1,000	6,500	7,500	12,100	5,000	17,100	24,600	
" 30	20,000	1,000	6,500	7,500	183,800	60,000	243,800	353,100	
計	300,000	15,000	96,200	111,200	183,800	60,000	243,800	353,100	

第 30 表 官行造林事業実績 (昭和 17 年樺太要覽及第 86 議會答弁資料に依る)

年 度	天然更新	播 種	植 樹	計	計画に 対する 実行率	林 道				
						軌 道	自動車道	車馬道	歩 道	
自大正 9 年 昭和 10 年 合計	1,662	50,360	15,312	67,334	%	—	—	—	—	—
昭和 10	370	20	4,577	4,967	138	—	—	—	—	—
“ 11	370	—	3,250	3,620	101	—	—	—	—	—
“ 12	10,120	—	3,530	13,650	97	—	—	—	—	—
“ 13	12,353	—	3,717	16,070	86	—	—	—	—	—
“ 14	14,117	—	2,904	17,021	91	—	—	—	—	—
“ 15	10,196	—	3,424	13,620	73	—	—	—	—	—
“ 16	13,798	490	5,917	20,205	76	—	42	91	65	—
“ 17	11,973	—	5,729	17,702	66	11	11	84	63	—
“ 18	7,015	100	4,699	11,814	43	2	5	42	38	—
“ 19	7,395	—	3,244	10,639	39	6	6	36	113	—
合 計	89,370	50,969	56,304	196,643	—	19	64	253	279	—

(註) 昭和 9 年度末に於ける苗圃数固定 18, 臨時 13, 防火線延長 1,015,945 米, 林内步道延長 989,548 米

第 31 表 民行造林事業実績 (昭和 17 年樺太要覽及第 86 議會答弁資料に依る)

年 度	植 樹	面 積	防 火 線	林 内 步 道
昭和 11	1,463	10,697	4,380	10,565
“ 12	2,709	20,471	—	26,001
“ 13	4,180	22,382	—	20,338
“ 14	4,619	29,443	—	49,343
“ 15	5,255	40,969	—	56,584
“ 16	2,770	38,687	—	93,621
“ 17	8,456	19,282	—	104,918
“ 18	8,356	15,695	—	75,024
“ 19	3,377	202,006	—	114,222
合 計	41,185	—	—	550,616

(註) 1 米 は 0.55 間

第 32 表 黎明時代收容農家戸数 (樺太廳施政 30 年史に依る)

年 度	明治 39	“ 40	“ 41	“ 42	“ 43	“ 44	計
收容農家	364	432	116	102	234	835	2,083

第 33 表 自由移民時代前期收容農家戸数 (樺太廳施政 30 年史に依る)

年 度	大 正 1	" 2	" 3	" 4	" 5	" 6	" 7	計
收容農家	791	1,123	1,531	667	295	284	388	5,079

第 34 表 自由移民時代後期收容農家戸数 (昭和 6 年樺太廳累年統計表に依る)

年 度	大 正 8	" 9	" 10	" 11	" 12	" 13	" 14	計
收容農家	673	666	627	1,046	2,657	2,749	2,378	10,796

第 35 表 指定移民時代收容農家戸数 (昭和 6 年樺太廳累年統計表に依る)

年 度	大 正 15	昭 和 2	計
收 容 農 家	1,787	1,100	2,887

第 36 表 集團移民時代農家戸数 (昭和 6 年樺太廳累年統計表及昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

年 度	昭和 3	" 4	" 5	" 6	" 7	" 8	" 9	" 10	" 11	" 12	" 13	" 14	" 15	" 16	計
收容農家	1,429	1,242	1,132 × 552	932 × 435	1,341 × 913	1,267 × 1,091	1,251 × 1,003	809 × 649	805 × 591	623 × 459	225 × 178	329 × 228	339 × 241	476 × 278	12,200

(註) ×印は島内移住者を含むものである。

第 37 表 集團殖民地の農家定着率 (樺太廳施政 30 年史に依る)

殖 民 地 名	区域編入戸数	集團移民收容戸数	計	昭和 9 年未定着戸数	定 着 率
大 豊 榮	150	112	262	235	89.7 %
喜 美 内	225	119	344	302	87.8
小 能 登	99	226	325	276	84.9
近 幌 呂	124	97	221	195	71.9
瑞 穂 保	4	28	32	29	90.6
瑞 保 千	110	71	181	175	97.7
檜 澤 千	—	132	132	120	90.9
宝 幌 内	57	107	164	149	90.9
幌 千 内	153	120	273	263	96.3
多 蘭	51	66	117	117	100.0
中 澤	168	190	358	339	95.0
惠 取	134	61	195	194	99.5
計	1,275	1,329	2,604	2,394	91.9

(註) 「区域編入戸数」とは集團殖民地設定によつて從來の自由殖民地から集團殖民地に編入された区域に其の設定当時定住してゐた農業移住者の戸数である。

第 38 表 昭和 16 年農産物作付面積及收穫高 (昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

品 種 名	作 付 面 積	收 穫 高	1 アール当リ	生 産 價 額
燕 麥	6,565	129,370 疍	0.197 疍	1,211,154
牧 草	6,012	23,198,459 疍	39 疍	1,907,339
鈴 薯	2,369	19,423,561 疍	82 疍	1,551,472
甜 菜	1,810	10,236,790 疍	57 疍	221,798
小 麥	1,215	16,411 疍	0.135 疍	315,480
豌豆	1,120	8,996 疍	0.080 疍	254,485
裸 麥	1,012	17,449 疍	0.172 疍	285,689
蕎 麥	952	6,275 疍	0.066 疍	80,558
大 根	659	10,077,380 疍	153 疍	516,929
大 豆	540	5,846,424 疍	108 疍	584,887
蠶 豆	450	4,791 疍	0.106 疍	121,994
藍 豆	336	4,480,834 疍	133 疍	362,337
其 の 他 共 計	24,330	—	—	8,123,834

第 39 表 家 畜、家 禽 羽 数 (昭和 6 年樺太廳果年統計表, 昭和 16 年樺太廳統計書及第 86 議會答弁資料に依る)

年 末 別	牛	馬	豚	細 羊	山 羊	家 兎	雞	鶩	鶻	七面鳥	狐
明治 40	1,234	1,248	221	5	—	—	—	—	—	—	—
大正 5	1,252	4,287	611	14	—	—	20,804	160	40	—	—
昭和 1	3,163	9,084	2,634	216	14	—	46,049	544	159	35	807
5	4,143	13,239	5,328	292	25	—	59,610	500	171	95	1,587
10	6,203	?	9,865	295	151	21,794	180,653	1,283	573	480	(1月末) 7,246
15	8,557	13,250	4,168	603	151	9,423	90,532	118	34	82	(同上) 11,054
16	8,028	12,103	2,886	874	228	14,868	81,959	75	25	43	(同上) 8,580
17	8,799	14,271	3,956	1,194	347	15,023	121,358	?	?	?	(同上) 4,329
18	8,401	15,463	2,803	817	265	21,773	119,540	?	?	?	?

第 40 表 昭和 16 年現在鉱区数, 面積及延長 (昭和 17 年樺太要覽に依る)

鉱 種	採 掘		試 掘		砂、 鉱	
	鉱区数	面 積 (坪)	鉱区数	面 積 (坪)	鉱区数	面積(坪) 及延長
石 炭	115	147,495,457	657	451,433,247	—	—
油	10	8,755,132	51	7,899,808	—	—
鉄	—	—	13	10,911,460	—	—
金, 銀, 銅, 鉄	—	—	3	1,791,390	—	—
金, 銀, 銅, 鉄	1	554,966	2	1,285,940	—	—
金, 銀, 銅, 鉄	—	—	6	2,852,710	—	—
金, 銀, 銅, 鉄, 硫化鉄	—	—	1	955,900	—	—
金, 銀, 銅, 鉛, 亜鉛, 硫化鉄	—	—	1	480,000	—	—
砂 金	—	—	—	—	4	245,900
砂 金, 砂 水 銀	—	—	—	—	8	16里00町00間
砂 鉄	—	—	—	—	5	4里35町25間
砂 白 金	—	—	—	—	3	253,065
					1	90,000

砂 金, 砂 白 金	—	—	—	—	1	29,900
砂 金, 砂 鉄	—	—	—	—	10	647,350
辰 砂	—	—	—	—	2	220,550
砂 金, 砂 白 金, 砂 鉄, 鉄	—	—	—	—	2	145,880
砂 金, 砂 白 金, 砂 鉄, 鉄	—	—	—	—	6	433,830
砂 白 金, 砂 鉄, 砂 クローム 鉄	—	—	—	—	3	2,831,150
砂 クローム 鉄	—	—	—	—	1	981,310
砂 白 金, 砂 クローム 鉄	—	—	—	—	—	—
計	126	156,805,555	734	517,610,455	33	5,878,935
					13	20里35町25間

第 41 表 各 炭 田 別 埋 藏 炭 量 (樺太廳調査)

炭 田 別	埋 藏 炭 量 (1,000 噸)		夾 炭 層 の 種 別	炭 種	炭 田 所 属 ノ 採 行 炭 礦 名
	埋 藏 炭 量 上	埋 藏 炭 量 下			
北 炭 部 封 田	868	13,280	14,148	東海岸上部夾炭層	内 川
北 炭 部 封 田	11,702	71,786	83,488	上	
北 炭 部 封 田	12,570	85,066	97,636	同	
北 炭 部 封 田	41,681	56,819	98,500	下部夾炭層	
北 炭 部 封 田	113,183	484,964	598,147	上	内 川
北 炭 部 封 田	17,315	98,842	116,157	同	
北 炭 部 封 田	172,179	640,625	812,804	上	
北 炭 部 封 田	14,970	110,520	125,490	西海岸上部夾炭層	
北 炭 部 封 田	6,237	47,362	53,599	上	内 川
北 炭 部 封 田	5,341	40,502	45,843	同	
北 炭 部 封 田	10,478	52,231	62,709	下部夾炭層	
北 炭 部 封 田	15,775	63,967	79,742	上	南 名 好
北 炭 部 封 田	5,310	57,820	63,130	同	
北 炭 部 封 田	58,111	372,407	430,513	上	
北 炭 部 封 田	242,860	1,198,093	1,340,953	同	
北 炭 部 封 田	16,286	144,756	161,042	東海岸上部夾炭層	知 取, 北 振 岸 保
北 炭 部 封 田	100,396	3,128	103,524	上	
北 炭 部 封 田	1,462	24,552	26,014	同	
北 炭 部 封 田	118,144	172,436	290,580	上	

安 別, 奥 南	2,030	2,920	4,950	下部夾炭層	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	—	227	227	西海岸上部夾炭層	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	21,030	92,190	113,220	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	15,220	51,730	66,950	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	4,090	18,595	22,685	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	5,350	37,920	43,270	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	6,670	93,600	100,270	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	4,730	52,810	57,540	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	13,180	163,220	176,400	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	2,500	47,380	49,880	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	74,800	560,592	635,392	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	2,370	10,957	13,327	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	7,233	53,170	60,403	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	1,900	12,789	14,689	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	11,503	76,916	88,419	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	204,447	809,944	1,014,391	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田
安 別, 奥 南	447,307	1,908,037	2,355,344	上	粘 同	上 炭	西 炭 部 封 田

(註) 1. 本表は昭和 15 年未迄に樺太廳にて調査を終了した区域のみの数量を計上した。
2. 炭層は純炭部 0.76 米 (2.5尺) 以上疎水準下 606 米 (2,000尺) 迄を計上した。

第42表 樺太炭分析結果例 (樺太廳調査)

種別	炭礦名	炭層及 層名	水分 (%)	灰分 (%)	揮発分 (%)	固定炭素 (%)	全硫黄 (%)	発熱量 (カリ一)	灰熔融点 (°C)	灰軟化点 (°C)	コークス 性状	所属炭種
第1種	豊	畑 第番層	2.19	4.30	5.81	87.70	0.18	7,700	—	—	不粘結	無煙炭
	三福無煙	塊	2.50	6.08	8.23	83.19	0.31	7,750	—	—	—	
	諸津無煙	7番層	1.18	10.31	8.72	79.79	0.56	7,360	1,100	1,170	—	
	諸津	5番層	0.70	11.84	17.18	70.28	0.41	7,440	1,250	1,330	稍粘結	
第2種	安	別 6番層	1.39	11.81	39.09	47.71	1.24	7,260	1,160	1,210	粘 結	半無煙炭
	興	南 2号粉	1.36	11.21	31.29	56.12	0.50	7,360	1,170	1,290	—	
	北	榮 粉	0.89	10.27	31.49	57.35	2.66	7,625	—	—	—	
	立	岩 1番層	0.49	7.23	25.96	66.32	0.60	7,940	1,150	1,200	—	
第3種	西	柵 3番層	2.15	3.58	44.84	49.43	0.14	7,620	1,170	1,280	—	粘結性 高度 青炭
	豐	畑 3番層	0.85	3.72	35.42	59.80	0.49	8,080	1,220	1,320	—	
	名	好 8番層	2.03	3.95	37.19	56.83	0.52	7,730	1,150	1,220	—	
	北	沢 洗 粉	2.38	11.26	32.04	54.32	0.40	7,260	—	—	—	
	白	鳥 2番層	3.11	7.35	35.14	54.40	0.52	7,640	—	—	—	—
	塔	路 塊	2.75	5.62	37.32	54.31	0.27	7,750	—	—	—	
	上	塔 路 本坑上層	2.71	5.34	41.09	50.84	0.30	7,550	1,310	1,450	—	
	塔	路									—	

第4種	大	平	粉	6.36	7.03	39.52	47.09	0.25	6,970	—	—	凝 結	粘結性 普通炭
	惠	取	塊	8.76	7.73	40.17	43.34	0.19	6,710	—	—	不粘結	
	珍	内 一 中切	塊	1.46	15.55	39.54	43.45	0.25	6,780	1,250	1,370	凝 結	
	大	南 畑内 沢 10番層	塊	4.10	10.24	45.16	40.50	0.23	6,770	—	—	不粘結	
第5種	川	内 上	塊	7.47	6.76	41.68	44.29	0.50	6,850	—	—	—	不粘結 低度 瀝青炭
	南	珍 内 塊	塊	3.42	7.77	46.38	42.43	0.17	6,910	—	—	不粘結	
	小	田 洲 本層炭	塊	22.16	8.53	33.63	35.68	0.10	4,770	—	—	—	
	内	内 小 田 洲 塊	塊	13.37	2.91	42.95	40.77	0.31	6,140	1,090	1,160	—	
	内	内 川 中 塊	塊	13.37	4.15	42.10	40.38	0.18	6,020	—	—	—	—
	泊	岸 中 塊	塊	17.55	6.47	41.02	34.96	0.23	5,590	—	—	—	
	知	取 切 達	塊	11.02	6.40	39.53	43.05	0.20	5,920	—	—	—	
	北	辰 中 塊	塊	12.14	13.71	38.97	35.18	0.21	5,300	1,280	1,450	—	
	美	保 中 塊	塊	13.03	16.22	40.71	30.04	0.12	4,510	—	—	—	—
	白	浦 粉 塊	塊	12.44	9.14	42.91	35.51	0.24	5,760	1,260	1,380	—	
	田	特 塊	塊	5.80	4.23	36.91	46.53	0.74	6,330	—	—	—	
	美	田	塊	11.37	4.23	38.58	45.82	0.54	6,090	1,130	1,210	—	

第43表 出炭量 移輸入炭量及島内消費量.
(樺太廳施政30年史, 昭和13年樺太廳統計書及樺太廳炭礦整備資料に依る)

年次	出炭量	移輸入炭量	合 計	移輸出炭量	差 引	次年度へ繰越	差引島内消費量
明治 42	應 4,564	—	應 4,564	應 —	應 4,564	應 —	應 4,564
" 43	19,998	—	19,998	—	19,998	—	19,998
" 44	26,548	—	26,548	5,100	21,448	—	21,448
大正 1	415	6,683	7,098	—	7,098	—	7,098
" 2	83	—	83	—	83	—	83
" 3	14,653	6,229	20,882	—	20,882	—	20,882
" 4	27,626	7,195	34,821	—	34,821	—	34,821
" 5	37,060	21,947	59,007	—	59,007	—	59,007
" 6	57,830	8,043	65,873	—	65,873	—	65,873
" 7	104,695	4,031	108,726	—	108,726	9,539	99,187
" 8	135,427	26,752	162,179	—	162,179	13,674	158,044
" 9	154,293	62,311	216,604	—	216,604	21,792	208,486
" 10	115,255	49,456	164,711	—	164,711	30,776	155,727
" 11	114,549	58,189	172,738	—	172,738	—	203,514
" 12	166,986	63,210	230,196	—	230,196	19,365	210,831
" 13	199,385	59,888	259,223	—	259,223	19,483	259,105
" 14	250,615	66,663	317,278	—	317,278	28,016	308,745

昭和 1	245,220	96,907	342,127	6,200	335,927	46,014	317,929
" 2	357,046	60,354	417,400	8,388	409,012	44,185	410,841
" 3	539,481	42,881	582,362	1,530	580,832	61,373	563,644
" 4	635,515	21,217	656,732	16,380	640,352	87,892	613,833
" 5	644,974	6,604	651,578	12,646	638,932	63,452	663,372
" 6	637,962	3,574	641,536	38,079	603,457	32,246	634,663
" 7	677,389	241	677,630	51,833	625,797	40,671	617,372
" 8	888,913	1,879	890,792	168,604	722,188	34,625	728,234
" 9	1,196,647	1,097	1,197,744	333,500	864,244	77,164	821,705
" 10	1,515,647	2,604	1,518,251	492,749	1,025,502	140,570	962,096
" 11	2,075,157	?	?	1,025,920	?	?	?
" 12	2,535,574	?	?	1,142,877	?	321,419	?
" 13	3,435,396	870	3,436,266	1,896,226	1,540,040	431,276	1,430,179
" 14	4,475,856	5,728	4,481,584	2,676,896	1,804,688	652,911	1,583,053
" 15	6,435,929	1,050	6,436,979	3,720,243	2,716,736	1,336,673	2,032,974
" 16	6,471,414	469	6,471,883	3,590,720	2,475,163	1,464,109	2,347,727
" 17	4,919,976	?	?	?	?	?	?
" 18	4,983,122	?	?	?	?	?	?

第44表 稼行炭礦一覽 (昭和17年4月末現在樺太廳調査)

炭礦名	着手年次	所在地	鉱業権者	出炭能力(噸)	昭和16年 出炭量(噸)	昭和16年 島外移出量(噸)
川上浦	大正2年	豊原郡川上村	三井鉱山株式会社	420,000	391,561	—
白大	同 3年	榮浜郡白縫村	南樺太炭礦株式会社	90,000	71,573	35,175
大知	同 7年	泊居郡名寄村	樺太鉱業株式会社	120,000	119,763	—
大知	同 13年	元泊郡知取町	同 上	150,000	145,024	—
大知	同 13年	名好郡恵須取町	同 上	1,000,000	914,468	568,274
大知	昭和1年	元泊郡元泊村	樺保炭礦株式会社	140,000	115,852	82,745
恵須取	同 2年	名好郡恵須取町	日曹鉱業株式会社	150,000	37,606	34,460
内幌川	同 4年	敷香郡内路村	三井鉱山株式会社	130,000	129,400	—
内幌川	同 4年	本斗郡内幌町	帝國燃料興業株式会社	420,000	353,400	—
美田	同 6年	長浜郡知床村	石原産業株式会社	150,000	155,336	107,770
塔路	同 8年	名好郡塔路町	南樺太炭礦鉄道株式会社	1,200,000	1,045,450	909,260
珍内	同 9年	久春内郡珍内町	樺太炭業株式会社	160,000	125,224	89,063
名好	同 9年	名好郡名好町	南樺太鉱業株式会社	160,000	109,246	74,699
小田洲	同 10年	名好郡珍内町	小田洲炭礦株式会社	100,000	72,753	40,499

安別	同 10年	名好郡西櫛丹村	日鉄鉱業株式会社	150,000	152,842	132,640
奥南	同 10年	同 上	東和鉱業株式会社	100,000	97,055	78,485
豊畑	同 11年	名好郡名好町	豊畑炭礦株式会社	250,000	197,908	161,000
北小沢	同 12年	同 上	南樺太炭礦鉄道株式会社	600,000	573,000	488,710
泊岸	同 13年	敷香郡泊岸村	日鉄鉱業株式会社	200,000	215,062	125,810
諸津無煙	同 13年	名好郡名好町	諸津炭業株式会社	80,000	40,876	75,795
南珍内	同 13年	久春内郡珍内町	山下鉱業株式会社	150,000	125,300	88,170
西櫛丹	同 13年	名好郡西櫛丹村	三井鉱山株式会社	380,000	351,701	258,130
上塔路	同 13年	名好郡塔路町	鐘淵炭業株式会社	500,000	485,742	391,250
白鳥沢	同 14年	同 上	樺太鉱業株式会社	300,000	274,097	177,170
内淵	同 14年	榮浜郡落合町	帝國燃料興業株式会社	500,000	56,412	—
杉森	同 15年	久春内郡珍内町	樺太石炭鉱業株式会社	50,000	3,843	—
南辰	同 15年	本斗郡好仁村	樺太開発株式会社	200,000	17,166	—
北辰	同 15年	元泊郡知取町	樺太日本炭礦株式会社	50,000	28,469	—
其他	—	—	—	100,000	60,285	57,615
計	—	—	—	8,000,000	6,471,414	3,996,720

第45表 炭礦勞務狀況 (樺太廳調査)

[illegible]

(註) 職員及勞務者數は各年末現在 (17 年を除く) とする。

第 46 表
島内石炭用途別消費量
(樺太廳施設以 30 年度及樺太廳員 111.1.1. 以下)

年次	工場用	鉄道用	船舶用	山元自家用	人造石油用	家庭用其の他	合計
昭和 1	281,919	13,219	5,422	14,262	—	3,107	317,929
" 2	327,856	24,824	5,412	15,588	—	37,161	410,841
" 3	465,092	34,492	4,850	22,733	—	36,477	563,644
" 4	516,056	40,182	7,448	22,622	—	27,525	613,832
" 5	574,070	35,186	8,920	20,850	—	24,346	663,373
" 6	537,364	37,100	14,188	22,586	—	23,425	634,663
" 7	505,969	36,192	10,273	20,977	—	43,961	617,372
" 8	556,288	38,990	23,324	24,202	—	85,430	728,234
" 9	598,255	39,909	41,861	36,439	—	105,241	821,705
" 10	628,731	43,638	56,531	70,300	29,565	153,331	962,096
" 11	?	?	?	?	?	?	?
" 12	?	?	?	?	?	?	?
" 13	769,892	43,185	90,739	186,615	117,829	221,919	1,430,179
" 14	751,062	39,023	140,808	265,365	135,913	250,882	1,583,053
" 15	873,893	71,811	188,804	405,639	184,514	308,313	2,032,974
" 16	924,955	85,932	194,324	503,651	220,143	418,722	2,437,727

第 47 表 昭和 13 年工業物生産額 (昭和 13 年樺太廳統計書に依る)

総 額	パ ル プ	製 紙	酒 類	罐 詰	石炭乾餾	パ タ ー	砂 糖	其の他の食品	其 の 他
144,886,387	円	円	円	円	円	円	円	円	円
74,681,000	円	52,621,003	6,691,804	2,503,544	1,138,340	422,080	1,559,374	1,847,699	3,422,075

第 48 表 昭和 16 年工業物生産額 (昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

総 額	製 紙	酒 類	パ タ ー	砂 糖	其の他の食品	其 の 他
186,738,360	円	円	円	円	円	円
79,906,327	円	13,279,716	769,837	661,149	4,512,408	87,608,923

(註) 「其の他」中にはパルプ及び石炭乾餾製品を含むが其の金額は不明である。

第 49 表 島内パルプ及紙生産高 (昭和 6 年樺太廳累年統計表及昭和 13 年樺太廳統計書に依る)

年 度	パ ル プ		紙		価 額 合 計
	数	量	数	量	
大 正	4	4,647 吨		582,778 円	582,778 円
"	5	16,832		2,524,968	2,524,968
"	6	38,981		7,701,927	7,701,927
"	7	53,584		12,668,717	12,668,717
"	8	61,583		16,134,281	16,953,827

"	9	67,654	16,867,078	6,664	3,753,715	20,620,793
"	10	54,785	12,434,134	2,017	762,504	13,196,638
"	11	86,386	14,200,834	9,859	3,207,114	17,407,948
"	12	91,611	14,754,391	14,934	4,795,375	19,549,766
"	13	93,829	15,249,288	18,163	6,025,785	21,275,073
"	14	104,274	17,652,615	21,648	7,514,302	25,166,917
昭和	1	136,246	21,070,540	28,454	11,103,902	32,174,442
"	2	155,540	22,094,362	58,456	15,114,490	37,208,852
"	3	152,822	21,753,342	89,780	23,326,488	45,079,181
"	4	151,105	21,126,113	124,055	30,580,068	51,706,181
"	5	161,703	21,103,005	139,146	30,652,270	51,755,275
"	6	144,454	15,198,986	143,472	26,218,212	41,417,198
"	7	128,702	13,421,184	129,711	34,537,313	37,958,497
"	8	141,942	20,844,909	146,832	33,782,022	54,629,931
"	9	179,096	27,747,894	156,195	37,229,883	64,977,777
"	10	104,609	32,464,313	165,815	38,905,722	71,370,035
"	11	248,664	39,971,997	165,269	37,267,055	77,239,052
"	12	215,203	44,063,904	201,642	53,936,189	98,000,093
"	13	263,593	74,681,069	181,133	52,621,003	127,302,072

第53表 昭和20年現在各製紙工場生産能力等 (王子製紙株式会社調査に依る)

工場名	生産品目	生産能力	生産		従業員
			昭和16年度	昭和19年度	
大 豊	サルファイトバルブ	15,000	19,000	19,000	357
	サルファイトバルブ	47,000	40,600	19,000	517
落 合	紙	4,320	4,450	4,000	
	サルファイトバルブ	38,000	37,700	10,700	1,143
	クラフトバルブ	43,000	34,700	12,200	
	紙	40,000	33,500	19,300	
知 取	サルファイトバルブ	47,500	45,400	24,600	836
	グラウンツバルブ	30,900	22,200	8,900	
	紙	42,000	42,000	31,400	
敷 香	レーヨンバルブ	41,000	36,400	12,900	1,210
	クラフトバルブ	33,000	24,100	14,900	
	紙	30,400	22,800	15,100	
眞 岡	サルファイトバルブ	38,000	36,700	19,000	834
	紙	36,000	34,900	23,800	

野 田	レーヨンバルブ	19,000	17,100	11,000	608
	紙	9,000	5,300	11,700	
泊 居	レーヨンバルブ	38,500	34,400	11,900	565
	紙	3,000	2,500	2,300	
恵 須 取	サルファイトバルブ	38,000	37,500	27,000	1,125
	グラウンツバルブ	40,500	24,400	9,000	
	紙	58,800	54,700	35,500	
合 計	サルファイトバルブ	223,500	216,900	100,300	7,195
	レーヨンバルブ	98,500	87,900	35,800	
	クラフトバルブ	76,000	58,800	27,100	
	グラウンツバルブ	71,400	46,600	17,900	
	小 計	469,400	410,200	181,100	
	紙	223,520	200,150	143,100	

第 51 表 我國木材パルプ生産量 (ダイヤモント産業全書パルプ 46 頁)

年次	總額	樺太			北海道			内地			朝鮮		
		サルファイト	グランド	クラフト	計	サルファイト	グランド	計	サルファイト	グランド		マシナ	計
昭和 9	691,006 噸	230,000	43,000	38,912	314,000	51,967	149,095	201,062	46,274	108,839	3,247	158,360	18,018 噸
" 10	724,045	239,448	46,586	40,505	326,539	54,064	159,429	213,493	48,351	115,019	3,777	167,147	16,866
" 11	747,351	241,290	41,817	51,818	334,925	54,275	165,333	219,608	44,888	126,897	4,074	175,859	16,959
" 12	810,511	266,000	46,817	63,100	375,917	55,400	171,600	227,000	51,000	135,094	4,400	190,494	17,100

第 52 表 昭和 16 年末銀行貸付及預金額 (昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

種別	北海道拓殖銀行	北海道貯蓄銀行	合計
預金	89,714,690 円	5,926,515 円	95,641,205 円
貸付	28,281,960	108,302	28,390,262

第 53 表 郵便物取扱数 (昭和 17 年樺太要覽に依る)

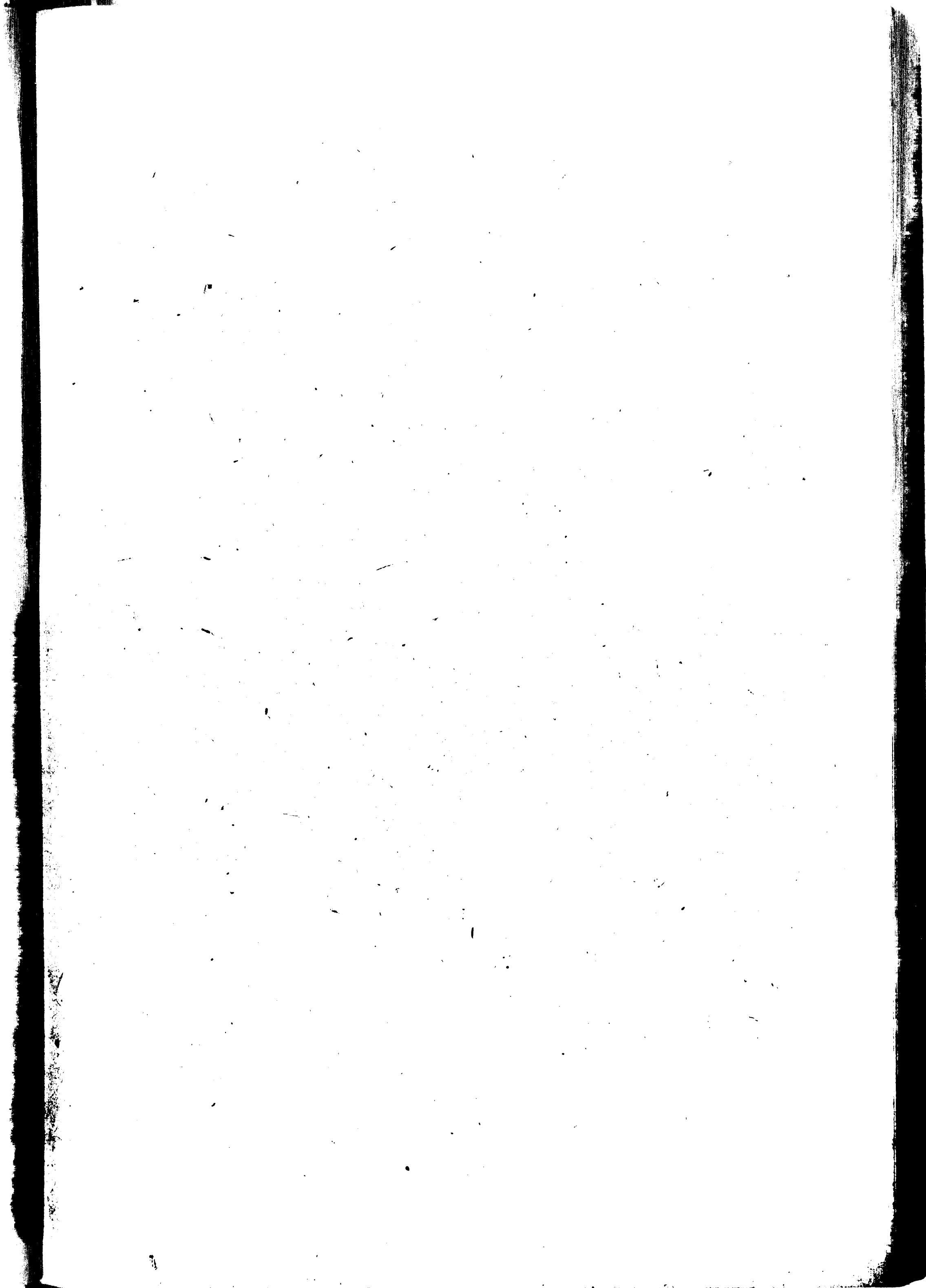
年度	通 常		郵便		小包		郵便
	引	受	配	達	引	受	
明治 40		1,483,931		1,757,054		8,470	27,686
大正 1		3,777,570		3,958,839		20,153	58,916
昭和 1		20,259,063		23,976,418		160,978	550,272
" 16		28,219,572		34,333,718		454,520	859,956

第 54 表 電報取扱数 (樺太廳施政 30 年史及昭和 16 年樺太廳統計書に依る)

年度	発	信	着	信	合計
明治 40		140,572		124,151	26,723
大正 1		251,906		235,099	487,005
昭和 1		1,322,999		1,218,845	2,541,844
" 16		1,887,319		1,792,999	3,680,318

電話通数 市外電話統計書に依る)

年 度	市 内 電 話	市 外 電 話
明 治 40	288,922	14,947
大 正 2	1,948,998	39,863
昭 和 3	21,932,764	478,760
” 16	36,689,802	2,048,346



081-2-20

日本人の海外活動に関する歴史的調査

8

通卷第二十册 南洋群島篇 第一分册

出版注意

第一部 総論

大藏省管理局

は し が き

本書は部会員協力のものである。資料の乏しいには困つたが、これを補つたのは多年現地にあつた部会員の協力であつた。

本書は事實として其の儘に記述し、之に対する当書是非の批判は識者に俟つことにしたつもりである。

昭和廿二年三月六日

青島同和協會

目次

第二章 序説	一
第三章 前史	九
第一節 総説	九
一、群島の発見	九
二、発見後の推移	一〇
第一節 スペイン領時代の治績	一一
第二節 ドイツ領時代の治績	一一
一、総説	一一
二、マーシャル群島に於ける産業的経済	一二
三、ヤップ島に於ける通信施設	一二
四、學術的探險	一三
五、教化的施設	一三
六、行政的施設	一四

第四章 領前に於ける我が國との交渉	一五
一、総説	一五
二、官憲との交渉	一五
三、民間との交渉	一六
第三章 自然	一八
第一節 総説	一八
一、位置	一八
二、布置	一九
三、地質	一九
第二節 各群島細説	二二
一、マリアナ群島	二二
二、カロリン群島	二三
三、マーシャル群島	二三
第一節 経度及緯度	二四
第二節 面積及島数	二四
第三節 氣象	二七

一、概説	三
二、気候	三
三、氣圧	三
四、氣温	三
五、濕度	三
六、風向及風速	三
七、雨量	三
八、暴風	三
第四章 人口	三
一、邦人	三
二、島民	三
三、外國人	三
四、戸口調査に関する施設	三
五、島民調査	三
六、南洋群島土着民の国籍	三

島民	三
第一節 総説	三
第二節 種族	三
第三節 チヤムロ族	三
第四節 カナカ族	三
第五節 風俗	三
一、衣	三
二、食	三
三、住	三
第六節 人文的觀察	三
第七節 社会的組織	三
第八節 政治的生活	三
第九節 我々の原住民政策	三
第六章 行政	三
一、沿革	三
二、海見方開港時代	三

二、	明治時代	七
三、	日本施政	六
第一節	明治時代の權限及組織	五
一、	權限	五
二、	組織	五
第二節	行政區劃	六
第三節	地方自治制度	六
一、	地方自治制度	六
二、	事業	六
三、	地方財政	六
第四節	地方制度	六
一、	部落	六
二、	村吏	六
第七章	司法行刑	七
第一節	司法	七
一、	沿革	七

二、	法律制度	七
三、	通用法規	七
四、	取扱事件	七
第五節	行刑	七
第八章	財政	九
第一節	歲計	九
一、	明治時代及軍政時代	九
第二節	明治時代の財政	九
一、	歲入	九
二、	歲出	九
三、	國庫補助金	九
四、	地方財政	九
第五節	稅制之度	六
一、	國稅	六
二、	所得稅	七
三、	法人營業收益稅	七

第一節	戦時体制時代の教育	二七
第二節	戦後復興時代の教育	二八
第三節	特別教育	二三
第四節	日本統治領時代の教育	二三
第五節	原住民に対する教育	二三
第六節	普通教育	二三
第七節	職業教育	二三
第八節	宗教教育	二四
第九節	社会教育	二六
第十節	日本人に対する教育	二六
第十一節	普通教育	二六
第十二節	中等教育	二四
第十三節	青年教育	二四
第十四節	其の他	二四
第十五節	社会教育団体	二四
第十六節	南洋群島文化教育	二四

第十一章 衛生

第一節	衛生状態	一四
第二節	衛生施設	一五
一、	医療機関	一五
二、	医療費	一五
三、	衛生試験所	一五
四、	死因調査	一六
五、	住宅及便所の改善	一六
六、	上水道	一六
七、	種痘及健康診断	一五
八、	養老所	一五
九、	性病予防	一五
十、	結核予防	一五
十一、	防疫	一五
十二、	地方病	一五
第十三節	ヤップ島人口減少の原因調査及対策	一四

附 属 統 計 表 目 次

一、總計刑數	一六
二、各處刑積	一六
三、人口	一六
四、人口（居民）	一六
五、刑罰	一六
六、刑罰吏	一六
七、刑罰刑事之件取扱件數	一六
八、各處刑事之件総局人員	一六
九、各處刑事之件取扱件數	一六
十、刑罰事件之件數	一六
十一、各處刑事之件有罪人員刑名別	一六
十二、各處刑事之件有罪人員刑名別	一六
十三、刑罰者	一六
十四、刑罰及刑罰者	一六

—
—
—

二十五、	國庫補助金累年表	一九六
二十六、	國庫補助金特別會計歲入歲出豫算比較対照表	一九七
二十七、	總額事業費一觀表	一九八
二十八、	百濟廳特別會計豫算	一九九
二十九、	國庫補助金累年表	二〇〇
三十、	所得稅	二〇一
三十一、	煙草稅及法人營業收益稅	二〇二
三十二、	釐金稅	二〇三
三十三、	通行稅利益配當稅及臨時利益配當稅	二〇四
三十四、	國稅	二〇五
三十五、	出港稅	二〇六
三十六、	郵便、電信及電話收入	二〇七
イ	總數	二〇八
ロ	郵便切手類收入	二〇九
ハ	電信收入	二一〇
ニ	電話收入	二一一

イ 総数	一六
ロ 通商貨下料	一六
ハ 建築貨下料	一六
ニ 物品貨下料	一六
二十八、電燈収入	二〇
二十九、口紙収入	二〇
三十、税額及沒收金	二〇
三十一、通計及手数料	二〇
三十二、雜入	二〇
三十三、官有物拂下代	二〇
イ 総数	二〇
ロ 物品拂下代	二〇
ハ 船舶土地拂下代	二〇
三十四、林業収入	二〇
三十五、医院収入	二〇

三十六、非島民入頭税	二二
三十七、島民入頭税	二二
三十八、南洋群島地方發歲入歳出豫算表	二四
三十九、地方發歲入歳出決算表	二六
四十、地方費税	二七
四十一、南洋群島に於けるキリスト教々勢	二九
四十二、南洋群島に於ける佛教々勢	二九
四十三、南洋群島に於ける布教者の國籍別	三〇
四十四、南洋群島に於ける天理教々勢	三〇
四十五、官立医院診療患者病類別	三一
四十六、傳染病	三一
四十七、種痘施行人員	三一
四十八、ヤップ島(本島) 島民出生死亡数比較	三三
四十九、ヤップ島(本島) 島民死亡者病名別	三四
五十、ヤップ島(本島) 島民の肺結核に因る死亡者年齢別	三五
五十一、ヤップ島(本島) 島民の死に若給数に対する結核性疾に因る死亡率	三五

五十二、ヤツフ島（本島）	島民人口に対する結核性疾に因る死亡率	六
五十一、ヤツフ島（本島）	島民健康調査結果表	六
五十四、ヤツフ島（本島）	島民健康調査に於ける肺結核患者年齢別	六
五十五、ヤツフ島（本島）	島民人口に対する健康調査に於ける結核性患者比率	七
五十六、ヤツフ島（本島）	島民カナカ族性病調査結果表	七
五十七、ヤツフ島（本島）	島民カナカ族性病患者年齢別	八
五十八、ヤツフ島（本島）	公学校児童性病患者	九
五十九、ヤツフ島（本島）	カナカ族婦人婚姻並に妊娠状態調査結果	九
六十、ヤツフ島（本島）	カナカ族婦人妊娠状態調査	九
六十一、ヤツフ島人口一覽表		九

第一章 序 説

南洋群島は、赤道以北の太平洋上、東經百三十度から百七十五度、北緯二十二度迄の海面に散在する島々で、小笠原群島の南に連つて北から南に走るマリアナ、赤道に併行して東西に連るカロリン、その東にあるマーシャルの三群島から成てゐる。その島数は六百二十三、マーシャル群島の六十島が更に八百余の礁島に分れるところから一千四百余となる。

しかしミクロネシアと呼ばれるだけに、その陸地面積は孰れも狭少でマリアナ群島中のグワム島が最大島であつて面積五百八十六方キロ米あるが、これが除外されるので、群島の総面積は僅かに二千四百四十九方キロ米に過ぎない。我が國と南洋群島とは、その小笠原群島の南に連る地勢上、早くから何等かの交渉があつたとは想はれるが、近代に於ける經濟開發の先驅とも目すべきは、一八九〇年田口卯吉氏の創立した南島商会、一八九一年創立された快通社と恒信社、一八九三年創立された南洋貿易日置合資会社等であつて、孰れも百噸に満たない帆船で通商貿易を行つたものである。

南洋貿易日置合資会社は南洋貿易株式会社の前身で、ボナベ、トラツク、サイパン、グワムの各島に支店を設置し、帆船長明丸（九十六噸）を使用して盛に通商貿易に従事したが一八九九年中、独逸官憲の忌む処となり、トラツク、ボナベの支店を閉鎖しなければなくなり、一九〇六年頃、村山商会と合併して株式組織とし、南洋貿易株式

会社となつた。

南洋貿易株式会社は商權主としてヤルト会社と独逸西カロリン会社の二社に歸し、他に英商としてバインス・ヒリツプ商会があつた中に伍して、堅忍克く事業を継続し、群島が我が統治下に置かれてからは益々事業を拡張し、群島内は勿論、南太平洋諸島やセレベス島にまで、支店、出張所を増設し、交通に通商に力を伸ばした。

一六八六年、西班牙は南米を經由して本國と比律賓を繋ぐ中継基地として重視して來たマリアナ群島の外、カロリン、マーシャルの兩群島をも併せ、三群島全部を正式に其の領土に編入したが、一八八四年独逸は北東ニューギニア、ビスマーク群島、ソロモン群島、ナウル島等を占有した勢に乗じてマーシャル群島を占拠し、更にカロリン群島に手を伸ばし、一八八五年西カロリン群島のヤツプ島を占領しようとしたので西班牙との間に烈しい紛争が起り、ローマ法王の仲裁で結局、群島の領有權は西班牙に歸し、独逸には特定の交易權が與へられた。

しかし、独逸は依然としてマーシャル群島の占拠を続け、ヤルト会社を創立して群島の經營に銳意し一八八八年英國と協商を遂げギルバート諸島は英國領、マーシャル群島とナウル島は独逸領と定めた。

一八九八年、米國との戦争に敗れた西班牙は比律賓とグワム島とを米國に割譲した。

独逸は西班牙の財政窮乏に乗じ一八九九年爾余の群島を買収した。

かねてマーシャル群島を基点として經營怠らなかつた独逸は全群島の領有を遂げるや、南ニューギニアを根拠とし北、遙かに中國山東省の青島と呼應し東亞政策を進展する重要な中継基地として群島の開發と施設の充実につとめヤツプ島を中心とする通信施設、學術的探險、アンガウル島の磷鉍採掘等をなした。

一九一四年第一次大戰勃發、惹いて日独戰となり、我海軍の南遣支隊は南下して連合國との共同作戰に任じ同年十月南洋群島を占領した。

日本は南洋群島占領と同時に軍政を布き臨時の治安維持に任じ、同年十二月南洋群島防備隊條令を發布し、司令部をトラック島に置き全群島を分つて五民政区とし、各民政区に守備隊を配置し各守備隊長を軍政廳長として民政事務を兼掌させた。

一九一八年には南洋群島防備隊司令官の下に民政部を設け、從來の軍政廳を改めて民政署とし、文官を民政署長とし、守備隊は専ら地方警備の任に當る事とし、茲に群島民政の端緒を開いた。

一九一九年のヴェルサイユ平和條約其の他の規定に依り南洋群島は委任統治地域となり、日本は受任國として一九二一年からこれが統治の任に當ることとなつたので、同年七月純然たる行政廳設置の準備として民政部を司令部から分離し、これをパラオ群島中のコロール島に移轉した。

次いで一九二二年三月、從來の南洋群島防備隊條令を廢して軍隊を撤退すると同時に新に南洋廳を設置した。

さて、此の間に於ける財政の状況を大觀するに、南洋群島の歳計は一九一五年九月公布の南洋群島民政會計規程に依り、民政に要する費用は租税、手数料及其の他の收納金を以てこれに充てる事とし、特別會計に準じて実施されたが、歳入額僅少で行政費の一部を弁じ得るに過ぎず、統治の經費は主として臨時軍事費特別會計から支弁されて來た。一九二二年南洋廳官制の実施と共に南洋廳特別會計法が制定され、租税其他の收入及一般會計からの補充金で諸般の歳出を充當することになつたが、當時を顧みれば、歳入総額六百五十万円の内、五百二十万円までが一般會計か

らの補充金であつたのである。

産業方面を見れば、南洋貿易株式会社のように以前から地歩を固めてゐたものがあつてコブラの集散其の他に活動し、アンガウル島の燐礦採掘事業は、一九〇九年から独逸南洋燐礦株式会社が着手してゐたのを南洋経営組合及海軍の手を経て一九二三年南洋廳設置以來其の経営に移されたが、島民の間にはまだ近代産業と見るべきものは育成されてなかつた。

占領後、全群島に亘つて企業投資を試みた者は多かつたが、概して熱帯地の経験に乏しく、且つ、不幸にも偶々経済的恐慌に遭遇したので其の多くは失敗してしまい、其の他の者も交通の不便、地積の狭少、調査の不充分等の爲め経営意の如く運ばず、内地有力資本の関心は、大企業の進出を阻み、全般に群島の産業が苦難不振の様相を呈するに至つた。

一九一七年以來サイパン島で西村拓殖株式会社と南洋殖産株式会社とが企てた製糖業の失敗は多数従事者を路頭に迷はせると言ふ悲惨な事になつたので、東洋拓殖株式会社を中心に善後策を講じ、一九二一年十一月其の爲めに南洋興發株式会社が創立された。

南洋興發株式会社は資本金三百萬円で創立され、一九二三年サイパン島で製糖を始め、一九二六年には酒精製造をも始め、一九三〇年にはテニアン島でも製糖を始め、資本金七百萬円に増資した。

南洋興發株式会社は其の後、各種の事業を営み、資本金も一九三三年には二千萬円、一九三七年には四千万円と言ふ工合に増資し、群島産業の中核的存在となり、終には其の資本金五千万円に達したが、この初期に於ける糖業の成

功は実に群島の産業に曙光を與へたもので、糖業は群島の主たる産業の一となり、その年産額二千万円を超えるに至つたが、これに伴れて各種の産業が漸次活氣を帶び、交通通信の發達と相俟つて益々好調となり、一九三二年財政は独立し、一九一四年僅かに数十名に過ぎなかつた在留邦人は一九二七年に一万、一九三〇年に二万、一九三三年に三万、一九三四年に四万、一九三五年には五万と言ふ激増を來し島氏の人口と伯仲するに至り、爾後、この増嵩を続け、ついに在留邦人の数は島民人口に倍加した。此の事實は一面群島經濟開發の進展を示すと共に群島の特色と言ふべきであつた。

一九三七年、支那事變勃發以來、我が國産業經濟界の劃期的轉換と我が國を繞る四圍の國際情勢の変異とに促されて我が國唯一の純熱帯地であつた群島の資源開發に意を向ける者が俄かに多くなり、其の間、有用各種地下資源の發見等に刺戟され、從來の主要産業であつた糖業、燐鉍、水産業、コブラ事業、林業等が進展した外、ボーキサイド鉍業、満俺鉍業、樹果皮及纖維生産其の他の新規企業も起つて來た。

東西二千七百哩、南北一千三百哩に亘る廣大な海面に散在する多数の小島から成つてゐて其の総面積僅かに二千四百九十九方キロ米に過ぎない南洋群島を開發して施政二十年足らずで財政は独立し爾後歲計は逐年膨張して二千万円台となり、産業の生産総額六千万円を超えるようになったことは、日本民族が熱帯地開拓の試験に合格したことを明示するもので、此の尊き経験は將來廣く熱帯諸國の産業開發に貢獻し得るものとの自負を感じて居たのである。

南洋群島は小笠原群島の南に連り、中にハワイと比律賓とを繋ぐ要衝グワム島を抱き、西は比律賓やセレベスに隣し、南はニューギニアに近く、東南には南太平洋諸島を控えてゐる。

此の地理上の位置からして南洋群島の経営は南洋群島自体を開発するばかりではなく、進んで南洋群島を中継基地として廣く南洋諸外領各地との文化交流、經濟提携を遂げ相互に共存共榮、以て熱帶資源を開発し世界經濟の進運に寄與しようとしたところに意義があつたのである。

南洋群島開發が漸く進み、其の実績が漸次に揚がつて來て、熱帶地開拓の自信が高まつて來るにしたがつて此の意識は自然と萌芽を出して來たのであるが群島を基地としてニューギニア、セレベス、小スンダ等の一角に試みられた事業も現はれ、濠洲北方アラフラ公海に出漁する採貝業の發展等現実に群島基地化の機運が醸成され、また比律賓ミナナオ州のダバオ外各地に邦人の事業が漸く其の地歩を占め經濟提携の因子として期待し得たので一九三六年には開拓融資を目的とする南洋拓殖株式会社の創立を見、南洋廳としても從來の産業試験場の機構を拡大して熱帶産業研究所とし、一九三七年には水産試験場を独立官署とする等産業施設を整え諸般産業の指導を積極化して群島の開發を進めると共に他日に備えようとし、群島の諸施設、對外航路、港灣、通信等の整備拡充に乗り出し一九四一年にはパラオ、東京間無線電話の開通、パラオ放送局の業務開始を見、主要港灣の拡張工事も進捗中であつたが内外情勢の推移は必ずしも所期に副はずつに破局を見るに至つたことはまことに遺憾であつた。

群島の貿易を概観するに、その大部分が内國貿易であつて移輸出貨物としては砂糖、コプラ、貝殻、鯨節を主なものとし、移輸入貨物としては米穀其の他食糧品、煙草、車輛、船舶、機械類、綿布、綿製品、木材及木製品等を主なものとし、大勢は出超の好況にあつたが、食糧を始めとし在留民の生活、群島の建設共に其の資財を内地に仰ぐ状態であつて太平洋戦争となるや、交通の破壊、各島の孤立の結果、物資の需給極度に窮迫し、農林、水産業等に關し極

力其の自給率を高めることにつとめたが、ついに悲惨な結果を告げた。

廣い海面に小島散在する群島の地理的關係は金融機關の出現を阻み、そのはじめは僅に講演等に依る外なく、各種事業家は資金の融通並に運轉に多大の困難を余儀なくされ、産業開發上甚だしい不便を嘗めて來たが、一九三二年産業組合が出来てから多少息をついたが爲替は郵便爲替に依る外なく、又荷爲替手形の利用も出来ないで商業金融上にも多大の支障があつたので、普通銀行の設置が要望され一九四三年來台灣銀行を招致し其の支店開設の準備にとりかゝつたが業務開始を見ないでしまつた。

かく、南洋群島の開發は其の成績相当見るべきものがあつたとひそかに自負するところであるが、其の整備は總てが未完成の儘、終止符を打たねばならなかつたことは遺憾である。

たゞ、終りに一言して、わずかに自ら慰め得ることは島民との關係である。

邦人の島民に対する態度は、往々にして感心の出來ぬ事例もまれにはあつたが、概して觀れば南島商會の昔から誠意を以て臨んだので其の信望を博し、施政以來、島民の所遇は一意専心其の福祉の増進を図ることを念として行はれ、元來固有の文字を有せず、各島其の言語、風俗を異にすると言ふ状態にあつた島民が我が施政によつて、共通の文字と言語を與えられ、その日常に便し、地方開發の進展が直接、間接に生活の向上を招來し島民の性情は著しく惇化され、わが厚生、教化の施設は常に感謝の的となり、一九一九年國際連盟脱退の際にも民心極めて平靜に過ぎた。ちに西班牙領時代とか独逸領時代に起きた血腥い島民の反乱と言ふような事件が一回もなかつたばかりでなく、終戦となつて邦人が引き揚げる際には一般に頗る別離を悲しんでくれたと言ふことは顧みてわが島民対策がときとして同

化に急であつて其の旧慣習俗を深く省みない点がなかつたではないが、終始一貫、誠意を以て福祉の増進を念としたことが島民の心に共感したものと云へよう。

従来よりの人口減少を抑へ激増の姿に変へ青少年の殆んどすべてに初等教育を終了せしめ島民の子弟を教育した公学校の本科卒業生累計が一万五千名を算し島民全人口の三十パーセントに達した如きは正に其の一端を物語るものである。

第二章 前 史

第一節 総 説

一、群島の発見

第十六世紀の頃歐洲に於て航海術の發達するや、スペイン、ポルトガルの探險者は競つて東西に航し、前人未踏の陸地の発見に従事したのであつたが、我が南洋群島も亦之等の探險者に依つて発見せられたのである。

然し茫洋たる太平洋上に散在する孤島なるを以て発見の時期は同でない。発見者も亦其の人を異にするは言を俟たない。偶に発見せられても、蕞爾たる孤島で其の價値の少ないと見てか多くは等閑に附せられたものゝ如く、発見後の歴史も交渉断続し、今に於て詳ならざるものが多い。三群島中マリアナ群島は最も早く発見され且最も早く文化に触れたるものにして、其の初めに遡れば略三百五十年を算する。他の二群島中カロリン群島の発見はマリアナ群島と殆んど同時代に属すると雖も、文明人が之に手を着けたのは最も後代に発見されたマーシャル群島と殆んど同時期で之より僅かに五十余年前である。

二、発見後の推移

マリアナ群島は第十六世紀の初頃ポルトガル人に依つて発見され、次でスペインの手に歸し、フィリッピン及グワ

ムと相併せて、其植民地的統治の目的物であつたが、其の政策酷に失した爲、土人の叛乱に遭つて一敗復起たす空しく経営の遺跡と土人虐殺の口碑とを今日に残して星霜三百数十年事蹟として見るべきもの殆んどなかつた。

次で第十九世紀の末葉に方りドイツ、マーシャル群島を領有するや、当時カロリンの諸島徒らにスペイン領の名を持つて其の突のないのに乗じて之が略取を試みるに及んで、スペイン政府は狼狽して起ち其の主権を争つたが紛争決せず兩國の危機逼りつゝあつた処、偶々ローマ法皇の仲裁を得、ドイツの其の他の權利を認めてカロリン群島は全部スペインの領有に決した。之一八八六年であつた。爾來同國は從來領有したるマーシャル群島と併せてカロリン群島の統治に意を注ぎ、官吏及宣教師を派遣して之が開発に任すること十四年、越えて一八九九年に至り、スペインが米國との戦争の結果財政困難に陥るを見るやドイツは之を寄化としてマリアナ、カロリン兩群島の讓與を提議し、折衝の末同年六月遂に之を買収した。茲に於てドイツは南洋群島を其の保護領として獲得した。ドイツが南洋群島を統治すること十六年一九一四年に至り、歐洲大戰勃発するや我が海軍南遣技隊の占領する所となり、次で対独平和條約其の他の規定に依り我が國が之を委任統治を爲すに至つた。

第二節 スペイン領時代の治績

スペイン治政約三百年の跡を観るにグアム、ロタ、サイパン等マリアナ群島に在つては土地の整理及島民教化の二つの点に於て今日に於ても尙治績を認めることが出来る。即ち島民に地券を給付して、その土地所有の根柢を與へ各島に多数の宣教師を派し、教会を建立し、学校を設け島民をして徹底的に基督教に帰依せしめ、往時の鬭争的チャモ

ロ族を今日の溫良な民と化せしめた。

スペイン時代に給付せられた地券はドイツの領有時代に於て更新され、次いで我國統治下に入つて以來の島民の土地所有權も之に基いて確定されたものが多い。カロリン群島にあつてはヤツプの政廳、ボナベの城壁にスペイン施政の跡を認め得る外各主要島には今日尙カソリック教会が存在し、宗教的には完全に島民の心を把握し居つた様に見えるマーシャル群島にはスペイン治政の跡として認むべきものは今日一つも存在してゐない。

第三節 ドイツ領時代の治績

一、総説

第一節の二の発見後の推移によつて觀るやうにスペインは一六八六年初めて三群島の領有を宣言したが、グアム島を主とするマリアナ群島の施政には一五六五年に於ける占領以來相當の苦心と努力を拂つた証左は顯著であるが、カロリン、マーシャル兩群島に対しては治績の視るべきものなく、唯ヤツプ及ボナベに一種防禦的施設と二、三建築物とを残して、その施設の一端を想はせるものがあるのみで、兩群島の島民中にもスペイン時代を語るものがない。之に反してドイツは國內事情の爲東亞、南洋の探見及發展については列國より後れること三百年、第十九世期末に至つて漸く乗り出し得る様になつたので植民地獲得熱極めて熾烈で一八八五年にはスペインの領有が名のみで何等その根柢のないのに乗して、マーシャル群島を領有し、次いで一八八九年スペインよりグワム島を除いた群島全部の讓渡を得て以來拮据經營至らざるなく領有僅か十六年に過ぎなかつたが事績の見るべきものが相當あつた。

二、マーシャル群島に於ける産業的經濟

マーシャル群島はニューギニア、ビスマーク群島と共にドイツの南洋經營の發祥地であり、又最も意を注いだ所である。即ち領有後二年にしてヤルト会社を創立せしめて、之に群島拓殖の全權を附與し、通信、航海の保護を與へる等恰も、英國の東印度会社に類する組織の下に本群島の開發に当らしめ、約十年にして本群島に於ける産業的基礎を確立せしめた。然るに一九〇六年に至つてドイツ政府はヤルト会社との契約満期を機として同社に與へた行政權を政府の手に回收し、同会社は専ら營利会社として立つ様になるや多年扶植した勢力を以て南洋群島の産業的獨占を企圖し、西はヤツプ、パラオに至るまで活躍の手を伸し覇を全島に唱へた。従つて当時全群島に於ける貿易の中心は實に群島の東端たるヤルトにあり、西はシンガポール、香港に南はニューギニア、濠洲に、東はアメリカに至る交通の中継地として船舶の出入絶えることのない盛況であつた。

ヤルト島は高さ僅かに数呎、面積八方杆に過ぎない小島に拘らずマーシャル群島の主腦地としてその位置を維持し附近諸島產出のコブラ集散地として南洋群島第一の地位を獲得したのは地味、其の他の關係にも因るがドイツ人の經營宜しきを得た事が與つて力ありと謂ふべきである。

三、ヤツプ島に於ける通信施設

南洋群島を中心としてのドイツの太平洋經營の跡を観る時、其の規模の極めて雄大なのに氣づかざるを得ない。即ちニューギニアに總督府を置き北方遙かに太平洋を隔て青島と相呼應し、其の間太平洋に碁布散在する南洋群島を中継地とし、以て東亞に覇を制せんとするかに見えた。之れが第一着手として計画したのは太平洋通信權の確立であつ

て、一九〇六年ヤツプ島を中心とした海底電線を敷設し、北はグワム及上海に、南はセレベス島ツナードに連絡せしめ、外に一九一三年には大規模の無線電信を同じくヤツプ島に建設し、以て有線、無線両面を通して太平洋の通信權を掌握し以て將來の飛躍に備え様とした。

四、學術的探險

ドイツが群島の經營に腐心したのは常に經濟或ひは通信等の部面に於てのみならず、群島の資源の探險開發に於ても異狀な努力を拂ひしは専門家を屢々派遣し、群島隈なく探險に従事せしめたる事によつても想像されるところである。今日群島各所で採掘されてゐる燐鉍の如きも實に是等ドイツ探見者の發見に係るものである。

その外ドイツは継続的群島の學術的探險を爲さしむるために、特に測量船「プラネット」号をして各地を巡回せしめた。

一九一四年我が海軍のヤツプ占領の際「プラネット」号は偶々同港内に在つて自沈し終つたが、同船が學界に寄與した功績は洵に偉とせられてゐる。

五、教化的施設

ドイツは亦盛に土人の教化に努め、新旧兩派のキリスト教宣教師を派遣し布教に従事せしめたる外、所謂宗教學校を設立して、島民兒童の教育に従はしめ、又ドイツ普及の爲宗教學校に補助金を給與した。

現に支廳所在地たる各島に於ける教会若くは布教所は多きは十数ヶ所、少なきも四、五ヶ所を數へ、ドイツ領當時布教従事者として派遣されたドイツ人男女合せて百名を算した事実を観ても如何にドイツが島民教化に努めたかは容

易に想像し得られる。

其の外にドイツはサイパンに小学校を設立して各群島より優秀児童を選抜して之を入学せしめ、更に適才を選んで遠く青島に留学させた如きは島民教化に意を注いだ跡歴然たるものがある。今日でも相当の年齢に達した島民中所謂知識階級に属する者の中には是等留学者を散見することが出来る。

キリスト教普及の成績は教義の徹底は兎も角として、島民の性質を感化してその野性を減少せしめた効果は極めて顯著であると謂えよう。

六、行政的施設

ドイツ政府はニューブリテン島ラバウルに總督府を置き南洋群島を其の麾下に隸屬せしめ、群島各地に政廳を設け附近諸島を管轄せしめた。其の官吏には多くは予備軍人を用ひたらしく、又アフリカ、トーゴの在外官吏と交互交代せしめたものの様である。

然し其の政策は主として母國本位に陥り、或は苛酷に失し、或は圧制の行はれた跡なしとしない。ボナペ島に於ける所謂「ジョガージ」の叛乱等の如きは其の反映として顯著なる事例と謂い得る処である。医療の如きも救療の爲よりも寧ろ學術的研究の対照とした場合が多かつた様に見られ、我が國占領後島民患者が病院に來ることを避ける風があつたことは之に基因したのではないかと謂はれてゐる。

然し一般行政の跡を観るに其の施策の遠大にして適切なるは誠に功績の稱ふべきもの尠くない。

第四節 占領前に於ける我が國との交渉

一、總説

我が南洋群島は渺茫たる大洋によつて遙かに隔絶せられてはゐるが、水路一直南北相通する位置にあるので早くより我が國と何等かの交渉があつたことを想はせるが、何等文献に徴すべきものなく、唯僅かに口碑傳説に依つて今人が兎や角附会するに過ぎない。

近代に於ける我が國と南洋群島との交渉は一八九〇年東京府士族授産資金を以て企てらせた南洋通商の開始に其の起源を求める外ない。

之に先だち我が官憲と南洋群島との間に二、三の偶発的交渉があつた。以下年代を追つて順次敘述する。

二、官憲との交渉

(イ) 軍艦の寄港

一八八四年軍艦龍驤が海軍兵学校卒業生を乗せて遠洋航海の途次カロリン群島ボナペ管内クサイ島に寄港した時、酋長は我が軍艦を見て大いに悦び來訪し「口碑の傳へる処に依れば我等の祖先は日本人である。我等は実に日本人の子孫である」として、誠意を披瀝したと謂はれる。此の事實は内外に傳へられたるが、彼等と日本人とは容貌相似たるの外、何等血縁たるの証拠もなく、「クサイ」は九州の訛音なりとの説をなすものがあるが、採るに足らぬ附会の説と謂ふべきであらう。

(ロ) 邦人虐殺事件調査

同じく一八八四年横浜、濠洲間を交通する英國帆船「エーダ」号は、マーシャル群島ラエ島に於て漂流日本人の虐殺されたことを報じた。而して我が外務省は此の報を得て、御用係後藤猛太郎を特派して事件を調査させることとなり、一行は同年九月一日横浜を發して同月二十三日マーシャル群島ウシヤエに到着し、酋長に交渉して、事件の真相を調査し、謝罪の條件を決定して一八八五年一月横浜に帰着した。

尙本事件を報じた「エーダ」号にも数名の日本人が水夫として乗込んで居つたとのことで、之を以て觀ても当時日本人が屢々南洋群島に往來した事は想像に難くない。

三、民間との交渉

(イ) 南島商會

一八九〇年田口卯吉は東京府士族授産資金四万四千円を以て南島商會を組織し帆船天祐丸(九十一屯)を購入し、田中以下一行十七名を以て同年五月十五日横浜を出帆、途中小笠原、グワム、ヤップ及パラオの諸島を経てボナベに到り此処に南島商會を創立した。

南島商會は誠意を以て島民に接し大いに彼等の信望を博したとの事であるが、経営意の如く行かなかつたのか、創業幾許もなく業務を他に譲渡し、一屋商會の名の下にその事業は継続されたが、之又收支相償はず、一八九五年遂に解散の己むなきに至つた。

(ロ) 快通社及恒信社

一八九一年快通社及恒信社なるもの創設され、何れもトラック島を本拠として貿易事業を經營したが、快通社は使用船坐礁に因り解散し、恒信社は一八九三年トラック島よりパラオに移轉し一九一四年我が占領前迄その事業を継続した。

(ハ) 南洋貿易日置合資会社

南洋貿易株式会社の前身にして、其の創立は一八九三年に係りボナベ、トラック、サイパン及グワムの各島に支店を設置し、帆船長明丸(九十六屯)を使用し、盛んに通商貿易に従事したが、一八九九年中ドイツの官憲の忌む処となりトラック、ボナベの支店を閉鎖するの余儀なきに至り、一九〇六年頃村山商會と合併して株式組織とし、日置の二字を除き、更に南洋貿易株式会社と改称した。爾來資本を増加し、事業を拡張して南洋群島は勿論、南太平洋諸島及蘭領セレベス島に迄その支店、出張所を増設し盛大にその事業を經營しつゝあつたが、一九四二年四月南洋興発株式会社と合併した。

(ニ) 其の他の事業家

以上の外單獨で此等孤島に航して拓殖に従事したものも尠くないが、然し地積が狭少であり、且内地との交通極めて不便であつた爲、事業上不利の多く、又資金豊富を欠く等の事情もあつて拮据經營數十年、其の業績必ずしも之に伴はない恨はあつたが、克く堅忍その志を持して漸次基礎を固めつゝ今日に至つた人も相當數に達する。

第三章 自然

第一節 総説

一、位置

南洋群島は赤道以北の太平洋に散在する旧ドイツ領マリアナ、カロリン、マーシャル三群島を総称したもので、東経百三十度より百七十五度北緯零度より二十二度に及びその包容する海面は東西二千七百哩南北千三百哩に亘り、其の間大小千四百有余の島嶼基布栗散してゐる。之を大観すれば北東遙に米領ハワイに相對し南東に南太平洋諸島を望み西はフィリッピン及蘭領セレベス島と相呼應し、南はニューギニア島と相隣し北は小笠原硫黄島に連つてゐる。

二、布置

南洋群島即ちマリアナ、カロリン及マーシャル三群島の布置の状態を観るにマリアナ群島は小笠原群島の南に連つて北より南に走りカロリン、マーシャルの二群島は赤道に平行して東西に連り、三群島の布置略逆丁字形を爲してゐる。小笠原諸島の直南七百四十哩にマリアナ群島の主島サイパン島あり、更に南下すること六百六十哩にしてカロリン群島の主要島トラック島に達する。トラック島は所謂逆丁字形の相交る處で即ち南洋群島の中心点に當る。

カロリン群島は之を東経百四十八度に於て東西に分ちパラオ、ヤップの諸島は西カロリンに屬し、トラック、ボナ

べの諸島は東カロリンに屬する。東カロリン群島の東方にマーシャル群島横はる南洋群島は東西に長く、南北に短く散在するを以て内地群島間の交通は固より群島内主要島間の交通亦頗る不便で各群島在住民間の言語相通じない所以亦茲に存する。全群島の諸島孰れも狭少で最も大きいボナベ島及ダベルダオブ島（パラオ本島）の如きも漸く三百七十方料に過ぎない。従つて各島内の地勢にして持筆すべきものはないが、地質上火山岩より成るものと、珊瑚礁より成るものとに依つて全く其の趣を異にする。即ちマーシャル群島は孰れも珊瑚礁にして水面上僅かに五呎内外の低平なる陸地に過ぎないが、マリアナ、カロリン両群島は多く大山岩を母岩として地勢一般に急峻である爲、或は全く耕地が無い爲無人島であるものが尠くない。山嶽は概して低く七百五十米を超えるものなく、河川も溪流にして舟楫の便あるものがない。

三、地質

南洋群島の各島は主として火山岩及珊瑚礁より成るものにして、唯ヤップ島のみは古紀変質岩系の結晶変岩類より成る。

（イ）珊瑚礁

珊瑚礁は暖海に棲む珊瑚虫の石灰質骨格より成る岩礁で、海中に低平系狀を爲して發達し、其の部分的形態は千様万態であるが、形狀及位置に依り之を三種に區別し、縁礁（又は裾礁とも称す）堡礁と称する。然し其の間確然たる區別存するわけなく、悠久なる歳月を経過する間には遷移の状態にあるものもある。縁礁とは陸地（珊瑚礁より成る陸地に非ず、普通の土壤の陸地を指す）の周縁に沿いて高潮に低潮との汀線に發達したものの称で、群島

中陸地のある処心ず之を見ない処はない。

保礁とは島と礁との間が断離して其の間海水を湛へるものの様で東カロリン群島のトラツク島の如きは其の最も代表的通例である。玄武岩質の幾多の小島から成る同島は各自其の周囲に壯大な縁礁を帶し、更に其の外廓は周延百二十哩余に渉る一大保礁を有し、其の縁礁と堡礁との間に廣大な礁湖を形成してゐる珊瑚島であつて、環状又は不規則な円状を画いて發達し、其の環の内部に一大礁湖を形成するもの、換言すれば中央に陸地を抱擁しない堡礁であり、マーシャル群島に多く其の例を見る。其の最も世人に知られてゐるものはヤルト島であつて、其の礁湖の長径三十三哩に及んでゐる。環礁は海拔極めて低く扁平なものを常とし、ヤルト島は一環礁の上に形成された多数の珊瑚島の総称で高潮面五呎を超えるもの稀である。

(四) 隆起珊瑚礁

以上の珊瑚礁の外に隆起した珊瑚礁がある。パラオ諸島及マリアナ群島の南部に多く、サイパン、テニアン島の如き数段の「テレース」(段丘)を成してゐるものは間歇的隆起作用に因るものとされてゐる。

(ハ) 火山岩類

火山岩類は之を玄武岩安山岩の二種に分つことが出来る。玄武岩はカロリン群島中トラツク、ボナパ及クサイ島等に於て見ることが出来るが、比較的古き時代の噴出岩にして是に生存する珊瑚礁の基底を成すものである。安山岩はパラオ諸島及サイパン島が多く、之等の諸島は概ね安山岩を母岩とするもの、又は隆起珊瑚礁との混成によるもので稍複雑な構成を有する。

(ニ) 燐 鉍

パラオ諸島に属するアンガウル、ペリリュウ、トコベの三島及ヤツブ出張所管内に属するフハイス島等は燐鉍地として知られてゐる。

以上述べた如く群島の地質はヤツブ島のみ其の岩石を異にし、他の珊瑚礁を母岩とするものは石灰質より成る白砂であり、火山岩を母岩とするものは所謂熱帯赫土となり赤褐色又は褐色の粘土質土壤を形成してゐる。一般に南洋群島は海鳥の生棲多く諸処に燐鉍を産し、又到る処多少の燐酸分を含有するものの如く、農作物及林木の成長良好である。然れども各島の面積小にして且火山岩より成るものは地勢一般に急峻な爲河川の見るべきものなく、従つて沖積土の肥沃な土地は極めて少ない。加之日光の直射強く驟雨が又甚だ強いので伐跡地山火災等の爲一度裸になつた処は人工的に保護することなしには地力が減退して恢復頗る困難である。斯る理由に依つて各島には僅かに羊齒類の繁茂する大小の無立木地が尠くない。尙地質調査に就ては南洋廳熱帯産業研究所に於て各島に亘り引続き調査しつゝあつた。

第二節 各群島細説

一、マリアナ群島

南洋群島中最北部に位し南北に亘り相連る列島で中に数個の火山が有るが、これは小笠原諸島に同脈の火山帯の延長であると謂はれる島嶼の数は十四総面積六百三十九杆其の南端近くにサイパン島がある。マリアナ群島一帯を管轄

する北部支廳の所在地であるサイパン島は面積百八十五方呎近くにテニアン島を控え、南西六十五哩にしてセタ島あり、更に四十哩にして米領グアム島に達する。その位置が内地に最も近く全群島の関門として交通殷賑なるのみならず、テニアン島と共に土地比較的平坦で地味は糖業及農業に適してゐる。南洋興業株式会社がサイパン、テニアン両島に於いて製糖業を営み居たが、その成績顯著なるものがあつた。

二、カロリン群島

マリアナ群島の直南を中心として東西に連列する群島で東径百四十八度を以て之を東西に二分してゐる。その主要島を挙げれば最も西にあるのはパラオ島で、中間にあるはヤップ、トラツクその最東方にあるのがボナベである。

(イ) パラオ南洋群島最西部に位する群島で南洋廳及西部支廳はその属島である。コロール島にある西部支廳管内島嶼の数は百九、総面積四百七十八方呎内バベルダオブ島(パラオ本島)は面積三百七十六方呎を有するパラオは群島統治の中樞たるに止まらず、ヒリツピン、ダバオ蘭領セレス島及ニューギニア島にも航路があり、外南洋と内地との中継地として交通上の要衝を占めて居つた。パラオ本島には熱帯特殊産物なる「ボーキサイト」が産出されて本事業の経営には南洋アルミニウム鋳業株式会社が當つて居つた。アンガウル島は殆んど全島に燐鋳を以て覆はれ、群島の宝庫と謂はれ、之が経営には南洋拓殖株式会社が當つて居つた。

(ロ) ヤップ、パラオの北東二百六十哩にヤップ島あり、西部支廳ヤップ出張所の所在地である。管内島数八十六、面積二百二十六方呎その離島は北から東に基列して、五百数十哩の遠きに及んでゐる。主島ヤップ島は四箇の大島より成り、面積約二百十六方呎で地味極めて劣位とされて居るが、近來地下資源(銅鋳)が発見され、有望視

されるに至つた。又古くより海底電信の陸揚地として有名である。尙那覇との間に海底電信業務が行はれて居つた。

(ハ) トラツク、ヤップ島の東八百六十哩を隔て、一大叢島の散布するもの、即ちトラツク諸島で東部支廳は主要島夏島に在つた。管内島数二百四十五を算するが、その総面積は僅かに百三十二方呎に過ぎない。管内モートロツク、ボロワツト諸島を除く主要島が概ね四季七曜その他の和名を以て呼ばれて居ることは廣く知られて居る処だが、之等の主要島中夏島は我が軍政時代防備隊司令部が置かれた所であつた。

(ニ) ボナベ、トラツクの真東三百九十哩にボナベ島がある。東部支廳ボナベ出張所の所在地で管内島数は百三十八、面積五百四方呎(マーシャル群島の二十八島十五方呎を含む)である。ボナベ島は面積三百七十五方呎を有し、全群島中最大の島でドイツ時代此処に政廳が置かれて居り、群島行政の中心となつてゐた。島内山嶽連互して平地は乏しいが、集約的土地の利用に恵まれ、河川の利用し得べきもの亦尠くない。従つて同島は殖産開発上望みを囑する價值大なるものがあつた。

三、マーシャル群島

ボナベの殆んど真東約七百六十哩に一大環礁群の横たわるものがある。之即ちマーシャル群島である。ヤルト島は之等島群の南端近くに位置する一小島で、東部支廳ヤルト出張所の所在地であつた管内島数三十二(三十二島は更に八百六十余の礁島より成る)総面積百七十方呎を有し全島悉く珊瑚礁で、土地低平陸地の高さ海面上僅かに五呎を出てない地味は椰子樹の生育に適して到る処亭々たる樹が海面を圧して聳えてゐる。南洋群島「コブラ」産額中の

大半は本群島より産出せられたのである。

第三節 経度及緯度

(一) 南洋群島

経度 自東経百三十度至同百七十五度
緯度 自北緯 零度 至同 二十二度

(二) 各群島

群島名	経度	緯度
マリアナ	自 東経百四十四度 至 同 百四十六度	自 北緯十四度 至 同 二十二度
カロリン	自 東経百三十度 至 同 百六十一度	自 北緯零度 至 同 十一度
マーシャル	自 同百六十一度 至 同百七十五度	自 同 四度三十分 至 同 十五度

第四節 面積及島数

(一) 群島別

群島名	島数	面積(方呎)
マリアナ(グアム島を除く)	一四	六三九
カロリン	五四九	一、三二〇
マーシャル	六〇(更に八百余の礁島に分ける)	一九〇
計	六二三	二、一四九

(二) 支廳、出張所、管区別

支廳出張所名	島数	面積(方呎)
サイパン	一四	六三九
ヤップ	八五	二二六
パラオ	一〇九	四七八
トラツク	二四五	一三二
ポナペ	一二八	五〇四
ヤルット	三二	一七〇
計	六二三	二、一四九

(三) 主要島別

島名	面積(方呎)
マリアナ群島	サイパン島 一八五
"	テナアン" 九八
"	ロタ" 一二五
西カロリン群島	ヤップ" 二一六
"	パラオ本島 三七〇
東カロリン群島	春島 二二
"	夏島 九
"	水曜島 二三
"	ボナベ島 三七五
"	クサイ島 一一六
マーシャル群島	ヤルト島 八

(四) 最端地名

極東	マーシャル群島、レ環礁ナリーキリキ島
極西	西カロリン群島トコベ島

極南	東カロリン群島グリーンニツチ島
極北	マリアナ群島ウラカス島

第五節 氣象

一、概説

南洋群島は其の位置赤道に近く全島悉く熱帯圏内に在るので四季の別なく、一年を通じて温熱帯夏季の季候で所謂「常夏の國」である。然し各島共太平洋上に点在する小島なのである。然し各島共太平洋上に点在する小島なので四面海風絶えることなく、純然たる海洋性氣候で晝夜の別に依る氣象の変化も亦極めて少い。加之熱帯特有の風土病マラリヤ等は皆無であり、又毒蛇、猛獸等の棲息を見ず自然の思恵が極めて大きいので生活簡易家居従つて安易である。

二、氣象観測

パラオに南洋廳氣象台を置き、其の附属測候所を各主要島に設けて一般氣象観測を行ふ外、航空高層、産業氣象並海洋地震地磁氣潮汐の観測調査報告及研究を爲し、且群島各地の天氣予報暴風警報及海上航空氣象の通報を写し居つた。其の他の各島に於ては小公學校及巡查駐在所等に於て簡易氣象観測を行つて居つた。

三、氣圧

群島各地共低緯度に位する爲、総じて氣圧内地より低く其の变化度合も亦尠ない、之を観るにサイパン島附近に於

ては比較的高く其の他は低きを示し、其の変化に就ても各島共二月頃高く十一月頃低きを示す。群島内に発生した低氣圧は其の多くは前半は勢力の弱いことを通例とするが、後半に於て発達しつゝ北西に向ひ猛烈なる颱風となつて各地に甚大なる被害を與える。

四、氣 溫

全群島一般に殆んど氣溫相等しく又一年を通じて変化極めて尠く、パラオ、サイパン、ボナベ、トラツク、ヤルートの五箇所を平均して大体平均攝氏二十六度六となり、其の他最高平均二十九度二、最低平均二十四度四を測り全く海洋性氣候を表はす。

五、濕 度

群島は所謂高溫多濕であつて、平均八二%を測り、各島殆んど相違ないが、年内五月―十一月の間は一般に高く其他に於ては概して低い。

六、風向及風速

群島は廣漠たる海洋中に散在するを以て、風向自ら同じからず一概に云ひ難いが、殆んど全群島を通じて毎年十一月の候より翌年四月の候に至るまで北東乃至東の風吹き風向一定して動かず、所謂貿易風なるものである。五月より十月迄は風向必ずしも一定し居らず、各島に依つて趣を異にする。風速は年平均三、五米秒を測り、一、二、三月及十二月の頃強く七月―十月の間に於て弱い。

七、雨 量

全群島を通じて降水量極めて多く各地により多少の相違がある。之を平均して一年二、〇〇〇乃至五、〇〇〇耗を測る。之を内地の平均降水量一、七〇〇耗に比すれば殆んど二倍を示し、群島に於ける降水量の如何に多いかを覗ひ知る事が出来る。就中ボナベ島は全群島中最も雨量の多い地方にして其の一年間の降水量は四、〇〇〇耗以上に達する。

全島かくの如く雨量が多いが、其の降雨の状態は内地と異つて霖雨なるもの極めて尠く、主として短時間の豪雨で其の雨が来るや一沫の黒雲が天の一方に現はれるのに続いて冷風が起り、雨脚が忽ち襲つて來て沛然と雨を降らして須臾にして霰れるもの多く、恰も内地盛夏の驟雨に似てゐる。而して群島には乾濕期に劃然たる區別がないが、概して毎年七月乃至九月頃を雨季とし、一月乃至三月を乾燥期とするけれど、年々の狀況は必ずしも合致しない。強いて區別することは困難な様である。

八、暴 風

南洋群島は内地若は台湾を襲ふ颱風の發生地であるが、其の低氣圧は幼年期に属するものが多く、所謂暴風に達することが甚だ尠ない。然し廣濶な区域に亘る群島なるを以て稀に之が被害を蒙むる恐れがある。而して島嶼悉く狭小なるを以て一旦暴風の襲來を受ければ殆んど生色がない様になる事がある。土人は之を口碑に傳えて平時猶且風神を恐れること甚しい。ボナベ島にあつては一九〇五年大暴風あり、全島の椰子樹殆んど倒潰したと謂はれる。又一九一八年ヤルト島に海嘯を伴ふ暴風があり、一九二〇年にはヤップ島暴風襲來して被害尠くなかつた。越えて一九二二年同島は度々重ねて暴風の被害があり、更には一九二五年ヤップ島に近年稀な大暴風雨襲來と共に海嘯が起つて家屋

及山林植物農作物の被害甚大であつた。一九二七年五月にはバラオ諸島颱風に襲はれ、中心通過のペリリュウ島は人家一つとして全きものがない惨狀を呈して二十哩を隔てた南洋廳所在地コロール島も風速四十米に達して被害は戸数の八割を算した。一九三五年トラック島に一九三六年サイパン島に暴風襲來して之又被害尠くなかつた。

第四章 人 口

第一節 人口の概況

人口の動態調査は軍政時代及民政時代に於ても軍人及軍属を除き、大体の調査を行つては來たが素より完璧は期し難かつたが、一九二〇年十月一日、日本全版國內に國勢調査の施行せらるゝに當り、南洋群島に於ても國勢調査に關する法律に準じ、調査することとし一九一九年八月民政令第六号を以て島勢調査規則を制定し實質上の國勢調査を施行した。次で一九二五年五月南洋廳令第八号島勢調査規則に依り、同年十月一日を期し更に簡易なる島勢調査を行ひ一九二九年十二月南洋廳令第十号に依り、一九三〇年島勢調査規則を制定、一九三〇年十月一日現在を以て島勢調査を施行した。

かくの如くほど五年毎に実施に調査する以外常時の調査に關しては一九二〇年の島勢調査様式を利用し、又一九二〇年十二月臨南防民政部訓令第八号を以て戸口調査規程を設け、戸口簿を調製整備して常時此の第二義統計なる警察上の戸口調査に依り調査する事とした。

人口動態統計に關しては一九二〇年以來簡易な調査を行つて來たが、一九三一年十月南洋廳訓令第四十一号を以て一九二七年六月南洋廳訓令第十四号南洋廳報告例を改正し、人口動態の体系を整備してこれも一九三二年一月より施

行した。

一九二二年十月一日島勢調査に於ける人口総数は五二、三三二人、内邦人三、六七一人、島民四八、五〇五人、外國人四六人で、之を一九四一年末に於ける人口総数一四一、二五九人、内邦人九〇、〇七二人、島民五一、〇八九人、外國人九八人に比すれば総数に於て八九、〇三七人、内邦人八六、四〇一人、島民二、五八四人、外國人五二人の増加を示して居る。

一、邦人 邦人は一九一四年占領當時は僅に数十名に過ぎなかつたが、爾來急速度に其数を加へ一九二〇年十月一日に於ては三、六七一人を算し、一九四一年末に於ては九〇、〇七二人に達した。其大部分四八、六〇五人はサイパン支廳管内に居住し、パラオ支廳管内の二三、一八七人之に次ぎ其他の支廳管内に於ても数千人居住して居る。之等在留邦人を本籍地別に見れば殆ど全府縣に亘つてゐるが、就中沖縄縣最も多く、東京都及福島、鹿児島、鹿兒島の兩縣之に次ぎ朝鮮、台湾、樺太に籍を有する者も六、〇〇〇人に達して居た。

二、島民 島民人口五一、〇八九人中、チャモロ族は四、三九三人で其の大部分たる四六、六九六人はカナカ族である。チャモロ族はサイパン支廳管内に最も多く、ヤップ、パラオ、ボナベ、トラツク支廳管内にも居住するけれども、これはサイパン島又はグアム島より移住したるもので、其の数極めて少ない。カナカ族はトラツク支廳管内に最も多く、其の数一五、〇〇〇人、ヤルット及ボナベ支廳管内にも各約一〇、〇〇〇人、パラオ及ヤップ支廳管内各約五、六千人であつてサイパン支廳管内のカナカ族は総て他島より移住したるもので、其の数も僅々一〇〇〇人程度である。チャモロ族の人口増加率は比較的に高いが、これに反しカナカ族は甚だ低く、全群島を通じて稍々現状維持の

状態にあつてヤップ支廳管内のカナカ族の如きは逐年減少の状態にある。

三、外國人 外國人は占領當時独逸人最も多く、宣教師、商人等約一〇〇〇人の在留を見たが、其の後独逸人は全く退島して英米人等十余人に過ぎぬ時代もあつた。一九二一年西班牙宣教師及修道士三十余名が來島した外、其後も白耳義人、独逸人等次第に來島して一九四一年末に於ては九八人を算するに至つた。其の大半は宗教関係者で他は椰子栽培、コブラ仲買等の商業又は農業に従事して居た。

四、戸口調査に関する施設

戸口調査は群島の地理的事情並に島民一般の民度が低い等の關係上、甚しく不便利を感じて居るが、不断的努力を拂ふと共に五年毎に島勢調査を行ひ、可及的正確を期して居る。戸口調査に就き採りつゝある方法を挙げれば左の如くであつた。

イ 島民に対しては其民度上、俄かに戸籍若しくは民籍等の本籍制度を採用し難いので戸口の異動は不斷に警察官吏をして実査せしめ、其の事實に従つて之を整理すると共に、島民村吏をして出生、死亡、婚姻等身分上の異動の届出を爲さしてゐた。

ロ 邦人及外國人に対しても実査を行ふことは島民の場合と変りはないが、その異動に付いては本人より細大之を届出せしめた。

ハ 群島には未だ戸籍法がない爲、在住者は其の身分上の異動を本籍地に届出なければならぬが、地理的關係上法令の要求する期間内に内地本籍地市町村役場に届出づることが至難なので、他の殖民地に於けると同じく法定期間

内に当管内支廳に於て受理した届出は假令届出期間經過後、市町村役場に到達しても、尙期間内に届出づたるものとして特別の取扱を受くることになつてゐた。

五、島勢調査 一九二〇年十月一日の國勢調査実施に際し、群島に於てもこれに歩調を合せて第一回島勢調査を施行した。郡島は地理的事情及前述の如き島民々度の關係上、調査に當つては到底申告制度を採用することが困難だったので、島民全部に対し一々其の所在につき実査を行ひ、漸く其の完成を見たが、其の間数十日を要し、数隻の軍艦まで特派すると云ふ始末で、其の經費と勞力の大なる事想像に余りあるものがあつた。爾來内地の國勢調査に順應して五年毎に小調査を、十年毎に大調査を行ふこととし一九二五年、一九三〇年、一九三五年、一九四〇年の各年に於て十月一日を期して夫々調査を施行して來たが、一九四〇年に行はれた調査は十年毎に行ふ大調査に相当した。

六、南洋群島土着民の國籍 南洋群島の住民は之を島民と稱し、而して島民は日本臣民とは其身分を異にし歸化、婚姻等其の本人の意志に依り、正規の手續を履まなければ日本臣民の身分を取得できなかった。

第五章 島 民

第一節 総 説

南洋群島は赤道以北の中部太平洋に東西二千五百哩南北千三百哩の廣海域に散在する千四百余の小島嶼の聚落で地域的にマリアナ、カロリン、及マーシャル各群島に分れ之に居住する原住民は民俗學上ミクロネシア民族(Micronesia)と総稱されるが、更に之を通俗的に風俗、習慣、體貌の全く相違することに依りチャモロ族とカナカ族に分類されて居る。

チャモロ族は人口約四千で主としてマリアナ群島及西カロリン群島に居住して居るが、カナカ族は約四万六千の人口を有し全群島各地に居住して居る。

右チャモロ、カナカ兩種族は各々其の體貌、言語、風俗、習慣を異にするが、カナカ族に至つては同種族でありながら其の居住地区を異にする事に依つて相互相當の相違がある。

天恵を享受し、全く外界との接觸なく未開自然の姿であつた群島原住民が始めて文明と接觸したのは一五二二年、先づマリアナ群島が葡萄牙人マジエランに依つて発見されたのを嚆矢とし、次いで一五二七年カロリン群島が同じく葡萄牙人デイエゴダ・ロシヤに依つて発見され、其の後幾何もなく兩群島が西班牙の統治する処となつたが、其の三

百五十年の統治の歴史は全く圧政の連続で、爲に反乱暴動相繼ぎ之に依り惨憺な大虐殺が行はれたり、傳染病、細菌等に依る殺戮を加へられたるの他治安維持上の見地より政策的にグナム島に向け、強制移住を実施された等の爲に人口の大減少を來し、当時群島文化の中心を誇つて居たテニアン島のタガ族の如きは全く潰滅し去り、無人島と化するに至り、当時の惨狀を物語るものとしてサイパン島の一地名にカナベラ（骸骨）の如き名称現存の結果となつた。

民俗學上の必要より昭和の初期に於て東北帝大長谷部博士等の手で同地発掘の際は惨狀を立証するに足る多数の人骨を発見したものである。

マーシャル群島は一七八一年英人船長マトシヤルに依つて発見せられ、一時英領となつたが、一八八五年英独協商の結果、独逸領となつたもので同國は之を基地として着々地歩を進め、遂に一八九九年米西戦争の結果、弱体化せる西班牙よりマリアナ、カロリン群島を買収し、完全に全群島を其の統治傘下に入れ銳意之が統治開発に当り相当治績を収めたが、其の基調とする政策は概ね苛酷に失するの嫌ひがあり、且つ母國本位であつた爲反乱暴動の慘事を再現するの他特に同國の施策の一であつた医療族策の如きは寧ろ學術的試験研究の犠牲となるが如き恐怖感を原住民に與へた。

敘上、西班牙、独逸兩國統治時代の事情を通観して見るに兩時代を通じ基督教宣布に依り、所謂原住民の持つ野性を漸減し、文化的恵沢を得せしめたとは云へ、尙其の兩時代を通じて圧政反抗の爲流血の慘事を繰返へしたもので特に西班牙のそれは全く原住民怨嗟的であつた。独逸領時代に於ては文化厚生及教育の面に就て西班牙のそれよりは進歩を見せ治績を収め得たが、其の苛酷冷嚴の母國本位の政策は原住民をして徒らに畏怖敬遠せしむるの結果となつて所期の成果を挙げ得ずして諸般の事其の緒に就いたのみで、未完成の儘で次の我國の統治に引継がれたものである。

一九一四年日独戦争の結果、我が國が同群島を占領し次いでヴェルサイユ平和條約締結の結果、我が國の領土構成部分としての委任統治領となつて以來は我が一視同仁政策に依る極端と迄謂はれた保護撫育政策に依つて彼等に対する文化厚生教育等諸般の施策施設の整備増大を醸成し、其の民度向上に多大の貢獻をしたのみでなく、更に此の事は一九三三年我國が國際聯盟を脱退した後に於ても何等の變更なく進行したものであつたし、加へて大正十四年（一九二五年）マリアナ群島に於ける歴史的な糖業の確立を契機とする群島諸産業の振興隆策も常識を逸軌して原住民の搾取圧迫を基調としない許りでなく反つて産業の振興に依り日本人対原住民の關係を經濟的に深く結合せしめるの結果を生じ、彼之相互間の交換經濟の流通は彼等をして勤勞の美風を振作し、其の文化水準の向上に資する処大にして更に右に依る群島の經濟的実力の培養増大は我國は素より群島の爲にも夫れ自体の文化、教育、厚生等諸般施策や施設の還元培養力となつた事は否めない事実であらう。

西班牙三百五十年、独逸三十余年の統治に次いで我が三十余年の統治は群島の遺利を剩すことなく、開拓し限られた零細なあの地域より年額にして数千万円の（終戦前の價格）生産を挙げ得た程の産業を樹立した事は正に原住民に對しても革命的変革であつた事であらうが、從來減少を辿つた彼等の人口問題も此の間に処して一部例外を残し、全体的には増加の趨勢にあつた事等は我が政策の誤りなりしを物語る証左である事を深く自負する次第であるが、一歩掘下げて内省して見ると其の基調とせる一視同仁政策遂行の爲彼等の民度福祉の向上を期するに急であつた爲、其

の風俗習慣を無視強行の嫌ひがあり、加へて極端な保護撫育政策は、反へつて彼等をして自主性を失はしめ、無氣力化せしめた等の事を今に至つて痛感される次第である。

第二節 種 族

大洋洲の民族学的区分はアウストレリア (Australia) ミクロネシア (Micronesia) ポリネシア (Polynesia) 及メラネシア (Melanesia) であり、南洋群島は右のミクロネシアに属するもので、之に居住する原住民をミクロネシア民族と総称されるが、何分にも廣い海域に散在する地勢的關係、季節風や赤道反流等の自然的條件に依り隣接するインドネシア、ポリネシア及メラネシア等と無關係たり得ず右諸種族との混血も多く非定型なるものが多い。

乍然群島に於ては容貌風俗習慣等について著しい相違のあることに依り、之等原住民をチャムロ族及カナカ族に區別して居るが、チャムロ族は別としてカナカ族に至つては各島夫々風俗習慣及言語を異にして居る有様である。之は要するに地域的關係に依り交流の不便のことにも基因することであらうが、種族的に極めて非定型な混血であることを物語るものであらう。

即ちマリアナ群島及西カロリン群島にのみ居住するチャムロ族及西カロリン群島パラオ島のカナカ族はインドネシア系であり、同じ西カロリン群島でもヤップ島と東カロリン群島のクサイ島、ヌグノル島ビンゲラツプ島及グリニツチ島に住むカナカ族はポリネシア系で東カロリン群島、トラツク島モートロツク島及西カロリン群島トコベール島のカナカ族はメラネシア系である。

ミクロネシア人は軀幹中等大で皮膚は淡褐色毛髪は黒色で少しく波狀に灣局して居るのが特色であるが、既述の如く非定型群に於ては其の母種族の特色を出して居るものが多いので、チャムロ族は別としてカナカ族と一般に通称されて居るものの内容は極めて複雑多岐であるが、其の性格に至つては極めて溫順であり、西独時代の反乱暴動の流血の歴史はあるが、現狀に於ては斯かる氣配は微塵もない。其の固有の制度や組織上の觀念に因有すると考へられるが賣名的名譽心が非常に強い爲、此の爲にする競争心が特に強く利柄的感情に支配される持続的でない事の多いのは欠点と云へよう。其の能力について劣等視される場合も多いが自然的人文的環境を無視しての論者多く公平な觀方でない事が痛感される。

即ち我が三十余年の公學校教育の結果を見ても、日本人と比べ著しい差等はなく、只計数的にやや劣れるやを見受くるも他には大した差等なく技能方面には反つて優れ居る事をさへ認められた。

以下群島の代表種族としてのチャムロ族及カナカ族に付いて説明を加へれば右の通りである。

第三節 チャムロ族

チャムロ族はマリアナ群島を主とし西カロリン群島のパラオ、ヤップ島に居住するもので他には集團居住をして居ない。

本種族はインドネシア系ミクロネシアで其の祖先はグワム島を發祥地とすると謂はれて居る關係上、其の四周近距離の島嶼に移住せる事は地勢上自然の結果で、西領時代にはマリアナ群島に於けるチャムロ族は相当人口調密であつ

た様であるが、彼等相互間の闘争及屢次の叛乱に依り西班牙に依る虐殺等の爲、人口激減し現在に於ては三千五百人程度しか居ないが、其の最も多数が住んで居るマリアナ群島のチャムロ族は西領以來の西班牙人及ヒリツピンのタガレン族等との雜婚に依り著しく変異したと謂はれる。同族の特色は皮膚淡黄褐色、頭髮は黒色の直毛で性質は溫順早く文化に接触した關係上カナカ族に比し勤勉で、其の容貌風姿も勝り衣食住に付ても比較的進歩し、形似的歐化をしてる点が多い。此事は同族と西班牙との接觸が古く且つ基督教的影响に依るものである事と認められる。

第四節 カナカ族

カナカ族とは布哇及太平洋諸島に居住する民族の総称で、南洋群島原住民の大部分は、本種族に属するものであるが、前述せる如くインドネシア、ポリネシア及メラネシアとの混血に依り非定型となれるものが多い。

之等を觀察すると夫々多少の差違はあるが、一般に淡褐色若くは暗褐色にして毛髪黒く僅かに波狀に彎曲せるものが多いが、中に縮卷せるものもあり、眉は密生して太く、眉目の間は稍々狭く眼窩陷落し鼻翼廣く、口大にして唇厚く、鬚髯多からず容貌は概ね溫和で軀幹概ね中等大であるが中には長大なる者もあり主に南方諸島に居住して居る。

カナカ族は人口四万七千余であるが、文明との接觸以來虐殺や流行傳染病等の原因よりして相当人口減少を來して居たもので我が統治以來之が対策に腐心したものであるが、其の因有する処遠く仲々に目的を達し得ず、最も文化水準の低いヤップを除いては漸やく其の目的を達し全体的には漸やく増勢に轉ぜしめ得たものである。

カナカ族は性溫順快活であるが、天惠享受の必然性より勤勞を厭ふの風があり、且つ活潑にして事物に執着がない

様であるが、日本人の移住増加し彼等の關係が密接となるにつれ彼等の文化水準も向上し、加へて相互交換經濟の必要上漸次物慾を昂め勤勞貯蓄の風を馴致して來たものであるが、未だ文化の程度が低く其の日常生活は甚だ原始狀態を脱してないと見るべきであらう。

第五節 風 俗

一、衣

熱帶圈内に位置する群島の氣候に於ては本來衣料に關する必要度極めて稀薄なることは論を持たない所であり、所謂原始風俗としては男子は禪、女子は腰卷様のもので單に腰部を纏ふに過ぎなかつたが、文明との接觸に依り漸時着衣の風を模倣し來り、我が統治以來産業の隆盛と之に伴ふ日本人の移住激増の爲、彼への經濟關係の増大に依り購買力の向上を來した爲に愈々着衣の風を助長したものであるが、素より氣候に對する必要性より來りたるものでなく、寧ろ外觀裝飾の意味の強いものであつた事は否めない。斯様な意味合ひの衣料であるが故に、最も文明との接觸早きマリアナ及マーシャル群島に於て最も進歩し、他は之より程度の劣つたものである。

現在の島民は僻遠地は依然として原始の域を脱しないが、日本人との接觸深き地域にあつては殆ど男子はシャツ、ズボンを履き有資力者や青年に至つては正式の洋服を着衣し、大体靴履であるし、女子は簡單服様のものを着して居り、和装をするものはないが、漸時其のデザイン、用布等にも意を用ふる様になつて來た。

二、食

群島々民の食料は全く天恵享受であり、パンの実、タピオカ、ヤム芋、タロ芋等を主食とし之に椰子果竝礁魚及獸鳥肉類を副食とし更に豊富なる果実類（バナナ、パイナップル、オレンジ、シャーシヤツブ、マンゴー、レモン等）を食する爲、自然的に完全食料を攝取して居るもので、而も其の調理方法は調味料こそ少いが煮、焼、蒸の三法を用ひ間然する処がない。

乍然漸時日本人の移住者の増加に伴て、近來之が生活模倣より米食（外米）の風も生じ、之に伴ひ和式調味料竝副食罐詰類（主として魚類味付罐詰）等も使用せられ漸時需用を増加し來りたるは彼等の嗜好に投じたる事勿論なるも一面購買力の増加を物語る一証左であらう。

嗜好品としては酒及煙草は彼等の最も愛好する処のものであるが、酒類は委任統治條項の制限あり、儀式藥用或は特定の場合しか、使用せしめなかつたし地方的には宗教上の戒律より兩者を全然用ひない所もある。往時よりの風習とし檳榔樹の実を石灰にまぶし嚙むの風があり、特に西カロリン群島に於て盛んであるが、風習は全群島の老若男女を通じての風習であつたが、近時青少年の間には主要地域では漸減の風がある。

三、住

南洋群島に於ける原住民の住居は各島の文化程度に差があり、使用資材様式に夫々相違があるが、概ね自然環境に合致する如く造られて居る。即ち耐熱、耐風、耐雨の目的に副ふ様に屋根の勾配は急にして高く季節風向に應ずる家向をなして居るが、之が爲大体に於て屋内は窓少き關係もあり、陰濕を極め居る有様である。

群島に於て最も文化と早く接触したマリアナ群島のチャムロ族の住居は大体木造稀に石造もあるが、一見歐風を模

倣して比較的進歩して居るが、ヤツブ、トラツク、及ヤルトは概ね掘立無床式の陰濕住居多く、バラオ、ボナベは右にやゝ優り概ね床を張り窓戸を用ひ居ていた。

我が統治以來保健衛生の立場より島民住宅改善に意を注ぎ、原住民の大工技術者を養成すると共に補助金を與へ積極的に之が改善を爲さしめる一方、共同洗身場及共同水槽等を補助金制度に依り極力増設せしめ漸次旧体を脱しつゝあつた。

南洋廳の住宅改善施策の進行と彼等自体の購買力の増加に依り、住宅改善も漸進し近來に至つては僻遠地は別とし和風洋風の住宅も漸次造成されて來た。

以上は原住民個々の住宅に付いて述べたものであるが、所謂彼等の共同施設である集会所（アバイ）ボートハウス等に至つては習慣上より共同住業に依り其の集團の勢力を示威するに足る壯大なる建築物があるが、之等の建築物も良く自然環境とマツチして居る等の状況より推して見て相当文化的價值を高く買はれて良いと思はれる。

使用資材は木材を主とし屋根にはヤカル・椰子葉タコの葉を用ふるのが普通である。

第六節 人文的觀察

南洋群島原住民の現情を見るに形似的に多少共歐、和風を模倣し文明との接触の歴史竝度合ひに依つて夫々地域的に其の進歩過程にも差等を生じて居るが、原住民の知能程度は所謂文明人と比較して格段の差があり、救ふべからずと爲す説は其の本質を極めない謬説である事は言を待たない。

原住民と文明の接触の歴史は四百年余に及んで居るが、天恵豊富な熱帯圈内に在る彼等の実生活状態は其の衣食住に付て考へても無理に之と接触する必要もなく未だ今日に至るも原始状態を脱し得ない現状を以て彼等を質的に劣等視する事は極めて適當でなく、文明環境との接触の歴史の長短と度合の深淺に依り彼等らしい生活状態に應じた部分が發達し然らざる部面が發達しないで終つて永い間に固定化したと見るべきが至當であらう。

我が統治以來の原住民教育の實際に就て見ても其の兒童能力に付ては理解、記憶力共に日本人兒童と比較して、さして差等はないし、特に技能面に於ては非常に優秀性を示すが、計數力はやゝ遜色がある様である。之等は其の本質的劣等性能でないことは彼等の生活環境を見れば了解の出来る事で、之等を以て其の質的に劣性なりとするは早計であらう。

原住民間の道德に付て見ても彼等の生活環境や風俗、習慣を考へないで所謂文明人の尺度を以て之を見るときは極めて不可解であり、道德律に反する様な事が平易に而も極めて自然裡に行はれることが極めて多い。

最も通俗的に云はれる彼等の責任感の稀薄性等も其の旧慣に依る徳目の一たる上長者に対する絶体的從順性よりして、其の結果の如何を問はず之に従ふ事などより因有せる事柄であり、犯罪に依る刑務所入獄の事なども彼等の社会組織よりの制裁を最大の恥辱とはするが、之無くしては寧ろ英雄的、犠牲的の事として逆効果を與へる様な結果となり、之を以て恥を知らずと爲すは當らざるも甚しいものと云ふべきである。之を要するに彼等の社会制度や旧慣風俗を理解認識して自然環境に即應じた文明的指導を加へれば其の本質的に劣等でない能力を啓發して彼等をして相當な文化水準迄に到達し得るものと考へる事が妥當であらう。

第七節 社会的組織

南洋群島在住原住民は既述の通り各島種族的に相違し加へて地域的に孤島化隔絶して居る等の關係から、従つて其の風俗、習慣も極めて区々であるが、其の社会的組織の基本となるべきものは稀に父系的なものもあるが、概ね母系民族的血縁團體であると云つて過言でない。

此の民族は土地や財産を共同で持ち同一の氏神を奉じ血縁意識を同じうして固く團結し彼等の社会生活の基本單位となつて居るものである。

斯の例外として東カロリン群島のボナベ島や、マーシャル群島の全島の如くポリネシアを思はせるが如き大酋長が絶体權を振ふ処もあるが、之は飽迄も例外的存在であつて他は概ね母系民族的血縁團體である民族を代表する者の合議制である事が多い。

例をパラオにとれば、パラオ原住民は村を單位とし、集團生活を行ひ各村には必ず四以上十以内の母系氏族を含みこの氏族は全て土地、財産を共同で持ち同一の氏神を奉じ血縁意識を同じうして固く團結し社会組織の根本單位となつて居る。この各氏族には夫々氏族長があり、氏族を支配すると共に氏族を代表して村政に參與し村政はこれらの氏族長の集合体である村政体(Klobak)と云ふ合議政体で行はれる。一見寡頭政治に依り村の秩序を維持する如きであるが、氏族を代表する氏族長の合議制であり、村長の専制と云ふことはない。

この母系氏族は其の所屬する村に対する權利義務の負担の順位が決定して居り、氏族を代表する氏族長が之を分担

する。

村内の成年男女は夫々性別に依る年齢集團に属するものであり、各集團の長は村内最有力氏族より副長は次位のも
のより氏族の順位によつて定まるもので之等の團體の行動はすべて村政体の命令に依り動くものであり、各團幹部の
合議制を要し独断は不可とされて居る。

右はパラオに於ける一例であるが、チャムロ族とカナカ族では全くその趣きを異にし、又同じカナカ族でも東カロ
リン群島のボナペ島やマーシャル群島の各島に於てはポリネシアを思はせるが如き強大な酋長に依る絶体專政制も
あり、一概には云へないが通観して社会單位となるのは母系氏族集團と云つて過言でない。

我が領治以來はチャムロ族に区長制（区長助役）を布きカナカ族には村長制（総村長、村長）を置いて所謂対原住
民の行政上の末端組織とし法規の周知、願届の進達支廳長の發する命令の傳達又は其の執行に関する事を行はしめた
ものであるが、各島共種族の不定型なると之に伴て旧慣習俗を異にし前述の如き社会組織にも夫々特色があり、之に
劃一的の村吏制度を布いた事は村長對村民との間に何かごちない蹻りとなり、爲に村長の消極化を來した例も尠く
ないが、我が三十余年の統治の結果、産業の躍進と日本人移住者の激増に依り、好むと好まざるとに不拘彼我の物心
両面の接觸の深度化に伴ひ現実的に彼等の社会的組織、延いては旧慣風俗にも相当動搖を見せて來たものと云つて良
からう。

第八節 經濟的生活

天恵を享受せる南洋群島原住民は其の自然環境の爲、衣食住極めて簡單で、且つ他に倚存しない事は当然で全く自
然狀態に放置されて居たものであり、文明との接觸に依り漸次目覺め來つたものであるが、其の生活の根本である衣
食住の安定より他に需むるものは全く裝飾好品等のものに限られるのは当然で、独領時代より獨貨の流通はあつた
が、多くは其の價値を知らず更に之に依り、家具調度を備へたり生産資本にするが如き考へはなく、特に他日を期す
る貯蓄等の事は全然なかつたものである。

我が統治以來特に彼等の文化水準を高めることに努めたることと群島産業の勃興に依り、日本人の渡來激増し、遂
に其の數に於て原住民を上廻るが如き人口を擁するに立到るや、原住民對日本人の交渉も密接不可分の關係となり、
日本人生活の模倣はあるにせよ漸時彼等自体の生活も貨幣をはなれ得なくなつて來たもので、之等の事は彼等の旧慣
にも至大の影響を與へる結果となつて來た。

即ち原住民の生活に於て由來は財産の如き言葉なく、土地等に付いても所有權等はなかつたものであり、其の社会
組織の基本單位である氏族の使用權、若くは管理權があつたに過ぎなかつたものであるが、漸次經濟觀念の發達と複
雜化につれ族有所有權を主張し、更には個人の所有權に迄進展して來る様な有様になつて來たもので、私有財産の確
立に移行しつゝあつたものである。由來、島民にはヤップ島の石貨、パラオ島に於ける貝貨等のものもあるが、之は
其の属する氏族の名誉價値を誇示するに足るものではあるが所謂通貨として交換價値を有するものではないと考へる
のが至当であらう。

第九節 我が対原住民政策

西班牙、独逸領南時代に於ける流血の歴史の後を承けての我が統治方策は全く一視同仁政策の遂行であり、又徹底した保護撫育政策の敷衍であつたと云つて過言でない。

之が爲同化に急の余り、彼等の風俗習慣を無視した嫌ひはあるが、兎にも角にも我が統治中何等の不詳事なく、多年の懸案であつた人口減少問題も局部的解決を残し、總体的に増勢の一途を辿りし事は此の期間に処して群島としては劃期的な革命と云ふべき大産業の勃興興隆期に當つて居た事と併せ考へて我が政策が彼等の文化水準を漸次向上せしめ、外來の物心両面よりの衝撃に耐ふる基盤を造成する一方、之が緩衝的保護の役割を勤めると共に、積極的には之と融合せしめた一証左とも云へよう。

而も此の事は一九三三年（昭和八年）我が國の國際聯盟脱退後も何等変る事なく行はれた事は特筆さるべきであらう。

即ち我が統治政策は委任統治規約に定められた我が領土構成部分として統治するを立前として、一視同仁政策を推進したものであつて、後進民族保護の爲、努めて彼等の風俗習慣を尊重すると共に外來の圧迫より保護する爲夫々左の措置を講じた。

即ち一九二二年（大正十一年）南洋群島裁判事務取扱令施行に依り

（一） 島民以外に關係のない民事訴訟に於ては其の慣例に依ることとし

（二） 土地に対する權利に付いては当分旧慣に依り、且つ登記を爲さない

（三） 島民の土地、賣買、讓渡並担保の目的に供する契約を禁止し官以外が之等の契約を結ぶ場合は全て南洋廳長官の許可を要する事とし

（四） 島民の訴訟手続は法院の認むる便宜の手続を執る事を許るされ

（五） 島民の一年以下の徒刑は監獄に拘置せず其の所轄行政官廳に於て勞役に服させる
の事を規定し、努めて彼等の旧慣習俗を採り入れ、且つ簡易化し無用の不安動搖を防ぐと共に群島經濟事情の發展に依る彼等の經濟觀念の微弱に依り蒙るべき損害を防止するに至大の効果があつた。

之と併行し一九一六年（大正五年）民政令第三号に依れば南洋群島裁判事務取扱令の（三）に依る土地關係の規定を更に明確化すると共に廣く土地以外の対原住民との間の諸契約の締結に付ても日常の小取引又は一ヶ年以内の雇傭契約以外は全て官の認可登録制とし、其の未開無知等より生ずる不法の圧迫被害を防止した。

以上の措置は素より日本人に比し比較的文明進度に遅れた彼等原住民保護の爲に講ぜられた原則であつて、之が実施に當つては彼等の固有の旧慣習俗を尊重加味して以て彼等をして急激な社會變革より保護した一証左である。

教育に付ては天惠豊富な熱帶的自然環境下に溫存された其の智能徳性を誘掖指導し、文化人として役立つ原住民たらしめる事を主眼としたものであるが、教育の普及徹底は實に目覺しいものがあり、僻地は別とし少、青、壯年男女にして日本語を知らざるものは稀で、内地に於ける初等學校の課程と同程度のものである公學校教育を習得したものである。この事は全く西独領時代に比し格段の進歩であつた事と云へるし彼等の文化水準を一段と向上せしめた一原

因である事は疑ひを容れないが、同化に急の余り之が普及徹底に当り彼等の不平不満を醸成した事もあらうが、少く共之に依り日本人は素より彼等自身從來無かつた群島共通の言葉と文字を習得し、之に依り図書新聞雜誌の内容も判り、其の見聞を弘め、文化的向上に寄與した点は蓋し鮮少でない事を確信する次第である。

原住民に対する地方制度に付ては別項「行政」の項で詳述せる処であるが、大体に於て集團部落を單位として村としカナカ族に於ては総村長村長を置き、更に各地域所轄官廳に依つて之が補助的役割を爲す爲、助役、村送警等を置きチャムロ族に於ては区長助役を置き政下部組織とし官廳より発する命令指示の傳達等の補助的使命を遂行せしめたのであるが、之の事は一應彼等の旧慣に應じての措置の如く見へるが、前述の如く各島の風俗習慣が夫々異り、特に其の社会組織の内容がボナベ、ヤルト島の如く大酋長の絶体権を握るのを特例とし、其の多くは氏族長の合議制を必要とするが如きを普通とするを以て、之等に於ては其の権力極めて微々たるものであり、この事情を無視して劃一的な村長制度設置等の事は其の地方の実情に遊離した場合が多く、之等の場合に於ては村長は全く官と村民との板挟みとなり、村吏として極めて消極的な働きしか出来なかつたものが多かつたようである。

厚生方面に最も意を注いだのは保健衛生である。

原住民の生活は西独領時代を経て我が統治となり、漸時文化の恵沢に浴し改善を加へ來たつたが、未だ充分でなく其の住居、水槽、竝浴槽に付て特に改善の要あるを認め、補助金制度を以て之が施設の改善に資する一方原住民をして之が技術を修得せしめ、改善の実績の向上に寄與せしめた。

又原住民の間に於ける地方病としては Dengue 熱、アミイバ赤痢、フランペンヤ等の疾患を挙げられるが、特に禍害

の甚だしいのは外來傳染病であり、文明との接触漸やく繁きを加へ來つた獨領時代には結核、花柳病等の所謂文明病渡來し全群島を風靡し彼等自体の惡習慣と共に最近迄に至る人口減少の一大原因であつた。

南洋廳に於ては各主要島に医院を設置し、之が予防並診療を実施せしめ、特に原住民の經濟狀態を勘案して無料診療を行ひ、爾後其の經濟力の進展に伴ひ料金を徴收せるも日本人の場合に比し、著しく低廉であつた許りでなく、更に離島並僻地には当該医院より年数回に亘り巡回診療を行ひ、特にヤルト支廳管内に於ては原住民の能力ある者を選抜し、之に医学習練を爲さしめ環境を限る限地開業医を創設するの医療施策を実施した。

群島の開發の進展と産業の興隆に依り、群島の經濟事情も長足の進歩發達を遂げ、此間に処して原住民自体の生活も直間接に影響を蒙らないでは居られない様な有様となり、之に依り生産勤勞等の美風が助長の結果を生ずると共に從來部落有であつた所謂、財産權（土地、立木）を氏族有に進展せしめ、更に私有財産制を主張せしむるが如きことゝなつた。

由來、群島に於ては其の必要度よりして財産の觀念もなく、勿論土地の使用、管理權はあつたが之が所有權等はなかつたものであつた。

而も右の財産權も部落共同管理であつたものが、原住民の經濟觀念の發達より右の様な變遷を來したもので、此爲南洋廳に於ても一九三三年（昭和八年）彼等の地權確定の必要を認め、旧慣を基調とし土地調査を開始したものである。

○島民ノ土地及島民ト締結スル契約ニ関スル件拔萃 大正五年一月二十日・民政令第三号

改正 昭和六年第一号、一六年第三一号

第一條 官以外ノ者ハ島民ノ土地ニ関シ賣買譲渡又ハ担保ノ目的ニ供スル契約ヲ締結スルコトヲ得ス但シ宅地ニ在リテハ其面積三百坪其ノ他ニ在リテハ五町歩以下ノ契約ヲ爲ス場合ハ所轄支廳長ニ其ノ他ノ場合ニ在リテハ南洋長官ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス此ノ場合ニ於テハ許可書受領ノ日より三十日以内ニ土地ノ所在地ヲ管轄スル支廳ニ契約ノ登録申請書ヲ差出ササルトキハ許可ハ其ノ効力ヲ失フ

第二條 邦人又ハ外國人ト島民間ニ於ケル前條以外ノ契約ハ当該支廳ノ認可ヲ受ケ登録ヲ經ルニアラサレハ其ノ効力ヲ生セス但シ日常ノ小取引又ハ一箇年以内ノ雇傭契約ハ此限ニアラス

前項当該支廳トハ土地ノ契約ニ付テハ土地ヲ管轄スル其ノ他ノ契約ニ付テハ島民ノ住所ヲ管轄スル支廳ヲ謂フ

○大正五年民政令第三号施行規則 昭和六年九月一日・南洋廳令第十二号

改正 昭和一六年第三二号

第一條 大正五年民政令第三号第一條但シ書ニ依リ南洋廳長官ノ許可ヲ受ケントスル者ニ在リテハ当事者連署ヲ以テ左ノ各号ノ事項ヲ具シタル許可申請書ヲ契約ノ目的タル土地ヲ管轄スル支廳長ヲ經由シ南洋廳長官ニ所轄支廳長ノ許可ヲ受ケントスル者ニ在リテハ当事者連署ヲ以テ前項南洋廳長官宛申請ノ事項ヲ具備シタル許可申請書ヲ当該支廳長ニ差出スヘシ

一、当事者ノ本籍（外國人ニ在リテハ其ノ國籍）住所、職業、氏名又ハ名稱及年齡

二、契約ヲ必要トスル事由

三、契約書案ノ全文

四、契約ノ目的タル土地ノ所在種目及面積

前項ノ申請書ニハ契約ノ目的タル土地ノ位置図、実測図及其ノ土地ノ權利ヲ証明スルニ足ル文書ヲ添附スヘシ

第二條 大正五年民政令第三号第二條ニ依リ契約ノ認可及登録ヲ受ケムトスル者ハ前條ニ準シ認可登録申請書ヲ当該支廳長ニ差出スヘシ但シ前項第一項第四号ノ事項及第二項ノ文書ハ土地ニ関スル契約ノ認可登録ヲ申請スル場合ノ外之ヲ要セス

土地ヲ賣買譲渡シ又ハ担保ノ目的ニ供スル契約ノ登録申請書ニハ前項ニ依ルノ外南洋廳長官ノ許可書ヲ添附スヘシ

第三條 何人ト雖手数料ヲ納付シテ契約ノ登録簿ノ閲覧ヲ請求スルコトヲ得

附 則

本令ハ公布ノ日より之ヲ施行ス

○大正五年民政令第三号施行規則取扱手續 昭和六年九月一日・南洋廳訓令第三十七号

改正 昭和七年第一六号、一六年第四六号

第一條 支廳長大正五年民政令第三号施行規則（以下單ニ支廳施行規則ト稱ス）第一條ニヨリ南洋廳長官宛ノ許可申請書ヲ受理シタルトキハ左ノ各号ノ事項ヲ調査シ意見ヲ附シ之ヲ南洋廳長官ニ進達スヘシ

一、契約ノ目的タル土地ハ当事者タル島民ノ所有ニ屬シ其ノ所在、面積及境界ニ誤無キヤ否

- 二、契約ハ自由意思ニ基キテ締結セルモノナリヤ否
 - 三、契約ノ各條項ハ公正適當ニシテ当事者タル島民ノ爲特ニ不利、不当ノ点無キヤ否
 - 四、契約價格ハ適當ナリヤ否
 - 五、申請書記載ノ契約ヲ必要トスル事由ハ眞実ナリヤ否
 - 六、契約ノ結果將來当事者タル島民ノ一家ノ生計維持上、支障ヲ來スコト無キヤ否
 - 七、当事者タル島民ノ資産收入及支出ノ狀況
 - 八、当事者ノ経歴ノ概要、性及信用ノ狀況
- 第二條 支廳長施行規則第二條ノ認可登録申請書ヲ受理シタルトキハ前條各号ノ事項及其ノ契約ニ因リ將來当事者タル島民ノ一身上ニ重大ナル結果ヲ生スル虞ナキヤ否ヲ調査シ支障ナシト認メタル場合ニ限り之ヲ認可スヘシ但シ左ノ各号ノ一ニ該当スル契約ニ付キテハ認可前南洋廳長官ニ具申スヘシ
- 一、土地ニ関スル契約ニシテ面積五町歩ヲ超エ又ハ契約期間二十年ヲ超エルモノ
 - 二、土地以外ノ事項ニ関スル契約ニシテ契約ノ目的物ノ價額消費貸借又ハ贈與ニ在リテハ千円、其ノ他ニ在リテハ三千円ヲ超エルモノ
 - 三、前各号ノ外当事者タル島民ノ一身上重要ナル關係アリト認ムル契約

第三條 支廳長施行規則第一條ニ依リ許可後登録ヲナシタルトキ及前條ニ依リ登録ヲ爲シタルトキハ直ニ其ノ写ヲ南洋廳長官ニ提出スヘシ但シ大正五年民政令第三号第一條但シ書ニ依リ南洋廳長官ニ具申シタルモノニ付キテハ契約

年月日及登録年月日ノミヲ報告スヘシ

附 則

本令ハ大正五年民政令第三号施行規則施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和六年九月一日ヨリ施行）

第六章 行政

第一節 沿革

一、発見及西領時代

第十六世紀の始め頃から西ヨーロッパに擡頭しかけた航海術の發達は世界歴史の様式を書替へる大事業であつた。西班牙葡萄牙の冒險者達は相ひ競ひて東西に航し前人未踏の陸地発見に没頭した。南洋群島も亦之等の冒險者の発見に係る、茫洋たる太平洋上に散在する孤島故発見の時期も異なる。発見されたと雖狭小な孤島で價值内容が少い爲多くは等閑に附せられたものゝ如く、其の発見以後の歴史も断続し今に於ても詳ならざるものが多い。

マリアナ群島は第十六世紀の初頭葡萄牙人の航海者マゼランにより発見され次で西班牙國の手に歸した。カロリン群島中パラオ島は千五百二十七年葡萄牙人デイエゴダ、ロシヤにより発見次で千六百八十年代西班牙人より成る探險隊が來てヤップ以東トラツク、ボナベ及クサイの諸島を発見したと傳へらる。

マーシャル群島は千五百年代とも千七百年代とも紹介され千七百八十一年（一説に千七百八十八年）英人マーシャルの探險とも稱せられる。初めは英國之を領したが其の根拠薄弱なるに乘じ独逸國は千八百七十七年（一説千八百七十八年）軍艦を本群島に派遣して酋長と親を交へ千八百八十五年再び各酋長を説いて遂に本群島完全に略取するに至

つた。

千八百九十九年西班牙は米國との戦争の結果、比律賓群島に併せて本群島中のグアム島を米國に割讓した。独逸は同國の次第に財政困難に陥つたのを見、之を寄貨としてマリアナ、カロリン両群島を買收し保護領とした。

二、独逸時代

独逸政府はまづニューギニアのラバウルに總督を置き本群島を其の下に附屬せしめヤップ、ボナベ及ヤルトに各政廳を設け知事を置き鋭意附近諸島を管轄せしめた。マーシャル群島に於てはヤルト会社を創設せしめ之に同群島の拓殖の全權を附與し通信航海等に対し保護を與ふる等恰も英國の東印度会社に類する組織の下に開發を企圖し産業的基礎を確立せしめた。又ヤップ諸島に於ても千九百六年ヤップ島中心として海底電線を敷設し北は上海グアム南はセレベス島メナドに連絡せしめた外、千九百十三年には大規模の無線電信を建設し有線無線両方面を通して太平洋の通信權を掌握しニューギニア青島と呼應して將來の活動の基礎を置かうと計つた。又資源の探險と之が開發に苦心をし各科に亘る専門家を屢々派遣して學術的探險に従事せしむる爲特に測量船プラネット号を巡回せしめた。アンガウル燐鉍の如きは全く独逸學術探險隊の発見せる所で千九百八年本國ブレーメン市に独逸燐鉍株式会社を設立せしめ、我軍占領に至る迄採掘を爲した。

一方彼等は盛んに土人の教化に努め、新旧基督教宣教師を派遣し布教に従事せしむる外、補助金を給與し、宗教学校を設置せしめたりして土人兒童の教育に従はしめ、第一に母國独逸語の普及を図つた事は如何に同島教化に努めしかゞ想像するに足りよう。

三、日本施政

たゞく大正三年（西曆一九一四年）歐洲大戰が勃発し、日獨國交断絶に依り我海軍の南遣支隊は直ちに南洋を衝き当時独逸領であつた、太平洋赤道以北に散在する南洋群島を占領し同時に特別陸戰隊を駐屯せしめ、軍政を布き臨時の治安維持に任じた。これ即南洋群島に於ける日本施政の肇である。

次いで同年十二月（西曆一九一四年）臨時南洋群島防備隊條令を設け司令部を東カロリン群島トラック島に置き全群島をサイパン、パラオ、トラック、ボナペ、ヤルートの五行政区に分ち各区に守備隊を配置して守備隊長を軍政廳長として民政事務を兼掌せしめ、茲に軍政の基礎を確立するに至つた。大正六年六月（西曆一九一七年）には民政職員身上取扱規則を制定し民政職員の定員を定め、司令部及守備隊に配置し防備隊の配員と共に民政に従事せしむることとした。尙大正七年六月（西曆一九一八年）民政職員設置に関する勅令が公布せられ臨時南洋群島防備隊に民政部を設け一般施政の事務は民政部の統轄と爲し、新に民政署と改稱し事務官を以て民政署長とし一般行政事務を執行せしむる制度に改めた。而して守備隊は専ら地方警備の任に當り茲に群島民政の基礎を得るに至つた。

大正九年一月（西曆一九二十年）対独平和條約成立し、翌十年四月C式委任統治條項の決定されるに及び國際聯盟規約第二十二條の規定及C式委任統治條項に基き主たる同盟及聯合國の委任に依り南洋群島は委任統治地域となり日本は受任國として南洋群島の統治の任に當ることとなつた。

茲に日本政府は南洋群島に於ける施政制度を根本的改革の必要を認め純然たる行政廳の準備として、大正十年七月（西曆一九二一年）民政部を司令部と分離し之をパラオ諸島コロール島に移轉した。

次で大正十一年三月（西曆一九二二年）從來の南洋群島防備隊條令を廢止して軍隊を撤退すると同時に新に南洋廳を設置し統治の万全を期したのである。

第二節 南洋廳の権限及組織

一、権限

南洋廳には南洋廳長官を置き長官の権限は南洋廳官制の定むる所であり、其の主なるものは左の通りである。

A 長官は拓務大臣（大東亞大臣）の指揮監督を承け、部内の政務を管理する。但し郵便及電信に関する事務貨幣銀行及関税に関する事務度量衡及計量に関する事務に就いては夫々通信（運輸通信）大藏商工（農商）各大臣の監督を承ける制度である。

B 長官は其の職權又は特別の委任に依り廳令を發し、之に一年以下の懲役若は禁錮拘留二百円以下の罰金又は料の罰則を附することを得る。更に安寧秩序を保持する上臨時緊急を要する場合には其の制限を超ゆる罰則を附した命令を發する事が出来る。

C 長官は其の管轄区域の安寧秩序保持の爲必要な場合には鎮守府司令長官又は附近の海軍主席指揮官に兵力の使用を請求する事を得る。

二、組織

A 本廳

本廳の組織は長官官房の外内務部拓殖部の二部に分たれ各部長は長官の命を承け、所属事務を掌理し部下の職員を指揮監督する。昭和十六年（西曆一九四一年）に至り、交通部を設け事務分掌され、更に昭和十八年十一月（西曆一九四三年）に従來の内務部を内政部拓殖部を経済部とし交通部の三部と改正され南洋廳事務分掌規程に依り夫々事務を分担してゐる。

長官々房は総務、考査の二課

内政部は行政、財政、警務の三課

經濟部は企画、農林、商工水産の三課

交通部は交通、通信、土木の三課

尙この外に警察練習所、衛生試験所物産陳別所及土俗館がある。

B 所属官署

南洋廳長官の管理する諸官署の総稱でこれに該当するものに支廳、熱帯産業研究所、水産試験場、法院、医院、郵便局、氣象台、中学校、高等女学校、実業学校、國民学校、島民工員養成所、公学校である。

支廳

パラオ、ヤップ、サイパン、トラック、ボナベ、ヤルートの六箇所に設置され支廳長は長官の指揮監督を承け法律命令を執行し、部内の行政を掌理せるが、昭和十八年十一月（一九四三年）の改正に依り西部支廳（パラオ）東部支廳（トラック）北部支廳（サイパン）の三箇所に従來のヤップ、ボナベ、ヤルートの支廳を支廳出張所とし尙北部支

廳管内のテニアン、ロタを支廳出張所として支廳事務を分掌せしめ、戦時行政の万全を期することゝなつた。

外に群島対内地の事務連絡の爲東京に南洋廳東京出張事務所を設けてゐる。

その他熱帯産業研究所は之をパラオに支所をサイパン及ボナベに、水産試験場はパラオに置いてある。

法院は高等及地方の二に分ちパラオに高等法院をパラオ、サイパン及ボナベに地方法院を置き各法院に検事局を置してある。

氣象台は之をパラオに置き須要なる島に測候所を配置してある。

医院は各支廳所在地及パラオ本島に置いてある。

郵便局は各支廳並に支廳出張所々所在地及アンガウル、フハエス、クサイに置いてある。

中学校はパラオに高等女学校はパラオ及サイパンに実業学校はサイパンに國民学校並に公学校は各支廳所在地及其他須要の地に設けられてある。

第三節 行政区劃

行政区劃は東部西部及北部の三に分け東部支廳はトラック島に西部支廳はパラオ島に北部支廳はサイパン島に置いてゐる。

東部支廳は東カロリン群島一円及マーシャル群島一円を西部支廳は西カロリン群島一円を北部支廳はマリアナ群島一円を管轄してゐる。

尙行政上の必要から支廳の事務を分掌せしめる爲テニアン、ロタ、ヤツプ、ボナベ及ヤルットに支廳出張所を置いてゐる。

支廳	支廳所在地	管轄区域
東部支廳	トラツク諸島夏島	東カロリン群島一円及マーシャル群島一円
同	ボナベ出張所	東經百五十四度以東の東カロリン群島一円
同	ヤルット出張所	東經百七十四度以西のマーシャル群島一円
西部支廳	パラオ諸島コロール島	東經百六十四度以東のマーシャル群島一円
同	ヤツプ出張所	西カロリン群島一円
北部支廳	サイパン島	東經百三十七度以東の西カロリン群島一円
同	テニアン出張所	マリアナ群島一円
同	ロタ出張所	テニアン島アキガン島一円
		ロタ島一円

第四節 地方費制度

一、地方費制度

南洋廳施政当初に於ては未だ産業興らず邦人の移住する者尠く、島民の民度も亦著しく低かりし爲、在住民の負担

に依り其の地方的公共事務を処理せしむるを得ず、其の大小を問はず総て國家の施設に俟つの外なき実情にあり、島勢の躍進と群島統治の成果とを期する爲には國家經營と相俟つて地方的施設の改善拡充を企図する必要も亦緊急を要するものあり、更に群島各種資源の開発に伴ひ産業は著しく勃興發達し、之に伴ひ邦人人口も激増し且島民人口に於ても過去に於ける人口減少の事実を一掃し、漸増の傾向を見たのは産業經濟の發展と共に島勢の伸張を明示するにして一面住民の經濟能力も増加し、或る程度其の負担に依り地方公共事務を処理せしむるも敢て支障なき状態となつた。

実情に鑑み茲に在住民の應能分担に依り新に群島を打つて一圏域とする經費支弁團體たる南洋群島地方費制度を設立した。昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第二百二十四号を以て南洋群島地方費令を公布し、地方税として國稅附加税及獨立税を創設し、其の收入を以て地方行政施設費の一部を支弁し、相当額の國費を節減し得るに至つたのである。

南洋群島地方費は南洋廳長官の管理に屬し、特に法人たる事を明記してないが公共團體なる事は明らかな所であつて次の如き特質を存してゐる。

- (一) 營造物の使用及一個人の爲にする事務には使用料又は手数料を徴收し得る事
- (二) 特別の必要あるときは夫役現品を賦課し得る事
- (三) 地方費税其他地方費に屬する收入に対し強制徴收権を有する徴收金は國家の徴收金に次いで先取特權を有し追徴、還付及時數に就いては國稅の例に依り支拂金の時數に付ても國家の例に依る。

(四) 永久の利益となるべき支出を爲す場合負債を償還する場合又は天災地変等の爲、必要がある場合に限り所轄大臣の認可を受け、起債を爲すことが出来、又予算内の支出を爲すため一時の借入金を行ふことが出来る。

(五) 継続費を設けることが出来る。

(六) 官吏の地方費行政に関する職務関係は別段の規定ある場合を除き國家行政に関する職務関係の例に依る。

二、事業

地方費は一、土木及營繕費、二、教育費、三、医院費、四、上水道費、五、勸業費、六、衛生費、七、社会事業費、八、地方費の取扱費として要する経費支弁の爲使用し得られ、又公益上必要がある場合は之を以て寄附又は補助を爲すことも出来る。現在実施されてる事業の主なるものは左の通りである。

(一) 国民学校、公学校、青年学校、島民工員養成所の教育費及國語練習所費の支弁

(二) 幼稚園に対する補助

(三) 支線道路の新設、改修、維持

(四) 消防組の出場手当及消防手被服の支給

(五) 各支廳管内神社供進会の支弁

(六) 環礁内航路に対する補助金交付

(七) 地方的局部的各種産業に対する奨励金補助金の交付

(八) 部落に対する補助一切

(九) 島民生活改善施設補助

(十) 各種團體補助

(十一) 公医補助

(十二) 商工團體補助

(十三) 島民内地觀光團補助

(十四) 医院の経費支弁

(十五) 上水道費支弁

三、地方財政

昭和十三年四月(一九三八年)南洋群島地方費令を制定し、地方費税其の他の收入を以て諸般の歳出に充てることとして実施されているが、未だその財政の基礎は確定の域に達せず、且地方費税の外は收入極めて僅少なので昭和十七年度(一九四三年)に於ては國庫より二十二万四千二百八十円の補助を受け、昭和十八年度(一九四三年)に於ても二十二万円の國庫補助金を受け受理した。

地方費関係事務に主として従事する職員として南洋群島地方待遇職員令に依る所の待遇、職員と地方費事務に専任従事する職員としては地方書記雇員等がある。

第五節 地方制度

一、部落

南洋群島の我が統治に帰してより邦人の來往漸く繁く、随処に其の集團地域を形成するに至り、斯かる地域には部落を公認し、自主的に部落内の公共事務を処理せしめ、旁々部落の機關をして逐年繁忙となつた。官治行政を補助せしめることは自治精神の涵養上適切なものと認め、昭和六年廳令を以て南洋群島部落規程を創設し、之に基き逐次サイパン、パラオ、ボナペ及トラツク等の各主要島に合計十部落の設置を見るに至つた。其の後部落の運営上規程改正の要あるを認め、昭和十七年新に南洋群島部落規則を制定し、部落事務の円滑を計り別段の定あるものを除いては官の監督下に公共事務を処理することに規定されてゐる。

部落には名誉職たる総代及副総代各一名を置き、何れも其の任期は三年とし支廳長の具中に依り長官が之を任免するのであるが、総代は部落の事務を担当して部落を代表副総代は総代を補佐し総代に事故ある場合は之を代理する。又区に名誉職たる区長及其の代理者一名を置き、総代の命を承け区内に関する事務に付総代を補助せしめてゐる。

区長及其の代理者は総代が支廳長の認可を受けて之を任命する。

右の外部部に協議会を置き区長及各种團體代表者其の他學識経験ある者を以て組織してゐるが、区長以外の協議會員は区長定数の範囲内とし支廳長が之を選任することになつてゐる。

斯くの如く選挙制に依らず概ね官の選任制としてゐることは南洋群島地方制度の一特色をなしてゐる。

協議会は歳入歳出予算の編成部落費の賦課、徴收、借入金、不動産の取得及処分基本財産の処分予算外に部落の負担となるべき契約の締結其の他重要事項につき総代の諮問に應ずるほか部落の公益に関する事項に付意見書を監督官廳に提出することが出来、監督官廳の諮問するときは意見を答申することゝなつてゐる。

部落は未だ財源に乏しいので南洋群島地方費より事務取扱費、事業費、衛生施設費等に対し補助金を受けて事業を遂行してゐる。

昭和十六年十二月末日（一九四一年）に於ける各部落の戸数人口及協議會員数左の通りである。

部落名称	所在地	設置年月日	協議會員数	戸数	人口
ガラバン町	サバン島	昭 7, 9	16	2,846	13,415
南東村	"	"	"	580	2,560
東村	"	"	"	490	2,523
北村	"	"	"	492	2,583
サランカ村	"	昭 9, 10	16	1,092	4,194
泉	"	昭 16, 7	12	302	1,381
ラニ	ニラ	昭 7, 9	16	1,516	5,865
ニコ	ニラ	昭 7, 9	16	3,210	13,962
ニコ	ニコ	昭 12, 8.	16	520	2,604
ニコ	ニコ	昭 8, 5	16	961	4,012

島民をして行政に關與せしむる爲には村吏の制定を設く民政時代に於ては別に規定を設けず慣習上の酋長、又は大酋長をして島民に關する人頭税の徴收其の他の事務を爲さしめて來たが、大正十一年十月（一九二二年）南洋廳令第二十四号を以て南洋群島島民村吏規程を制定し、其の旧慣を尊重し其の能力に應じ島民を村吏に登用して行政事務に關與せしめた。

各支廳管内を通してカナカ族に対しては総村長及村長をチャムロ族に対しては区長及助役を置き之が自主的に部内の統轄をなさしめた。元來チャムロ族に於ける酋長制度の旧慣がなく部落民の村吏に対する觀念は兩者大いに其の趣きを異にしてゐたので特に其の称呼を區別したのである。

村吏の任命は南洋廳長官の認可を得て支廳長之を命免する制度で支廳長村吏を任命するに當つてはカナカ族に就ては旧慣に依り原則として酋長たる家族にある者をチャムロ族に就ては部落民の推挙を俟つて任命したのであり、村吏の管轄区域は大體旧慣に依るも支廳長は其の総村長区長又は村長助役の意見を徴し長官の認可を得て其の区域を変更することを得る制度である。

総村長区長は支廳の指揮監督を承け法規又は旧慣に依り其の定められた職務に属する事項を執行するの外、島民に關する（一）法規の固知（二）諸願届の進達（三）支廳長より發した命令の傳達又は執行に關する事務を補助執行させる。

総村長又は区長は管内行政に關し所轄支廳長に意見を開申することを得、村長及び助役は総村長又区長の職務を補佐し又は分掌した。

総村長、区長、助役には月手当を給し其の給與額は別に定められた。

村吏は昭和十八年四月一日（一九四三年）現在一一〇名でその内訳は総村長三三名区長三名、村長六七名、助役七名になつてゐるが総村長は西部支廳管内に一二名、東部支廳管内に二一名で区長は北部支廳管内に二名、西部支廳ヤツブ出張所管内に一名である。村長は西部支廳管内に一三名、東部支廳管内に五三名となつてをり、助役は北部支廳管内に七名である。

第七章 司法行政

第一節 司法

一、沿革

独領時代に於ける群島の裁判制度は第三審を以て終審とし、最下級裁判所はヤップ、ヤルト及サイパンの三箇所に之を設け判事は島民より任用した。第二審裁判所はヤップに置き前記下級裁判所の覆審を爲し、其の覆審に対する上告はニューギニア総督に直隸する同地方裁判所に於て之を審理した。西暦千九百七年至りサイパンに於ける裁判所を廃止し、同裁判所の管轄は之をヤップに於ける裁判所の管轄に併合した。又三月以下の懲役拘留等に処すべき輕微の事犯に対しては裁判所の設置なき地の島司に其の即決を爲さしめた。裁判の執行は総て、島司の司る所であつた。其の部下たる土民兵をして之に当らしめた。

日本の占領直後総てこれを軍律に依つて律して來たが、大正四年十月には臨南防第四五号を以て南洋群島刑事、民事、裁判令を公布し占領地内民事及刑事は之に依ることとした。

同令に依る裁判所は第一審裁判廳及第二審裁判廳よりなる二審制であつて、前者は軍政廳及其分遣廳に置き裁判官は守備隊長及民政事務官又は分遣隊長を以て之に充て、後者は防備隊司令部に之を置き其の裁判官には防備隊參謀

長參謀一名及民政顧問一名を以て之に充てた。

同令に於ては民事、刑事共、實體的規定を設けず刑事に関しては「安寧秩序を紊し善良の風俗を害し、又は生命身体之自由名譽財産に対し侵害を加へたる者は地方の法規慣習及帝國刑事法規を參酌して処分すること」を定め、又民事に関しては「地方の法規慣習及帝國民事法規を參酌して裁判すること」に定めた。而して民事に関しては覆審請求に關してこの制限を設けないが刑事に關しては死刑、又は三年以上の懲役若しくは禁錮に処せられたる者に制限した。

警察犯に対しては大正五年六月民政令第九号を以て南洋群島警察犯処罰令を公布した。

同令も亦實體的規定を唯「地方の法規旧慣又は帝國法令に依り警察犯と認められたる違反行爲を爲し、又は之を教唆し若を幫助したる者」と規定し之等に対しては軍政廳長に於て即決を以て拘留料又は一月未満の勞役を科することと定めた。而して軍政長は司令官の認可を得て前記権限の一部を總村長に委任することを認めた。之に依つてパラオ、トラツク及ボナペの各軍政廳共一部の処罰權の委任を受けたわけであるが、その後漸次之を廃止し今尙引続き之等の者に於て解決を爲しつゝあるのはトラツク及パラオ支廳管内離島の一部に過ぎない。

大正七年民政部の設置を見て翌大正八年六月南洋群島刑事、民事裁判令中一部を改正し第一審裁判廳は之を民政署に第二審裁判廳は防備隊民政部に之を設け、第一審裁判官は民政署長第二審裁判官は民政部事務官二名を以て之に充つることとした。大正九年四月更に裁判令中一部を改正し、邦人外國人に就ては五十円以上の罰金、又は禁錮懲役者は死刑に處せられたる者島民に就ては五百円以上の罰金、又は二十円以上の禁錮懲役者は死刑に處せられたる者に限り覆審の請求を認めた上に其の範圍を拡めるに至つた。又従前裁判には書記を置くを例としたが、右上訴權擴張の改

正と共に裁判は書記の立会を要件とすることに改めた。

大正十一年三月三十一日南洋廳設置に先だち勅令第二百二十二号を以て南洋群島裁判令を公布し、四月一日南洋廳設置と共に之を施行を見た。

二、法院制度

南洋廳設置と共に南洋廳法院を設け、群島刑事、民事裁判令を廢し勅令を以て南洋群島裁判令及南洋群島裁判事務取扱令を制定し、民事、刑事の裁判及非訟事件に関する事務を掌理せしめた。

南洋廳法院には二審制度であつて第一審法院を地方法院と称し、判事單獨で審理裁判を行ひ第二審法院を高等法院と称し四名の判事を以て構成し、内前審を以て審判した判事を除き、他の三名の判事を以て合議審判することになつて居た。地方法院は民事及刑事事件に就き第一審の審判をする外非訟事件に関する事務を取扱ひ、その他裁判上の和解督促手続、不動産、船舶に対する強制執行公示催告手続破産手続供託刑事略式手続等を管轄する地方法院判事は公正証書の作成及私署証書の認証其他内地に於ける公証人の職務に属する事務の外、内地に於ける執達吏の職務に属する事務をも取扱高等法院は地方法院の裁判に対する上訴に就き覆審する。此の裁判は第二審があつて同時に終審である。

各法院に検事局を附置してゐるが、其の管轄区域は法院のそれと同じである検事局の検事は犯罪捜査に就き司法警察官も指揮監督し法院に対して公訴を提起し其の裁判の執行を指揮監督する。

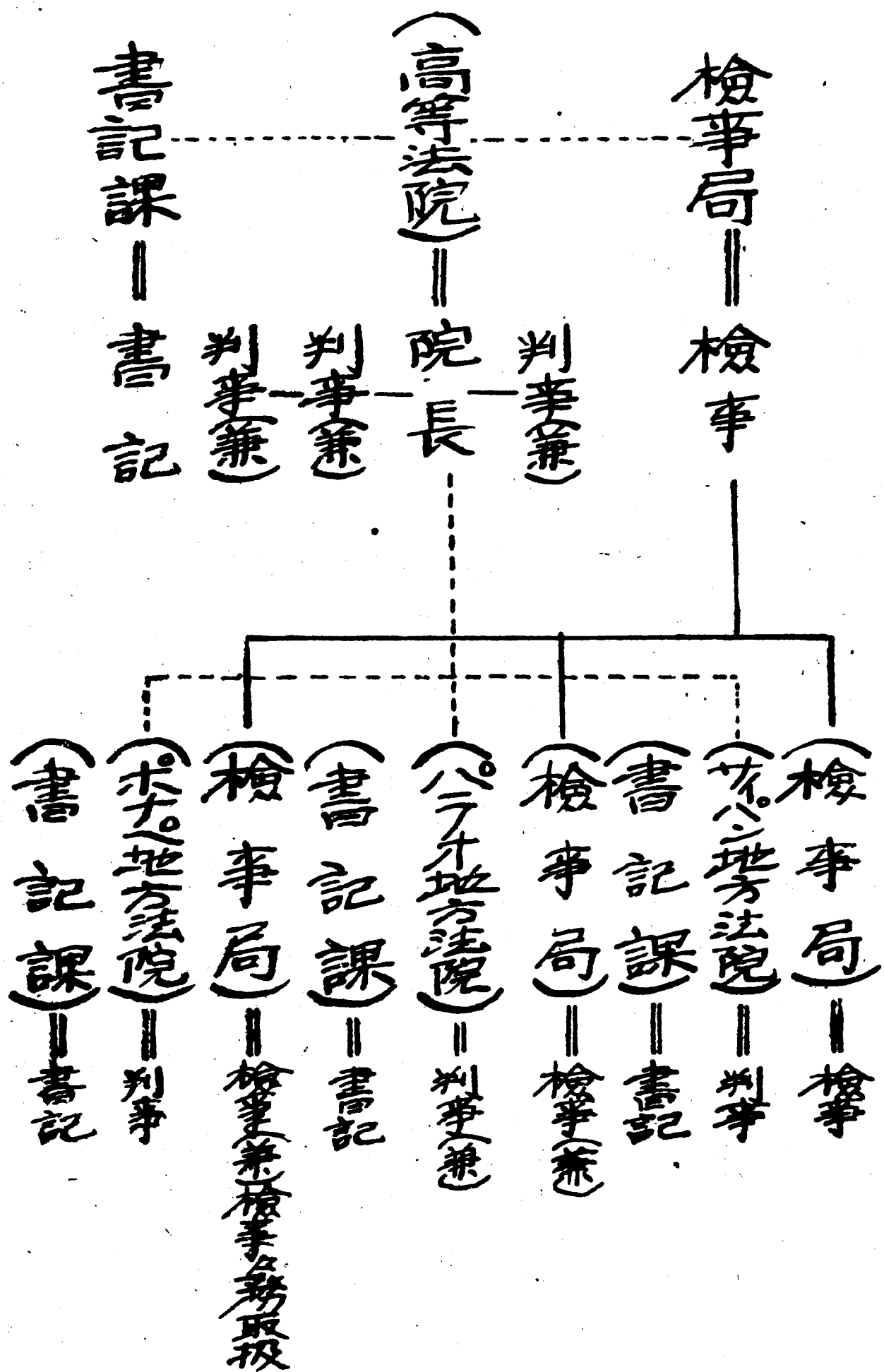
検事は各法院検事局を通じて専任二名で一名はパラオに、一名はサイパンに在勤するのでボナベに於ける地方法院

検事局の検事が兼務し、通常は警部をして検事の職務を取扱はしめてゐるが重大な事件は兼務検事自ら之を取扱ふを例とする。又支廳長及警視は犯罪捜査に就いては司法警察官として地方法院検事と同一の権限を有する。

叙上の如く民事刑事の裁判事務は法院に於て処理するを原則とするも、法院の設置なき地に在りては支廳をして民事事件に関する一部の事務を取扱はしめ、又比較的輕微なる刑事事件に付ては各支廳長をして即決を爲さしめた。即ち刑事事件に付ては拘留科料に該当する罪三月以下の懲役禁錮又は百日以下の罰金拘留科料に処すべき刑法第二百八十條の罪、三月以下の懲役禁錮若しくは拘留又は百日以下の罰金若しくは科料に処すべき行政法規違反の罪に付ては所轄支廳長が即決し、其の処分に対しては正式裁判の申立を爲し得る事とし、民事事件に付ては不動産の強制競賣民事爭議調停及其の執行供託及登記事務民事に関する公正証書の作成及私署証書の認証急速を要する場合に限り訴狀其他の訴訟書類の受理をも行はしめて居る。

法院の位置、管轄区域及組織は左表の通りである。

法院名	位置	管轄区域
南洋廳高等法院	パラオ諸島カロール島	南洋群島各支廳管内一円
南洋廳パラオ地方法院	同 右	パラオ支廳管内 ヤップ支廳管内
南洋廳サイパン地方法院	サイパン島	サイパン支廳内
南洋廳ボナベ地方法院	ボナベ島	ボナベ トラツク ヤルット 各支廳管内



三、適用法規

大正十二年一月南洋群島裁判事務取扱令公布と共に勅令第二十六号を以て南洋群島に施行せる法令に依る民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、非訟事件手続法等主要な帝國法令を適用するが、大正十三年八月には旧慣民度

其他群島特殊の事情に鑑み (一) 島民以外に關係者なき民事に關する事項に付ては慣例に依ること。 (二) 土地に關する權利に就いては當分旧慣に依り且登記を爲さざること。 (三) 官以外の者に対しては長官の許可を受けざれば島民の土地に關し賣買讓渡又は担保の目的に供する契約を禁じ。 (四) 島民の訴訟手続は法院の認める便宜の手続に依ること。 (五) 島民に対する一年未満の体刑の執行に就ては監獄に拘置せしめて勞役に服せしめ得る等多少の例外規定を設けてゐる尙警察犯に対しては廳令警察犯令がある。

四、取扱事件

近時入住者の激増と社会狀勢の複雑化に伴ひ取扱事件数は漸次増加の傾向に在るが、惡質なる事犯は尠い島民も亦性質順良にして皇恩に浴し、且生活安易で比較的財慾に恬淡なる爲一部の特殊事件を除く外概して事犯は尠い。

検事局受理処分件数人員

人										員														
件		敗				受				理		他		理				他						
受理		起訴		起訴中止		計		其他		旧受		新受		計		起訴		起訴中止		計		其他		
旧受	新受	計	起訴	起訴中止	計	其他	旧受	新受	計	起訴	起訴中止	計	起訴	起訴中止	計	起訴	起訴中止	計	起訴	起訴中止	計	起訴	起訴中止	
昭 17	35	633	668	410	137	58	80	1,188	1,218	527	181	214	30	68	24	5	5	2	814	237	5	209	23	73
昭 18	90	610	703	371	261	19	171	1,054	1,225	510	207	289	66	46	6	—	—	850	279	2	—	—	—	
高等法院	8	8	8	8	8	8	—	8	8	6	2	—	—	—	—	—	—	8	8	2	—	—	—	
サイパン	4	237	241	115	602	8	4	290	294	139	17	104	4	12	2	—	—	255	23	4	12	—	—	
地方法院	53	227	280	146	122	3	122	438	560	179	131	155	50	17	4	5	—	256	185	1	18	—	—	
地方法院	33	141	174	102	37	8	45	318	363	186	57	30	12	17	—	—	—	233	69	18	43	—	—	

刑 事 案 件 分 数 人 員

七六

	件		数	人													合	計
	有罪	無罪		計	有罪											無罪		
					懲役	罰金	拘留	留置	科料	禁錮	計	無罪						
												邦人	島民					
昭 17	370	1	371	113	44	230	26	—	6	64	47	—	—	407	123	—	407	123
昭 18	376	1	377	150	63	286	50	—	—	39	81	21	—	506	198	1	506	199
高 等 法 院	5	—	5	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	4	1
サ イ パ ン 地 方 法 院	121	—	121	62	6	63	—	—	—	1	2	21	—	147	12	—	147	12
バ ラ オ 地 方 法 院	148	1	149	53	24	86	30	—	—	37	73	—	—	176	127	—	176	128
ボ ナ ベ 地 方 法 院	102	—	102	31	32	107	20	—	—	1	6	—	—	178	58	—	179	58

民事案件受理处分件数

	受理			処			理			審理中	停止中	計			
	受		計	対判決 席決	欠判決 席決	和解	廢棄		取下				棄却	其他	計
	旧受	新受					全部	一部							
昭 17	29	13	42	2	—	8	—	—	9	—	2	21	21	6	22
昭 18	21	28	49	3	—	18	—	—	7	—	2	34	15	1	16
高等法院	6	1	7	—	4	3	—	—	2	—	—	5	2	—	2
サイパン地方法院	6	10	16	—	4	6	—	—	1	—	2	14	1	1	2
パラオ地方法院	7	14	21	1	—	5	—	—	4	—	—	10	11	—	11
ボナペ地方法院	2	3	5	—	—	4	—	—	—	—	—	4	1	—	1

数、件、分、处、理、受、件、事、解、和

[illegible]

第二節 行 刑

獨領時代に於ては行刑の事務は之をすべて地方島司に一任し土民兵をしてその執行に当面させて來た。帝國占領直後も守備隊員をしてまづ行刑の事を行はしめたが南洋廳設置と共に警察官吏をして之を兼掌せしめ今日に至つた。群島に於ける犯罪の様態は概して單純で惡質重罪事犯無く、又熱帶風土病等皆無で且群島の地理的環境上受刑者逃亡の虞尠なかりし爲、獄舎は内地に於けるが如き完備せるものを設くる必要が無かつた爲、占領以來民政署（南洋廳設置後は支廳）附置の留置場を以て代用し支廳長が警察官吏を指揮監督して刑の執行を行ひ來つたが、人口増加に伴ひ受刑者の漸増するを以て獄舎の改善を図り昭和四年サイパン支廳に完備した獄舎を設け長期受刑者を此所に收容してゐる。在監人の作業給養戒護其の他に就ては概ね監獄の定むる所に従ひ其の作業に対しては大正十五年十月以來一定の

賞與金を支給して居る。

また島民の性情、旧慣等を参酌して大正三年八月には裁判事務取扱令中の一部を改正し島民に対する一年未滿の懲役、又は勞役場留置の執行は事情に依り、檢事が即決を爲した。支廳長の権限を以て監獄に拘留又は留置の方法を執らず平生の如く勞役に服せしめ得ることとしたのは大に本群島行刑の一異色と信じてよいと思ふ。

監 人 員

	受 刑 者		未 決 拘 留		乳 兒		計	
	邦 人	島 民	邦 人	島 民	邦 人	島 民	邦 人	島 民
監 署	138	62	20	1	1	1	158	62
監 署	97	80	8	1	1	1	105	80
サ イ バ ン	47	23	4	1	1	1	51	23
ヤ ツ	1	1	1	1	1	1	1	1
バ ラ	33	21	3	1	1	1	36	21
オ	3	5	1	1	1	1	3	5
ト ラ	14	21	1	1	1	1	18	21
ク	1	9	1	1	1	1	1	9
ホ ナ								
ン								
ヤ ル								
ト								

第八章 財政

第一節 歳 計

南洋群島の歳計は民政時代と南洋廳時代の二つに大別する事が出来る。

一、民政時代及軍政時代

軍政時代の所要経費は、臨時軍事費より支弁されてゐたが、大正四年九月（一九一五年）臨南防第四百二十七号を以て、南洋群島民政会計規程を公布し、民政に要する経費は、租税、手数料、其他の收納金を以て充てる事とし特別会計制度に準じ大正四年十月一日（一九一五年）より実施した。

民政費支弁の費目は一、民政事務費、二、徴税手数料、三、道路其他土木建築費及土地買收費、四、殖産、工業産業奨励費及試験の爲に要する経費、五、警察の爲に要する経費（大正五年四月（一九一六年）より実施）六、住民教育費、七、住民治療費、八、住民救恤費等で豫算の範圍内で收納現在金より之を支弁する建前であつた。

民政費收入豫算中諸税及手数料の主なるものは、大正四年（一九一五年）税則制定當時に於ては、人頭税、營業税、特殊營業税、銃猟税、港税、関税、免許及手数料等で其他の收入としては病院收入、租税コブラ拂下代、官有物拂下代、其他雜收入等である。其後特殊營業税、港税、銃猟税等を廢して鈹区税を設くる等多大の改変はあつた。然

れ共之等民政収入は僅少であつて、大正四年度（一九一五年）に於ては十一万五千円、其後幾分の増加は來したが、尙大正十年度（一九二一年）に於ても三十万三千余円に過ぎず、從而統治に要する経費の大部分は臨時軍事費支弁の城を脱し得なかつた。

二、南洋廳時代

大正十一年三月（一九二二年）軍政を撤廃して南洋廳官制の実施と共に、南洋廳が設置せらるゝや、法律第二十五号を以て南洋廳特別会計法を、勅令第三百三十一号を以て、南洋廳特別会計規則が夫々公布せられ、之に基き南洋廳は毎年度特別会計歳入歳出予算を調製し、議会に提出を要し、且つ其の收支に關しては右規則に準拠して經理する事となり、茲に会計制度の基礎が確立した。

南洋廳設置當時を顧れば、歳入総額六百五十万円の内五百二十万円迄は一般会計よりの補充に仰ぐ状態であつたが、財政の確立を図る爲、数次に亘る税制の改革を行ひ、極力財源の涵養に努めた結果、産業の伸張、人口の増加と相俟つて、歳入は逐年累増し、補充金は漸次遞減し、昭和七年度（一九三二年）以降に於ては全く補充金を受けないで經理し得る状態となり、南洋廳創設十年にして財政の獨立を見るに至り経済的にも發展生長したのである。

三、歳入

歳入の大半を占めるものは租税で、官業及官有財産収入が之に亞ぎ、其他二、三の雜収入は有るが其額は極めて僅少で、大正十一年（一九二二年）當時に於ける歳入決算は經常部百三十万五千五百余円、臨時部五百二十三万九千九百余円、合計六百五十四万五千五百余円で、是等歳入中租税は十五万七千余円、内人頭税五万三千余円、関税九万六千余円、

出港税は僅に七千余円であつた。官業及官有財産収入は百一十一万四千余円内燐鉍拂下代の百一万九千余円を主なものとする。尙臨時部収入は総て國庫よりの補充金であつた。

越えて昭和三年度（一九二八年）に於ては、出港税百万七千余円、人頭税七萬九千餘圓と漸増の趨勢となり、租税に於ては、出港税が其大宗を占め所得税、煙草税之に亞ぎ官業及官有財産収入に於ては郵便、電信電話収入、南洋拓殖株式会社配当金収入等が主要な財源であつた。

其後産業の進展に伴ひ、經常部収入の増收を來し、昭和五年度（一九三〇年）に於ては、經常部三百四十万余円、臨時部三百九十六万余円、合計七百三十六万余円を算するに至つた。

之を大正十一年度（一九二二年）に比較すれば經常部中租税は百八十七万余円に達し、百八割の増收となり、内最も増加したものは出港税で、百七十六万余円実に二千五百十五割の増加を示してゐる。人頭税は人口の増加に依り漸次増加したが、ヤルットに於ける物納コプラの價格に依り増減があり、関税も亦外國貿易の進展に伴ひ増收の傾向に在つたが、南洋興業会社の製糖工場建設材料其他特殊なる輸入があつたので年に依り増減があつた。

官業及官有財産収入は、百四十九万三千余円に達し、三割の増加を示してゐるが、現実に臨時部は三百九十六万五千余円で、二割の減少を見てゐる。これは經常部収入の増加に伴ふ國庫補充金の減少を示すものである。

尙統治以來の財源であつた租税中島民人頭税は昭和十三年度（一九三八年）（税額八万五千六百五十円納入人員九千八百十四人）より、又官業収入たる医院収入は其事業と共に昭和十四年度（一九三九年）（収入額十八万九千余円）より夫々南洋群島地方費財政に移讓せられた。又從來官有財産として重きをなして居た。燐鉍拂下代金はアツガ

ウルの鉱業権が政府の現物出資として昭和十二年一月（一九三七年）より南洋拓殖株式会社の手に移された結果、其収入は皆無となつた。

如斯幾多の變遷を経たが委任統治以來三十有余年を「歩める足跡」とするならば統治以前のそれに比し、そこに劃期的な發展の跡を見たと言ふも過言ではないと思はれる。

四、歳出

南洋群島占領以來南洋廳設置当初迄は産業の施設具体化せず、事業準備の爲充分なる擴張実施を行ふ事が出来ず、大正十二年度（一九二二年）に於ける決算は經常部に於て百九十余万円、臨時部に於て三百四十一万三千余円、合計五百三十九万三千余円であつたが、其中特異なるものを掲ぐれば、臨時部に属する燐鉍採掘事業其他買収費百九十三万余円、航路補助百一万余円、アンガウルに於ける採鉍事業費二十六万一千余円、通信事業費十五万二千余円等である。

其後教育機關の増設、産業の助成、衛生施設の改善、土木營繕等の設備の充実に伴ひ、昭和五年度に於ては、經常部二百三十六万四千余円、臨時部二百二十九萬四千余円、合計四百六十五万八千余円で、之を大正十一年度（一九二二年）に比すれば七十三万余円の減少を示してゐるが、大正十一年度（一九二二年）に於ては、其年度に属する燐鉍事業其他の買収費百九十三万余円の特殊経費が有るから、之を控除すれば實額に於ては百二十万余円の増加を來した次第である。

尙昭和十年度（一九三五年）に於ては經常部三百八万二千余円、臨時部二百七十四万二千余円、合計五百八十二万

五千余円となり、昭和五年度（一九三〇年）より總額に於て約百二十万円の増額となつてゐる。

更に昭和十五年度（一九四〇年）に於ては經常部五百八十三万六千余円、臨時部七百五十四万五千余円、合計千三百三十八万二千余円の予算額に対し決算額は千百一十一万四千余円となり、越えて昭和十八年度（一九四三年）に於ては經常部九百五十九万八千余円、臨時部千四百四十五千余円、合計二千百四万三千余円と躍進を続け、之を大正十一年（一九二二年）南洋廳設置当初に比すれば約四倍の大いさに成長致した訳で有り、而も之れが予算の大半は國際聯盟よりC式委任統治の名を以て我國に委託された使命に基き島民の保護育成と産業開發事業に使用された訳であり、其の明細に付ては別表に依り了解出来る事と思ふ。

五、國庫補助金

群島に於ける収入は前述の如く僅少で、各般の政費に充つるを得ず、占領当初に於ては群島住民の大半は島民で、其民度甚だ低く、租税に多くを期待する事が出来ず、且つ其他に求むべき財源も乏しかつた爲、群島に存在する日本政府固有の財産たるアンガウル燐鉍採掘権、其他を南洋廳に移管して、之れが収益を財源に充て、尙内國税たる砂糖其他の消費税を群島に於て出港税として徴收し、群島財源に充当するの途を講じたが、南洋廳設置当初に於ては、之等の収入を合しても、尙百三十万余円に過ぎなかつた。依而日本政府は一般会計より、政費の不足額を補充するの制度を啓き、大正十一年度（一九二二年）に於ては、五百二十三万余円の補充金を受けた。此金額中には、燐鉍採掘其他の買収費百九十三万余円の特殊なる経費を含むと雖、大正十二年度（一九二三年）に於ても、尙三百万円の補充金を要した。故に南洋廳は鋭意財政の確立を図り財源の涵養に努めたる結果、遂に昭和六年度（一九三一年）に於て

は、官營事業に依る燐鉍拂下代百十五万余円、出港税二百四十七万余円、其他四十六万余円、合計四百九万余円に達し、歳出四百八十五万余円に比すれば、其不足額は、大正十一年度（一九二二年）の四百九万二千円に比し、僅に一分に過ぎず、遂に昭和七年度（一九三二年）に於ては、補充金を全然受けないで経理し得る状態となり、而も昭和十一年度（一九三六年）に於ては四十五万圓を、昭和十二年度（一九三七年）に於ては百十萬圓を、同十三年度（一九三八年）に於ては七十萬圓を、同十四年度（一九三九年）以降に於ては夫々七十萬圓程度を一般会計財源へ繰入をなし得る状態となつたのである。乍然其間一般会計より補充を受けた國庫補充金総額は二千九十九万余圓に達したのであり、加之昭和十三年四月（一九三八年）より地方的施設の改善拡充を目的とする南洋群島地方費制度の創設に依り毎年二十萬圓余を一般会計より補充を受けて経理してゐたのであるから、此の面だけから見ても、一般会計より直接群島統治の爲、支出された額は差引千數百萬圓となつた訳である。

六、地方財政

南洋廳施政当初に於ては、地方的公共事業も其大小を問はず、総て國家の施設に俟つの外はなかつたが、群島各種資源の開發に伴ひ、産業は著しく勃興發達し、之れに伴ひ人口も増加し、住民の經濟能力を著しく増進したので、更に島勢の躍進を期し、群島統治に新生面を開くべく國家的經營と相俟つて地方的施設の改善擴充を企図するの必要を生じたので、昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第二百二十四号南洋群島地方費令を以て、南洋群島地方費の制度を定め、在住民の應能分担に依り新に群島を一圏域とする經費支弁の公共團體を創設した。

而して本制度創設當初に於ける昭和十三年度（一九三八年）予算総額は四十五万五千八百余圓を以て發足したが、

五年後の昭和十七年度（一九四二年）に於ては二百十九万五千七百余圓となり、約五倍に發展した。其財源は地方費税と國庫補助金二十萬圓程度を受けて経理してゐたのであり、群島に於ける地方設施の改善に對する努力を傾倒したのであるが、十分なる効果を挙げ得ずして終末を告げたのである。尙歳出中主なるものを挙げれば、經常部に於ては、教育費、醫院費、水道費に總額の約七割を、臨時部に於ては、土木營繕費、各種産業獎勵金に其八割を充當したのである。之れが詳細に亘つては卷末に添付せる、南洋群島地方費關係の統計表に依り説明する事とした。

以上要するに、南洋群島の我が國に於ける經濟的地位は、其地理的還境よりして唯一の對南方經濟ブロック参加への門戸であり、年を逐ふて其中繼基地的存在の重要性を認められ、隆盛の趨勢となつたのであるが、不幸昭和十六年十二月八日（一九四一年）太平洋戦争の勃發に伴ひ、昭和十五（一九四〇年）六年（一九四一年）を最盛期として、漸次戦争遂行の目的の用に供せられ、從來取り來つた南洋經濟開發の基本施策も、茲に全面的改編が行はれたのであるが、特に昭和十九年（一九四四年）以降に於ては戦争の熾烈化に伴ひ、本群島は全く母國と隔絶し、孤立無援の状態に陥り、從而南洋廳財政も必然的に縮少を余儀なくせられた訳であり、且又粒々三十有余年の發展の跡を辿るべき貴重な資料も殆んど戦禍を蒙り散逸し去り、南洋開發事業中道にして実に悲惨な終焉を遂げたのは遺憾の極みである。

茲に南洋廳特別會計構成の概算を記述し、其變遷の跡を統計表を以て補足説明する事とする。

第二節 税制々度

日本統治後に於ける租税制度は、大正四年（一九一五年）二月南洋群島税則を以て嚆矢とする。即ち同規則に依れば、租税の種目は、人頭税、營業税、特殊營業税、銃獵税、港税及関税等であつた。其後税制整理を行ひ、大正四年十月（一九一五年）民政令第二号南洋群島関税規則、民政令第三号營業税規則、民政令第四号島民人頭税規則、同令第五号人頭税規則を制定し、銃獵免許税を設け、大正五年一月（一九一六年）より之を実施した。其後銃獵取締規則の改正を行ひ、銃獵免許税を廃止し、南洋廳設置せらるゝに及び、更に税制々度を根本的に革新し、人頭税規則及関税規則を改正し、更に大正八年（一九一八年）營業規則を廃止し又出港税の制度を新設した。

南洋群島の租税其他公課の徴收に關しては、大正十一年八月（一九二二年）勅令第三百五十六号南洋群島に於て徴收する租税其他公課の徴收に關する件に依り、大體國税徴收法に依る事に定め、同年九月（一九二二年）廳令第三十五号を以て、南洋群島租税其他の公課徴收規則を制定し告知の方法、滯納者の処分等徴收に關する手續を規定した。

一、國税

租税の種目は大正十一年三月（一九二二年）南洋廳設置當時に在つては、人頭税（大正四年四月（一九一五年）公布）関税（大正五年七月（一九一六年）公布）釐区税（大正五年八月（一九一六年）公布）出港税（大正十一年八月（一九二二年）公布）の四種であつたが、昭和十年（一九三五年）より計畫せられた南洋群島開港十ヶ年計畫に基き未探求鉱産資源の開港に對処し、昭和十二年五月（一九三七年）南洋群島鉱業令を制定し釐区税の外に釐産税を創設

し、兩者を合して釐区税に改めた。次いで昭和十三年四月（一九三八年）南洋群島地方費税が創設された爲、島民人頭税を之れが財源として移譲し、非島民人頭税は之を廢して所得税を設け、尙法人の所得に對しても新に課税する事となつた。又法人營業收益税、煙草税をも新設し、租税体系稍々整ふに至つた。

尙外に内地及其他外地に於ける支那事變特別税に對應して昭和十二年八月（一九三七年）臨時利益配当税を、同十三年四月（一九三八年）通行税を設けた。右の内臨時利益配当税は、昭和十三年八月（一九三八年）利益配当税に改めた。次で昭和十五年四月（一九四〇年）内地の税制改革に對應して所得税、法人營業收益税及臨時通行税に修正を加えると共に利益配当税を廢して配当税を設け又特別法人税を創設した。更に昭和十六年十二月（一九四一年）砂糖消費税を創設し、出港税、煙草税及臨時通行税に改正を加へる等間接税の創設増徴を行ひ、次で昭和十七年四月（一九四二年）には太平洋戦争の進展に伴ひ、戦時に於ける需要に對應して國庫收入の増加を図る目的の下に行はれた内地及外地の増税に順じて所得税、法人營業收益税及特別法人税を中心として増税並改正を行ひ、配当税、酒税及砂糖消費税に於ても夫々増徴を行ふと共に増税に關しては經濟諸政策との調和を図る爲、適當と認められる徴税上諸種の措置を講じた。越へて昭和十八年四月（一九四三年）再び酒税、砂糖消費税等間接税を中心とする増徴を行ひ、消費の抑制、購買力の吳收を図ると共に歳入の増加を計る等夫々必要と認めらるゝ改正を行つた。

其租税種目に就き概要を述べれば左の通りである。

イ 所得税

本税は昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第二百二十一号南洋群島所得税令に依り、南洋群島に住居を有し、

又一年以上居住する者の所得に付賦課し、住居又は一年以上居住しない者に就ては

一、南洋群島に資産又は営業を有するとき。

二、南洋群島に於て公債、社債又は南洋拓殖株式会社預金の利子の支拂を受くるとき。

三、南洋群島に本店を有する法人より利益若は利息の配当又は利益の処分たる賞與若しくは賞與の性質を有する給與を受くるとき。

四、南洋群島に於て一時恩給又は之に類する退職給與の支拂を受くるとき。

右各号の所得に付本税を賦課し、之を第一種所得税、第二種所得税、第三種所得税に分ち其内容は大体他外地の制度に準拠し、更に南洋群島の特殊事情を加味し規定したのである。本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は、第一種百十四万四千八百四十七円、第二種五万三千十六円、第三種三十四万一千六百八十八円で総額百五十三万九千五百五十円であつた。

第一種所得税は法人の所得に就て法人に賦課するもので之を分つて、（甲）法人の普通所得（各事業年度の総益金より純損金を控除したる金額に依る。税率は南洋群島に本店を有する法人に付ては「百分の十五」本店を有せざる法人に付ては「百分の二十五」）（乙）法人の超過所得（超過所得金額を左の三つに区分した。）

（一）普通所得金額中資本金額に對し年百分の十の割合を以て算出したる金額を超ゆる金額に對しては 百分の六

（二）同百分の二十の割合を以て算出したる金額を超ゆる金額に對しては 百分の十五

（三）同百分の三十の割合を以て算出したる金額を超ゆる金額に對しては 百分の三十

（丙）法人の清算所得（法人解散したる場合に於て其の残余財産の價格が解散當時の拂込株式金額又は出資金額及積立金額の合計金額を超過するとき其の超過金額に對し自分の税率に依り之を賦課した）とした。

第二種所得税は

甲 南洋群島に於て支拂を受ける公債、社債又は南洋拓殖株式会社預金の利子

乙 南洋群島に住居又は一年以上居住しない者の南洋群島に本店を有する法人より受くる利益、若しくは利息の配当又は利益の処分たる賞與若しくは賞與の性質を有する給與

丙 南洋群島に於て支拂を受くる一時恩給又は之に類する給與

以上の所得に對し左の税率に依り之を賦課した。

甲 國債の利子 百分の四

國債以外の公債の利子 百分の五

其の他 百分の六

乙 百分の八

丙 所得金額を左の各級に区分し通次に各税率を適用した。

二万円以下の金額 百分の五

二万円を超ゆる金額 百分の八

十万円を超ゆる金額 百分の十六

五十万円を超える金額 百分の二十五

第三種所得税は第二種に属せない個人の所得に対し、其所得金額を二十数階級に区分し通次に各税率を適用して之を賦課した。尙本税の免税点は千五百円であつた。又支那事變の爲、従軍した軍人及軍属に対しては昭和十三年（一九三八年）勅令第六百三十九号の規定に依り本税の減免並徴收猶予等を認めた。

ロ 法人營業收益税

本税は昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第二百二十二号南洋群島法人營業收益税令に依り、群島に本店、支店及其他の營業場を有する營利法人の純益に付賦課した。其の税率は純益金額百分の三・四であつた。本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は十五万八千六百四十八円である。

ハ 特別法人税

本税は昭和十五年三月三十一日（一九四〇年）勅令第九十三号南洋群島特別法人税令に依り、南洋群島に主たる事務所を有する特別法人（産業組合、実業組合及実業組合聯合会）の各事業年度に於ける余剰金に付賦課し、其税率は百分の七・五であつた。尙昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は一万五千三百七十円である。

ニ 配当税

本税は昭和十五年三月三十一日（一九四〇年）勅令第九十五号南洋群島配当税令に依り群島に本店を有する法人より利益又は利息の配当を受ける者に賦課し、普通配当税及超過配当税の二種に分たれ

普通配当税は内地に住所を有する者及南洋群島、朝鮮、台灣、閩東洲又は樺太に住所を有せずして内地に一年以上

住居を有する者が南洋群島に本店を有する法人より受くる利益又は利息の配当に付賦課し、其の税率は配当金額の百分の十三・五であつた。

超過配当税は南洋群島に本店を有する法人より受ける利益配当金中配当率一割の割合を以て算出したる金額を超える金額に付賦課するもので、其税率は百分の十五であつた。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は四十九万八千五百五十一円である。

ホ 鉱業税

本税は昭和十二年五月二十二日（一九三七年）勅令第二百十四号南洋群島鉱業令に依り賦課するもので、鉱区税及鉱産税の二種より成り、鉱物資源の發見に伴ひ、燐鉱の外ボーキサイト、マンガン等の採掘移出も企業化され其の額も漸次累増した。

鉱産税は南洋廳長官の認定する鉱産物價格の百分の一で鉱区税は鉱区一ヘクタール毎に一年、一円八十錢で、鉱業許可の日より満三年間は其の定額の半額であつた。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は十七万五千六百三十三円である。

ヘ 煙草税

本税は昭和十三年四月十九日（一九三八年）勅令第二百六十九号南洋群島煙草税令に依り製造煙草に賦課するもので、保稅地域又は郵便局より煙草を引取る時、引取人より之を徴收した。其の税率は煙草の小賣定價の百分の三十である。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は百二十二万四千二百十八円である。

ト 砂糖消費税

本税は昭和十六年十一月二十八日（一九四一年）勅令第三千三百八十八号南洋群島砂糖消費税令に依り、砂糖、精蜜及糖水（甘蔗を原料とし製造した糖汁を含む）に対し賦課するもので、製造場又は保税地域より、前記課税物件を引取る時、引取人より之を徴収した。

本税の税率は左の如くである。

（一）砂糖を三種に分ち、第一種、分蜜せざる砂糖（樽入黒糖及白下糖）に対しては其税率は百斤に付一級二円四十銭、二級百斤に付一円五十銭、第二種、其の他の砂糖に対しては百斤に付一級四円十銭、二級二円六十銭、第三種、氷砂糖、角砂糖、棒砂糖に対しては、氷砂糖百斤に付五円、其他四円四十銭

（二）精蜜を二種に分ち、第一種氷砂糖を製造するときに生ずる精蜜に対しては百斤に付二円七十銭、其他の精蜜に対しては一円二十銭

（三）糖水に対しては百斤に付三円四十銭の税率を課した。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は十八万七千三百三十一円である。

チ 酒 税

本税は昭和十六年十一月二十八日（一九四一年）勅令第三千三百六十六号南洋群島酒税令に依り、製造場又は保税地域より酒類を引取る時、引取人より之を徴収し、酒類を分ちて（一）醸造酒（二）蒸餾酒（三）再製酒とし、其税率は種

類及アルコールの含有度等に依り夫々等差を設け、十石に付二十四円乃至五十九円の程度であつた。

本税昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は四十八万一千四百十四円である。

リ 出 港 税

本税は大正十一年五月三十日（一九二二年）勅令第二百九十六号南洋群島港税令が公布されて以来、群島産業の進展に対応し、昭和五年（一九三〇年）同七年（一九三二年）同十六年（一九四一年）と改正が行はれた。其課税の対照は内地、朝鮮、台湾又は樺太に於て内国税を課する物件であり、之を南洋群島より前記の地域に移出する場合に賦課したのである。而して其大部分は砂糖及合成酒の移出に対するもので、其税率は内国税を基調とし、夫々群島の特殊事情を加味して勘案せられたのである。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は千二十一万九百九十四円であつた。

又 関 税

本税に關しては大正四年十月（一九一五年）民政令第五号を以て南洋群島関税規則を制定、大正五年一月（一九一六年）より実施した。即ち群島を一独立の関税区域となし輸出入税を課する事とし、更に同十一年五月三十日（一九二二年）勅令第二百九十五号を以て関税法、関税定率法及其他の関税法規に依る事と定め、外國より輸入する貨物に對し各所定の税額を課して來た。而して其主要港はサイパン、パラオ、アンガウル、トラツク、ボナペ及ヤルトの六港であるが、アンガウル港に就ては貨物に制限を加へ、関税定率法別表輸入税表第一類貨物（生活能力を有する植物及活動物）の輸入を禁止してゐた。尙本課税物件の主なるものは重油、ワックス、珈琲等であつた。

本税の昭和十六年度（一九四一年）に於ける調定額は五万四千七百四十八円である。

ル 通行税

本税は昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第七十二号、南洋群島臨時通行税令に依り、汽船の乗客に対し、其乗船区間の料数及船室の等級に依り夫々区分して課税した。

本税の昭和十七年度（一九四二年）に於ける調定額は二万三千十五円である。

二 地方税

本群島の地方費税として賦課したものは、昭和十三年四月一日（一九三八年）勅令第二百二十四号南洋群島地方費令、南洋廳令第十一号南洋群島地方費税規則に依り、國税附加税として

- （一） 所得税附加税（第二種所得税に対するものを除く）、
- （二） 法人営業収益税附加税
- （三） 鉦産税附加税

の三種目並に独立税として

- （一） 所得税（法人所得税、個人所得税）
- （二） 人頭税
- （三） 遊興税

の三種目と定められたが、其後昭和十四年五月（一九三九年）遊興税を遊興飲食税と改めた。而して群島に住居を有

する者、又は六ヶ月以上群島に滞在する者は其初に遡り地方費税を納める義務を負ひ、群島に住所を有せず又は六ヶ月以上滞在しない者は

- （一） 群島に資産を有する者に対しては其資産より生ずる収入又は所得に対して賦課する地方費税を
- （二） 群島に営業場を設けて営業を爲す者に付ては其営業より生ずる収入、又は純益に対して賦課する地方費税を
- （三） 群島に於て特定の行爲を爲す者に付ては其行爲に對して賦課する地方費税を納める義務を定め亦
- （一） 合併後存続する法人に付ては合併に依り消滅した法人に合併前の事実には賦課せらるべき地方費税で未だ賦課されていないもの。

（二） 相続人又は相続財團に付ては、被相続人に相続開始の事実につ、賦課せらるべき地方費税で未だ賦課されて居ないものに対しても之を賦課する事とした。其概要を述べれば左の如くである。

イ 國税附加税

本附加税は本税賦課の都度、所得税附加税に在つては、本店の所在地又は住所若くは居所に於て、法人営業収益税附加税に在つては、営業場の所在地に於て、鉦産税附加税に有ては、営業場又は鉦区の所在地に於て夫々本税の納税義務者に付之を賦課したのである。

本税の課率及昭和十七年度（一九四二年）に於ける税額は左の通りである。

第一種所得税附加税の課率は所得税百分の五十以内、税額三十三万七千七百八十七円。

第三種所得税附加税の課率は所得税百分の三十以内、税額十万二千二百七十六円。

法人営業収益税附加税の課率は営業税百分の五十以内、税額七万九千五百五十六円。
 鉱産税附加税の課率は鉱産税百分の三十以内、税額は四万二千五百十六円。
 合計五十六万二千一百三十五円。

□ 独立税

(一) 所得割は法人所得割及個人所得割よりなつてゐる。
 法人所得割 本所得割は所得税法施行地(内地)朝鮮、台湾、関東洲又は樺太の法令に依り、所得税を課せらるべき法人で群島に資産を有し、又は営業所を設けて營業を爲すものに對して之を課税し、所得税施行並前記の地域の法令に依り所得税を課せられた法人の所得中群島に於ける資産又は營業より生ずる所得に對し、南洋群島所得税率に依り算出した所得税相当額を課税標準として其百分の五十以内の課率に依り賦課した。

本所得割の昭和十七年度(一九四二年)に於ける調定額は三百六十九円である。

個人所得割 本所得割は第三種所得税の賦課を受けない者(所得年額千五百円以下の者)に對し其所得金額を左記各級に区分し通次に各課率を適用して之を賦課した。尙本所得割の免稅点は六百円である。

課率	六百円以下の金額	百分の〇・五
	六百円を超える金額	百分の〇・七
	八百円を超える金額	百分の一・一
	千二百円を超える金額	百分の一・五

本所得割の昭和十七年度(一九四二年)に於ける調定額は四万四千八十円であつた。

(二) 人頭税(個人特別割)

本税は島民十八才以上の男子に對し賦課する事とし、其の課率は、年額十円以内に於て其收入及土地の状況並旧慣に依り其税額を定め、年二期に分割徴収する建前であつたが、特に資産を有する島民に對しては特に種々の均衡上年收益金額の百分の三以内に於て應能分担せしむる方法を取つた。而してヤルト支廳管内に於ける本税の賦課徴収に關しては、旧慣に依り納入者の便宜を計り物納(コプラン)を認めた。尙本税の賦課額の決定に當りては、支廳長は島民自体より成る諮問機關を利用し、極力其担税力の實際を把握するに努むべく規定を遵守する責任を有し(規則第四十九條)且つ担税能力なきもの及各種學校兒童、並生徒、並講習生等其他実情に則せざる者に對しては本税の徴収を免除する事とした。

本税の昭和十七年度(一九四二年)に於ける調定額は六万三千三百三十二円であり、之を大正十一年度の税額五万三千円に比すれば僅かに一万円程度の増加を來して居るが、要するに其一人当年額六円程度で有り、其收入に對し三割程度迄の課率では大した負担ではなかつた事は事實である。

(三) 遊興飲食税

本税は料理店、飲食店、旅館其他之に類似する場所に於ける遊興飲食及宿泊に對し賦課し、其税率は料金の百分の十五乃至百分の百とし、其内で特に遊興飲食に對しては時局下右の標準に依り比較的高率を賦した。
 本税の昭和十七年度(一九四二年)に於ける税額は九十六万九百二十九円であつた。

第三節 國有財産

一、官有土地及建物の基因

大正三年十月（一九一四年）日本海軍が南洋群島を占領後、日本政府はヴェルサイユ條約第二百五十七條第二項に依り、独逸時代の官有土地及建物一切の譲渡を受け、之に占領以來日本政府が建設し又は買収若は寄附に依つて取得した土地建物を加へると、大正十一年四月（一九二二年）南洋廳設置当初に於て、宅地十八万九千三百三坪、耕地二十六万一千六十一坪、椰子林二百一十一万五千七十四坪、林野一億六千二百三十八万六千八百二十九坪、建物八千五百四十六坪であつた。爾來廳務拡充に伴ひ、逐年土地及建物の買収、寄附並建設が行はれ、更に大正十二年度（一九二三年）より開始した土地調査の結果、新に官有地に編入した土地もあつて下記の如き所管財産を見るに至つたのであつた。が更に昭和八年度（一九三三年）には南洋群島土地調査令を設け土地の所有者及其境界の査定を行ひ之が整理に努めた。

二、官有土地及建物の管理

軍政廳時代の土地及建物は、大正五年一月（一九一六年）民政令第六号占領官有財産取扱規則及同年一月臨南第三十号民政費所屬官有財産整理規程に依つて防備隊所屬の官有土地建物は之を占領財産とに区分し、夫々軍政廳の保管に属したが、大正七年七月（一九一七年）防備隊に民政部及民政署が設置されるに及び其管理財産も之に移管せしめられた。

斯くて本群島は、大正十年四月（一九二二年）日本の委任統治域となり、翌大正十一年四月（一九二二年）防備隊を廢し、新に南洋廳が設置せられ防備隊所屬の財産は全部之に移管せられた。茲に於て南洋廳は大正十一年七月（一九二二年）廳令第十四号を以て國有財産法及國有財産法施行令を準用する事に定め、占領官有財産規則は之を廢止した。次で大正十五年八月（一九二六年）南洋廳所轄國有財産取扱規程及雜種財産取扱規程を制定し、所轄財産の整理統一に着手したが、独逸時代の公簿類は概ね散逸し且つ當時現存した図面も不完全なものが多くあつた爲、大正十二年度（一九二三年）以降土地調査を開始し大いに之が整理に努めた。尙昭和六年（一九三一年）度に於ける所轄財産は、土地二億五千二百二十五万六千八百九十九坪、家屋三万一千二百二十五坪、船舶七十九艘であつた。

其後昭和十二年三月三十一日（一九三七年）勅令第一百一号を以て南洋群島國有財産令が公布せられ、群島に於ける國有財産に關しては南洋廳長官は之れ基いて管理を実施した。

尙昭和十八年三月三十一日（一九四三年）現在所轄財産は左記の通である。

土地三億八百八十三萬六千二百四十八坪、此の價格、一千四百六十一万一千五百二十七円、建物八百七十七万七千一百二十二円、工作物二百八十九万五千六百四十二円、船舶百六隻、此の價格百十三万一千九百八十円、株式及持分、二十一万九百二十株、此の價格千五四万六千円、合計三千七百三十六万二千二百七十一円であつた。

尙昭和二十年八月十五日（終戰當時）残存せる國有財産の評價額は左記の通である。

土地、林野八千八百一万八千三百三十円、宅地一億六千九百八十五万九千九百三十二円、工作物八百六十八万六千九百二十三円、合計二億六千六百五十六万五千八百八十五円である。

三、官有地の貸下

官有地の貸下は、軍政時代に在つては大正五年一月（一九一六年）占領官有財産取扱規則に依り、行政に支障がないと認めたものに限り、之を貸下げる事とした。時恰も邦人企業投資を試みんとする者も相当あつたが、孰れも熱帯に於ける経験に乏しき爲、殆んど失敗に帰し、渡航者は一時中断したが、南洋廳設置以來漸次各種産業の興起を見るに至り、茲に於て再び官有地貸下を請ふ者が激増した。

南洋廳に於て貸下した土地は、昭和十二年三月（一九三七年）公布の南洋群島國有財産令、同令施行規則に基き、椰子園、耕地、牧場及建物敷地用等であつて、貸下期間は十年乃至三十年が普通であつた。而して貸下料は既墾地、未墾地其他土地の状況に依つて差を設け、又使用の目的及場所等を考査して三年乃至五年を経過する毎に貸下料を改定する事とした。但し借受の目的が公共用、又は公益事業に供するものであるときは之を減免した。

尙昭和十七年三月（一九四二年）末現在の利用状況は、建物九十九万坪、農耕地八千六万一千坪、椰子林一千九百八十八万四千坪、牧場四百四十二万二千坪、植林地一千四百八十一万四千坪、其他百一万一千坪、合計一億二千一百二十八万二千坪である。

第四節 官營事業

群島に於ける官營事業としては、先づアンガウル島に於ける燐鉍採掘事業及各主要島に於ける通信事業及医院の經營、電燈事業、製氷事業並工作場の經營等であるが、元來本群島の如く未開、且島嶼が狭少であつて、人口の散在す

る土地に於ては群島住民の福祉増進及産業の開拓の爲には採算を度外視しても必要なる特殊事業を行はねばならなかつた。尙通信事業及医院の經營は、收支相償はないけれども前述の趣旨の下に実施されたものであり、又燐鉍採掘事業は、南洋廳の財源として經營されたのであるが、之等は夫々産業及通信、衛生の章に譲る事とし、其他の主なる官營事業に付て述べれば左の如くである。

一、電燈事業 群島に於ける電燈事業はパラオ、トラック、ヤルートの三島に、臨時南洋群島防備隊が官廳用として設備したものを嚆矢とし、大正十一年四月（一九二二年）防備隊廢止と共に、南洋廳に於て右施設を繼承し來つたが、同年十二月（一九二三年）南洋廳電氣使用規則を制定し、先づ本廳所在地たるパラオのみに於て一般需要者に供給する事とした。越へて昭和四年七月（一九二九年）南洋廳電氣事業管理者事務規程を制定し、各廳の電氣事務の統一を図つた。當時は定額料金の徴收制度であつたが、漸次土地の開拓に伴ひ需要者も増加した爲、昭和二年十一月（一九二七年）同規則を改正して新に従量制を採用すると共に点燈のみならず、動力にも使用し得る道を開き同三年一月一日（一九二八年）より之を実施した。尙トラック、ヤルート、サイパン、ヤップに於ける電燈も右規則に依る電氣事業として、各支廳長を管理者とし、ヤルートは昭和三年一月一日（一九二八年）よりトラックは同年三月一日（一九二八年）より、サイパンは昭和三年度（一九二八年）に於て發電所を新設し昭和四年七月（一九二九年）よりヤップは各地の例に依つて同地無線集信所發電設備の余力を利用し昭和四年九月（一九二九年）より、何れも一般公衆に電燈の供給を開始した。以上の如く電燈事業は各支廳所在地に施設されたが、独りボナベは曩に民業の計画であつたので、極力之を援助したけれども遂に実現も不可能となつた爲、官營を以て昭和六年度（一九三一年）に於て發

電所を新設し、翌年四月一日（一九三二年）より之れが送電を開始した。之れが利用状況は卷末別表の通りである。

二、製氷事業

南洋廳設置当初に於ては、パラオ島に海軍より移管を受けた製氷設備を有したが、機械故障の爲、運轉はしなかつた。然るに大正十二年十月（一九二三年）之を修理し、製氷を開始したのであつたが、生産高の僅少と、製造費の高價な爲、一般の需要を充す事が出来ず、唯病人、其他特殊の用に供する爲、其都度製氷する程度であつて應急の間に合はず、誠に寒心に堪へぬものがあつた。茲に於て南洋廳は昭和四年度（一九二九年）に於て、新にパラオ島にアンモニヤ式冷凍装置の製氷設備を行ひ、昭和五年（一九三〇年）より製氷を開始して一般の需要に應じ得る様になつた。

其結果は頗る良好であつて低廉且常時供給する事が出来、從而サイパン島に於ても、昭和六年二月二十一日より製氷事業を開始した。

一方之と併行してパラオ、サイパン、テニヤン、ボナベ、ヤルト島に於て、南洋興発、南興水産、其他水産会社が事業の一環として製氷を開始した。即ち南洋興発は、サイパン、テニヤン両島を中心として大正十五年十二月製氷を開始したが日産半噸に過ぎず、南洋の急速は發展に伴ふ需要の増加に好処し、遂に昭和六年初頭南洋製氷株式会社を創設し同年六月完成を見た。又南興水産はパラオ島を中心として製氷を開始してゐたが、昭和十八年施設の拡充を完成、遂に日産三十噸を確保するに至り、之れに依り潤澤な供給をなし得る様になり一般の利便は増大した。

三、工作場の經營

パラオ及トラックに於ける修理工作場は何れも大正十一年（一九二二年）軍政府より南洋廳に移管を受けたものであつて、主として官廳用の機械修理工作を爲して來たが、パラオに於ては大正十二年九月（一九二三年）より、職員の関係上、トラックに於ては機械の故障に依り一時作業休止の已むなきに至つたが、パラオに於ては大正十三年二月（一九二四年）トラックに於ては昭和三年一月（一九二八年）より夫々之が作業を再開する事が出来た。

又一方昭和二年七月（一九二七年）には、修理工作委託規程を制定し、余力の許す限り需要者の要求に應じ得る事となり、漸次一般に利用の途が開かれ、爲に逐年之が利便も増大した。が昭和十年頃より一般民間業者の増加に依り之れが利用價值も遞減した。

四、上水道事業

本群島に於ては、雨水が唯一の飲料水で有り、雑用水も亦天水を使用してゐたので、乾燥期に於ける水の欠乏と衛生上の見地より、官營を以て上水道新設工事を企画し、パラオに於ては、昭和十二年度（一九三七年）に起工し、同十五年度（一九四〇年）より一般給水を開始した。サイパンに於ては昭和十三年度（一九三八年）に起工したが、遺憾ながら戦争に逢着した爲未完成に終つた。群島中ロタ島は幸ひ山水が豊富なので、之を引用し、昭和九年（一九三四年）南洋興發株式会社が上水道を施設した。之に依り一般に裨益する処蓋甚大であつた。

五、医院の經營

大正三年（一九一四年）群島占領直後、直に医院を開設して、軍医官が、一般診療に従事し、更に同七年（一九一八年）民政部設置と共に軍医官に代つて、文官たる医官、医員が之に当り、其成績大いに見るべきものがあつた。大

正十一年（一九二二年）南洋廳設置と共に群島須要の地七ヶ所に南洋廳醫院を設置し、汎く公衆の診療に当らしめると共に地方病の調査研究に従事せしめた。其後人口の増加、衛生思想の發達に伴ひ、公医規則を制定し、開業医に補助を與へ、一般の診療に従事せしめ大いに衛生施設の拡充強化に努め、不慮の災厄の防止に万全を期し、其成果大いに見るべきものがあつた。其後本事業は事業の性質上昭和十四年度より南洋群島地方費に移譲せられたが、住民の福祉増進の爲、毎年本事業収入の倍額程度を之が経費に充当し衛生施設の拡充を計り、尙島民に対しては其の治療費を邦人の半額以下とし事情に依り、更に之を減免する等の措置を講じたので之れが利用者は増加した。尙本事業の詳細は衛生の章に譲る事とする。

第九章 宗教

第一節 概 説

古來、南洋群島原住民の間に於ては動物を一族の祖神としたり、或は一種の植物を神聖樹とし崇敬する等原始的宗教が相当度く、且つ深く行はれて居たものである。十六世紀の初頭始めて群島が文明と接觸、程なく西班牙の統治下となつたが同國は宗教政策に極めて熱心で一六六六年同國ジェスイット派宣教師サンチヴァタリスが、グアム島に來り始めて布教に従事原住民に対し宇宙唯一神の觀念を植へると共に、其の資性陶冶と文化の向上に寄與した事は絶大のもので、批政暴政の続出で流血の惨事の相次いだ同國統治下に於てよしや、それが原住民懷柔策に出でたとしても基督教傳道の徹底は、原住民の資性より野性味を漸次脱色せしめ、其の文化向上に多大の裨益を與へた事は事實であり、唯一の功績に数へられよう。

之に次いで基督教新教の群島に渡來したのは一八五七年で、米國新教傳導團に属する宣教師が渡來し、エボン島（マシーナル群島）を本拠とし、東カロリン及マシーナル群島に布教したが、後独逸領となつてから之に加へて同國リベンツェラー派の新教傳導團がポナペ島（東カロリン群島）に本拠を据へ布教傳道に努力したもので、更に大正三年（一九一四年）群島が我が統治下となるや之等独逸人宣教師は全て退島したが、大正九年（一九二〇年）以來基督教

新教日本組合教会に属する南洋傳導團が進出し、独逸領時代教勢衰微したカトリック教も大正十年（一九二一年）西班牙人宣教師より成る天主教南洋宣教師が再進出すると共に我が占領に依り一時退島せるリーベンツェラー派宣教師も昭和二年（一九二七年）には再び南洋傳導團の一員として復歸し、群島基督教界空前の盛事を現出した。

此の事は同教の布教の歴史が極めて永かつた事と時に教勢の盛衰はあつたが、不断性があつた事勿論であるが、夫々の宣教師が凡百の苦難と闘ひ原住民の実生活に入り、彼等の旧慣習俗を身を以て体得し理解し、此上に立つて教義の宣布を企て更に之を文明を調和させ現實的に啓蒙し、其の実生活の文化向上と資性の陶冶を図つて來たからに依るものである。此の布教も夫々統治國の宗教勢力を反映して新、旧兩教交々盛衰があつたが一人我が統治下にあつては原住民に対する政策は全く一視同仁政策の現はれてあつて、原住民間に於ける基督教の浸透度の深く且つ廣い事を認め、新旧兩教は勿論後続の佛教とも何等差別する事なく布教の自由を與へるのみか積極的に助成した事等も大いに與かつて力があつた事は否めない事実であり、現在全原住民の宗教は旧慣の遺物とし氏族の所謂氏神の存在はあるが、觀念的なものでなく其の盡くが基督教新旧孰れかの信者であると言つて過言でない有様である。群島に於ける宗教は西班牙独逸兩統治下に於ては前述の如く基督教新旧兩教のみの存在であつたが、我が統治下に入つてからは大正八年（一九一九年）始めて佛教が渡來し、更に神道が入つたが之等は孰れも群島に移住した日本人を対照としたもので、中に原住民に対し布教宣布を企てたものもあつたが基督教に比し布教の歴史も浅く、且つ其の方法にも積極性を欠き特に原住民の旧慣風俗の徹底した究明の上に立脚しなかつた嫌ひがあつた爲に、彼等の実生活と遠く遊離するの結果となり、大した成績を挙げ得なかつたものであり、日本人に依る佛教神道の布教は少く其原住民に対しては全く失敗

したと言つて過言でない。

第二節 固有宗教

群島原住民の社会組織の基本は主として母系血族集團であるが、之等の氏族は各々動物を一族の祖神としたり、植物のあるものを神聖化して崇拜する原始的固有宗教を持つて居る。

之等の宗教は彼等の有する傳説を基調とし之に其の旧慣習俗が渾然一体となつたもので、其の起源も古く、且つ範圍も廣く深いものである。西独領以來の基督教の宣布傳導と我が統治以來の教育の普及に依り、一應彼等の文化程度も飛躍的に進歩した現在に於ても青少年間に實際迫力を減じたとは云へ、尙相當に盛んであつて之の事は佛教徒としての日本人が更に氏神を崇敬する立場と同様のものではあつた。

文化向上で他島に比べて極めて急速度で行はれたパラオ島に於てさへ統一のない原住民宗教を統一せんと企てられた事がある程であり、文化程度の稍劣つた他地方に付いては其の潜在力の深さ廣さに關しては思ひ半ばに過ぎるものがある。

パラオに於ける固有宗教の改革は当初よりパラオに於ける唯一神を創造すると云ふ意識は素よりなかつた様であるが二、三の祖神の傳説を修正して一つの神とした事が其の教勢を漸時に強大化した事に依つて統一の氣運を醸成し、遂にバベルダオブ島北端のアコール村の村長として同部落祖神の祭祀を司さざる者の神である「ギルフオメクル」をパラオ全体の神としようとして色々の傳説を集め彼等の旧慣に多少の修飾を加へて一つの教理を作つて之を宣布し

た。此の宗教は彼等の内より生れたもので其の教理は彼等の傳統、旧慣、習俗の上に立脚したものである爲、原住民の信仰に合致し隠然たる傳播力を有し、遂にパラオ原住民の八割迄が其の信者となる様な盛況を呈した。

此の宗教に於ける最高神は「ギルフオメクル、イエス、キリスト」と称し基督教の唯一神觀念を以てパラオ全島の尊信を集むべきものとされて居たが、本宗教の濫觴が彼等の傳統、旧慣、習俗に在り、極めて非文化的である事は論を俟たない所であり、信教の自由は素より原住民に対しても認められて居た所であるが、狂信の結果、其の言動に於て南洋廳の基調とした施策である一視同仁政策に依る原住民の文化向上の諸方策と摩擦を生ずる等の事も起り、遂に一九二四年その宗教讃歌に日本人排斥の意を含くめ政治的行動に出ずる懸念があつたので統治上の観点より之を抑圧したものであるが、表面はともかくその裏面に於ては終息せず潜在的に行はれて居るものと見て差支ない。

第三節 基督教

群島に於ける基督教は布教の歴史も古く、且つ西班牙、独逸兩國の統治方策が全く基督教に依つて原住民の教化を行つた結果、其の教勢は全群島に及び原住民は殆んど其の信徒と云つて差支なく、且つその布教分野も新旧教相伯仲して居る。

一、旧教

旧教一六六五年ジエスイツト派教父西班牙人デイエゴリスデ、サンビトレスがメキシコよりマニラに旅行の途中、グワム島に寄港した際、原住民の現情を見て教化の要を痛感し、爲政者の反対を押し切り当時の西班牙攝政妃マリ

ア・アンナの内許と後援を得て一六六八年教弟及護衛兵を率いてグワム島に來り、布教を開始したものである。原住民は天主教の異様な祭儀斉唱等に異常な好奇心を持ち、之を歓迎し洗禮を受けるものが続出し、グワムを始めサイパン、テナン、ロタ、アギーガン等よりも熱心に傳導を乞ふものが相次ぐ有様であつた。

之に依つて同師は翌年に右各地に傳導すると共に同年二月二日に始めてグワム島に教会堂を、次で男子傳導學校を設立し、更に一六七二年にはパドレ、ロベスに依つてテナン島に傳導學校が創立され一七七三年には西班牙皇帝の命に依つてグワム島に女子傳導學校迄設けられ教勢彌が上に振興した。

乍然、布教創々であり、その信徒たる原住民の多くは單純な好奇心となつた場合が多く、且つ布教者としても原住民の傳統や旧慣習俗を完全に把握認識して居なかつた爲、彼等の階級制度を無視したり、或は夫婦關係、男女關係にも嚴格な戒律を強ひられる事等が原住民の原始的な道德律習慣にとつては極めて不可解な圧制的な非道と誤解され不平怨恨を潜在せしめたが、時恰も同地方に水痘流行を機として一部煽動者の煽動に依り一六七〇年サイパン島で宣教師メデニヤが殺害されたのを手初に、教文教弟の殉教者相踵ぎ、遂に群島最初の傳導者サンビトレスも一六七二年グワム島で殺害され、之を契機として原住民の叛乱となつたが西班牙兵力の爲鎮圧された。

此の結果、一六七九年原住民のグワム島集中政策が実施され、グワム島を六教区として各教会を中心とす部落を設置し、朝夕教文の教化を受ける如くし布教と行政の一体化を計つた。之と共に西班牙は治安上原住民の集中方策を強化徹底させ、投降者はグワム島に送り、然らざるものは全て殺戮し、一六九八年にはロタ島と北のマリアナ群島を無人境にさせてしまつた。

此の恐怖的实力に屈従し、其の後の宗政一体の方策に全く懐柔されて無氣力化された原住民は其後全く沈黙して仕舞い、加へて布教者としても経験の久しきに依つて彼等の旧慣、習俗を理解認識し、之に依り教勢の拡大を図つた爲漸次傳導の普及徹底を見たものである。

旧教布教の当初はイエズス会であつたが、一七八〇年にはアウグスチン会が之に代り、更に一八八〇年にはカプチン会が代り、独領となる迄続いたが其の間終始一貫同國の強力な援護の下にあつて布教したもので、教勢の振興其の頂点に達したが、一八九九年独逸領となつて以來は独逸は漸次西班牙人宣教師を退島せしめ、自國宣教師に代へた爲と加へて同國の宗教政策が新教偏重に在つた爲、漸次新教勢力の擡頭に依り教勢頓に振はなくなつたが、我が統治に依り原住民に対する一視同仁政策の現はれとしての信教の自由と併せて原住民に於ける宗教（特に基督教）の必要性よりして一宗一派に偏しない布教の自由を認められた事に依り、大正十年（一九二一年）西班牙人宣教師から成る天主教南洋宣教師團が渡來し、其の本部をトラック島に置き、その宣教師をトラック諸島各地とサイパン、ヤップ、パラオ、ボナペの各島に駐在せしめ、布教に従事する傍ら、宗教学校等併置して教化の宣布を行つて居る。

二、新教

新教は旧教に遅れる事二百年、即ち一八五七年亞米利加合衆國のアメリカンボードミッシオン会社所属宣教師米人デービルソン等が会社所属帆船モーニングスター号で始めてマーシャル群島に來り、エボン島に上陸、教会を設立して布教する傍らミッシェンスクールを經營し原住民の教化に従事したが、一八八五年独逸領となつて以來同國が同國人宣教師を以て布教せしむる方策をとつた爲、後退の已むなきに至り、当時独逸施政の中心であつたマーシャル群

島を避け一八八八年東カロリン群島クサイ島に移り、此処を本拠として布教に従事した。

群島の独領となつて以來登場したのは同國リーベンツェラー派であり、西班牙時代に於ける旧教と軌を一にし全國政府の強力な保護を背景として布教傳導し、特に原住民子弟の基礎教育を分担する等、其の意圖する処は別としても原住民の啓蒙文化の向上に裨益する処が極めて大であつた。

次いで一九一四年我が統治となるや原住民の信教の自由を認めたるも、占領直後の事にもあり、旧敵國人たる獨逸人宣教師の布教を不適當と認め、退島せしめたので當時の群島宗教界は僅かにアメリカンボードミッシヨンのみとなり、漸次空白時代となつたが、原住民に対する基督教の持つ影響の大なるを慮り、且つ信教の自由の立前から積極的に之を導入することとなり、日本組合教会派に之が布教を慫慂せる結果、同教会に於て南洋傳導團が組織され、大正九年群島に進出しトラック、ボナペ兩島に拠つて布教に当ると共に神学校を設けて原住民の啓發傳導師の養成に努めたが、人的財政的に困難を感じて居た際、獨逸リーベンツェラー派より援助申出があつたので、之と提携の事となり、同派の群島復歸が認められたのを機会に一九二七年獨逸リーベンツェラー派宣教師四名も群島に渡りトラック、パラオに再び傳導を開始した。

此の他新教としてはセブンスデーアドベンチストミッシオンがある。同派は一九二〇年頃在東京同派本部より比律賓人宣教師がパラオ島に派遣され、傳道を開始したが、間もなく日本人宣教師と交代した。同会派は布教の歴史浅く且つ日本人宣教師は原住民の内容を把握し得ず教勢極めて微々たるものであつた。

第四節 佛 教

佛教は一言にして云へば群島に移住せる日本人の爲の宗教であつて、従つて群島への渡來も基督教に比して著しく遅く我が群島統治後大正八年（一九三三年）眞宗大谷派本願寺がサイパン島に同十五年（一九四〇年）にパラオ島に布教所を設置し、眞宗本派本願寺が昭和五年（一九三〇年）にテニアン島に布教所を開設し、夫々開教員を置き布教を開始し、爾來眞宗の他淨土宗曹洞宗等の各宗派の布教所が設けられ、其の數十ヶ所に及んだが、其の対照とする処は全く日本人であつて、之とても日本内地のその如く宗教的迫力に付ては極めて微弱の感が強かつた。

佛教に於ても中には原住民に對する布教を計画し、実施した向もあるが、其の多くは原住民の傳統や旧慣俗を極めない事等に依り彼等の実生活と全く遊離してしまつて少數の形式上の信者の獲得は別として全く布教に失敗したと云つて過言でない有様であり、此の事は其の後の大陸や南方諸地域に於ける佛教に依る宗教工作の殆んどが失敗した事と軌を一にして居る。

第五節 神 道

神道も佛教同様日本人移住者を対照としたもので、天理教がパラオ、サイパン両島に、金光教がサイパン島に開教されたが其の教募は微々たるものであつた。

第十章 教 育

第一節 概 説

南洋群島に於ける昔日の狀態は文字がなく、且つ對外接觸のなかつた爲、測り知れないが原住民間の固有の教育に就て考察を加へるのに夫れは勿論現在の所謂教育とは甚だ縁遠いもので、唯其の萌芽と見るべきものであらうが、原住民自体が天恵豊富な其の自然環境下に於て生活上の必然的要求に依つて生れたものと儀礼、鬭争、娛樂等の必要上から起つたもの等の知識や技術を不知不識の間に教育傳承されて來た事は想像に難くない。

斯様な未開自然裡に在つた群島が一五二一年以來相次いで発見され文明との接觸を開始し、其の後幾何もなく西班牙領となり（マーンシャル群島を除く）荏苒放置されて居たが、一六六五年西班牙人ジェスイット派の教文ディエゴ、ルイス、サンビトレスがマリアナ群島に寄港し、原住民の現情を直視し教化の要を痛感し、爲政者の反対を押切り當時の西班牙攝政妃マリア・アナの内許を得て一六六八年教弟及護衛兵を率いてグワム島に來り、始めて原住民教化に着手したもので文明國が群島に於ける教育の発端をなしたものである。

爾後、西班牙の統治中に於ける教育は専ら基督教旧教宣教師の手に委ねられ、布教の傍ら青少年を集めて宗教々育を中核として之に自國語の読み書きや、算術、農耕、手工を教へたに過ぎないが各地に夫々相當の教化の跡を残して

居る。

独逸は一八八五年にマーシャル群島を占領し、一八九九年米西戦争の結果、西班牙の弱体化せるに乘じマリアナ、カロリン兩群島を買収し、グロム島を除く全群島を其の統治下に入れたものである。

茲に於て独逸は從來の西班牙人宣教師を漸次退島せしめ、之に替へるに自國の新旧兩派の宣教師を以てし、普通一般原住民子弟に布教の傍ら教育を行はしめ主として独逸語の普及と原住民語のローマ字綴表記法、算数、手藝を教授し、特に其の日常生活に必要な技能を習得せしめ建築、コンクリート施工法、ミシン裁縫、造船に堪能な者を養成する傍らマリアナ群島サイパン島に官立学校を設け各島現住民中の指導者権力者階級の子弟を選抜して入学せしめて特殊人教育を実施し、同國の統治上必要な自國語の普及と人材の養成に努め、更に下級官吏養成の爲、之に通訳科を併置して強化を図る一方、全國官民の群島に於ける雇傭に便ならしめる爲、右の卒業生中優秀なものを選抜して山東省青島に派遣して同國の施設に於て主として木工、鍛冶、印刷、製本、看護等の諸技術を習得せしめ、從來斯種技術に従事して居た外國人との配置轉換を行ひ統治上の便益を期した。

之を要するに独逸の執り來つた教育政策は飽迄も同國が群島統治上の便益を主眼としたもので、之に寄與する爲の方策であつて、爲に原住民権力者の子弟若くは秀才にして其の將來に於て原住民指導に寄與し得る者に対する特殊人教育に重点を置き、一般原住民の教育は専ら宗教家に委ねて布教と共に行はしめる等極めて消極的で、敢へて之が向上を期するが様な積極的意圖を窺取出來ず、原住民は原住民としての分に甘んぜしむる方策に過ぎなかつた事を認めざるを得ない。

大正三年（一九一四年）群島が我が統治に歸してからの教育は其の当初に於てのみ原住民先覺者の養成を目的として出發したものであるが、諸制度の整備に伴つて洽なく全原住民に對し機会均等であり、其の根本精神とする處は飽迄も統治政策に脈々一貫した一視同仁政策に則し、原住民を啓蒙して可及的に日本人に近づかしめ、之に依つて彼等自体の福祉をはかり、且つ日本人と伴戚を共にすると云ふ處に在つたものである。

之が爲占領直後の大正四年（一九一五年）不敢取内地に於ける小学校令に準じて南洋群島小学校規則を公布実施し原住民子弟にして満八才以上の者を入学せしめ、修業年限四年とし守備隊所在地であつたサイパン、トラツク、ヤップ、パラオ、ボナペ、ヤルット各島に設置されたが、之は飽迄も應急暫定措置で教育の重要性に鑑み特に文部省の後援を得て之に前記経験を加味して大正七年（一九一八年）即ち其の民政時代に南洋群島島民学校規則を制定公布し、就学年齢を内地同様数へ年八才に引下げ、修業年限を本科三年とし更に之を補習科二年を加へた。

群島が臨時南洋群島防備隊の手に依る軍政民政の兩時代より南洋廳に移行するに際し、從來の知識、經驗を基とし茲に群島の学制も根本的に整備された。

即ち大正十一年（一九二二年）南洋廳設置と共に南洋廳公学校規則が制定実施され、就学年齢を満八才に引上げ其の目的とする所も原住民兒童をして强健ならしめ、道德上人類の一員としての基礎を確立し、生活の向上改善の基調である普通の知識技能を授ける事と明示され、所謂國語を常用せざるを兒童たる原住民子弟教育が名実共に整備確立され今日に至つたものである。

之と共に原住民兒童の啓蒙は之等普通教育に限る事なく彼等の生活改善文化向上に資する爲、群島の實情に於て最

も必要であり、且つ要求の多い木工技術者養成の爲に之が特殊職業教育を施す爲、大正十一年（一九二二年）パラオ島所在コロール公学校に木工徒弟養成所を設置し、各公学校補習科卒業生中より成績優秀にして其の家庭事情が二年の修学に耐へる者より選抜して官費を以て修学せしめるの他、昭和十七年（一九四二年）には南洋拓殖株式会社がパラオ島民農業訓練所を設置し、農業技術を習得せしめたるの他、各種の講習会が開催され宗教教育に付ては群島占領直後一時閉鎖されて居たが大正九年（一九二〇年）基督教布教の再開と共に宗教学校も再興された。

以上は原住民教育の概略であるが、我が統治以來日本人の群島に移住する者漸増し、特に大正十一年（一九二二年）南洋興発株式会社がサイパン島に於ける糖業着手に依り著増を示した。

之に对照し日本人兒童に対する教育の問題が起きて來たもので、当初は兒童數も少かつた關係から便宜上島民学校に收容教育した事もあり、一部には之を以て原住民を日本人化する爲の便法と迄極論されたが、言語風俗習慣を異にする之等を同一環境で教育するの弊害の反つて大なるを體驗し大正八年（一九一九年）南洋群島小学校規則が公布され原住民兒童と確然と區別されるに至つた。群島に於ける小学校教育の目的は内地のそれと全く同一であつて日本國民としての道德教育並國民教育の基礎と其の生活に必要な普通の知識、技能を授けるを以て目的として居る。

即ち大正八年九月一日（一九一九年）より当時日本人在住の比較的多かつたトラック及サイパン両島に南洋群島第一及第二尋常小学校が夫々設置された。

之こそ群島に於ける日本人教育機關の最初のものであつて、當時兩校を併せ兒童數二十名教員數四名の各校學級制複式教育の微々たる存在であつたが、群島最初のものとして之が兒童教育の實際に當つては其の目的、方針内地のそ

れと同一である事は論を俟たない処であるが、加へて対原住民方策に鑑みて特に日本人たる品格の維持と向上に力を盡して原住民の模範たらしむるの實を挙げさせる様に特殊な要請に依り教育を実施されたものである。

爾來群島の安定と産業の勃興に依り日本人移住者著増し、遂には我が海外移住史に全く例のない原住民數を凌駕する程の移住を遂げるに至り、之に伴つて初等教育機關も逐年増設され昭和十七年（一九四二年）に至つては遂に三十四校の多きに達し、在學兒童數も一万三千に垂んとするの盛況となり、其の当初と比し誠に今昔の感に堪へない。初等教育の充實、増大に伴い中等教育並成人社会教育の実施の必要に迫られたので、先づ昭和八年（一九三三年）サイパン島にサイパン実業学校（乙種程度）が設置され次いで昭和十一年（一九三六年）同地に私立南洋家政女学校を（昭和十四年（一九三九年）サイパン高等女学校となる）昭和十六年（一九四一年）パラオ高等女学校、昭和十七年（一九四二年）パラオ中学校が相次いで設立され、中等教育の充實が期せられると共に昭和十四年群島在住青年の國民的素質培養を期して青年学校が設置され、勤勞青年層の教育の普及を見るに至り、更に高等教育機關設置の要切なるものがあつたが、今次太平洋戦争の勃發に依り挫折したものである。

第二節 西班牙時代の教育（1565—1899）

此の時代の教育は概説に既述せる如く専ら基督教旧教宣教師に委ねられ布教の傍ら青少年を集めて宗教々育を主体として読み書き算術、農耕、手工を教へたに過ぎない。

従つて制度上の統一もなく各地教会に於て区々の教育を施したものが多く、大体に於て左の通りである。

(イ) 就学年齢 満六才程度

(ロ) 修業年限 五年制を普通とす

(ハ) 教授時間 週二十八時間程度

(ニ) 教授科目

一、西班牙語(読法、書法)

二、算術(加減乗除)

三、唱歌(主として讃美歌)

(ホ) 教科書及学用品

西班牙語で印刷した教科書、雜記帳等の学用品は全て教会より無償配付した。

(ヘ) 其他

就学奨励の意を以て寄宿生には食事の無料給與を実施した。

右はサイパン、ヤップ、パラオ、トラツク及ボナベの各島に所在した教会に於て実施されたものであるが、未開自然裡の原住民子弟に対し始めて文明的教育を実施したもので、其の間幾多流血の慘事を経て來た中にも不斷の精進を続け、之にもかくにも彼等の文化的啓蒙に寄與した事は蓋し鮮少でなかつた事と思はれる。

第三節 独逸領時代の教育 (1899—1914)

一、普通教育

本時代の教育は其の頭初は全く全國人新旧兩教宣教師に依る宗教々育であつたが、一方同國の群島行政上の便益を考慮して一九〇四年官營の小学校をサイパン島に設立した。

之こそ群島に於ける最初の独立教育機関であつて最初こそ極めて小規模であつたが、独逸人訓導の赴任と共に漸次整備された。之が概説は次の通りである。

(イ) 就学年齢 満七才—十三才

(ロ) 修業年限 四年

(ハ) 教授時間 三十五時間

(ニ) 教授科目

一、独逸語

二、歴史(群島郷土史を主とす)

三、地理

四、自然史

五、算数

六、読方

七、書方

八、唱歌（島民歌謡）

九、圖書

十、体操

十一、実習

十二、家事（手藝、營養、養兒、養護）

（ホ） 學級及兒童數

カロリン族級

四學級……………三四二名

チャムロ族級

（ヘ） 教育

独逸人訓導一名 チャムロ族助教員 四名

右の他同校に補習學校を附設して主として独逸語、農業衛生等を毎日曜日の午前六時より二時間教授し、小學校卒業生の修得独逸語の溫存活用にした。

以上独逸が群島に実施した普通教育機關であるが、之の設立の目的こそ同國統治上の必要よりする独逸語の普及と原住民中の門閥權力者の子弟及將來原住民の指導者階級足り得べき資質を有する所謂、秀才を教育し將來の統治に寄與せしめる目的を有したもので他地域に於ける教育は全く同國人宣教師に依る布教の傍らに行ふ程度の教育に委ねられ、西班牙時代とをして進歩を見て居ないし、この事は同國の教育の意圖が極めて消極的であつた事を意味すると云

つて過言でない。

第四節 特殊教育

独逸の群島統治上の便益を主としぬ教育に付ては既述の通りであるが、更に之を端的立証するものは本教育がある。

即ち群島に於ける同國官廳又は民間に於ける下級雇傭員、通訳、筆生等の養成を目的とし前記サイパン小學校並補習學校に更に通訳科を併置し、主として独逸語の会話翻譯を主要科目とし生徒は各島より秀才を選抜して入学せしめた。尙之には夜学科をも附置して主とし原住民巡警に独逸語を教授した。

如斯独逸は自國語の普及に熱中したが、一方サイパン小學校卒業生中優秀な者を選抜して青島に送り、同國工廠病院等に実習生として入学せしめて実務を修得せしめるの方法を執つたが、之こそ從來より斯種技術者として使用されつゝあつた外國人である。日本人、支那人、マレー人等を驅逐せんとしたのであつて、全く同國統治上の便益に寄與せしむる手段であつた事を物語るものである。

第五節 日本統治領時代の教育

大正三年（一九一四年）我國が南洋群島を占領し臨時南洋群島防備隊條令の發布に依り、軍政が施行され次いで大正七年（一九一八年）民政職員設置に関する勅令の公布に依り所謂民政時代となり大正八年（一九一九年）ヴェルサ

イニ條約に依り、群島の我國に帰屬決定次いで大正十年（一九二二年）C式委任統治地として我が委任統治地域となり大正十一年（一九二二年）軍隊の撤去と共に南洋廳が設立され、此の期間中にも昭和八年國際聯盟脫退次いで太平洋戰爭勃發時代等環境に幾變遷あり、其の間群島の教育にも夫々變遷改革を免かれず之を経て空前の盛況を現出したものである。

群島に於ける頭初即ち軍民政時代（大正三年（一九一四年）より大正十一年（一九二二年）迄）の教育は殆んど原住民教育と見て差支なく大正十一年（一九二二年）南洋廳の設置せらるゝと共にサイパン島に於ける糖業の確立、次で諸産業の發展となり、日本人の群島に移住する者著増し茲に日本人教育の發展を促したものであつた。

原住民に対する我が教育は西独兩國のそれと全く事変り、其の精神とする処は一貫せる統治政策たる一視同仁政策に依る同化政策に立脚し、彼等を啓蒙して可及的に日本人に近づかして其の福祉を圖り、且つ日本人と休戚を共にする処に在り、特に公學校の教育目的は彼等をして強健ならしめ道德上人類の一員としての基礎を立て生活の向上改善の基調である普通の知識技能を備へしむるを以てしたもので義務制ではなかつたが、就學に付ては全く機会均等であり而も原住民の生活程度よりして全く國費を以て教育したものである。

日本人兒童の教育は内地同様善良な日本人として働ける文化人を養成する事を目的したもので教授の内容其の他一切内地小學校に準じて行はれたものである。

第六節 原住民に対する教育

一、普通教育

原住民に対する教育はその全体の福祉を増進する爲、先づ一般普通教育の徹底に努力し、其の文化の向上に努めたが、次いて之に職業教育並宗教教育を併進せしめたものである。

我が群島占領に依り不敢取軍人を以て原住民子弟の普通教育を実施したが、各島區々で実績が上らなかつたので其の將來を勘案して文部省の應援を仰ぎ學制の統一を期した。

即ち大正四年内地小學校會に準じて南洋群島小學校規則を公布し防備隊所在地であるサイパン、トラック、ヤップ、パラオ、ボナペ、ヤルートの各島に一校宛六校を設立した。又この際眞に原住民の啓蒙教育を実施するには旧敵國人たる独逸人宣教師に依る教育を禁止せざれば統治上教育上に不適當と認め之を禁止したものである。

南洋群島小學校規則に依る小學校の概況

（イ） 入学年齢 満八才以上満十二才以下

（ロ） 修業年限 四年

（ハ） 教科目及教授時間

学年 教授 程度	第一 学 年		第二 学 年		第三 学 年		第四 学 年	
	教 授 程 度	毎週 教授 時数	教 授 程 度	毎週 教授 時数	教 授 程 度	毎週 教授 時数	教 授 程 度	毎週 教授 時数
修 身	修身奉公の要旨	1	同	1	同	1	左	1
國 語	変音、仮名、日常 普通の読み方、話し 方、綴り方、話 方	14	同	14	仮名、日常須知の 文字、及安易なる 文の読み方、綴り 方、話し方	男 14 女 12	同	男 12 女 10
日 本 歴 史							日本歴史の概要	男 2 女 1
地 理							日本地理の概要	1
算 術	100 以下の数の数の へ方、書き方、20 以下の数の範囲に 於ける加減乗除	1,000 以下の数の 唱へ方、書き方、範 囲内での加減乗除	3	通常の加減乗除	4 (珠算) 整数、小 数、諸等数	4		2
理 科							植物動物物及自然現 象、通常の物理化 学上の現象、人歩 生理衛生の初歩	2
手 工			簡易なる細工	男 1 女(1)	簡易なる細工	男 4 女(4)	簡易なる細工	男 4 女(4)
図 画			(單 形)		簡易なる形体			
歌 謡	平易なる單音唱歌		6	同	左	3	同	左
体 操	体操教授遊戲							3

農 業				農業の概要及実習 水産の概要及実習	男 3	同	左	男 3
裁縫及家事				簡易なる裁縫及手 藝家事習	女 6	同	左	女 6
計		24		24	30			32

(二) 学級編制 一学級六十人以下

大正七年(一九一八年)勅令を以て民政職員設置に關する件が公布された結果、防備隊に民政部が設置され一般施政事務は民政部の統轄となつた。

南洋群島小学校規則も右の体験期を経て原住民兒童の教育上内地小学校令の直訳は不適當であり、而して兒童の習性、心理、狀況と懸隔が甚しく実施にも困難性がある事が見出されたので、茲に大正七年改正の事となり、新に南洋群島島民学校規則が制定公布された。

南洋群島島民学校規則に依る島民学校の概況

(イ) 入学年齢 八才以上十二才以下

(ロ) 修業年限 三ヶ年とし分校に於ては二年

但し土地の狀況に依り補習科を置き修業年限は二年以内とする。

(ハ) 教程及教授時数

(参考)

教科目	第一学年		第二学年		第三学年	
	教	程	教	程	教	程
修身	道徳の要旨	1	道徳上の要旨	1	同	左
国語	簡易なる事項の語方、片仮名、簡易なる国語文の讀方、綴方、書方	10	同	左	11	簡易なる事項の語方、語文の讀方、綴方、書方
算術	30以下の数の範囲内に於ける数へ方、書方及加減乗除	3	100以下の数の範囲内に於ける数へ方、書方及加減乗除	3	3	日常必要なる加減乗除
体操	遊戲	2	遊戲及体操	2	同	左
唱歌	單音唱歌	2	同	左	2	同
図書	單形簡易なる形態	2	同	左	1	同
農業	農事大要	1	同	左	1	同
手工			簡易なる細工	1	同	左
裁縫	洗濯掃除	1	洗濯掃除、運針、縫方	3	洗濯掃除、裁方、刺繍 近易なる家事	
家事						
計		21		24		28

(参考)

教科目	第一学年		第二学年	
	教	程	教	程
修身	道徳の要旨	1	同	左
国語	日常須知の語方、簡易なる漢字文、国語文の讀方、綴方、書方	8	同	左
算術	日常須要なる加減乗除	2	日常なる加減乗除小数、諸等数	2
唱歌	單音唱歌簡易なる複音唱歌	1	同	左
体操	体操及遊戲	1	同	左
農業	農事の大要	6	同	左
図画	簡易なる形体	1	同	左
手工	簡易なる細工	1	同	左
日本歴史	日本歴史の大要	1	前学年の続き	1
日本地理	日本地理の大要	1	前学年の続き	1
理科	植物動物礦物及自然現象	1	自然現象、安易なる物理化学上の現象、人身生理の初歩	1
裁縫家事	通常衣服の縫方、裁方刺繍近易なる家事	4	同	左
計		男女 24 26		男女 24 26

(示) 学校、学級数

民 政 区	学 校 名	学 級 数	教 員					計
			訓 導	準 訓 導	代 用 教 員			
サ イ バ ン 計	サイバン島民学校 同 							

ボ	ナ	ベ	ボナベ第一島民学校 同メタラニカム分校 ボナベ第二島民学校 ボナベ第三島民学校	3 2 2 2 4	1 — 1 1 3	1 1 — 1 3	1 (1) 1 — 2	3 1 2 2 8
ヤ	ル	ー	ヤルート第一島民学校 ヤルート第二島民学校	2 2 4 2	1 1 1 2	1 1 2 2	— — — —	2 2 4 4
合	計	計		17 44	14	14	9	37

大正九年一月二十九日（一九二〇年）対独平和條約が成立し、國際聯盟規約に據つて群島は我が委任統治地域になつたので、群島施政制度の根本的改革の要に迫られ、純然たる行政廳設置の準備とし防備隊民政部を分離してパラオ島に移轉し、更に大正十二年（一九二三年）防備隊條例の廢止に依り守備隊が撤收され、同年四月一日南洋廳が設置された。之に伴ひ勅令第百十四号を以て南洋廳公学校官制が公布され、学校の組織と權限が明確化し更に南洋廳令第三十二号を以て南洋廳公学校規則が公布され、從來の島民学校は全て南洋廳公学校と改称され爾後に於ける原住民兒童に対する普通教育の基礎となつたものである。

即ち公学校規則に於ては各教授要旨を明示し、概して実科に重點を置き學習事項が卒業後、直ちに実生活に應用される様な仕組とし、更に入学年齡を満八才以上に改め十二才以下の制限を削り、從來の曆年度二学期制を改めて三学

期制とし他公学校轉校も認められたる他、從來学校長が教科目及教授数等一切の改廢申請を止め、所轄支廳長の所管事項とした事等が特記される。

南洋公学校規則に依る公学校の概況

(イ) 入学年齢 満八才以上

(ロ) 修業年限 本科三年

補習科 二年以内

(ハ) 教程及教授時数

本科

学年 教科目 教程時数	第一 学年		第二 学年		第三 学年	
	教 程	毎週教授時数	教 程	毎週教授時数	教 程	毎週教授時数
修身	道德の要旨	1	同	1	同	1
国語	発音簡易なる事項の読方、書方、綴方 20以下の数の範囲内に於ける教へ方、書方及加減乗除	12	平仮名、易なる読文の字及簡易なる綴方、書方、綴方 100以下の数の範囲内に於ける教へ方、書方及加減乗除	12	話方及簡易なる漢字文、綴方 100以上の数の教へ方、書方及加減乗除	12
算術		4		4		4
図画	簡易なる描写	1	同	1	同	1

唱歌	平易なる單音唱歌	3	同	3	同	左	3
体操	体操、遊戯、教授						
手工	簡易なる物品の製作	1	同	1	同	左	1
農業	農事及水産の大要実習	1	同	1	同	左	1
家事	近易なる家事の大要及実習、簡易なる裁縫、手藝	1	同	1	同	左	1
計		24		24			24

(補習科)

学年 教科目 教程時数	第一 学年		第二 学年	
	教 程	毎週教授時数	教 程	毎週教授時数
修身	道德の要旨	1	同	1
国語	普通の読方、読方、書方、綴方	10	同	10
算術	10,000 以下の整数	4	10,000 以下の整数、簡易なる諸等数	4
図画	簡易なる描写	1	同	1
唱歌	平易なる單音唱歌	1	同	1
体操	体操、教練、遊戯	1	同	1

手	工	簡易なる物品の製作	4	同	左	4
農	業	農事及水産の大要及実習	4	同	左	4
家	事	簡易なる家事の大要及実習簡易なる裁縫、手藝	4	同	左	4
計			30			30

本改正に依つて原住民児童に対する普通教育の制度運営が整備完成し、爾來部分的改善修正を経て我が統治の終局に至つたものであるが、当初の開設高校が昭和十七年に於ては二十六校となり、内補習科を併置するもの七校、在學児童數本科二、六九八名、補習科七四二名、卒業生の累計は本科一三、九五八名、補習科五、二三八名を算し、児童の就業歩合もパラオの九七・七二を最高とし交通最も不便のトラックの三三・〇七、平均五六・五九を示し、現状施設を以てしての殆んど飽和點に達し、児童の出席歩合も平均九六・三六を示し居る事等より、其の普及徹底の状態を推知し得られる事を確信する次第である。

二、職業教育

原住民児童に対する普通教育の制度並普及の有様は前述の通りであるが、更に一步を進めてその生活の向上と衛生思想の普及を期する上に於ては如何しても其の住宅改善を実行するの要に迫られ、逐年之が指導獎勵に當つたが、原住民に之が技術を與へなければ仲々に其の成功を期せられなかつたので、大正十二年南洋廳設置以來、各地に木工養成の爲、長期講習を開催した処、極めて好成績であつたので本効果を一層有効ならしめる爲、大正十五年パラオ島

コロール公学校に木工徒弟養成所を附置したものである。

木工徒弟養成所の概況

- 一、入所資格、公学校補習科を卒業した十六才以下の男子で、成績優秀而も家庭の事情が本人二ヶ年の修業に差支ない者より所轄各支廳長が撰拔し推薦した者。
- 二、修業年限 二年、卒業後尙修学の希望ある者は研究生として一年以内在學せしめる。
- 三、經費其の他 本所生徒は授業料を徴收しない許りでなく、學用品及実習用具材料は全部官給、又は貸與するの他、全部を寄宿舎に収容して被服食糧も官給である。

四、教科目及時數

学年 教科目 教 程 時 數	第 一 学 年		第 二 学 年	
	教 程	毎 週 教 授 時 數	教 程	毎 週 教 授 時 數
修 身	道德の要旨	1	道德の要旨	1
国 語	日常須知の文字及普通文の読方、綴方、書方	5	同	5
算 術	整数、小数、諸等數 (珠算、加減)	4	分数、歩合算、比例 (珠算、加減乗除)	4
図 画	簡易なる描写 用器具	2	旧器画	
体 操	教練、体操、遊戲	1	同	左

建築材料 製作	建築材料 構造の大要 工具、工作法	5 (1) (2) 18	建築材料 構造の大要 工作法、着色、設計	5 (1) (2) (2) 18
		18	製図及実習	18
計	計	36		33

本所々長はコロール公学校長兼任し、普通学科は同校訓導の兼任であるが、専門学科及技術の指導は訓導及助手各一名を配置されて居る。尙時代の要求は更に他の職種をも併設するの必要に迫られたので昭和十七年（一九四二年）より同所に更に機械科並土木科が設置され、鍛冶工、機械工並測量技術等をも教授し綜合技能教育施設として其の將來を期待されたが、其の途次に於て太平洋戦争酣となり挫折した事は眞に惜しまれる次第である。

第七節 宗教々育

西班牙、独逸両統治時代の群島に於ける教育は全く基督教に依る宗教々育であつた事は既述の通りであるが、我が統治となつてからは完全に教育を宗教より独立せしめ、之が普及の徹底と実績の向上に努力したものである。

我が占領當時に於て旧敵國人である独逸人宣教師布教々化は無知の原住民統治上に至大の支障があつたので、全て之を退島せしめ、教育の独立の爲の宗教学校も閉鎖せしめたが、群島の安定に伴い原住民の実生活に基督教の絶体必

要なるを認め、信教の自由の本來の形に復元したもので新教日本組合教會に依る南洋傳導團を始め、独逸時代抑圧されて居た天主教教會等相次いで渡南し、更に昭和二年我に依り群島を追放された独逸リーベンツェラー派も再渡南し、夫々布教に従事する傍ら宗教学校を再興した。

我が統治時代に於ける宗教学校は主として基督教宣教師の布教の傍ら經營するもので、其の内容は土地の情況や宗派に依り、勿論一樣でないが、我が公学校教育に比すれば一般に程度の低いもので、大別すれば

一、公学校の教授時間後週一、二回と日曜日に信者である兒童を教會に集めて宗教々育を施すもの。

一、公学校入学前の兒童に対し、平易なる普通教育と宗教々育を施すもの。

一、公学校卒業生より宗教に熱心な者を選んで之に稍々進んだ宗教々育と神学の初步を授け、將來住民傳導師とならうとする者を養成するもの。

の三種類となるもので、之が概況は次の通りである。

群島に於ける宗教学校の概観

学 校 名	宗 派	学級数	教 員 数			生 徒 数		新入学	前年度 卒業者	卒業者 計
			日本人	外人	原住民	男	女			
サンバン カトリック宗教学校	旧 教	1	1	3	1	328	308	83	43	1017
クセヨアラマルセー ドモテラマルセー 分 教 場	旧 教	6	1	6	1	44	268	?	?	?

カトリック宗教学校	旧	教	1	1	2	1	73	81	154	80	22	258
バプティスト宗教学校	佛	教	1	2	1	1	13	4	17	6	2	97
コロール宗教学校	旧	教	3	1	2	1	5	7	12	1	18	766
フエイトン宗教学校	新	教	2	1	3	1	42	62	104	52	19	165
夏島神学校	新	教	1	2	1	1	24	1	24	11	7	74
水曜島神学校	新	教	1	1	2	1	8	1	8	2	3	30
月曜島神学校	新	教	1	1	2	1	1	26	26	5	7	38
ヒラダールヒヤ学校	新	教	1	1	1	1	15	10	25	5	6	38
ルクノール宗教学校	旧	教	1	1	3	1	35	30	65	8	14	226
ボナベ神学校	新	教	3	2	1	3	42	1	42	13	6	39
ミクロネシアグループ	新	教	5	1	2	4	50	40	90	41	21	413
ヤマト新教会学校	新	教	2	1	1	1	8	12	20	8	1	446
合 計			29	6	28	8	687	848	1,535	324	223	3,607

第八節 社会教育

原住民に対する社会教育は其の児童に対する普通教育と共に重要なを認めて、之が実施に当りても彼等自体の生活改善と勤勞精神扶植を意図したもので、之が爲め官の施設を極度に利用した農事、木工、手藝（主として編物）の講習会を開催するの他、各地公学校を中心とした青年團の結成を促して男女青年の知徳向上、身体鍛練並公共奉仕を

眼目とした。

群島に於ける青年團の結成は彼等の習俗にも合致した爲め予期以上の異常の發達を遂げたもので昭和十年（一九三五年）に於ては四三九名の男女團員を有し、本数字は殆んど全青年を網羅して居る程の有様であつた。

尙右の他原住民の文化的開眼の爲め、其の文明的見聞を弘めさせる事は極めて必要であると認めて大正四年（一九一五年）より繼續して毎年原住民村吏有力者其の他より二十名程度を選抜して觀光團を組織し、官の補助金を以て日本内地に派遣した。因みに昭和十年迄の派遣員数は五六五名であつた。

原住民児童に対する普通教育の徹底に依り日本語も又普偏化され、現在壯年者以下で不通の場合は稀有の状態となつたが、尙老年層には使用されなかつた。乍然日本人の移住激増して彼等の日常生活に於て日本人との接触を無視し得ざる迄に至つた環境裡に於ては、之が習得を要望の聲も必然的に生じ來り、加へて之等の階層が旧習俗の頑迷なる固守者なるに鑑み、之が改善を爲さんとせば、先づ斯層に國語を教授の要を認められたので、昭和十五年南洋群島地方費を以て各公学校に國語練習所を設置した。

之等は学校職員、警察官吏等が指導者となり、少年補習部とし主として日常會話、読方、書方及び精神講話を授け其の成績も又見るべきものがあつた。

之は要するに原住民社会教育が各公学校及び出先警察官を中心として發達したもので、其の相互關係も極めて親密であり、好ましい寮囲氣中に育成されて居たものである事を特記したい。

第九節 日本人に対する教育

大正三年（一九一四年）群島が我が占領下となつた際の邦人人口は僅かに三百余名にして、其の殆んどが單身男子のみであつた。乍然群島の安定と漸次諸産業の導入に依り、日本人移住者の漸増を加へ來たつたので茲に之等随伴日本人兒童教育の問題が起きて來たもので、更に大正十一年サイパン島に南洋興發株式会社が設立され、群島産業史に燦たる糖業を確立するや諸産業も之につれ興り、空前の盛況を招來した。遂に日本人移住者数は原住民数を遙かに凌駕する有様となり、教育に付ても從來原住民教育中心であつたものが、茲に於て併進する事となつたものである。

乍然、日本人に対する教育は多少、群島の特殊性格を織込んだにせよ全く内地同様のものではあつた。

一、普通教育

群島占領直後は兒童數も過少で便宜上、島民學校に於て委托授業を施したものであるが、兒童數の漸増に伴ひ大正八年七月（一九一九年）民政令第五号を以て南洋群島尋常小學校規則公布せられ、差当り日本人の比較的多かつたトラック、サイパンに群島最初の小學校が設置された。

地 域	学 校 名	教 員	学 級	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	第六学年	合 計
トラツク	南洋群島第一尋常小學校	2	1	3	3	—	1	1	—	8
サイパン	南洋群島第二尋常小學校	2	1	6	1	2	2	1	—	12
計	二 校	4	2	9	4	2	3	2	—	20

之と同時に當時の永田防備隊司令官は訓令を發し、特に其の日常訓育に際しては日本人の品格の維持、向上に力を盡し原住民に垂範せん事を強調する等其の施設規模は小であつたが、其の設立の意義は極めて大であつた。

右の尋常小學校が設立された大正八年には第一次世界大戰も終了し、群島の歸属も明確となつたので諸企業の渡來多く、之に伴つて日本人移住者の數も激増し、小學校増設の趨勢となつたが、群島に於ける小學校は其の内容に付ては内地と同様であるが、小學校令に定められたものでないので兒童が内地歸還後、内地小學校に轉入学の際に於ける連絡を欠いて非常に不便がある。延ては日本人の渡南上竝群島に於ける兒童教育の進展に重大の支障を來す恐れがあつたので、内地小學校同様の認定を得らるゝ如く、海軍省を通じ文部省に申請の結果、大正十年文部省令第十三号を以て群島尋常小學校も内地のそれと全く同様の取扱を受ける事となつた。

由來、群島尋常小學校は内地のそれと全く同様であるが、唯地理的事情と兒童將來の要求を斟酌して多少教材選択や教授訓練に必要な方策を加味して居る点がないでない。

乍然、群島に於ける小學校教育は自由教育であつて内地の如く義務教育でなく、就学の奨励はするが強制はしないので、此點は内地の學制に比して大なる相異点であるが小學校教育は日本國民の義務であるとする國民的通念から其の就學歩合も極めて良好であつた。

右の段階を経て大正十一年南洋廳の設置せらるるや、茲に南洋廳小學校官制竝南洋廳小學校規則が公布され、面目を一新し、更に産業の振興に伴つて日本人移住者の激増を來し、茲に画期的擴張整備時代に入つたもので遂に昭和十七年に於ては三十四校、一分教場、同臨時教室、兒童教初等科一〇、八八八名、高等科一六〇二名合計一二、四九

○名の空前の盛況を現出した。

二、中等教育

日本人の群島移住の激増に伴ひ、初等教育の拡張整備は漸次充実されつゝあつたが、初等教育のみを以てしては其の興望を充す事が出来ず、其進学に當つては盡く内地に遊学を要するの有様であつたので、父兄の経済負担と精神的負担重く之が打開を要望されつゝあつたが、遂に昭和八年（一九三三年）最も日本在住者数の多いサイパン島に実業学校が開設された。

本開設に當つては群島最初のものである丈に特に慎重に考慮された結果、同地日本人が殆んど商業若くは農業に従事して居る關係上、サイパン実業学校とし商業科、農業科を併置したものであつて農、商業に従事せんとする者に必要な知識技能を授け、併せて國民道德の涵養と拓殖に適應する人材の養成を目的とし、修業年限二年（高小卒程度以上を入学資格とす）の乙種程度であつた。（後に昭和十二年（一九三七年）甲種となり）昭和十三年（一九三八年）には内地実業学校令に依る相当実業学校の生徒及び卒業生と同一の取扱を受ける事となつた。

女子中等教育に付ては内地遊学の際の経済負担よりも其の精神的不安多く、特に要望されたものであつた。之に應へ当時日本人の密集地であつたサイパン島に於て淨土宗布教所及び愛國婦人会と合体して之が開設計画を樹て官の補助を得て茲に昭和十一年（一九三六年）私立南洋家政女学校が開立された。

本校は家庭の主婦として必要な知識技能を授け、併せて國民道德及び婦徳を涵養し、拓殖に適應した助成者の養成を以て目的とし、修業年限は三年制であつたが、昭和十四年（一九三九年）南洋廳高等女学校規則制定されるや、

右に依り昇格してサイパン高等女学校となり、更に昭和十六年（一九四一年）パラオにも右に依るパラオ高等女学校が開設された。孰れも修業年限四年で学科目、課程、教授時数等は内地同様であつた。

女子中等教育の整備が遅れ昭和十七年（一九四二年）南洋廳中学校規則が制定され、同時パラオ中学校が開設された。修業年限は五年で学科目、課程、教授時数等は内地のそれと同様である事勿論である。

三、青年教育

群島の環境と使命に鑑み、青年教育機関を整備し、実務大衆青年をして健全なる思想精神を確立させ、併せて時代の進運に適した知識、技能を授け、体位を向上し群島青年の國民的資質を培養する爲め、昭和十四年（一九三九年）より群島各地に青年学校が設立された。

其の設立は南洋群島地方費南洋群島部落規則に依る部落並に組合会社商店等に依り、可久的実務大衆青年の就学に容易なる如く、昭和十七年（一九四二年）男子一九校、女子五校が設置され、主要地には概ね施設された。

而して之が編制は普通科、二年本科、男子五年、女子三年、研究科一年以上となつて居り、之が教授訓練科目は左の通りである。

普通科		本科		研究科	
男子	女子	男子	女子	男子	女子
修身及公民科 普通学科 職業科 体育科	同 同 同 同 家庭	左 左 左 左 科	修身及公民科 普通学科 職業科 体育科	同 同 同 同 家庭	左 左 左 左 科
				修身及公民科……必須科目 選択科目	

尙本青年学校と各地男女青年團の發展は密接不可分の關係があつたので、表裏の關係に在つて強力な發展を遂げたものである。

四、其他

既述の他幼稚園事業私設教育施設がある。

幼稚園は内地に於ける幼稚園令に依つて保育事業を営むのであつて、保育科目は談話、唱歌、遊戲及び觀察を主とし、保育時間は週一八時間程度で満三歳以上学令迄の幼兒を收容するもので群島では昭和二年（一九二七年）ボナベ幼稚園の開設を嚆矢とし、昭和十年（一九三五年）には七ヶ所に開設された。之等幼稚園は概ね其の財政的に困難であつたので官より毎年其の保姆給料を補助されて居た。

私設教育事業としては南洋興発株式会社が其の事業地たるマリアナ群島各地で実施していたが、其の後青年学校に吸収された。

五、社会教育團體

南洋群島に於ける日本人及び原住民を一視同仁、而して教育及び文化開發を助長する社会教育團體に恩賜財團獎学会南洋群島教育会南洋群島文化協會がある。

恩賜財團獎学会及び南洋群島教育会は共に大正十三年（一九二四年）今上天皇御成婚記念に設立されたもので、獎学会は恩賜金を基金とし、兒童教育學藝の奨励を行う、爲に優良兒童の表彰、兒童文庫の設置等兒童生徒に直接恩典に浴せしめ、其の知徳を向上せしむる目的を以て設立された財團法人である。

南洋群島教育会は群島に於ける教育の改善進歩を図る爲に教育者を主体として教育に関する研究發表及び教育學術に関する知識の開發、向上に資する事を主な目的とするものである。

六、南洋群島文化教育

昭和十二年（一九三七年）群島在住民の文化向上と福祉を増進するを目的とし創立されたもので、機関紙「南洋群島」を發行、群島事情の内地紹介、展覽会、映画会、講演会、夜間大学等を開講、文化的事業の經營を行ひ、群島の發展に伴ひ其將來を期待されて居た。

以上の諸團體に対しては南洋廳も積極的に助長方策を採り終始補助金を交付して居た。

第十一章 衛生

第一節 衛生状態

南洋群島は緯度の関係よりすれば熱帯圏内に在る爲め、黒熱の地を想はせるが氣候は概して適須で四時絶ゆる事なき熱風の作用は著しく酷暑を緩和し、居住は極めて容易でコレラ、ペスト、黄熱、マラリヤ、睡眠病等惡質の疾病なく、保健状態は概ね良好である。唯群島内の各島嶼は狭少な珊瑚島で良質の飲料水を得ることが困難な爲め、一般に貯溜天水を飲用すること、雨量概して多く、湿度が高い等のことは罹病の素因となることが尠くない。

島民は一般に衛生思想乏しく、其の起居極めて非衛生的で疾病に対して迷信に惑ひ、疾病は神の所業なりと信じ、施療を避ける等の風習があつて衛生思想はまことに幼稚低級であつた。

西班牙時代に於ける衛生医療方面は唯宣教師等に於て医療を施した程度であつたが、独逸領時代になつてヤップ、ボナベ等知事所在地は元よりサイパン、パラオ等に各一名の医師を置き一般診療のことに当らせると共に地方病、風土病並に衛生に関する旧慣の調査等に当らせたが、能くその任務を盡した爲め、島民の信頼を得相當の成績を収めたのである。

我が占領に歸するや島民の開発福祉を以て目的とし大正四年二月（一九一五年）に臨南防第四五号を以て「南洋群

島傳染病予防規程」を發布し、軍医長の名を以て各守備隊長宛「清潔方法消毒方法」を通牒し、保健の必要と其の方法に就て指示する所があつた。大正一一年四月（一九二二年）南洋廳設置と共に勅令第一一一号を以て南洋廳医院官制を發布し、医院をサイパン、ヤップ、パラオ、アンガウル、トラツク、ボナベ、ヤルートの七箇所に設け衛生思想普及衛生状態の向上、飲料水、水質検査地方病又は死因の調査等各種衛生上の調査を行ひ、之が施設上の資料蒐集に努め、次第に適切な施設を行はんとした。

第二節 衛生施設

一、医療機関

島民の衛生思想の低級なるは前述の通にして、南洋廳設置と共に南洋廳医院を設置して医長、医官、医員、薬剤員産婆、看護婦等を之に配置して汎く公衆の診療に当らしめると共に地方病の調査研究設備の完成に努め、以て之が完備を期しつゝあつた。其の後人口の増加、衛生思想の復達に伴ひ医院の拡張を行ひ、又公医規則を制定し、開業医に補助金を與へて一般診療に従事せしめたが昭和一七年（一九四二年）末現在サイパン、パラオ、ヤップ、バベルダオブ島（パラオ本島）トラツク、ボナベ、ヤルルートに官立医院を、又クサイに分院を設置して外テニアン、ロタ、バベルダオブ島、トラツク諸島中水曜島バカン島に各一名の公医を設ける等医療設備の完成に努めた。尙僻遠の離島に於ける患者の應急施療機関として島民の現地開業医の制度を設け、官立医院にて三年、乃至五年に亘つて内科及び外科の一般を学理及実地に依り修得せしめ、その成績良好な者をして一環礁を限り開業せしめ、麻薬、劇薬及び外科

刀等の使用は禁じられていた。此の種島民開業医師は昭和一七年（一九四二年）末現在に於てヤルト諸島に一〇名、ヤツプ島の離島に四名を算した。以上の外サイパン、テニアン、パラオ、ボナベの諸島に一名乃至七名の開業医あり、その数一三名に達した。なほ南洋興發株式会社、南洋拓殖株式会社等は各々其の企業現地に医務室を設け主としてその従業員の診療に当らしめていた。

歯科医師はボナベに六名、パラオに四名、ヤツプに一名、テニアンに二名、ロタ、トララク、ボナベに各二名、ヤルトに一名が開業していた。

医院の設置なき離島又は僻陋地に於ては救急藥品の設備をなして治療せしめつゝあつた。之は島民改善獎勵金を官より支出して救急藥品の材料其の他簡易にして危険の虞なき治療藥品、材料等を購入し、之を巡査駐在所又は村吏若くは公学校に備へ置き、地方島民の需に應じ無料で給付治療せしめつゝあつたが、其の成績見るべきものがあつた。

二、医療費

軍医官をして島民の診療に当らしめた當時は診療に対する料金をすべて徴収するの定とし、地方又は個人の狀態に依り、從來の習慣を参酌して之を免除、又は軽減することとしたが、實際に於て島民に対しては殆んど之を徴収しなかつた。其の後群島の經濟發展と医療の效果の一般的認識とに因つて島民のみ無料とする必要を認められなくなつたので大正一一年七月（一九二二年）告示第六号南洋廳医院診療並諸料金徴収規程を以て非島民に対する料金を定めると共に同第七号を以て島民診療費徴収規程を定め、貧困にして料金を支拂ふの資力なき者等を除くの外、極めて小額の料金（日本人及び外國人に対する料金の約五分の一乃至三分の一）を徴収することとした。

然るに其の後、医療の効果が島民に認められて乞ふ者著しく増加したばかりに留まらず、無智の島民は其の料金の日本人及び外國に對し、著しく低廉なのは即ち島民には故ら劣惡な藥品材料を使用するが如き誤解を爲し、或は些少の病氣にても居ながらにして往診を乞ひ甚しきに至つては交付を受けた諸材料を医料以外の用途に使用する者すら生ずるに至つたので昭和二年（一九二七年）島民診療費徴収規程を改正し、一般的に藥價其の他の料金を増額した。但し從來各島の料金均一の制度を改め、地方一般医事衛生に關する思想の程度並富力の程度等を考慮土地に依り甲、乙、丙の三等級を設け、料金額を區別する所あつた。

再び又非島民に對する南洋廳医院診療法諸料金徴収規程を改正し、其の額を増額したのである。

三、衛生試験所

南洋廳設置と共に須要の地に医院を設け、一般診療に従事すると共に傳染病並に地方病に關する調査研究に當らしめて來たが、熱帯醫學確立の緊要なるに鑑み、新に昭和一八年七月（一九四三年）衛生試験所を設置し、理化学試験、細菌検査、榮養試験等を専ら掌ると共に開業医、その他一般公衆の衛生試験の希望に應ぜしめ、南方衛生の確立國民健康の向上を圖ることとした。

四、死因調査

旧慣を朴守する事強く、かつ交通不便な地理的事情と医療を受くる者の少い狀態に鑑み、從來島民に對しては其の死亡死産の届出に診断書、檢案書等死因を明かにする書類を徴しなかつたが、死者の大半は病名不詳であつて取締上並に保健施設上遺憾の点が多かつた。然し乍ら近時医療機關の完備も普及し、島民亦医療の効果を認め、特に僻遠の地

でない限り医療を受ける者次第に増加し大正一五年八月（一九二六年）南洋廳令第四号を以て墓地及び埋火葬取締規則を制定し、死亡、死産の届出には医師又は産婆なき地方を除く外診断書又は検案書等を添附せしむることとした。之等添付書類なきものは支廳より技手たる医師を特派して、死体又は死胎の検案を爲さしめ、之に基き死亡死産の日時、原因、年齢、職業等に関する學術的調査を行うこととした。

五、住宅及便所の改善

各島何れも文化程度に多少の相異ありて建築材料又その様式も自ら異なる。概して島民は原始的であつて住宅衛生知識に乏しく、且之に顧慮しない傾向あり、従つて其の構造も極めて簡單で外様も亦貧弱衛生的でない点頗ぶる多し。

サイパン島チャモロ族の建築は比較的發達している方で、床を有し牢には石積家屋を見るが、ヤツブ、トラツク、ヤルトの如きは概して床もなく、全く掘立小屋式であつて地面にアンペラ様の莫座を敷き起臥する状態である。パラオ、ボナベに於ては床窓戸を有すが尙倭陋陰濕にして衛生的でない。

之等居宅の改善に關しては急速な効果を期待し得ないけれども、南洋廳施設当初より意を用い、大正一一年度（一九二二年）以來島民改善獎勵金を以て各島に木工木挽の講習を開いた。大正一五年（一九二六年）学校として木工徒弟養成所（改正島民工員養成所）を設置し、家屋建築に必要な大木工木挽等の養成に努むると共に部落に模範家屋建設して改造を促した。之等刺戟を受けるのみならず、觀光團として内地の建築に接し、或は廳舎官舎等を実現して漸次覺醒し來り、採光換氣等に考慮を拂ひ、次第に支廳所在地の各部落には衛生的住宅を見るに至つた。

又島民は昔から海岸又は叢林中の隨所に排便する習慣があつた。サイパン島ガラパン、パラオ諸島、コロール島、ボナベ島、ヤルト島等部落集團地に於て、特に衛生上寒心に堪えぬものがあつた。之が改善を圖る爲め、之等の島民集團地には島民改善獎勵金より官費を支出して共同便所を建設し、又は補助金を交付して之を設けしめ、その使用を勸奨し來つた。かくてサイパン島海岸の如きは排便するものなくなり、近時次第に馴致され一般住宅内にも便所を設くるやうになつた。

六、上水道

群島には元來適切な河泉とか、地下水などに乏しく、樹木より取りし雨水を貯藏して飲用に供し、又椰子果汁を飲用とするを普通とする。雨水を貯藏するものも、とかく貯溜の設備が完全でない爲と、隨時、隨所に於て溜水又は河水を飲用に用ふる状況なので保健衛生上特に看過し難きものがあつた。

まづ第一に之を改善する緊要を認め、大正一一年（一九二二年）以來島民改善獎勵金を支出し、部落又は個人に相當の経費を官より補助し、コンクリート造りの水槽を設備せしめ、又適當な井泉に衛生的な改善を施すなど専ら飲料水の改善を奨励した。之等の水槽は雨水を屋根より引入るものであつて、島民家屋は多く椰子葉葺なるを以て飲用水を取入るゝに適しない。依て家屋を亜鉛鍍鉄板屋根に改善し水槽を設けせしめた。これ等住宅改善と相俟つて官の補助を受けないで自ら進んで自費を以つて水槽の設置を爲す者漸く多くなつた。

雨水は飲料水であり、雑用水でもあつた現狀にて乾燥期に於ては之が水の缺乏を來し生活上は勿論衛生上憂慮に堪へないものがあり、群島中ロタ島は幸ひ山水多きを以て之を利用し昭和九年（一九三四年）南洋興發株式会社に於て

上水道を施設した。パラオ及びサイパンに於ては上水道新設工事四箇年継続事業と企画し、パラオは昭和一二年（一九三七年）より着工コロール町アルミズの自然水とパラオ本島バベルダオブ、キルメル州より利用し、昭和一五年度（一九四〇年）完成し一般給水を開始した。総工費四三万円、サイパンは昭和一三年（一九三八年）より差当り電信山及びドンニー水源地に施設起工し、総工費六二万とせるが、完成の運びに至らなかつた。ボナベ島に於ては昭和一六年（一九四一年）末南洋起業株式会社が施設した。

七、種痘及健康診断

種痘に關しては大正一一年（一九二二年）より内地の如き法例の定めはないが、年一回定期に又臨時に官費を以て内地種痘法に準じて之を施行し其の成績甚だ良好であり、唯大正一五年（一九二六年）ヤップ島に於て内地より渡航した疑似痘瘡患者を見た外かつて患者を出したことがない。

藝妓、酌婦等の接客業婦に対しては廳令藝妓酌婦取締規則の定むる所に依り、所轄支廳長に於て各業態に従ひ毎月一回若くは数回、全身の健康診断を行ひ傳染性疾患ある者に対しては其の就業を停止し、以て公衆保健に努めつゝあつた。

八、癩療養所

癩は本群島に相当古くより分布して居た様で、島民は未だ医療を乞ふ者尠ない。従つて其の数を明にする事を得ない。由來島民は其の傳染性を信じないので当局は常に適當なる方策を講じ隔離治療を行う要あるを痛感し大正一五年（一九二六年）サイパン島に癩療養所を設け、之に患者を收容して診療は凡て官費を以てし、糧食等は夫々親族縁故

者の負担としたが、とかく糧食の給與行届かず、又收容患者も少ないので看護人の同居を許さなかつた結果もあり、生活單調の爲め、不便と寂寥を感じ之を厭忌脱所するものあるに至つた。昭和二年（一九二七年）ヤルト島に療養所を設くるにあつては右事情を考慮し、診療用建物の外官費を以て患者毎に別棟の住宅を設け、看護人及び患者と別居する事態はざる事情のある家族の同居を認め、診療亦官費に依る外、糧食其の他養護の費用を本人又は縁故者に於て、負担し得ない場合は恩賜財團慈惠会に於て負担せしむる事とした。患者は安じて受療し、成績甚しく良好を見るに至つた。

その後サイパン島に於ける療養所は暴風の爲め、大破使用不能となつた。昭和六年（一九三一年）パラオ島に昭和七年（一九三二年）ヤップ島に設けられ、引続き今日まで隔離治療を爲した。

九、性病予防

性病の歴史に付ては之と云うべき文献はないが、大正四年（一九一五年）我海軍軍医当局に依つて一般診療に當つた際マーシャル群島の如きは島民患者中、多数の該病者あるを見た。島民は医院にて医療を請うを嫌忌する風がある。だから医院の患者統計に依つても其の数多からぬ場合があつても實際は相當に蔓延し居るものと思はる。茲に注意すべき点は梅毒及び下疳少なく、主として淋病性疾患が多い。昭和六年（一九三一年）ヤップ島島民人口減少の原因調査の爲め、同島カナカ族に就き調査した所に依れば三三パーセントの淋病患者を發見した。之等患者に対しては官費を以て鋭意治療を行はしめた。

十、結核予防

結核も亦島民間には多数の患者を見る。昭和四年一月（一九二九年）より昭和五年二月（一九三〇年）に亘り、ヤップ島住民に就き一齋に健康調査を行つた結果、人口の一五パーセントの多数に上るを見た。其の他の各島は未調査であるが、相当浸潤してゐる模様である。

爾來島民の生活状態に稽へ衛生思想の普及、日常生活の向上改善に努め、漸次医療を乞う者増加しつゝある状態であつた。

十一、防疫

各種の傳染病に關しても何ら徴すべき文献はない。しかしサイパン島及びパラオ島の如きは嘗て数万の住民があつたのに傳染病流行の爲め、遂に現在の如く僅に数千に減少したとの説もあり、従つて古來相當の流行を見たことも疑ひない。大正四年（一九一五年）南洋群島傳染病予防規程を設け、傳染病をコレラ、ペスト、腸チブス、バラチブス、発疹チブス、デフテリア、猖紅熱、赤痢（疫痢を含む）痘瘡、流行性腦膜炎として内務傳染病の予防に努めつゝあつた。幸ひにして未だコレラ、ペスト、黃熱、猖紅熱等の悪性の傳染病は我國統治後侵襲を見たることもないが、若しも一度之等の侵襲を見るに至れば島民の生活が甚だ非衛生的であるからして、其の慘害測り難きものがある。依つて傳染病の外襲に備ふるを以て最緊要の事項を認め、船舶檢疫には最も力を注ぎ船舶取締規則及交通港取締規則に依り医師たる各支廳技手及び警察官吏をして入港船舶に対しては嚴に檢疫を行はしめて來た。

群島に發生する傳染病として腸チブス、バラチブス、アメーバ赤痢等を主なるものとする。其の他流行性腦脊髄膜炎は大正一〇年（一九二一年）パラオに一名、昭和五年（一九三〇年）サイパン島に一名發生したことがある。疑

似痘瘡はヤップ島一名の患者を出したが、之は恐らく旅行先支那及び日本内地に於て感染せるものと認めらる。赤痢は昭和三年（一九二八年）サイパン島に二名の患者が發生したこともある。之等は群島外より侵襲に依つたものにして防疫其の機宜を得、流行を見るに至らなかつた。疫痢は近年邦人移住増加に伴ひ、各地に散発を見ることがある。腸チブス、バラチブス時々散発を見た。

群島は藥餌は勿論、治療材料等の設備不足であつたに依るが、漸次完成に努め醫院職員に研究費を補助し、攻究せしめ、其の予防撲滅に常に腐心し、予防接種に努めた。開發さるゝに従ひ物資も潤澤となり、治療成績も向上の道を辿つた。アメーバ赤痢は殆んど地方病の感ありて、常に予防に努めると共に經費を補助し撲滅の対策研究をなさしむること怠らなかつた。

十二、地方病

地方病として重なるものは輕症な熱帶赤痢（アメーバ）フランペシヤ、デング熱、毒魚の中毒、腸寄生蟲等であり、他の熱帶に見るが如きマラリヤ、黒水熱の疾患は決してない。

フランペシヤは島民間に廣く侵潤している。これが治療には主としてサルバルサン注射を行い偉效を奏し、療法普及の結果、罹病者の数は減じ、且症状も一般に輕微となりつゝある。

デング熱は流行性感冒に似て、其の傳播も速く一度發生するや猛烈な熱を以て蔓延する。然しながら経過も短く、予後佳良にして爲に不幸の轉歸に至つたものは殆んどないと云つてよい。

毒魚の中毒はマーシャル群島に多く棲息し、時に攝食に因る中毒の結果、轉歸に至るものがあり、腸寄生蟲殊に十二

指腸蟲病に罹るものが多い事は独逸時代の報告にもあつた。我が占領後大正七年（一九一八年）防備隊軍医長は所在地小学校（島民学校）生徒の糞便検査を行つた結果、一、〇三四名中八九二名で八六パーセントを見るに至つた。依つて学校兒童の本病は之にして等閑に附すべからざるを以て官費を以て駆除治療を行つた。

ワイル氏病は大体ボナベ島に多い病で本病の症状は初め感冒症状を呈し、漸次黄疸症状に変ずるもので排尿が不活潑となるのが特徴であり、此の病患には免疫血清療法を施しているが、相当の効果を擧げている。なほ此の予防法としてワクチン注射を施せば三ヶ月程度で免疫となるものの如くである。

第三節 ヤップ島人口減少の原因調査及対策

大正九年（一九二〇年）大正一四年（一九二五年）及び昭和五年（一九三〇年）に於ける三度の島勢調査の結果を見ると島民の人口総数は些少乍ら増加を見るが、就中チャムロ族は其の趨勢著しいのに対し、たゞヤップ本島のカナカ族のみ毎年著しき減少の傾向を示してゐる。これは西班牙時代から認められた。我國占領後之が原因調査を行ひつゝあつたが、多くは断片的資料を得たに過ぎなかつた。未だにその根拠たるを究明致し難し、依つてヤップ医長をして医学的方面より調査せしめた。同医院に於てまづ昭和四年（一九二九年）昭和五年（一九三〇年）の二箇年に亘つて死因の調査を行い、昭和五年（一九三〇年）昭和六年（一九三一年）には性病調査を決定した。

死因調査の結果に依れば結核性疾患に因る死亡者は昭和四年（一九二九年）に死亡者一九五人中一〇二人で、五十二パーセント昭和五年（一九三〇年）に一六七人中八八人で五十二パーセントに及んだ。文明諸國の死亡者総数より

遙に高率を示している。

また健康調査の結果調査人員三、七八七人中五〇八人の結核性疾患患者、即ち二二パーセントに上つてゐる。性病調査を実行するに古今東西に其の類を聞かない泌尿生殖器の検査があつたから、第三者の非難は兎に角として島民の強烈なる反対を予想したのであつた。然し斯様な検査をなさねばならない究局の目的はヤップ島民のカナカ族滅亡の非運から之を救済せんとするにあつた。調査の結果は八歳乃至六〇歳に於ける調査人員二、三五四人中性病患者即ち淋病患者七八四人で三三パーセント、之を五才階級別に見れば、最も出産を爲すべき一六才—二〇才、二一才—二五才、三一才—三五才に於て人口に比し四〇パーセントを超え四一才—四五才、四六才—五〇才に於ては平均より僅かに超過し、其の他は平均以下の数字を示している。この結果からしても結核の浸潤が死亡率を高め、性病が出生率を低下せしめ、こゝ両々相俟つて人口減少を示しつゝあるものに相違ない。また風俗、習慣其の他社会的事情の調査の結果、人口減少に影響を及ぼせしものもあり、即ち出生の点では、婦女子は一日数回水浴するを例とする。殊に夜間海水に浴する。此れは骨盤部冷却を以て婦人生殖器と腔内精子を陰門外に排出するので受胎減少を來す原因となつた。性交は享樂的に乱行され、毫も節制（後記の如き禁忌は格別）がない。且つ十才内外の幼年期に於ては遊戯的接觸が屢々行はれた。何故に両親は中止すべき旨を命じなかつたかを問へば、幼少時の性交は眞の性交に非ず、唯遊戯で何等害なしと答へた。性交の享樂的に乱行せらる一面、性交の禁忌も亦甚しい。即ち分娩後は産兒歩行するに至る迄夫妻相接せず、公共的事業に従事し、又は家屋の築造等特殊の場合は其の期間の長短を問はず夫妻相接せず、甚しきは風向の如何に依つても性交を禁忌した。

死亡に影響すべきは罹患發熱すれど皆海中に浸るものゝ如く、疾病は神意なりとし医療を忌むだ。

家屋の如きも全然道風、換氣、採光に考慮を用ひず、床を設けず、土間に起臥する。飲食亦之に類し毫も注意を拂はない。屍体を椰子の果汁にて洗ひ、其の汚汁を近親者にて飲用するものもある。これ等の衛生施設の改善、衛生思想の普及惡風俗を改善し、人口の減少の原因除去に努めた。

実施せし事左の如きものであつた。

飲料水の改善、適當の地下水なき爲め補助金を下附し、井戸を掘らす又水槽を設けて天水を貯溜せしめた。共同便所の設置、隨所に排便する陋習ある爲め、補助金を下附し適當の位置に共同便所を設置せしめた。

月経ハウスの改善、婦女月経中は月経ハウスと称する陋屋に籠居する慣習あり、其の構造甚しく非衛生的なるを以て補助金を與へ、之を整理改善しつゝあつた。

住宅の改善 住居亦凡て不潔陰濕なるを以て改業を志せる者に補助金を與へ、又は模範家屋を造り、其の仕様を教へ改善させた。

水質検査 島内全部に亘り用水の水質検査を爲し、良否を判定し、使用の注意を促していた。

救急藥品の設備 巡査駐在所又は村吏の許に救急藥品を備へ應急施藥をなした。

衛生講話 機会ある毎に活動写真、燈幻機械を應用して講話を爲し、陋習迷信の打破及び衛生思想の涵養に努めた。

巡回診養 医治を忌む陋習あつた故、機会を促し医院職員を派出し診養せしめた。

性病治療 別項記載にて發見せる患者に対しては總て官費を以て治療を施した。

診療所設置 巡回の際、恰好の建物なき爲め補助金を下附し建設せしめた。

治療料金の減免 貧困者に対してはすべて料金を減免治療する方策を執つた。

1 面積及島数

	島数	面積	主 要 島 名	名
南洋群島	623	平方浬 2,149		
ヤリアナ群島	14	639	サイパン島, テニアン島, ロタ島	
カロリン群島	549	1,320	水曜島, ボナベ島, クサイ島	
マーシャル群島	60	—	{ ヤップ島, バラオ本島, アンガウル島, 夏島, 春島	
サイパン支廳	14	639	サイパン島, テニアン島, ロタ島	
ヤップ支廳	85	226	ヤップ島	
バラオ支廳	109	478	バラオ本島 (バベルダオ島), アカガウル島	
トラツク支廳	215	132	春島, 夏島, 水曜島	
ボナベ支廳	138	504	春島, 夏島, クサイ島	
ヤルーツ支廳	※ 32	170	ボナベ島, クサイ島	
			ヤルーツ島	

※ 32ノ島嶼ハ更ニ767 礁島ヨリ成ル。

2 主要島面積

主 要 島 名	面積	主 要 島 名	面積
サイパン島	平方浬 185	春夏水曜	平方浬 22
テニアン島	98	ボナベ島	9
カロリン群島	125	クサイ島	23
マーシャル群島	216	アンガウル島	375
サイパン支廳	370	水曜島	116
ヤップ支廳	8	バベルダオ島	8

3 人口

年次	総数	男	女	邦人	内地人	朝鮮人	日本人
	総数	男	女	総数	男	女	総数
(1922) 大正 17	51,086	26,615	24,471	3,310	2,279	1,031	△3 146 126 20
(1927) 昭和 2	58,816	31,743	27,073	9,979	6,392	3,587	△1 147 122 25
(1932) 昭和 7	78,457	43,338	35,119	28,291	17,409	10,882	※6 28,006 ※4 17,194 ※2 10,812 △1 278 210 68
(1937) 昭和 12	113,277	62,862	50,415	63,305	36,642	25,663	61,723 36,276 25,447 579 363 216
(1939) 昭和 14	129,104	73,412	55,692	77,257	46,484	30,773	75,286 45,186 30,100 1,968 1,295 673

4 人口

年次	総数	男	女	島民	家族	外 國 人	人
	総数	男	女	チヤモロ	家族	総数	男
(1922) 大正 17	47,713	24,278	23,435	2,746	1,431	1,315	44,967 22,847 22,120 63 58 5
(1927) 昭和 2	48,761	25,286	23,475	3,048	1,597	1,451	45,713 23,689 22,024 76 65 11
(1932) 昭和 7	50,069	25,862	24,207	3,532	1,837	1,695	46,537 24,025 22,512 97 67 30
(1937) 昭和 12	50,849	26,144	24,705	3,705	1,917	1,788	47,144 24,227 22,917 123 76 47
(1939) 昭和 14	51,723	26,861	24,862	4,036	2,173	1,863	47,689 24,688 22,999 124 67 57

5 部 落

部 落 別	所 在 地	設置年月日	年 次	総 代	副 総 代	協議会員	邦 人 人 口		
							総 数	男	女
ガラパン町	サイパン島	昭7,9 (1932)	昭 8(1933)	1	1	16	6,053	3,388	2,715
			//12(1937)	1	1	16	9,527	5,199	4,328
			//13(1938)	1	1	16	9,954	5,369	4,585
			//14(1939)	1	1	16	11,610	6,420	5,190
			//16(1941)	1	1	16	13,415	—	—
			昭 8(1933)	1	1	12	2,008	1,270	848
東 村	同 島	同 一	//12(1937)	1	1	16	2,921	1,611	1,310
			//13(1938)	1	1	16	2,939	1,571	1,368
			//14(1939)	1	1	16	3,168	1,707	1,461
			//16(1941)	1	1	16	2,523	—	—
			昭 8(1933)	1	1	16	4,778	2,934	1,844
			//12(1937)	1	1	16	2,672	1,538	1,134
南 村	同 島	同	//13(1938)	1	1	16	2,833	1,661	1,172
			//14(1939)	1	1	16	3,051	1,742	1,309
			//16(1941)	1	1	16	2,560	—	—
			昭 8(1933)	1	1	12	1,937	1,172	763
			//12(1937)	1	1	16	2,738	1,522	1,216
			//13(1938)	1	1	16	2,907	1,636	1,251
北 村	同 島	同	//14(1939)	1	1	16	2,794	1,579	1,215
			//16(941)	1	1	16	2,583	—	—
			昭 8(1933)	1	1	16	—	—	—
			//12(1937)	1	1	16	2,691	1,515	1,176
			//13(1938)	1	1	16	3,318	1,848	1,470
			//14(1939)	1	1	16	3,707	2,070	1,637
チャラカン町	同 島	昭9,10(1934)	//16(941)	1	1	16	4,194	—	—

泉 村	同 島	昭16,7(1941)	昭 8(1933)	—	—	—	—	—	—
			//12(1937)	—	—	—	—	—	—
			//13(1938)	—	—	—	—	—	—
			//14(1939)	—	—	—	—	—	—
			//16(1941)	1	1	12	1,381	—	—
			昭 8(1933)	1	1	16	2,739	1,580	1,159
テニアン町	テニアン島	昭7,8 (1932)	//12(1937)	1	1	16	4,711	2,596	2,115
			//13(1938)	1	1	16	5,127	2,839	2,288
			//14(1939)	1	1	16	5,219	2,972	2,347
			//16(1941)	1	1	16	5,865	—	—
			昭 8	1	1	16	3,172	2,025	1,147
			//12	1	1	16	8,814	5,524	3,290
コロール町	バラオ諸島	昭7,8 (1932)	//13	1	1	16	11,933	7,291	4,642
			//14	1	1	16	13,286	8,302	4,984
			//16	1	1	16	13,962	—	—
			昭 8(1933)	—	1	—	—	—	—
			//12(1937)	1	1	12	1,706	1,173	533
			//13(1938)	1	1	12	1,671	1,105	566
夏 島 町	トラツク島	昭12,8(1937)	//14(1939)	1	1	12	1,678	1,118	560
			//16(1941)	1	1	16	2,604	—	—
			昭 8(1933)	—	1	8	1,030	629	401
			//12(1937)	1	1	16	1,912	1,097	815
			//13(1938)	1	1	16	2,471	1,453	1,018
			//14(1939)	1	1	16	3,397	2,063	1,334
コロニヤ町	ボナベ島	昭8,5 (1933)	//16(1941)	1	1	16	4,012	—	—

6 島民村吏
(括弧内ハ総村長ニシテ村長ヲ兼タルモノ再掲ナリ)

年次	総数	チヤモロ族			カナ			族役
		子長	口助	族役	総村長	村長	助	
大正13(1924)	117	3		6	33	74		1
昭 2(1927)	108(3)	3		6	32	66(3)		1
" 7(1932)	105(4)	3		5	32	64(4)		1
" 12(1937)	110(4)	3		7	34	66(4)		—
" 14(1939)	111(4)	3		7	34	67(4)		—

7 検事局刑事々件取扱件数

年次	受理			終			局		其他	未終局
	總数	旧受	新受	總数	起訴	起訴猶豫	不起訴	起訴中止		
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和 2(1927)	279	15	264	252	189	—	15	6	3	24
" 7(1932)	348	10	328	319	216	52	49	2	14	15
" 12(1937)	579	52	527	539	262	180	95	2	16	24
" 14(1939)	652	25	627	606	297	224	74	11	27	19

8 検事局刑事々件終局人員

	總数			起訴猶豫			不起訴			起訴中止	
	總数	邦人	島民	總数	邦人	島民	總数	邦人	島民	總数	邦人
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和 2(1927)	579(1)	189	389	473(1)	35	337	—	—	—	51	7
" 7(1932)	688	389	299	467	211	256	155	128	27	63	3
" 12(1937)	981(1)	563	367	508(1)	256	251	309	231	118	112	2
" 14(1939)	904	592	312	491	279	212	306	228	78	95	11

9 法院刑事々件取扱件数

年次	受理			終			局		其他	未終局
	總数	旧受	新受	總数	有罪	無罪	無罪	無罪		
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和 2(1927)	93	6	87	93	93	—	—	—	—	—
" 7(1932)	154	6	148	131	131	—	—	—	4	19
" 12(1937)	316	52	263	274	274	—	—	—	19	23
" 14(1939)	329	28	301	281	281	—	—	—	12	36

10 和解事件数

年次	受理		既調		不調		取下却下		其ノ他	未済
	總数	旧受	總数	調	總数	取	下	却下		
1922	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1927	95	3	92	88	59	8	21	—	—	7
1932	294	21	273	289	184	36	69	—	—	5
1937	85	15	70	67	33	6	28	—	—	18
1939	38	9	29	33	20	5	8	—	—	5

11 地方法院刑事事件有罪人員刑名別 (1)

	總数				總数				總数				總数			
	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和7年 (1932)	444	425	19	177	14	248	5	88	88	—	38	50	—	—	—	—
昭和12年 (1937)	545	524	21	251	7	272	14	131	128	3	71	2	57	1	—	—
昭和14年 (1939)	464	458	6	239	5	218	1	133	130	3	64	2	65	1	—	—

11 地方法院刑事事件有罪人員刑名別 (2)

	罰				金				拘				留				科			
	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和7年 (1932)	182	173	9	93	6	80	3	—	—	—	—	—	174	164	10	46	8	118	2	—
昭和12年 (1937)	136	132	4	78	—	54	4	2	2	—	—	—	276	262	14	102	5	159	9	—
昭和14年 (1939)	94	94	—	56	—	38	—	1	1	—	—	—	236	233	3	119	3	114	—	—

12 犯罪即決處分人員刑名別 (1)

	件数	總数				總数				總数				總数			
		總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人	總数	男	女	邦人
大正11年 (1922)	—	286	4	4	—	282	258	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	—	333	95	79	16	238	211	27	30	11	11	—	19	19	—	—	—
昭和7年 (1932)	474	552(1)	219(1)	183	31	332	291	41	11	6	6	—	5	5	—	—	—
昭和12年 (1937)	1,224	1,502(7)	962(6)	914(1)	48	533	521	12	15	12	11	1	3	3	—	—	—
昭和14年 (1939)	1,422	1,613(2)	989(1)	920(1)	69	622	607	15	5	4	4	—	1	1	—	—	—

12 犯罪即決処分人員刑名別 (2)

	拘留		留置		勞務		役		科		料	
	總數	邦人	總數	邦人	總數	邦人	總數	邦人	總數	邦人	總數	邦人
大正11年 (1922)	258	2	2	—	256	244	12	—	—	—	28	2
昭和2年 (1927)	107	15	10	5	92	76	16	—	—	—	196	69
昭和7年 (1932)	210	66	52	14	144	137	7	32	—	—	299	147
昭和12年 (1937)	634	322	315	7	312	312	—	68	5	5	785	623
昭和14年 (1939)	741	440	423	17	299	288	11	153	—	—	714	545
											545	493
											52	169
											168	168
											1	1

13 在 監 者

年次	總數		數		變刑者		勞務場留置者		刑人被害入		被疑者		乳兒	
	總數	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
昭和2(1927)	14	14	—	—	14	—	—	—	—	—	—	—	—	
" 7(1932)	49	49	—	—	33	—	4	—	—	—	6	—	—	
" 12(1937)	79	75	4	—	67	2	—	—	—	—	7	2	—	
" 14(1939)	74	71	3	—	59	2	—	—	10	1	2	—	—	

14 入 監 及 出 監 者、

年 次	總數		入		受刑者		勞務場留置者		刑人被害入		被疑者		乳兒	
	入	出	入	出	總數	滿期	死亡	既出獄執行停止	入	出	入	出	入	出
大正11(1922)	4	11	4	10	10	10	—	—	—	—	1	—	—	—
昭和2(1927)	41	46	30	32	32	32	—	—	—	—	3	4	—	—
" 7(1932)	(1) 110	(1) 83	53	38	35	—	—	—	21	18	(1) 23	(1) 18	13	9
" 12(1937)	500	500	404	402	392	—	—	—	9	6	4	3	86	88
" 14(1939)	554	553	492	499	477	—	—	—	4	4	54	49	4	1
島														
大正11(1922)	317	317	283	287	286	—	—	—	4	4	30	26	—	—
昭和2(1927)	180	180	137	135	124	—	—	—	5	6	38	39	—	—
" 7(1932)	236	235	184	184	182	—	—	—	46	46	6	5	—	—
" 12(1937)	446	445	372	367	364	1	—	—	67	65	2	2	5	11
" 14(1939)	530	541	382	397	388	2	—	—	8	11	3	3	—	—
民														

15 南洋廳特別會計決算表
(単位未満四捨五入)

科目	年別	大正11年 (1922)	昭和2年 (1927)	昭和7年 (1932)	昭和12年 (1937)	昭和14年 (1939)
歳入	総額	6,540,507	7,598,978	8,391,473	10,740,006	16,246,372
歳入	經常	1,300,547	2,731,312	4,824,832	7,173,365	11,401,502
◎租		157,764	1,112,084	3,212,294	5,512,785	9,554,586
○所得	第一種所得	—	—	—	—	637,534
○所得	第二種所得	—	—	—	—	550,952
○所得	第三種所得	—	—	—	—	8,094
○法人営業	法人営業収益	—	—	—	—	78,488
○法人営業	法人営業利益	—	—	—	—	166,627
○人頭	人頭税	53,198	73,926	81,722	131,152	166,627
島民人頭	島民人頭税	—	56,242	50,924	85,760	8,210,312
○出	出港税	7,988	1,017,042	3,090,000	5,256,261	8,210,912
○煙	煙草税	—	—	—	—	263,224
昭和13年度に於て所得税を新設爲置止す						
昭和13年度より地方實財政に移譲す						

煙草	煙草税	—	—	—	—	263,224
○関	関税	96,578	21,040	40,429	101,786	166,787
○釅	釅区税	96,578	21,040	40,429	101,786	166,787
昭和12年に創設(釅業税)						
○官業及官有財産	官業及官有財産収入	—	76	143	23,586	109,171
○郵便電信及電話	郵便電信及電話収入	1,114,769	1,591,841	1,573,048	1,493,186	1,716,485
○切手	切手類収入	43,563	94,509	150,736	414,608	643,083
○郵便	郵便収入	—	86,095	126,078	281,366	310,163
○電信	電信収入	—	—	—	28,737	76,596
○電話	電話収入	—	2,788	4,098	74,034	163,485
○医療院	医療院収入	—	5,626	20,580	30,471	92,839
○林業	林業収入	24,236	63,042	88,407	163,169	—
○林業	林業収入	24,236	63,042	88,407	163,169	—
○コナラ	コナラ下代入	24,336	63,042	88,407	163,169	—
○雑	雑収入	24,385	78,279	22,017	19,675	—
○雑	雑収入	—	73,714	11,913	2,371	—
○雑	雑収入	—	4,565	10,104	17,304	—
○燐	燐下代	—	—	—	—	—
○燐	燐下代	1,019,897	1,385,157	1,206,172	—	—
○燐	燐下代	—	—	—	—	—
○官有	官有物拂下料	1,019,897	1,385,157	1,206,172	—	—
○官有	官有物拂下料	2,687	7,560	37,465	121,062	243,833

科目	年 別	大正 11 年 (1922)	昭和 2 年 (1927)	昭和 7 年 (1932)	昭和 12 年 (1937)	昭和 14 年 (1939)
恩賜財團 獎學金補助		—	2,000	2,000	2,000	2,000
恩賜財團 慈惠會補助		—	—	2,000	4,000	4,000
南洋家政女學校補助		—	—	—	3,000	—
幼稚園補助		—	—	2,800	3,400	—
○産業獎勵補助金	164,801	261,821	613,039	212,370	343,658	600
農業獎勵補助金	—	242,775	583,336	62,096	76,722	—
林産獎勵補助金	—	9,308	9,441	10,172	45,877	—
商工業獎勵補助金	—	6,548	10,432	37,037	20,000	—
水産獎勵補助金	—	4,745	7,745	72,983	86,503	—
畜産獎勵補助金	—	1,445	2,085	—	—	—
漁業經營費補助	—	—	—	—	—	—
施設補助	—	—	—	30,082	25,086	—
鯨及鯖罐詰輸出獎勵金	—	—	—	—	1,090	—
乾船渠構業補助	—	—	—	—	—	—
産業組合補助	—	—	—	—	—	—
開田費補助	—	—	—	—	—	7,080
商品倉庫設置補助	—	—	—	—	—	42,550
冷凍冷藏船建造補助	—	—	—	—	—	20,000
眞珠貝供給確保施設補助	—	—	—	—	—	18,750

○土木費補助	—	—	—	—	100,000
地方土木事業費補助	—	—	—	—	100,000
○拓殖獎勵補助金	—	—	—	10,000	2,000
拓殖獎勵補助金	—	—	—	10,000	2,000
○島民改善獎勵金	10,001	4,875	4,893	8,547	—
島民改善獎勵金	10,001	4,875	4,893	8,547	—
○部落費補助	—	—	25,628	26,916	—
部落費補助	—	—	25,628	26,916	—
○公醫補助	—	—	—	3,961	—
公醫補助	—	—	—	3,961	—
○土地調查費補助	—	50,723	42,923	67,788	72,750
土地調查費補助	—	50,723	42,923	67,788	72,750
○土地任給費補助	—	50,723	42,923	43,719	43,684
土地任給費補助	—	50,723	42,923	43,719	43,684
○土地任給費補助	—	12,945	12,987	9,589	10,750
土地任給費補助	—	12,945	12,987	9,589	10,750
○土地任給費補助	—	26,224	20,984	45,415	16,658
土地任給費補助	—	26,224	20,984	45,415	16,658
○土地任給費補助	—	9,723	7,488	6,922	14,622
土地任給費補助	—	9,723	7,488	6,922	14,622
○土地任給費補助	—	1,831	1,464	1,794	1,653
土地任給費補助	—	1,831	1,464	1,794	1,653
○稅制其他調查費補助	—	—	—	24,069	9,823
稅制其他調查費補助	—	—	—	24,069	9,823
○島列任給費補助	—	—	—	—	19,243
島列任給費補助	—	—	—	—	19,243
○島列任給費補助	—	—	—	—	17,452
島列任給費補助	—	—	—	—	17,452
○島列任給費補助	—	—	—	—	1,791
島列任給費補助	—	—	—	—	1,791

科 目	年 別	大正 11 年 (1922)	昭和 2 年 (1922)	昭和 7 年 (1932)	昭和 12 年 (1937)	昭和 14 年 (1939)
○バヲオ汽艇航路開整費	事 務	円	円	円	円	円
工 事	費 費	—	16,010	—	—	—
○バヲオ港埠頭新設費	工 事	—	5,685	—	—	—
事 務	費 費	—	10,325	—	—	—
○バヲオ港埠頭拡張費	工 事	—	—	32,800	—	—
事 務	費 費	—	—	3,048	—	—
○バヲオ港埠頭拡張費	工 事	—	—	29,752	—	—
事 務	費 費	—	—	—	—	—
○バヲオ港除礁費	工 事	—	—	—	—	—
バヲオ港除礁費	費 費	—	—	—	—	—
○バヲオ港新水道拡張費	工 事	—	—	—	—	—
事 務	費 費	—	—	—	—	—
○航路標識整備費	工 事	—	—	—	—	—
事 務	費 費	—	—	—	—	—
○本島連絡道路工事費	工 事	—	—	—	—	—
事 務	費 費	—	—	—	—	—

[illegible]

科目	年別	大正 11 年 (1922)	昭和 2 年 (1927)	昭和 7 年 (1932)	昭和 12 年 (1937)	昭和 14 年 (1939)
施設	費	円	円	円	円	円
◎礦山採掘事業其他買収費		1,938,879	202,668			
◎礦山採掘事業買収費		1,739,960				
◎土地建物其他買収費		198,919				
◎國民精神總動員費						9,968
◎事						8,218
◎獎勵						1,750
◎國民登錄諸費						7,716
◎國民列任給費						874
◎物件並物資需給調整費						6,842
◎獎勵						46,070
◎貯蓄						4,108
◎臨時防災訓練						4,398
						36,461
						1,107
						13,121
						1,485
						11,440
						196
						18,721

◎國家防務	費					2,972
◎防設施及訓練費						15,604
◎國家獎勵						145
◎獎勵						3,545
◎臨時防災訓練						
						3,203
						342

南洋廳特別會計歲入歲出予算比較対照表 (單位円)

科目	年次	昭和 15 年 (1940)	昭和 16 年 (1941)	昭和 17 年 (1942)	昭和 18 年 (1943)
歲入	計	円	円	円	円
1,經常部		13,682,112		18,984,378	21,068,471
租稅		12,775,565		18,729,211	20,155,229
官業及官有財産收入		10,730,845		16,199,282	17,692,822
印刷紙收		1,916,072		2,191,186	2,018,228
口,臨時收		49,096		56,801	72,647
官有物拂下代		79,552		281,942	371,081
通		606,547		205,167	913,242
金資金特別會計及受入		301,502		164,170	112,976
		17,527		40,997	33,424
		50,000			

科 目	年 別	昭 和 15 年 (1940)	昭 和 16 年 (1941)	昭 和 17 年 (1942)	昭 和 18 年 (1943)
前年度利益金計		237,1518	—	17,116,834	766,842
出 常 部 計		13,382,112	—	8,762,978	21,043,547
一般行政ニ関スル経費		5,836,249	—	1,522,063	9,598,165
教育及教化ニ関スル経費		1,249,680	—	1,292,946	1,801,830
警察及衛生ニ関スル経費		865,779	—	714,811	1,581,544
法 院 ノ 経 費		571,083	—	94,546	770,750
通信事業ニ関スル経費		81,192	—	2,537,221	82,525
氣象観測ニ関スル経費		1,566,394	—	638,115	2,691,491
航空ニ関スル経費		560,111	—	690,532	293,650
産業及試験事業ニ関スル経費		—	—	686,565	664,925
発電事業ニ関スル経費		585,717	—	116,442	723,276
國債整理基金入金		83,706	—	4,247	116,442
國特別給支負担金		4,350	—	117,475	4,198
豫 備 社 費 計		102,900	—	64,015	145,500
南 洋 神 部 費 計		36,337	—	250,000	88,034
口, 南 洋 神 社 造 營 費 計		80,000	—	34,000	600,000
		49,000	—	8,353,856	34,000
		7,545,863	—	83,000	11,445,382
		—	—	—	83,000

營 繕 土 木 費	678,907	—	686,858	1,039,131
獎勵及補助費	1,362,433	—	1,112,970	787,385
地方費財政援助費	200,000	—	224,280	220,000
調 査 費	152,507	—	98,149	64,577
南洋開港事業費	4,267,546	—	2,873,888	4,050,088
國民精神總動員費	10,000	—	—	—
國家總動員諸費	58,824	—	—	—
國民登錄諸費	9,963	—	—	—
物價並物資需給調整費	51,077	—	—	—
貯蓄獎勵費	19,334	—	—	—
外國為替管理費	15,222	—	—	—
防災訓練費	700,000	—	—	—
一般會計財源繰入費	—	—	1,000,000	2,500,000
臨時經濟統制諸費	—	—	327,012	321,206
食糧対策施設費	—	—	602,899	481,102
國民奉公運動費	—	—	100,000	100,000
臨時氣象觀測費	—	—	81,588	13,990
臨時郵便取扱費	—	—	17,114	8,638
臨時諸手当費	—	—	240,515	579,837
防空緊急施設費	—	—	391,435	368,425
臨時対策施設費	—	—	500,000	800,000
戰爭保險臨時諸費	—	—	14,148	—

17 継続事業費一覽表 (單位円)

費目	総工費額	年割						
		昭和13年度支出額	昭和14年度支出額	昭和14年度(1939)	同15年度(1940)	同16年度(1941)	同17年度(1942)	同18年度(1943)
南洋開發事業費	7,073,754	2,496,820	4,576,934	1,517,000	1,366,000	864,934	370,000	459,000
・パラボ港修築費	2,730,561	1,441,627	1,288,934	423,000	423,000	442,934	—	—
・サイパン港拡張費	1,920,000	316,000	1,604,000	324,000	229,000	222,000	370,000	459,000
・コロール島ヤカル島連絡道工事業費	319,193	189,193	130,000	130,000	—	—	—	—
・コロール島バベルダオ島連絡道路工事業費	574,000	150,000	424,000	200,000	224,000	—	—	—
・パラボ上水道新設費	540,000	230,000	310,000	150,000	160,000	—	—	—
・サイパン上水道新設費	650,000	70,000	580,000	190,000	190,000	200,000	—	—
熱帯産業研究所移轉改築費	340,000	100,000	240,000	100,000	140,000	—	—	—

18 南洋廳特別会計予算 (單位円)

年度	区別	歳入			歳出		
		經常部	臨時部	計	經常部	臨時部	計
大正11年 (1922)		280,651	6,259,857	6,540,508	1,708,614	3,684,861	5,393,475
大正12年 (1923)		1,217,931	3,030,800	4,248,731	2,765,760	1,482,971	4,248,731
大正13年 (1924)		1,428,828	3,173,204	4,602,032	2,798,859	1,803,173	4,602,032
大正14年 (1925)		不明	—	—	—	—	—

大正15年 (1926)	2,399,369	4,608,959	7,008,328	2,310,119	1,638,464	3,948,574
昭和2年 (1927)	2,731,314	4,867,667	7,598,981	2,322,138	2,295,431	4,617,569
昭和3年 (1928)	2,834,213	4,794,669	7,628,882	2,444,201	2,089,909	4,534,110
昭和4年 (1929)	2,839,480	4,606,636	7,446,116	2,410,638	2,081,361	4,501,999
昭和5年 (1930)	3,402,321	3,965,091	7,367,412	2,364,382	2,294,463	4,658,845
昭和6年 (1931)	4,699,058	2,999,531	7,698,589	2,432,547	2,143,889	4,576,436
昭和7年 (1932)	4,589,251	425,168	5,014,419	2,665,336	2,349,083	5,014,419
昭和8年 (1933)	5,087,543	541,375	5,628,918	2,859,974	2,768,944	5,628,918
昭和9年 (1934)	5,349,613	286,062	5,635,675	2,978,016	2,657,659	5,635,675
昭和10年 (1935)	5,827,266	150,430	5,977,696	3,156,214	2,821,482	5,977,696
昭和11年 (1936)	6,647,823	740,235	7,388,058	3,522,595	3,865,463	7,388,058
昭和12年 (1937)	7,282,724	1,399,758	8,682,482	3,810,590	4,871,892	8,682,482
昭和13年 (1938)	9,408,201	496,270	9,904,471	4,548,021	5,126,648	9,674,669
昭和14年 (1939)	11,401,502	4,844,870	16,246,372	4,681,046	5,112,501	9,793,547
昭和15年 (1940)	12,775,565	606,547	13,382,112	5,836,249	7,845,863	13,682,112
昭和16年 (1941)	不明	不明	不明	—	—	—
昭和17年 (1942)	18,729,211	205,167	18,934,378	8,762,978	8,353,856	17,116,834
昭和18年 (1943)	20,156,229	913,242	21,068,471	9,598,165	11,445,382	21,043,547
昭和19年 (1944)	不明	不明	不明	—	—	—
昭和20年 (1945)	不明	不明	不明	—	—	—
昭和21年 (1946)	不明	不明	不明	—	—	—

19 國庫補助金累年表

年度	金額	摘要	要
大正11年 (1922)	5,239,960	内 1,938,878 円は繰越採鉱事業其他買収費	
大正12年 (1923)	3,000,000		
大正13年 (1924)	2,780,203		
大正14年 (1925)	1,800,000		
大正15年 (1926)	1,800,000		
昭和元年 (1927)	1,800,000		
昭和2年 (1928)	1,800,000		
昭和3年 (1928)	1,800,000		
昭和4年 (1929)	1,500,000		
昭和5年 (1930)	1,000,000		
昭和6年 (1931)	272,459	昭和7年度より財政獨立し補充金の必要を認めざるに至る	
計	20,992,622		

20 所得、税

年次, 支別	総 数		第 一 種		第 二 種		第 三 種	
	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
昭和13年 (1938)	1,006	403,634	13	346,410	19	62	974	61,572
昭和14年 (1939)	2,710	637,622	49	550,952	110	8,094	2,551	78,576

1. 円位未満切捨 2. 各税額は調定済額を掲ぐ 第一種及第二種は調定済額を掲ぐ第三種は當所決定額を掲ぐ

21 煙草税及法人営業收益税

年 次	煙 草 税		法 人 営 業 收 益 税	
	人 員	税 額	人 員	税 額
昭和13年 (1938)	434	229,483	12	96,299
昭和14年 (1939)	371	263,224	45	166,627

1, 調定済額掲ぐ 2, 円位未満切捨

22 鉱 区 税

年 次	税額總數		サイパン支廳		ヤップ支廳		ペラオ支廳		トラツク支廳		ボナペ支廳		ヤルー支廳	
	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	1	76,000	—	—	—	—	1	76,000	—	—	—	—	—	—
昭和7年 (1932)	1	143,900	—	—	—	—	1	143,000	—	—	—	—	—	—
昭和12年 (1937)	1723	586,270	5	6,495,720	4	1,304,600	815	785,950	—	—	—	—	—	—

23 通行税, 利益配当税及臨時利益配当税

年 次, 支 別	通 行 税		利 益 配 当 税		臨 時 利 益 配 当 税	
	人 員	税 額	人 員	金 額	人 員	金 額
昭和13年 (1938)	—	32,986	—	10,435	340	62,536
昭和14年 (1939)	—	35,615	—	12,499	7	162,100

2. 調定済額を掲ぐ 2. 円位未満切捨

24 関 税

1 尺 目

年次	総数		サイパン支廳		ヤツア支廳		パラオ支廳		トラツク支廳		ホナベ支廳		ヤルート支廳	
	人員	税額	人員	税額	人員	税額	人員	税額	人員	税額	人員	税額	人員	税額
大正11年 (1922)	?	96,577,650 ^円	?	76,211,180 ^円	?	202,930 ^円	?	1,426,470 ^円	?	2,987,880 ^円	?	6,236,680 ^円	?	9,512,510 ^円
昭和2年 (1927)	?	21,040,340	?	15,855,970	—	—	?	674,160	?	280,060	—	—	?	4,230,150
7年 (1932)	769	40,428,830	—	50124,391,260	—	—	131	5,326,810	70	5,760,950	3	962,520	62	3,987,290
12年 (1937)	906	101,785,800	—	21041,182,600	—	—	39133,018,950	9511,134,980	97	7,176,640	113	9,272,630		
14年 (1939)	285	166,786,000	—	3568,338,000	—	—	14066,807,000	4115,197,000	5716,351,000	12	93,000			

25 出 港 税

年 次	総 数	税 額	砂		糖		蜜	
			移 出 数 量	税 額	移 出 数 量	税 額	移 出 数 量	税 額
大正11年 (1922)	7,988,200 円	115,900 斤	7,988,200 円	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	1,017,042,280	18,789,320	958,538,530	—	—	—	—	—
7年 (1932)	3,090,000,660	68,539,065	2,965,358,950	552,760	4,998,680	—	—	—
12年 (1937)	5,256,260,970	125,611,355	5,107,300,930	1,370,883	13,706,320	—	—	—
14年 (1939)	8,210,912,000	—	8,064,186,000	290,425	4,047,000	—	—	—

25 出 港 税 (續)

酒	精 糖	移 出 数 量	税 額	酒	精 糖	移 出 数 量	税 額	其 他	移 出 数 量	税 額
石	—	—	—	石	—	—	—	—	—	—
345,533	58,467,670	?	36,080	—	—	—	—	—	—	—
452,351	68,641,880	?	51,001,150	—	—	—	—	—	—	—
265,191	44,870,370	800,050	90,331,250	—	—	—	—	—	—	—
—	—	909	126,308,000	—	—	—	—	—	—	—

1. 調定済額を掲ぐ 2. テニアン、ロダの分はサイパンに含まる

26 郵便電信

年次	総数	本廳	サイパン郵便局	テニアン郵便局
イ 総				
大正 11 年 (1922)	43,563,380	?	?	—
昭和 2 年 (1927)	94,509,805	489,540	31,369,075	—
" 7 年 (1932)	150,735,900	—	67,677,710	—
" 12 年 (1937)	414,607,525	29,251,980	110,075,950	30,747,095
" 14 年 (1939)	643,080,000	77,764,000	127,143,000	41,728,000
ロ 郵便				
大正 11 年 (1922)	?	—	?	—
昭和 2 年 (1927)	86,095,325	—	28,702,585	—
" 7 年 (1932)	126,078,260	—	56,051,980	—
" 12 年 (1937)	310,103,125	28,716,830	69,817,220	30,682,575
" 14 年 (1939)	386,753,000	76,546,000	72,048,000	22,628,000
ハ 電信				
大正 11 年 (1922)	?	?	?	—
昭和 2 年 (1927)	2,788,190	—	226,490	—
" 7 年 (1932)	4,097,750	—	955,430	—
" 12 年 (1937)	74,033,640	535,150	22,358,510	64,520
" 14 年 (1939)	163,484,000	1,210,000	30,977,000	9,697,000
ニ 電話				
大正 11 年 (1922)	—	?	—	—
昭和 2 年 (1927)	5,626,290	489,540	2,440,000	—
" 7 年 (1932)	20,559,890	—	10,670,300	—
" 12 年 (1937)	30,470,760	—	17,900,220	—
" 14 年 (1939)	92,838,000	8,000	24,118,000	9,403,000

及 電話 収入 (租税外収入総数)

ヤップ郵便局	パラオ郵便局	アンガウル郵便局	トラツク郵便局	ホナベ郵便局	ヤルーツ郵便局
数					
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
6,431,210	29,463,790	3,571,870	6,090,530	8,575,790	8,518,000
7,333,980	42,998,070	3,787,800	10,529,030	11,031,670	7,877,640
10,909,040	144,850,800	7,418,960	41,486,080	28,258,730	11,608,890
19,225,000	236,243,000	12,397,000	43,723,000	69,587,000	15,270,000
切手類収入 (同上内訳)					
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
4,675,310	26,194,580	3,571,870	6,027,110	8,562,430	8,361,440
4,916,890	32,607,040	3,768,769	10,526,630	10,996,330	7,210,630
7,289,210	112,362,200	7,358,310	30,376,620	16,738,590	6,761,600
6,315,000	130,624,000	12,371,000	25,701,000	31,955,000	8,570,000
収入 (同上内訳)					
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
1,755,900	572,460	—	63,420	13,360	156,560
2,417,090	510,440	19,040	2,400	35,340	167,010
3,619,830	19,918,060	60,650	11,109,460	11,520,170	4,847,290
12,910,000	67,135,000	26,000	11,658,000	23,171,000	6,700,000
収入 (同上内訳)					
—	—	—	—	—	—
—	2,696,750	—	—	—	—
—	9,889,590	—	—	—	—
—	12,570,540	—	—	—	—
—	38,484,000	—	6,364,000	14,461,000	—

27 官 有 物

年次	総数	本廳	サイパン支廳	ヤップ支廳	
イ 総					
大正11年 (1922)	2,686,660	?	?	?	
昭和2年 (1927)	7,560,580	—	938,790	285,130	
" 7年 (1932)	37,465,000	430,960	20,030,490	3,513,060	
" 12年 (1937)	121,061,490	30,000	74,476,250	4,376,390	
" 14年 (1939)	245,497,000	—	159,623,000	11,372,000	
ロ、地 所					
大正11年 (1922)	2,686,660	?	?	?	
昭和2年 (1927)	6,403,670	—	916,790	258,480	
" 7年 (1932)	32,533,070	—	19,914,490	3,135,020	
" 12年 (1937)	110,965,560	—	74,126,250	3,716,390	
" 14年 (1939)	223,579,000	—	159,166,000	10,440,000	
ハ 建 物					
年次	総数	本廳	サイパン支廳	ヤップ支廳	パラオ支廳
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	915,910	—	22,000	26,650	18,000
" 7年 (1932)	1,200,470	—	116,000	13,040	25,000
" 12年 (1937)	1,042,430	30,000	—	9,000	24,000
" 14年 (1939)	1,011,000	—	20,000	17,000	89,000
ニ 物 品					
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	241,000	—	—	—	—
" 7年 (1932)	3,731,460	430,960	—	365,000	1,012,000
" 12年 (1937)	9,053,500	—	350,000	651,000	5,862,500
" 14年 (1939)	8,356,000	—	437,000	915,000	3,739,000

貸 下 料 (租税外収入)

パラオ支廳	トラック 支 廳	ホナベ支廳	ヤルーツ 支 廳	探 鉱 所	産業試験場	
数						
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	
1,262,320	696,330	1,770,370	2,458,060	149,580	—	
3,805,060	1,173,460	4,830,930	3,361,330	304,710	15,000	
18,265,390	2,438,470	13,488,070	7,985,750	—	—	
34,819,000	3,523,000	26,731,000	9,429,000	—	—	
貸 下 料 (同上内訳)						
?	?	?	?	?	?	
1,244,320	696,330	1,437,630	1,814,540	35,580	—	
2,768,060	653,460	4,007,950	2,005,880	48,210	—	
12,378,890	1,772,970	12,196,590	6,773,300	—	—	
21,952,000	2,672,000	21,319,000	8,030,000	—	—	
貸 下 料 (同上内訳)						
トラック 支 廳	ホナベ支廳	ヤルーツ 支 廳	探鉱所	産業 試験場	電燈施設 貸 下 料	水 面 使用料
円	円	円	円	円	円	円
—	112,740	643,520	93,000	—	—	—
25,000	187,980	725,450	93,000	15,000	—	—
30,500	226,480	722,450	—	—	—	—
43,000	119,000	723,000	—	—	12,312,000	239,000
貸 下 料 (同上内訳)						
—	—	—	—	—	—	—
—	220,000	—	21,000	—	—	—
495,000	635,000	630,000	163,500	—	—	—
635,000	1,065,000	490,000	—	—	—	—
720,000	1,880,000	665,000	—	—	—	—

28 電 燈

年 次	総 数	本 廳	サイパン支 廳	ヤップ支 廳	トラック支 廳
大正11年(1922)	円	円	円	円	円
昭和2年(1927)	13,292,130	9,752,680	—	—	1,391,860
" 7年(1932)	69,251,390	22,721,170	24,809,370	2,742,850	5,416,380
" 12年(1937)	141,191,580	—	49,699,400	3,664,820	7,842,230
" 14年(1939)	91,183,000	—	18,512,000	4,718,000	11,679,000

29 印 紙

年 次	総 数	サイパン郵便局	テニアン郵便局	ヤップ郵便局
大正11年(1922)	円 ?	円 ?	円	円 ?
昭和2年(1927)	9,919,205	3,643,905	—	42,980
" 7年(1932)	14,602,400	7,366,750	—	936,540
" 12年(1937)	58,340,445	30,794,330	894,905	835,410
" 14年(1939)	58,385,000	12,082,000	846,000	1,031,000

30 懲 罰 及

年 次	総 数	サイパン支 廳	ヤップ支 廳	パラオ支 廳	トラック支 廳
総					
大正11年(1922)	2,034,750	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
昭和2年(1927)	402,100	—	351,000	—	—
" 7年(1932)	5,540	—	—	—	—
" 12年(1937)	1,884,440	—	—	—	—
" 14年(1939)	1,126,000	75,000	8,000	—	—

31 免 許 及

年 次	総 数	本 廳	東京出張所	サイパン支 廳	ヤップ支 廳	パラオ支 廳
総						
大正11年(1922)	1,457,000	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
昭和2年(1927)	2,430,600	2,000	—	918,100	20,000	572,400
" 7年(1932)	2,308,200	—	—	1,614,400	—	302,800
" 12年(1937)	8,170,000	—	—	2,454,500	310,000	3,520,000
" 14年(1939)	8,540,000	—	—	4,504,000	314,000	1,312,000

收 入 (租税外収入)

ボナベ支 廳	ヤルート支 廳	サイパン郵便局	ヤツブ郵便局	ボナベ郵便局	採 鉱 所
円	円	円	円	円	円
—	409,990	40,000	20,500	—	1,677,100
5,791,080	5,211,960	140,260	—	—	2,418,320
14,592,950	6,166,260	—	—	—	—
—	6,274,000	—	—	—	—

收 入 (租税外収入)

パラオ郵便局	アングウ郵便局	トラック郵便局	ボナベ郵便局	ヤルート郵便局
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
3,746,920	12,520	748,490	537,680	1,186,710
3,922,770	60,120	450,200	1,561,160	306,860
18,290,490	347,340	2,347,810	3,308,980	1,521,180
36,828,000	81,000	3,870,000	3,135,000	512,000

没 收 金 (租税外収入)

ボナベ支 廳	ヤルート支 廳	高等法院	サイパン地方法院	パラオ地方法院	ボナベ地方法院
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
—	—	20,000	31,000	—	—
—	—	—	5,540	—	—
—	—	1,809,350	75,090	—	—
—	—	1,034,000	9,000	—	—

手 数 料 (総 数)

トラック支 廳	ボナベ支 廳	ヤルート支 廳	サイパン郵便局	パラオ郵便局	高等法院	サイパン地方法院	ボナベ地方法院
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
158,000	750,000	10,000	100	—	—	—	—
21,200	240,000	—	2,300	0,600	51,000	53,600	22,300
390,000	1,493,900	—	1,600	—	—	—	—
1,070,000	1,332,000	—	2,000	—	—	—	6,000

32 雑

年 次	総 数	本 廳	サイバン支廳	ヤツブ支廳
大正11年(1922)	24,522,540	円?	円?	円?
昭和2年(1927)	14,635,750	11,844,850	882,300	784,000
" 7年(1932)	3,652,630	1,735,680	1,126,790	—
" 12年(1937)	78,916,780	2,335,050	55,465,130	9,900
" 14年(1939)	29,395,000	2,612,000	7,615,000	642,000

32 雑

年 次	パラオ郵便局	アンガウル郵便局	トラツク郵便局	ボナベ郵便局
大正11年(1922)	円?	円?	円?	円?
昭和2年(1927)	—	—	—	—
" 7年(1932)	—	—	122,070	—
" 12年(1937)	—	—	5,650	88,340
" 14年(1939)	—	14,000	397,000	417,000

32 雑

年 次	サイバン実業学校	ヤツブ醫院	アンガウル醫院
大正11年(1922)	円?	円?	円?
昭和2年(1927)	—	—	—
" 7年(1932)	—	—	—
" 12年(1937)	1,110,000	41,110	0,800
" 14年(1939)	3,855,000	37,000	3,000

昭和14年授業料 9,462 円煙草封緘紙賣拂代ヲ含ム

入 (租税外收入)

パラオ支廳	トラツク支廳	ボナベ支廳	ヤルーツ支廳	サイバン郵便局	ヤツブ郵便局
円?	円?	円?	円?	円?	円?
983,200	—	137,000	—	—	—
22,800	15,500	61,700	—	1,610	—
17,598,140	7,840	1,345,440	321,340	116,610	161,730
547,000	1,936,000	2,828,000	471,000	818,000	15,000

入 (租税外收入) (続)

ヤルーツ郵便局	トラツク醫院	探 鉱 所	サイバン地方法院	ボナベ地方法院	高等法院
円?	円?	円?	円?	円?	円?
—	—	—	4,400	—	—
—	—	548,480	—	18,000	—
62,370	53,130	—	46,680	—	—
113,000	80,000	—	11,000	—	—

入 (租税外收入) (続)

ボナベ醫院	ヤルーツ醫院	サイバン醫院	パラオ醫院	サイバン高等女学校
円?	円?	円?	円?	円?
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
67,480	80,040	—	—	—
407,000	114,000	383,000	473,000	5,607,000

33 官 有 物

年 次	総 数	本 廳	サイパン支廳	ヤップ支廳
イ 総				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	7,912,870	1,920,870	956,420	713,840
" 7年(1932)	12,533,290	2,452,200	1,962,910	536,170
" 12年(1937)	15,438,190	1,454,230	2,283,260	346,360
" 14年(1939)	175,135,000	644,000	12,540,000	824,000

33 官 有 物

年 次	パラオ郵便局	アンガウル郵便局	トラック郵便局	ボナベ郵便局
イ 総				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	118,400	1,050	55,000	56,700
" 7年(1932)	485,250	34,200	168,960	—
" 12年(1937)	132,240	29,500	—	245,980
" 14年(1939)	13,000	—	—	—

33 官 有 物

年 次	高等法院	サイパン地方法院	パラオ地方法院	ボナベ地方法院
イ 総				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	258,370	—	—	—
" 7年(1932)	247,960	8,830	—	10,900
" 12年(1937)	—	7,000	—	—
" 14年(1939)	774,000	—	—	—

拂 下 代

パラオ支廳	トラック支廳	ボナベ支廳	ヤルート支廳	サイパン郵便局	ヤップ郵便局
数					
円	円	円	円	円	円
182,400	703,800	222,000	233,760	11,750	8,800
423,350	1,247,800	639,910	473,840	844,490	705,300
3,815,140	1,302,840	1,392,890	575,780	427,700	450,000
129,028,000	8,842,000	14,914,000	763,000	—	—

拂 下 代 (続)

ヤルート郵便局	パラオ醫院	アンガウル醫院	トラック醫院	ボナベ醫院	ヤルート醫院
数					
円	円	円	円	円	円
39,500	—	56,750	—	15,000	—
86,300	—	—	410,400	—	—
67,200	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—

拂 下 代 (続)

探 鉱 所	産業試験場	熱 帯 産 業 研 究 所	水産試験場	実業学校
数				
円	円	円	円	円
318,450	2,040,010	—	—	—
670,830	1,423,690	—	—	—
—	—	2,514,000	770,920	—
—	—	2,517,000	4,276,000	—

33 官 有 物

年 次	総 数	本 廳	サイパン支廳	ヤップ支廳
ロ 物 品				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	7,912,870	1,920,870	956,420	713,840
" 7年(1932)	12,533,290	2,452,200	1,662,910	536,170
" 12年(1937)	15,438,190	1,454,230	2,283,260	346,360
" 14年(1939)	102,621,000	644,000	12,540,000	824,000

33 官 有 物

年 次	パラオ郵便局	アンガウル郵便局	トラツク郵便局	ボナベ郵便局
ロ 物 品				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	118,400	1,050	55,000	56,700
" 7年(1932)	485,250	34,200	168,960	—
" 12年(1937)	132,240	29,500	—	245,980
" 14年(1939)	13,000	—	—	—

33 官 有 物

年 次	高等法院	サイパン地方法院	パラオ地方法院	ボナベ地方法院
ロ 物 品				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	258,370	—	—	—
" 7年(1932)	247,960	8,830	—	10,900
" 12年(1937)	—	7,000	—	—
" 14年(1939)	774,000	—	—	—

昭和12年サイパン醫院 8,150,000 円を含む

拂 下 代 (続)

パラオ支廳	トラツク支廳	ボナベ支廳	ヤルーツ支廳	サイパン郵便局	ヤップ郵便局
拂 下 代					
円	円	円	円	円	円
182,400	703,800	222,000	233,760	11,750	8,800
423,350	1,247,800	639,910	473,840	844,490	705,300
3,815,140	1,302,840	1,392,890	575,780	42,700	450,000
56,514,000	8,842,000	14,914,000	793,000	—	—

拂 下 代 (続)

ヤルーツ郵便局	パラオ醫院	アンガウル醫院	トラツク醫院	ボナベ醫院	ヤルーツ醫院
拂 下 代					
円	円	円	円	円	円
39,500	—	56,750	—	15,000	—
86,300	—	—	410,000	—	—
67,200	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—

拂 下 代 (続)

探 鉱 場	産業試験場	熱 帯 産 業 研 究 所	水産試験場	実 業 学 校
拂 下 代				
円	円	円	円	円
318,450	2,040,010	—	—	—
670,830	1,423,690	—	—	—
—	—	2,514,000	770,920	—
—	—	2,517,000	4,276,000	—

33 官 有 物

年 次	総 数	本 廳	サイパン支廳	ヤップ支廳
ハ 船 船 土 地				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1927)	—	—	—	—
" 7年(1932)	—	—	—	—
" 12年(1937)	—	—	—	—
" 14年(1939)	—	—	—	—

33 官 有 物

年 次	パラオ郵便局	アンガウル郵便局	トラック郵便局	ボナベ郵便局
ハ 船 船 土 地				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1929)	—	—	—	—
" 7年(1937)	—	—	—	—
" 12年(1937)	—	—	—	—
" 14年(1939)	—	—	—	—

33 官 有 物

年 次	高等法院	サイパン地方法院	パラオ地方法院	ボナベ地方法院
ハ 船 船 土 地				
大正11年(1922)	円	円	円	円
昭和2年(1929)	—	—	—	—
" 7年(1932)	—	—	—	—
" 12年(1937)	—	—	—	—
" 14年(1939)	—	—	—	—

拂 下 代 (続)

パラオ支廳	トラック支廳	ボナベ支廳	ヤルーツ支廳	サイパン郵便局	ヤップ郵便局
建 物 拂 下 代					
円	円	円	円	円	円
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—

拂 下 代 (続)

ヤルーツ郵便局	パラオ醫院	アンガウル醫院	トラック醫院	ボナベ醫院	ヤルーツ醫院
建 物 拂 下 代					
円	円	円	円	円	円
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—

拂 下 代 (続)

探 鉱 場	産業試験場	熱帯産業研究所	水産試験場	実業学校
建 物 拂 下 代				
円	円	円	円	円
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—

34 林 業

年 次	総 数		数	
	総 数	コブラ拂下代	雑 収 入	
大正11年(1922)	24,385,820	円 ?	円 ?	
昭和2年(1927)	78,279,330	73,713,840	4,565,490	
" 7年(1932)	22,017,200	11,913,240	10,103,960	
" 12年(1937)	19,675,090	2,370,700	17,304,390	
" 13年(1938)	52,897,000	—	—	

34 林 業

年 次	パラオ支廳		トラック支廳	
	コブラ拂下代	雑 収 入	コブラ拂下代	雑 収 入
大正11年 (1922)	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
昭和2年 (1927)	25,8000	1,743,180	438,820	248,570
" 7年 (1932)	127,910	1,717,230	675,000	872,630
" 12年 (1937)	—	3,774,710	1,615,930	2,011,210
" 13年 (1938)	—	6,888,000	—	1,588,000

35 医 院

年 次	総 数	サイバン醫院	ヤツブ醫院
大正11年(1922)	24,236,220	円 ?	円 ?
昭和2年(1927)	63,042,660	24,123,610	2,414,300
" 7年(1932)	88,407,430	34,723,340	3,002,710
" 12年(1937)	163,168,850	32,430,550	3,663,810
" 14年(1939)	189,419,000	31,730,000	8,147,000

收 入 (租税外収入)

サイバン支廳		ヤツブ支廳	
コブラ拂下代	雑 収 入	コブラ拂下代	雑 収 入
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
45,588,400	461,050	10,283,590	33,400
5,854,240	6,979,790	264,560	—
—	5,997,950	754,770	132,980
—	8,824,000	—	31,142,000

收 入 (同上内訳) (続)

ボナベ支廳		ヤルート支廳	
コブラ拂下代	雑 収 入	コブラ拂下代	雑 収 入
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
11,100,440	2,079,290	6,045,790	—
540,800	1,034,310	4,450,730	—
—	5,307,540	—	—
—	4,452,000	—	—

收 入 (租税外収入)

パラオ醫院	アンガウル醫院	トラック醫院	ボナベ醫院 (クサイ分院ヲ含ム)	ヤルート醫院
円 ?	円 ?	円 ?	円 ?	円 ?
13,212,300	2,997,360	4,913,420	7,572,670	7,809,000
21,187,250	2,707,050	9,171,390	9,037,370	8,578,320
70,512,910	4,178,300	19,931,700	18,618,200	13,833,380
68,528,000	7,659,000	21,885,000	38,069,000	13,401,000

36 非 島 民

年 次	総 数		1 等 50 円	
	人 員	税 額	人 員	税 額
大正11年(1922)	—	—	—	—
昭和2年(1927)	—	17,684,000	—	—
" 7年(1932)	(1,280) 6,720	28,024,500	10	500,000
" 12年(1937)	(963) 8,199	45,603,500	(1) 33	1,650,000

36 非 島 民

年 次	6 等 10 円		7 等 7 円	
	人 員	税 額	人 員	税 額
大正11年(1922)	—	—	—	—
昭和2年(1927)	—	—	—	—
" 7年(1932)	(36) 276	2,940,000	(62) 514	3,815,500
" 12年(1937)	(56) 646	6,740,000	(80) 938	6,846,000

1. 括弧内は半期納税人員を示す 2. 本表は調定額を示す 3. 人員に対し

37 島 民

年次	総数		40 円		25 円		
	人員	物納コブラ数量	税額	人員	税額	人員	税額
大正11年(1922)	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年(1927)	—	—	73,926,000	—	—	—	—
" 7年(1932)	(13) 9,573	230.5	51,019,750	140,000	125,000	—	—
" 12年(1937)	9,814	239.0	85,650,100	140,000	125,000	—	—

37 島 民

年 次	6 円		5 円		4 円		3 円 60 銭	
	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
大正11年(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—
" 7年(1932)	—	—	3,186	15,930,000	(13) 1,158	4,658,000	—	—
" 12年(1937)	1,336	8,016,000	2,045	10,225,000	870	3,480,000	771	2,775,600

1. 括弧内は半期納税人員を示す 2. 本表は調定額を示す

人 頭 税

2 等 40 円		3 等 30 円		4 等 20 円		5 等 15 円	
人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—
6	240,000	16	480,000	(3) 44	910,000	(8) 97	1,515,000
(1) 27	1,100,000	(2) 57	1,740,000	(8) 82	1,720,000	(22) 228	3,585,000

人 頭 税 (続)

8 等 5 円		9 等 4 円		10 等 3 円		11 等 2 円	
人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—
(862) 2,849	21,400,000	(139) 658	2,910,000	(100) 594	1,932,000	(70) 656	1,382,000
(114) 1,771	9,140,000	(109) 884	3,754,000	(293) 1,545	5,074,500	(278) 1,988	4,254,000

税額符合せざるものあるは滞納者に対する差押物件の賣却代あるに因る

人 頭 税

20 円		15 円		10 円		8 円		7 円	
人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	140,000	8	120,000	33	330,000	—	—	4	28,000
6	120,000	5	75,000	36	360,000	—	—	23	161,000

人 頭 税 (続)

3 円		2 円		1 円		物納コブラ	
人 員	税 額	人 員	税 額	人 員	税 額	数量	税 額
—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—
4,013	12,039,000	989	1,978,000	173	173,000	230.5	15,558,750
4,300	12,900,000	69	178,000	331	331,000	239.0	46,963,500

38 南洋群島地方費歲入歲出予算表

科目	年度制	昭和13年(1938)	昭和14年(1939)	昭和15年(1940)	昭和16年(1941)	昭和17年(1942)
歲入總額	部	455,842	971,014	1,281,323	1,738,968	2,195,157
第1種所得稅附加稅	部	248,531	633,003	911,072	1,494,236	1,746,341
第3種營業收益稅附加稅	部	137,766	209,931	345,536	260,288	268,665
法人營業收益稅附加稅	部				30,291	58,676
個人所得稅附加稅	部				80,161	75,600
法人所得稅附加稅	部				46,518	35,329
個人所得稅附加稅	部				19,503	34,149
酒稅	部	110,555	147,600	280,016	346	280
煙稅	部				67,904	64,299
賭博稅	部				366,394	768,708
遊樂稅	部	100	35,142	24,221	25,015	59,770
興業稅	部		204,548	211,765	211,765	211,765
使用料及手数料	部		35,407	48,227	382,461	161,924
醫院收入	部	110	375	1,257	3,590	7,176
雜收入	部	207,311	338,011	370,251	244,732	448,816
國庫補助金	部	100,000	100,000	200,000	157,800	224,280
寄附金	部	107,311	107,311	1	100	100
水道工事費收入	部			57,150	53,832	68,436
地方債	部		130,700	113,100		156,000

歲出總額	部	455,842	971,014	1,281,359	1,738,968	2,195,157
神地教育少年體力養成費	部	111,676	338,650	501,280	651,304	910,569
出經社職員費	部	210	240	330	540	780
救護費	部	24,350	154,065	238,371	153,506	197,078
消防費	部	69,637	73,274	113,078	157,494	194,659
救護費	部					2,208
救護費	部					15,407
救護費	部					5,000
救護費	部					372,360
救護費	部					8,700
救護費	部					76,951
救護費	部					7,687
救護費	部					3,281
救護費	部					24,000
救護費	部					2,458
救護費	部					1,284,588
救護費	部					642,898
救護費	部					102,236
救護費	部					4,000
救護費	部					17,381
救護費	部					430,731
救護費	部					22,002

科目	年度別	昭和13年(1938)	昭和14年(1939)	昭和15年(1940)	昭和16年(1941)	昭和17年(1942)
医 院 費 当 費	費 手 收 費	円	円	円	円	円
医 院 時 家 族 手 收 費	地 建 物 買 收 費	—	—	—	12,677 3,000	8,660 5,000
土 地 建 物 買 收 費		—	—	—	—	51,680

39 地 方 費 歳 入 歳 出 決 算 表

科目	年度別	昭 和 13 年 (1938)	昭 和 14 年 (1939)
歳 入	歳 入 総 額	368,741 268,741 100,000	995,606 (57,595 338,011
歳 出	歳 出 総 額	331,982 100,983 230,999	762,936 310,839 452,097

40 地 方 費 ・ 税 (1)

支 廳 別	年 度	総 額	国 税 附 加 税				独 立 税			
			第1種所得附加税	第3種所得法人営業收 益税附加税	釐 産 税 附加税	法人所得割	個人所得割	入 頭 税	遊 興 税	
サイパン	13(1938)	83,305	42,591	1,819	22,825	109	—	2,729	4,135	9,097
テニアン	"	8,477	—	263	—	—	—	1,933	—	6,281
ロ タ	"	4,767	—	115	—	760	—	792	885	2,215
ヤ ツ プ	"	7,402	—	79	—	664	—	510	5,322	827
バラオ	"	90,314	36,692	3,326	6,064	5,426	—	3,226	6,437	29,143
トラツク	"	14,999	—	192	—	—	—	817	11,177	2,813
ボナベ	"	15,847	—	240	—	—	—	992	9,367	5,248
ヤルート	"	43,981	—	129	—	—	—	465	42,308	1,079
計	"	269,092	79,283	6,163	28,889	6,959	—	11,464	79,631	56,703

註 調定額ヲ掲グ円位未満切捨

40 地 方 費 税 (2)

支 廳 別	年 度	総 額	国 税 附 加 税				独 立 税			遊 興 食 飲 税
			第1種所得 税 附 加	第2種所得 税 附 加	法人営業收 入 税 附 加	鋳 産 税 附 加	法人所得割	個人所得割	人 頭 税	
サイパン	14(1939)	148,786	69,542	4,488	45,955	289	24	4,100	3,553	2,251
ラニアン	"	14,154	—	815	—	—	—	3,733	—	18,584
タロ	"	4,791	—	194	—	1,186	—	762	891	1,330
ヤップ	"	13,866	—	330	—	4,079	—	523	4,990	8,276
バラオ	"	168,730	72,940	8,195	9,392	13,566	—	4,262	6,913	1,375
トラツク	"	18,513	—	436	—	—	—	889	11,415	273
ボナベ	"	30,037	88	821	49	—	—	1,138	10,226	3,671
ヤルート	"	31,334	—	362	—	—	—	576	27,966	7,326
計	"	430,211	142,570	15,641	55,396	19,120	24	15,983	95,954	46,136
										626
										5,147
										1,336
										16,379
										259
										2,171
										13,784
										101,739

註 調額ヲ掲グ円位未満切捨

41 南 洋 群 島 に 於 ける キ リ ス ト 教 々 勢

年 次 西 暦	新 会 教				旧 会 教				学 校 教			
	布教 所数	布教 者数	信徒数	学校数	生徒 数	信徒 数	男女	女	布教 所数	布教 者数	信徒数	学校数
大正11年(1922)	26	8	8,776	3	6	126	45	81	18	26	10,855	3
昭和2年(1927)	126	99	13,503	4	19	347	200	147	24	31	13,924	6
" 7年(1932)	90	103	14,728	8	20	380	251	129	52	62	17,167	7
" 12年(1937)	90	103	22,072	7	20	235	147	88	50	58	17,188	6
" 14年(1939)	95	119	15,634	5	16	134	68	66	53	72	19,324	8

42 南 洋 群 島 に 於 ける 佛 教 々 勢

年 次	布 教 所	開 教 員	信 徒 数		邦 人	外 国 人	島 民
			總 数	男 子			
大正11年(1922)	1	1	170	—	170	—	—
昭和2年(1927)	2	2	650	—	650	—	—
" 7年(1932)	4	4	3,830	—	3,230	—	600
" 12年(1937)	9	14	40,338	—	39,810	—	528
" 14年(1939)	15	14	33,627	—	—	—	—

43 南洋群島に於ける布教者の國籍別

年次	總數	基督舊教			基督新教			佛敎		天理敎				
		西班牙人	コロンビヤ人	日本人	島民	日本人	獨乙人	瑞西人	米國人	比律賓人	歐洲人	島民	日本人	日本人
大正11年 (1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年 (1927)	47	—	32	1	—	—	4	3	1	—	1	—	2	—
〃 7年 (1932)	64	—	40	1	—	—	5	7	1	2	—	1	—	4
〃 12年 (1937)	73	—	37	—	—	—	4	13	—	—	1	1	—	3
〃 14年 (1939)	196	40	—	—	2	20	3	13	—	—	1	1	100	15

44 南洋群島に於ける天理敎々勢

年次	布教所	敎師	信徒數			數		
			總數	邦人	外國人	島民	日本人	日本人
大正11年(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—
“ 7年(1932)	2	3	103	—	25	—	—	78
“ 12年(1937)	2	3	111	—	27	—	—	84
“ 14年(1939)	3	4	153	—	—	—	—	—

45 官立醫院診療患者病類別

病 別	年 次	總 數	民 島														熱 帶 病
			流行病及傳染病	新陳代謝及全身病	精神系統疾患	感覺系統疾患	循環器疾患	呼吸器疾患	消化器疾患	泌尿器疾患	異因性疾患	皮膚及皮下組織疾患	骨及運動器疾患	畸形及兒科疾患	老 衰	外國性疾患	
大正11年(1922)	16,543	1,608	342	3,348	351	1,923	2,009	91	6	2,130	640	2	14	—	1,262	52,812	
昭和2年(1927)	19,970	1,530	376	2,873	210	3,557	3,262	241	108	1,812	758	2	53	—	1,210	143,964	
昭和7年(1932)	17,676	1,382	389	2,162	214	2,875	4,063	285	148	1,667	306	6	296	7	942	752,859	
昭和12年(1937)	22,490	2,753	1,044	3,006	241	2,633	3,417	461	149	1,941	295	13	260	19	1,367	1,707,3184	
非 島 民																	
大正11年(1922)	8,209	948	425	1,431	111	720	2,194	181	76	1,291	119	—	18	—	554	—	141
昭和2年(1927)	10,860	1,066	342	1,629	139	1,123	2,461	436	288	1,529	197	1	42	—	742	2	863
昭和7年(1932)	16,999	2,043	1,064	2,667	310	1,556	3,501	565	459	2,222	172	3	351	1	1,229	626	230
昭和12年(1937)	31,821	3,440	2,002	5,052	383	2,539	5,769	1,559	668	3,624	339	16	476	1	2,512	2,981	460

46 傳染病 (發生及死亡患者数) 括弧内は死亡を示す

年次	病別	總數		アムール赤痢		赤痢		腸チフス		痘	
		總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民
大正11年(1922)		(9) 84	—	54	—	—	—	(9) 30	—	—	—
昭和2年(1927)		(18) 165	(7) 84	(14) 146	(4) 66	—	—	(4) 15	(3) 14	(1) 1	—
昭和7年(1932)		(14) 137	(9) 120	(5) 17	(5) 43	17	17	(4) 17	(4) 17	—	—
昭和12年(1937)		(46) 208	(11) 88	(35) 120	(1) 67	2	1	(35) 118	(1) 3	2	—
昭和14年(1939)		(12) 73	(11) 69	(6) 37	(5) 34	—	—	—	—	—	—

46 傳染病 (發生及死亡患者数) 括弧内は死亡を示す、(続)

年次	病別	登疹チフス		猩紅熱		チフスリヤ		痘		バラチフス		流行性脳脊髄膜炎	
		總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民	總數	非島民
大正11年(1922)		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2年(1927)		—	—	—	—	—	—	—	—	4	4	—	—
昭和7年(1932)		—	—	—	—	(1) 4	(1) 4	(2) 39	(2) 36	3	(1) 3	—	—
昭和12年(1937)		—	—	1	—	(4) 6	(5) 8	1	3	—	—	—	—
昭和14年(1939)		—	—	—	—	(3) 22	(3) 21	(2) 5	(1) 7	—	—	—	—

47 痘施行人員

年次	總數	第1期		第2期		臨時		時	
		善感	不善感	善感	不善感	善感	不善感	善感	不善感
昭和4年(1929)	1,485	—	1,204	404	822	70	298	—	1,011
昭和7年(1932)	1,793	—	1,384	1,134	927	368	342	20	271
昭和12年(1937)	3,734	—	372	2,550	203	1,037	169	147	—
昭和14年(1939)	(1) 3,959	—	(1) 470	(1) 2,685	54	1,274	(1) 416	—	—

括弧内は外国人を示す

48 ヤップ島(本島)島民出生死亡数比較

年次	種別	ヤップ島(本島)島民出生死亡数比較											
		大正5 (1916)	6 (1917)	7 (1918)	8 (1919)	9 (1920)	10 (1921)	11 (1922)	12 (1923)	13 (1924)	14 (1925)	昭和1 (1926)	2 (1927)
出生数	75	93	82	110	62	66	72	53	48	79	80	84	68
死亡数	161	204	161	231	179	218	216	185	173	346	277	202	172
比較	111	79	121	117	152	144	132	125	267	197	118	104	118
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
1929	8	3	16	9	19	21	17	24	28	23	14	13	195
1930	16	11	8	17	13	10	13	16	9	11	19	24	167

49 ヤツノ島（本島）島民死亡者病名別

年次	病名	胃腸カタル	急性腸カタル	慢性腸カタル	小児消化不良	胃潰瘍	胃癌	肝硬変症	肝臓膿瘍	腸閉塞症	腸結核	結核性腹膜炎	結核性肋膜炎	結核性骨瘍	結核性脳膜炎	脊カリエス	慢性気管支炎	肺	化膿性肋膜炎	気管枝性喘息	肺膿瘍	肺結核
		胃腸カタル	急性腸カタル	慢性腸カタル												椎エリ管枝	カタル					
昭和4年(1929)		13	—	—	15	1	3	1	—	—	1	11	3	1	3	—	4	4	—	2	1	83
昭和5年(1930)		—	6	2	14	—	—	—	2	1	—	3	2	—	1	2	30	3	1	—	—	80

49 ヤツノ島（本島）島民死亡者病名別 (続)

年次	病名	慢性腎臓炎	カタル性黄疸	心臓痙攣	先天性梅毒	肝臓梅毒	脳出血	脳軟化症	子宮筋腫	卵巣嚢腫	膿毒症	脚気	敗血症	癩	アミイバ赤痢	発音不全	老衰	窒息死	急性心臓炎	不詳	合計
昭和4年(1929)		2	—	—	—	—	4	—	—	—	—	3	4	1	—	3	5	—	1	26	195
昭和5年(1930)		—	1	1	—	1	—	1	1	1	2	—	4	1	1	3	—	2	—	—	167

50 ヤツノ島（本島）島民の肺結核に因る死亡者年齢別

年次	年齢	0—9	10—19	20—29	30—39	40—49	50—59	60—69	70—79	計
昭和4年(1929)		1	11	8	—	20	7	16	—	83
昭和5年(1930)		2	5	7	12	12	20	14	8	80

51 ヤツノ島（本島）島民の死亡者総数に対する結核性疾病に因る死亡率

年次	死亡者	結核性疾患に因る死亡者						計
		肺結核	腸結核	結核性脳膜炎	結核性骨瘍	結核性肋膜炎	結核性腹膜炎	
昭和4年(1929)	実数 195	83	1	3	1	3	11	102
	% 1,000	425.64	5.13	15.18	3.13	15.38	56.41	523.07
昭和5年(1930)	実数 167	80	—	1	—	2	3	88
	% 1,000	479.44	—	5.98	—	11.97	17.95	526.94

52 ヤツノ島（本島）島民人口に対する結核性疾病に因る死亡率

年次	人口	結核性疾患に因る死亡率						計
		肺結核	腸結核	結核性脳膜炎	結核性骨瘍	結核性肋膜炎	結核性腹膜炎	
昭和4年(1929)	実数 3,996	83	—	2	1	3	11	102
	% 1,000	20.77	0.25	0.75	0.25	0.75	2.75	25.52
昭和5年(1930)	実数 3,888	80	—	1	—	2	3	88
	% 1,000	20.57	—	0.25	—	0.51	0.77	22.63

53 ヤツプ島(本島)島民健康調査結果表

疾患患者															及病
慢性傳染病			熱帯病		呼吸器病		循環器病		消化器病		病虫		十二指腸虫病		
結核			痲瘋		慢性氣管枝炎		不飽和動脈硬化症		慢性胃腸炎		肝臓硬変症		蛔虫		
肺結核			腸結核		カタル性氣管枝炎		腫帽全閉鎖症		乾性肋膜炎		乾性肋膜炎		滲出性肋膜炎		
腺結核			骨結核		氣管枝性喘息		動脈硬化症		慢性胃腸炎		肝臓硬変症		蛔虫		
關節結核			腹膜炎		管枝性喘息		動脈硬化症		慢性胃腸炎		肝臓硬変症		蛔虫		
脊髄炎			カリエス		管枝性喘息		動脈硬化症		慢性胃腸炎		肝臓硬変症		蛔虫		
トランスホーム病			ラムベシヤ		管枝性喘息		動脈硬化症		慢性胃腸炎		肝臓硬変症		蛔虫		
192			7		22		10		49		63		2		
3,996			3,787		1,091		2,696		56		43				

53 ヤツプ島(本島)島民健康調査結果表 (続)

内												新陳代謝病																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
神 經 病					眼及附屬器病					骨及關節病					泌尿器病					腫 瘍					皮膚病					單純性																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
ヒステリ					老人性白内障					關節リウマチ					陰囊ヘルニア					慢性膀胱炎					脂肪腫					纖維腫					子宮癌					子宮筋腫					下唇血管腫					白癰					癰疽					象皮病					頸腫					鼠蹊腺腫					脚氣病					小兒脚氣病																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
1	11	135	10	32	5	22	20	24	10	24	5	1	2	58	5	2	1	185	88	7	1	432	137	13	3																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						

54 ヤツプ島(本島)島民健康調査に於ける肺結核患者年齢別

年齢別患者数	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	計
患者数	—	2	21	66	33	39	31	—	192

55 ヤツプ島(本島)島民人口に対する健康調査に於ける結核性患者比率

人口	健康調査ニ於ける結核性患者												椎棘カリエス	計
	肺結核	腸結核	腺結核	骨結核	関節結核	腹膜結核	性患者	性患者	性患者	性患者	性患者	性患者		
実数	3,996	192	7	216	20	13	20	40	508					
%	1,000	48.05	1.75	54.05	5.01	3.25	5.01	10.01	107.11					

56 ヤツプ島(本島)島民カナカ族性病調査結果表

総人口	性病調査人員	性有モサル者	性病患者	性病患者												計
				急性尿道炎	慢性尿道炎	淋菌性副	淋菌性陰	淋菌性バ	淋菌性子	淋菌性子	淋菌性子	淋菌性子	淋菌性子	淋菌性子	淋菌性子	
男	1,981	1,252	940	312	18	289	5	—	—	—	—	—	—	—	—	871
女	1,903	1,102	630	472	19	111	—	15	3	85	239	565	—	—	—	565
計	3,884	2,354	1,570	784	37	400	5	15	3	85	239	1,151	285	—	—	1,431

57 ヤツヅ島(本島)島民カナカ族性病患者年齢別

種別	年齢別	8-10才	11-15才	16-20才	21-25才	26-30才	31-35才	36-40才	41-45才	46-50才	51-55才	56-60才	合計
男	調査人員	64	167	130	109	128	122	144	134	113	85	56	1,252
	患者実数	2	10	33	36	40	48	49	48	27	12	12	312
	%	3.13	6.00	25.39	33.00	31.25	39.34	34.03	32.09	23.89	14.12	21.42	24.90
女	調査人員	63	136	124	135	154	151	147	98	79	11	4	1,102
	患者実数	11	23	78	68	74	71	66	36	37	3	—	472
	%	17.36	20.59	62.90	50.37	48.05	47.02	44.89	36.73	46.84	27.27	—	42.83
計	調査人員	127	303	254	244	282	273	291	232	192	96	60	2,354
	患者実数	13	38	111	104	114	119	115	79	64	15	12	784
	%	10.24	12.54	43.70	42.62	40.43	43.59	29.52	34.05	33.33	15.62	20.00	33.31

58 ヤツヅ島(本島)公学校児童性病患者

種別	年齢別	8才	9才	10才	11才	12才	13才	14才	15才	16才	17才	18才以上	合計
男	調査人員	11	7	16	27	21	25	19	20	13	1	1	161
	患者実数	—	—	1	1	—	1	—	—	2	—	—	5
	%	—	—	6.25	3.77	—	4.70	—	—	15.38	—	—	3.11
女	調査人員	6	7	33	38	21	18	8	8	—	1	—	140
	患者実数	1	—	3	4	4	2	2	—	—	1	—	17
	%	16.67	—	9.09	10.53	19.05	11.11	25.00	—	—	100.00	—	12.14
計	調査人員	17	14	49	65	42	43	27	28	13	2	1	301
	患者実数	1	—	4	5	4	3	2	—	2	1	—	22
	%	5.88	—	8.16	7.67	9.52	7.14	7.41	—	15.40	50.00	—	7.31

59 ヤツヲ島（本島）カナカ族婦人婚姻状況に妊娠状態調査結果

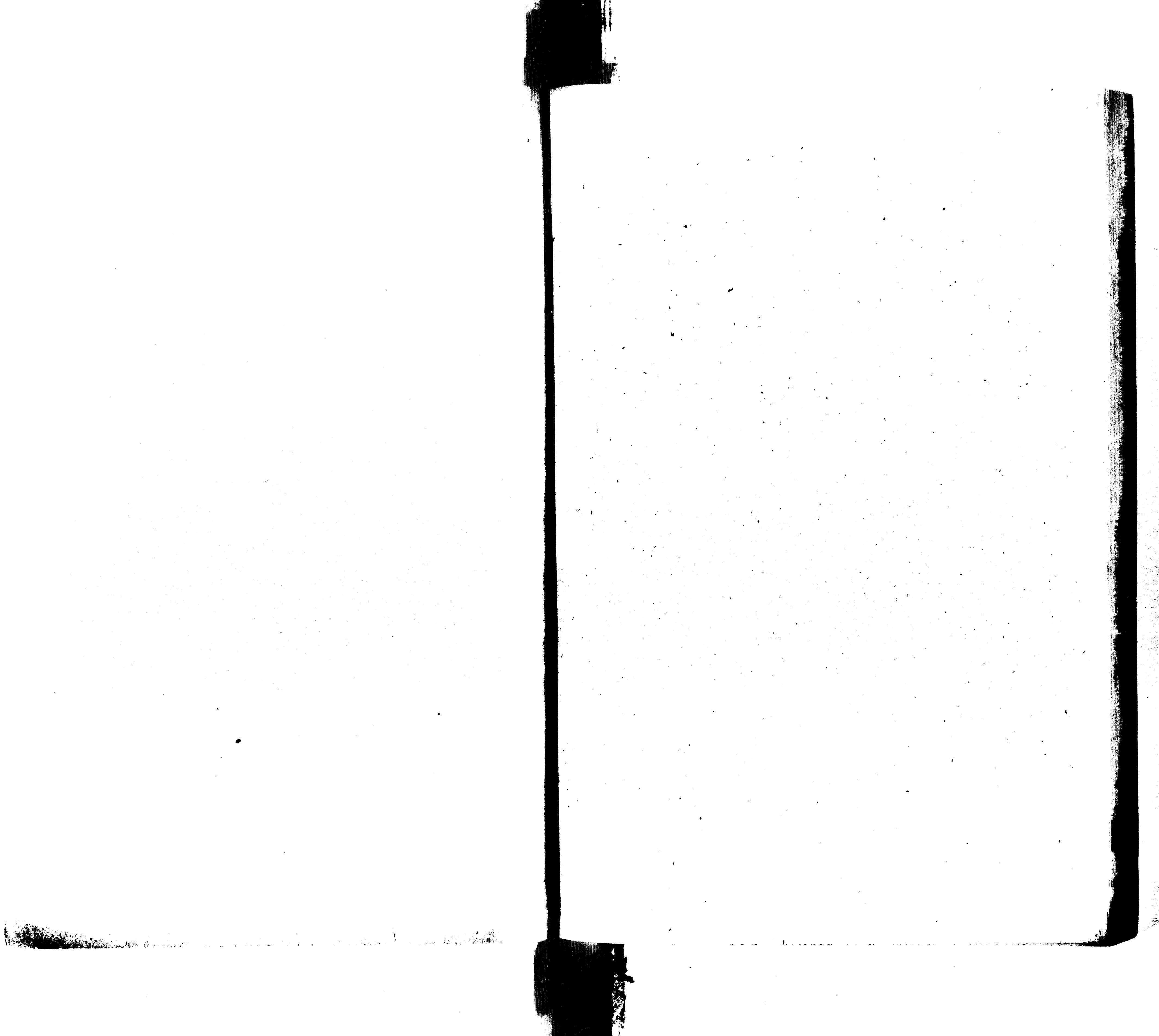
年齢別 種別	11-15才	16-20才	21-25才	26-30才	31-35才	36-40才	41-45才	46-50才	合計
調査人員	136	124	135	154	151	145	98	79	1,024
内既婚婦	14	77	131	150	150	145	98	79	843
既婚婦中未妊娠	10	39	54	49	51	41	28	22	294
既婚婦ニ対スル%	71.49	51.32	41.22	32.67	34.00	28.28	28.58	27.85	34.87

60 ヤツヲ島（本島）カナカ族婦人妊娠状態調査

年齢別 種別	妊娠回数					以上妊娠内訳		以上正規分娩内訳	
	11-20才	21-30才	31-40才	41-50才	50才以上	早産、流産、死産合計	早産、流産、死産	正規分娩	一年未満死亡
経妊実数	41	178	203	127	10	559	—	—	—
%	57	380	574	366	40	1,417	82	1,335	178
	—	—	—	—	—	—	5.79	94.21	13,79
									86.21

61 ヤツヲ島人口調査一覧表

年次	全島総数	本島				カナカ族			
		総数	男	女	子ヤモロ族	総数	男	女	族
大正11	7,730	4,685	2,205	2,480	49	29	20	4,636	2,176
"12	7,564	4,680	2,454	2,226	169	99	70	4,511	2,355
"13	7,893	5,011	2,606	2,405	170	97	73	4,841	2,509
"14	7,366	4,655	2,283	2,372	151	82	69	4,509	2,201
昭和1	7,230	4,501	2,359	2,142	132	70	62	4,369	2,289
"2	7,108	4,403	2,326	2,077	137	79	58	4,266	2,247
"3	6,566	4,055	2,028	2,027	137	78	59	3,918	1,950
"4	6,545	3,965	1,965	2,000	151	84	67	3,814	1,881
"5	6,486	4,019	2,057	1,962	156	88	68	3,865	1,969
"6	6,410	3,858	1,940	1,918	159	86	73	3,699	1,854
"7	6,000	3,810	1,937	1,873	143	79	69	3,662	1,858
"8	6,255	3,729	1,914	1,815	173	93	80	3,556	1,821
"9	6,100	3,687	1,902	1,785	180	92	88	3,507	1,810
"10	6,006	3,694	1,940	1,754	176	92	84	3,518	1,848
"11	5,916	3,581	1,872	1,709	233	134	109	3,343	1,740
"12	5,817	3,516	1,839	1,677	240	125	115	3,276	1,714
"13	5,811	3,570	1,401	1,669	298	153	145	3,272	1,740
"14	5,733	3,499	1,857	1,642	313	170	143	3,186	1,687
"15	—	—	—	—	—	—	—	—	—
"16	5,533	—	—	—	—	—	—	—	—



081-2-21

日本人の海外活動に関する歴史的調査

通卷第二十一冊 南洋群島篇 第二分冊

以
拔
注
意

第二部 南洋群島經濟產業

大藏省管理局

昭和廿五年十二月廿六日
昭和廿五年十二月廿六日

青島同和協會

目次

第十二章	交通通信	一頁
第一節	概説	一
第二節	道路	二
第三節	鉄道及諸車	三
第四節	港灣	三
第五節	海事	四
一、	命令航路	四
二、	其の他の航路	三
三、	交通港取締	三
四、	船舶取締	三
第六節	船舶輸送	三
一、	概況	三
二、	貨物輸送	三
三、	人員の輸送	三

第一章	概況	一四
第二章	航空	一四
第三章	郵便局	一五
第四章	郵便物の直接交換	一五
第五章	郵便業務	一八
第六章	郵便業務	一九
第七章	郵便業務	一九
第八章	郵便業務	一九
第九章	郵便業務	一九
第十章	郵便業務	一九
第十一章	郵便業務	一九
第十二章	郵便業務	一九
第十三章	郵便業務	一九
第十四章	郵便業務	一九
第十五章	郵便業務	一九
第十六章	郵便業務	一九
第十七章	郵便業務	一九
第十八章	郵便業務	一九
第十九章	郵便業務	一九
第二十章	郵便業務	一九
第二十一章	郵便業務	一九
第二十二章	郵便業務	一九
第二十三章	郵便業務	一九
第二十四章	郵便業務	一九
第二十五章	郵便業務	一九
第二十六章	郵便業務	一九
第二十七章	郵便業務	一九
第二十八章	郵便業務	一九
第二十九章	郵便業務	一九
第三十章	郵便業務	一九
第三十一章	郵便業務	一九
第三十二章	郵便業務	一九
第三十三章	郵便業務	一九
第三十四章	郵便業務	一九
第三十五章	郵便業務	一九
第三十六章	郵便業務	一九
第三十七章	郵便業務	一九
第三十八章	郵便業務	一九
第三十九章	郵便業務	一九
第四十章	郵便業務	一九
第四十一章	郵便業務	一九
第四十二章	郵便業務	一九
第四十三章	郵便業務	一九
第四十四章	郵便業務	一九
第四十五章	郵便業務	一九
第四十六章	郵便業務	一九
第四十七章	郵便業務	一九
第四十八章	郵便業務	一九
第四十九章	郵便業務	一九
第五十章	郵便業務	一九
第五十一章	郵便業務	一九
第五十二章	郵便業務	一九
第五十三章	郵便業務	一九
第五十四章	郵便業務	一九
第五十五章	郵便業務	一九
第五十六章	郵便業務	一九
第五十七章	郵便業務	一九
第五十八章	郵便業務	一九
第五十九章	郵便業務	一九
第六十章	郵便業務	一九
第六十一章	郵便業務	一九
第六十二章	郵便業務	一九
第六十三章	郵便業務	一九
第六十四章	郵便業務	一九
第六十五章	郵便業務	一九
第六十六章	郵便業務	一九
第六十七章	郵便業務	一九
第六十八章	郵便業務	一九
第六十九章	郵便業務	一九
第七十章	郵便業務	一九
第七十一章	郵便業務	一九
第七十二章	郵便業務	一九
第七十三章	郵便業務	一九
第七十四章	郵便業務	一九
第七十五章	郵便業務	一九
第七十六章	郵便業務	一九
第七十七章	郵便業務	一九
第七十八章	郵便業務	一九
第七十九章	郵便業務	一九
第八十章	郵便業務	一九
第八十一章	郵便業務	一九
第八十二章	郵便業務	一九
第八十三章	郵便業務	一九
第八十四章	郵便業務	一九
第八十五章	郵便業務	一九
第八十六章	郵便業務	一九
第八十七章	郵便業務	一九
第八十八章	郵便業務	一九
第八十九章	郵便業務	一九
第九十章	郵便業務	一九
第九十一章	郵便業務	一九
第九十二章	郵便業務	一九
第九十三章	郵便業務	一九
第九十四章	郵便業務	一九
第九十五章	郵便業務	一九
第九十六章	郵便業務	一九
第九十七章	郵便業務	一九
第九十八章	郵便業務	一九
第九十九章	郵便業務	一九
第一百章	郵便業務	一九

第十三章 農業概論

第十四章 農業

第一章	概況	一七
第二章	南洋群島の地質及氣候と農業關係	一九
第三章	土地と農耕地關係	二〇
第四章	原住民の農業	二三
第五章	日本人の農業	二三
第六章	米	二三
第七章	蔬菜	二三
第八章	熱帶特殊農産物	二三
第九章	鳳梨	二三
第十章	キヤツサバ	二三
第十一章	黄麻	二三
第十二章	蓖麻	二三
第十三章	棉花	二三
第十四章	カカオ	二三
第十五章	珈琲	二三
第十六章	畜産	二三

一、概況	三
二、牛	三
三、豚	三
四、山羊	三
五、鶏	三
六、水牛	三
第七節 農畜産業施設	四
一、一般農産奨励	四
二、熱帯特殊農産品の増産奨励	四
三、畜産奨励	四
四、病虫害防除並植物検査	四
五、熱帯産業研究所	四
六、指定開拓地	四

第十五章 林業

第一節 概説	四
--------	---

第一節 概況	五
--------	---

一、一般陸生林	五
二、紅樹林	五
三、椰子樹林	五
第三節 熱帯特殊林産資源	五

一、カラオ樹皮	五
二、アイヌ類	五
三、コイルファイバー	五
四、椰子殻炭	五
五、椰子殻繊維	五
六、バルサ	五
第四節 群島林業の將來性	五

第十六章 糖業

第一節 糖業確立迄の経緯	五
第二節 糖業の確立	五

第十七章 商工業

第一節 概況	七
第二節 商業	六
第三節 工業	九

第十八章 水産業

第一節 概説	八〇
第二節 施設	八二
第三節 水族	八四
第四節 漁業処分	八五
第五節 漁業	八六
一、鯉漁業	八六
二、鮪漁業	八七
三、高瀬貝漁業	八七
四、珊瑚漁業	八八
五、鮫漁業	八八

第十九章 鉱業

六、玳瑁業	八八
七、海鼠漁業	八九
八、其の他の漁業	八九
九、遠洋漁業	八九
第六節 養殖業	九〇
一、眞珠養殖業	九〇
二、海綿養殖	九〇
三、高瀬貝養殖	九一
第七節 製造業	九一
一、鯉節製造業	九一
二、罐詰製造業	九二
三、其の他の製造業	九二

第十九章 鉱業	九三
第一節 概説	九三
第二節 主なる鉱物資源	九四

第一節 地質調査	九
第二節 鐵道制度	九
第二十章 貿易	九
第一節 概況	九
第二節 移出入	九
第三節 輸出	一〇
第四節 輸入	一〇
第二十一章 金融	一〇
第一節 概況	一〇
第二節 産業組合	一〇
第三節 通信事業金融	一〇
附屬統計表 目次	
一、道路延長	一〇
二、諸車	一〇

三、南洋廳命令航路	一〇
(イ) 日本郵船株式會社	一〇
(ロ) 南洋貿易株式會社	一〇
(ハ) 南洋汽船株式會社	一〇
(ニ) 南洋海運株式會社	一〇
四、船舶入出隻數及總屯數	一一
五、汽船乘降人員	一一
六、郵便物	一二
七、電報取扱通數及料金	一二
八、電話	一二
九、私設電話	一二
十、原住民通信事業利用狀況	一三
十一、簡易保險	一三
十二、電氣	一三
十三、農耕地面積	一四
十四、農產物	一四

十五、既耕地と新墾地の比較	一八
十六、農産品別生産量並に價額	一九
十七、農産物ヘクター当收穫高	二〇
十八、肥料消費	二一
十九、家畜家禽總數	二二
二十、畜産物	二三
二十一、林産物	二四
二十二、椰子林	二五
二十三、コブラ生産	二六
二十四、林野面積	二七
二十五、國有土地貸下面積	二八
二十六、古々椰子	二九
二十七、甘蔗收穫面積收穫高產糖高	三〇
二十八、工産物	三一
二十九、会社	三二
三十、南洋群島に本社を設くる会社	三三

三十一、水産漁獲物	一四
三十二、昭和十七年に於ける生産漁獲物	一五
三十三、水産製造物	一六
三十四、昭和十七年に於ける水産製造物	一七
三十五、漁船	一八
三十六、鉱業許可一覽表	一九
三十七、燐鉱採掘及移出	二〇
三十八、太平洋各島燐鉱産額	二一
三十九、未稼行ボーキサイト埋藏量	二二
四十、パラオに於けるボーキサイト鉱量調	二三
四十一、移入品名別價額	二四
四十二、移出品名別價額	二五
四十三、輸出品名別價額	二六
四十四、輸入品名別價額	二七
四十五、出港税及關稅	二八
四十六、無盡講	二九

四十八	商業組合目的別	一五
四十八	商業組合組織別	一六
四十九	商業組合組織別（昭和十六年）	一六
五十	商業組合内容（昭和十六年）	一七

第十二章 交通、通信

第一節 概 節

群島は遠く内地と離れること海上二千哩、東西二千七百哩、南北一千三百哩に亘る廣大な海面に散在する多数の島より成つてゐる熱帯地で、その総面積僅かに二千四百四十九方キロ米であつて之が円満な統治、開發を計るには特に交通、通信機關の完備を必要とする。

我が海軍が群島占領と同時に軍政を行つた際、軍用郵便及軍用無線電信所を設置した。一九二二年四月軍政を廢止と同時に南洋廳が設置されて全部之を南洋廳に移管した。

海外産業の發展、人口の増加と相俟つて道路の整備、拡充、各地港灣の修築擴張、群島内地間、群島相互間、環洋對外航路の設置、航路標識の完備、通信機關の設置等極力意を用ひた爲、群島の開發も其の実績が漸次揚つてきた。

偶々一九三七年中日事變が勃發して我國産業經濟界の劃期的轉換と我が國を繞ぐる四圍の國際情勢の変異とに依つて我國唯一の熱帯地である群島に対して新たな資源開發に意を向ける者俄かに多くなり、其の間有用地下資源の發見が制約されて、從來の主要産業であつた糖業、水産業、コブラ事業等が發展した外、ポロキサイト鉱業、満掩鉱業、銅、鉄、錫、鉛、亜鉛、石油、天然ガス等の新規企業に計畫實施されるに當つて益々交通、通信關係の整備拡充の必要性が認められ

、パナマの運河を有し、一九三九年には内地、群島間定期航空路、一九四一年には群島間定期航路の開通、一九四二年九月パナマ、東京間の無線電話の開通、続いて同年九月パナマ放送局の業務開始を見る等、南群島の交通は、漸く是れに表れて今日の面影を脱し漸く文明の域に達しつつあつた処、今次太平洋戦争の進展に依つて群島の交通網が破壊され、爲に群島は全く孤立化されて終戦に至つた。

第二節 道 路

南群島は島嶼地帯に包まれ海上平穩な爲、カヌーの往來便なるに反して島嶼は狭少で且つ未開の地が多いので、道路を開闢せず、極めて不完全、涯浜に沿つて部落を往來し、或は山間溪谷を辿り其の足跡によつて自然に生じた小徑を以て道路としたに過ぎなかつたが、近年産業の發展と人口の激増とに依つて陸上交通漸次繁くなり、之が改修の必要を結果、南洋廳及支廳の所在地附近である主要島は漸次改正され、バラオ、サイパン、トラツク、ボナベ等の島嶼も所在地の如きは自動車、タクシー等の便もあり、又主要島の幹線道路を新設しつつあつた。然れども其の諸島に在つては概ね狭少不完全の状態にあつたので道路の完備は産業開發上最も緊要なので鋭意之が施設改良の努力しつつあつた。

一九二二年南洋廳設置當時道路延長軒数百九十七軒にして之を一九三七年の五百四十四軒に比較すれば約二、八五倍の増加を示し、道路改良の点に於ては一九二二年七米未満の道路五軒にして之を一九三七年の二百七十一軒に比

較すれば約五四倍、七米以上の道路は七軒にして之を一九三七年の三十七軒に比すれば約五倍の増加を示した。

第三節 鐵道及諸車

南洋群島には一般公衆の用に供する鐵道及軌道の敷設がない。特殊の輸送を目的として建設された私設鐵道としてはアンカウル島に於ける南洋拓殖会社の燐鉍採掘事業用のもの及サイパン、テニアン、ロタ等に於ける南洋興業株式会社の燐鉍原料運搬用のものにボナベ、クサイ島にあるのみで陸上交通は近年自動車及其他の諸車によつて用を便しつつあつた。

一九二二年南洋廳設置當時諸車總数四百七十三に対し一九三九年一万六千六百九十七を比較すれば三五、五倍の増加を示した。

第四節 港 灣

南洋に散在する南洋群島に於ては港灣は一般運輸交通上最も緊要なことは言を俟たない。

之にして群島の各港灣は大部分は環礁を以て自然的防波堤の効用を爲し、比較的良港である素質を有してゐるが之を更に港灣とするには尙幾多の人工施設を加へる必要がある。群島の産業開發に伴つて最初に本群島中商工業上最も重要とされるサイパン港の修築事業を一九二六年より施行し一九三二年に於て完成し、尙海陸の便を計る爲に一九三一年より埠頭新設工事に着手し一九三五年末に竣工した。然し島内各種産業の發達はさらに港灣の擴張を必要と

、港口水道幅員を拡大し水深を更に掘鑿して港内に介在する礁石を除去し、内港錨地を浚渫して船舶出入を容易ならしめると共に港内に船舶の碇泊可能ならしめる計畫の下に之が擴張工事に着手して一九四三年竣工した。

、諸島コロロ島に於ては錨地と波止場間に長大なる珊瑚島横たわり、海陸の連絡が不便であつたので之を掘鑿して水道を設けることとし、掘鑿工事に着手して一九三〇年に竣工を見た。之をパラオ新水道と称する。而して右新設の結果、この新設水道の便を利用して埠頭を新設し、海陸連絡を一層便ならしめることとし、之が新設に着手し一九三三年に竣工を見、第二期工事として新水道を擴張しようと工事に着手し一九三五年に於て竣工した。

、港は群島間航行の南方交通上の要点として益々其の重要性を加へつゝあつたので一九三五年之が修築工事に着手し埠頭の増設を見つゝあつた。(之が竣工の暁は六千吨級船舶の出入を容易ならしめるは勿論港内に四隻碇泊可能の餘分があつた。)

第五節 海 事

一 命令航路

(イ) 南洋群島間航路

、南洋群島船(日本郵船株式会社)の運航に依つて連絡をとつたのに始まり、南洋廳設置と共に一九二三年より日本郵船株式会社に命令して補助航路として兩來に続き同会社に下命して居つた。尙一九三八年より南洋海運株式会社より、ジャワ航路を年十二回往復共パラオに寄港せしめる外、一九三九年より南洋汽船株式会社をして南洋群島那

、南洋群島間航路、群島間の交通連絡に當つた。

として一九二三年南洋廳設置當時に於ける群島内地間の命令船使用隻数、総屯数、航海度数を一九三三年に比較すると約三倍、一九三三年に比すれば約五倍の増加を示した。

一九四〇年に於ける航路及回数左の如し、西廻線(年三十六回内十六回はパラオを終点とす)

神戸、大阪、門司、崎戸、横浜、八丈、二見、那覇、サイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオ、アンガウル、ナード、ダバオ、タワオ間往復(日数三十五日)

東廻線(年十回)

一、神戸、大阪、門司、崎戸、横浜、サイパン、テニアン、トラツク、ボナベ、クサイ、ヤルート (日数五十四日)

二、神戸、大阪、崎戸、門司、横浜、サイパン、トラツク、ボナベ、クサイ、ヤルート (日数五十一日)

イバン線(年十八回)

一、門司、崎戸、横浜、那覇、八丈、二見、サイパン、テニアン、ロタ、名古屋、大阪間往復(日数三十日)

日本南洋航路線(年往復十二回)

一、門司、パラオ間直航線

南洋、内地、那覇線(年八回)

一、オ、ヤップ、フハエス、阪神、那覇

南洋航路として外國との交通は西廻線に依り蘭領セレベス島、ナラト、小スンダ列島の
 つなが、一、九三七年ナラトより巨港ミンダナオ島ダバオ港に延長し、更に一九三七年よりボルネオ、クワラ、港に延
 びし船本より南洋航路に於ける航行して居つた。

船名	噸数
暹羅丸	六、一四三噸
巴拉オ丸	四、四九五〃
暹羅丸	三、一四一〃
暹羅丸	三、三九四〃
暹羅丸	三、一六五〃
貨物船(貨雨丸)	五、二一四〃
サイパン丸	五、五三二〃
暹羅丸	三、一四一〃
暹羅丸	三、三九四〃
暹羅丸	三、四二七〃

三、暹羅丸七隻

暹羅丸	三、一五七〃
暹羅丸	三、一五九〃
暹羅丸	三、一六五〃
暹羅丸	五、三九五〃
暹羅丸	三、三九四〃
暹羅丸	三、一五九〃
暹羅丸	三、一五九〃
暹羅丸	三、一六五〃
暹羅丸	六、九四五〃
暹羅丸	三、一四一〃
暹羅丸	四、四九五〃

六、サイパン丸八隻

暹羅丸	六、〇七〇〃
暹羅丸	六、一八一〃
暹羅丸	五、四九七〃
暹羅丸	四、〇二七〃

四、暹羅丸、巴拉オ丸

チエリボン丸 四、〇一六〃
びるま丸 四、五八四〃

五、南洋、内地

那覇線 一隻 南星丸 九八六〃

六、離島間

離島間航路は群島内相互を運輸して交通船の支線となるもので一九三二年以降補助金を下付して南支那航路株式会社に下命した

航路及回数は毎年の状況に依つて多少の変更があつたが一九三九年に於ける航路及回数左の如し、

一、マリアナ群島線

北方離島線（年十回）

サイパン、アタタハン、サウカン、アラマガン、バガン、アグリカン、アウツタツク、
ボナ（北東線（年二回）

サイパン、ボナベ、モキール、ピンゲラツブ、ウゼラン、エニワタツク、エンヂヤヒ

二、ヤップ離島線（年五回）

ヤツフ、ウレシイ、フハエス、ソロール、ヨルビツク、オレイ、ノレツク、ノヂヨツク、モット、ナモ
ツク、サタウル、ヌグール

三、パラオ離島線（年四回）

パラオ、ソンソル、プール、メリー、ヘレン、トコベ

四、ボナベ離島線

南方線（年三回）

ボナベ、パキン、ナツチツク、ヌーゴル、グリーンニツチ、ケビアン、ラバウル

南方諸島線

ボナベ、ケビアン、ラバウル、サルモア、サマライ、ポートモレスビー、ヌメア、スヴァ、トンダブ、ポートビ
ラ、ツラギ

北東線（年一回）

ボナベ、モキール、ピンゲラツブ、ウゼラン、エニワタツク、エンヂヤヒ

五、マーシャル群島線

北東線（年八回）

ヤルット、ミレ、アルノ、メジユロ、アウル、マロエラツブ、ウオツヂエ、リキエツブ、アイルツク、ウートロ
ツク、メジチ

北西線（年八回）

ヤルット、エボン、ナモリツク、アイリングラブラフ、ナモ、クエジエリン、ラエ、ウジヤエ、ウオット、ビキ

ンニ、ロンゴラツプ、ロンギリツク

ボナベ北東線（年一回）

ヤルット、クサイ、ボナベ、モキール、ビンゲラツプ、ウゼラン、エンワタツク、ニンジャヒ

ギルバート線（年三回）

キルット、タラワ、ブタリタリ

使用船舶

一、マリアナ群島線 長明丸 補助機関附帆船 総屯数一九五屯

二、ヤツプ、パラオ離島線 國光丸 補助機関附帆船 総屯数一九九屯

三、ボナベ離島線 高千穂丸 汽船（鉄船） 総屯数三四〇屯

四、マーシャル離島線 カロリン丸 汽船（鉄船） 総屯数三二〇屯

靜海丸 汽船（鉄船） 総屯数二二六屯

離島を外國屬地との間に交通の必要を認め実施したるもの左の如し、

一、濠洲委任統治地域ラバウル、チビアン、英領サルモア、サマライ、ポートモレスビー

二、英領ギルバート島、ブタリタリ、タラワ

三、佛領ニューカレドニア、ヌメヤ

四、トンガ王國、トンガダブ

五、英領フィジ諸島、スヴァ、ソロモン群島ツクギ

六、英佛共同統治ポトビラ

之等の地方は往復は日本雜貨、復航はコブラ、高瀬貝等が主たる貨物であつた。

（ハ） 環礁内

環礁内各島間の交通は從來端艇又はカヌーのみであつて不便尠くなかつたが、一九二九年必要に應じ補助金を下附して逐次定期巡航路を開設し、住民の利便を増進しつゝあつた。

最近に於ける航路左の如し、

一、パラオ諸島巡航船年八二八回（一九二九年開設）

コロール、パラオ本島各地、ペリリュ、アンガウル間

二、パラオ諸島ガルミスカン線二五〇回（一九三六年開設）

コロール、ガルミスカン間

三、パラオ諸島コロール、アイライ線年五〇〇回（一九三八年開設）

四、パラオ諸島清水村線年二五〇回

五、ヤツプ諸島トロ、ゴフ線年二四〇回（一九三六年開設）

六、トラツク諸島巡航線年二六回、モートロワク線北西離島線

七、春島、夏島線年一二〇回（一九三八年開設）

八、ボナベ島巡航船年二一六回（一九三四年）

九、ボナベ諸島コロニヤ、ナンボンシャップ、ニンシヨクシヨク間年一、八〇〇回（一九四〇年開設）

二、其の他の航路

命令外として不定期に就航したは南洋興發株式会社各船であつて船舶左の如し、

パラオ、ニューギニア、チモール、アンボイナ、セレベス

一、ぬし丸 補助機関附帆船 総屯数二四〇屯

二、なびれ丸 補助機関附帆船 総屯数一六〇屯

三、交通港取締

一九二七年南洋廳令を以て新たに南洋群島交通港取締規則、南洋群島船舶札規則、及南洋群島船舶積量度規則を設け海上、殊に港内に於ける事故の予防其の他の取締に努め、交通の円滑及將來の發展を期しつゝあつた。

四、船舶取締

南洋群島の開發に伴つて群島内で建造の船舶数は近年屯に激増し、其の他群島に在る船舶を合して其の數驚異的増加を示し、逐年通増の一途を辿りつゝあつた。而して之等船舶は群島に船舶關係法規が實現せられてなかつた爲、小型船は検査の爲内地への回航は其の安全性から見て不可能に近く且つ莫大の費用を要する事由等に依つて必然的に無籍船になつた。

群島に何等之を取締る規則がない爲、止むを得ず無籍のまゝ自由に放任せられ其の堪航性、安全性に於て甚だ憂慮

すべき状態であり、且船舶の増加に依つて船舶事故も亦著しく増加の傾向にあつたので之等船舶及船員其の他に關し、内地の諸法規に相当する諸規則を制定し取締りをなす必要が痛感されるに至つた。茲に於て南洋廳では一九三九年廳令を以て南洋群島船舶札規則及南洋群島船舶積量度規程を制定し施行した。爾來主として南洋群島と諸港を航行する船舶で船舶國籍証書又は船鑑札を受有する船舶及南洋群島船舶札規則の適用を受けない船舶の外、何れも船札を受有せしめることとなつた。

第六節 船舶輸送

一、概況

廣い海面に小島散在する群島の輸送は船舶に依る外ない。既に第五章に於てのべた様に船舶の運航、發展には南洋廳設置以來命令航路として補助金制度等を設けて極力努めた結果、群島の開發、産業の發展、文化の高揚等に寄與する処多大であつた。

二、貨物輸送

群島の貨物輸送事情を視る時、大部分は内地群島間の輸送にして、群島からの積出貨物としては砂糖、コブラ、貝殻、鯉節、燐鉍石等にして、内地からの積下し貨物としては米穀、其の他食糧品、煙草、車輛、機械類、纖維製品、木材及木製品等にして大半は命令航路船によつて輸送され貨物の登載量は一九三二年南洋廳設置當時に比較すれば一九三二年には約十五万屯にして約六倍、一九三九年には約三十八万屯にして約一五倍強の増加を示しつゝあつた。

三、人員の輸送

内地と遠く離れること二千哩、廣い海面に小島散在する群島の交通は船舶に依るの外ない。
一九二二年南洋廳設置当時内地、群島間の船舶乗降人員一万二千二百三十四人に比較すれば一九三二年には約一・八倍、一九三九年には約四・三倍の増加を示しつゝあつた。

第七節 航路標識

本群島は海面廣大にして各島の附近孰れも暗礁多く、且潮流激しい爲、航行船舶の出入に危険が多いので航路標識の完備は是非必要であつた。故に占領當時から之が注意を怠らなかつたが、一九二二年南洋廳開設後鋭意此の点に意を注いで従來区々に涉つた標識の形式を改めて之が統一を図ると共に新たに燈台、燈標、竝立標等の新設を爲し以て海難事故發生の予防に努めつゝあつた。

第八節 航空

南地約千三百哩、東西約二千七百哩の海洋中に星散基布する群島に於ては其の統治及開發の円滑を期するには特に交通、通信機關の完備に俟たざるを得ない。
而して現在各島間に於ける交通機關は未だ前述の如き命令航路の船舶に依るに過ぎない狀況にして遺憾の点尠くない。仍て茲に世界航空事業の大勢に順應して航空路を開設し、群島統治及開發の大成に期すると共に在住民をして文

化の恩沢に浴させる爲差當つてパラオ、サイパン間不定期航空路を開設し、尙内地、サイパン、パラオ間の定期航空を計畫中であつたが一九三九年四月に至つて大日本航空株式会社の運営によつて横浜を基点としてサイパンを寄港地としてパラオに至るパラオ線の定期航空路の開設を見るに至つた。
尙同社運営に依つてパラオ、ヤルト間不定期航空準備飛行は一九四〇年八月より開始され、一九四一年より月二回の群島間の定期航空路が開設された。

第九節 通信機關

一、通信監督機關

南洋廳に於ける郵便、電信、電話、郵便爲替、郵便貯金、簡易生命保險、郵便年金に関する事項は南洋廳通信課に於て分掌し、通信大臣又は通信局長の事務は南洋廳長官が行つてゐた。

二、郵便局

郵便局は一九二二年南洋廳設置當時は七局であつたが、其の後人口の増加、各島の發展に依つて最近に於ては十二局にして其の名称及位置は左の通りである。

局名	位置
サイパン	サイパン島
テニアン	テニアン島

ロタ	ロタ島
パラオ	パラオ諸島コロール島
ヤツブ	ヤツブ島
トラツク	トラツク諸島夏島
ボナベ	ボナベ島
ヤルートル	ヤルートル島
アングウル	パラオ諸島アングウル島
クサイ	クサイ島
ファイス	ファイス島
マラカル	パラオ諸島マラカル島

郵便局取扱事務の範囲は左の通りである。

イ、郵便物の引受

外国宛代金引換（日満條約に依るものを除く）

課金別納、本人票、締切予告の特殊取扱をなさず。

ロ、前記郵便物の窓口交付

（一） 集金郵便の取立は窓口取立に限り取扱ふ（当分取扱中止）

（二） 左記区域に限り配達を取扱ふ

配達区域	配達局名
サイパン島一円	サイパン
パラオ島コロール一円	パラオ
テニアン島一円	テニアン
トラツク島一円	トラツク
ボナベ島コロニヤ	ボナベ
（バルム島、ラングール島）	
（シヤブチツク島を除く）	
（カーマル、アイルカ、トロ）	
ナツト村	
（ニヤル、以外の地を除く）	
春來村	
マタラニーム村	
（レクタオ市街地興路第一農区）	
（同第二農区以外の地を除く）	

ハ、爲替 日満爲替及外國通常爲替を含むの振出

拂渡及拂戻 到着外國通常爲替の別配達を取扱はず

ニ、貯金の預入及拂戻 切手貯金、郵便貯金切手、定額貯金及積立金の拂出預入の取扱ひを爲さず

ホ、振替貯金の拂渡

ハ、年金恩給の支拂

ト、振替貯金に依る債券募集元利金支拂事務並國債募集賣出、買上及元利金支拂、振替貯金特別取扱業務
チ、内國及東亞和歐文電報、漢文電報及外國電報、船配置サイパン島及テニアン島以外の別便配達及南洋群島と南洋群島以外の各地間に發着する新聞電報の予約取扱（ヤップ島と内地に發着するものを除く）後納取扱並外國新聞の取扱をなさず。

リ、電話（特に指定した局に限る）

（パラオ局、サイパン局、ボナペ局、トラック局、テニアン局）

ヌ、無線電話（パラオ局に限る）

ル、郵便切手類及收入印紙の賣捌

ヲ、簡易生命保険及郵便年金

三、外國郵便の直接交換

南洋廳命令航路に依り交通連絡のあつた外國との間に郵便直接交換を爲したるものは左記の通りであつた。

開始年月日	交換局名	相手交換地名及局名	取扱種別
一九三一年一月一日	サイパン	米領グワム島グワム	通常小包郵便局
一九二六年九月一日	パラオ	蘭領東印度メナド	通常郵便物
一九三〇年四月一日	パラオ	ヒリツピンダバオ	通常小包郵便物

一九二七年八月一日

ヤルット

英領ギルバート諸島
ブタリタタ

通常郵便物

第十節 通信業務

一、郵便業務

大体内地と同一であるが、其の取扱範圍の制限される事は既述の如くである。特にサイパン、パラオ、テニアン、トラック、ボナペ局以外は郵便物の配達を爲さず、総て窓口交付である爲一般の不便は尠くなかつた。

二、爲替貯金業務

爲替貯金業務も亦内地と大差は無い。但し南洋廳所屬歲入金及歲出金を現金出納官吏と日本銀行パラオ代理店との間、現金出納官吏相互間、現金出納官吏とパラオ所在支出官との間に受授する場合、南洋群島地方費歲入金及歲出金を地方費出納吏相互間に受授する場合、又は郵便切手類及收入印紙買受代金を指定郵便局より其の賣出局へ送付する金員は特に無料爲替にして証書一枚の金額に制限を附せず、電信爲替に依る場合は一枚五千円迄とする事等は其の内地と異なる点であつた。

三、簡易生命保険及郵便年金業務

簡易生命保険及郵便年金業務は郵便局職員として、簡易保険局書記を兼任せしめ、該兼務官名義で保険局の直接取扱事務として扱つて來たが、邦人の増加に伴ひ契約が増加した爲、不便不合理を生ずるに至つたので簡易生命保険及

郵便年金事務、郵便振替貯金特別取扱規則を制定し一九三七年一月より施行したが一九四一年四月一日より簡易保険法、郵便年金法が外地に施行の事となつたので之を廢止し全く内地と同様の取扱方法をなす事とした。

四、電信業務

電信業務は無線電信（ヤツプ局は海底線併置）を以て群島相互間及群島内地間、並附近航海の船舶との間に公衆電報を行ふヤツプ、那覇間海底線を以て群島、内地間電報を疎通して居つた。

内地に直接通信をする対手局は左の如くであつた。

パラオ、サイパン——東京中央電信局

ヤツプ——那覇郵便局

五、電話業務

（イ） 電話業務

電話業務は一九二七年七月廳令を以て南洋群島電話規則を定め、同時に電話事務規定を定め其の取扱を開始した。最近に於ける取扱局は左の如くであつた。

局名	開始年月	交換方式
パラオ	一九二七年九月	自動式
サイパン	一九二八年七月	磁石式
トラツク	一九三八年八月	同 右

ボナベ	一九三八年十二月	共電式
テニアン	一九三九年三月	自動式

（ロ） 無線電話業務

群島産業の開発、人口の増加に伴ひ群島の重要性益々加へられつゝあつたので必然的に内地と群島を結ぶ無線電話設置の要望が起り、終ひに最初の計画としてパラオ、内地間に一九四一年五月一日より其の取扱の開始を見た。

対手局は左の通り。

パラオ郵便局——東京中央電信局

六、放送業務

内地を遠く隔絶し海洋中に点在する群島は内地の経済事情、文化等に接する機会少なく群島の開発、文化の高揚等支障が尠くなかつたので、之が発達を計るには無線放送局設置の必要が認められ、之が設立運営には大日本放送協会が当る事となり、一九四一年九月終ひにパラオ放送局の開設を見るに至り、群島民に裨益する処大なるものがあつた。

第十三章 産業概論

南洋群島は東経二三〇度より一七五度北緯〇度より二二度の太平洋中に散在する一四〇〇余の小島嶼より成り、眞に絶海に於ける叢蘭たる孤島と可謂で其の面積最大の東カロリン群島ボナベ島でも僅かに三七五軒に過ぎない程度で而も其の地勢たるや概ね急峻で加へて廣海域に散在して居る爲に、各島間は勿論我國との關係に於ても交通的に極めて不便である等の惡條件を有し産業的立地條件としては極めて劣惡で單に氣象的の利点であるに過ぎない。

斯様な自然條件を持つた群島が一六世紀の初頭、葡萄牙人マジエランに依つて発見され始めて文明と接触し、次いで西班牙の統治する處となつたが、此の三百五十年の歴史は全く王政の連続で、流血の擾乱相續き僅かに基督教に依る宗教宣布の功績を認むるとしても統治方策に付いては全く無爲で、特に治安維持対策に汲々として産業的には何等の貢獻なく依然として未開自然の域を脱し得なかつた。

一八九九年米西戦争の結果、之が独逸領となるや同國は其の抱懷せる南ニューギニア及中國青島を根拠とする東亞政策進展の中継基地として拮据經營以て植民地獲得の立遅れを挽回する相当治績の見るべきものがあつた。

即ち独逸は諸般政策の推進には先づ群島の學術的調査研究の必要を認め、之を実施し其の結果、西カロリン群島アングウル島に於ける燐鉱の埋藏を発見、之が採掘稼行の爲一九〇八年独逸燐鉱株式會社を設立するの他、マーシャル群島ヤルト島に於ける特殊會社ヤルト會社は同國のマーシャル群島領有（一八八五年）後直ちに英國に於ける東

印度會社の組織と類似して設置され、群島拓殖の全權を委任せられ群島産業の基盤を確立せるもので一九〇六年其の行政權還付に依り、純然たる管利會社となるや多年扶植せる勢力に乘じ、群島産業の独占を企て主としてコブラを中心とする貿易に依り商權の拡大を図る等着々として其の地歩を進めつゝあつたが、第一次世界大戰の勃發に依り全て挫折した。

一九一四年我が群島占領に次いで一九一九年ヴェルサイユ平和條約に依る委任統治地として我が領土構成部分の一部とし、統治せられし以來は我國唯一の純熱帶圈として各種企業が一時に興つたが、孰れも熱帶に於ける知識經驗を欠きたる上に群島の有する自然的劣惡條件を克服し得ず、加へて大正末期の國內經濟界の不況に遭遇し、其の殆んど全てが失敗に終り、一頓挫を來たした爲當時國內の一部に於て群島放棄論迄出する様な悲境に沈倫するの破目に立ち至り、此の間僅かに余喘を保つて居たのは明治二十三年（一八九〇年）南島商會に端を發した南洋貿易株式會社の原住民を対照とする主としてコブラを中心の物交貿易が統治主權の交替に依りヤルト會社に替り登場、商權の拡大を期しつゝありし独逸燐鉱株式會社を接收承継したアングウル島の燐鉱採掘事業のみであつた。

大正十一年（一九二二年）南洋廳が設置されるや、前轍に鑑み独逸の例に倣ひ群島の基本的學術調査研究を実施し此上に立脚せる諸般の施策を推進せんとし極力民間事業の導入誘致に努めた。

之と時を同じくして右に關聯し南洋興業株式會社が其の前身たる西村拓殖、南洋殖産株式會社兩社の製糖業失敗の跡を承けマリアナ群島に於ける旧兩社招致の日本人移民農民の救済と國內糖業政策寄與の要請に依り、政府並東洋拓殖株式會社の積極的助成援護を得、凡百の自然人爲的劣惡條件を克服、其の利点助長の上に立ち、遂に群島製糖業を

確立した事は群島産業に一大光明を点じたもので自然的劣悪条件の爲、大企業の投資を絶対不可能視されて居た群島に堂々と常識を超越した年産百三十万擔の砂糖生産の成果は其の後に於ける群島産業繁栄の因子であり、誘因であつて此の事は群島産業史上に不滅の光を放つものと特筆されるべきものである。

精糖業の確立に依り之が充足労力は現地に於ける原住民の寡少と而も其の勤勞度著しき遜色あり、事業安定の爲には本土よりの移入招致に依存せざるを得ず、斯くして日本人農民の移住が漸と追つて増加し、之に伴ひ自然派生的に水産業、商工業部門も漸進の形となつて來たが、就中当初島内自給の域を脱しなかつた水産業の如きは廣海域に於ける學術的調査研究の進行に連れ漁獲高の漸増を加へ其の後陸上施設たる水揚蒐荷並加工施設の整備拡大に依り飛躍的發展を遂げ、其の加工生産品（主として鯉節）に至つては優に國內需要の半を満すの盛況を呈し資源の無盡藏なると廣海域の關係上其の將來を最も期待されて居たものである。

昭和七年（一九三二年）滿洲事變勃發に続き我が國の國際聯盟脱退に依り對外關係の惡化に伴ひ、國內充足物資の増産を要請せられ、前述生産品の増産に拍車を掛くるの他、國內不足資源の調査探求に努力を傾注せる結果、昭和十年（一九三五年）パラオ、ヤップ及ボナペ島の各地に優良なるボーキサイド鉱が発見せられ、之が採掘の爲南洋アルミ鉱業株式会社の設立となり、昭和十三年（一九三八年）パラオ島より採掘を開始内地に移出其の施設の整備に伴ひ生産額も漸増を加へつゝあつた。昭和十二年（一九三七年）支那事變の勃發となり、我國四圍の情勢日増しに惡化し遂には經濟的孤立狀態に迄立到るや、前記事情は一段と加重せられ、特段の生産増加を要請せらるゝに至り、更に當時の國情に鑑み我國四圍に求めて得られざる熱帶特殊資源の探求は單一的に群島に注がれ、我國唯一の純熱帶圈としての

負荷の重きを加へ茲に熱帶特殊農作物の栽培經營が頗に盛況となつて來たが、昭和十六年（一九四一年）不幸太平洋戰爭勃發し、群島の産業も昭和十五年（一九四〇年）十六年（一九四一年）を最盛期とし漸次戰爭遂行の用度に應じ改編せられ、特に昭和十九年（一九四四年）以降に於ては戰爭の熾烈化に伴ひ全く母國と隔絶孤立狀態に陥り、諸産業を全的に改編し、食糧現地自給の一本槍となり、全く産業的に絶息狀態となり、加へて戰災の爲殆んど其の施設を失ひ事実上潰滅したものである。

以上群島の産業を通觀するに遠く明治二十三年（一八九〇年）南島商會に依る彼我の經濟的交渉を發端とし主としてコブラ等の原住民の原始的特産品との物交々易に依り始つた群島産業は燐鉱の採掘を経て大正十一年（一九二二年）精糖業の確立となり、之を契機とせる諸産業の振興、就中水産業の發展昭和十年（一九三五）當時の國情を反映してのボーキサイド發見更に國際關係惡化に伴ひ我國經濟孤立化の爲の熱帶特殊資源探求と之等企業の群島に於ける着手に依り、空前の發展を遂げたる過程を按ずるに素より資源過少にして人口過剩の我國にとつて唯一の純熱帶圈としての群島を十二分に活用せざるを得ざりし必然性はあるにせよ、自然未開の儘二十世紀に至る迄放置せられて而も産業立地上幾多劣悪條件を有する群島を粒々辛苦の末開發し、遺利を收め年額数千万円の生産を挙げ我に多大の貢獻を爲せるは事實なるも古今東西の歴史に徴し、未開地開拓の跡を尋ぬるに概ね弱少未開民族の搾取・圧迫に依り開發を進め、其の犠牲に於て産業の發展を期するを通例とし、爲に其の進行途上に於て屢々大なる摩擦を生じ紛争の赴く処其の根底をも危殆に瀕せしむるの例尠からず、乍然群島に於ては過去西、獨領時代屢次擾亂流血の慘事を惹起せる歴史を有する原住民との間に於て前述の如き産業の急速度の發展過程を辿りしにも不拘何等大なる摩擦を生ぜざりしは

官の極端と迄謂はれし保護撫育政策の現はれの一つなる事疑ひを容れざるも、其の産業経営の本質が原住民の生活の实体に付て物心両面に涉り全く異り相犯す等の事なきは勿論反つて産業の振興に依り諸施策施設の改善整備となり、彼等の文化的水準を遙かに昂め得相互依存の好景囲氣を醸成せし事は自慰するに足る事と確信する次第であるし、更に敘上の劣惡諸條件を克服し熱帶の特殊利点を伸長し本群島に斯種大産業を樹立した事は前人未踏空前の盛事であつて日本人の耐熱適格性と其の能力、勤勉は相当高く評價されて良いと思ふのである。

乍然猫額大の而も諸種劣惡條件を具備せる群島に於て原住民と何等の摩擦紛争を生ぜずして既述の如き大産業を發展せしめ、更に小なりとは言へ我國植民史上例のない原住民数を上廻る程の定着移民の導入等一連の特色ある産業的成功は根本的に我が統治政策と共に誇示するに足るのと確信する次第であるが、群島を斯様な繁榮に導きし位置並環境上の自然並人爲的條件も無視し得ないものである事を附言したい。即ち群島の位置たるや我國と南方諸國との間に位し、其の將來に向つて対南方經濟關係の疎通に當つては中継基地としての新なる使命の下に更に産業的飛躍的發展を重ね得た事であらうし、人爲的環境に付ては太平洋戦争直前の群島産業の空前の盛事には國際的經濟よりの孤立化に依り我國唯一の熱帶圏としての試験地役割も多分に與かつて居ると思ふが、以上を綜合し既成産業と共に更に將來に對し輝やかなしい形体、位置、環境を有して居た事は疑ひを容れない事不幸中道にして潰滅せるは遺憾至極の事である。

第十四章 農業

第一節 農業

南洋群島は純熱帶圏内に屬し四時高温にして氣溫比較差なく而も概ね多雨である爲、植生極めて旺盛で周年耕作が出来る爲、耕地の利用率は極度に高い等の利点を有するが地勢及地質的條件に加へて自然的休耕期のない爲、やゝもする土地酷使の弊に陥り易く地力維持に困難性がある許りでなく、恒溫等の爲に依り常時病虫害に悩まされる等の惡條件を有して居る。群島に於ける農業は之を原住民の農業と日本人の農業とに大別する事が出来るが、原住民の農業は天恵豊富な自然環境下に在る彼等の日常生活は衣食住共に其の自給充足を以て足りるのであり、文化向上の遅れて居た事等に依り全く祖先傳來の粗放農業を墨守するに過ぎず、加へて西班牙、独逸兩時代を通じて之に對する指導獎勵も右観点を出ないで僅かに新しい植物であるタピオカや、オレンジ、ニツパ椰子を移入した程度に止まり特記すべき事はない。

我が統治以下は、銳意之が改善指導を加へたが、之とても彼等の実生活と遊離して居る爲、實際上の効果を治め難かつたが日本人移住者の激増に刺戟され、その生活自体が著しく向上するに及び經濟的要求に依り極めて自然裡に其の農業に對する看心を高め來り、太平洋戦争勃發當時には從來の自給自足体形より一步を進め販賣作物の供出に至る迄に發達し、之が企業を保護助長の主旨を以て彼等自体の組合組織を持つに至つたものである。

之を觀ても良く判るがその文化程度の向上進歩に伴ふ必然的要請に基いての發達でなければ眞の發展を望まれず、西独兩時代に於ける農業始め諸般の事が未發達であつた事も等しく之に固有するものである。

日本人農業は其の頭初に於ては全く移住日本人に対する生鮮食品の島内自給を目途としたものであつて、其の發達が遅々たるものであつたが、大正十四年（一九二五年）群島産業に劃期的光明を齎した糖業の確立に依り日本人移住者の激増を來し、益々之が振興を助長したものであるが、産業的レベルより觀れば飽迄も島内消費に限られて居りそう高く評價さるべきものでない。然乍昭和八年（二九三三）我國の國際聯盟の脫退に依り國際環境の惡化に伴つて漸次經濟的孤立化をするに及んで從來輸入に依つて居た熱帶農産資源の入手が極めて苦しくなつて來た爲、我が國唯一の熱帶圈内領土たる群島が此処に着目され地積少なりと雖も之に依つて我が國の当面した熱帶農産資源の幾分なり共獲得せんとして加へて將來の南方經濟的進出に際しての足溜りとし、之が試験研究を行はんとする意圖を以て茲に群島農業は躍進的發展を遂げ、輝かしい將來を期待されたのであるが、不幸太平洋戰爭の勃發に依り從來主食品の全てを内地より移入せる群島が戦局の苛烈化に伴つて内地との交通の杜絶化するに及び大なる犠牲を拂つて全農業を主食品（主として芋類）の栽培に轉換せしめるの余儀なきに至つて終戦を迎へたものであるが、我が三十余年の統治時代を通じて資源寡少國たる我國の背負ふ必然的要求はあつたにせよ原始未資の群島をして寸志を余さざる開拓を行ひ、勤勞を以て遺利を探索して之が活用を圖つた事實は日本人の耐熱適格性は素より對原住民に對しても其の程度を格段に向上せしめたもので直間接の利点は高く評價されて良いと確信する次第である。

第二節 南洋群島の地質及氣候と農業關係

南洋群島はその位置赤道以北東經百三十度から百七十度、北緯二十二度迄の大太平洋上に散在する一千四百余の島嶼からなり、其の総面積僅に二千四百四十九平方浬の狭少の地にして其の地質は概ね珊瑚礁及石灰岩からなる島嶼で、一部ヤップ島のみが例外として古紀變質岩素の結晶變岩類から成つてゐる。この珊瑚礁から成る島々は夫々面積狭少にして地積も大方低平であつてマーシャル群島は海面上僅に五呎を出ない所もあり、また火山岩より成る地方は地勢急峻でマリアナ及カロリン群島の如きは多くこれに属する。しかしながら山嶽も大した高いものもなく、七百五十米級を最高とするに過ぎず河川も又見るべきものもない。

氣候としては悉く熱帶圈内に在る爲、四季の變化無く夏の連続で、氣溫は一年を通じて平均二十六度乃至二十七度で最高平均二十九度、最低平均二十四度で又晝夜の氣溫も殆んど変化を見ない。湿度は概して高く平均八一％に達し特に五月より十一月にかけて多濕であつて十二月より翌年四月にかけては比較的低濕の傾向が認められるが、植生に影響する程の雨期乾期の別は無い。

降雨量は全島に亘つて極めて多く、降雨の形式は即ちスコールと云ふもので此のスコールの爲に炎熱の緩和せられることが著しく。

以上の如く氣候的には恵まれて居りながら、其の土質は溫度が常に高いので土壤中の有機物は速かに分明し、頻發する。スコールの豪雨の爲に洗はれて断へず流亡する。従つて土壤は有機質に乏しく、肥培力貧弱にして折角の天然

要素も元來地力の減耗著しかるべき状態にあるに加へて群島の農法は粗放原始的であり、地力の維持に多くの関心が拂はれてゐなかつたので叢林を伐採開墾したる新墾地以外は農耕に適しない。

第三節 土地と農耕地關係

南洋群島の土地の權利に付ては元來島民は土地の所有權的なるもの植生に依る管理權、若くは使用權がなく唯行使されて居たに過ぎなかつたが、日本の占領下に置かれ大正五年（一九一六）民政令に依つて島民の土地所有權を確立し独逸時代の制度を踏襲して島民の經濟的、法律的智識の欠如に依り不測の損害を予防し島民保護をせんとして原則として官以外の者は土地の賣買、讓渡又は担保の目的に供する契約を南洋廳長間、若くは所轄支廳長の許可を受けざる限り締結する事が出來ぬ様にした。又当分の間従前の慣例に依り、且つ登記を爲さない旨南洋群島裁判事務取扱令に依つて規定したが昭和八年（一九三三）に南洋廳に於て南洋群島土地調査令を設け、土地の調査測量並に土地の所有者及其の境界を査定し同時に土地の所有權登記を爲さしめた。次いで昭和十二年（一九三七）南洋群島土地利用調査規則を制定し、昭和十二年度以降十ヶ年計画を以て土地の合理的利用方途を確立して群島産業の円滑なる發達を期する爲、土地利用調査を群島内主要島に実施しつゝあつた。之が調査の内容は実施途上のものであるが、次表の如くである。

群島の總面積は二千四百四十九方籽、即ち約二十一万五千ヘクターで内、農耕適地又は椰子林適地として推定約九万八千五百ヘクターでも既に農耕地及椰子林として利用されて居るものは八万三千九百ヘクターで、猶約一万四千六百

ヘクター余の土地があつた。而して群島内國有地は總面積六万九千八百十九ヘクターであつて、其の貸下地面積三万七千九十四ヘクターに達した。

國有土地貸下面積 昭和17年3月31日現在 (1942)

地区別	建物敷地	農耕地	椰子林	牧場	植林地	出ノ他	計
サイバン	ヘクター 166	ヘクター 18,388	ヘクター 2,391	ヘクター 772	ヘクター 1,983	ヘクター 179	ヘクター 33,879
ヤップ	2	9	499	—	—	—	510
バラオ	96	2,822	711	538	1,510	157	5,834
トラツク	7	16	248	—	—	—	271
ボナベ	52	2,152	2,653	164	1,445	1	6,467
ヤルート	7	—	126	—	—	—	133
計	330	23,387	6,628	1,474	4,938	337	37,090

土地利用調査終了面積 昭和17年3月現在

調査島名	總面積	調査面積	内				其の他
			農耕地	植林地	出ノ他	計	
バベルダオア島	町 32,101	町 18,861	町 3,165	町 259	町 10,539	町 224	町 5,157
サイバン島	12,023	483	749	—	—	—	—
バガン島	10,622	749	476	—	—	—	—
アナタバン島	2,768	476	476	—	—	—	—
ボナベ島	29,560	6,337	3,230	—	444	—	2,663

土地と
ヤツサ
種組織
劣つて
南洋
は官市
で、其
以レ
蕉、寧
めに
の栽培
群島
日本
つた

由來
務とし

ク ト	ム サ ス ス ム ム ム
--------	---------------------------------

絶体に必要な爲、群島に於ける日本人農業は先づ之の充足の爲に興つたものであつて、面積狭少、地質の劣悪、病虫害等凡百の困難下に不断の勤勞努力を以て農業経営を行ひ來たつたものであるが、之とても生鮮蔬菜は自給し得たが、主食の充足は遂に最後迄不可能であつた。

大正十四年（一九二五）群島に於ける糖業の確立は諸産業振興の基盤となり、日本人移住者の激増に従つて其の農業生産も劃期的需要増加を來したが、之とても副食生鮮品の生産に止まつて主食品の生産は出來なかつた。群島は地勢的條件に制約されて其の耕作面積の殆んど全ては畑地であり、水田に轉換出來るものが少く、而も其の面積も大でない爲、よしや其の耕地利用率が高くても其の生産には自づから限度があり、日本人の主食觀念が環境食である芋類に切替へ得られたならば別としても、之とて因習の永い事であり、副食品に比して主食の根本的交換は至難である等の事情に依ると共に内地の米穀事情も極めて安易であつた事等の爲、全面的に移入に依つて賄はれ來たつたもので、特に昭和八年國際聯盟の離脱に依つて國際環境の惡化に伴つて漸次我が國が經濟的に孤立化するに及んでは從來輸入に依つて居た熱帶農産資源の入手が漸次窮屈となつて來たので、我國領土として唯一の純熱帶圈に在る群島は当然之が窮境打開の爲に利用される事となり、鮮度維持を要する蔬菜栽培は別とし、島内需要主食品生産を一擲して専ら熱帶特殊農産品の生産に進む事となつたものではあるが、之とても地積上の制約があつて大を望めず、其の期する所のものは將來に於ける外南洋方面に対する經濟的進出に際しての試験研究を實際に実施して熱帶農業の經驗を得ん爲と群島の位置的條件が中繼並進的基地として眞に好適であつた爲に他ならないのであつて、之が爲群島農業は空前の盛況を來したものである。即ち、昭和八年（一九三三）には農業企業会社は僅に二社、南洋廳指定開拓地の入植者二十

一戸に過ぎなかつたが昭和十三年（一九三八）には十社及三百一十一戸に達し、更に昭和十七年（一九四二）には会社数十余社、入植者四百二十一戸を算ふるに至り、其の栽培はジュート（黄麻）、蓖麻、棉花、カカオ、珈琲、鳳梨、及キャッサバ等で其の試作的研究は將來に於ける外、南洋熱帶産業開發の礎石を置くものとして南洋廳としても熱帶産業研究場の設置及各島は実業組合令に依る農事組合の設置等に絶大の努力を傾注して來たが、遂ひに太平洋戰爭勃發に依り、日本内地と交通杜絶の爲、在住民の食糧及生活必需品に不足を來たし、南洋群島は各島に於て夫々自給自足の体制を採る必要に迫られ、苦心經營の折角の熱帶特殊農産物栽培耕地は殆んど一般主食農産品栽培耕地として切替られ主にキャッサバ及甘薯の栽培を爲したるもの敗戦に依つて遂に放棄するに至つたものである。

乍然我が統治以來の群島農業を通觀するに資源寡少にして人口過剩國としての我が國の必然的要請はあつたにせよ西独時代を経て尙且つ未開原始の姿であつた群島を開闢して遺利を收め、猶額大の地積に依つて甘蔗其の他農業生産の偉大な足跡を残した事は一人我國に利するのみでなく、之を大にすれば世界産業に貢獻した事となり、更に原住民に対しても直間接的に其の文化向上に寄與した事は事実を以て証するに足り、一方日本人の耐熱適格性を雄弁に物語るものであらう。

一、米

米は其の原種を熱帶に發し、純熱帶圈たる群島に於ても適作品の如く一見されるが、群島地勢は概ね面積狭少で急峻である等の爲、灌漑水利に不便である等の爲と、常時恒溫に依る病虫害の猖獗に対する方策が確立しなかつた爲、栽培上に非常に困難があり、加へて日本人々口の増加に依つて到底之が需要を充足する程の地積がなく、且つ我國の

米穀事情が極めて安易であつた爲、一向に省へりみられず加へて昭和八年國際聯盟離脱後の國際的經濟孤立化に依つて熱帶特殊農産資源の探求に押されて僅かにボナベ、パラオ島の一部に於てしか栽培されなかつたもので、群島需要の米穀は其の全てを内地よりの移入に依つて居たと云つて過言でない。

群島の米の栽培は僅かにパラオ、ボナベ兩島の一部に限られ、之とても試験栽培の域を脱せず其の質、量共に内地の夫れを比較して著しく遜色があり、地力の維持、施肥、品種改良等全く其の將來に期する事であつたが、前述の如き事情に依つて群島農業の目的の交換に依つて僅かに小康を保つて居たと云ふ現狀であつた。群島産米の生産量は昭和十二年度（一九三七）に於て三六、九六八疋金額にして七三五四円の微々たる存在であり、之の生産量の殆んどはボナベ島の水田生産に係りパラオ島の陸稻は云ふに足りない過少なものであつた。

二、蔬菜

南洋群島原住民は從來パンの実、タロ芋、ヤム芋及タビオカ等を主食とし、副食物としては椰子果鳥獸魚肉及自然果実を食して、所謂環境完全食を攝つて居た爲、有機質、ビタミン源としての蔬菜を必要としない爲、全く之が栽培がなかつたが、我が統治以來日本人の移住者漸増し其の日常生活に於て生鮮蔬菜の需用は不可欠のものであつた爲之が島内消費充足の爲起業せるものであり、爾來日本人の移住増加し遂にその人口は原住民人口遙るかに超過するに至り、蔬菜栽培之に併行して盛況を來したものであり、其の需要が全く日本人に限られて居た爲、其の栽培種類も甘藷、タロ芋、里芋類、西瓜、南瓜、胡瓜、越瓜、茄子、大根、牛蒡、葱、青菜類及其の他の蔬菜類で内地の夫れと大差なく、相当多種類の栽培が行われて居たが、何れも品質低劣にしてその差額も在住民を賄ふ事が出来ないで内地よ

り多量の移入を仰いで居たが漸時質、量共に改善され遂には全く自給体制の確立に迄進んだ。

三、熱帶特殊農産物

南洋群島農業中特に注目されるものは熱帶特殊農産物の栽培である。元來我國は熱帶各種資源に乏しかつたので全く熱帶圏内に在る南洋群島は地積小なりと雖も、日本經濟の上には極めて意義深く、殊に滿洲支那及支那事變勃發に依り國內經濟の逼迫急を告げ、更に諸外國の經濟封鎖に依る海外重要物資の輸入が杜絶したる爲、此の海外から輸入する物資の生産を南洋群島内に於て試みんとし、わが國南方發展の産業的前進基地として先づ熱帶特殊農産物の試作が行われ、熱帶産業研究所を設け其の増産に必要な研究調査を行ひ、熱帶産業經濟の確立を図つた。

イ、鳳梨（パイナップル）

群島の農作物中、パイナップルは最も重要なものの一つであつて殊にパラオに於ける栽培は南洋群島生産の大部分を占め、之が罐詰加工施設として南拓鳳梨株式会社の罐詰工場がバベルダオブ島に設けられ、農家の生産する鳳梨果実を買上げて処理し、日本内地に移出して居た。パラオ島に栽培されるパイナップルは二種に大別し、有刺の在來種と無刺のスムース・カイエン種とがある。前者は獨領当時獨逸政府に依つて移植されたもので甘味に富み、生食用として好適であるが罐詰用としては形が稍々小さく、手工による除芽が必要なので工程上の不利を免れない。又葉縁に鋭刺を備ふるため、栽培管理に際して作業者は肢体保護の裝備を必要とする不便がある。然し群島の天然環境によく適應する爲に概して強健に生育し、病虫害に対して抵抗性を有することはその一大特長と認められる。

スムース・カイエン種は果実が一般に大であつて、罐詰作業上、手工による余芽を必要とせず、味は在來種より酸

味が強いが、罐詰とする場合には砂糖を加用するから何等欠点とはならない。その名の示す如く、葉縁は無刺平滑であるから、圃場作業は極めて安易に行われる。その最も著しい欠点としては、根腐病等の病害に対する抵抗性弱く、屢々大なる被害を見ることがあることである。

鳳梨の根腐病は立枯病とも呼ばれ腐敗菌科の菌類及びフザリウム属の種類等の根部侵害によつて惹起され、葉部が顯著なる赤変、其の他の変色を現はして根は腐朽し、屢々全株の枯死を來じて大害を爲すものである。斯の被害は概ね、スムース・カイエン種に限られて居た。

熱帯産業研究所にも植物病理学の専門技術者を置き、斯かる被害の予防策に研究調査が行われて居た。然しながら罐詰製品としては一般品質が優秀であつて、また罐詰加工の工程は、はかどり更に葉縁無刺平滑なる爲、栽培管理の上に於ても便利である諸点からスムース・カイエン種の作付は増加の一路をたどつて來た。

ロ、キャツサバ

キャツサバは独逸時代に移入され原住民の主食作物として栽培されて來たが、内地に於ける澱粉需用の要請に依り茲に日本人企業として栽培されたもので群島に於ける新興農業の一である。この植物は、丈二米乃至三米に及ぶ多年生の灌木であつて大戟科に属し、根部は塊狀に肥大して一株当り一〇個前後の塊根を有し、三〇—四〇%の澱粉を含有するので澱粉原料作物として、その右に出づるものはない。

此の原産地は南米ブラジルであるが、從來熱帯各地に傳つて栽培されて居るもので南洋群島に於ける昭和十二年（一九三七）のキャツサバ塊根生産額は二六、二七二、七七一疋、三七〇、四七三疋に達し其の五分の一以上がパラ

オ諸島に於いて生産された。

島民は是を主食として居たが、日本人は此の含有澱粉の多量なるに着目して澱粉採取を目的として大量生産に移しその發展は逐年著しきものあつた。キャツサバの品種は夥多に上るが、これらを大別して甘味種と苦味種とする。キャツサバは元來其の胞細胞内容物として特殊な糖原質を含有し、これが随伴酵素の作用により分解して有毒な青酸を遊離する。需要部分たる塊根に於ける青酸含量は、品種により又同じ品種でも土地環境が異なれば苦味種ともなり、甘味種ともなる。大体その皮部と内質部とに一樣に存在するものを苦味種とし、皮部に多量で肉質部には極く少いものを甘味種とする。青酸は勿論猛毒であるから、苦味種の塊根はそのまま食用或は飼糧とする事は出来ぬ。これを豚に與へて其の中毒死を招來した例に乏しくない。然し澱粉原料としてはさしつかへない。

パラオ本島清洲村に、豊南産業株式会社の経営に係るキャツサバ塊根の切干工場が設けられ、製品を大阪に送り澱粉を製し、紡績用の糊に供してゐる。キャツサバ塊根は澱粉の含有量著しく高く、その収量が大であるから從來糊の製造の如き工業原料として、又、タピオカパールや飴の製造の如き食糧澱粉の原料として大いに利用され、尙無外アルの製造原料としても極めて有望な作物とされて居たが太平洋戦争の苛烈化に伴ひ内地より食糧物資其の他の移入杜絶の爲、在住民はキャツサバ及甘藷を主食菜せざるを得なかつた爲、其の生産は非常に盛んに行はれた。

ハ、ジュート（黄麻）

從來我が國に輸入されて居たジュート纖維は、年数百万円にのぼり、専ら各種物資包装用の麻袋の製造に用ひられて居た。此のジュートは専ら英領印度に於いて栽培せられ、その纖維は良質のものでないので、高級麻絲の紡織用に

は不適當であるけれど粗剛強靱で又價格低廉であるために麻袋等の大量製造の原料として我が國に輸入されて居たが輸入杜絶したる爲、台灣及南洋群島に於いてその栽培が行われる様になつたものである。

然し南洋群島パラオ島に於て試作されたるジュートは、ツナソ種であり、ツナソは高温多濕の氣候に適し、雨量年一二七耗以上を必要すると云われ、元來、生活力強盛な植物であつて、あまり土壤の種類を選ばずによく生育するが、結局豐沃な土壤に栽培した場合に最も成績がよく、植土では收量は大であるが、剝皮が平等にゆかず、砂土では纖維が粗剛になる嫌ひがある。唯ラテライト系の土壤と砂礫地には全く不適當である。然しながらパラオ島に於てはラテライト系の土壤が發達してゐるから、土質の点からいつてジュート栽培には最も不適當な條件にある。これが爲パラオに於て栽培されるジュートを見るに、概ね草丈の伸長貧弱であつて、各種病虫害の被害頗る多く、一般にものになつて居ない。唯小川沿ひの沖積土の畑に於いて、局部的に良好な生長を遂げて居た。

右の様な状態であつて他島に其の栽培の試作なく唯パラオ島のみに於て試験的に栽培されて居たが、結局試作の域を脱せず、ひいては之が經濟栽培に轉ずる事は不可能なる状態であつた。

二、蓖麻

不乾性油として殆ど並ぶものなき優秀な品質を有する蓖麻子油の需要は支那事変直後から太平洋戦争に至つて非常に大きくなり、内地市場の品不足は著しいものがあつた。そこで各地に於て蓖麻の栽培が勸興し、群島に於てもその増産が企圖された。從來群島の蓖麻生産は年額四、一九四担、二、三三二担でその内、七五〇担、六〇〇担がパラオの生産に係り、他は専らサイパンに於いて栽培された。蓖麻は元來暖地に適する作物であるが、必ずしも熱帯作物と

いふわけではなかつた。パラオに於ける栽培で熱帯産業研究所の圃場に於て試作されてゐた蓖麻は種々の品種に立脚し、そのうち最も栽培を極めて、殆ど全滅に瀕した事があつた。

ホ、棉花

棉花の供給を海外に仰いで居た我が國は輸入不便を來したる爲、當時支那に於ける棉花栽培が盛んとなり、我が國は技術を利用して品質の改善と其の供給不足を緩和する爲にその増産を計るべき戦前に遡る。棉花栽培の技術には原則として適度な施肥を必要とするから、南洋群島に於いて棉花の企業的栽培は不可行であつた。南洋群島に於いて棉花の栽培の試作が行われた。然し結果として、熱帯の南洋群島に經營を要する、群島に於いて棉花の試作の研究が行われた。然し結果として、熱帯の南洋群島に經營を要する、群島に於いて棉花の試作の研究が行われた。然し結果として、熱帯の南洋群島に經營を要する、群島に於いて棉花の試作の研究が行われた。

ヘ、カカオ

熱帯アメリカの原産で貴州、中南米及びアフリカに於いて多く栽培され、印度地方及び東南アジア、熱帯アフリカ、熱帯アメリカには多くの種類があるが、いづれも高温多濕の氣候を好み、特に植樹の時代は雨量を多量に必要とする。南洋群島に於ては、パラオ島の熱帯産業研究所に於て試作が行われた。然し結果として、熱帯の南洋群島に經營を要する、群島に於いてカカオの試作の研究が行われた。然し結果として、熱帯の南洋群島に經營を要する、群島に於いてカカオの試作の研究が行われた。

ト、咖啡

咖啡は南洋群島に於ては、通産し、古くより植栽せられた模様であるが、之も主として自家用に供せらるゝのみで、其の産額もまた多くはない。昭和十二年（一九三七）の産額は二六四、二五一担。一八、二二四担に上るが、その大部分はサイパン群島に於いて生産せられ、パラオの産額は、僅に六八三担、四五五担に過ぎない。なほ其の他本群島に於ては、一、二五担の産があつた。

南洋群島で栽培せられた品種はリベリア種であつて、本種は樹高四〇尺前後に達し、果実は褐色で、熟してもアラア種に如く落ち易くない。果実は楕円形を呈して、長径一寸に近い大形のものである。

南洋群島に於ては、咖啡栽培者には昭和二年（一九二七）以降奨励金を下付して斯業の發達を図りつつあつたが、試作の地を脱せられず、管理等の点に於ても甚だ幼稚なる状態であつた。

第六節 畜産

一 概況

南洋群島内に飼養さるゝ家畜は牛、豚、山羊及鶏等である。是等の家畜は古くより飼養されて來たが、群島は元來河川、沼沢に乏しく、且面積が狭少のみならず、加へて原住民は素より日本人の需用も其の蛋白質食品は主として魚食に仰いだ關係上、其の飼養に意を用ひず、従つて牧畜として見るべきものなく、その品種も亦良好でなかつた。然るにサイパン島に於ける蔗作關係及各島に於ける人口の増加に伴ひ、役用、肉用として牛、豚の需用頗る増加するに至つたので南洋廳は大正十一年（一九二二）九月、南洋廳令第二十一号を以て、畜産奨励規則を制定して、家畜

を飼養し其の蕃殖を図る者に対して奨励金を下付し、品種の改良増殖を図りつつあつた。又パラオに於ては、産業試験場（後の熱帯産業研究所）に優良品種を飼養し、試験すると共に無償で種付を爲さしめ、或ひは仔豚の拂下を爲し

サイパン支廳に於ても昭和四年（一九二九）以來官有種牡牛を又昭和六年（一九三一）以來、官有種牡豚を、希望者に貸與して管理費を補助して無償種付を爲さしめるなど、凡て品種の改良に用ひつつあつた。

二、牛

牛はサイパン島に多く、運搬農耕の主として役用に供せられ、糖業の發達に伴ひ、其の需要益々増加しつつあつた。尚ほ各種産業の發達に伴ひ、一般人口の増加を來し、パラオ、ボナペ島にも其の飼養を見るに至つた。クサイ島には早くも独逸時代移入されたと謂われるが、其の品種は概して良好でない。総じて群島内に於ては、搾乳牛又は食用としてよりも、寧ろ役牛として飼養される場合が多かつた。

三、豚

豚はひろく群島一般に飼養され、群島離産の最たるものであり、之が飼養は群島全般に普及して居る。品種は主としてパークシヤー種、在來種及兩者の雜種であるが、在來種は品種劣悪な爲漸次自然淘汰され、パークシヤー種の如き優良種の飼養が盛となりつつあり、日本人々口の激増に依り之が飼養は愈々盛況を來しつつあつた。

四、山羊

山羊はサイパン、パラオ、ボナペ各島に多く原住民は之を食用として珍重し、且つ椰子林間の放牧に好適なので原住民の飼養が盛んであるが、其の飼養管理が極めて容易である爲、日本人農家に於ても漸次之が飼養する者が増加の

種を移した。

五、鶏

豚に次いで廣く飼養されて居たものであるが、其の品種は在來種單冠白色レグホン種、名古屋種及之等の雜種であるが、在來種は野性に近く産卵率極めて低く肉量も又尠い爲、漸次淘汰され南洋廳及日本人移住農家等の積極的努力に依つて内地優良種の移入と之が育成に依り著しく改良の実績を示し、原住民飼養鶏に於ても豚と同様に品種改良の徹底を見たものであつた。

六、水牛

ホナヘ島の豊水地域に於て飼養する向が増加し、同島の如く多雨地域の役畜としては極めて囑望されたものであるが、未だ其の数は多くなく、其の増殖は全く其の將來にかゝつて居た。

第七節 農畜産業施設

群島農畜産業は群島産業として著しい發達を遂げたのであるが、其の施設、經營上に幾多改善合理化を図るべき点は何多々あつたので、南洋廳としては内外の情勢に對應する爲、各種施設及經營改善合理化方策に対する奨励助長政策をとるの他、熱帶特殊農産物、自給作物の栽培、増産に対し奨励金を交はすと共に一方、熱帶産業研究所をして品種改良、病虫害対策、肥培管理等各般の調査研究を行はしめると共に優良種苗、品種の育成と一般に對する普及実施せしめ群島農畜産業の改善と發達に積極的寄與せしめた。

一、一般農産奨励

- A 群島の農業經營は地力維持の關係と有畜農業を以て基調とする必要があり、之が爲家畜購入、畜舎建設等を奨励助長の爲、官より之に奨励金を下付した。
- B 地力の維持並増進はその消耗激しい群島農業に於て絶体必須條件であり、之の爲土地改良施設、推肥製造、綠肥栽培、肥料溜設置等を奨励して官より之に奨励金を下付した。
- C 指定開拓地に對しては其の本來の使命が開拓に在るので開墾に對しては栽培作物の如何に不拘、一樣に官より奨励金を下付した。
- D 從來より群島農家經濟は殆んど販賣作物に倚存し、自給作物の栽培等を閑視の嫌ひがあり、農家經濟の安定上支障のある事が認められたので、水陸稻、豆類其の他の雜穀類、甘藷、蔬菜の栽培並開田を奨励し官より之に對し奨励金を下付した。
- E 農業經營の改善合理化を図り、農家の福利を増進せしめるには其の協同化を強化するの必要があり、共同倉庫、蔬菜類の共同販賣所、共同肥料溜等の共同施設を奨励し官より之に對し奨励金を下付した。

二、熱帶特殊農産品の増産奨励

昭和八年我國の國際聯盟離脫以來の國際環境は惡化の一路を辿り、遂に經濟孤立化を招來した爲、從來輸入に依つて賄はれた熱帶特殊農産品の國內自給の一端を補ふと共に將來の南方經濟進出の試験地的使命遂行の目的を以て、極力之が増植増産を期する爲、キャッサバ、トバ、バルサ、黄麻、草棉、蓖麻等の栽培の奨励助長の爲、官より奨励金

した。

三、畜産奨励

大正十一年南洋廳設置以來、蕃殖用牛豚を官營を以て飼養する一方、仔豚、犢牛を生産する者に対し官より奨励金を下付し、又は官有種牡牛豚を貸付して之に飼養管理費を支給して無償で種付を行はしめたり、或は熱帯産業研究所で育成した特牛豚を一般に貸付する等、畜産の増殖と品種改良で努力を傾注して來たが、需要増加に直面して一層之を必要としたので遂に昭和十二年、新に南洋廳に於て畜産奨励規則を制定公布し、一種牛豚の購入、畜舎の建設、並に畜産共同施設に対し官より奨励金を下付した。

四、病虫害防除並植物検査

南洋の自然環境は植物の各種病虫害の發生、蔓延に好適で、一度之の發生を見れば其の禍害は甚しく猛威を振ふので対処する爲、南洋廳に於て大正十三年病虫害駆除予防規則を公布し、之に基き官より補助金を下付して防除に努める一方、昭和八年植物検査取締規則が公布せられ、輸入種苗に依り病虫害の侵入を防止する爲、輸入港に於て植物検査を実施した。

熱帯産業研究所に於ては病虫害に関する諸種の學術的試験研究を行ひ、之が移轉傳播の防止に努めて居た。

五、熱帯産業研究所

群島に於ける農、畜産、林業に関する試験研究機関として大正十三年パラオ諸島コロール島に南洋廳所屬官署として熱帯産業試験場が設立され、爾來農林、畜産に関する基礎的調査試験を実施して斯業の發展に寄與する処頗る大であつた。

たが昭和八年我が聯盟離脱以來の我が國の当面する孤立的苦境に対応し、昭和十一年勅令を以て獨り群島のみでなく汎く内外南洋に於ける農、畜産、林業及鉱業に関する研究、調査、試験分析、鑑定等を実施する目的を以て茲に新に南洋熱帯産業研究所が設立され、從來の産業試験場は發展的解消を遂げた。

熱帯産業研究所は從來の産業試験場に比し、其の規模組織及内容に付て全く格段の相違があり、之が爲從來の施設に於ては十分に機能の發揮が出来ないので、遂に昭和十三年バベルダオブ島に廣大な敷地を得、移轉の事となり昭和十七年（一九四二）に於て移轉完了し、本格的機能發揮の段階に立至つたが、不幸太平洋戦争の勃發に依り挫折し貴重な學術資料の殆どを失つた事は痛恨事である。尙同所は旧産業試験場時代よりサイパン、ボナペ各支所を有し、土地利用並に農作物の適否試験を行つて居たもので特に糖業地を控へたサイパン支所の如きは甘蔗の優良品種の交配に屢次成功し斯業に貢献した事等は特記すべき事項であらう。

六、指定開拓地

人口が稀薄で未開地多い地方に日本人農業移民を招致して之が開拓を行はしめれば、少なりとも我國の当面する人口問題に寄與し得る許りでなく、群島農業の恒久的安定を期し得る等の爲、大正十四年以降パラオ諸島バベルダオブ島四ヶ所（瑞穂村、朝日村、清水村、大和村）ボナペ島に一ヶ所（春來村）の官設の指定開拓地を設定した。

指定開拓地には自作農として定着すべき堅実なる日本人農業移民（家族持に限る）内地全國より撰拔を招致し、一戸当り約五町歩の土地を無償貸付し、開拓成功後は其の農地を無償にて譲渡する事となつて居た。

植各農家は何れも鳳梨、キャッサバ、黄麻其の他の纖維作物、トバ、カカオ、蔬菜類、甘藷、豆類、雜穀類及水

南洋群島の特殊生産品や、自給作物を栽培すると共に地力維持の爲、自給肥料方策を堅持して家畜家禽類を飼養し、農産物を經營しつゝあつた。南洋廳は之等移住農家に対し格別の保護助成を與へて之が円滑なる發展を助長したものである。前述の（イ）一般農産奨励に示された各号の奨励金は之等農家の孰れにも該当し、補助を受ける、移住農家の定住の爲、移住者指導所學校、病院又診療所を官に於て施設し、更に農家としての福利増進を図るを以て目的とし、移住農事組合が結成され、農事用共同施設が漸次整備される他、部落内の公共的事務處理と公共的施設整備を期し、精神の涵養を兼ね、南洋群島部落規程に定められた部落に準じた部落制を認められ、南洋群島地方費よりの補助金を受け部落事務を執行し公共施設の設置維持管理を行つた。

以上一連の官よりする補助助長方策に依り入植者も漸やく安定の域に達し、其の農畜生産品も劃期的に増大したものである。尙之等指定開拓地の内容は次の通りである。

(昭和17年3月現在)

地	名	区劃地名	区劃面積	貸付面積	開墾面積	区劃戸数	入植戸数	設定年月日
パラオ本島	アラヤ村	瑞穂村	町 380	町 323	町 227	戸 70	戸 62	大正14.3
パラオ本島	アルモノグイ村	朝日村	603	569	481	103	97	昭和2.6
パラオ本島	カイジヤル村	清水村	709	582	438	115	104	昭和2.2
パラオ本島	アルモノグイ村	大和村	552	324	102	93	70	昭和14.9
バナハ島	パルキール村	春來村	594	434	282	115	88	昭和3.6
計			2,838	2,232	1,530	496	421	

第十五章 林 業

第一節 概 説

南洋群島の森林の概貌は全島盛く鬱蒼たる森林に覆はれ、一見千古斧鉞を入れない美林を想はせるが、其の内容的には貧弱で殆ど全ての陸生林は雑木の混淆林であつて有用樹木の蓄積が極めて少ない。

之は自然的條件として各島概ね地積狭少で且つ地質的にも安山岩玄武岩、若くは珊瑚礁等の爲、立地條件が悪いのと加へて原住民自体の文化程度が非常に遅れて居た爲に燃料や建築用材等の必要が少かつた事に因有して大森林を構成する要素に欠けて居たからであらう。

全然原住民自体として全然之に無着心であつたかと云ふとそうではなく、彼等が現在に残すアバイとか戦闘カタト等に依つて見ても直通無節の素材を使つた点等より考察して、特定樹木に対する間伐管理等の手法を自然に感得して実施した形跡があるし、特に彼等の生活に不可欠の存在である古々椰子の栽培等に就ても遅拙ではあるが、或る程度の栽培管理があつた事が窺はれる。

群島が文明との接解を始め、程なく西班牙三百五十年余の統治下中は即ち栽培に対し指導を行つた様であるが、大した事もなく終り次いで独逸の統治下となり、同國は基本的學術調査を行ひ特に全群島に亘つて植物調査を実施し之に依り当時マーシャル群島ヤルト島を本拠として居た特殊会社ヤルト会社のコブラ交易に依る商權拡張に寄與

す。原住民の経済の確立は古々椰子栽培以外に拠るものなしとの政策的見地より椰子栽培の奨励を相当積極的
に実施したもので、当時のカリン、コプラは同國ハンブルグ市場に於ても相当の名声を博したものであつたが、之
も椰子栽培以外に出でず他は全く閑却されて居た。

大正三年（一九一四）世界大戦の結果、群島が我國の占領する処となるや逸早く堀田政道、石丸文夫、革野俊助氏
等の國植物學界の権威を群島に派遣し、実地踏査の結果、有用樹木の保護の爲禁木並濫伐防止の手段を講じ、次い
て大正十一年南洋廳の設置せらるゝや、同年南洋廳令第十九号を以て椰子栽培奨励規則を公布して椰子樹の増殖並裁
培管理の向上に資せしめる一方、學術的の調査研究を完璧ならしむる爲産業試驗場の内に林業科を設置した。

乍然之迄の所謂林業対策の主旨は全く椰子の問題に限られて居たのであつたが、大正十四年（一九二五）マリアナ
群島サイパン島に於ける糖業の確立以來、群島産業の躍進的隆榮に伴ひ日本人渡南者の漸増を來し、之が爲建築土木
用木材及燃料用材の需要が激増して來た爲、先づ南洋興發株式会社に於て同社創業（大正十一年（一九二二））と共に
サイパン島にカマチリ樹、相思樹を植林したし、昭和八年（一九三三）には官營を以てサイパン島の草生地に相思樹
、麻黃を植林し、更に昭和十一年よりパラオ及ボナペ両島に前者は草生地に相思樹木麻黃を後者は伐跡地にタマナ、
ウカール、タガヤサンの造林を実施し成績良好であつた。

昭和十二年（一九三七）支那事變勃發以來、我國に対する國際環境の惡化に依り、從來輸入に依つて居た熱帶特殊
林産資源も杜絶の有様となつて來たので茲に於て我國に於ける唯一の純熱帶圈たる群島の林産資源探求が眞剣に採り
上げられ、昭和十三年以降に於ては椰子栽培、現地自給用材に加へて國內需要充足用熱帶林産資源の活用生産の段階

に入つたものである。

第二節 林 況

群島は純熱帶地である爲、氣候的には一般に林木の生育極めて旺盛であるが、地積並地質的の制約があつて森林の
規模は小さく、且つ有用大徑木の蓄積は少ない。

従つて用材林としての價值はさして大でないが、油脂纖維、タンニン原料等の資源的價值は我國内事情よりすれば
極めて重要なものであつた。

而して群島の林況は其の立地及樹種に依つて之を一般陸生林と紅樹林及椰子林の三種に大別する事が出来る。今各
別に其の林況及事業内容を述べれば左の通りである。

一、一般陸生林

一般陸生林は其の面積七万町歩蓄積三千五百万石と推定されるが、概説に於いて述べた自然的制約を受け純熱帶圈
下に在り乍ら所謂壯麗な林相は見られないで、大体濶葉樹天然林に依て針葉樹林がないのが普通である。

樹種は地域に依り多種多様であるが、用材樹種としてはタマナ、モモタマナ、ウカル、太平洋鉄木、紅紫檀、アム
クラアル、カシモロコ、ブラキオス、アンムイ、トオン、カロリンシマボウ、ヌヌ等があり、薪炭林樹種としてはア
イス、ウドイド、カロリンアカテツ、カラビオブ、バイバイ、ランゲイテ、カララ、セタツク等がある。

乍然一般陸生林及後述するに樹林に対する林業施策は極めて幼稚であつて在來の天然林を伐採し、地元消費として

南洋興發株式會社が土木建築用材に充用する主目的とし、之が造林に就ては企業的經營を爲す者がなく、僅かに南洋興發株式會社の自家製糖工場の補助燃料充足を主目的とした造林を行つて居るのと、原住民の需用確保の爲ヤップ、パラ友トラツク島に於て原住民團體が官の指導獎勵を受けて若干の造林を爲して居るのに過ぎない有様であつたが、南に於ては各地域の薪用材需給の現状と將來並荒廢地の復旧利用を考慮して昭和八年（一九三三）以降サイパン、ハラオ及ボナペ島に於て毎年二百町歩二万八千四程度の造林を実施して來たものである。

二、紅樹林

紅樹林は其の面積一万五千町歩蓄積四百六十万石と推定される。

紅樹林は泥土の堆積した地先淺海中にのみ自生繁茂し、群島に於ては稀有であるが單一美林相を爲して居る。

紅樹（マングローブ）は島の外縁の泥土が淺く風波のある海面では生育が悪く、灌木林狀を爲して居るが、陸地に近接して泥土の深い海面に於ては生育可良で概ね喬林を爲して居るのが普通である。

樹種としてはオホバヒルギ、フタバナヒルギ、コヒルギ、オホバナヒルギ、ホーガンヒルギ、ベニバナヒルギ、ベニガクヒルギ等があり、右の内オホバナヒルギ、ホーガンヒルギの大径のものは建築用材及家具用材として賞用されるが、其の蓄積が少く、其の大部分は薪炭用材として火力の強い処より重用せられ、其の他耐水性の強度であるの利点に依り足場丸太及杭用材として用ひられる。

又其の樹皮中には一二%乃至三九%（表皮を除去した商品に付いては平均二五%程度）の單寧（タンニン）を含有して居るので、我國内のタンニン資源の不足の狀況に伴つて南洋廳に於て之が増産計画を樹て其の成果の昂揚に努め

昭和十五年南洋タンニン株式會社が設立され、之に紅樹現在林を拂下げ、本事業の進展に寄與すると共に伐採跡地には官營造林を実施して居た。

三、椰子樹林

椰子は其の分布全群島に亘り、各島の沿岸地帯は殆ど椰子樹を以て蔽はれて居ると云つて過言でなく、其の面積は三万一千町歩と推定される。

本樹種は原住民の実生活に不可欠の存在である爲、植栽の歴史も古く他樹種に比べて西班牙、独逸兩統治下に於ける指導も又進んで居る。

本樹種に限り殆ど植栽されたものであるが、其の經營者の大部分は原住民であり、科学的植栽並管理に遅れて居る爲に、合理的施業法に遠く徒らに立木本数の多いのを以て貴しとして居る有様であり、且つ管理が充分でないので後生樹の簇生と雜木の混淆に依つて天然林の林相を呈するに至つたものが尠くない。

元來群島に於ては町当椰子樹植栽本数を百五十本とするのを適度として居るが、實際植栽本数四百本を超えるものがある。

従つて採光、通風惡く之に伴ひ害虫の蔓延を來し易く、成育及結実成績も惡く昭和十七年當時に於てさへ町当コブラ年産量は半匁弱と云ふ有様で、合理的經營の半量にも達しない貧弱さである。

元來コブラは群島の特有主要産物である許りでなく、前述の如く其の生産の殆どは原住民の經營に係るものであり言葉を替へれば原住民の唯一最大の産業であつて、彼等の經濟生活の基本を爲し、之が消長は其の生活に至大の影響

を招来するものであつた爲、南洋廳に於ても單に産業上の見地のみからでなく、廣く統治上の観点からも之が生産指導育成に不斷の努力を拂つて來たもので大正十一年（一九二二）南洋廳設置と共に椰子栽培獎勵規則を公布實施して椰子樹新植に就ては町当百本乃至二百本以内の者に対し金二十円以上、既成椰子園の間伐補植雜草木の刈除に對しては町当十円以内の獎勵金を交付し、椰子園の好能率化を図るべく努めると共に、尙コブラ加工々程に遺憾の点があるのを發見して之が品質の改良を図り、粗製品の追放を目的とし昭和七年（一九三二）コブラ輸出取締規則を制定して移出検査を爲し、一定標準以下のコブラは移出せしめないことし、更に昭和六年（一九三一）からはコブラ乾燥場の建設を獎勵し同規則に之を附加して其の建設費の四分の一を官に於て獎勵金として交付する等の方法に依り積極的に推進し改善の実績を收めた。

昭和十二年（一九三一）支那事變勃発の結果、我國に對する國際環境の惡化は我が國經濟の孤立化となり、之が爲外南洋方面よりのコブラ輸入梗塞に依り本需要は全て当群島に向けられ、之が爲南洋廳に於ても劃期的増産を決意して其の指導獎勵施設を強化する一方、更に之を強力に推進する爲、各支廳管轄区域を單位とし椰子栽培業者及コブラ輸移出業者を以てコブラ同業組合組織した。之はコブラの増産と品質改良事業の指導獎勵と実行、コブラ取引の改善等を行ふ事を目的とした自主的統制機關であつて、更に昭和十四年よりは南洋廳の實施して居た移出検査も同組合に移管されて南洋廳の施策と相待つて劃期的成果を收めたものであつて大正三年（一九一四年）當時寥々たるコブラ移出も昭和十五年（一九四〇年）には群島移出品中砂糖、饅頭に次ぎ第三位を占め、其の金額二百四十万円を算するの盛況に立ち到つたもので、更に其の將來を按ずるに原住民に對し之が栽培管理加工方法を科學的に合理化する一方、

之が蒐荷方法に一段の創意工夫を注げば外南洋産出コブラに比し、生産率及品質に付いて遜色なき程度に迄到達する事は左程難かしい問題でなかつた事を確信する次第である。

第三節 熱帶特殊林産資源

群島に於ける一般陸生林の内容は前述の如く其の立地條件の制約に依り、極めて有用樹種が量的に少い事であり、随つて用材として之を見る時は其の利用價值極めて寡少であり、他産業に比して群島林産業の立ち遅れも一つに茲にかゝつて居たものであるが、昭和十二年（一九三七年）來我國經濟の國際的孤立化に依る熱帶林産資源の國內需要は挙げて群島に求められ、之が爲昭和十四年（一九三八年）來南洋廳に於ても五箇年計画を以て熱帶特殊林産資源調査を開始すると共に適當なる事業者をして逐次、企業化せしめる如く助成したもので之に依り事業開始となり、其の將來を期待されたものには次の如きものがある。

一、カラオ樹皮

和名「オホハマボウ」の樹皮であつて黄麻及マニラ麻の代用品として重用されて居るもので全群島一般陸生林中に自然混淆し蓄積量も多く、之を合理的に徹底利用の方法を講ずれば年産数千吨の樹皮の生産を見込まれたものである。

二、アイス顆

アイス顆の仁からは一種の乾性油が得られるが、斯の乾性油は支那産桐油の性能に優るものである事が試験証明さ

利用として多方面に本油の用途が発見されるに至つたのでアイス樹の植林は極めて有望視された。元來アイス樹はラオ諸島バベルダオブ島及ボナベ島の自然一般陸生林に相当生立して居るが、昭和十五年（一九四〇）熱帯油脂株式会社の手により、バベルダオブ島に一三〇〇町歩程度の植林計画が企業化されて居た。

三、コイルファイバー

椰子果実の繊維で棕櫚と相似し、粗剛強韌耐水性に強い爲、刷子、マット、ロープ、漁網等に利用價值が高い。大抵本品は島民手工品として其の歴史は古いが飽迄自家用程度の生産しかなかつたもので極めて微々たる存在であつたが國內需用の激増に依り採算もとれ、急に盛となつて來たが勞力、資材蒐荷輸送等に隘路多く、其の所期の成績を得なかつたが、其の原料の豊富なる事より本事業の將來性に就ては大いに期待されて居たものである。

四、椰子殻炭

椰子殻炭は椰顆の内核を原料とし製炭せるもので、之が活性炭として極めて優秀な性能を有するものである事が判明した。

從來より本品は燃料とし各地元に於て消費されてはいたが、活性炭としての製造は未完成であつて、内殻の儘若干内地に移出した程度で大した事はなかつたが、其の原料資材の豊富な事に鑑み其の將來性を期待されて居た。

五、椰子葉纖維

原住民婦女子の副業生産品として其の歴史が古く所謂、マーレヤルパナマとして帽子原料用や製品として相当内地に移出されたが昭和十二年來戰時体制の強化に依り、漸時其の製造を圧縮され、従つて群島に於ける之が生産も不振

となつたものであるが、原住民經濟の多角的確立の観点よりするも又其の品質佳良にして原材料の豊富なる事よりするも極めて將來性を期待されるもの、一つであつた。

六、バルサ（軽量木材）

本樹種は南洋廳熱帯産業研究所の移入試作に依り群島に於ける生育は極めて良好である事が立証されたもので、其の品質は未だ外南洋生産品に及ばなかつたが、當時の國內需用に應ずべく生産計画が進められたものであつたが、企業化せずして終つたものである。

乍然群島の氣象的自然條件はバルサに適し、其の生育極めて早く企業の將來性に付いては相当期待を持たれたものである。

第四節 群島林業の將來性

群島林業は既述の如く其の立地條件に大なる制約を受けて居る爲、森林の規模は少で、且つ有用大径木に乏しい事に依り用材林としては寡少價值しない事は自明の理であつて、之が爲他産業に比し其の進展が極めて遅々であつた事は否めない事實である。

乍然昭和十四年來南洋廳熱帯産業研究所の着手した熱帯特殊林産資源調査の結果に徴しても判然する如く、副次的林産資源に付ては未だ其の根本に触れられて居ないものであり、既に其の利用を発見されたものであるのを見ても極めて有用にして企業價值に富むものが多い事に鑑み、向後斯の方面に対し徹底した措置の講ぜられる限り其の成果を

期待し得る事が常識的考察であらう。——他産業に比し非常に遅れて居た丈に所謂未開自然の姿であり、向後の開發に待つ処が大である事を確信される。

第十六章 糖 業

第一節 糖業確立迄の経緯

南洋群島に於ける甘蔗栽培の起源は相当に古いらしく群島の始めての文明との接觸期である十六世紀の初頭マジエランのマリアナ群島発見の際、既に原住民が之を生食して居た事を傳へらるゝも其の後西班牙並独逸兩國の統治時代を通じて全く之を企業として取上げ得ないで居た爲、従つて糖業としては何等見るべきものがない。

大正三年（一九一四）我國の南洋群島占領に伴ひ我國領土としての唯一の純熱帯圈に屬して居る群島は好箇の投機対照となり大正四年（一九一五）より同八年に亘つて続々南洋企業の成立があつたが、熱帯に対する未知無經驗に加へて大正九年内地に於ける經濟反動に依り其の殆どが瓦餅に歸した。

群島開拓史並産業史に欠く事の出来ない地歩と意義を齎らした糖業も御他聞に洩れず其の軌を一にしたものであつた。

即ち群島に於ける糖業は大正六年（一九一七）二月山口縣下関の漁業家西村惣四郎が南洋に於ける捕鯨漁場開拓の目的を以て渡南せる処、製糖業の有望なるを聞きサイパン島ヒナシスに西村製糖所を設立した事に始り、所要勞力五百人を山口縣より導入し大正六年より同八年（一九一七—一九一九）に亘り土地三百町歩を開墾し甘蔗は在來種と台灣より移入した爪哇種一〇五号を植栽し百五十屯製糖工場を建設したが、蔗莖の殆どが赤腐病を起し加へて未經験者

の製糖処理に依り砂糖として結晶せず飴狀の所謂牛糞糖となる様な失敗を演じた。

大正八年（一九一九）同社は組織変更し、資本金五百万円とし陣容を新にし更に第二回の製糖に入つたが品種劣等害虫の蔓延で多少の白下糖の製産はあつたが又しても失敗に歸した。

乍然大正九年内地に於ける分蜜糖一俵五十円の暴騰に力を得て、社運挽回を一挙に決せんとし同年第三回の製糖に入つたが根本的欠格條件が不明の儘、何等改善されなかつた爲効果を挙げ得ず、更に同年九月よりの経済恐慌に依り糖價の慘落を來し、遂に創業の榮を得ず挫折した。

之と併行し大正五年（一九一六）東京市に於ける事業家たる尾高次郎を中心とし南洋企業組合が設立され表南洋ポルネオ、サンダカンに於ける椰子栽培とフィリッピン、ダバオの麻栽培及裏南洋サイパン、テニアン両島に於ける製糖を爲すを事業目的とし大正五年末（一九一六）には更に之を南洋殖産株式会社として資本金百五十万円を投じ、主力をダバオの麻の栽培に注いだが、ヒリッピン官憲の圧迫と麻相場の変動で致命傷を蒙りつゝも大正六年（一九一七）サイパン島の北部で小作制度を採り、東京府内の小笠原島と八丈島より八十戸其の他三百名を入植せしめ、四百町歩の開墾を完成し、西村の場合より一層規模を縮め六十屯製糖工場を建設し、大正七年第一回製糖を開始し、三百樽程度の白下糖の生産を見たが、同社は会社經理の拙劣の爲大正九年の経済恐慌の爲一溜りもなく潰滅した。

右の両社と期を一にして群島の確立安定と糖價の暴騰に依り加へて台湾糖業の行詰り打開を策して台湾糖界の群島進出が競はれ、各社に於て実地調査を遂げたが、ボナベ島に於ては多雨害虫の爲サイパン島に於ては同島泊地眼前に聳ゆるタツポーチョーの山容を望見し、地勢急峻にして可耕地なしとの見解を抱き悲觀的な見透ししか持てなかつた

が大正十年（一九二一）元台湾新高製糖株式会社の重役であり、有数の糖業技術者である松江春次が渡南し、サイパン島実地踏査の結果、同島タツポーチョー山の背後に大可耕地のある事を発見し、起業の見込ある事を確認したものである。

当時のサイパン島は大正三年（一九一四）の暴風に依り同島に於ける全椰子樹が潰滅し、之を主食とする原住民の生活を脅かし居りしに加へ前記西村製糖及南洋殖産兩社の事業放棄に依り両社の手に依り移入された千名余の移民は事実上生活の資金を絶たれ生色なく、餓死寸前の死の町を現出し由々しい社会問題惹起の恐れあり、加へて群島が正式に委任統治領となりて僅かに年余國際關係の注目を惹き易かつた時期でもあり、当時直接責任のあつた臨時南洋群島防備隊民政部に於ても大いに焦慮し、之が打開安定の爲同地に新規事業を興し当面の難民救済を図ると共に將來群島産業の基盤を打込む爲關係方面に力説し、特に中央政府を介し東洋殖産株式会社に積極的に働きかけた。

同社に於ても同社の使命に鑑み國策上之を放置し得ず、現地調査を爲すと共に其の際サイパン島の実地踏査より帰つた松江春次に臨時南洋群島防備隊手塚民政部長と鼎談した。

東拓に於ては現地調査の結果、群島に棉作を適策とする事に傾いて居たが、松江は棉作不適を強調し自然的環境に鑑み甘蔗栽培の絶体好適なるを強調した結果、漸次之に傾き之が第一着手とし移民救済を爲す爲西村製糖南洋殖産兩社を整理し、大正十一年（一九二二）十一月二十日東拓を背景とし茲に資本金三百万円（全額拂込済）を以て南洋興發株式会社が創立され群島糖業更に一步を進めては群島産業確立の第一步を踏み出したのである。

同社は先づマリアナ群島サイパン島に蔗園三千町歩、千屯能力製糖工場及輸送路たる鉄道五十哩を一應の計画目標

労働力は従來の西村製糖及南洋殖産兩社よりの引継いた移民千名を中核とし、之に不足する労力二千名を内地に於て最も人口稠密し、而も海外思想が発達し加へて自然環境の近似せる沖縄縣に求め、大正十一年（一九二二）中に純労働力の二千名を導入し開墾建設に當つた。

開墾予定地は單位を十二町歩とし長方形に区劃し周圍に幅三間の防風林を残し、中に東西に一本南北に二本の二間幅の農道を切り、一筆二町歩宛に六等分も小作人一戸に対し普通二筆、即ち四町歩を割当て家族數に應じて更に三筆乃至四筆以上の割当を行ふを立前とした。

同社は先づ前会社より承継せる八百町歩の蔗園に新に五百町歩を開墾し、之にローズバンブー種及在來種を植付け之が栽培管理の爲、最初の小作人二百十戸を決定入植せしむる一方、製糖工場は大正十一年（一九二二）六月着工同十二年三月延人工十三万余人を要し、茲に最新式の千屯能力工場を落成し、甘蔗輸送用鉄道三十哩を完成せしめ、其の第一回製糖に當つたのであるが、品種の劣等、箴象虫の蔓延並後芽処理の不徹底等の諸原因よりして蔗莖の殆どは赤腐病に罹り製糖結果は歩留り三・七五生産高二〇、九七〇担の慘憺たる成績に終り、更に翌大正十三年（一九二三年）第二回の製糖も如上の原因に煩らはされて歩留り五・五生産高六万担の成績に終り、加へて大正九年末（一九二〇年）よりの糖價下落と大正十二年の関東大震災に依り会社が倉庫焼失し、爲に出荷製品の全てを失ふ等の相次ぐ打撃を蒙り、又しても群島糖業の前途に暗影を投じ慘憺たる悲境に沈淪するの己むなきに立至つた。

第二節 糖業の確立

右兩回の失敗の跡を探索し品種の改良と箴象虫の虫害を防除せば、群島の天恵は必ずや糖業確立を來すべきを確信し、凡百の困難と戦ひ刈取蔗莖の焼却消毒するの他、箴象虫の捕殺を勵行し、更に同虫の天敵たるタキニツトフライを布哇より輸入する等之が撲滅策を講じ、品種改良に付いては従來のローズベンブー種及在來種が箴象虫害に脆く、且つ赤腐罹患率多く而も歩留り惡きに鑑み、之を一擲し害虫抵抗力強く而も歩留り良き新品種（UGIPOJ）、を台湾より移入更新して茲に大正十四年第三回の製糖を開始し、堂々歩留り八〇産糖十五万担の成績を收め群島糖業を確立したものである。

群島産業史に不滅の記録を印した大正十四年（一九二五年）の群島糖業の確立は單に南洋興發株式会社の隆榮に寄與したのみでなく、此の事こそは従來より危懼されて居た群島に於ける大企業操業の可能なる事を雄弁に立証したものであつて、此の一石こそは群島諸産業興隆の基盤であり、出発点であり、其の後我が國經濟並人口問題に貢獻すると共に群島自体の政治、經濟、文化の凡ゆる面に重大な寄與をした事に極めて重大な意義を持つものであつた。

爾來会社に於ては害虫の徹底的撲滅と品種の改良に依り、順調なる發展過程を辿り大正十四年より昭和四年（一九二五—一九二九）の間は大体十五万担より二十万担程度の産糖を続け、更に昭和四年テニアン島に於ける喜多合名会社を買収し、事業を拡張すると共にサイパン、テニアン兩島共品種を更新し爪哇大莖種を採用し翌昭和五年（一九三〇年）には製糖能力千二百屯のテニアン製糖所を建設し、旧サイパン製糖所を改善しテニアン製糖所と同等能力となし同年三十五万担翌昭和六年よりは優に六十万担以上の成績を收め遂に昭和十六年（一九四一年）には百三十万担以上の生産となつたが、不幸太平洋戦争の勃發に依り戦局の進展に伴ひ同地域が漸時孤立化するに際し、食糧現地自給

の必要に迫られ蔗園の全てを主食作物に轉換次いで昭和十九年直接戦火の洗礼を受け茲に全く潰滅したものである。群島繁榮の原動力たる糖業確立の沿革は前述の様なるものであるが、之を成功に導びいた因子は素より多々あるであらうが、其の大宗をなすものは次の如きものである。

(イ) 自然の適格性

南洋群島の自然環境中氣象に付ては既述の如く全く熱帶性氣候にして特に高温多濕であり、甘蔗の成育に全く好適であり、普通台湾に於て十八ヶ月を要する甘蔗の熟成も群島に於ては十二月にて到達し、且つ品種交配が自由に出来る等の利点を有したるに依りマリアナ群島サイパン、テニアン、ロタ島に群島としては稀有の存在たる大可耕地を發見した事は眞に鬼に金棒の自然的惠與であつた。

二、品種改良

群島糖業は当初西村拓殖、南洋殖産の両社共品種の点に深く注意せず、易きに就いて在來種とローズバンブー種を併用し大正十年南洋興發株式会社が事業繼承の際も一應之を踏襲したものであるが、之等の品種は箴象虫、鼠害、風害等に依り蔗莖に傷を受け易く、外傷に依り赤腐病を起し爲に製糖歩留りは素より全然製糖不能となり之が爲西村拓殖、南洋殖産株式会社の両社の失敗の一原因となり、更に南洋興發株式会社が第一回及第二回の製糖失敗も全く本件と箴象虫の蔓延に原因したものであつた。

南洋興發株式会社に於ては逸早く本件に着目し、群島糖業の確立は一に懸つて品種改良と害虫駆除に在る事を痛感し、大正十二年台湾より病害虫に抵抗力の強い (IGIPOJ) のを直接輸入し本品種に依り大正十四年 (一九二五年)

第三回の製糖を実施し十五万担の産糖を見、茲に群島糖業確立の基礎を据へたものである。同社に於ては本品種に依一應事業安定の見透しを付けたのであるが、時恰も世界糖業界の革新期に當つて居り、同社に於ても之に甘んずる事なく、試験調査研究に努力し品種の改良に意を注ぎ特に群島の自然環境が甘蔗品種の交配に好條件なるを利し、世界糖業の進運に遅れざらん事を期し昭和四年 (一九二九年) に於ては同社に於て NK15 号を南洋廳産業試験場サイパン分場に於ては 53 号を完成し、孰れも早熟品種として極めて優秀なものであつた。

更に同社に於ては昭和四年來爪哇大莖種を輸入栽培し、本品種に依つて一段と生産の増加を加へたものである。

三、害虫対策

群島に於ける甘蔗栽培上の最も被害の大であつたのは箴象虫害であつた。

群島糖業の先驅であつた西村拓殖、南洋殖産両株式会社失敗の原因と南洋興發株式会社が其の第一、第二の両回の製糖の失敗は全く本害虫に依るものであつたと云つても過言でない。

箴象虫は身長三、四分位の暗褐色で梭に似た象虫であるので此名があり、米虫を五、六倍すると形狀全く相似した昆虫であり、廣く太平洋地域に分布して居るものであり、本來は椰子科植物の害虫として恐れられて居たのであるが、之が甘蔗にも大害を與へたものであつて、嘗つて布哇糖業に致命的打撃を與へたケーンボアラこそ実にこの箴象虫であつたのである。

箴象虫に侵された蔗莖はその外傷に依り赤腐病を起し、歩留りの低下が著しい許りでなく、全く砂糖と結晶しないで俗狀の所謂、牛糞糖としかならず、爲に本害虫の撲滅の成否こそは全く糖業確立の成否の分岐点となるもので大正

十一年六月箴象虫の発見に依り南洋興發株式会社に於ては南洋廳と協議の結果、同廳の積極的援助の下に極力之が捕獲を勵行すると共に大正十二年（一九二三年）七月二十四日慘澹たる成績であつた第一回製糖を打切り、全甘蔗を小作人より買収、之を焼却する一方刈取後の蔗園並椰子科植物の焼拂ひを徹底せしめるの手段を講じ、更に同年八月箴象虫の天敵であるタキニツトフライを布哇糖業試験所の好意に依り同地より輸入するの手段を講じて撲滅を期する一方、南洋廳に於ても之が完璧を期する爲大正十三年（一九二四年）五月廳令を以て病害虫駆除予防規則を公布、徹底の撲滅を実施したので、さしも猖獗を極めた箴象虫も大正十三年末期には終息し、大正十四年同社第三回の製糖に於ける輝しい糖業確立となつたのである。

四、蔗莖の後芽処理

群島糖業確立に至る迄の障害は前述の如く品種改良と箴象虫害の二つを最とするが、之に劣らぬ障害を與へたものは甘蔗の後芽処理の問題であつた。

甘蔗の後芽とは甘蔗略々成熟した頃に降雨があると甘蔗の根から新しい芽が出て來て之が非常に早く伸び、忽ち母莖を凌駕する程大きくなるものである。

此の後芽には殆ど糖分を含まない爲、之を徒長させる事は刈取輸送並製糖上に於て労力的に極めて不經濟である許りでなく之を圧搾するに至つては製糖歩留りを著しく低下せしむるものである。

此の事は小作人に極力早期刈取を奨励したが、刈取収量の増加と云ふ問題がある爲に仲々に小作人間に理解徹底しなかつたものであるが、沖繩縣に於て行はれて居り、而も相当実績を挙げた原勝負（一種の農事競争）に倣ひ蔗作管

理を小作人の集團別共同責任制とし、集團對抗の優劣を競はしめて後芽処理は固より蔗作栽培管理を向上せしめた。

五、利潤分配制度

南洋興發株式会社が小作人より甘蔗買収を爲す際は、買収標準價格を協定し、更に之に其の年次の糖價と製糖歩留りに應じスライディングスケールに依る純然たる利潤分配制度に依る割増金を附する方法をとり品質の向上並収量の増大に寄與せる事大なるものがあつた。

六、労力の調整

糖業に於ける需要労力は製糖期と非製糖期に於ては著しく差異があり其の間の労力調整は極めて困難の事である。群島糖業に於ては大抵十二月より翌年七月迄を製糖期とし、残余期間が非製糖期となるが製糖期に於ては工場は晝夜作業を続行し、農場に於ては甘蔗の刈取、整形、積込、輸送を行ひ更に圃場の後始末をし植付、株出、休閑等翌年度の準備を爲す等に忙殺されるが、一度非製糖期ともなれば工場は修繕手入農場に於ては栽培管理の比較的簡易な甘蔗の手入位となり、其の労力需用に著しい差等が起きて來る。隨時隨所に所要労力を求められ不要となれば、之を求めた処に還元出來る処ならば大した困難はないが、群島の如く其の所要労力の全てを内地に依存する処では此間の調整を誤れば事業の成否に至大な關係を生じて來るので非製糖期の労力過剰と製糖期の労力不足を調整する爲、南洋興發株式会社に於ては半農半勞の一町農制度を採用した。

即ち一町農とは同社の通常小作人が五町程度の蔗作を爲して居る中間に一町歩半程度の耕地を小作する農家を介在せしめ（之は三年二作制に依り周年耕作面積が一町歩となる事に依り一町農と通称されたものである）隨時需要に應

「田圃の通常小作人の勞力不足に充用する如く設置したもので重大な農場勞力の過不足の調節弁となつたもので、之には主として新規移住者を充當したので、正規通常小作人となる迄の練習的一過程としても極めて好適な制度であつた。

●病害蟲驅除予防規則

大正十三年五月一日 南洋廳令第二号

第一條 本規則ニ於テ病害蟲ト称スルハ農作物ヲ害スル各種ノ蟲菌類ヲ謂フ

第二條 驅除予防スヘキ病害蟲ノ種類及驅除予防ノ方法ハ南洋廳長官之ヲ定ム

前項ノ種類以外ノ病害蟲發生シ急速ノ処分ヲ要シ南洋廳長官ノ指揮ヲ承クル隙ナシト認メルトキハ支廳長ハ臨時驅除予防ノ方法ヲ定メ之ヲ施行スルコトヲ得

第三條 病害蟲田畑ニ發生シタルトキ又ハ發生ノ虞レアルトキハ支廳長ハ予メ期限ヲ定メ該田畑ノ所有者、借地權者又ハ耕作人ヲシテ驅除予防ヲ行ハシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ田畑ノ所有者、借地權者又ハ耕作人驅除予防ヲ行ハサルトキハ支廳長ニ於テ之ヲ行ヒ、其ノ所有者借地權者又ハ耕作人ヨリ之ニ要セシ費用ヲ徴收スルコトヲ得

第四條 病害蟲蔓延シタルトキ若ハ蔓延ノ虞レアルトキ又ハ病害蟲田畑以外ノ地ニ發生シタルトキ若ハ發生ノ虞アルトキハ南洋廳長官ハ支廳長ヲシテ其ノ区域内ノ驅除予防ヲ行ハシムルコトアルヘシ

第五條 支廳長ハ前條ノ驅除予防ノ爲ニ必要アリト認ムルトキハ病害蟲ノ種類ニヨリ其ノ施行区域内ノ田畑及田畑以外ノ土地ノ所有者、借地權者又ハ耕作人ニ對シ夫役ヲ賦課スルコトヲ得

夫役ハ病害蟲ノ種類ニ依リテ田、畑又ハ田畑以外ノ土地ニ區別シテ賦課スルコトヲ得

夫役ハ別段ヲ以テ準率ト爲シ、且ツ之ヲ金額ニ算出シテ賦課スヘシ

夫役ハ各別ノ率ニ拠リ小作人、自作人、借地權者及土地所有者ニ賦課スルコトヲ得

第六條 夫役ヲ賦課セラレタル者ハ本人自ラ之ニ當リ之ハ適當ノ代人ヲ出シ又ハ金錢ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第七條 南洋廳長官ハ病害蟲驅除予防上必要ナリト認ムルトキハ支廳長ヲシテ左ノ処分ヲ爲サシムルコトアルヘシ

一、溝渠開鑿

二、農作物（種苗、果実、葉刈、株等ヲ含ム）其ノ他ノ樹木、雜草ノ拔棄、燒却、埋沒

三、地域ヲ指定シ農作物又ハ樹木、雜草ノ搬出搬入、栽培ノ禁止

前項ノ場合ニ於テハ第五條ノ規定ヲ適用ス

第八條 田畑所有者、借地權者又ハ耕作人ニ於テ病害蟲其ノ田畑ニ發生シ又ハ發生ノ虞アルコトヲ知リタルトキハ直ニ驅除予防ニ著手シ病害蟲ノ種類驅除予防ノ方法被害見積面積ヲ口頭又ハ書面ヲ以テ支廳又ハ最寄警察官吏ニ届出ツヘシ

第九條 驅除予防ノ必要ヨリ生シタル損害ニ對シ被害者ハ賠償ヲ請求スルコトヲ得ス

第十條 田畑所有者、借地權者又ハ耕作人ハ驅除予防施行官吏及其ノ指揮ヲ承クル者ノ其ノ地ニ入り驅除予防ニ從

事スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條 支廳長其ノ他ノ当該官吏ハ驅除予防督励上必要アリト認ムルトキハ田畑所有者、借地権者又ハ耕作人ニ其ノ田畑ノ境界ヲ表示スヘキ標木ヲ建設セシムルコトヲ得

第十二條 支廳長ハ驅除予防実施ニ当リ必要アルトキハ警察官吏ヲシテ其ノ監視督励ノ任ニ當ラシムヘシ

第十三條 夫役ノ賦課ヲ受ケタル者定期内ニ其ノ履行ヲ爲サス、又ハ夫役ニ代フル金銭ヲ納メサルトキハ支廳長ハ期限ヲ指定シテ之ヲ督促スヘシ急迫ノ場合ニ賦課シタル夫役ニ付テハ更ニ之ヲ金銭ニ算出シ期限ヲ指定シテ其ノ納付ヲ命スヘシ

第十四條 第三條第二項ニ依ル驅除予防ノ費用徴收並前條ノ督促及費用徴收ニ關シテハ大正十一年勅令第三百五十六号ノ規定ヲ準用ス

第十五條 病害蟲以外ノ動植物ト雖モ農作物ヲ害スルトキ又ハ害スルノ虞レアルトキハ南洋廳長官ハ本令ヲ適用スルコトヲ得

第十六條 第三條第一項ノ驅除予防ヲ行ハサルモノ又ハ第七條第一項第三号ニ依ル支廳長ノ命令ニ違反シ若ハ第十條ニ違反シタル者ハ拘留又ハ科料ニ処ス

第十七條 第八條ニ違反シタル者又ハ第十一條ニ依ル当該官吏ノ命令ニ従ハサル者ハ科料ニ処ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

南洋群島介殼蟲驅除予防規則ハ之ヲ廢止ス

●病害蟲驅除予防規則ニ依ル病害蟲ノ種類及驅除予防方法

大正十三年五月一日 南洋廳告示第一号

改正 大正一五年一二月南洋廳告示第一三三号 昭和七年七月第一〇号 八月第一一号 二五年第一一五号
一七年第一一号

病害蟲驅除予防規則第二條第一項ニ依リ驅除予防スヘキ病害蟲ノ種類及驅除予防ノ方法左ノ通定ム

第一 病害蟲ノ種類

一、オサゾウムシ

被害作物 甘蔗 椰子

二、甘蔗赤腐病(アカクサリ)

被害作物 甘蔗

三、甘蔗黑穗病(クロボ)

被害作物 甘蔗

四、ルリヒラタハムシ、トビロヒラタハムシ及バラオヒラタハムシ

被害作物 椰子

甘蔗害虫 (カンショノシンクヒハマキ)

被害作物 甘蔗

第二 駆除予防ノ方法

一、オサノウムシ

イ、成虫発生時期ニ蔗莖ヲ長サ二尺内外ニ切り二ツ割トシ楔ヲ含マセ元ノ如ク結束シタルモノ或ハ椰子葉柄基部ヲ取り二ツ割トシ蔗莖ノ如クシ各要所ニ配置シ誘殺スヘシ

ロ、枯葉ヲ剥キ取り潜伏スル成虫ヲ捕殺スヘシ

ハ、被害莖ハ切り取り焼却スヘシ

ニ、被害甚タシキ蔗園ハ收穫後残留セル葉莖及刈株ヲ焼却スヘシ

ホ、種苗ハ被害少ナキ品種ヲ選択スヘシ

ヘ、椰子ニアリテハ被害ノ果実及葉柄ヲ集メ焼却スヘシ

二、甘蔗赤腐病

イ、病莖ハ切り焼却スヘシ

ロ、被害甚タシキ蔗園ハ收穫後残留セル葉莖及刈株ヲ焼却スヘシ

ハ、蔗苗ハ被害ナキモノヲ選択スヘシ

三、甘蔗黑穗病

イ、被害株ハ堀取り焼却スヘシ

ロ、被害甚タシキ蔗園ハ採苗及株出ヲ行ハス且ツ收穫後残留セル葉莖及刈株ハ之ヲ焼却スヘシ

四、ルリヒラタハムシ、トビイロヒラタハムシ、及バラオヒラタハムシ

イ、被害葉ハ切り取り焼却スヘシ

ロ、幼虫成虫及蛹ハ捕殺シ卵ハ潰殺スヘシ

ハ、被害激甚ナルモノハ伐倒シ橋冠ヲ焼却スヘシ

五、黄色螟蟲

イ、甘蔗ノ生育初期ニ於テ心枯トナルモノハ分芽ノ基部ヨリ切り取り焼却スヘシ

ロ、適当ナル剝葉ヲ行ヒ幼虫ノ潜伏ヲ予防スヘシ

ハ、蔗園收穫後ハ直ニ残苗葉莖ヲ焼却スヘシ

ニ、集積場ニ於ケル結束材料其ノ他ハ廢棄後直ニ焼却スヘシ

ホ、被害激甚ナル蔗園ハ株出ヲ禁止ス

ヘ、被害激甚ナル甘蔗苗圃ハ採苗ヲ禁止シ被害莖ハ切り取り焼却スヘシ

ト、蔗苗ハ被害ナキモノヲ選択シ植付前一晝夜間清水ニ浸漬スヘシ

チ、螟蟲卵寄生蜂ヲ放飼シ自然的ニ螟蟲卵ノ駆除ニ努ムヘシ

リ、卵塊及成虫ハ採集シ潰殺スヘシ

六、ハ、蝸牛（オオカタツムリ）

被害作物 一般農作物

イ、蟲ハ捕殺シ卵ハ潰殺スヘシ

ロ、被害甚シキ圃場ハ收穫後直チニ焼土シ宅地ハ薬剤駆除ヲ爲スヘシ

ハ、發生被害甚シキ箇所ヨリ土砂、石礫等ノ搬出ヲ禁ズ

●糖業規則

大正十一年九月一日 南洋廳令第十八号

改正 昭和九年第一三号

第一條 砂糖製造業ヲ営マントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ南洋廳長官ノ許可ヲ受クヘシ許可ヲ受ケタル後第二号乃至第六号ノ事項ヲ変更セムトスル場合亦同ジ

一、本籍、住所、氏名、経歴並資産証明書但シ出願者法人ナルトキハ其ノ住所、名称、定款、取締役ノ住所、氏名、財産目録及貸借対照表

二、工場ノ位置

三、工場ノ設計

四、製糖機ノ種類能力

五、原動力ノ種類

六、製品ノ種類

七、製糖期間

八、原料採取ノ方法

九、事業計画及收支予算

第二條 南洋廳長官ハ砂糖製造ノ許可ヲ與ヘタル場合必要アリト認ムルトキハ其ノ原料採取区域ヲ指定ス

第三條 原料採取区域内ニ於テ栽培シタル甘蔗ハ南洋廳長官ノ許可ヲ受タルニ非サレハ之ヲ区域外ニ搬出シ又ハ砂糖以外ノ製造原料ニ供スルコトヲ得ス

第四條 原料採取区域内ニ於テ甘蔗ヲ栽培シタル者ハ之ヲ其ノ区域内ニ於ケル製糖業者ニ賣渡シ其ノ製糖業者ハ南洋廳長官ノ指定スル期間内ニ之ヲ引取ルコトヲ要ス

第五條 製糖業者前條ノ指定期間内ニ甘蔗ノ引取ヲ了セス依テ蔗作者ニ損害ヲ與ヘタルトキハ南洋廳長官ハ製糖業者ニ對シ之カ賠償ヲ命スルコトアルヘシ

第六條 製糖業者其ノ原料採取区域内ニ於ケル蔗莖ヲ買收セムトスルトキハ予メ買收價格ヲ定メ其ノ價格算定ノ基ク所ヲ明ニシタル調書ヲ添附シ南洋廳長官ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 左記各号ノ一ニ該当スル場合ニハ五日内ニ南洋廳長官ニ届出ツヘシ

一、住所氏名ニ異動ヲ生シタルトキ

二、定款又ハ取締役ニ異動ヲ生シタルトキ

三、製糖ヲ開始シ又ハ終了シタルトキ

四、廃業シ又ハ製糖期間内一箇月以上休業セムトスルトキ

第八條 許可ヲ受ケタル後一年以内ニ事業ニ著手セサルトキハ製糖業ノ許可ハ其ノ効力ヲ失フ但シ南洋廳長官ノ認可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限りニ在ラス

第九條 製糖業者本令又ハ第五條ノ命令ニ違反シ若ハ事業成功ノ見込ナシト認ムルトキハ南洋廳長官ハ製糖業ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第十條 第一條第三條及第六條ニ違反シ又ハ第五條ノ命令ニ従ハサル者ハ二百円以下ノ罰金又ハ科料ニ処ス

第十一條 第七條ノ届出ヲ怠リ又ハ虚偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ科料ニ処ス

第十二條 本令ニ依リ製糖業者ニ適用スヘキ罰則ハ製糖業者法人ナルトキハ之ヲ其ノ代表者ニ適用ス

第十三條 本令ニ依リ南洋廳長官ニ差出スヘキ書類ハ所轄支廳ヲ經由スヘシ

第十四條 本令施行区域ハ南洋廳長官之ヲ定ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

既ニ許可ヲ受ケル製糖業者ハ本令施行後二箇月以内ニ本令ノ規定ニ依リ許可ヲ受クヘシ

前項ノ願出テヲ爲ササル者ハ廢業シタル者ト看做ス

第十七章 商 工 業

第一節 概 況

群島は廣汎なる水域に各島嶼分散し、交通の不便等産業立地條件が悪く之に依る金融機關の不備等の爲商工業の發展に及ぼす影響は相当大なるものがあつた。西班牙領時代に就ては記するに足る程のものはないが独領時代に於ける交通貿易は政府の補助を受けて特殊会社ヤルト会社及北独逸ロイド会社の汽船に依つて行われ、その商權は主としてヤルト会社及独逸西カロリン会社の二社に歸し、他に英商としてバーンズ・ヒリツプ商会があり、邦商としては南洋貿易株式会社のみであつた。一九一四年我が統治と共に独逸系統会社は商權を停止され、バーンズ・ヒリツプ商会も通商杜絶するに及び、遂に其の跡を斷つに至つて南洋貿易株式会社のみ各島に支店を設け活躍しつゝあつた。其他各島に少数の雜貨商はあつたが、何れも小規模で島產品方の物交に依る日用品雜貨を販賣する状態で特に論する迄に至らなかつた。群島の惡條件は商工業の發達を阻み、遅々として進まず、洗濯業、理髮業、旅館業等日常必須のものすら行ふ者なき状態であつたので、南洋廳に於て一九二二年商工業補助規則を制定して補助金を下付し、群島斯業の發達を促進し、主として日本人移住者の生活の安定を図る爲諸般の施設を行はしめた。一九二一年設立せられた南洋興發株式会社の永年に亘る弛まざる努力に基く群島製糖業の成功は群島各種産業の開発を促すと共に年毎に増す日本人々口は、群島商工業を次第に發達せしめたものである。此の趨勢に鑑み之に対応する爲一九三二年南洋群島

商業組合令の制定を見、逐次信用組合に依る金融の途が開かれて來たので、交通貿易の振興と共に群島商工業は跳躍的發展を見るに至つた。

商業に於ては在住者の生活必需物資を始め多くの商品全く内地依存の狀態に在つたので、其の形態は小賣商店として、専門品の販賣を目的としない所謂雜貨商店或は百貨店形式に陥してゐた。各主要島に於ける市街地は相當の繁榮を示してをり、離島辺陲の地にも邦人小賣商があつて、日用品の小賣業を営んでゐた。

工業に於ては、燃料及動力其他生産手段の不備不足等生産發達上の諸條件の欠如してゐる爲サイパン及テニアンに於ける製糖、酒精、糖蜜工業の他に大規模のものがなく、酒類製造、製氷、農水産加工物及澱粉工業等の中小工業にして、其他熱帶特殊植物の葉及纖維を材料としたる帽子、其他各種組編業に属する手工業があり、殊にヤツプ島のタコ葉手提は島民婦女子の副業として、相當多量に生産せられ内地に移出されており、各島に於ても、島民授産上之が増産を奨励してゐたが、工業製品の大部分は生活必需物資と同じく内地依存の狀況であつた。

第二節 商業

群島の開發に伴ひ邦人の移住する者逐年増加し、商業亦發展の一路を辿つてゐるが、群島に於ける商業は商品の殆ど全部が内地依存の狀態にあるので、直接需要者を相手とする小賣商店の發達を見、而も専門品の販賣を目的とした雜貨店が大部分を占めてゐた。一九四一年末に於ける群島商業従事者数は四九〇〇名でバラオ、サイパン、テニアン等の主要島に於ける市街地は相當の繁榮をなしてゐた。一九三七年商人の共存共榮と商業の向上發展を図る爲、南

洋群島実業組合令が制定され、以來順次各島に同令に依る商業組合の設立を見、九組合に及んだ。猶之等を打つて一丸とした南洋群島商業組合聯合会が設立されて内地よりの聯絡、共同購入等、群島商業の發展を図つた。

第三節 工業

從來群島に於ける工業はサイパン、テニアン兩島の製糖業並に之に附帶する酒精、糖蜜工業がその主なるもので、他はサイパン、テニアン、バラオ及ボナベ等に於ける澱粉工業、酒類製造、製氷等の外、農水産物の加工、瓦、煉瓦、土管等の建築資材、手藝品の製造等が挙げられるが、工業發達の諸條件に恵まれなかつた爲、ついに大規模なる發展を見るに至らなかつた。

第十八章 水産業

八〇

第一節 概説

太平洋の廣海域に散在聚落する南洋群島は孰れも四面環海の環境にある事に依つて水産業の隆盛を予想せらるる事が常識的の觀方であらうが、群島水産業の勃興の歴史は全く新らしく其の軌道に乗つたのは昭和七年（一九三一年）頃よりの事である。

本来原住民は漁撈を以て男子の仕事とし其の日常生活に就ても蛋白質給源としての魚食は不可欠の要素であるが、其の漁撈手法としては全く原始的であつて礁魚を定置籠やビスカン（手槍）で漁獲する程度の域を脱せず西班牙獨逸の兩時代を経て諸般の事に文化的進歩が見られるに不拘、水産に関する限りさしたる事が無い事は一奇観である。

此間に於て僅かに水産業的の息吹は獨領時代の交易物資の対照となつたカロリン群島に於ける海鼠漁業とパラオ、ヤップ兩島に於ける高瀬貝漁業と英、米兩國人の手に依るマリアナ群島海域を舞台とした捕鯨事業程度のものであつて全く微々たる存在でしかなかつた。

大正三年（一九一四年）我が統治以來は移住日本人を対照とした漁業が日本人の手に依つて行はれたが之は飽迄も生鮮食品としての島内消費の充足を目的としたもので、所謂大企業として経営されたものではない。

自然大正十四年（一九二四年）群島産業に劃期的光明を齎した糖業の確立に依つて群島へ移住の日本人の数も頗る増加し、之が爲島内需要の増加を來した爲、漸を追つて隆盛に赴き昭和二年（一九二六年）パラオ、トラツク兩島に於ける鯉漁業の操業着手に依り鯉節製造の可能なる事が立証せられて以來は之に拍車を懸け昭和七年（一九三一年）頃よりは漸やく其の基礎が確立し次第に堅実な發展を見るに至つたもので、遂に群島三大産業である糖業、鋤業、水産業と鼎立の盛況を招來したのである。

群島は四面環海の位置的好條件を有しては居るが海群並水族の棲息状態は全く内地と趣きを異にし、且つ各島概ね遠隔なる群中に孤立し交通が不便である許りでなく、其の面積が概ね狭少であり、收容人口の少ない爲に島内消費の欠みを以てしては到底小規模の經營しか成立せず、加へて海中、地上共に高温であつて地上の濕度も高く一般魚類の処理が困難等の惡條件を有して居た爲に、其の当初に於ける發展の過程は眞に遅々として居たものであるが、海洋並水族の調査研究が大正十二年度（一九二二年）より南洋廳に於て積極的に開始されて以來は其の成果と陸上施設や漁港施設に格段の整備を加へられた事に依り、從來の島内消費充用を一步進めて水産加工品の内地移出を見るに至り、更に昭和十二年頃より濠洲近海に於ける眞珠貝採取業の基地的使命に依り一段と發展を加へて空前の盛況を齎したのである。

群島は廣大な海域を包容し、其の底棲魚族に就ては豊富とは謂ひ得ないが鯉、鯖、鮫等の洄游性魚族は極めて豊富であつて、而も其の漁期は周年に亘る關係上大いに其の將來に於ける發展を期待された許りでなく、其の近接区域である南太平洋のセレベス、バンダ、アラフラ、スルー、フロレーンス海等には底棲魚族も豊富で漁場としても極めて

好適である爲、群島を漁業基地として之等の未開の漁場を開拓する事に依り廣大な漁場と無盡藏の資源を背景とし群島に素より我國の水産業に利するのみでなく、更に世界の水産業として發展貢獻し得るが如き輝しい將來を持つたものである。

第二節 施設

(イ) 一般水産業獎勵 群島水産業の劃期的發展を期する爲南洋廳に於ても積極的に之が獎勵助成の必要を認め昭和十年(一九三五年)水産獎勵規則を改正し漁撈養殖より製造加工に至る廣範圍の指導獎勵を行ふ爲群島に於ける特種漁業(新規又は優良漁業)管外漁業(群島を根拠とする遠洋漁業)養殖業製造加工業製水冷蔵設備、冷蔵運搬船、水産組合及其他水産團體の共同施設事業等に獎勵金を下付することとなつた。

漁業用燃料に対する免稅撤廢に依る價格の昂騰に因つて漁業者の蒙る漁業經費の低減を計り、斯業の堅実なる發展を促進せしめる目的を以て左の諸經費の中適切なものと認められるものに対し昭和十二年(一九三七年)度より漁業經費低減補助金を下付することとなつた。

- 1 漁業用重油發動機の購入及据付費
- 2 漁船の保藏設備の新造費及改造費
- 3 漁船の推進能率増進の爲必要な船首部及船尾部の新造及改造費
- 4 漁業用燃料油槽、油槽船又は其の附屬設備の新設費増設費、改造費又は購入費

5 漁業經費低減指導員の設置費

(ロ) 水産團體

- 1 水産組合 群島に於ける水産業者の主なるものは鯉漁業者及鯉節製造業者で從來主として従業者の爭奪防止等の爲各地に於て任意申合組合を作つてゐたが、別に組合としての積極的活動を行つてゐなかつた爲斯業の円滑なる發展と業者の福祉増進を考慮し南洋廳に於ては昭和十四年(一九三九年)南洋群島実業組合令の實施と共に既存のバラオ水産同業組合、サイパン鯉漁業組合、テナアン島漁業組合、トラツク水産組合及ボナベ水産同業組合を実業組合としその統一を計ると共に組合に各種の共同施設を行はせ、其の地区の中心機關たらしめると共に之に補助金を交付して其の堅実な發展を図つた。

- 2 水産組合聯合 群島各地の施設の完備と業務上の指導を行ふ爲に各地水産組合を所屬組合とする南洋群島水産組合聯合会を設立せしめ、相当補助金を下付して水産組合及同聯合会をして群島水産業の中心團體たらしめつゝあつた。

- 3 財團法人南洋眞珠採取業協會 南洋廳に於てはバラオを根拠として濠洲北岸公海に出漁する眞珠貝(白蝶貝)採取業者をして昭和十二年(一九三七年)南洋眞珠貝採取業協會を設立せしめ、之に相当補助金を下付し業者並に従業員の福利施設を主としてなさしめ昭和十三年(一九三八年)其の組織を財團法人に改め漁場調査、眞珠貝倉庫、従業員住宅及共同宿泊所等の經營其他各種の福利施設を行ひつゝあつた。

- (ハ) 水産試験場及調査 海洋資源の開発は群島産業の主要部門であるので、南洋廳に於て大正十二年(一九二二

年（度より水産調査に着手し小型船二隻（十屯二十馬力）を以てパラオ、ボナペ、トラツク各支廳管内の漁業調査を行ひ昭和五年（一九三〇年）水産物製造工場を建設し、鰹節、罐詰等の加工製造の試験を開始し、次いで昭和六年（一九三一年）南洋廳内に水産試験場を設置し、鋼鉄調査船瑞鳳丸（一八三屯三六〇馬力）を建造、群島各地は勿論蘭領東印度近海に於ける各種水産調査に従事し來つた。而して昭和十二年（一九三七年）機構の拡充整備の爲獨立官署として試験場を分立せしめ、調査試験研究の充實を図り昭和十六年（一九四一年）度に於ては鯖長鮪漁業、鮪漁業、礁魚延縄漁業、雜魚試験、蟹刺網漁業、鰹節品質改良、魚醬油製造及海綿養殖試験並に水産廢棄物の利用研究を行ふと共に海流調査、横断觀測、漁流調査、生産調査を併せ何れも相當の成績を挙げることが出來た。

(二) 水産練習生 昭和十七年（一九四二年）四月より南洋廳水産試験場水産練習生規程により開所せるもので其の目的とする処は熱帯水産に関する實際的智識技能を修得せしめると共に漁民精神を体得せしめ、以て漁村の指導的中堅人物の鍊成を爲すに在つて、設備は南洋廳水産試験場の練習船及漁撈製造施設を使用し、練習期間は一ケ年、入所資格は年齢十四年以上の男子にして國民學校高等科卒業、又は之に同等以上の学力を有し、思想堅実にして所轄支廳長の推薦した者である。練習生收容人員は水産試験場長が其の都度定めることになつてゐた。練習生は全部寄宿舎に收容し師弟一体となり智識技能の習得に努めてゐた。

第三節 水 族

群島に於ける水族に關しては調査未だ充分でなかつたが、溫帶地方とは全然棲息狀態を異にし、鰻、鮪の如き洄游性魚類であつても季節風其の他海流の影響に依つて多少の移動はあるが、一年を通じて漁獲せらるゝ率が普通である。魚類は極めて多種多様にして其の主なるものを挙げれば鰹、鮪、鯖、鯖、鰻、鱒、鮠、鮫、鰺、飛魚等の表層魚族の外、岩礁間には熱帶特産の色彩鮮麗なる礁魚甚だ多く、此処に棲息するもので有用なものは高瀬貝、蝶貝であつて此の他沿岸到る処に多種多様な貝、蝶貝類が棲息するのを認められ、更に棘皮類は到る処夥しく棲息して居るが、就中海鼠は最も重要なものにして其の種類又極めて多い。甲殻類も種類が多いけれども水産上重要なものではない。又群島特産物としては海龜玳瑁があり、パラオ島には儒艮鰐が棲息しパラオ、ポナペ近海には良質の海綿を産する。

第四節 漁業處分

鮮魚に於ける漁業は南洋群島漁業規則に依つて、南洋廳長官の許可を要する漁業、所謂支廳長に届出を要する漁業及慣行に依る漁業で長官の認可を必要とする漁業の三に分けられるが、群島には免許漁業製度は認められて居らず許可漁業の内容は左の通りである。

イ、養殖業（一定の区域内に於て養殖を行ふ漁業）

ロ、**定置漁業**（一定の水面に漁具を定置し又は漁場に特別な装置を施して爲す漁業）

ハ、蝶貝漁業

二、高瀬貝漁業

カ、廣瀬貝漁業

ヘ、玳瑁漁業

ト、海綿漁業

チ、珊瑚漁業

リ、捕鯨業

ヌ、螺旋推進器を以て五屯以上の船舶を運行し半釣延縄を使用して爲す漁業

ル、根拠地を群島に置き遠洋に出漁する漁業

ヲ、漁獲物処理運搬業

前記以外の漁業は所謂届出漁業で所轄支廳長に届出で漁業鑑札の下附を受ける事を必要とした。慣行に依る漁業は原住民保護上設けられた制度で其数は極めて尠ない。

第五節 漁業

一、鰹漁業

群島漁業中最も重要なもので水産生産額の大半を占めて居り、漁期周年に亘つて永続的に大量の生産を期待する事が出来る。事業は昭和二年（一九二七年）頃トラツク及パラオに於て創始せられ、漁獲物は鰹節として容易に処理せられるのを比較的小資本で事業を創められる爲め、其の後各地に企業を見る様になり、爾來順調な進展を続け逐年隆

盛に赴き太平洋戦争当初に於ては主要島より二、三十哩内外の水域に於て盛んに操業せられる様になつた。餌料の探捕は大部分幼稚な追込網を使用して居るがサイパンを除く他、管内に於ては餌料比較的豊富である爲め群島に於ける漁業は殆ど鰹漁業に集中せられ、昭和十七年（一九四二年）中に於ては漁獲高一四、八七二、七八一疋。鰹節製造高一、九〇五、一三〇疋で五、三〇七、〇六三円の産額に達し内地需要の四割乃至五割を供給してゐた。未だ斯業に着手して居ない群島各離島に於ては今後之を開拓したならば本業は限りない進展を予想せられ、更に群島を根拠として接続外南洋の漁場開発迄企図するに於ては殆ど無限とも称する事が出来、前途洋々たるものがあり、將來施設の整備と共に漁船の改良、漁場の拡張に依り飛躍的隆盛を期待して居たものであつた。

二、鯖漁業

鯖の漁場と其の棲息量は鰹と同様群島内全般に亘り鰹漁業と共に將來群島水産業の根幹を爲すものであつたが、鯖は鰹の様に漁獲物の処理が簡單に行かず、殊に本群島の様に中心市場に遠く地元消化の困難な場所にあつては罐詰冷凍又は冷蔵等の施設の完成に俟たねばならず、之が爲從來僅に在住者に鮮魚として供給される状態であつたが、昭和十三年（一九三八年）三月漸くパラオに南興水産株式会社の経営に係る罐詰工場の建設を見、又最近冷蔵冷凍、施設の整備に伴つて内地移出及國外輸出が実現して將來の飛躍發展を期待して居つた。

三、高瀬貝漁業

高瀬貝は貝鉦原料として優良なもので重要な熱帯水産物である。本群島には從來パラオ、ヤップの二島にのみ棲息し、其の他の島嶼には全く棲息しなかつたが、斯業の有望性並に群島全般の氣象海況の酷似性に着目し、昭和二年以

南洋廳水産試験場の手に依つて数回パラオよりトラックへ移植試験を行つた処、繁殖顯著で極めて好結果を得たので昭和十四年（一九三九年）以來サイパン、ボナベ、ヤルート、ヤツブ管内の無棲息地に移殖し、之が増産を図りつゝあつた。高瀬貝の採取は慣行上原住民にのみ行はしめて居り、且つ漁期は繁殖保護上毎年五、六両月に限り貝殻底部の直径八厘以下のものは採捕を禁止して居た。

四、珊瑚漁業

群島海域は珊瑚の棲息に好適の深海を有する場所多く、その棲息は古くから予測せられて居るが昭和二、三年（一九二七—一九二八）頃サイパン支廳管内に於て起業したる者があつたが成績は思はしくなく、爾來殆ど顧られなかつたが昭和十一年（一九三六年）サイパン支廳管内バガン島附近に於て相当量の白珊瑚が採捕せられた結果、斯業を企図する者簇出し北方離島及テニアン島附近に於て採取に従事したが品質良好でなかつた爲め、充分な成績を得るに至らず、僅かに二年足らずで休業する状態に至つた。然るに昭和十三年（一九三八年）パラオ支廳管内ペリリュウ島附近に於て新漁場を発見し、良質の赤ボケ珊瑚を採取し一時將來を囑望せられたが漁獲意の如くならず、加之時局の影響を受け休止の状態であつた。

五、鯨漁業

群島に於ける鯨の棲息は豊富であるが、その地理的關係上漁獲物の処理に付、遺憾の点があつて鯨皮は獣皮の代用品として其の需要増加して居たが、專業として企業發展の域に達してゐなかつた。

六、玳瑁業

群島の特産物たる玳瑁はパラオ、ヤツブ、トラツク、ボナベ等に産し主として島民の漁業に属しビスカン（投鉈）を用ゐて採捕して居るが、其産額は多くはない。採捕は蕃殖保護上自二月至五月、自九月至十月の間に制限し又背中の堅長六十厘以下のもの及卵は採捕を禁止して居た。

七、海鼠漁業

海鼠は群島到る処多数棲息し、我國統治以前より産出せられて居たが、良質のもの少く價格の低廉な爲め事業として安定性を欠き、一般漁業の不漁期又は閑漁期を利用して漁獲されると云ふ状態で産額又極めて僅少であつたが、時局の影響より海參（海鼠の腸を去りて煮て乾たるもの）の價格高騰に伴ひ主要島に於て事業に従事する者あるやうになつて居た。

八、其の他の漁業

前記漁業の外、鰹、鰯、鰺其の他南洋独特の礁魚（メヤス、スナクチ、カマス、イトヨリ鯉）の一本釣漁業、追込網漁業、建干網漁業等隨所に行はれ、漁獲物は殆ど鮮魚のまゝ地元住民に供給されてゐた。尙この他島民のビスカン又は投網を使用する漁業があるが、殆ど游漁又は自家用に供する程度で、之等雜魚漁業は前述漁業規則に依れば届出漁業で支廳長より鑑札の下附を受け簡単に漁業に従事することが出来たものである。

九、遠洋漁業

群島を根拠として近接管外へ出漁する遠洋漁業は鰹及各種貝類其他を目的として將來の發展は大いに期待せられるところであつた。就中パラオを根拠としアラフラ海及濠洲北岸沖合公海に出漁する白蝶貝漁業は昭和七年（一九三二）

年)創始以來急速に發展し、昭和十二年(一九三七年)には四、二〇〇屯の漁獲を得、其漁獲物は世界市場を支配するの趨勢にあつた。然し無統制な出漁と漁場の荒廃と生産過剰に依り、又時局に災され不振の状態にあり、太平洋戦口期頃より將來に期待をかけながら中止して居つた。尙此外遠洋漁業としての高瀬貝、鮪漁業等も亦將來發展の余地が少ないものとして大いに期待されて居つたものである。

第六節 養殖業

一、眞珠養殖業

群島は内地漁場の如く赤潮、其他の被害なく又内地に比し短期間に眞珠形成完了し優秀な眞珠を産する爲、昭和十七年(一九四二年)にはパラオに九ヶ所、ヤルトに一ヶ所計十ヶ所の養殖場があつた。

パラオに於ては群島産黒蝶貝及北濠洲アラフラ海方面より活介の儘輸送して來る白蝶貝を母貝とし、ヤルトに於ては黒蝶貝を母貝としていた。本業も試験の域を脱し、大いに其の將來を期待せられたが、太平洋戦争の影響を受け積極的發展を見合せ中であつた。

二、海綿養殖

群島到る処に海綿は棲息してゐるが、品質概して粗悪で良種のは稀である。乍然ヤツブ、トラツク、ボナベ、ヤルト等は海綿生産地として好適な條件を具備して居たので、南洋廳に於ても之が養殖試験を実施中であつた。昭和十七年(一九四二年)現在斯業の許可を與へたものパラオ二、ヤルト二、ヤツブ三、ボナベ一、計八件であるが

起業早々で未だその産出はなかつた。海綿の用途は多方面で特に高級機械の發達と共に益々其の需要は増加の傾向にあるので群島産物として將來は有望視されて居た。

三、高瀬貝養殖業

昭和十二年(一九二七年)先づトラツク諸島に移殖実施を行ひ、以後六年(一九三一年)迄継続放養した処好結果を得たので各地に於て之が事業を企図する者多くトラツク、ボナベ、テニアン、ロタの水産組合及個人又は会社にも許可しヤツブ及ヤルトの各離島に於ても昭和十七年(一九四二年)より移殖を実施するやうになつた。本事業は着手後、日淺く未だ産額は尠かつたが数年後に於て之が蕃殖の曉には本邦唯一の高瀬貝生産地として群島産業上貢献する処多大なるものと期待して居た。

第七節 製造業

一、鯉節製造業

群島に於ける鯉節製造業は其の製品技術に於て内地に遠く及ばなかつたが、多年試験研究の結果、次第にその品質向上し内地産に比し殆ど遜色なく南洋節としてその眞價を認められるに至り、鯉漁業の進展と相俟つて非常な隆盛を見るやうになり昭和十七年(一九四二年)度に於ては其産額一、九〇五、一三〇吨に達し群島水産物製造高の約九割を占むるに至つた。

二、罐詰製造業

群島の罐詰製造業は昭和十三年（一九三八年）始めてパラオに於て南興水産株式会社の手により開始せられ、製品は主として米國向輸出せられた。日産三百箇内外の能力を有し、將來事業拡張の計画があつたが、時局の影響を蒙り中止の已むなきに至り、太平洋戦争当初に於ては充足民需非常食糧用又は円域需要として三十箇内外の製造を爲すに過ぎなかつた。

三、其の他の製造業

我が統治以前の群島に於ては海參、鰯鱈の製造が行はれたが、近時海參の原料たる海鼠は良質のもの減少し、産額僅少であつたが良種海鼠の養殖事業の進展を見るに於ては將來を期待し得られるものゝ一つであつた。尙鰯鱈はその産額見るべきものなく鮫漁業の將來と共に有望視されるものであつた。

第十九章 鑛業

第一節 概況

群島々嶼は面積狭少で地質が比較的單純の上に、地史が若いので埋藏する鉱物も之の制限を受け、加へて地理的條件や勞力等の制肘もあつて企業化出來ず、爲に鉱業に於ては從來顯著な發展的傾向は見られなかつたものであるが、滿洲事変以來國際環境の惡化に伴ふ我國の孤立化に依る國內自給の要請に従ひ群島の鉱物資源の重要性が認識せられ從來よりの燐鉱と新興のボーキサイトの二大鉱業を中心に銅、鋳マンガン、鋳等の開發が起り、群島鉱業は躍進的發展を見るに至つたものである。群島燐業の大宗を爲す燐鉱は一九〇三年独逸學術探險隊の發見に係り独逸燐鉱株式会社の操業となつて居たものを一九一四年我が領有に依り繼承せるものでボーキサイトに付ては一九三五年群島地下資源探求の要請の喫緊なる狀況下に於て日本人山田恵三郎の發見したものである。燐鉱に付ては太平洋戦争前迄採掘していたもので、主要なる燐鉱区はアンガウル、フハイス、ロタ、サイパン等で何れも南洋拓殖株式会社及南洋興發株式会社の手に依り採掘されていた。尙グリニツチ、パンナ、プール、メデジャ及マーシャル群島の諸島や其他各離島には至る処燐鉱の賦存を認められていたが鉱量、品位、運輸、勞力等よりして未だ企業には至つていなかつたものが多かつた。ボーキサイトは一九三五年群島内パラオ島を始め各島に露出せるものを發見し、南洋アルミニウム鉱業株式会社の手によつて一九三七年始めて採掘せられ、一九四三年よりは更に増産計画を樹立し之が設備も着々整備し、

南洋羣島工業に一段の重きを加へていた。其の他サイパンのマンガン鉱、銅、金、銀鉱も採掘されていた。太平洋戦争の苛烈化に伴ひ内地との交通を遮断されるに及びいづれも中止の状態となつたものである。

第二節 主なる鉱物資源

群島に於ける鉱物資源としては燐鉱ボーキサイトの外銅金銀鉱、ニッケル鉱、石綿、マンガン鐵、耐火粘土、硫黄、大理石、褐炭等の有用鉱物を挙げることが出来る。

イ、燐鉱 アンガウル島の燐鉱は独領時代一九〇三年炭層の探求中偶然発見せられたものと云はれているが、一九〇七年独逸探險隊に依り其の品位及埋藏量が確認され、独逸ブレーメン市に設立の独逸燐鉱株式会社に依り一九〇九年より採掘に着手せられた。

我が國の統治する事になつてからは、南洋經營組合及海軍の手を経て一九二二年以來南洋廳の經營となり、次いで一九三六年南洋拓殖株式会社が設立されるや、官の現物出資としてファイス業の燐鉱と共に同社の經營に移つたものである。同島の燐鉱々床は群島に於ける最大なもので、石灰石(隆起珊瑚礁)の鋸状凸凹面を被覆して発達し、褐色錫状鉱と白色粘土狀鉱とより成り後者は前者より其の質及量に於て優れている。

移出鉱は両者を配合し乾燥したもので標準成分燐酸三九・八%酸化鉄礬土一・二%のものである。

右の外南洋興發株式会社の經營に係るロタ島の燐鉱は一九三七年四月サイパン島の燐鉱は一九三八年八月ベリリユー島は一九三五年、トコベイ島は一九三七年、グリメス島は一九三八年より夫々事業に着手されていた。

從來我が國に於ける燐鉱は沖縄縣ラキ島、台灣等に於て僅かに産出を見る状態であつたが、いづれも産額少く我國の肥料対策上喫緊の資源であり之が充足上当群島に於ける燐鉱業は極めて重要な地歩を占めていたものである。

ロ、ボーキサイト 一九三五年パラオ本島に於て先づ発見せられ、次いで三井鉱山株式会社に依り一九三五年、一九三六年に亘り群島内各地が調査された結果、パラオ本島を初めボナベ島、ヤツブ島に於ても発見せられた。之が開発に付ては一九三七年六月南洋アルミニウム鉱業株式会社がパラオ本島に於て起業に着手し、一九三八年七月出鉱を見るに至り、時局の要請により逐年隆盛に向ひつゝあつた。パラオ本島のボーキサイト鉱床は大別してネデシウル及ガラスマオの二鉱床に別れ、群島内の他の諸鉱床と同じく紅土(ラテライト)中に胚胎して発達したもので熱帯特有の氣候により安山岩質集塊岩が紅土化し、更に長石類の可溶性のものが流失しアルミナや酸化鉄の如き不溶性のものが残留して生じた残留鉱床で丘陵性山地の鞍部に胚胎したものである。粒状をなして粘土と共に産出し拳大から小豆位の大きさに分布して鉱層の上部から下部に至るに従ひ品質の低下する傾向がある。

製鍊規格の關係上、採掘粗鉱は長型洗鉱機及分級機を使用して選鉱し品位を上げて精鉱を移出してゐた。粗鉱百斤から精鉱三十六斤を生産する割合で其の平均品位は粗鉱はアルミナ三五—四〇%、酸化鉄二二—二五%、硫酸六—八%、精鉱はアルミナ四九—五二%、酸化鉄一四—一六%、硫酸二—四である。

実收率は三六%位であつたが、之が回收率の向上につき特に研究が続けられてゐた。右のみボナベ、クサイ、ヤツブ、トラツク、ロタの各島、その他にも鉱床が賦存し中にもボナベ島に於けるものが最も有望視されていた。

群島に於けるボーキサイトは品質優良で我が國に於けるアルミニウム工業の主要原料であつた。

ハ、滿洲鈹 滿洲鈹がサイパン島に発見されたのは余程以前の事であるが、その企業價值が認められず、一九四一年一月漸く南洋鈹業所が其の起業に着手し、他方南洋貿易株式会社も一九四一年九月より採掘を開始し良質滿洲鈹を内地に移出していたが、一九四二年両者の企業は全て南洋興業株式会社に移り、其の經營が一元化されるに至つた。起業地以外の場所にも有望な鈹床の賦存することが判明し、其の開發を急いでいた。

ニ、銅金銀鈹 ヤップ島に於ける金銀鈹は南洋廳の発見調査の後を承けて南洋拓殖株式会社が調査を続行した結果、其の企業價值が確認せられ一九四二年鈹業許可をみたものであつた。

ホ、其の他の鈹物資源 マリアナ群島に硫黄、サイパン島東部パラオ本島に滿洲鈹、褐炭、パラオ、ボナベ島に硬質鉄鈹、ヤップ島の塩基性岩石中に石棉及含ニッケル鉄鈹、パラオ諸島の安山岩及その集塊岩地帯に金銅亜鉛鈹、珊瑚、パラオ、ボナベ及其他諸島に耐火粘土、パラオ諸島及サイパン島の石灰岩中（隆起珊瑚礁）に大理石等の賦存が発見せられ、既に其の企業價值を確認せられたものも尠くなく引続き之が調査中であつた。

第三節 地質鈹床調査

従来群島に於ては組織的、且全般的な地質調査が行はれて居らず、唯断片的な調査が実施されたのみで鈹業一般に關する研究機関も存在してゐなかつたが、一九三六年度より熱帯産業研究所に鈹業部（鈹業科及地質科）が創設せられ、鈹業一般の研究を開始すると共に南洋廳に於ても鈹業調査に従事する専門職員を配置し、一九三七年度より五年經理事業として群島全般に亘り地質並に鈹床に關する総括的な調査に着手し、一般民間に於ける鈹物調査と相俟つ

て其の成果著しいものがあつた。

第四節 鈹業制度

滿洲事變以來國內の要請に依り群島に於ける鈹業の勃興を促進したものであるが、之に鑑み之に対処する爲、從來の鈹業規則を廢し一九三七年五月勅令を以て南洋群島鈹業令を次いで同年六月廳令を以て同施行規則の公布を見ると共に同年七月一日より施行せられ、茲に群島鈹業制度の確立を見たのであつた。鈹業令に於ては主として鈹業の出願及許可、鈹業権者の權利義務、鈹業經營の監督等の大綱につき規定していた。

第二十章 貿易

第一節 概況

一、我が國と南洋群島との交渉はその地理的關係より思ひ起し早くより何等かの交渉があつたことを思はせるが、何等の文献の徴すべきもなく唯僅に口碑傳説に依つて今人が兎や角と附念するに過ぎない。従つて我が國と南洋群島との交渉は一八九〇年東京府士族授産資金を以て企てられた南洋通商の開始にその起源を求むるよりほかはない。一八九〇年田口卯吉は東京府士族資金四万四千円を以て南島商會を組織し、帆船天佑丸（九十一屯）を購入し、田口以下一行十七名を以て同年五月十五日横浜港を出帆、途中小笠原、グワム、ヤップ及パラオの諸島を経てボナベに到り、此地に南島商會を創立した。南島商會は誠意を以て島民に接し、大に彼等の信望を博したが、經營意の如くゆかなかつたのか創業幾許もなく、業務を他に譲渡し、一屋商會の名の下に其の事業は継続せられたが、一屋商會も亦收支相償はず、一八九五年遂に解散の止むなきに至つた。一八九一年快通社及恒信社が創立せられ、何れもトラック島を本拠として貿易事業を經營したが、快通社は使用船の坐礁に因り解散し、恒信社は一八九三年トラック島よりパラオに移轉し一九一四年我が統治前迄その事業を継続した。一八九三年南洋貿易日置合資会社設立しボナベ、トラック、サイパン及グワム各島に支店を設置し、帆船長明丸（九十六屯）を使用して盛に通商貿易に従事したが、独逸官憲の忌む処となり、一八九九年中トラック、ボナベの支店を閉鎖するの余儀なきに至り、一九〇〇年頃村山商會と合併して

株式組織とし、南洋貿易株式会社と改称し、爾來事業を拡張して群島内は勿論、南太平洋諸島及蘭領セレベス島迄その支店、出張所を増設せしめ、文化の交流、經濟の提携等群島の貿易に裨益する処からず、在住民及原住民の福利に多大なる貢獻をなしたが、一九四二年南洋興發株式会社と合併した。

其の他單獨で群島に渡航し、拓殖に従事した者も尠くなかつたが、地積狹少であり、且つ内地との交通極めて不便であつた爲、事業上の不利多く、又金融に恵まれざる等諸事情の爲經營せられたるもその業績は必ずしも之に伴はない恨はあつた。

群島の貿易は前述の如き状態で当初何等見るべきものもなかつたが、一九一四年我が統治以來幾多の惡條件を克服し産業の開拓と邦人の増加に伴ひ、逐次發展して來た。殊に一九二一年に創立せられたる南洋興發株式会社に依り群島の中核的産業たる糖業の成功は各種産業に曙光を與へ、産業開拓の進展と共に群島の貿易は躍進的發展をなしたれど大部分は内國貿易であつて移輸出貨物としては砂糖、燐鉱、コブラ、鯨節及酒精等を主なるものとし、移輸入貨物の主なるものは米穀、其の他食糧品、煙草、車輛、船舶、機械類、綿布、綿製品、木材及木製品等であつた。

第二節 移出入

群島に於ける移出入はサイパン、テニアン、ヤップ、パラオ、アンガウル、トラック、ボナベ、クサイ及ヤルトの九交通港に於て行はれ、移出入貨物に付ては何等課税せらるゝ事がないのを原則とした。然し例外として移出先に於て消費税を課せらるゝ貨物には、之を賦課するところの出港税制度を施行した。又輸出入にサイパン、パラオ、ア

・ガウル、トラツク、ボナペ及ヤルートの六開港に於て行はれたが、内アンガウル港のみは移輸入貨物に付制限を附されてゐる。輸入貨物に付ては、別に關稅の制度もあり、これは日本内地の場合と變りはない。

第三節 輸 出

輸出品の殆ど全部は日本内地に移出するものにして外國に輸出するものはパラオよりニューギニア及葡領チモールへ、ボナペよりニューギニア及南太平洋諸島へ、ヤルートよりギルバートへ綿布、雜貨、食糧品等を若干輸出するに過ぎなかつた。

第四節 輸 入

移輸入品の殆ど全部は日本内地より移入するものにして、外國より直接輸入するものとしては、前項諸地方よりコブラ、ココア、珈琲等極めて限られた量に過ぎなかつた。

第二十一章 金 融

第一節 概 況

群島に於ては獨領時代は獨逸貨幣を用ひていたが、我が占領と同時に稅金等は邦貨を基準とすることとし、諸法令に於ても邦貨を以て定めたが、急速な改変は不便を伴ふ事が多いので、之を改め暫定的に獨貨を以て納稅せしむる事とした。

其の後、一九一五年十二月民政令第八号を以て南洋群島貨幣令を制定し、日本貨幣を法貨として英金貨、米金貨、獨金貨は所定の公定相場に依り收納金と爲すことを得しめ、從來の獨貨は日本貨幣と引換を行ふと共に、獨逸貨幣の流通を禁止し、又外國補助貨の輸入をも禁じた。従つて群島在住民の間に流通されたものは邦貨のみであつた。

元來島民は廣汎なる地域に散在せる小島に居住し、其の必要とするものは凡て自ら作り、近隣有無通じ、他島より之を需むる必要がないので、各島に於ては夫々必要とするものは物々交換に依り、一部ヤツプ島のみは石貨及貝貨を以てなしいたる程度にして自然貨幣の必要を認めなかつた。然し、外國人の來島は島民をして自然經濟的觀念を知得せしめ、物慾も加はつて來たので、諸稅金其の他を貨幣で納付する者も生じてきた。これは勢い島民をして、貨幣の必要を感じしむる動機となり、勞働其の他、製作品の販賣等に依つて貨幣を得ようとしつつあるが、僻遠の離島に至つては貨幣の効用を知らぬもの多く、又知つて居ても利用する途もないので島民の生産するコブラの如きは今尙物々

支那に依りつつある状態なので金融機関の必要はなかつた。

然し乍ら我が統治以來邦人の企業は漸次發展するに従つて、金融機関の設置を必要とするものあるに至つたけれども、其の地理的關係等の爲未だ銀行其の他の金融事業を行ふものがなかつた。従つて一般企業家は之を内地に求め、小企業者の多き地方に在つては主に無尺講に依る状態で資金の融通、並に運轉等に多大の困難を余儀なくされ、産業開發上甚しく不便を嘗めて來たが、一九三二年九月群島産業組合令及施行規定の制定に依り始めて金融の途は開かれた。然し乍ら送金に依る爲替は郵便爲替に依る外なく、荷爲替手形の利用得なく、商業金融上尙著しく障害があつたので一九四三年台湾銀行を招致し、其の支店を開設せしめ群島産業の一大飛躍をなさしめんと準備にとりかかつたがついに其の期を見るに至らなかつた。

第二節 産業組合

前述の如く産業組合の制定に依り一九三三年一月サイパン及パラオ支廳管下に初めて産業組合の設立を見るに至り、其の後産業組合思想の普及に伴ひヤップ、ヤルート管下を除く各支廳管下に夫々その設立を見、相當の成績を挙げた。

設立当初の組合員の数は一六六人に過ぎなかつたが、一九四二年末現在に於ては二、二五七人に達し、組合数を組織的に見れば、保證責任組合はパラオ、サイパン、テニアン、トラツク各一、有限責任組合はサイパン、テニアン、ポナペに各一あつて、何れも一九三三年乃至一九三四年に設立された。

その内容を總括的に見れば、一九四二年末に於ては組合数二、二五七人、出資口数一九、四三三口、一口金額二〇日乃至五〇円、出資総額九三五、六一〇他、拂込済出資金七九〇、〇三〇円、準備金一九八、二七七円、其の他積立金六〇、八四五円、借入金四一四、一〇四円、貯金六、〇八五、〇三八円、貸付金四、六四〇、四八九円であつた。

第三節 通信事業金融

群島に於ける金融部門に重要な地位を占めるものは通信事業がある。即ち郵便爲替、郵便貯金、振替貯金、簡易保険、郵便年金、年金恩給等である。

1 道 路 延 長

年 次	總 數	幅員4米未満	幅員7米未満	幅員7米以上
大 正 1 (1922)	197	186	5	7
昭 和 2 (1927)	252	228	16	8
昭 和 7 (1932)	427	270	126	31
昭 和 12 (1937)	344	236	271	37

2 諸 車

年 次	總 數	自 動 車	自 動 車 自 轉 車	自 轉 車	馬 車	人 力 車	荷 牛 馬 車	荷 車
大正11(1922)	473	—	—	31	—	3	431	8
昭和2 (1927)	1,502	—	—	512	1	7	892	90
“ 7 (1932)	6,101	61	12	3,591	4	1	2,259	173
“ 12(1937)	16,536	不明	—	13,028	—	6	3,282	220
“ 14(1939)	16,697	不明	—	13,248	—	1	3,285	163

3 南 洋 廳 命 令 航 路 (1) (日本郵船株式会社航路)

年 次	使用船隻數	同左總屯數	航 海 度 數	航 海 延 遲 數	・ 搭 載 貨 物
總 數					
大正 11 (1922)	3	8,646	16	98,921	屯
昭和 2 (1927)	4	11,883	24	169,140	—
同 7 (1932)	11	40,833	45	218,990	148,280
同 12 (1937)	14	239,244	57	369,918	318,458
同 14 (1939)	19 10	69,034 41,004	82 77	425,003	368,553
東 廻					
大正 11 (1922)	1	3,056	3	19,612	—
昭和 2 (1927)	1	3,500	6	41,400	—
同 7 (1932)	2	9,770	6	43,920	19,046
同 12 (1937)	4	43,172	10	71,690	64,715
同 14 (1939)	5	20,352	19	137,304	96,160
西 廻					
大正 11 (1922)	2	5,590	11	66,235	—
昭和 2 (1927)	2	4,892	13	85,215	—
同 7 (1932)	5	18,552	16	90,870	57,031
同 12 (1937)	6	137,496	29	192,644	145,869
同 14 (1939)	7	26,303	40	219,275	171,073

年次	使用船隻数	同左総屯数	航海度数	航海延滞数	搭載貨物
東西連絡線					
大正 11 (1922)	1	3,056	2	13,074	電 1
昭和 2 (1927)	1	3,491	5	42,525	—
同 7 (1932)	2	6,902	6	46,300	16,761
同 12 (1937)	1	20,364	6	54,612	24,701
同 14 (1939)	1	968	5	11,452	880
備考 東西連絡線ハ 14 年度ヨリ南洋汽船株式会社ニ変更サル					
太平洋線					
大正 11 (1922)	—	—	—	—	—
昭和 2 (1927)	—	—	—	—	—
同 7 (1932)	2	5,609	17	37,900	55,442
同 12 (1937)	3	38,212	12	50,972	83,173
同 14 (1939)	6	21,411	18	68,424	101,320

3 南洋廳命令航路 (口) (南洋貿易株式会社航路)

年次	使用船隻数	同左総屯数	航海度数	航海延滞数	搭載貨物
總数					
大正 11 (1922)	6	1,830	66	49,721	電 1
昭和 2 (1927)	5	1,401	55	44,880	—
同 7 (1932)	5	1,493	60	52,141	4,915
同 12 (1937)	5	12,841	53	59,019	17,968
同 14 (1939)	5	1,270	57	76,654	8,718
マリアナ群島線					
大正 11 (1922)	1	100	12	3,000	—
昭和 2 (1927)	1	100	14	3,580	—
同 7 (1932)	1	100	17	4,150	1,255
同 12 (1937)	1	3,705	19	5,330	1,772
同 14 (1939)	1	195	20	6,280	2,324
西カロリナ群島線					
大正 11 (1922)	1	195	9	9,502	—
昭和 2 (1927)	1	195	9	8,345	—
同 7 (1932)	1	195	12	13,778	274
同 12 (1937)	1	1,592	8	12,234	4,117
同 14 (1939)	1	199	9	13,664	1,834

年次	使用船隻数	同左総屯数	航海度数	航海延運数	搭載貨物
東カモリソ群島線					
大正 11 (1922)	1	465	19	16,210	—
昭和 2 (1927)	1	465	13	13,865	—
同 7 (1932)	1	465	15	16,573	666
同 12 (1937)	1	2,880	9	23,575	5,011
同 14 (1939)	1	340	6	28,960	1,584
マシーヤル群島線					
大正 11 (1922)	3	1,070	26	21,009	—
昭和 2 (1927)	2	641	19	19,010	—
同 7 (1932)	2	733	16	17,640	2,720
同 12 (1937)	2	4,664	17	17,880	7,068
同 14 (1939)	2	536	22	27,750	2,974

3 南洋廳命令航路 (ハ) (南洋汽船株式会社航路)

年次	航海度数	使用船隻数	同左総屯数	航海延運数	搭載貨物 屯	乗客人員 人
昭和 13 (1938)	7	1	968	20,145	4,004	1,472
同 14 (1939)	9	1	968	28,618	6,956	1,568
内地帰還線						
昭和 14 (1939)	4	1	968	17,166	6,076	641

3 南洋廳命令航路 (ニ) (南洋海運株式会社航路)

年次	航海度数	使用船隻数	同左総屯数	航海延運数	搭載貨物 屯	乗客人員 人
昭和 13 (1938)	6	3	16,056	36,840	3,087	218
同 14 (1939)	12	6	29,602	39,624	8,289	448
内地、郡島、瓜哇線						
昭和 14 (1939)	12	6	29,602	39,624	8,289	448

備考 使用船隻数及総屯数ニシテ内容ト総数ト符合セサルモノアルハ同一船舶ニシテ1年度内ニ2線以上ノ航路ニ就航シタルモノアルニ因ル

4 船舶入出隻数及総屯数 (1)

年次	入				出			
	總 隻 数	汽 船 数	帆 船 数	電 船 数	總 隻 数	汽 船 数	帆 船 数	電 船 数
大正 11 (1922)	226	—	157	—	226	—	69	—
昭和 2 (1927)	358	—	243	—	358	—	115	—
” 7 (1932)	472	1,210,000	352	1,170,228	472	—	120	39,772
” 12 (1937)	917	2,152,977	560	2,086,005	917	—	437	66,972
” 14 (1939)	1,229	2,555,291	705	2,490,539	1,229	—	524	64,752

4 (続)

年次	出				港			
	總 隻 数	汽 船 数	帆 船 数	電 船 数	總 隻 数	汽 船 数	帆 船 数	電 船 数
大正 11 (1922)	225	—	155	—	225	—	70	—
昭和 2 (1927)	356	—	242	—	356	—	114	—
” 7 (1932)	470	1,202,736	351	1,169,769	470	—	119	32,967
” 12 (1937)	934	2,145,021	555	2,080,401	934	—	379	64,620
” 14 (1939)	1,315	2,530,877	698	2,461,346	1,315	—	617	69,531

○印ハ外國船舶ノ再掲ナリ

4 船舶入出登簿屯数 (2)

年次	入			港			出		
	總 数	汽 船	帆 船	總 数	汽 船	帆 船	總 数	汽 船	帆 船
昭和 5 (1930)	571,303	555,695	15,608	571,248	555,695	15,553	729,659	709,775	16,515
” 7 (1932)	729,659	710,116	19,543	726,258	709,775	16,515	1,280,580	1,246,428	30,054
” 12 (1937)	1,280,580	1,249,204	31,576	1,276,482	1,246,428	30,054	1,519,954	1,478,239	33,310
” 14 (1939)	1,519,954	1,489,515	50,459	1,511,549	1,478,239	33,310			

○印ハ外國船舶ノ再掲ナリ

5 汽船乗降人員

年次	乗降人員				乗降人員			
	總 数	男	女	邦人	總 数	男	女	邦人
大正 11 (1922)	12,234	8,650	3,584	3,776	755	25	—	4,849
” 14 (1925)	22,988	16,769	6,221	4,528	1,302	54	7	12,185
” 2 (1927)	18,311	15,904	4,407	4,778	1,907	45	15	9,081

年次	乗 船 人 員									
	總 數		數		邦 人		外 國 人		島 民	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
昭和2 (1928)	7,186	5,799	1,387	1,949	730	40	15	3,810	642	
" 7 (1932)	8,928	6,725	2,198	4,108	1,532	44	6	2,573	660	
" 12 (1937)	33,591	24,220	9,371	20,324	7,982	65	26	3,831	1,413	
" 14 (1939)	23,378	16,054	7,324	13,779	6,506	21	12	2,254	806	
下 船 人 員										
年次	總 數		數		邦 人		外 國 人		島 民	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	氏	名	姓	名	姓	名	姓	名	姓	名
昭和3 (1928)	10,790	7,834	2,956	4,142	2,160	56	39	3,636	757	
" 7 (1932)	11,917	8,290	3,627	5,446	2,942	58	13	2,786	172	
" 12 (1937)	37,983	27,564	10,419	23,471	8,994	64	19	4,029	1,406	
" 14 (1939)	28,602	19,749	5,852	17,173	9,823	22	16	2,554	1,013	
汽 船 乗 降 人 員 出 発 地 及 行 先 地 別										
年次	乗 船 地 點									
	行 先		地 點		出 発 地		行 先 地		別	
	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地
昭和3 (1928)	7,186	1,909	5,163	114	10,790	5,516	5,166	108		
" 7 (1932)	8,923	3,637	4,897	389	11,917	6,568	5,002	347		
" 12 (1937)	33,581	9,905	23,491	195	37,983	14,070	23,713	200		
" 14 (1939)	23,378	12,290	11,054	34	28,601	16,980	11,552	69		

6 郵 便 物

年次	通 常 郵 便									
	普 通		特 別		通 常		特 別		通 常	
	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地
大正11 (1922)	671,787	292,977	378,810	13,162	8,648	4,514				
昭和2 (1927)	1,044,940	435,202	609,738	21,530	12,564	8,966				
" 7 (1932)	2,697,958	1,029,712	1,668,241	36,298	18,216	18,082				
" 12 (1937)	5,804,058	2,171,030	3,633,028	74,125	36,310	37,815				
" 14 (1939)	6,512,942	2,322,877	4,190,065	95,043	47,114	47,929				

6 (続)

年次	包 郵 便									
	普 通		特 別		通 常		特 別		通 常	
	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地	群 島 内	其 他	總 數	内 地
大正11 (1922)	—	—	—	—	10,935	1,774	9,161			
昭和2 (1927)	—	—	—	—	26,448	5,778	20,670			
" 7 (1932)	—	—	—	—	46,764	10,035	36,729			
" 12 (1937)	29,751	12,257	17,494	75,414	11,620	63,794				
" 14 (1939)	38,900	16,011	22,889	82,813	17,086	65,727				

7 電 報 取 扱 通 数 及 料 金

年 次	總 通 数	内 國 電 報		外 國 電 報		中 繼 信		電報料金 円
		發	著	發	著	内 國	外 國	
大正11(1922)	98,369	25,420	21,582	820	170	50,359	18	20,373,480
昭和2(1927)	272,750	74,460	69,364	724	320	127,201	681	42,860,430
" 7 (1932)	381,007	126,029	111,572	1,751	446	140,567	642	60,490,620
" 12(1937)	1,122,953	362,442	299,474	2,993	2,045	455,291	708	183,325,790

8 電 話

年 次	線 路 亘 長		回 線 延 長		線 條 延 長		加 入 者 数		電話料金 (年 中) 円
	ケーブル	裸 線	ケーブル	裸 線	ケーブル	裸 線	單 独	連 接	
昭和2(1927)	352米	7,090米	29,290米	26,627米	58,581米	53,254米	85	—	85
" 7 (1932)	3,761	20,734	187,471	82,921	374,942	165,842	322	5	354
" 12(1937)	6,653	30,191	267,695	131,523	535,391	263,047	446	72	518
									33,460.46

9 私 設 電 話

年 次	施 設 者 数			電 話 機 数		
	總 数	官 廳 用	私 設	總 数	官 廳 用	私 設
大正11(1922)	1	1	—	24	24	—
昭和2(1927)	2	1	1	28	24	4
" 7 (1932)	7	4	3	170	70	100
" 12(1937)	13	5	8	366	142	224

10 原 住 民 通 信 事 業 利 用 狀 況 (1)

年 次	郵 便			電 信			郵 便 爲 替		
	通 数	引 受	常 交 付	小 總 数	引 受	交 付	拂 出 額	拂 入 額	渡 額
昭和3(1928)	15,590	6,470	9,120	263	107	156	890	811	213
" 7 (1932)	25,928	12,813	13,115	410	168	242	1,137	1,188	214
" 12(1937)	38,676	17,301	21,375	2,050	163	1,887	2,411	2,441	569
" 14(1939)	36,910	13,788	23,122	1,320	160	1,160	2,817	2,902	600
									24,395,000
									662
									22,632,000

10 原住民通信事業利用状況 (2)

年次	郵便入金				振替入金			
	預入		拂渡		払込		貯金	
	口数	金額	口数	金額	口数	金額	口数	金額
昭和3 (1928)	5,255	60,722,640	1,705	46,708,240	918	—	—	—
" 7 (1932)	5,452	64,464,870	1,847	64,760,310	494	145	2,262,210	30,000
" 12 (1937)	5,967	78,319,190	1,834	78,484,210	1,042	1,753	29,642,340	11,455,270
" 14 (1939)	16,496	164,835,000	2,116	107,665,000	2,129	1,066	15,285,000	3,574,000

11 簡易保険

年次	新契約		復活		死亡		満期		解約失効出ノ他ノ減		年度末現在契約高	
	口数	保険金	口数	保険金	口数	保険金	口数	保険金	口数	保険金	口数	保険金
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
昭和3 (1928)	87	27,877	—	—	—	—	—	44	6,284	419	90,818	—
" 7 (1932)	1,152	238,958	176	25,225	—	—	—	324	50,738	2,266	430,197	—
" 12 (1937)	11,208	2,546,798	156	24,649	30	3,643	41	3,386	211	2,373	16,505	3,362,926
" 24 (1939)	13,024	3,341,992	186	36,515	170	—	57	—	1,408	—	36,860	8,196,420

12 電気

年次	発電機	発電機用原動機			電燈					
		重油機関	軽油機関	蒸気機関	総数	100W以上	60W	40W	30W	20W以下
		口数	口数	口数	口数	口数	口数	口数	口数	口数
昭和4 (1929)	21	15	1	6	3,776	—	—	—	—	—
" 7 (1932)	25	16	3	3	7,043	75	725	1,030	959	1,733
" 12 (1937)	11	11	—	—	13,331	405	1,644	2,045	1,878	3,244

13 農耕地面積 (毎年未現在)

年次	耕地面積			新墾地		
	総数	田	畑	総数	田	畑
	ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール
大正11 (1922)	6,889.03	1,651.90	5,237.13	795.30	711.35	83.95
昭和2 (1927)	8,353.24	3,339.75	5,013.49	306.87	180.57	126.30
" 7 (1932)	13,622.29	1,250.68	12,371.61	248.13	26.09	222.04
" 12 (1937)	23,473.00	1,388.00	22,085.00	1,132.00	—	1,132.00
" 14 (1939)	23,168.00	1,392.00	21,776.00	1,170.00	11.00	1,159.00

14 農 産 物

年 次	総額買額	サイバン支廳	ヤツヲ支廳	バラオ支廳	トラツク支廳	ホナベ支廳	ヤルート支廳
大正11(1922)	2,788,491	1,716,500	199,625	58,627	199,128	533,211	81,400
昭和2(1927)	2,512,275	1,204,904	112,469	117,362	678,484	336,804	62,232
" 7(1932)	2,818,078	1,621,558	140,205	296,218	538,273	149,012	72,812
" 12(1937)	4,855,378	2,855,224	76,359	452,179	1,007,067	400,359	64,190
" 14(1939)	5,305,181	4,056,214	126,321	408,683	281,830	264,016	58,117

15 既 耕 地 ト 新 墾 地 ノ 比 較

	大 正 11 年		昭 和 2 年		昭 和 7 年		昭 和 12 年		昭 和 16 年	
	農耕地積 面ヘクタ-	新墾地積 面ヘクタ-	農耕地積 面ヘクタ-	新墾地積 面ヘクタ-	農耕地積 面ヘクタ-	新墾地積 面ヘクタ-	農耕地積 面ヘクタ-	新墾地積 面ヘクタ-	農耕地積 面ヘクタ-	新墾地積 面ヘクタ-
サイバン支廳	4,892.35	757.96	6,026.93	274.63	10,925.81	146.21	18,453	695	—	—
ヤツヲ支廳	1,385.59	—	1,489.52	—	1,505.16	0.80	1,512	15	—	—
バラオ支廳	—	—	113.05	20.83	488.76	71.14	1,292	281	—	—
トラツク支廳	228.69	37.34	329.64	5.06	264.20	6.30	798	1	—	—
ホナベ支廳	47.90	—	59.60	6.35	103.81	23.68	1,415	140	—	—
ヤルート支廳	334.50	—	334.50	—	334.55	—	3	—	—	—

16 農 産 品 別 生 産 量 並 價 額

年 次	総 数 價 額	米		粟		黍	
		数 量	價 額	数 量	價 額	数 量	價 額
大正11(1922)	2,788,491	—	—	5,063	1,350	6,750	1,500
昭和2(1927)	2,512,275	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	2,818,078	38,925	1,670	18,900	473	22	2
" 12(1937)	4,855,378	36,968	7,354	72	12	1,205	120
" 14(1939)	5,305,145	43,266	10,487	—	—	—	—

16 (続)

年 次	玉 蜀 黍		大 豆		小 豆		落 花 生	
	数 量	價 額	数 量	價 額	数 量	價 額	数 量	價 額
大正11(1922)	1,624,800	164,565	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	425,050	42,983	—	—	57,750	11,550	218,880	9,600
" 7(1932)	163,024	12,622	2,550	408	3,400	578	14,720	824
" 12(1937)	69,983	8,595	6,989	1,311	9,064	1,866	17,757	3,103
" 14(1939)	152,115	24,125	1,013	360	—	—	1,440	422

16

(続)

年次	其ノ他ノ豆類		甘藷		薯蕷		葫蘆		タロ芋	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	4,181,812	192,277	1,944,864	105,858	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	2,951,850	161,968	1,514,681	96,314	—	—	—	—
" 7(1932)	21,765	3,277	1,568,136	62,419	1,214,859	76,309	2,218,816	91,189	—	—
" 12(1937)	23,881	4,054	2,562,454	145,566	947,231	61,851	3,943,915	162,076	—	—
" 14(1937)	10,061	894	2,027,723	161,830	215,176	59,145	1,130,362	53,408	—	—

16

(続)

年次	里芋類		タピオカ		西瓜		南瓜	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	7,984,913	373,644	3,102,376	84,755	2,111,250	168,900	2,037,000	67,400
昭和2(1927)	9,748,553	630,753	3,463,350	102,356	484,500	27,290	1,571,156	37,047
" 7(1937)	3,095,108	124,154	2,537,385	123,730	431,327	30,159	2,146,690	30,742
" 12(1937)	454,197	33,106	26,272,771	370,473	1,037,755	67,763	2,736,991	37,052
" 14(1937)	775,588	42,011	16,355,268	220,437	455,947	67,024	1,903,353	92,733

16

(続)

年次	胡瓜		越瓜		甜瓜		西瓜		茄子	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	4,650	620	28,125	2,250	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	157,056	12,837	82,627	5,966	13,075	1,273	43,952	4,872	—	—
" 12(1937)	611,265	38,638	136,760	9,218	220,197	26,987	292,336	27,198	—	—
" 14(1939)	414,581	54,954	113,245	11,376	107,011	8,562	398,224	43,422	—	—

16

(続)

年次	大根		無根		菩蕷		胡蘿蔔		牛蒡	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	3,720	496	—	—	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	732,289	6,269	20,638	1,636	3,192	849	2,999	798	—	—
" 12(1937)	330,600	21,457	26,826	1,758	1,946	112	13,646	619	—	—
" 14(1939)	268,288	34,748	2,563	715	750	200	2,625	840	—	—

16 (続)

年次	薑		葱		漬		菜		其ノ他ノ蔬菜類	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	—	—	4,515	692	165,207	29,122	—	—
" 7(1932)	2,327	435	30,095	6,358	304,335	19,901	—	—	—	—
" 12(1937)	55,288	4,745	164,687	22,789	328,817	32,468	609,046	15,778	—	—
" 14(1939)	35,378	6,224	213,103	42,021	460,675	40,539	84,832	14,695	—	—

16 (続)

年次	ニンニク		パイナップル		バナナ		蜜柑	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	—	—	609,975	31,206	5,896,471	292,476	—	—
昭和2(1927)	115,838	6,758	613,425	43,981	3,050,664	140,578	8,438	562
" 7(1932)	74,112	10,054	376,089	23,774	1,961,201	97,789	88,250	6,428
" 12(1937)	59,543	2,824	1,231,931	66,275	1,089,777	46,562	40,051	3,278
" 14(1939)	76,96 $\frac{1}{4}$	5,261	4,001,842	131,593	845,164	77,110	22,077	23,823

16 (続)

年次	パイナップル		麵		果		ポーチ		甘蔗	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	—	—	8,140,523	397,676	927,626	82,470	148,321,200	537,272	—	—
昭和2(1927)	325,875	8,690	9,946,035	314,527	147,000	3,920	196,116,411	760,142	—	—
" 7(1932)	2,773,061	74,467	13,430,738	512,004	—	—	402,301,170	1,426,427	—	—
" 12(1937)	562,339	41,423	25,312,492	1,161,874	—	—	529,135,137	2,310,500	—	—
" 14(1939)	2,301,265	161,382	10,958,689	330,524	145,357 ^{レモン}	28,119	593,743,376	3,653,138	—	—

16 (続)

年次	葉煙草		実		綿		木綿		苧麻		胡麻	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	88,800	174,950	78,900	42,080	27,821	10,660	17,438	1,500	—	—	—	—
昭和2(1927)	19,133	45,404	38,438	9,500	15,120	4,372	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	11,934	23,602	18,088	9,641	—	—	—	—	1,026	492	—	—
" 12(1937)	1,802	3,433	43,611	10,710	64	99	4,194	2,322	967	392	—	—
" 14(1939)	619	780	209,707	62,917	2,250	300	29,857	3,981	—	—	—	—

16 (続)

年次	薄荷		珈琲		カカオ		ババイヤ汁液		ト	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	—	—	65,813	58,500	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	120,000	16,000	6,000	4,800	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	—	—	198,300	13,088	371	592	—	—	—	—
" 12(1937)	—	—	264,251	18,224	191	383	124,630	81,010	—	—
" 14(1939)	—	—	232,305	21,498	449	734	97,166	101,021	7,740	1,615

17 農産物へクター当收穫高

年次	米	粟	黍	玉蜀黍	大豆	小豆	落花生	其ノ他	甘藷	薯蕷	タロ芋	里芋類	タビオカ	西瓜	南瓜
大正11(1922)	—	1,699	1,700	3,760	—	—	—	—	6,557	6,939	—	2,776	8,119	36,705	7,731
昭和2(1927)	—	—	—	1,971	—	1,022	5,383	—	3,463	4,256	—	3,013	8,270	7,578	3,123
" 7(1932)	3,786	9,450	314	1,655	642	1,141	928	1,523	2,496	3,484	3,535	9,727	4,909	9,891	746
" 12(1937)	1,369	1,200	548	522	699	431	1,109	853	3,285	5,444	4,254	4,410	9,695	7,744	13,549
" 14(1939)	2,018	—	—	1,475	679	—	1,210	5,918	6,208	2,570	2,464	8,711	18,677	8,389	9,852

17 (続)

年次	胡瓜	越瓜	甜瓜	茄子	大根	蕪菁	胡蘿蔔	牛蒡	薑	葱	漬菜	其ノ他ノ蔬菜類	マッシュルーム	パイナップル	バナナ
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	6,739	9,438	—	—	9,300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	6,959	8,809	4,315	366	386	3,103	1,464	1,376	1,428	1,559	9,894	—	1,609	4,216	7,243
" 12(1937)	8,859	4,559	5,005	7,130	7,347	4,471	973	6,823	9,215	3,499	5,605	40,958	1,191	2,800	4,578
" 14(1939)	7,840	8,278	6,247	9,691	7,842	1,182	—	2,651	5,896	5,589	10,831	—	7,358	8,520	7,199

17 (続)

年次	蜜柑	パパイヤ	麴麴果	ゴーイ	甘蔗	葉煙草	実綿	木綿	苧麻	胡麻	薄荷	珈琲	카카오
大正11(1922)	—	—	6,213	4,263	51,305	1,140	756	229	1,758	—	—	1,015	—
昭和2(1927)	2,873	41,619	8,032	2,118	58,537	197	2,040	312	—	—	33	73	—
" 7(1932)	2,311	20,991	11,708	—	65,174	285	715	—	—	172	—	1,009	124
" 12(1937)	703	9,696	6,431	—	47,138	360	366	35	98	608	98	1,066	14
" 14(1939)	6,268	6,119	2,753	—	52,673	520	1,096	755	968	—	—	1,126	212

18 肥料消費高

年次	販		賣		肥		料	
	總	數	過燐酸石灰	配合肥料	硫酸アンモニア	燐酸アルナミ		
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	41,696	4,937	12,067	822	15	4,132	779	45
" 7(1932)	86,962	6,413	18,641	1,119	44	9,509	1,092	450
" 12(1937)	378,694	39,070	23,520	2,145	5,914	35,737	4,932	138
" 14(1939)	447,787	68,248	46,921	4,183	15,554	41,762	5,777	188

18 (続)

年次	販		賣		肥		料	
	智利硝石		石灰	望素	硫酸加里及加里肥料	大豆	油	粕
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	450	66	5,152	55	2,539	351	10,770	1,823
" 7(1932)	150	19	480	50	6,947	921	11,139	987
" 12(1937)	—	—	3,410	840	4,964	1,020	14,009	2,887
" 14(1939)	—	—	199	32	16,099	3,806	67,398	10,696

18 (続)

年次	販		賣		肥		料	
	菜種油	粕	其ノ他ノ油	粕	骨	粉	魚	粕
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	578	113	412	44	3,319	374	484	124
" 7(1932)	5,385	510	157	22	2,418	163	12,818	530
" 12(1937)	20,049	2,715	7,586	1,082	703	78	157,214	12,907
" 14(1939)	61,563	10,963	9,368	2,594	—	—	45,530	10,219

18 (続)

年次	販		賣		肥		料	
	石	灰	米	糠	鳥	糞	其ノ	他
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	300	18	6,026	349	—	—	—	—
" 7(1932)	2,160	48	15,160	811	—	—	1,248	79
" 12(1937)	2,288	94	48,912	2,269	—	—	22,279	2,182
" 14(1939)	10,531	836	62,670	3,058	—	—	1,875	500

18

(続)

肥料						
自給			肥		料	
年次	給	数	厩肥数量	堆肥数量	人糞尿数量	草木灰数量
大正11(1922)		—	—	—	—	—
昭和2(1927)		182,475	—	—	—	—
" 7(1932)		1,440,645	168,630	440,222	637,504	85,896
" 12(1937)		22,995,707	2,524,306	10,347,587	5,614,854	107,533
" 14(1939)		186,158,878	51,086,074	106,134,094	8,682,630	212,278

18

(続)

自給肥料									
年次	緑肥				糞草		獸鳥糞量	其ノ他量	
	落花生莖葉量	テフロシヤ量	クロタラヤ量	カウベ量	雜草量				
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	
昭和2(1927)	146,004	—	32,025	1,875	—	—	—	—	
" 7(1932)	2,250	3,000	77,438	—	24,936	394	375		
" 12(1937)	14,331	213,460	17,063	3,450	4,149,648	2,700	375		
" 14(1939)	7,481	182,022	160,379	74,157	19,071,645	548,163	—		

19 家畜、家禽總数

年次	牛	馬	種羊	山羊	豚	水牛	鶏	鶯	吐喰鶏
大正11(1922)	2,604	3	5	1,847	5,562	—	43,416	1,309	429
昭和2(1927)	2,637	17	13	1,900	9,084	—	53,533	2,020	348
" 7(1932)	4,415	34	—	2,888	13,329	16	80,647	3,442	607
" 12(1937)	5,940	47	—	2,889	21,936	58	107,449	10,236	850
" 14(1939)	7,272	40	12	6,924	21,503	72	99,458	6,276	429

20

畜

産

物

年次	總數價額 円	牛 数量	乳 價額 円	鶏 数量	卵 價額 円	鶯 数量	卵 價額 円	生 数量	皮 價額 円
大正11(1922)	139,541	—	—	726,120	61,839	13,080	1,226	—	—
昭和2(1927)	232,825	—	—	1,073,385	37,743	27,840	2,520	—	—
" 7(1932)	331,112	20,160	7,683	1,614,498	86,152	38,912	2,550	6,134	1,507
" 12(1937)	658,805	75,664	34,185	3,092,169	165,130	167,510	9,024	14,269	8,165
" 14(1939)	969,800	46,478	24,264	3,915,301	296,869	174,016	11,952	17,733	8,525

年次	獣・肉		鳥		肉		生産蜂		生産蜜	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	肝 116,724	76,476	肝 —	—	肝 —	—	肝 —	—	肝 —	—
昭和2(1927)	144,568	142,562	—	—	—	—	—	—	—	—
“ 7(1932)	186,643	173,868	32,079	56,059	3,840	2,987	165	306	—	—
“ 12(1937)	374,250	335,800	48,448	81,540	5,951	4,807	126	164	—	—
“ 14(1939)	591,799	523,782	43,398	96,590	4,450	7,520	82	298	—	—

21 林産物

年次	総数価額	用材									
		総数量	総価額	タヤ数量	タヤ価額	ウカ数量	ウカ価額	ベニダツ数量	ベニダツ価額	テツ数量	テツ価額
大正11(1922)	円 1,596,520	立方米 354.3	円 3,934	立方米 2.2	円 106	立方米 —	円 —	立方米 —	円 —	立方米 18.1	円 1,191
昭和2(1927)	3,080,442	2,946.1	13,368	55.0	316	4.2	62	58.1	152	95.2	3,499
“ 7(1932)	3,301,532	1,022.0	7,473	74.2	624	178.8	195	—	—	49.3	2,611
“ 12(1937)	7,021,144	9,939.0	30,183	839.0	9,379	29.0	417	115.0	473	1,301.0	8,066
“ 14(1939)	2,973,360	25,638.0	26,013	249.0	1,084	50.0	237	169.0	674	91.0	562

年次	用材									
	アセン数量	アセン価額	アラキ数量	アラキ価額	カシモ数量	カシモ価額	バシ数量	バシ価額	メリケン松数量	メリケン松価額
大正11(1922)	立方米 —	円 —	立方米 —	円 —	立方米 —	円 —	立方米 134.7	円 1,336	立方米 3.8	円 137
昭和2(1927)	71.5	204	48.6	96	—	—	94.4	1,322	7.4	266
“ 7(1932)	12.2	11	5.5	7	—	—	195.6	1,947	—	—
“ 12(1937)	121.0	406	7.0	24	149.0	503	339.0	2,209	50.0	152
“ 14(1939)	240.0	853	60.0	194	950.0	3,363	176.0	567	—	—

年次	用材		其他		薪炭材		木炭		椰子炭	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	立方米 73.5	円 219	立方米 122.0	円 945	立方米 6,622.7	円 34,000	肝 53,726	円 4,494	肝 —	円 —
昭和2(1927)	746.9	1,891	1,764.8	5,560	31,792.9	38,878	1,049,105	61,870	—	—
“ 7(1932)	393.2	1,021	113.2	1,057	85,505.7	130,998	1,053,070	41,762	—	—
“ 12(1937)	3,546.0	4,488	3,443.0	4,066	69,458.0	20,838	1,618,734	57,690	103,150	6,189
“ 14(1939)	3,730.0	5,180	19,923.0	13,304	45,543.0	19,012	2,147,933	89,388	—	—

21 (続)

年次	種			子			其			他		
	總數	椰子	ノ	實	其ノ	他ノ	總數	コ	ラ	木	耳	他
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量
大正11(1922)	956,283	95,628.306	956,283	12,000	540	1,113,732	9,057	1,103,162	9,863	10,570	—	—
昭和2(1927)	1,851,665	97,056,250	1,851,125	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和7(1932)	2,413,066	120,683,312	2,413,666	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和12(1937)	4,087,042	136,234,768	4,087,042	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和14(1939)	751,696	37,651,254	716,094	1,778,650	35,602	2,087,251	15,034	1,732,572	80,971	33,404	—	—

21 (続)

年次	其			竹			材			樹			皮			其			他		
	伐	量	價	材	面	積	生	立	樹	總數	官	有	民	有	民	有	民	有	民	有	民
	材	價	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材	材
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和7(1932)	49,485	—	1,320	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和12(1937)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和14(1939)	326,440	—	16,189	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

22 椰子 子 林

年次	椰子		材面		積有		生立		樹數		結額		樹數	
	總數	官有	官有	民有	總數	官有	本	官有	民有	本	官有	總數	官有	民有
大正11(1922)	23,772.04	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	26,503.44	—	2,949.28	23,554.16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 7(1932)	31,382.92	—	3,844.32	27,538.60	6,442,863	781,286	5,661,577	3,799,318	444,198	3,355,115	—	—	—	—

23 コ プ ラ 生 産

年次	數量						價額					
	總數		官有		民有		總數		官有		民有	
大正11(1922)	6,894		—		—		597,809		—		—	
昭和2(1927)	9,057		941		8,116		1,103,162		73,542		1,029,620	
昭和7(1932)	10,063		—		—		706,312		—		—	

24 林 野 面 積

年次	總數		官		有		民		有	
	立木	地	立木	地	立木	地	立木	地	立木	地
昭和9 (1934)	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓
〓 10 (1935)	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓
〓 11 (1936)	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓
〓 12 (1937)	85,766	〓	64,914	〓	25,766	〓	20,852	〓	4,954	〓
〓 13 (1938)	85,175	〓	64,724	〓	29,700	〓	20,451	〓	5,431	〓

25 國有土地貸下面積 (昭和18年3月31日現在)

	農耕地	椰子林	牧場	林地	其他	計
サバ	〜クター 18,437	〜クター 2,392	〜クター 751	〜クター 2,001	〜クター 142	23,723
ツ	30	461	—	—	1	492
ア	2,856	684	16	1,499	165	5,220
バ	16	248	—	—	1	265
トラ	1,925	2,698	164	1,988	24	6,799
ホ	—	125	—	—	1	126
ル	23,264	6,608	931	5,488	334	36,625
計						

農耕地面積 (昭和17年末現在)
田 696 〜クター 畑 21,283 〜クター

26 古々椰子

年次	椰子林面積	生立樹数	結実樹数	年中生産量	生産額	年中コアラ生産数	生産額
昭和10(1935)	〜クター 33,669	6,007,240	3,941,302	138,339,865	2,766,797	13,573	1,252,174
〃 11(1936)	32,072	5,793,798	3,920,386	138,367,903	2,767,356	13,000	1,672,418
〃 12(1937)	32,145	5,062,769	3,874,438	136,234,768	2,724,695	14,313	2,699,469
〃 13(1938)	32,052	5,434,098	3,672,457	135,322,045	2,706,441	14,938	2,053,769
〃 14(1939)	31,134	5,151,520	3,684,588	128,061,277	2,443,145	15,034	1,732,572

27 甘蔗收穫面積收穫高產糖高

年 期	收穫面積	甘蔗收穫高	產糖高	歩留	〜クター 當甘蔗收 穫高	糖蜜	產糖高 (再掲)
大正8—9 1919-1920)	〜クター 455.19	?	7,756	?	?	—	担 担 担
〃 9—10 (1920-1921)	534.88	?	19,560	?	?	—	—
〃 10—11 (1921-1922)	825.24	?	3,586	?	?	—	—
〃 11—12 (1922-1923)	1,662.59	34,851,840	20,964	3.61	20,962	—	231
〃 12—13 (1923-1924)	2,154.47	63,603,420	58,378	5.51	29,522	—	937
〃 13—14 (1924-1925)	2,496.41	113,575,380	148,954	7.87	45,495	—	491
〃 14—1 1925-1926)	2,734.08	122,168,880	152,659	7.50	44,684	—	1,132
昭和1—2 1926-1927)	2,943.21	188,493,810	201,940	6.43	64,044	—	2
〃 2—3 (1927-1928)	3,199.99	148,139,610	172,804	7.00	46,294	—	1,830
〃 3—4 (1928-1929)	3,289.59	133,327,050	164,234	7.39	40,530	—	406
〃 4—5 1929-1930)	4,552.23	223,029,240	345,397	9.29	48,993	9,303,442	1,820

年 期	收穫面積	甘蔗收穫高	產 糖 高	歩留	ヘクタール 当甘蔗收穫高	糖 蜜	產 糖 高 (再掲)				
							總 數	第 1 種	第 2 種	第 3 種	第 4 種
總 計											
5—6 30—1931	6,093.49	368,711,220	642,789	10.46	60,509	14,308,832	642,789	68,018	571,692	1,707	1,377
6—7 31—1932	6,586.76	416,957,160	695,572	10.00	63,302	14,378,528	695,572	72,539	619,072	710	3,25
7—8 32—1933	6,143.84	411,264,720	729,807	9.39	66,950	21,711,634	729,807	97,118	625,808	—	6,88
8—9 33—1934	5,917.89	389,178,150	750,203	11.57	65,763	10,453,891	750,303	218,749	525,300	—	6,25
9—10 34—1935	8,037.68	542,374,350	1,135,346	12.56	67,479	9,451,408	1,135,346	311,358	814,233	—	9,25
10—11 35—1936	9,641.33	445,961,940	819,168	11.02	46,255	13,764,471	819,168	130,483	676,817	—	11,86
11—12 36—1937	11,177.74	529,056,450	961,118	10.90	47,331	20,313,413	961,118	96,086	831,948	33,084	—
12—13 37—1938	12,303.51	671,552,160	1,241,678	11.09	54,544	21,048,389	1,241,678	125,905	1,058,930	56,843	—
13—14 38—1939	11,555.00	593,470,830	1,171,695	11.85	51,357	18,135,463	1,171,695	128,308	793,412	249,975	—
14—15 39—1940	10,055.00	522,395,200	1,024,735	11.77	51,951	14,179,193	1,024,735	—	1,024,735	—	—

前年統計年鑑ニ依ル

28 工 産 物

年 次	總數價額	砂糖		糖 類		酒 類		精 酒		サイダー		ラ ン	
		數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額
大正11(1922)	119,394	1,937	23,252	37,411	20,739	—	—	—	—	—	—	44,594	2,675
昭和2(1927)	3,857,164	215,307	3,718,368	179,180	64,252	110,100	25,746	7,743	1,030	11,168	710	—	—
7(1932)	8,312,841	667,525	7,317,199	516,208	212,010	1,204,374	333,825	29,500	2,950	4,500	225	—	—
12(1937)	25,075,050	976,189	18,851,080	1,221,638	519,632	2,644,391	1,020,598	56,340	8,761	70,499	8,602	—	—
14(1939)	28,538,127	1,145,985	23,597,065	1,468,416	711,619	3,672,436	998,787	109,795	18,673	35,088	6,633	—	—

年 次	罐 詰		動 物 製		味 噌		醬 油		麥 性 酒 精	
	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	227	744	—	—	—	—	—	—
7(1932)	4,226	1,256	218	567	68,565	10,047	32,465	8,100	295,840	82,000
12(1937)	648,173	150,461	908	2,417	30,540	6,372	26,662	6,313	23,631	8,980
14(1939)	2,403,931	806,888	803	1,570	173,202	46,249	70,085	16,293	58,698	8,217

年次	糖蜜		果実加工品		パイナップル		タピオカ製粉		酢ノ素	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	— 斤	— 円	— 斤	— 円	—	— 円	—	— 円	— 本	— 円
昭和2(1927)	42,861,428	11,430	—	—	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	13,096,960	218,283	—	—	—	—	—	—	4,961	1,200
" 12(1937)	19,053,713	3,239,131	8,458	6,323	17,175	106,470	3,197,715	513,243	5,153	1,442
" 14(1939)	13,491,603	1,209,139	30,602	28,508	36,509	149,230	2,615,220	481,712	9,779	2,640

年次	氷		石灰		椰子油		椰子蜜	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	— 斤	— 円	— 斤	— 円	577 立	240 円	— 立	— 円
昭和2(1927)	11,925	954	—	—	36	15	505	213
" 7(1932)	1,704,764	58,585	20,634	689	52,398	8,700	2,042	837
" 12(1937)	5,012,560	219,756	3,488,967	243,971	34,872	14,389	5,810	2,315
" 14(1939)	8,315,315	217,877	63,822	2,638	88,449	33,164	—	—

年次	鼈甲細工		椰子細工		スラツキ		塗料		家具	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	400 個	1,400 円	— 個	— 円	— 本	— 円	— 個	— 円	— 個	— 円
昭和2(1927)	975	2,400	—	—	318	191	—	—	—	—
" 7(1932)	483	1,033	5,817	3,825	2,421	2,106	656	744	—	—
" 12(1937)	4,826	7,547	7,922	4,682	5,304	8,818	1,693	2,194	—	—
" 14(1939)	1,841	6,831	7,548	4,145	2,193	5,364	940	2,055	—	—

年次	石鹼		挽物		農具		綿		金属製品	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
大正11(1922)	924 本	231 円	— 個	— 円	—	—	— 斤	— 円	— 個	— 円
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	—	—	656	744	—	—	1,080	1,152	—	—
" 12(1937)	—	—	—	—	—	—	16,212	20,177	—	—
" 14(1939)	—	—	—	—	—	—	39,964	70,699	—	—

年次	傳馬船		靴		獸皮製品		レモン・グランス油		葉巻煙草	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	405 圓	202 圓
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—	1,751	580
" 7(1932)	—	—	—	—	—	—	—	—	2,599	1,335
" 12(1937)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 14(1939)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

年次	椰子葉帽子		株投樹葉帽子		其ノ他組編物		椰子繩		其ノ他	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
大正11(1922)	2,506 個	10,699 圓	768 個	792 圓	5,187	8,519	53,245 把	50,645 圓	—	—
昭和2(1927)	759	4,138	650	650	3,098	5,823	27,634	19,920	—	—
" 7(1932)	1,689	7,083	1,308	1,439	6,158	26,461	8,458	8,473	—	1,950
" 12(1937)	1,355	5,455	1,774	1,816	17,002	13,496	11,268	9,552	—	2,687
" 14(1939)	465	1,617	785	802	11,545	8,513	27,518	22,325	—	21,663

年次	總			數		農 林		
	社數	公稱資本	拂込資本	社數	公稱資本	社數	公稱資本	拂込資本
大正11(1922)	10	46,570,000 圓	12,287,500 圓	3	19,050,000 圓	—	—	6,500,000 圓
昭和2(1927)	12	6,873,000	5,297,500	4	1,163,000	—	—	488,000
" 7(1932)	31	14,712,500	12,879,500	3	3,563,000	—	—	3,250,500
" 12(1937)	47	96,891,517	45,396,017	7	6,900,000	—	—	5,275,000
" 14(1939)	53	114,915,817	75,073,317	14	16,052,500	—	—	7,385,000

年次	商		業		商 業 立 運 輸 業		水 産 業	
	社數	公稱資本	拂込資本	社數	公稱資本	拂込資本	社數	公稱資本
大正11(1922)	4	2,520,000 圓	1,287,500 圓	2	22,000,000 圓	1,500,000 圓	—	—
昭和2(1927)	4	610,000	247,500	1	2,000,000	1,500,000	1	50,000
" 7(1932)	16	1,318,500	986,000	1	2,000,000	2,000,000	3	102,000
" 12(1937)	15	16,609,417	5,609,417	1	50,000	25,000	9	6,375,600
" 14(1939)	11	11,702,817	10,972,817	5	3,106,000	1,566,000	9	8,930,500

29 (続)

年次	工業			業		業		拓殖業	
	社数	公称資本 円	拂込資本 円	社数	公称資本 円	拂込資本 円	社数	公称資本 円	拂込資本 円
大正11(1922)	1	3,000,000	3,000,000	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	1	3,000,000	3,000,000	—	—	—	—	—	—
" 7(1932)	5	7,650,000	6,512,000	—	—	—	—	—	—
" 12(1937)	13	44,956,500	16,801,500	1	2,000,000	500,000	1	20,000,000	12,909,500
" 14(1939)	11	45,074,000	28,376,000	1	10,000,000	4,000,000	2	20,050,000	15,323,000

29 (続)

年次	其他			年次		昭和12(1937)	昭和14(1939)
	社数	公称資本 円	拂込資本 円	組合名 会社 株式 会社 総数	社数		
大正11(1922)	—	—	—	—	—	2	1
昭和2(1927)	1	50,000	12,000	—	—	15	13
" 7(1932)	3	79,000	28,500	—	—	30	39
" 12(1937)	—	—	—	—	—	—	—
" 14(1939)	—	—	—	—	—	47	53

30 南洋群島 = 本社ヲ設クル会社

年次	總			農		林	
	社数	公称資本 円	拂込資本 円	社数	公称資本 円	社数	拂込資本 円
大正11(1922)	1	3,000,000	3,000,000	—	—	—	—
昭和2(1927)	6	3,723,000	3,385,000	3	663,000	—	363,000
" 7(1932)	26	13,142,500	11,954,500	2	3,063,000	—	3,063,000
" 12(1937)	44	95,991,517	44,496,017	4	6,000,000	—	4,375,000
" 14(1939)	49	111,315,817	73,285,817	12	15,452,500	—	7,097,500

30 (続)

年次	商業			商業		水産	
	社数	公称資本 円	拂込資本 円	社数	公称資本 円	社数	拂込資本 円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	1	10,000	10,000	—	—	—	—
" 7(1932)	12	248,500	248,500	1	2,000,000	3	102,000
" 11(1937)	15	16,609,417	5,609,417	1	50,000	9	6,375,600
" 14(1939)	11	11,702,817	10,972,817	3	106,000	9	8,930,500

30

(続)

年次	工業		農業		其他		鉱業	
	社数	公称資本 円	社数	公称資本 円	社数	公称資本 円	社数	公称資本 円
大正11(1922)	1	3,000,000	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	1	3,000,000	1	50,000	12,000	—	—	—
" 7(1932)	5	7,650,000	3	79,000	28,500	—	—	—
" 12(1937)	13	44,956,000	—	—	—	—	1	2,000,000
" 14(1939)	11	45,074,000	—	—	—	—	1	10,000,000
								4,000,000

30

(続)

年次	殖産		業		年次	
	社数	公称資本 円	社数	公称資本 円	昭和12(1937)	昭和14(1939)
大正11(1922)	—	—	—	—	2	1
昭和2(1927)	—	—	—	—	15	13
" 7(1932)	—	—	—	—	30	39
" 12(1937)	1	20,000,000	12,909,500	株式会社	"	"
" 14(1939)	2	20,050,000	15,323,000	組織別 合資会社 株式会社 総数	"	47
						53

31 水産獲物

年次	總數		鯉		鱒		鱒	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
大正11(1922)	360,650	90,062	9,713	6,770	6,075	3,730	13,399	3,573
昭和2(1927)	380,467	136,378	52,954	23,781	54,266	24,327	4,586	1,834
" 7(1932)	5,797,617	1,181,693	4,861,263	944,261	361,445	50,801	341	137
" 12(1937)	35,207,865	3,048,423	34,060,809	2,833,905	681,176	90,828	3,953	1,049
" 14(1939)	19,980,478	2,731,632	19,019,188	2,462,707	361,530	93,043	—	—
" 17(1942)	13,508,740	3,680,235	11,545,053	2,918,934	1,023,093	315,705	—	—

31

(続)

年次	鱒		鱒		鱒		鱒		其他	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
大正11(1922)	31,875	11,018	—	—	10,500	4,200	—	—	289,091	60,771
昭和2(1927)	61,601	25,224	581	155	16,796	6,410	2,419	447	187,264	54,290
" 7(1932)	180,849	50,762	1,583	627	55,272	3,529	6,055	626	330,809	130,950
" 12(1937)	83,794	25,759	12,265	2,779	12,922	3,483	21,344	1,775	331,602	890,845
" 14(1939)	68,031	24,774	9,718	3,961	4,889	1,187	33,664	2,951	483,458	143,009
" 17(1942)	29,932	16,299	19,859	14,911	6,150	3,077	56,228	3,753	828,425	407,556

32 昭和17年に於ける水産漁獲物

	價額計	鰯		鯖		鯖		参	
		数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
サバ	492,652	1,297,354	358,996	33,669	19,913	—	—	4,014	2,302
イサ	26,024	—	—	—	—	—	—	1,896	1,251
ツバ	1,267,958	3,308,160	827,040	906,150	253,722	—	—	1,613	1,290
オホ	1,150,809	4,346,259	1,118,166	24,150	5,847	—	—	7,559	4,031
トラ	594,719	2,124,260	509,094	12,768	7,150	—	—	14,850	7,425
クベ	148,073	169,020	105,638	46,356	29,073	—	—	—	—
ヤル	3,680,235	11,545,053	2,918,934	1,023,093	315,705	—	—	—	—
計									

32 (続)

	鰯		鰹		鰻		鰻		其ノ他	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
サバ	5,767	3,356	75	40	10,705	3,012	228,688	105,033	46,742	24,773
イサ	—	—	—	—	—	—	—	—	334,879	174,137
ツバ	14,092	11,555	—	—	42,858	214	56,419	22,765	134,973	67,486
オホ	—	—	—	—	—	—	5,270	26,724	13,362	—
トラ	—	—	6,075	3,037	2,665	—	—	—	—	—
クベ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヤル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計										

33 水産製造物

年次	總數價額	鰯		鯖		鰻		海		参
		数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	
大正11(1922)	19,957	120	160	—	—	21,011	19,797	—	—	—
昭和2(1927)	40,940	4,751	14,445	6,169	13,160	9,326	11,437	—	—	—
" 7(1932)	981,634	972,875	917,989	73,746	52,985	3,412	2,266	—	—	—
" 12(1937)	5,484,774	5,812,745	5,081,774	380,011	381,377	16,993	4,472	—	—	—
" 14(1939)	5,193,314	3,229,686	4,963,052	54,831	66,777	28,979	17,620	—	—	—

33 (続)

年次	鰯		鰻		鰻		鰻		シヤコ貝乾燥	
	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額	数量	價額
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	128	190	188	350	—	—	8,344	3,100	—	—
" 7(1932)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 12(1937)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
" 14(1939)	14,910	2,028	—	—	—	—	—	—	—	—

34 昭和17年に於ける水産製造物

品別	種別	総 額	結 節	海 参	鱈 鱈	罐詰又は瓶詰	其 他	價 額 計
		(数量) (買額)	(数量) (買額)	(数量) (買額)	(数量) (買額)	(数量) (買額)	(数量) (買額)	(数量) (買額)
サ	イ	182,152	—	2,117	150	—	53,555	508,343
イ	バ	491,227	—	4,437	500	—	12,179	—
ヤ	ツ	—	—	3,136	—	—	—	4,892
バ	ラ	370,290	54,533	4,892	—	—	—	—
オ	ク	907,210	97,069	9,566	22,028	18,236	206,815	1,358,121
ト	ツ	724,800	3,956	12,723	44,056	261,305	35,758	—
ク	ラ	2,011,718	11,373	14,486	—	—	135,131	278,987
ボ	ナ	32,266	2,730	22,227	—	—	30,269	—
ベ	ハ	774,384	6,552	9,172	—	—	12,075	798,668
ナ	ル	24,332	5,500	15,317	—	—	2,415	80,783
ハ	ル	65,895	14,888	—	—	—	—	—
ト	ハ	1,333,840	66,719	38,477	22,178	18,236	407,576	4,826,454
計		4,250,434	129,882	59,596	44,556	261,305	80,621	—

35 漁 船

年 次	総 数	動力ヲ有セサルモノ			動力ヲ有スルモノ			乗組員
		総 数	5 屯未満	5 屯以上 20 屯未満	総 数	20 屯未満	20 屯以上	
昭和3 (1928)	1,044	1,031	1,031	—	13	—	13	1,761
7 (1932)	1,116	1,053	1,053	—	63	—	62	2,933
9 (1934)	409	316	316	—	93	—	91	2,421
12 (1937)	644	329	329	—	315	—	160	155,500

36 鉱 業 許 可 一 覧 表 (昭和14年9月末現在)

支 店 別	鉱 区 名	鉱 物 名	鉱区面積	鉱 業 権 者
サ	イ	サ	556.38	南 洋 興 発 株 式 会 社
イ	バ	同	1,488.95	同
同	同	同	4,040.04	同
同	同	同	32.92	同
同	同	同	48.73	同
同	同	同	414.40	同
同	同	同	142.48	同
同	同	同	46.23	同
同	同	同	12,181.90	同
同	同	同	34.71	同
同	同	同	17.00	同
同	同	同	31.45	同
同	同	同	173.89	同
同	同	同	4.00	同
同	同	同	322.91	同
同	同	同	477.96	同
同	同	同	2,318.34	同
同	同	同	6.58	同
同	同	同	2.30	同

37 燐 鉍 採 掘 及 移 出

年	次	採掘原鉍量	製造精鉍量	移 出		精 鉍 價 額
				数	量	
大 正	11 (1922)	51,314	45,487		56,300	1,019,897
昭 和	2 (1927)	92,735	69,380		63,128	1,335,157
"	7 (1932)	78,158	61,500		64,573	1,205,172
"	11 (1936)	87,782	61,651		76,984	2,078,016

38 大 平 洋 各 島 燐 鉍 産 額 (單位 1,000 吨)

島 名	年 次	1935	1936	1937	1938
ナウル島 オージヤン島 (英) Ocean Isl		707	965	1,023	1,185
海峽植民地(クリスマス島) (") Straits Settlement Xmas Isl		149	158	154	162
マカテラ島 (佛) Makatea		130	123	167	103
アングアウル島 (H) Angaur		78	89	91	104
ラサ島 (") Lasa		39	49	54	62

○ロ Rota タ 島 (H)	—	—	98	50
★ 1 ト ー 島 (")	44	40	35	31
○ベ Peleliu ヲ 島 (")	6	22	28	29
○フ Fais ア 島 (")	—	—	—	14
○サ Saipan イ 島 (")	—	—	—	6
○ト Tocohei コ 島 (")	—	—	1	3
○グ Grimes ヲ 島 (")	—	—	—	1
佛 領 邦 度 支 那 (佛) Indo-chine	6	10	20	30
蘭 領 東 印 度 (蘭) East Dutch Indies	12	12	26	—
ニユーカレドニア島 (佛) New Caledonia	12	2	—	—
計	1,183	1,470	1,697	1,780

南洋諸島 (自然と資源) 備考 ○印南洋群島

39 埋藏量調査ボーリング（概算）

区 域	数 量	備 考
ボ ナ ツ ヤ	600,000 屯 10,000 ㍶ 610,000	

40 パラオに於けるボーキサイト鉱量調 (單位越) (昭和 19 年(1944) 4 月現在)

区域別	貯蔵量(満)		取払源貯量(満)		残 存 貯 量				備考
	原 貯	精 貯	原 貯	精 貯	鍋 貯	乾 貯	精 貯		
ハラオ本島	16,511,180	4,953,354	1,160,136	348,041	15,351,044	4,605,313	3,048,386	3,914,516	

備考
精鈹 = 原鈹 $\times a$ $a = \text{採收率} = 30\%$
乾鈹 = 濕鈹 $\times (1 - b)$ $b = \text{水分} = 1.5\%$

	Al_2O_3	Fe_2O_3	SiO_2
原 鈹	47.19	20.77	7.76
精 鈹	51.87	16.07	2.18

位 晶 析 分

41	移入	品名	別	價	額
----	----	----	---	---	---

品名	大正11(1922)	昭和2(1927)	昭和7(1932)	昭和12(1937)	昭和14(1939)
1 植物及動物種子	3,603	7,630	3,633	3,237	9,738
2 穀物、穀粉及煙草	209,260	659,105	1,023,396	3,022,853	5,193,804
3 飲食物及齒牙、甲殼類	361,989	864,681	1,449,308	4,651,418	5,845,812
4 皮毛、骨角、齒牙、甲殼類	4,410	33,296	16,093	59,008	100,074
5 油脂、蠟及製合品	79,972	177,926	495,988	1,579,400	2,523,353
6 藥材、製藥、調合品	30,128	58,476	143,207	600,429	1,009,308
7 染料、顏料、塗料	18,759	26,568	30,942	110,748	213,896
8 絲、綫、繩、索、同品	14,674	59,591	55,557	147,147	277,963
9 布、帛、類及附屬品	144,091	292,956	660,130	1,865,607	2,184,978
10 衣類及紙書籍	47,891	233,281	187,138	623,873	1,202,568
11 製紙、紙、及紙書籍	24,386	57,632	90,310	327,669	557,674
12 礦物及礦子製品	128,281	160,171	299,479	675,421	952,522
13 陶磁器及硝子製品	22,393	38,663	81,540	246,064	459,297
14 金、銀、銅、鐵、鋼、及金製品	—	228,909	250,833	—	—
15 金、銀、銅、鐵、鋼、及金製品	209,622	147,397	209,526	1,008,713	2,042,772
16 時計、船舶、機械、類	137,504	—	459,375	2,874,823	5,023,237
17 雜貨	288,992	574,885	798,692	4,200,106	5,758,508
合計	1,725,955	3,621,167	6,255,137	21,996,516	33,355,504

42 移出品名別價額

品名	大正11(1922)	昭和2(1922)	昭和7(1932)	昭和12(1937)	昭和14(1939)
1 植物及動物種子	—	—	—	3,150	—
2 穀物,穀粉,煙草	—	10	13,070	642,985	580,857
3 飲食物,煙	79,441	4,456,272	10,816,335	26,457,517	28,955,992
4 皮膚,甲殼類製品	4,346	46,736	114,692	3,182,663	1,127,092
5 油脂,蠟製品	—	—	17,005	20,178	59,328
6 油藥材,化學塗料	—	418,865	409,868	94	869,428
7 染料,顏料,塗料	—	—	—	135,075	95
8 縫紉索及材料	—	145	53	135,075	406,122
9 布類,布同附屬品	—	—	4,183	18,511	16,811
10 衣類用パルテ,書籍品	—	—	1,635	3,000	10,169
11 製紙用パルテ,製箱品	—	—	588	831	2,571
12 礦物及硝子製品	1,019,897	1,360,759	1,080,984	—	53,362
13 陶磁器及硝子製品	—	—	20	6,457	—
14 金銀及金製品	—	182	1,910	142,321	278,434
15 時計,學術器,船舶,機械類	573,781	5,671	17,076	97,278	306,917
16 計	1,677,465	1,892,297	37,266	183,102	14,846,900
17 計	—	8,180,937	1,334,646	3,599,486	47,514,078
計	—	—	13,849,331	37,864,371	—

43 輸出品名別價額

品名	大正11(1922)	昭和2(1927)	昭和7(1932)	昭和12(1937)	昭和13(1938)
1 植物及動物種子	—	—	—	—	—
2 穀物,穀粉及煙草	—	5,608	6,252	374	4,420
3 飲食物,齒牙,甲殼製品	582	8,553	28,611	75,326	655,411
4 皮膚,骨角,齒牙,甲殼製品	—	87	—	149,662	730,008
5 油脂,蠟製品	—	1,112	1,761	9,057	7,791
6 藥材,化學調合材料	—	11	658	4,682	14,813
7 染料,顏料,塗料	—	101	75	3,453	2,380
8 縫紉索及材料	—	266	281	895	5,723
9 布類,布同附屬品	10	11,913	4,762	48,318	102,511
10 衣類用パルテ,製箱品	—	769	1,006	3,071	3,007
11 製紙用パルテ,製書品	—	254	310	1,499	5,446
12 礦物及硝子製品	—	6,179	53	18,998	30,731
13 陶磁器及硝子製品	—	275	197	659	3,355
14 金銀及金製品	—	—	979	6,946	208
15 時計,學術器,船舶,機械類	—	2,032	592	9,167	20,427
16 計	91,761	1,409	945	38,275	51,922
17 計	—	2,040	2,375	17,892	22,481
合 計	92,353	40,609	48,857	388,274	1,660,634

品名	單位	數量	金額
輸入	噸	44	輸

一五六

品名	大正11(1922)	昭和2(1927)	昭和7(1932)	昭和12(1937)	昭和13(1938)
1 植物及動物	円 326	円 8,258	円 3,633	円 1,015	円 2,077
2 穀物、穀粉及種子	54,915	660,620	1,023,396	536,217	74,091
3 飲食、物產及煙草	1,014	984,235	1,449,308	14,565	77,318
4 皮革、骨角、齒牙、甲殼	5	33,546	16,093	15,221	12,711
5 油脂、蠟、其ノノ製成品	6,034	178,546	495,988	430,085	812,752
6 藥材、化學藥、調合藥品	428	58,539	143,207	35,748	77,415
7 染料、料、顏料、塗料	32	26,692	30,942	5	6,002
8 絲、織、繩、索、及材料	40	59,763	55,557	29,567	73,160
9 布、帛、類、及附屬品	582	293,958	660,130	22	195
10 衣類及附屬品	146	236,325	187,138	256	180
11 製紙用パルプ、書籍	100	58,596	90,310	52	83
12 礦物及礦物製品	—	160,632	299,479	7,428	—
13 陶瓷磁器及金製品	8	38,823	81,540	72	110
14 鐵及金製品	—	—	250,833	5,698	33,429
15 金、銀、銅、及金製品	32,732	234,027	209,526	2,675	415
16 時計、計器、船舶、車輛、機械類	1,358	149,033	459,375	1,412	1,369
17 雜合	8,044	632,918	798,692	187,971	274,202
合計	105,764	3,814,511	6,255,137	1,268,009	1,445,509

45 出 港 税 及 関 税 (毎年度中)

年次	税額	出 港				税		其 他	人 員	税 額	
		砂	糖	糖	蜜	酒精含有飲料	酒				
		移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	移出数量	
昭和10(1935)	4,052,013 円	94,441 丁	3,974,934 円	4,400,000 丁	3,028 円	489 石	38,642 円	—	35,407 円	650 人	53,327 円
" 11(1936)	3,506,053	80,936,940	3,405,636	123,979	1,205	624	66,085	—	33,125	792	67,917
" 12(1937)	5,256,260	125,611,355	5,107,300	1,370,883	13,705	800	90,331	—	44,922	906	101,785
" 13(1938)	8,123,393	120,127,148	8,006,158	1,040,000	10,980	820	106,117	—	137	434	154,196
" 14(1939)	8,210,912	110,875,844	8,064,486	290,425	4,047	909	126,308	—	16,371	285	166,786

46 無盡書

年次	總數				年中		
	組合數	現在會員數	存款期間迄ノ掛金 円	拂込済掛金 円	於ケル金額		
					拂戻(落札)金額	円	
大正11(1922)	—	—	988,175	598,310	506,330		
昭和3(1928)	133	2,104	2,173,325	722,981	584,844		
" 7(1932)	298	4,992	3,612,022	1,740,265	1,482,208		
" 12(1937)	301	4,179	2,072,726	912,235	617,398		
" 14(1939)	139	2,677					

46 (続)

年次	サ イ バ ン			支 廳			バ ラ オ			支 廳		
	年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル			年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル		
	組合数	会員数	新期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円	組合数	会員数	新期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	円	—	—	—	—	—	円
昭和2(1928)	112	1,809	828,845	505,170	429,526	円	18	243	133,530	76,280	63,076	円
〃 7(1932)	153	2,568	1,127,632	414,204	331,617	円	117	1,928	788,510	246,585	206,618	円
〃 12(1937)	197	2,062	2,322,310	1,001,286	763,024	円	77	1,590	1,046,511	623,193	619,222	円
〃 14(1939)	35	498	343,850	145,069	114,913	円	63	1,358	1,305,730	610,880	361,536	円

46 (続)

年次	ト ラ ヅ ク			支 廳			ボ ナ ベ			支 廳		
	年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル			年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル		
	組合数	会員数	存続期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円	組合数	会員数	存続期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	円	—	—	—	—	—	円
昭和3(1928)	3	52	25,900	16,860	13,728	円	—	—	—	—	—	円
〃 7(1932)	15	283	196,963	45,782	32,914	円	13	213	60,220	16,410	13,694	円
〃 12(1937)	1	27	7,776	7,776	7,632	円	18	368	162,405	72,700	61,621	円
〃 14(1939)	2	40	13,176	6,096	5,880	円	22	494	250,610	79,755	74,226	円

1 ヤツヲ, ヤルーニ支廳管内ニノ該当事項ナシ 2 円位未満切捨

46 (続)

年次	ヤ ツ テ			支 廳			ヤ ル ー			支 廳		
	年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル			年未現在ニ於ケル			年中ニ於ケル		
	組合数	会員数	存続期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円	組合数	会員数	存続期間 迄ノ掛金	拂込済掛金	滞戻(落 札)金額	円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	円	—	—	—	—	—	円
昭和3(1928)	—	—	—	—	—	円	—	—	—	—	—	円
〃 7(1932)	—	—	—	—	—	円	—	—	—	—	—	円
〃 12(1937)	5	82	39,520	17,070	16,304	円	—	—	—	—	—	円
〃 14(1936)	15	243	110,960	44,035	40,762	円	2	44	48,400	26,400	20,081	円

円位未満切捨

47 産 業 組 合 目 的 別 (毎年未現在)

年次	總 数			信 用			組 合		
	組合数	組合員数	出資口数	組合数	組合員数	出資口数	組合数	組合員数	出資口数
大正11(1922)	—	—	—	—	—	円	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	円	—	—	—
〃 8(1933)	6	528	3,842	3	362	2,832	—	—	—
〃 12(1937)	7	1,290	7,727	4	723	5,868	—	—	—
〃 14(1939)	7	1,505	8,946	4	894	7,047	—	—	—

年次	信用販賣購買組合				信用販賣購買利用組合			
	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—
“ 8(1883)	1	79	702	35,100	2	87	308	15,400
“ 12(1937)	1	147	983	49,150	1	329	716	14,320
“ 14(1939)	1	177	945	47,250	1	337	757	15,140

48 産業組合組織別 (毎年未現在)

年次	総数				有限責任組合			
	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和3(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—
“ 8(1933)	6	528	3,842	192,100	3	362	2,832	141,600
“ 12(1937)	7	1,290	7,727	360,070	3	502	4,999	249,950
“ 14(1939)	7	1,505	8,946	418,680	3	560	5,944	257,200

年次	無限責任組合				保証責任組合			
	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円	組合数	組合員数	出資口数	出資総額 円
大正11(1922)	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和2(1927)	—	—	—	—	—	—	—	—
“ 8(1932)	—	—	—	—	3	166	1,010	50,500
“ 12(1937)	—	—	—	—	4	788	2,728	110,120
“ 14(1939)	—	—	—	—	4	945	3,002	121,480

49 産業組合組織別 (1) 昭和16年(1941)

島別	組合別	保証責任組合	有限責任組合	備考
サ	イ	1	1	
バ	ラ	1	—	
テ	ニ	1	1	
ト	ラ	1	—	
ホ	ナ	—	1	
	計	4	3	

49 産 業 組 合 内 容 (2) 昭和 16 年 (1941)

組合員数	出資口数	出資総数	拂込済出資金	準備金	其ノ他ノ積立在	借入金	貯金	貸付金
人 1,968	口 14,191	円 674,300	円 164,423	円 25,577	円 34,009	円 431,797	円 2,996,811	円 2,566,698

邦

1

2

会